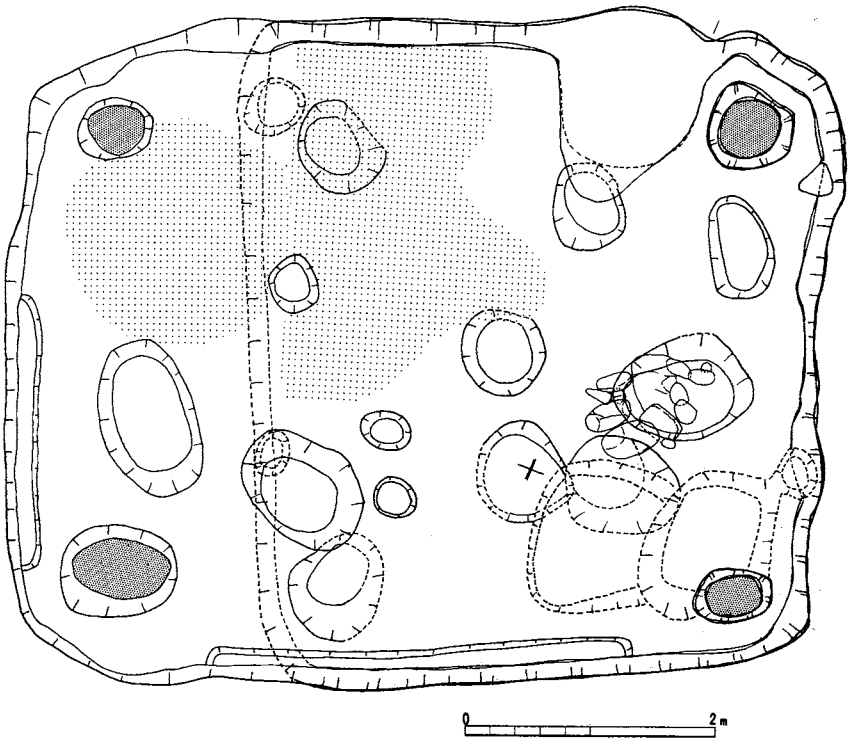
長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

—茅野市・原村　その３—

昭和51・52年度

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会



※　図 109　第13号住居址　拡張推定図　（1：60）　青・拡張前

※ 120頁　図 109を上記のようにご訂正下さい。

茅野市・原村　その3　正誤表

頁	行	誤	正
V	上から15行	133. 金山沢北遺跡遺構全域図（1：2000）	133. 金山沢北遺跡遺構全域図（1：200）
2	28行	丸山敏一郎	丸山敞一郎
3	〃　11行	樋口誠二	樋口誠司
14	〃　10行	〔今村、笹沢1980〕	〔今村、笹沢1979〕
16	図 9	（断面図）A～B	C～D
50～54	表	（表の中の拡）	全て壙に
112			図112.平安時代第14号住居址・カマド構造図を入れる
134		図 117. 中器土器容積のグラフ	図 117. 中期土器容積のグラフ
143		〔臼田・百瀬1979〕	〔今村・臼田・百瀬1979〕
175			ワ　和田哲　1975『西上遺跡』
図版17		（左下）15号住　（右下）17号住	（左下）12号住　（右下）15号住
図版30			20の土器　縮尺¼を入れる

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

—茅野市・原村　その3—

昭和51・52年度

信州大学附属図書館
56.5.30
教育学部分館

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

序

昭和51年度及び、52年度の中央自動車道西の宮線建設用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、昭和51年4月から昭和52年12月にかけて、厳冬期を除いて実施された。

茅野市、原村の八ヶ岳西南麓には、八ヶ岳連峰から伸びる長峰状丘陵が並び、この丘陵の標高 900mから1000mの位置には多くの遺跡が分布している。中央自動車道はこれらの丘陵の先端部を横断して計画されたが、山林地帯のため遺跡の実態は明確でなく、新しい遺跡の発見が予想されていた。なかんずく本書に報告された遺跡は、中央自動車道の路線が発表されてから新たに発見されたものである。中でも判ノ木山西遺跡などは大規模な遺跡であり、日本道路公団と協議し、2ヶ年にわたる発掘調査を実施することになった。整理作業は昭和54年度及び55年度の2ヶ年をあて、ここに報告書を刊行することとなった。調査の結果は本報告書にみられるとおりであるが、判ノ木山西遺跡では、縄文時代早期の土器編年を行う上で大きな手がかりが得られ、同中期の住居址や土器、石器などでも多くの資料を提示することができた。また、平安時代後半の集落や小鍛冶址、石組遺構などでも新知見を得た。判ノ木山東遺跡、金山沢北遺跡では、平安時代の集落の広がりを知る資料が検出されるなど、いずれも予想以上の成果をあげることができた。ここに報告書を刊行するにあたり、発掘調査やその後の整理作業に深い御理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同諏訪工事事務所、長期間発掘調査に精励された大沢和夫前団長をはじめとする調査団各位、調査のため御協力いただいた諏訪中央道事務所、茅野市、原村当局並びに、各地区被買収者組合等関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和56年3月20日

長野県教育委員会教育長

内　山　袈裟一

例　　言

1　本書は日本道路公団と長野県教育委員会との契約にもとづいて、県教育委員会が設置した長野県中央道遺跡調査会が組織する長野県中央道遺跡調査団が、中央高速自動車道建設地内において、昭和51・52両年にわたって実施した「茅野市、原村その２・その３地区」の一部、長野県茅野市金沢に所在する、判ノ木山西遺跡、判ノ木山東遺跡、金山沢北遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査、整理等の費用は、日本道路公団が負担した。

3　発掘調査の実施と資料整理は、団長の指示のもとに、調査主任・調査員・調査補助員が主としてあたった。

4　発掘調査、資料整理、原稿執筆にあたっては、工楽善通、斎藤豊、岡本勇の各先生からご教示をいただいた。

5　編集は、団長の指導のもとに小林が行なった。資料整理は各遺構担当者の作成した調査カードを参考とし、主として次の者があたった。縄文時代早期土器（小林）、同中期土器（百瀬、山本）、同後期土器（百瀬）、小形石器（山本）、大形石器（和田、宮坂、根津）、平安時代の遺物（小林）遺構（小林、山本）、拓影（堀）。原稿執筆は下記の分担の通りである。

百瀬――第Ⅱ章第１節の５(共)、９－1)、10、12－2)－5)、第３節８

山本――第Ⅱ章第１節９－2)、12－3)、第３節６－1)

和田――第Ⅱ章第１節９－3)、12－4)、第３節６－2)

小林――第Ⅰ章、第Ⅱ章第１節１～８、12－1)－6)、第２節、第３節１～５、９

6　写真撮影は、発掘調査では、伴（51年度）小林（52年度）、遺物写真は木下が行なった。

7　今回の調査で使用した方位は磁北で、標高は日本道路公団の設置した基準点を用いた。

8　本書で遺物に付けた番号は、図、図版ともに合致するようにした。

9　本書では、本文中に引用文献を〔著者名、発行年次〕の形式で表現し、巻末の引用・参考文献目録と対照した。

本　文　目　次

序
例　言

第Ⅰ章　調査状況

第1節　調査にいたるまで…… 1

1　中央道関係の経過　2　発掘調査委託契約　3　長野県中央道遺跡調査会

第2節　調査の実施と経過…… 3

1　調査の経過　2　発掘調査の方法　3　整理の方法

第Ⅱ章　調査遺跡

第1節　判ノ木山西遺跡…… 8

1　位置…… 8
2　遺跡の範囲と調査区域…… 8
3　層序…… 10
4　検出された遺構の概略…… 10
5　遺物の概略…… 11
6　縄文時代早期の遺構と遺物…… 15
1)　土器の出土状態と遺構　2)　土器の分類と観察　3)　石器

7　縄文時代中期の住居址…… 28
①第1号住居址　②第2号住居址　③第3号住居址　④第4号住居址　⑤第7号住居址
⑥第9号住居址　⑦第10号住居址　⑧第11号住居址　⑨第16号住居址　⑩第17号住居址
⑪第18号住居址
8　土壙…… 43

9　縄文時代中期の遺物…… 50
1)　土器　2)　小形石器　3)　大形石器

10　縄文時代後期の土器……107

11　平安時代の遺構と遺物……111
①第12号住居址　②第13号住居址　③第14号住居址　④第15号住居址　⑤平安時代の遺物

12　判ノ木山西遺跡の諸問題……129
1）　縄文時代早期の土器に関する問題……129
2）　縄文時代中期の土器に関する問題……133
3）　縄文時代の小形石器に関する問題……143
4）　縄文時代の大形石器に関する問題……145
5）　縄文時代後期の土器に関する問題……146
6）　平安時代の集落立地に関する問題……148

第2節　判ノ木山東遺跡――取り付け道路分……155

1　位置　2　調査の経過　3　遺構と遺物　1）遺構　①　第13号住居址　2）遺物

第3節　金山沢北遺跡……157

1　位置　2　遺跡の範囲と調査区域　3　層序　4　発掘調査の概要
5　縄文時代早期の土器……158
1）土器の出土状態　2）縄文時代早期の土器の分類　3）金山沢北遺跡出土の縄文時代早期の土器
6　石器……161
1）小形石器　2）大形石器

7　土壙と集石……162

8　縄文時代後期の土器……163
9　平安時代の遺構と遺物……169
①　第1号住居址　②　第2号住居址　③　第3号住居址

引用・参考文献……172

別表……175

図版……205

表　目　次

表1　特殊磨石の断面形、機能　磨面別個体数
〃2　特殊磨石の痕跡別個体数
〃3　土壙分類表
〃4　打製石斧の形態別個体数
〃5　横刃型石器の形態別個体数
〃6　磨痕、凹み、敲打痕を持つ石の痕跡別個体数
〃7　凹みを持つ石の凹面別個体数
表8　平安時代土器住居址別一覧
〃9　深鉢器形対照表
〃10　石器の住居址別出土表
〃11　接合した石器一覧
〃12　金山沢北遺跡出土、縄文時代早期土器一覧表
〃13　〃　〃　分類表
〃14　土壙、集石分類表
別表　1　判ノ木山西遺跡石器一覧　2　金山沢北遺跡石器一覧　3　平安時代土器一覧表

図　目　次

図1　遺跡の範囲と中央道用地内関係図　（1：4000）
2　判ノ木山西遺跡、金山沢北遺跡、判ノ木山東遺跡周辺地形図　（1：10000）

判ノ木山西遺跡

3　遺構全域図　（1：200）
4　水糸配り図およびグリット配置図　（1：400）
5　第19号住居址（炉）実測図　（1：60）
6　縄文時代前期の土器拓影図　（1：2）
7　竪穴2実測図　（1：60）
8　縄文時代早期土器実測図　（1：4）
9　土壙48　縄文時代早期土器出土状態　（1：60）
10　B−20、21地区　縄文時代早期土器出土状態　（1：60）
11　土壙48出土土器拓影図　（1：2）
12　縄文時代早期土器出土分布図　（1：200）
13　縄文時代早期土器（底部）実測図　（1：2）
14　特殊磨石の長さと幅と厚さ（グラフ）
15　縄文時代早期石器分布図　（1：400）
16　縄文時代早期土器拓影図　第1・2・3類e・4類a　（1：2）
17　縄文時代早期土器拓影図　第3類a　（1：2）
18　縄文時代早期土器拓影図　第3類b　（1：2）
19　縄文時代早期土器拓影図　第3類c　（1：2）
20　縄文時代早期土器拓影図　第4類　（1：2）
21　縄文時代中期第1号住居址実測図　（1：60）
22　縄文時代中期第2号住居址実測図　（1：60）
23　縄文時代中期第3号住居址実測図　（1：60）
24　縄文時代中期第4号住居址実測図　（1：60）
25　縄文時代中期第7号住居址実測図　（1：60）
26　縄文時代中期第7号住居址柱穴断面図　（1：60）
27　縄文時代中期第7号住居址、柱穴とプランの関連図
28　縄文時代中期第9号住居址実測図　（1：60）
29　縄文時代中期第10号住居址実測図　（1：60）
30　縄文時代中期第11号住居址実測図・　（1：60）
炉実測図　（1：30）
31　縄文時代中期第16号住居址実測図　（1：60）
32　縄文時代中期第17号住居址実測図　（1：60）
33　縄文時代中期第17号住居址　炉址実測図　（1：30）
34　縄文時代中期第18号住居址実測図　（1：60）
炉址実測図　（1：30）
35　土壙実測図　(1)　（1：60）
36　土壙実測図　(2)　（1：60）
37　土壙実測図　(3)　（1：60）
38　土壙実測図　(4)　（1：60）
39　土壙実測図　(5)　（1：60）
40　縄文時代中期土器実測図(1)　第1号住居址出土　（1：4）
41　縄文時代中期土器実測図(2)　第1号住居址出土　（1：4）
42　縄文時代中期土器拓影図(1)　第1住居址～第3号住居址・遺構外出土　（1：3）
43　縄文時代中期土器実測図(3)　第3号住居址出土　（1：4）
44　縄文時代中期土器展開模式図No.37
45　縄文時代中期土器実測図(4)　第4号住居址出土　（1：4）
46　縄文時代中期土器実測図(5)　第7号住居址出土　（1：4）
47　縄文時代中期土器実測図(6)　第7号住居址出土　（1：4）
48　縄文時代中期土器実測図(7)　第7号住居址出土　（1：4）
49　縄文時代中期土器拓影図(2)　第7号住居址出土　（1：3）
50　縄文時代中期土器展開模式図No.22
51　縄文時代中期土器拓影図(3)　第9号住～10号住居址出土　（1：3）
52　縄文時代中期土器実測図(8)　第10号住・第11号住居址出土　（1：4）
53　縄文時代中期土器実測図(9)　第11号住居址出土　（1：4）
54　縄文時代中期土器拓影図(4)　第11号住居址出土　（1：3）
55　縄文時代中期土器実測図(10)　第16～19号住居址出土　（1：4）
56　縄文時代中期土器拓影図(5)　第16号住居址出土　（1：3）
57　縄文時代中期土器拓影図(6)　第17～19号住居址出土　（1：3）
58　縄文時代中期土器実測図(11)土壙出土（1：4）
59　縄文時代中期土器拓影図(7)土壙出土（1：3）

60 縄文時代中期土器・土製品実測図(12) 遺構外出土 (1：4)
61 縄文時代中期小形石器、原石、石核等出土数(グラフ)
62 縄文時代中期石鏃、長さと幅の相関図
63 縄文時代中期石鏃、破損品の形態別出土数
64 縄文時代中期石鏃、重量頻度グラフ
65 縄文時代中期石鏃の形態分類一覧表
66 縄文時代中期使用痕のある剥片、石核、原石の形態別出土数
67 縄文時代中期使用痕のある剥片、石核、原石の長さと幅の相関図
68 縄文時代中期使用痕のある剥片、石核、原石の重量頻度
69 縄文時代中期使用痕のある剥片、石核、原石の形態別出土数
70 縄文時代中期打製石斧形態分類図
71 縄文時代中期凹みを持つ石の長/幅と厚/幅の相関図
72 縄文時代中期磨痕、敲打痕を持つ石の長/幅と厚/幅の相関図
73 縄文時代中期磨痕、敲打痕を持つ石の長さと幅
74 縄文時代中期凹みを持つ石の長さと幅
75 縄文時代中期使用痕のある石、実測図 (1：2)
76 縄文時代中期小形石器実測図 (1) (1：1.5)
77 縄文時代中期小形石器実測図 (2) (1：1.5)
78 縄文時代中期小形石器実測図 (3) (1：1.5)
79 縄文時代中期小形石器実測図 (4) (1：1.5)
80 縄文時代中期小形石器実測図 (5) (1：1.5)
81 縄文時代中期小形石器実測図 (6) (1：1.5)
82 縄文時代中期小形石器実測図 (7) (1：1.5)
83 縄文時代中期小形石器実測図 (8) (1：1.5)
84 縄文時代中期小形石器実測図 (9) (1：1.5)
85 縄文時代中期大形石器実測図 (1) (1：4)
86 縄文時代中期大形石器実測図 (2) (1：4)
87 縄文時代中期大形石器実測図 (3) (1：4)
88 縄文時代中期大形石器実測図 (4) (1：4)
89 縄文時代中期大形石器実測図 (5) (1：4)
90 縄文時代中期大形石器実測図 (6) (1：4)
91 縄文時代中期大形石器実測図 (7) (473、474、1：8他1：4)
92 縄文時代中期大形石器実測図 (8) (1：4)
93 縄文時代中期大形石器実測図 (9) (520～523、1：4、他1：6)
94 縄文時代後期土器実測図(1) (1：4)
95 縄文時代後期土器実測図(2) (1：4)
96 縄文時代後期土器拓影図 (1：3)
97 平安時代第12号住居址部材検出状況 (1：60)
98 平安時代第12号住居址実測図 (1：60)
99 平安時代第12号住居址小鍛冶址実測図 (1：60)
100 平安時代第12号住居址カマド、配石実測図 (1：30)
101 平安時代第12号住居址出土土器実測図 (1：4)
102 平安時代羽口実測図 (1･2－第12号住居址、3－竪穴1) (1：3)
103 平安時代第13号住居址実測図 (1：60)
104 平安時代第13号住居址柱穴および床下土壙実測図 (1：60)
105 平安時代第13号住居址カマド実測図 (1：30)
106 平安時代第13号住居址石組み特殊遺構実測図 (1：30)
107 平安時代第13号住居址出土土器実測図(1：4)
108 平安時代第13号、第14号住居址出土土器実測図 (1：4)
109 平安時代第13号住居址拡張推定図 (青、拡張前) (1：60)
110 平安時代第14号住居址実測図(1：60)、カマド実測図 (1：30)
111 平安時代第14号住居址出土八稜鏡推定復元図 (1：2)
112 平安時代第14号住居址カマド構造図 (1：40)
113 平安時代第14号住居址、第15号住居址出土土器実測図 (1：4)
114 平安時代第15号住居址実測図 (1：60)
115 平安時代各住居址出土鉄製品(上) (1：2) 砥石(下) (1：4、1：8)
116 縄文時代中期第3、4、8類土器器形分類模式図
117 縄文時代中期土器容積のグラフ
118 縄文時代中期土器成形模式図
119 縄文時代中期第3、4類土器A工程の重複関係と順序の模式図
120 縄文時代中期第3、4類土器、B工程文様の単位
121 縄文時代中期小形石器分布図 (1：200)
122 縄文時代中期大形石器分布図 (1：200)
123 後期土器器形分類模式図
124 縄文時代後期土器口縁部成形模式図
125 縄文時代後期土器の系統関係図

126　判ノ木山西遺跡の遺構と立地　（1：2000）
127　判ノ木山東遺跡の遺構と立地　（1：2000）
128　金山沢北遺跡の遺構と立地　（1：2000）
129　頭殿沢遺跡の遺構と立地　（1：2000）
130　御狩野遺跡の遺構と立地　（1：2000）

判ノ木山東遺跡

131　判ノ木山東遺跡第13号住居址実測図（1：60）
132　判ノ木山東遺跡第13号住居址出土土器実測図　（1：4）

金山沢北遺跡

133　金山沢北遺跡遺構全域図　（1：2000）
134　縄文時代早期土器実測図第1類a　（1：4）
135　土壙、集石実測図　（1：60）
136　縄文時代早期土器拓影図(1)　第1類、第2類　（1：2）
137　縄文時代早期土器拓影図(2)　第3類～第7類　（1：2）
138　縄文時代小形石器実測図　（1：1.5）
139　縄文時代大形石器実測図　（1：4）
140　縄文時代後期土器実測図　（1：4）
141　縄文時代後期土器拓影図　（1：3）
142　平安時代第1号住居址実測図　（1：60）
143　平安時代第2号住居址実測図　（1：60）
　　同カマド実測図　（1：30）
144　平安時代第3号住居址実測図　（1：60）
145　平安時代第1号、第2号住居址出土土器実測図　（1：4）

図　版　目　次

図版 1 判ノ木山西、判ノ木山東、金山沢北遺跡周辺地形写真
図版 2 判ノ木山西遺跡　1～3、遺跡全景
図版 3 判ノ木山西遺跡　1、1号住居址　2、2号住居址　3、3号住居址
図版 4 判ノ木山西遺跡　1、4号住居址　2、9号住居址　3、10号住居址
図版 5 判ノ木山西遺跡　1、7号住居址（その1）　2、7号住居址（その2）　3、7号住居址土層断面図
図版 6 判ノ木山西遺跡　1、7号住土器（No.20）出土状態　2、炭化物付着状況（その1）　3、炭化物付着状況（その2）　4、土器（No.20）内付着炭化物
図版 7 判ノ木山西遺跡　1、11号住居址　2、16号住居址　3、18号住居址
図版 8 判ノ木山西遺跡　1、17号住居址　2、17号住居址　3、土壙群
図版 9 判ノ木山西遺跡　縄文時代中期炉(1)
図版 10 判ノ木山西遺跡　縄文時代中期炉(2)
図版 11 判ノ木山西遺跡　土壙(1)
図版 12 判ノ木山西遺跡　土壙(2)
図版 13 判ノ木山西遺跡　1、12号住居址　2、12号住居址焼失状態　3、12号住居址焼失状態　4、12号住居址焼失状態部分(2)
図版 14 判ノ木山西遺跡　1、12号住居址（小鍛冶址）その1　2、小鍛冶址その2　3、小鍛冶址部分(1)　4、小鍛冶址部分(2)
図版 15 判ノ木山西遺跡　1、13号住居址　2、13号住居址　3、13号住居址石積み遺構　4、13号住居址石積み遺構細部　5、13号住居址遺物出土状態　6、13号住居址遺物出土状態
図版 16 判ノ木山西遺跡　1、14号住居址(1)　2、14号住居址(2)　3、15号住居址
図版 17 判ノ木山西遺跡　平安時代カマド
図版 18 判ノ木山西遺跡　縄文時代早期土器　1、I・II・III類表　2、同裏　3、3－e類
図版 19 判ノ木山西遺跡　縄文時代早期土器　1、3－e類表　2、同裏
図版 20 判ノ木山西遺跡　縄文時代早期土器　1、3－b類表　2、同裏　3、3－a類
図版 21 判ノ木山西遺跡　縄文時代早期土器　1、4類表　2、同裏
図版 22 判ノ木山西遺跡　縄文時代早期土器　1、3－c類　2、3、4、縄文時代中期　他地域の土器
図版 23 判ノ木山西遺跡　縄文時代早期土器　細部（1：1）
図版 24 判ノ木山西遺跡　縄文時代早期土器　細部（1：1）
図版 25 判ノ木山西遺跡　縄文時代中期初頭及び前葉の土器
図版 26 判ノ木山西遺跡　縄文時代中期前葉の土器
図版 27 判ノ木山西遺跡　縄文時代中期前葉の土器
図版 28 判ノ木山西遺跡　縄文時代中期前葉の土器
図版 29 判ノ木山西遺跡　縄文時代中期前葉の土器
図版 30 判ノ木山西遺跡　縄文時代早期土器初頭及び前葉の土器
図版 31 判ノ木山西遺跡　縄文時代中期初頭及び前葉の土器
図版 32 判ノ木山西遺跡　縄文時代中期前葉・中葉及び後葉の土器
図版 33 判ノ木山西遺跡　縄文時代中期土器施文方法
図版 34 判ノ木山西遺跡　縄文時代後期中葉の土器
図版 35 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器–石鏃(1)
図版 36 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器–石鏃(2)
図版 37 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器、スクレイパー、石匙
図版 38 判ノ木山西遺跡　縄文時代石錐、石核状石器、ピエス・エスキーユ、その他剥片石器
図版 39 判ノ木山西遺跡　縄文時代使用痕のある剥片類
図版 40 判ノ木山西遺跡　縄文時代使用痕のある剥片類、石錐
図版 41 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器（打製石斧）
図版 42 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器（大形打製石斧、磨製石斧、他）
図版 43 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器（大形石匙、

横刃型石器)
図版 44 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器(横刃型石器)
図版 45 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器(横刃型石器、礫器)
図版 46 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器（特殊磨石）
図版 47 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器（磨痕・凹みを持つ石）
図版 48 判ノ木山西遺跡　縄文時代石器（凹み・敲打痕を持つ石、台石、使用痕ある石、石皿、砥石）
図版 49 判ノ木山西遺跡　平安時代土器（12・13号住居址）
図版 50 判ノ木山西遺跡　平安時代土器(13号住居址)
図版 51 判ノ木山西遺跡　平安時代土器(14・15号住)
図版 52 判ノ木山西遺跡　1、鉄製品　2、12号住居址出土羽口（3-竪穴1）
図版 53 判ノ木山西遺跡　土師器細部
図版 54 判ノ木山東遺跡　1、全景　2、13号住居址　3、13号住居址
図版 55 金山沢北遺跡　1、全景（調査前）　2、全景（調査中）　3、縄文時代早期土器出土地点
図版 56 金山沢北遺跡　集石
図版 57 金山沢北遺跡　1、1号住居址　2、2号住居址　3、3号住居址
図版 58 金山沢北遺跡　1、縄文時代早期土器　1-a類　2、縄文時代早期土器　1-b類
図版 59 金山沢北遺跡　1、縄文時代早期土器　1-a類　完形土器　2、縄文時代早期土器　2-a、2-b類土器　3、土壙8号出土炭化物
図版 60 金山沢北遺跡　1、縄文時代早期土器　5～8類表　2、同裏
図版 61 金山沢北遺跡　1、縄文時代早期土器　3・4類表　2、同裏
図版 62 金山沢北遺跡　縄文時代石器(石鏃、石錐、石匙、その他)
図版 63 金山沢北遺跡　縄文時代石器
図版 64 金山沢北遺跡・判ノ木山東遺跡　平安時代土器

第　1　章　調　査　状　況

第１節　調査にいたるまで

１．中央道関係の経過

昭和 32 年 4 月に公布された「国土開発縦貫自動車道建設法」に基づく中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間約 360 km、そのうち長野県内は岐阜県中津川市から恵那山トンネルで飯田盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓をかすめて山梨県に至る間約 122 kmの長さである。

昭和 42 年 9 月に文化庁と日本道路公団との間に取り交わされた「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、漸く昭和 45 年 9 月に下伊那郡阿智村小野川地籍から発掘調査が開始され、本年で 8 年を経過した。その間、用地買収・登記の終了を待って、原則として下伊那・上伊那・諏訪郡の順に発掘調査が進められ、昭和 53 年度までに 216 遺跡の調査が終了した。

発掘調査には県独自の組織が持てないので「長野県中央道遺跡調査会」を特設し、その中に調査団を組織してこの業務を遂行している。昭和 51 年度は調査団を 3 班に分け、中阿久・居沢尾根・オシキ・上の原・入の日影・柏木南・阿久・判ノ木山東・頭殿沢・判ノ木山西の各遺跡の発掘調査を実施した。この内、阿久・居沢尾根・判ノ木山西の各遺跡は規模が大きく、次年度への継続調査となった。

昭和 52 年度は岡谷市の調査も予定され 4 班編成となり、茅野市・原村地区では阿久・居沢尾根・判ノ木山西・金山沢北・判ノ木山東―取り付け道路分―・御社宮司遺跡の調査が行われ、御社宮司遺跡・阿久遺跡は昭和 53 年度に調査が行われるところとなった。

２．発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に日本道路公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で保護協議することになっている。この結果、記録保存と決定、発掘調査が必要となった場合、公団は県教育委員会に委託して調査を実施している。つぎのような発掘調査委託契約が締結された。

発掘調査委託契約書

1	委託事務の名称	中央道埋蔵文化財発掘調査　（茅野市、原村その３）
2	委託期間	昭和 52 年 4 月 5 日から昭和 53 年 3 月 20 日まで（51 年 4 月 5 日～52 年 3 月 20 日）
3	委託金額	金100,283,000円(昭和52年度)――他遺跡調査分も含む
	以下 略	

３．長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当っている。

昭和45月7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度当初の理事会において、発掘調査の受託が決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。昭和52年度役員、茅野市・原村その3地区調査団組織はつぎのとおりである。（調査会規約は既刊の中央道報告書参照）

１）　昭和52年度中央道遺跡調査会役員名簿

顧　問　一志　茂樹　（県文化財保護審議会会長）

会　長　水口　米雄　（県教育長）

理　事　金井喜久一郎　（県文化財保護審議会委員）
米山　一政　（県文化財保護審議会委員）
桐原　　健　（県文化財保護審議会委員）
原　　嘉藤　（信濃史学会常任理事）
毛涯　　修　（県教育次長）
太田　波夫　（県文化課長）
下平　　晃　（伊那教育事務所長）
三浦　邦次　（諏訪地区教委協議会長）
熊谷　大一　（辰野町教育長）
岡西　良治　（岡谷市教育長）
中村　文武　（諏訪市教育長）
木川　千年　（茅野市教育長）
松沢　　達　（原村教育長）
小林　繁治　（富士見町教育長）
小島与四郎　（諏訪教育会長）
林　　茂樹　（宮田小学校長）

監　事　小栗栄重郎　（県文化課課長補佐）
上原　　寛　（茅野市教育次長）
矢島　雅幸　（茅野市教育委員会社会教育課長、52年度）

幹　事　青沼　一之　（県文化課文化係長）
久保　浩美　（県文化課文化財係長）
小林　正良　（県文化課主査）
堀内規矩雄　（県文化課主事）
宮島　孝明　（県文化課主事）
西沢　宏明　（県文化課主事）
水品　良彦　（伊那教育事務所総務課長）
吉沢　乙一　（伊那教育事務所総務課長）
武井今朝人　（伊那教育事務所主査）
寺沢　公明　（伊那教育事務所主事）
片桐　光雄　（伊那教育事務所社会教育課長）
今村　善興　（県文化課指導主事）
樋口　昇一　（県文化課指導主事）
山田　瑞穂　（県文化課指導主事）
伴　　信夫　（県文化課指導主事）
丸山敏一郎　（県文化課指導主事）
笹沢　　浩　（県文化課指導主事）
関　　孝一　（県文化課指導主事）
小林　秀夫　（県文化課指導主事）
青沼　博之　（県文化課指導主事）
小山　民雄　（伊那教育事務所社会教育課主事）
小口　幸雄　（伊那教育事務所諏訪支所長）

2）　昭和51年、52年度長野県中央道遺跡調査団茅野市・原村その3地区班名簿

昭和51年度

調査団長　大沢和夫

（総括）　今村善興　（調査主任）伴　信夫　（調査員）辰野伝衛、根津清志、細川光貞、小林正春
知名定順、赤羽義洋

昭和52年度

調査団長　大沢和夫

（総括）　今村善興　（調査主任）小林秀夫　（調査員）細川光貞、松永満夫、村上　孝、坂野和信

山本賢治　（調査補助員）関　喜子、矢崎つな子、矢嶋恵美子

昭和54年、55年度、整理作業

小林秀夫、百瀬長秀、和田博秋、山本賢治、宮坂直子、堀　知哉、根津清志、細川光貞、小山教子

山田登美子、　（写真）木下平八郎　（復元）福沢幸一

※発掘調査、整理作業にあたっては、下記の調査団員の協力、指導があった。

樋口昇一、山田瑞穂、岩佐今朝人、笹沢　浩、青沼博之、臼田武正、土屋　積、山下泰男、百瀬新治、平出一治、中島庄一、矢島宏雄、藤森美枝、佐藤信之、岩崎孝治、小松原義人、高桑俊雄、島田哲男、丸山日出夫、樋口誠二、北原弘子、山内志賀子、赤羽淑子、丸山雅子

３）　調査協力者

発掘調査・整理には、茅野市・富士見町当局のご好意で応募された市民の方々のご協力を得た。

（茅野市）赤沼幸一、北原今朝一、有賀正男、樋口真樹、伊藤やすゑ、小沢安喜、丸山吉代、田中洋子

（富士見町）小林義平、久保田勝、小林三代子、小林わかえ、小林はつよ、細川よしえ、川上小夜子、原田りょう、朝倉くに、立木昭代、後町はる子、雨宮とも江、名取千富已、小池さたゑ、小池頼良、有賀栄作、植松　広、雨宮うたよ

（諏訪市）野村志めよ、藤森正子、藤森ミツ子、原　トメ、野沢博子、野沢明子、野沢和代、矢崎みさを、矢嶋千雪、唐沢直子

現地指導・視察者

発掘調査にあたっては、次の関係機関、研究者の方々からご指導をいただいた。

日本道路公団、長野県教育委員会、茅野市教育委員会各関係者、宮坂光昭、武藤雄六、森嶋稔、末木健

第２節　調査の実施と経過

１　調査の経過（調査日誌　昭和51年～55年度）

昭和51年度

９月24日　重機による表土除去を始める。

10月１日　地区設定と遺跡の範囲確認を始める。

10月19日　本格的な遺構検出を始める。

11月２日　Ａ地区を中心に土壙・竪穴が検出され始める。早期や後期の土器片も出土する。

11月10日　この前後に縄文時代中期の住居址が検出され、第１号～第４号住居址とする。遺り方を組み始める。

11月16日　第３号住居址検出、実測終了する。

11月20日　第４号住居址終了し、第２号住居址の実測を始める。このころから本年度分の調査終了した、Ｂ班の応援を受ける。

11月24日　第５号、６号住居址の実測図完成

11月25日　第１号住居址実測を始める。本年度の調査をSTA256＋40のラインまでとし、南側に向かっての部分と、東側Ｂラインは簡易舗装して工事用道路とすることで公団と合意し、来年度の調査とする。

12月７日　第１号住居址の実測終了し、Ａライン側の来年度分の残存部分を埋めもどし本年度の調査を終了する。

昭和52年度

４月14日　昭和52年度の調査始める。発掘器材を搬入し、前年度の埋めもどし分をとり除く作業を始める。

４月18日　グリット設定。遺構検出を始める。

４月20日　第９号・第10号住居址のプラン確認される。第８号住居址と仮称した遺構についても円形のプランを持つ落ち込みがみえたが、遺物の検出もなく、明確なプランの確認ができないため、遺構として取りあげないこととする。

４月25日　遺り方設定。第９号・第10号住居址、土壙48号など実測開始。

５月６日　第９号・第10号住居址の実測終了。金山沢北遺跡の重機による表土はぎを行う。

５月９日　第７号・第11号住居址のプラン確認。住居址の検出に入る。

５月15日　第７号・第11号住居址検出が終了し実測、遺物の取り上げに入る。

５月26日　第７号住居址深鉢（図 46 － 20 ）の取り上げ。

５月27日　第７号・第11号住居址実測に入る。

６月１日　Ａライン側の遺構全体の写真撮影。終了後各住居址の柱穴・炉の確認調査に入る。
調査員の一部と作業員は、判の木山西遺跡調査終了後に予定している金山沢北遺跡へ表土はぎと地区設定にむかう。６月10日まで。

６月５日　Ａライン側の調査終了し、Ｂライン側の簡易舗装を取り除く作業始める。

６月10日　Ｂライン側の遺構検出を始める。

６月12日　遺跡南側、Ｅ地区を中心に円礫が帯状に出土し、範囲も広く遺物が多少出土する。阿久遺跡と同じかと緊張するが、後で自然礫と解かる。

６月13日　第12号・第13号・第14号および第15号住居址のプランが確認される。

６月20日　各住居址の検出に入る。遺り方設定。

６月25日　第16号住居址の確認、検出に入る。

７月20日　第14号・第15号および16号住居址の実測、カマド、柱穴の確認など終了。
第18号住居址、土壙などの検出に入る。第12号住居址で炭化材などの取り上げ作業。炭化材の一部をウレタンで取り上げる。

７月25日　判の木山東遺跡付近の取り付け道路の露呈部分に焼土と灰釉陶器片の出土があり、判の木山東遺跡との関連から住居址の存在が予想されたため急きょ調査することになり、調査員と作業員をまわす。
８月24日までかかる。

８月25日　判の木山西遺跡の調査終了し、金山沢北遺跡へ移動。表土除去作業。

９月１日　第１号住居址のプラン確認。検出に入る。
第２号・第３号住居址のプラン確認。遺り方設定。

９月12日　調査員の一部と作業員、御社宮司遺跡の準備に入る。

９月20日　縄文時代早期の土器の取り上げ。集石炉の検出、実測。御社宮司遺跡の確認調査本格化する。

10月１日　金山沢北遺跡の整理を行い、調査員と作業員の一部は阿久遺跡の応援に行く。

10月30日　御社宮司遺跡の確認調査。予定していた境内地以外で、北西から南東に向かって約400ｍの範囲に、縄文時代晩期から古墳時代・中世・近世に至るまで複雑に重なる遺構の存在を確認する。

11月４日　来年度の調査の準備をして終了。

12月　遺構図の確認、遺物の注記、写真ネガ、スライド整理を行う。

１月～３月　他遺跡の整理・原稿執筆、次年度の御社宮司遺跡の準備を行う。）

昭和53年度

御社宮司遺跡の発掘調査（４月～12月）

昭和54年度

班編成替え・退団などで判ノ木山西遺跡などの整理は、小林、山本、宮坂の３名で行う。
御社宮司遺跡の整理と判ノ木山西遺跡の遺物実測・原稿執筆・報告書出版が計画される。

昭和55年度

４月は小林と山本の２名で判ノ木山西遺跡の整理を始める。百瀬と和田は岡谷班の残務整理に従ったため、６月から班の業務につく。８月段階まで百瀬は御社宮司遺跡の整理を行う。11月に実測・図版組み・写真組みが終わり、原稿執筆に入る。
１月、原稿終了し編集、出版。

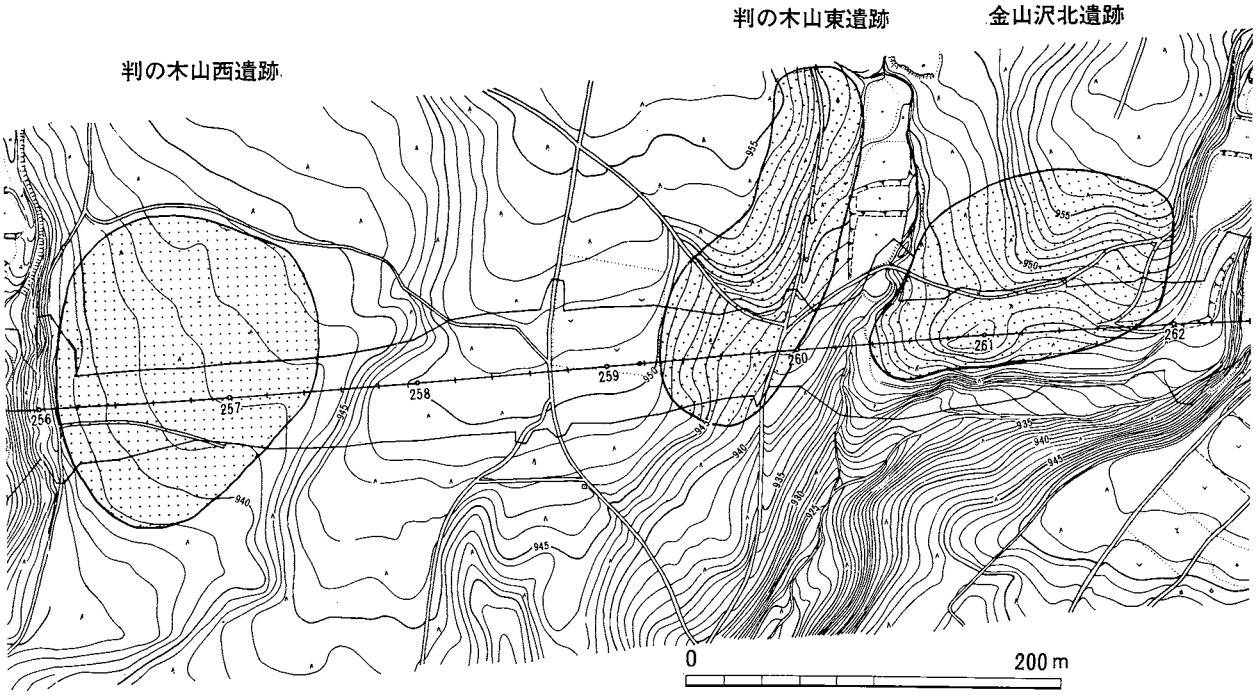


図１　遺跡の範囲と中央道用地内関係図（１：4000）

２　発掘調査の方法

判ノ木山西遺跡　２年次に調査がまたがり、調査担当者、調査員も前年度と次年度ではほとんど交替したため、調査の方法も若干異なるが原則的には同じである。発掘調査は道路公団の用地内に限定されるため、センターラインを中心にして基準線を設定し、全面発掘を計画した。本遺跡の場合はＳＴＡ256＋20を基点とし、一方では２ｍ方眼のグリットを設定して遺跡の範囲確認調査を行い、一方発掘段階ではこの基点を中心として磁北によって遣り方実測の方法をとった。基点を中心に10ｍ方眼を組み南にＡ、Ｂ、Ｃ……列を、北へＹをとり、基点より東へ19から順次若返る数を、西へは20、21となる列をとり、さらにその10ｍ方眼内に水糸を縦横に張り、遺構の実測、遺物の取りあげを行った。標高は道路公団の基点を用いた。

発掘調査は、重機によって表土および遺構検出面直前まで取り除いた。整地後２ｍ方眼のグリットの設定を行い遺構の検出を行った。発掘可能な範囲は全面的に掘り下げた。したがってＳＴＡ256＋10からＳＴＡ257地点までは遺構の確認ができたと思われる。遺構のプラン確認後は、セクションベルトを設定し層序の確認を行って発掘。この間、遺物の出土にあたっては、遣り方を用いて地点と標高を記入する「全点主義」の方法を用いて取りあげを行った。細部にわたっては、住居址では柱穴の掘り方を切断する方法をとり、できるだけ柱痕跡の確認を行った。またカマドや炉についても構造面の検討を行った。遺構外の遺物も総て点を取り、明らかに遺物と思えない物以外は採集した。遺構実測図は１/20を原則とし、必要に応じて１/10にした。土層観察の際は数名で確認したが、記述にあたっては遺構担当者の記述法を原則とした。遺構ナンバーは遺構の種類ごとに発見順につけた。遺構の実測にあたっては、遺物の出土状況を記録する図と遺構実測図と部分的な実測図とに分けた。

金山沢北遺跡　昭和51年に判ノ木山東遺跡の調査中に発見された遺跡で、調査の段階では台地の先端は削平され工事用道路となり、調査可能な範囲は八ヶ岳側のみであった。したがって調査の範囲は限られている。グリット設定は、ＳＴＡ261＋00を基点としてセンターラインを南北に２ｍずつに区切ってＡ～Ｔとし、これを１つの区とした。東西はセンターラインを50、西へ51、52…、東へ49、48…とした。水糸はグリットに合わせた。

判ノ木山東遺跡　すでに一般道路として使用されている道路の拡幅工事分で、道路のカット分のみの調査であった。遺構･遺物の検出地点のみ拡張して調査を行った。基点はＳＴＡ260＋07で、トランシットで102°東へ振りこんで第13号住居址の地点を割り出した。第13号住居址のポイントは基点から東へ130ｍである。

3　整理の方法

1）遺跡・遺構の実測図の整理について

発掘調査時においては、あらかじめ設定した水糸配り図に基づいて一連ナンバーを付けた、2.5㎜方眼のＡ２の実測用紙を用いた。平面実測図と断面図は原則として発掘調査時に合わせた。エレベーションの一部については発掘後に作成したものもある。遺物の出土状態は、整理時に「垂直分布図」「土器接合図」の作成を行い検討を行った。遺構図はコピーを作り、それを基本として第２原図を作成して図版のレイアウトを行った。遺構全体図は縮尺コピーで各実測図を１/100にして作成した。レイアウトした図を報告書のページに合わせてトレースし、図版を作成した。

2）遺物整理の方法

① **整理の手順**　洗浄――遺構・出土地点・層位・発掘時の取り上げナンバーなどの記入――分類――復元――(必要あるものは復元前に実測、写真)――着色――写真――実測(図化)――一覧表作成という順序を原則とした。

② **整理の基準**　基本的には、実測可能なものは図化することがのぞましいが、報告書作成の日程がおし迫っているので各種類ごとに分類し、必要最低限の実測にとどまった。基準は次の通りである。

a　土師器‥‥十二ノ后遺跡の分類に従い、判ノ木山東遺跡の分類も参考とした。器形・技法・胎土により細分し、復元実測可能なものは実測し、他は観察表によった。

b　灰釉陶器‥‥通常の分類に従った。胎土の観察を中心に産地の判定を試みた。

c　縄文時代早期の土器‥‥文様、胎土に含まれる繊維・雲母などを手がかりに抽出し、出土地点を図化して出土状態・範囲を確認した。文様のあるものは分類し、拓影・写真にした。また特に施文の明確なものについては実物大の写真撮影を行った。施文工具の検討は類例を待って行う予定である。

d　縄文時代中期の土器‥‥遺構内出土の完形品を中心にして概要の把握を試みた。土器は分類、観察の上、実測図・写真・観察表で表現した。実測図は製作の手順の図化に留意したため、やや模式的表現となっている。拓影は必要最低限にとどめた。観察表は土器の全体像を把えるべく作成し、実測図との重複はつとめて避けた。観察項目中、器形・法量・文様の工具・手法については第３・４類土器についてのみ分類した。

e　縄文時代後期の土器‥‥分類、観察の上できる限り図上復元し、観察表で補足した。

f　石器‥‥小形石器（石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、不定形剥片石器、石核状石器、ピエ

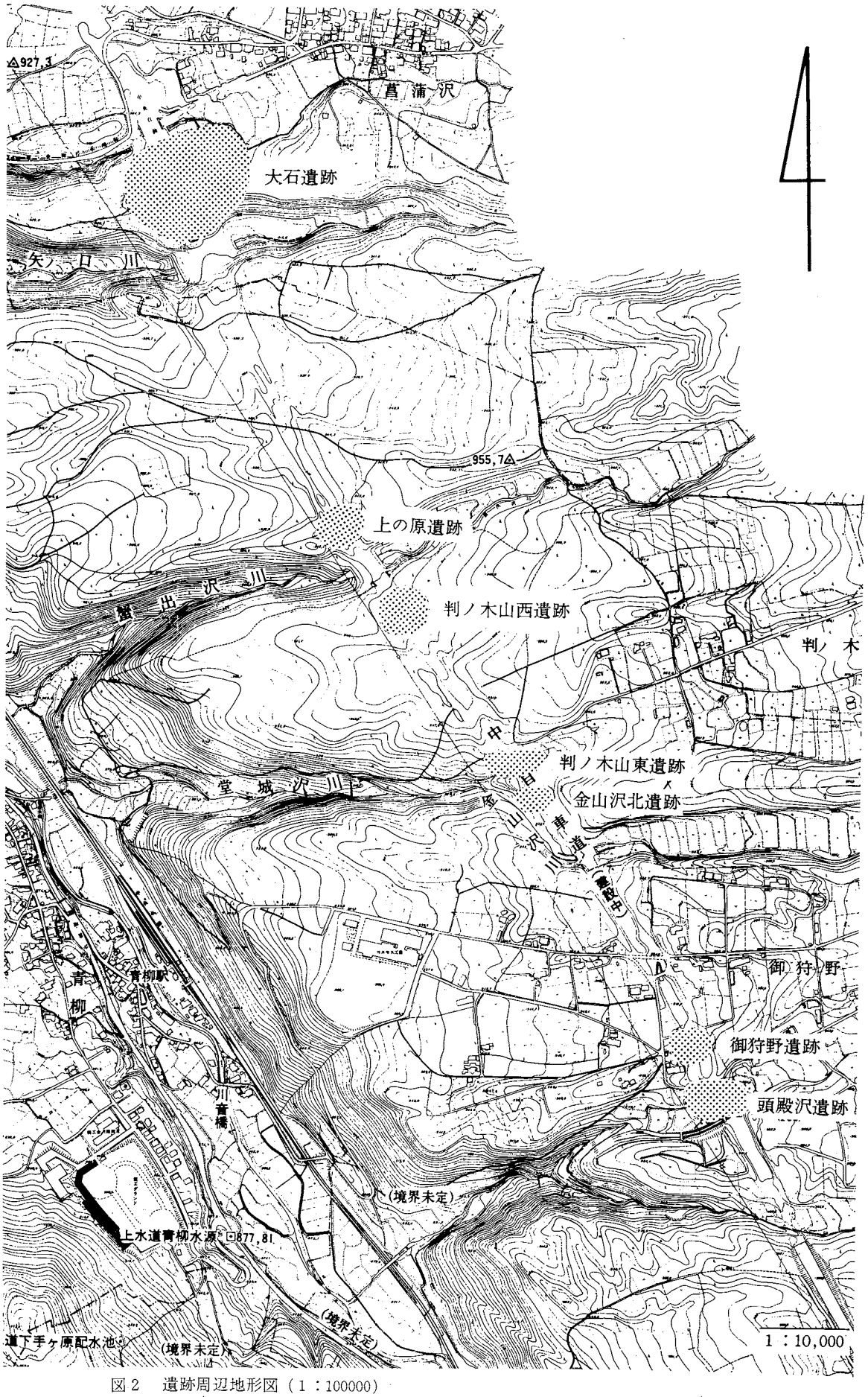


図２　遺跡周辺地形図（１：100000）

ス・エスキーユ、使用痕のある剝片・石核・原石）の分類は十二ノ后遺跡の基準に従い行った。実測は1/1で行いレイアウトの後2/3に縮尺した。個々の石器について長さ・幅・厚さ・重量・石材・その他刃部角等必要に応じて計測し、一覧表を作成した。石錐等の石器については原則として出土したすべての石器を図化したが、使用痕のある剝片・石核・原石、ピエス・エスキーユ、石核状石器については、その代表例を図化した。

石斧類や磨石類などの大形石器は、すべてを器種ごとに分類して一覧表を作成の後、その中で代表的なものや特長あるものを主に実測した。但し、類例が少なく特定の器種に入れにくいものは一括し、できるだけ多く実測した（不定形石器・使用痕ある石）。トレースは、実測図（1/1）を1/2または1/3に縮尺してから行ったものが多い。

第II章　調査遺跡

第1節　茅野市判ノ木山西遺跡（ＳＨＮＢ）

1　位置　（図１・２、図版１）

判ノ木山西遺跡は、茅野市大字金沢字壱枚畑3223、3236番地に所在する。本遺跡の立地する茅野市・原村（両者の境界上にある）は諏訪湖盆地南半の行政区画である。諏訪湖盆地は糸魚川―静岡構造線とこれに付随する断層の陥没によって形成されたが、その南半部は八ヶ岳の火山堆積物が現地形の形成に大きな役割を果たしている。火山地形特有の広い裾野によって広大な平坦面が形成されている。南側の裾野は、糸魚川――静岡構造線に直交するようにして、芳原川、碑田川、金山沢川、道祖神川、裏沢川、阿久川、大早川、前沢川、弓振川等が裾野を開析し、宮川に合流し諏訪湖に流入している。

本遺跡は、蟹出沢と金山沢川によって浸食されて形成された長尾根にのる。この尾根一帯は判ノ木山と呼ばれる。蟹出沢寄りには小規模な段丘面になっており、この全面が遺跡の範囲と思われ、中央道は遺跡中央部を通過する。蟹出沢へは急崖となり、遺跡との比高は15～21ｍである。遺跡の標高は940ｍ前後である。北側、蟹出沢の対岸は上の原遺跡〔今村 1978〕、南側は判ノ木山東遺跡、金山沢北遺跡となる。現状は山林であるが、畑地としても利用されたことがあり、周辺にはその跡を留めている。なお、国鉄中央東線、青柳駅北方１kmの地点にある。

2　遺跡の範囲と調査区域

判ノ木山西遺跡の範囲は、中央道用地内のみ確認されており、用地外についてはいまだ確認調査は行われていない。また表面的な観察も山林地帯であるため、思うにまかせず、遺跡範囲は正確に把握されていない。地形の状況から、遺跡の北西側――蟹出沢に向う傾斜面一帯が遺跡の範囲と思われる。南東側は一段落ちるところまで、南北170ｍ、東西135ｍほどが遺跡の範囲と思われる。

調査の範囲は、東西の用地幅は問題ないとして、南北方向では重機による表土はぎの後、一部グリット調査をして遺物の出土状態、遺構の確認が行われた。その結果ＳＴＡ257＋00から南側は円礫の多数出土する地点（礫群）があって遺物の出土も少なく、判ノ木山東遺跡へ連なる台地（ＳＴＡ258～ＳＴＡ259）は昭和50年度の分布調査の時点で「無遺物地帯」であったため、遺跡の範囲をＳＴＡ257地点までとした。

図3　判ノ木山西遺跡遺構全域図

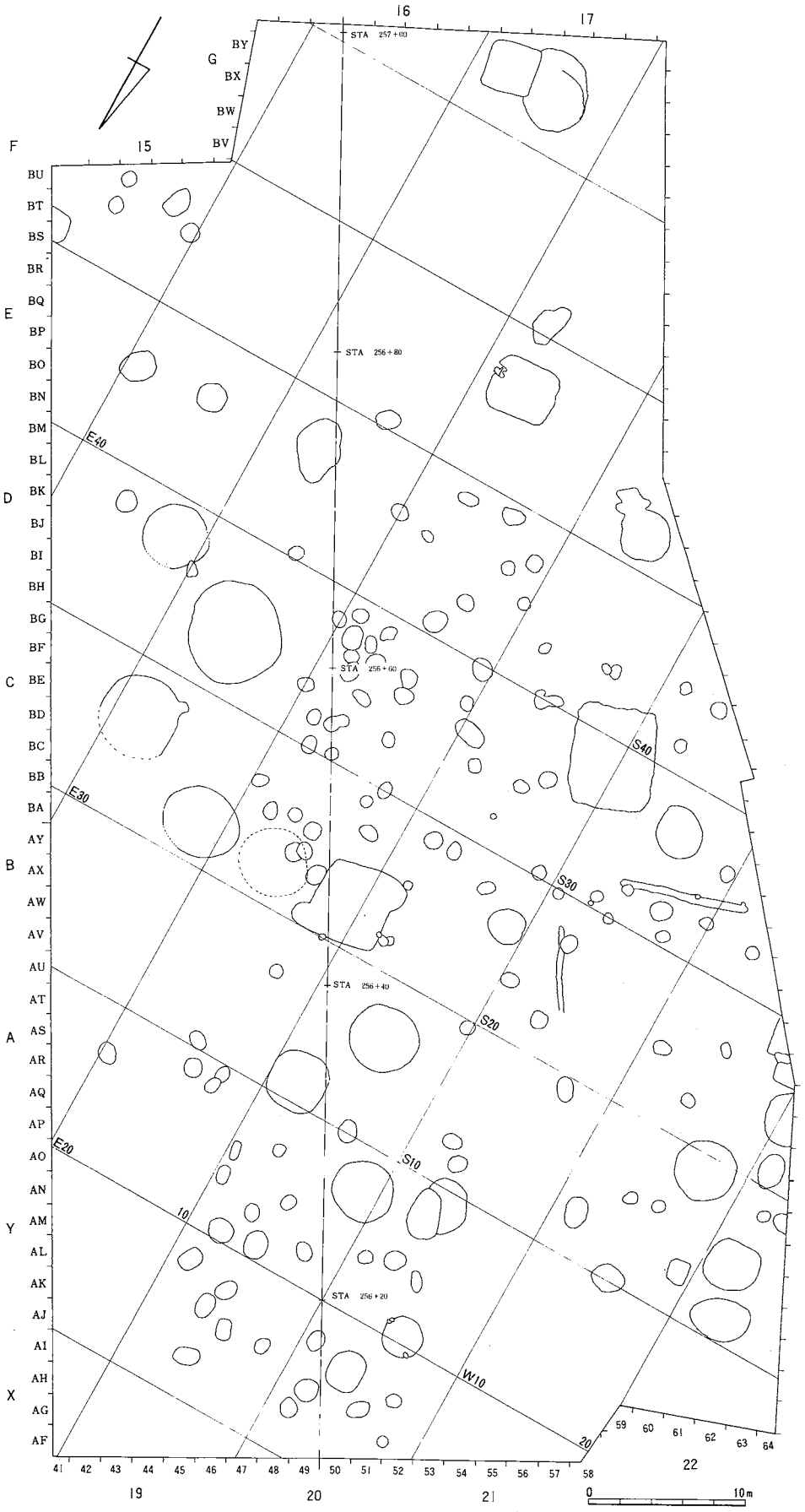


図４　判ノ木山西遺跡　　水糸配り図およびグリット配置図

3　層序

遺跡内では部分的にやや異なりながらも、全体的には、表土――黒褐色土――ローム粒混入黒褐色土――褐色土――ローム層という層序が基本的なものである。ローム層に近づくと部分的に人頭大から拳大の礫を含む褐色土になる。縄文時代中期の住居址のほとんどは、この層を掘りこんでいる。平安時代の住居址は、ローム粒の混った黒褐色土が検出面である。縄文時代早期の土器が集中して出土した地点は、黒色土層が厚く、土壙43、土壙48周辺は特に厚い状態であった。また遺跡北側は黒褐色土の堆積が厚く、ローム粒混入黒褐色土は薄い状態であった。住居址の埋土は、ほとんどが炭化物混入し、検出の一つのメルクマールとなった。

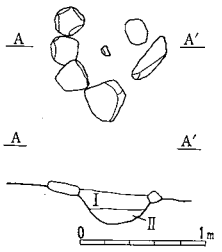
4　遺構と遺物の概略

1）住居址

検出された住居址は18基である。縄文時代中期に属するものが12基、平安時代後期のものが6基である。住居址ナンバーは19までつけられたが、8号住居址としたものは、発掘時に平安時代の住居址と仮定したが、検討の結果、遺構とは認められなかった。この時点で9号住居址・10号住居址などの遺物の取りあげも進んでいたので、8号を欠番とした。

①　19号住居址（図5）

調査が2年次に渡ったこともあり、12号住居址および土壙116・123の確認の段階で確認された住居址で、石囲炉の検出しかできなかったものである。



I　炭混入茶褐色土
II　ローム混入茶褐色土

図5　19号住（1：60）

②　5号・6号住居址

平安時代後半の住居址である。住居址の大半が用地外へかかり、わずかに5号住居址のカマドの一部を検出したにとどまった。おそらく5号住居址は6号住居址を切っているものと思われるが、その詳細は不明である。本遺跡の平安時代の住居址群の中では、カマドの方向が北側を向いている点で異なる。遺物は検出されず、明確な時期の決定はできない。

※他は「縄文時代中期の遺構と遺物」および「平安時代の遺構と遺物」の項で詳述する。

2）竪穴状遺構（図3・7）

遺構の性格は不明であるが、遺跡北側――段崖への傾斜が始まる肩部の近くに検出され、土壙よりも大きくて住居址の痕跡も明確でないもので、3基ある。それぞれ形態や出土遺物は異なるようである。

竪穴1は、南北3m95cm、東西3m35cm、深さ17cmの楕円形である。遺構の半分は用地外へかかる。黒土中に掘りこまれ、黒土・黒褐色土が入りこむ。黒土中から縄文時代中期の破片が出土した。竪穴上面からは鉄滓・羽口片が出土した。床面は軟弱で明確でなかった。

竪穴2は、南北1m50cm、東西1m30cm、深さ17cmの方形である。褐色土層が入りこむもので、縄文時代早期の土器（図8の1、図11）が出土している。詳細は「第1節6」で記述する。

竪穴3は、南北2m70cm、東西2m55cmの円形である。深さは37cmを計り、床面は礫まじりの漸移層で部分的に硬さがある。黒褐色が入りこむ。

3）土壙

調査区内の全域に124基検出された。円形または楕円形のプランを呈し、ほとんど差が見られない。後述するように、土壙の分類の基準として土壙内の層序を考えた。観察の結果、ほとんどが自然堆積によるも

のと思われ、いくつかの分類にまとまる。同一の層序を持つものは同じ傾向であると考えた。大きくＡ～Ｆ、さらに内をいくつかに細分した。その結果、縄文時代早期・中期・後期、平安時代、その他時期不明なものと大きく分類できる。また土壙内の遺物の出土状態、礫や炭化物の混入状態など分類の要素は多い。

前年度と次年度の連絡不備から45と46の欠番が生じた。

４）ロームマウンド（図３）

11基検出された。形状は他の遺跡でみられるものと同じで、楕円形または不整円形である。長径は４ｍ20cm～３ｍの間、短径は３ｍから２ｍ50cmの間で、深さは１ｍ20cm～70cm位でほとんどが90cm前後である。検出面から30cm前後盛り上がる。形態的には楕円形のもの７基、不整円形のもの４基である。

５）溝状遺構（図３）

Ｃ-20区を中心に、一本は東西に８ｍ、幅１ｍ、深さ30cmほどの、ローム面を掘り込んだもので、黒褐色土が入りこんだ浅い溝状遺構である。土壙101に切られている。この土壙101は、土壙分類のＣ－２にあたる。おそらく平安時代に入っての土壙と思われる。よって平安時代以前の溝状遺構であろう。

もう一本は、南北方向にあいている。北側が（傾斜面に向って）自然に消えていくもので、長さ５ｍほど幅１ｍ、深さ30cm～40cmである。この溝状遺構は、南側で土壙103に切られている。土壙103は、土壙分類のＥ－６にあたり、第Ⅱ層上面から、縄文中期２類に属する土器(57)が横転した状態で出土している。この状況から見ると土壙103と同時期か、それ以前と考えられる。この２本の溝状遺構は落ち込んでいる土層が同一であるところから同時期のものと考えられる。性格については類例を待ちたい。

６）礫群

調査区域内南側に、東側から西側への尾根状の斜面に沿って、幅14～15mほどの円礫群が帯状に検出された。礫群中には各時代の土器片が混入されているが、黒色土・黒褐色土の層位の状態からみると流れこんだ状態に思える。遺構として関連してくるのは14号・18号住居址である。14号住居址（平安時代）は礫群中に構築されたものと思われる。18号住居址（縄文時代中期）は、礫群の状況があまり密でなく、また、南側の一部がかかるのみであったので礫群との関係はとらえにくいが、18号住居址の方が礫群よりも古いのではないかと考えられる。礫群は自然流であったと思われる。

５　出土遺物の概略

１）土器の分類

本遺跡から出土した土器は、縄文時代早期、前期、中期、後期、平安時代後半の各時期に渡っている。各時期の土器を分類して、その概略述べる。この分類は後述する各遺構、遺物の基準となるものである。原則として、各節、各項で特に明記しない場合は各項で示した時代をあらわしている。

①　縄文時代早期の土器

文様構成、その他の特色から４類に分類した。出土した点数は細片まで含めると、約960点である。その約80％は、第４類とした条痕をつけた土器で、他に沈線を持つ土器が多く、押型文、縄文の土器が若干出土している。各類別の内をさらに細分している。縄文時代早期後半の土器である。

ａ　**第１類**　押型文系の土器　―― 施文によってａ～ｃに分類した。

ｂ　**第２類**　縄文系の土器

ｃ　**第３類**　沈線文系の土器　―― 施文と文様構成によってａ～ｅに分類した。

ｄ　**第４類**　条痕文系の土器　―― 施文によってａ～ｅに分類した。

②　縄文時代前期の土器（図６、図版18）

出土点数は６点のみで少ない。調査範囲の南側、D18区を中心に散在した出土である。出土層位は、第II層とした黒褐色土内である。136を除いて縄文時代前期初頭の花積下層式と思われる。

③　縄文時代中期の土器

本遺跡からは中期初頭～後半の土器が出土した。これらを12類に分類しその概略を示す。第１類～第８類は八ヶ岳西麓で主体的でありその変遷を追える類である。第９類～第12類は客体的な類である。

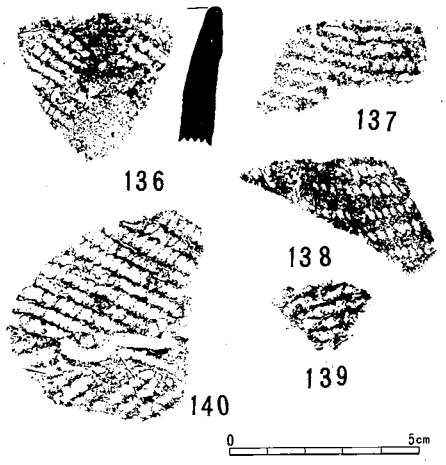


図６　縄文時代前期の土器（１：２）

a　第１類　(50)

２号住・土壙等より一定量出土した。深鉢と浅鉢がある。器形は不詳だが、キャリパー状の口縁部が再度外屈して２段の屈曲をもつ深鉢が１点あるほか、口縁部がいったん外屈してから内湾気味に立ち上がる深鉢が多い。波状口縁、平口縁の両者があり、突起はほとんど無い。口縁部内面は肥厚されることがある。胎土は赤っぽい色調で、混和材には金雲母が目立つほか、長石・石英とみられる粒子が多い。整形は粗く混和材の粒子が十分沈められていない。深鉢の文様帯は口縁部と胴部に分けられる。口縁部の文様には、半截竹管による当たりの浅い縦位沈線を充填するタイプと、単節の縄文もしくは無文地にヘラ又は半截竹管腹面による沈線を横走させ、この沈線にかけて細い円形竹管による刺突列を一周させるタイプがある。この他、波状口縁頂部より半截竹管による平行・波状沈線や同工具腹面の連続押圧を付した隆帯を垂下させる例もある。口縁端部～外縁には竹管やヘラによる連続押圧や刻目等を加えることが多い。浅鉢には口縁内面の肥厚部分に円形又は半截竹管をねかせて浅めに当てた結節沈線（いわゆる角押文）のみられる例がある。九兵衛尾根Ｉ式の特徴を備えていると言えよう。

b　第２類　(49・55・57)

土壙等より少量出土した。深鉢のみ認められ、完形品が若干ある。器形は、底部が張り出して胴部は外湾しながら開き、口縁部は小さく外屈するか外屈後内湾気味に立ち上がるらしい。波状口縁と平口縁があり、肥厚されるものがある。赤っぽい色調の胎土が多い。混和材は長石らしい白色鉱物粒が多く、金雲母はさほど目立たない。整形は第１類よりは幾分丁寧で、内面の粒子はほぼ沈められている。文様帯は口縁部と胴部に分かれる。単節の縄文を縦位に回転させ地文とする例が多く、口縁部にはヘラ描沈線による下向きの弧を描き、胴部には同手法によるＹ字状のモチーフが描かれるほか、半截竹管腹面による沈線・刺突・結節沈線、三角形の陰刻等の要素がみられる。九兵衛尾根II式の特徴を備えていると言えよう。

c　第３類　(３・11・12・13・14・19・36・42・52)

本遺跡で主体的な類で、「第II章第１節12－２）」で詳述する。狢沢式の特徴を備えている。

d　第４類　(４～６・９・10・20・22・23・25・34・37～40・43～45・54)

本遺跡で最も主体的な類で「第II章第１節12－２）」で詳述する。新道式の特徴を備えている。

e　第５類　(24)

７号住等より少量出土した。器種は深鉢のみである。器形は不詳だが胴部が丸く張るものがある。器壁は厚い。赤っぽい色調の胎土が多く、混和材は長石・軽石かとみられる粒子が多量に含まれる。文様帯・文様については断片的にしか把握できなかった。隆帯による楕円形区画や横位に一周する波状モチーフ等を要素とする。藤内式の特徴を備えている。

f　第６類　(26・31・32・48・59)

７号住等から少量出土した。深鉢と鉢がある。胴部が張る鉢１点を除けば器形は不詳だが胴部がくびれる深鉢、肩が張って口縁部が内屈する深鉢等がある。器壁は厚く、口端には平坦面がつくられる。混和材は第５類に近似する。文様帯・文様は不詳だが、隆帯による楕円形区画や押圧を付した波状隆帯、区画内には半截竹管腹面を用いた縦位の連続平行沈線等が認められる。井戸尻式の特徴を備えている。

g　第７類　(27～29・53・60・61)

７号住等より一定量出土した。器種は深鉢のみである。胴部が長めで心もち張り、口縁部が外屈する器形らしい。混和材が少なめで粒子は小さい。器表はケズリがなされるらしくフラットでナデが加えられる。口縁部の文様は、無文で十字状モチーフの隆帯を垂下させるのみである。胴部では隆帯を垂下させ、半截竹管腹面を用いた縦位の平行沈線を充填する。隆帯上はヘラで押圧されることが多いが半截竹管腹面による連続押圧が加えられる例もある。曽利Ｉ式・梨久保Ｂ類の特徴を備えている。地文に撚糸文を有する等関東地方に類例が求められる例（28）も少量ある。

h　第８類　（８・14・16～18・21・41）

本遺跡で主体的な類で「第II章第１節12－２）」で詳述するが、第３・４類に比べ量は少ない。いわゆる平出第三類Ａに該当する。

i　第９類　(58)

土壙112等から少量出土したのみで、小形の杯形の土器と深鉢がある。オリーブ色に近い色調の胎土で、混和材は目立たないが石英・長石らしい粒子が含まれる。器面には丁寧なナデ・ミガキを加える。削り出し風の縄文帯上に三角形の陰刻が加えられるが、粘土を貼付した後ミガキを加えて削り出し風に見せているらしい。東海～関東地方に分布する類とみられる。

j　第10類　(33・35・62)

深鉢が少量出土した。深鉢Ｅに近似した器形がある。胎土は黄色っぽい。文様は半截竹管腹面を器面に強く当てて引く沈線（いわゆる半隆起線）を特徴とする。北陸地方の新崎式・上山田古式・上山田式等と対比される特徴を有する。尚本類の文様の施文手法が他の類に使用される場合がある。

k　第11類

２点のみ出土した。概略が知れるのは遺構外出土の１点(図42—285)のみである。口縁が外反し胴部がややふくらむ深鉢で器壁は５～６㎜と薄い。胎土は淡黄色又は浅黄色で長石・石英とみられる粒子が多く混入されるほか、金雲母やローリングを受けた砂粒が加わる。器面はフラットで内面は粒子が沈みきらない程度にナデている。文様は裾に連続刺突を加えた隆帯を貼付し、ＲＬの縄文が付される。船元Ｉ・II式の特徴を備えているが隆帯裾の連続刺突はやや異なった様相を示す。

l　第12類

破片１点のみで７号住より出土した。中空の把手のつく深鉢でＬＲの縄文が縦位に付される。加曽利ＥIII式に対比されよう。

④　縄文時代後期の土器

総て遺構外から出土した。５類に分類するが詳細は「第II章第１節12－２）」の項を参照されたい。

a　第１類（89）

数点出土した。深鉢と注口土器がある。文様はヘラによる沈線が用いられる。堀ノ内式に相当する特徴を備えている。

b　第２類（80）

破片を含め数点出土した。加曽利Ｂ２式に対比される。

c　**第3類**（74～79・81・82・88）

破片を含め20点以上出土した。加曽利B３式に対比される。

d　**第4類**（64～73）

破片を含め30点程出土した。加曽利B３式に後続する類とみられる。

e　**第5類**（83～87）

破片を含め50点程出土した。無文土器を一括する。第２～第４類に共伴すると思われる。

⑤　平安時代後半の土器

本遺跡で出土した土器は、土師器、黒色土器、灰釉陶器が大部分で、小破片として須恵器が２点ほどある。供膳形態の土器には、杯、椀、皿、短頸壺等がある。煮沸、貯蔵形態の土器には土師器では甕、灰釉陶器では瓶がある。器種分類にあたってはすでに諏訪湖盆に立地する十二ノ后遺跡において〔今村、笹沢1980〕、八ヶ岳山麓においては近接する判の木山東、頭殿沢等の遺跡で行なわれている〔今村、臼田、百瀬1978〕。供膳形態の土器は形態的にも成形技法も比較的各地域間に共通するところが多い。十二ノ后遺跡、判ノ木山東等の遺跡で分類された器種も名称こそ異なっても同様の方向を示している。

反面、煮沸、貯蔵形態の土器は、近接する判ノ木山東遺跡等で分類されたものに共通する〔今村、臼田、百瀬1978〕。本遺跡での平安時代の土器分類は供膳形態については、成形技法、調整技法などが検討された十二ノ后遺跡での分類を踏襲する。煮沸、貯蔵形態の土器――特に甕については判ノ木山東遺跡等で分類されたものを参考にしながら十二ノ后遺跡の分類に従い、本遺跡で出土した器形を加えた。

なお灰釉陶器については一般的な分類に従った。折戸53号窯期のものである。

a　**供膳形態の土器**

土師器は杯が大部分である。杯DII、杯DIIIと分類した杯は形態、ロクロ成形痕、底部の調整、胎土、色調などに若干の差が認められ、それぞれの内で細分したが、原則的には杯D――ロクロ成形された土器で、成形時の痕跡を残したまま――の範囲内の土器である。細分にあたっては、形態、成形技法の他、胎土、色調の差を考慮した。

b　**煮沸、貯蔵形態の土器**

甕と羽釜形土器が出土している。羽釜は１点のみの出土であるが、甕は器種にバラエティーがある。十二ノ后遺跡の分類に従うが、八ヶ岳山麓部に見られても、十二ノ后遺跡には見られない器形もあるので、判ノ木山東遺跡等の分類も参考にして新たにつけ加えた。判ノ木山東、頭殿沢遺跡で見られた甕Gは本遺跡でも検出された。

6　縄文時代早期の遺構と遺物

1）土器の出土状態と遺構

調査区域ほぼ全域に散漫的に分布しているが、北側の傾斜面と東側に比較的多く、特にA−21、22、B−20、21、22地区、土壙43、48、竪穴２、ロームマウンド１、２周辺に多く、他にF−18地区、第18号住居址周辺にも出土している。これらの地区は黒色土層の堆積が厚く、上に暗茶褐色土層と続く層序を示している。土器の出土状態から、縄文時代早期の遺構と思われるのは、土壙43、48、32（集石炉）竪穴２で、この内で出土状態の明らかなのは、竪穴２と土壙48で、その概略を記述する。

a竪穴２（図７、図８、図12）

ローム面に堀りこんだ方形の土壙状の遺構で、東西１ｍ30㎝、南北１ｍ50㎝、深さは検出面から17㎝である。発堀時の所見によると、本遺構の底面は「相当の固さを持っていた」とのことである。埋土の状態は、検出面までは黒色土、竪穴内は暗褐色土である。遺物は縄文時代早期土器１，５、19、116、121、124、125、137が出土した他、第３類、第４類土器片が出土している。

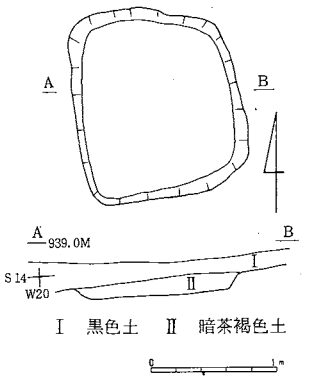


図７　竪穴２実測図（１：60）

土器１（図８−１）は、口縁部とそれに接合される胴部の破片から復元されるが、器形は深鉢形になるものと思われる。口縁部はやや外反し、小さな波状口縁を呈する。縦位の貼付け隆帯が４単位付けられ、波状口縁の頂部に対応するものと考えられる。胴部はやや張ると思われるが口縁部の破片と直接接合していない。図上での推定は直径32㎝ほどになる。文様は隆帯、縦位の沈線と口縁端部の刺突とからなっており、モチーフとしては鋸歯文状である。隆帯は口縁端部から、4.7㎝ほどの粘土帯を縦位に貼付け、隆帯の下端へ沈線が集約される。口縁部から胴部上半の部分に施文されるが、沈線は引き足し、引き直しが多く文様の割付けも厳密さを欠く傾向がある。胴部に横方向の沈線が一条見える。刺突は下から上へ行なわれ、刺突の大半は縦位の沈線の施文後になされているが、口縁部刺突から直接縦位の沈線が引き出されているのもある。口縁端部には鋭いヘラ状工具のきざみ目が施文されている。外面には斜方向の細かい条痕が地文風に付けられているが、特に沈線の施文されない胴部には条痕が明瞭に残る。内面にはかすかに条痕が残っている部分もあるが、水平方向のケズリ、ナデの痕跡が残る。このケズリ、ナデは外面の一部にも認められる。

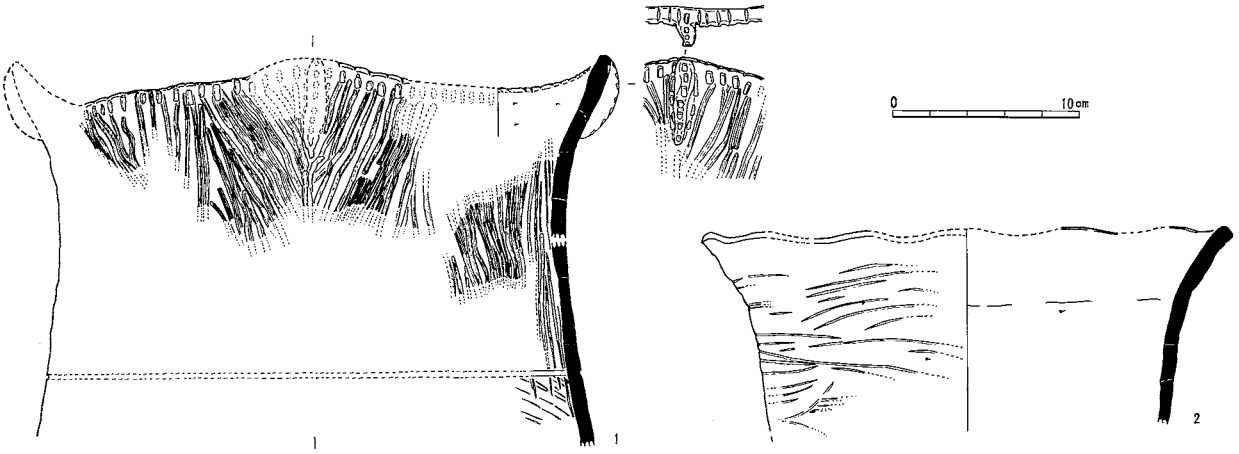


図８　縄文時代早期土器実測図（１：４）

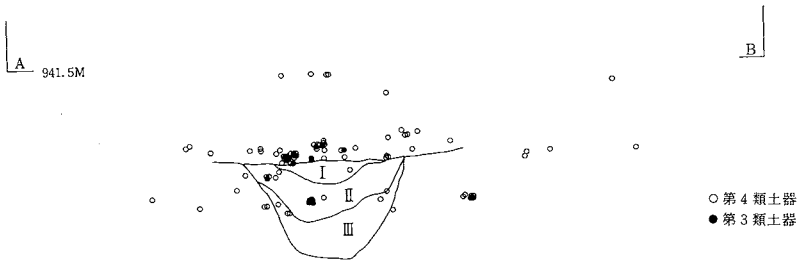


図９　土壙48　土器出土状態（１：60）

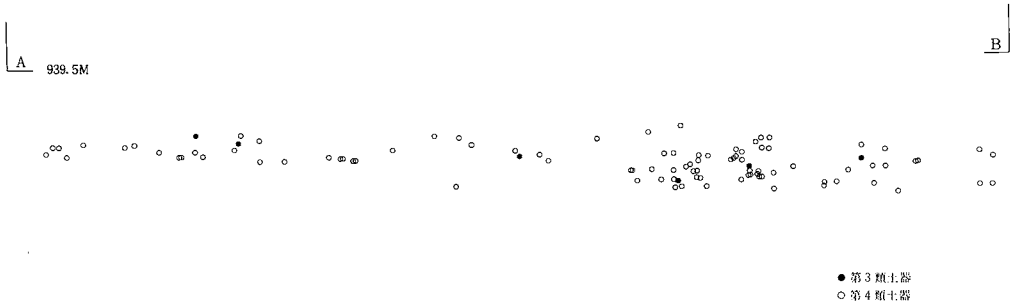


図10　B20・21地区土器出土状態（１：60）

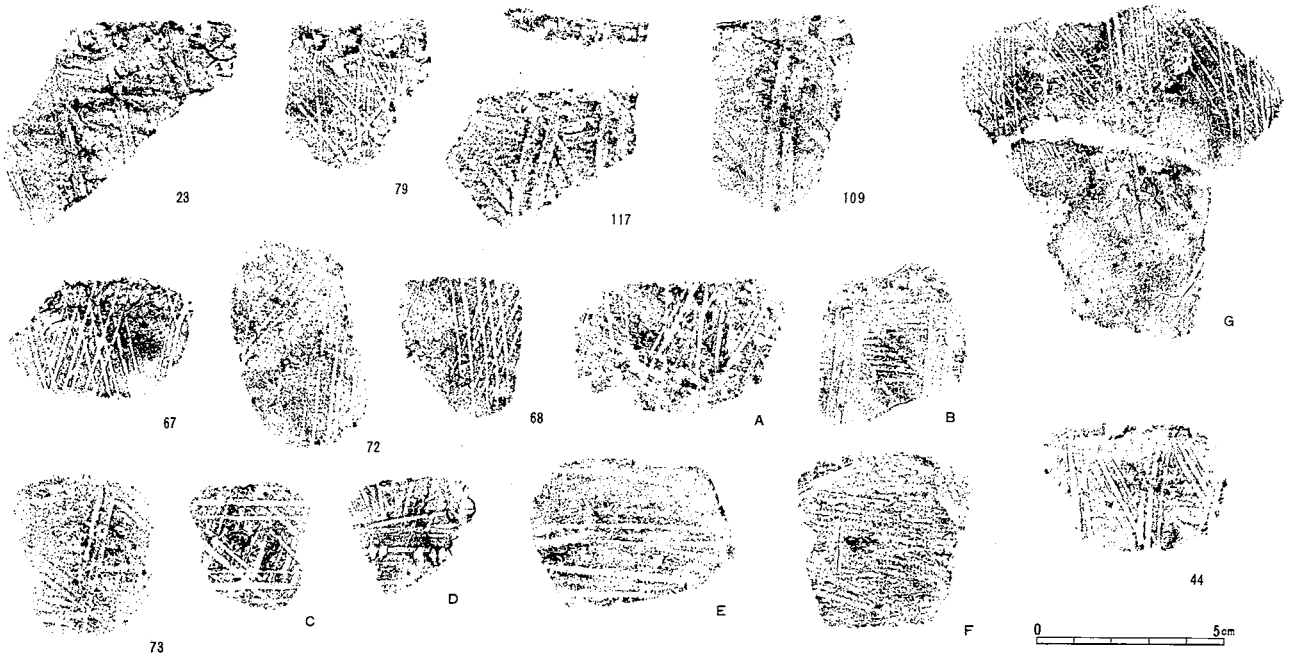


図11　土壙48出土土器拓影図（１：２）

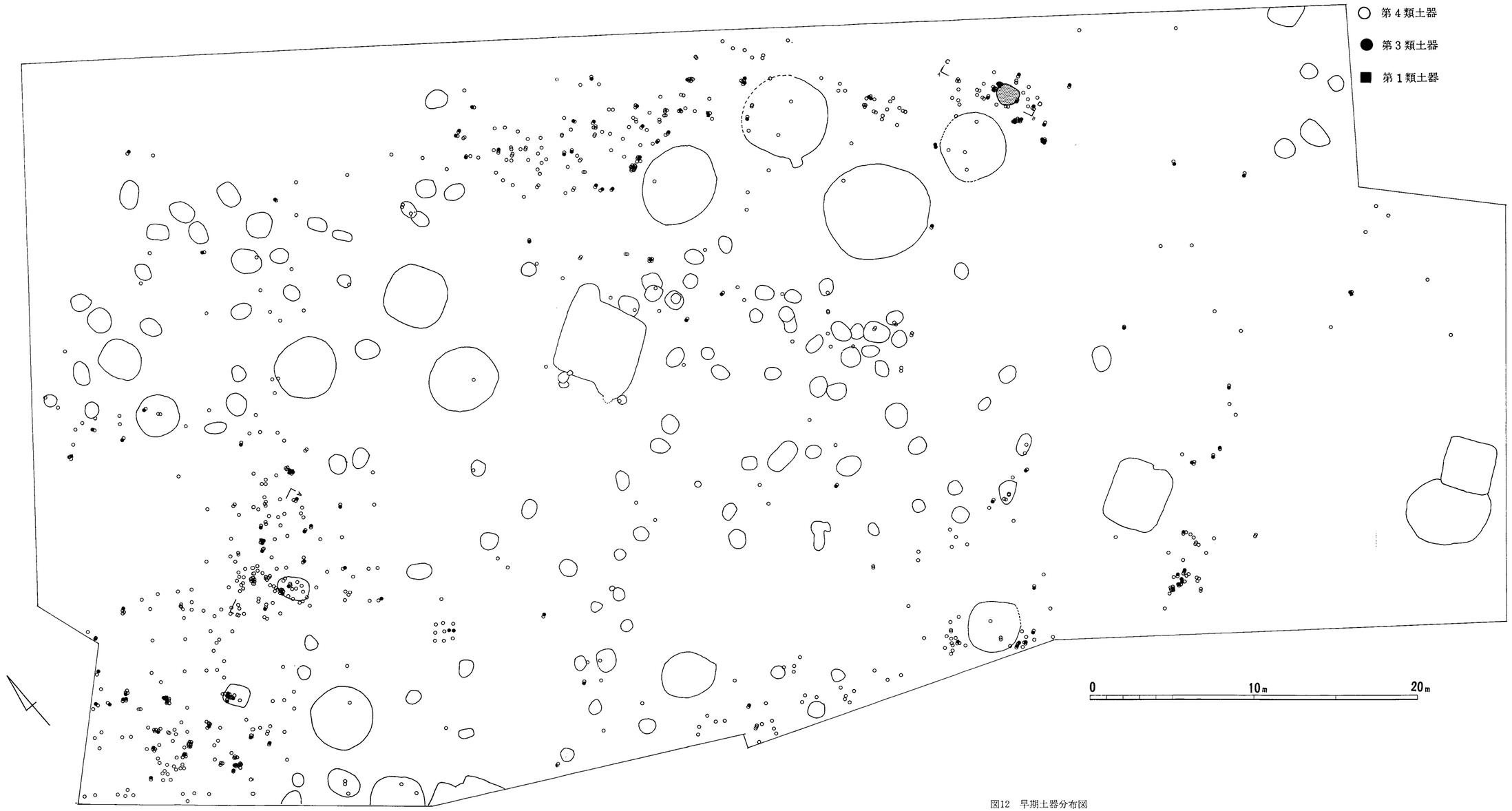


図12　早期土器分布図

他内外面に指によるオサエなど観察できる部分がある。

施文具は４種類と思われる。沈線と刺突にはヘラ状工具と、先端を割ったヘラ状工具が用いられ、刺突には後者が主として使用される。口縁端部のきざみは、鋭いヘラ状工具である。隆帯の頂部もヘラ状工具で刺突されている。隆帯の裾の刺突はヘラ状工具と先端を割ったヘラ状工具の両者である。条痕の工具は確認できない。繊維、雲母が多量に混入されている他、石英など砂粒も多い。焼成はあまり良好でなく色調は茶褐色を主体とするが暗茶褐色の部分もある。

ｂ土壙48（図－９、図－37）

調査区内の西南側に検出された土壙で、縄文時代中期の住居址、９号住居址に近い位置である。住居址の調査終了後周辺の確認を行った際、中期の住居址の切り込み面よりも下のレベルで検出された。礫混入の茶褐色土内に切り込まれた土壙で、土器の出土の大半は検出面よりも上、10 cm～25 cmの範囲に集中し、平面的には土壙を中心にその周辺から出土した（図 12 ）。確実に土壙内出土の土器は 10 点である。土壙内の層序は図 37 の通りで、３層に区分され、第Ｉ層は黒色土、第II層暗褐色土、第III層は礫、ローム混入褐色土である。第III層出土の土器は、第４類土器の小破片である。第II層出土の土器は 44、67、68、72、他は第１層および上層出土である（図 9 、および図 11 ）。

他に層位的に出土状態がとらえられたのは、B-20 地点（図 10 、および図 12 のA-Aライン）から出土した土器である。層序は竪穴２、土壙 48 とほぼ同じ状態を示している。図示できたのは、６、23、26、55、60、97、101、102、122、135 で暗褐色土内出土である。

竪穴２、土壙 48、およびB-20 地点付近から出土した土器の組み合わせは、本土器群全体のあり方とほぼ一致する。各類の共伴関係についてみると、第３類と第４類土器は確実に共伴し、第１類、第２類土器と、第３類、第４類土器の共伴関係は６の楕円埋型文１点が伴出しているが層位的な裏付けは不確実である。平面的な分布は一致する傾向にある（図 12 ）。

２）土器の分類と観察（図16～20、図版18～24）

本遺跡から出土した縄文時代早期の土器片は、968 片余りである。この内器形の判明する土器２点、口縁部破片 92 片、底部４片、他は胴部の破片と思われる。文様構成から第１類～第４類に分類される。

第１類土器（図16、図版18）

ⓐはいわゆる相木式の土器で３片出土している。いずれも繊維と雲母の混入がある。１、３は口縁部の破片で、内面に山形の押型文が施文される。１は口縁部外面に幅広の半截竹管状工具による結節沈線が横位に施文され、沈線間の凸部に棒状工具による連続押圧が施され、胴部は半截竹管状工具による結節沈線がみられる。口縁部はやや外反し、丸頭状の形態が多い。３は幅広の半截竹管状工具による水平方向の沈線が口縁部に施文され、沈線間の凸部に棒状工具による連続押圧がされている。口縁端部にもわずかに押圧状のきざみ目がある。２は胴部の破片であるが、内面に条痕状の調整がわずかに見える。外面は水平および斜方向の幅広の半截竹管状工具による結節沈線があり一部交差する。

ⓑは楕円の押型文の一群で５片出土している。繊維の混入は認められないが、雲母は少量ある。4、6、7は少し大きめの楕円である。７は楕円の施文方向が縦方向と斜方向と異なる。５、８は米粒状である。

ⓒは山形文で、口縁端部にも山形の押型文が付けられている。内面にはヘラ削りの痕跡を残している。雲母の混入の特に多い土器である。

第２類土器（図 16 、図版 18 ）は縄文を持つ土器である。Rの縄文で、焼成良好の土器である。

第３類土器は、口縁端部に刺突を持つ、沈線文系土器で、内外面に条痕を残している土器が多く第４類土器との関連性を示している。外面に付けられた条痕は、沈線を引くにあたって、擦消しているが、

完全には擦消されないで、いわゆる地文状に残された土器もある。特にbに分類した土器に多い。この手法は本土器群の特色の1つである。また刺突のみの土器も本類に含めた。ⓐ～ⓒに分類される。第3類土器は188片出土している。

ⓐは太めの沈線と刺突の組み合わせを中心とする類である（図17-20～41、　図版　20 ）主として直線的な文様を主体としている。ⓑに分類した類とも関連している。一般に器厚は10㎜～12㎜で厚い。20、23は鋸歯文状の文様構成の土器で、先端を割ったヘラ状工具により施文される。20は小波状口縁で、内面は繊維束と思われる工具による横方向の擦痕があり、繊維の混入が多い。23は口縁部がやや薄くなる形態で、内外面に横方向の条痕が観察できる。21、22、26は綾杉文状の土器でヘラ状工具による施文がされ、内面に横方向の条痕がある。少量の繊維の混入が見えるが雲母はない。22はやや厚手で口縁端部にわずかに刺突がある。28、32～39も綾杉文状を呈するが、3㎜幅の棒状工具による沈線である。この類の土器には繊維と雲母の混入が特に多い。31は格子目文を形成するが細い棒状工具で沈線が引かれ、別のやや太めの棒状工具による刺突がされている。繊維、雲母の混入が多い。25は棒状工具による平行沈線と、これを切っての曲線が引かれ、沈線間に刺突されている。40、41は同一の破片である。太い棒状工具による曲線文で繊維の混入は少く、雲母は認められない。

ⓑは細めの沈線と竹管または茎状工具の刺突を主体とする土器で（図 18 、図版20 ）器厚は5㎜～8㎜で、aと比較するとやや薄手であり、繊維、雲母の混入は少ない。内外面に横方向の条痕があり、特に外面は地文風になる土器（42～73、76～84、86～93）と、条痕を擦消している土器（74、75、85）がある。74、75、85、89にのみ雲母の混入がある。

42、66～73は細い棒状工具による小さな格子目状の沈線を引き、全体的には菱形の文様構成となるものである。口縁部の破片は42のみで半截竹管状工具による刺突がある。43～46、48、51、52、78、89、93は、先端を割ったヘラ状工具による鋸歯文状の沈線と刺突の施文があり、20、23に類似しているが繊維の混入は少く薄手である。47、53～55、60～62は先端を割ったヘラ状工具による菱形の沈線と、茎状工具による刺突とをもつ土器である。茎状工具の原体は不明で、47、53、55は直径5㎜、54、60、62は6㎜、61は8㎜である。57、59は同一個体で、1㎜以下の棒状工具による縦方向の沈線と、直径3㎜ほどの竹管状工具による刺突された土器である。58、64、65はわずかに縦方向の沈線が付き、2㎜ほどの細い竹管状工具による刺突を持つ土器である。74、75、85は細い棒状工具によって、斜方向と横方向の直線的な沈線が交差し、三角形状の文様構成となり、刺突は、沈線によって区画された三角形内に2㎜ほどの竹管状工具による連続する刺突がされている。刺突は浅く半截竹管状工具による刺突と同じ効果を示している。63、80、92は先端を割ったヘラ状工具による曲線状の沈線と刺突の施文がある。63は竹管状工具によるものである。82は棒状工具による縦方向の沈線と刺突である。

ⓒは刺突を中心とした土器で（図19 、図版 22 ）多様な工具で刺突されている。器厚は7㎜～9㎜である。49、50は2㎜ほどの竹管状工具で、下から上へ刺突されている。76、77、81、87、88は先端を割ったヘラ状工具による刺突で、76～77は横方向の条痕が内外面につく。83～84は細い棒状工具の刺突、86は3本単位に先端を割ったヘラ状工具か、櫛状工具による縦方向の沈線と刺突の組み合わせである。

ⓓは、口縁端部に、刺突、きざみ目を持つ土器を一括した(図19)。 内外面に条痕を持つものが多く、外面はいわゆる地文風である。胎土に繊維、雲母の混入が多い。94はヘラ状工具による縦方向の平行する沈線ときざみ、95は口縁端部に帯状の粘土を貼り付け、その上にヘラ状工具によるきざみ目を入れている土器である。96～98は半截竹管状工具による平行沈線ときざみ目の施文が施されている。99は櫛状工具による縦方向の条痕をもつ土器で、同一工具による刺突がある。100も櫛状工具による菱形のモチーフの沈線ときざみ目が施されている。102、105～106は条痕の地文に、先端を割ったヘラ状工具による直線状の沈線を

引いた土器である。102、106は同一工具によるきざみ目、105は５㎜ほどの竹管状工具の刺突がある。108は２㎜ほどの棒状工具による施文がされ、外面にススが付着している。109、117は幅８㎜ほどの幅広のヘラ状工具による菱形の沈線と刺突で構成され、口縁は外削ぎ状である。103～104は先端を割ったヘラ状工具による刺突ときざみで、雲母の混入が多い。107は、５㎜幅のヘラ状工具刺突のみの施文ときざみ目がされている。

ⓔは隆帯を持つ土器を一括した（図－13～16、図版18）。竪穴２出土の土器（図８－１）も隆帯を持つ土器でこの分類に入る。（詳細は竪穴２の項参照）隆帯の形態にはバラエティーがあるが、いずれも縦位の貼り付け隆帯である。１は隆帯を付けた後、裾を刺突でおさえ、隆帯の頂部にも連続した刺突を加えた土器である。13は縦位の低い隆帯で、隆帯上に棒状工具による「ハ」の字状の刺突を加えた土器である。14～16は隆帯の貼り付け後ナデを加えた土器で、16の口縁部にヘラ状工具の刺突がある。

第４類土器は、条痕文系の土器である。（図20、図版21）条痕の方向、位置、整形痕などによりⓐ～ⓔに分類される。繊維の混入は一般的で、雲母は混入される土器とされない土器がありその比は前者が66％である。器形の判明するのは図８－２のみである。口縁部の破片は30点ほど出土している。この時期の有文土器では、胴下半は文様は少なく、本分類以外の第３類土器の胴部破片も混入している可能性がある。小破片が多く、その大半は器形内の位置も判別できないものも多く、ⓐ～ⓔに分類された土器の内でも同一個体の土器の場合もあり得る。

ⓐは外面に斜方向、または縦方向の条痕を付け、口縁部に刺突を加えた土器で、器厚は８㎜～９㎜である。繊維、雲母の混入が多い（図　－16　）。17、19は同一個体の土器で幅６㎜ほどのヘラ状工具による条痕と刺突を持つ土器で、内面にも外面と同一工具によると思われる横方向の条痕が付けられている。

18は縦方向の条痕で口縁部には棒状工具による刺突がある。内面には条痕はなくナデ調整されている。

ⓑは内外面に条痕が付けられた土器で、外面の条痕の方向によってさらに細分されるものである。170片ほどがある。２、（図８－２）および111、114～116、118～128は横方向の条痕が内外面に付けられた土器である。２は、F-19地区にまとまって検出された土器で、口縁部とこれに接続される胴部上半の破片６点が接合した。小破状口縁で、口縁端部はわずかに肥厚する傾向にある。器表面は風化して調整痕は明確でない。胎土は繊維、雲母、長石、石英、褐鉄鉱などが混入されている。焼成はあまり良好でなく、色調は暗茶褐色が主体で暗赤褐色の部分もある。口縁部での推定の直径は29㎝である。

114、121の口縁端部には、先端を割ったヘラ状工具による刺突がある。110、112、132は横方向の条痕を切って縦方向の条痕が観察され、文様と同じ効果をみせている。113、133は斜方向の条痕が交差している土器である。他は胴部の破片で、条痕の方向は、縦、横、斜[註]方向で一定していない。

ⓒは外面にのみ条痕があり、内面は擦痕状で繊維、雲母の混入の多い土器で、150片ほど出土している。

115、116、129～131、133、134は、細い横方向の条痕である。胴部以下の破片はｂ同様一定方向の条痕ではないが、口縁部の破片は横方向が多い。130は、ヘラ状工具による沈線が引かれている。

ⓓは内面にのみ条痕が付けられた土器で、７片ほどがある。口縁部の破片はなく、胴部のみである。

ⓔは無文に近く内外面擦痕状になるものである。条痕の施文後ナデなどによって、条痕が消された土器も含まれている。ⓓと同様口縁部の破片はないが、数量的に最も多く400片ほどある。

底部（図13　－１、２）底部に近いものまで含めて４点出土している。尖底状の丸底に近い形態と思われる。内外面擦痕状である。繊維、雲母の混入が多い。

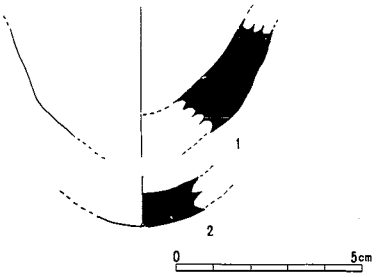


図13　縄文早期土器実測図（１：２）

註　東京都多摩ニュウータウンNo.269遺跡でいう「条痕上の篦描き」

と同じ効果と思われる。

3）石器

縄文時代早期の石器として礫器と特殊磨石をあげたが、特殊磨石はほぼ間違いないにしても、礫器は必ずしもすべてが早期のものとはいいきれない。他の時期・他の時代にも礫器は存在する。しかし本遺跡の場合、それを見分けるのは困難なので、器種のまとまりとして一括して扱った。

① **礫器**（図15、89　図版45）

46点を礫器としたが、その一部は土壙43の北西に集中し（図15）早期の土器の分布と同傾向を示す。残りはＡＹ～ＢＧグリット付近で多く出土したが、まばらな分布である。礫石器（Ａ）と礫核石器（Ｂ）とに分類でき〔橘 1970〕ほぼ同数の出土をみた。**403～410**は礫核石器で、調整は広範囲に及んで自然面を全く残さないものもある（**406**）。しかし大半は多少なりとも自然面を残し、**405・409**は片面が全く加工されていない。刃部形成の際、自然面を上手に利用し、一般に鋭角的な刃部を持つ。**411～415**は礫石器である。刃部以外はほとんど加工されず、自然面が残る。刃部は礫核石器と比べると鈍角的なものが普通である。

② **特殊磨石**（図14、15、89、90　図版46）

特殊磨石は穀擦（摺）石などとも呼ばれているが、「特殊」という呼び方にしても適切ではない。縄文時代早期にのみ広く分布し、しかも他の時期の磨石とは形態が異なる（後述）ので、別に命名すべきであろう。しかし今回は「特殊磨石」という一般的な用語に従った。なお、整理の初段階では他の磨石や凹石などと区別しなかったため、巻末一覧表ではそれらを含めて通し番号をつけている。

細長くてギラギラしたような磨面（機能磨面）を持つ石を特殊磨石と規定できる〔八木 1976〕が、それらは特有な形態を持つようである。図14は特殊磨石の長さ・幅・厚さを表したものであるが、幅が5.9～10.0cmであるのに対して長さは11.5～19.8cm、厚さは4.5～7.8cmにおさまる。特に長さ12.0～16.9cm、幅は6.0～8.8cm、厚さ4.5～6.6cmに集中する傾向が見られる（註１）。すなわち、極端に大きなものも小さなものも無く、幅の２倍くらいの長さと$\frac{3}{4}$倍くらいの厚さを持つことが特殊磨石の形態的特徴といえよう。しかしその横断面形は一定でなく、三角形・四角形・楕円形に大きく分類される。その３者は、三角形のものが27点（24%）とやや少ないにしても、さほど出土数に差は無い（表１）。つまり断面形には特に制約は無いようである。

機能磨面は他面と比較すると新しく見え、のみならず色が異なる場合さえある。また他面よりザラザラしていることが普通である。従って「磨る」ばかりでなく、軽く「敲く」ようにも使用されたと考えられる〔八木 1976〕（註２）。このような機能磨面は０～３面残されている（表１）。最高で３面だが、これは断面三角形のものに限られており、しかも３点しかない（**427**、**432**）。機能磨面の見られる場所はいずれも原材の稜線上である。従って断面三角形の石に３面の機能磨面が残されると六角形に見える。２面あるものは22点（19%）。１面のものが67点と（58%）と圧倒的に多く、これが一般的であろう。機能磨面が無いものもある（**435**）が、前述のような形態のものは機能磨面が無くとも未使用品であると考えたためである。

特殊磨石には機能磨面（Ｂ）だけでなく、調整磨面（Ａ）・凹み（Ｃ）・敲打痕（Ｄ）が残される場合も多い（表２）。Ａ＋Ｂという形が圧倒的に多く、他のＡを含むものも合計すれば111点（96%）となるが、風化していて研磨面とは断定できないものもＡに含めたためで、確たることは言えない。ただ調整磨面が見られないものでも、原石そのものがよく整って滑らかな場合が

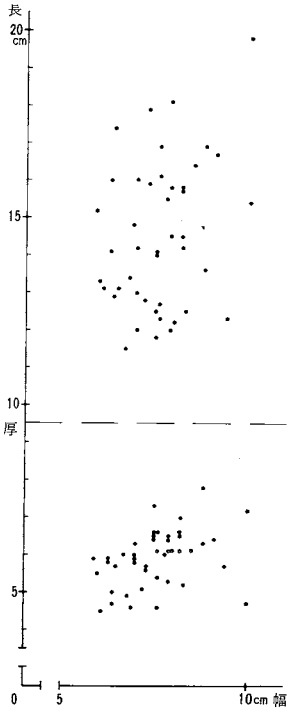


図14 特殊磨石の長さと幅と厚さ

多いことは事実である。凹みを持つもの（436、437、442～444）は18点（15%）ある。敲打痕を持つもの（428、429、433、435、438～443、447）は21点（18%）あるが、特殊磨石の端部に残される場合がほとんどである。ただし、凹みにしろ敲打痕にしろ破損品が多いので、数量的な判断はできない。破損品は、$\frac{1}{3}$以上損失していると思われるものだけでも69点（60%）にのぼる。このうち接合できたものは5点（445～449）と少ない（註3）。しかし30m以上離れて接合した例も2例ある（445、448）（図15）。

断面形	磨面数	個体数	計
三角形	3	3	27
	2	8	
	1	16	
四角形	2	7	38
	1	29	
	0	2	
楕円形	2	7	36
	1	22	
	0	7	
不明	不明	14	
計		115	

表１　特殊磨石の断面形・機能磨面別個体数

痕　跡	個体数
B	3
A＋B	70
B＋C	0
B＋D	1
A＋B＋C	11
A＋B＋D	13
B＋C＋D	0
A＋B＋C＋D	4
A	9
A＋C	1
A＋D	2
A＋C＋D	1
計	115

表２　特殊磨石の痕跡別個体数

特殊磨石が磨る・敲く・潰すなどの作業に用いられたとするならば、その台となったものがあるはずである。中期などに多い球形や石鹸形をした磨石の場合、石皿がセットとして考えられて実際に検出されてもいるが、特殊磨石の場合も石皿が考えられないことはない。ただ機能磨面が非常に細長くのびていることからすると、皿部が深く抉れて曲面を呈している石皿や522のような小形の石皿とはセットになりにくいと思われる。520のような平坦な皿部を持つ石皿ならば適するであろう。本遺跡の場合、石皿の出土はわずかに6点のみで、これに対して特殊磨石115点、他の磨痕を持つ石が250点である。特殊磨石だけに限ってみてもあまりにもアンバランスな数字といえよう。何の加工もされていない平坦な自然石が利用されたのかもしれない〔八木1976、P.45註6〕。

註１　これは小林康男氏の指摘とほぼ合致する〔小林1978、P 146〕。但し、厚さの記述は無い。

註２　ただ本遺跡の場合、機能磨面と他面との稜線には八木氏の指摘するような細かな剥離痕はあまり見られない。

註３　接合したものは合わせて１点と数える。

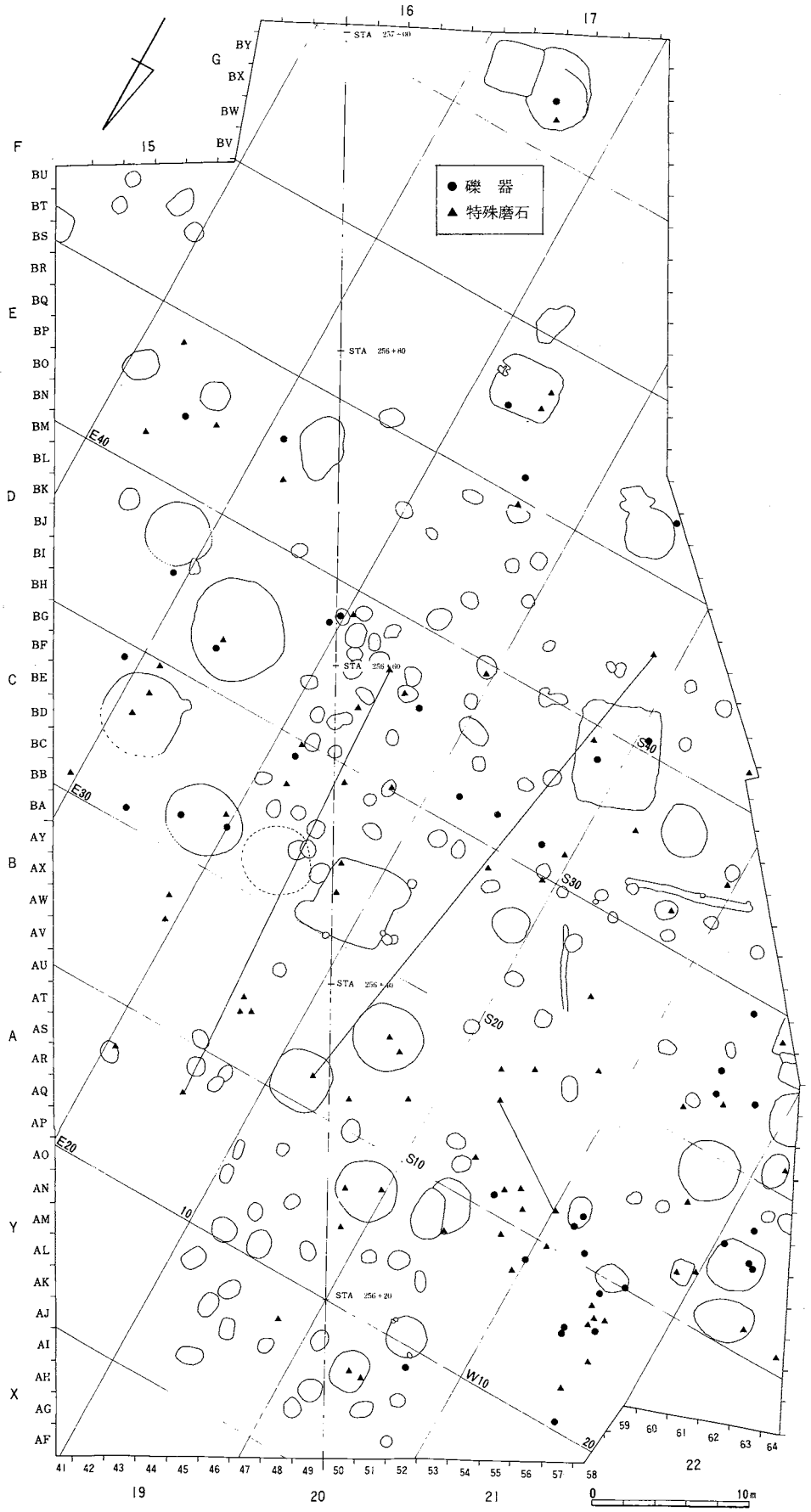


図 15　縄文時代早期石器分布図（1：400）

図16　縄文時代早期土器拓影図　第１、２、３－ｅ，４－ａ類土器　（１：２）

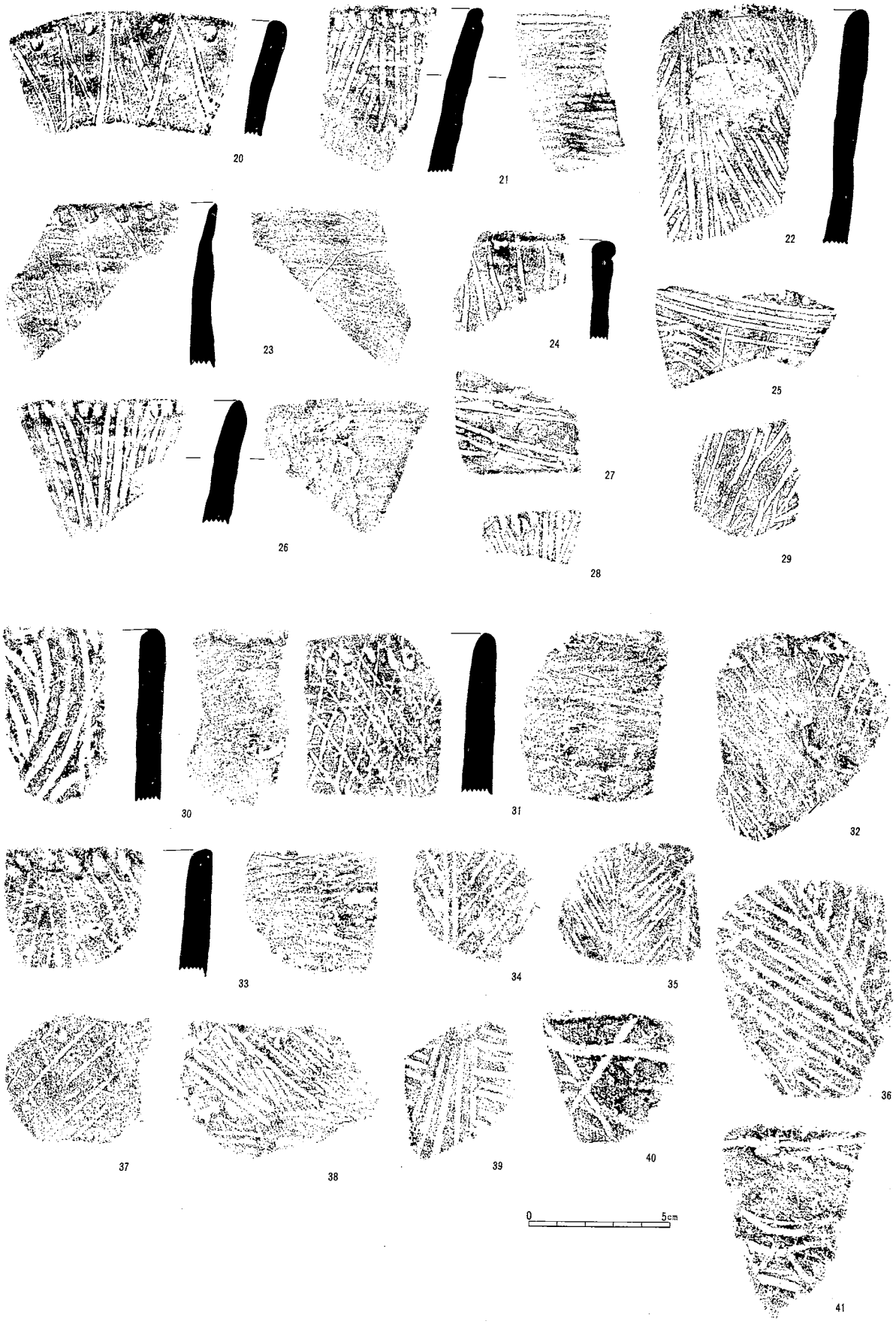


図17　縄文時代早期土器拓影図　第３類ａ土器　（１：２）

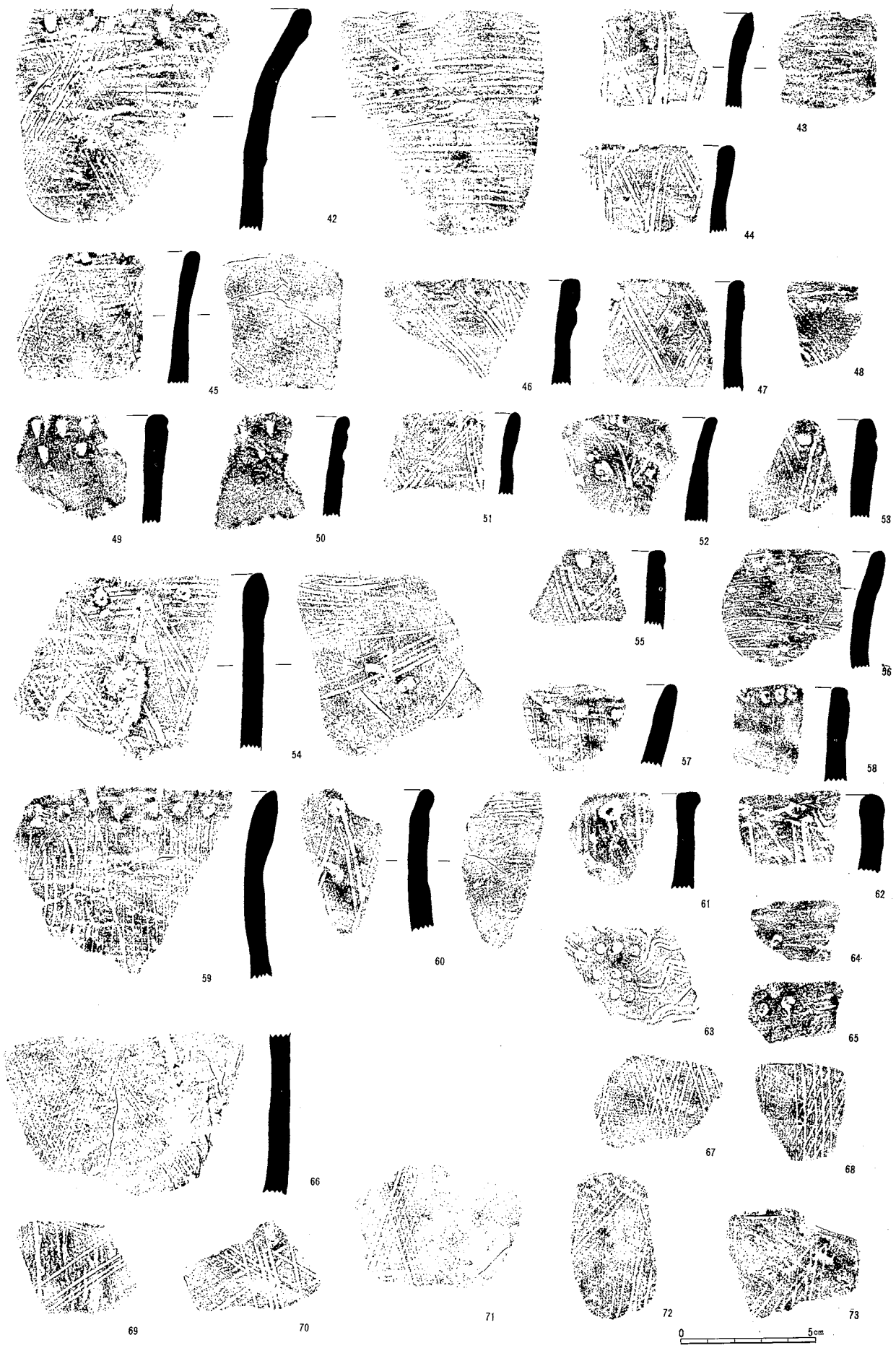


図18　縄文時代早期土器拓影図　第３類ｂ土器　（１：２）

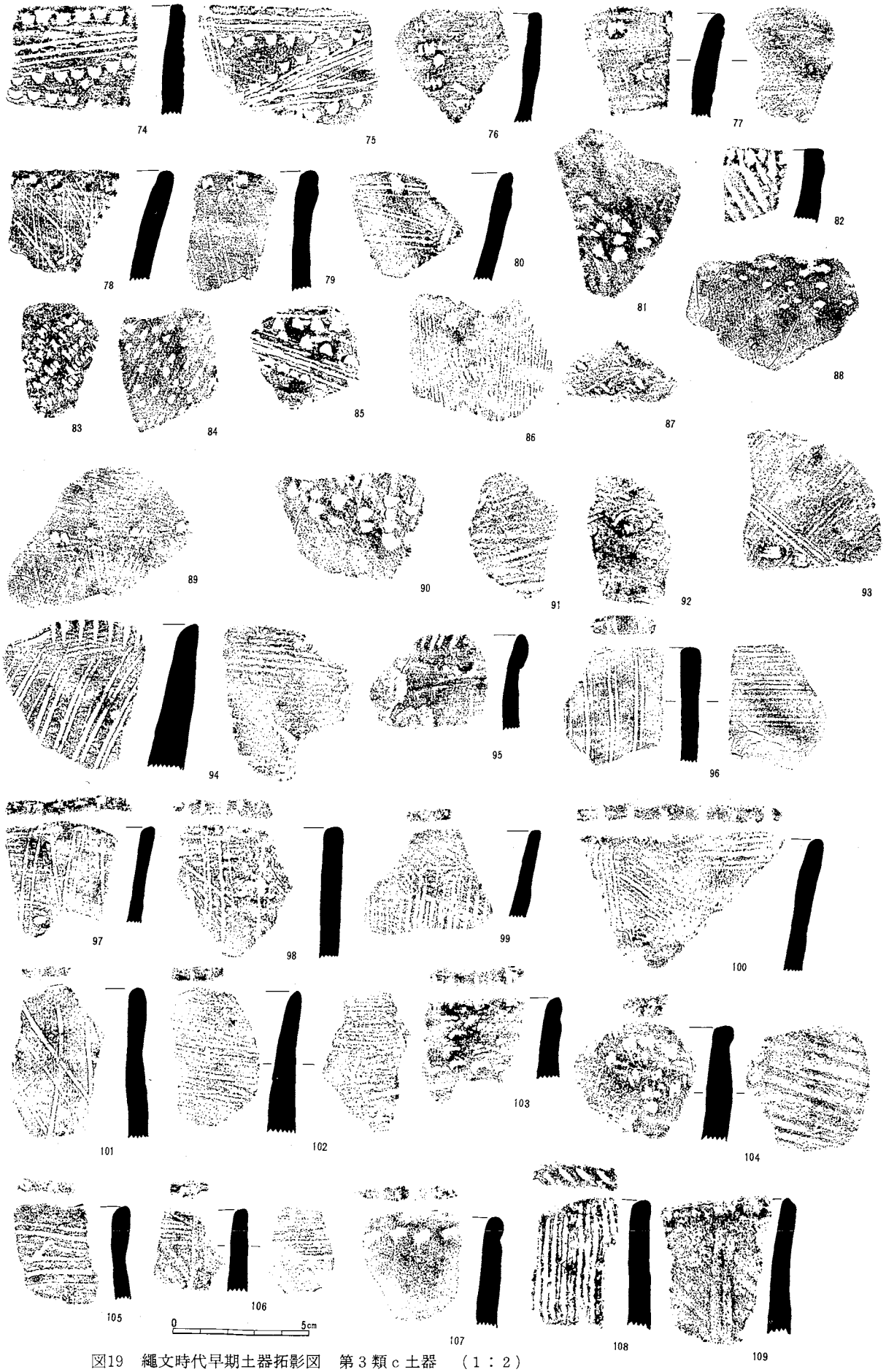


図19　縄文時代早期土器拓影図　第３類ｃ土器　（１：２）

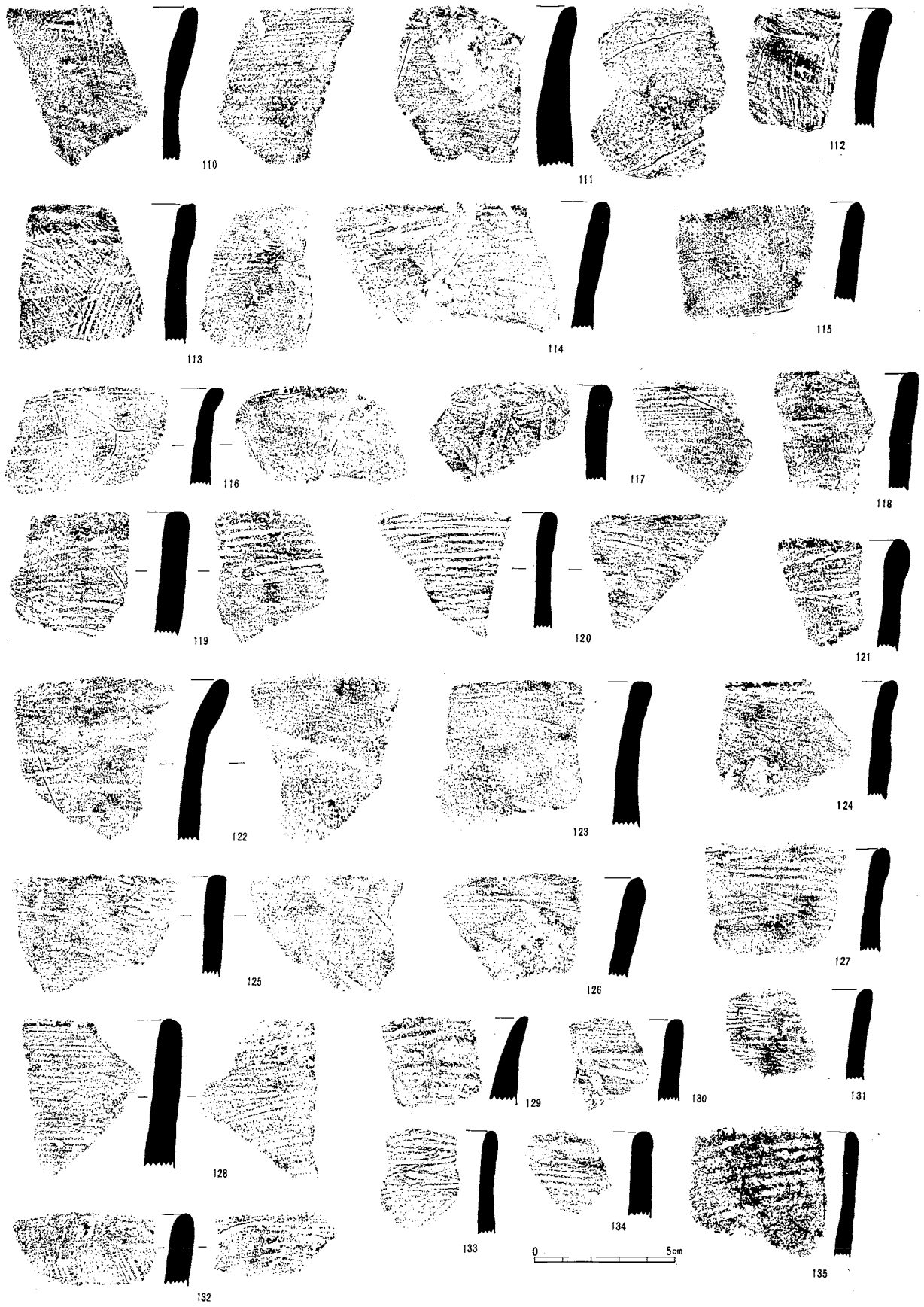


図20　縄文時代早期土器拓影図　第４類土器　（１：２）

7　縄文時代中期の住居址

①第1号住居址（図21、図版3）

蟹出沢に近いテラスに位置し、2号住が近接している。検出面が黒色土中にあるため、西側のプランの検出は困難であった。黒色土および黒褐色土から切りこみ、ローム層に掘りこまれたものである。プランは、やや東西に長い楕円形で、東西4m30cm、南北3m90cmである。壁高は上層からの確認が困難で場所によって差はあるが、東壁で30cm、西壁で15cm前後である。東壁側での観察によると、垂直に近い状態である。埋土は、第I層が黒色土、第II層が黒褐色土で、部分的に第I層が厚く堆積しているところもある。周溝、その他の施設の確認はできなかった。炉は中央部のやや北西寄りにあり、方形の石囲炉である。4枚の板状の石を炉壁に立てるようにして組み合わせたもので、炉底にも板石を敷いている。炉の断面の観察によると、炉底の石の下には焼土混入の茶褐色土が炉を取り囲むように堆積していた。炉の掘り方は石囲炉に比べると大きく、以前にも炉があったことを示している。炉の西側から炉にかけて浅鉢（10）がつぶれた状態で出土した。柱穴は、P_3、P_4の切り合いや炉の状態から考えると、2種類の組み合わせが予想される。P_3と対応するものはP_2、P_1、P_9であり、P_4と対応するものはP_5、P_6、P_{10}、P_7であろう。P_8は柱穴と考えるよりも他の用途を考えたい。P_8の埋土は黒褐色土で土器片を包含し、他の柱穴の状態と異なる。床面は全体に中央に下がっていく状態のローム面であるが、あまり明確でないこと、P_3～P_7の方向にプラン確認の段階で張り出したように見えたこと、現状のプランはロームを掘りこんだ床面で確定したことなどを考えると、南西側に改築前のプランが存在した可能性がある。　土器は炉を中心とする周辺に多く、器形の推定できる土器、中でも第4類の土器は第II層と床面直上から出土した。8、9は床面に接しており、10は炉の上からの出土である。第4類土器が多く、第8類土器がそれに伴うものと思われる。他に第3類土器（3）や第2類土器（7）がある。他の類の土器もあるが、小破片である。改築など考えると、第3類、第4類の時期の住居と考えることが妥当であろう。

②第2号住居址（図22、図版3）

1号住に近接し、北北西への傾斜面に位置している。黒褐色土中に検出されたため、プランはかなり下位になってから確認された。壁高は南側で14cm、北側で6cmである。埋土は、第I層が褐色土であり、壁に接したところはローム粒混入の褐色土になる。プランは隅丸方形に近く、一辺3m70cm前後である。壁は黒褐色土中からの検出のため軟弱で、立ち上がりの状態もよくない。主柱穴と思われるものはP_1～P_6である。いずれも直径40cm前後、深さは23cm～31cmを計り、北側に3本、南側に3本の構成である。他にP_7～P_{11}の5本の柱穴が検出されているが、その組み合わせや前後関係などは不明である。

炉は住居址北西壁寄りに位置し、70cm×60cmの円形に近い地床炉である。床を20cmほどピット状に掘りこみ炉にしたもので、内部には一部ロームブロックを含む焼土および暗褐色土が落ちこむが、特に層序を示しているものではない。住居址北西側に40cm大の板石があり、それに接して50cm大のピットがある。柱穴とは性格を異にした施設であろうが、ピットの性格を示すものは出土しなかった。　床はローム面に形成されているが、部分的に硬い所が残るものの全般的に軟弱である。また、床面は北北西へわずかに傾斜している。

遺物の大部分は第I層の褐色土中から出土した。土器はいずれも小破片で、第1類が約10点、第2類が13点出土している。

住居址の時期はこのどちらかであろうが、決定できる出土状態ではない。

③第3号住居址（図23、図版3）

調査区の北西側に位置し、蟹出沢へ傾斜する肩部にある。黒褐色土中に存在したため、西側壁は床面直

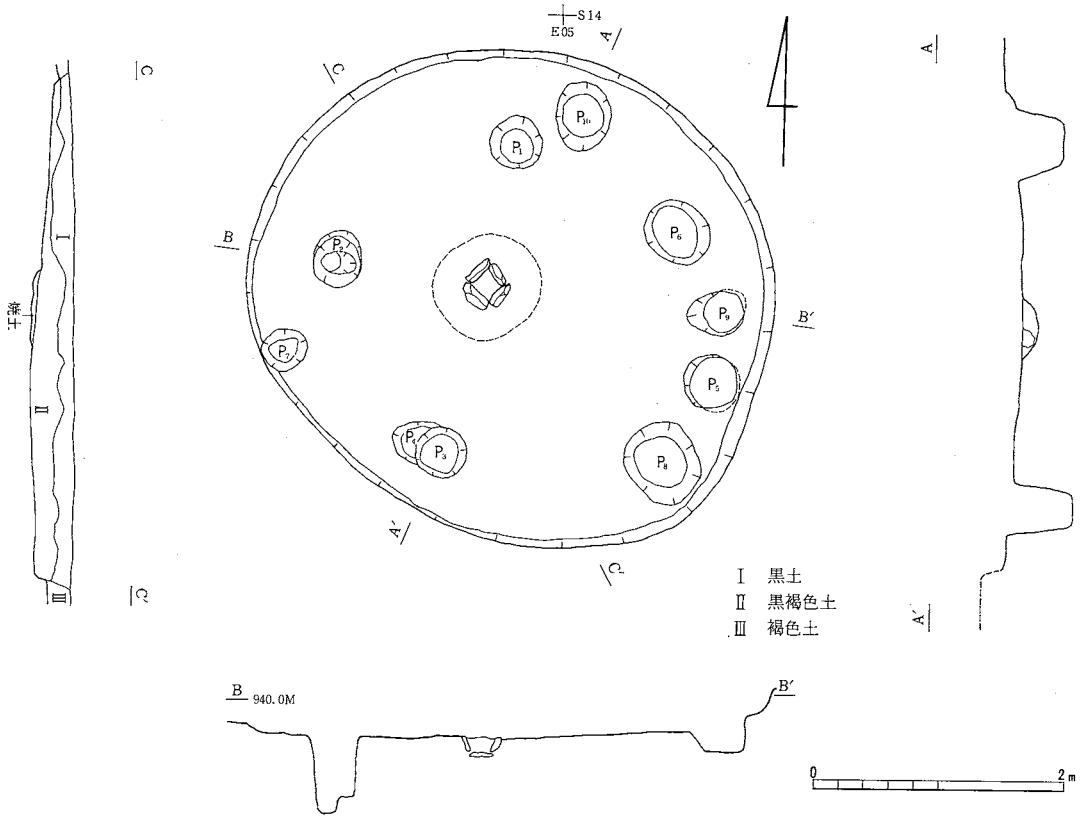


図21　第１号住居址実測図　（１：60）

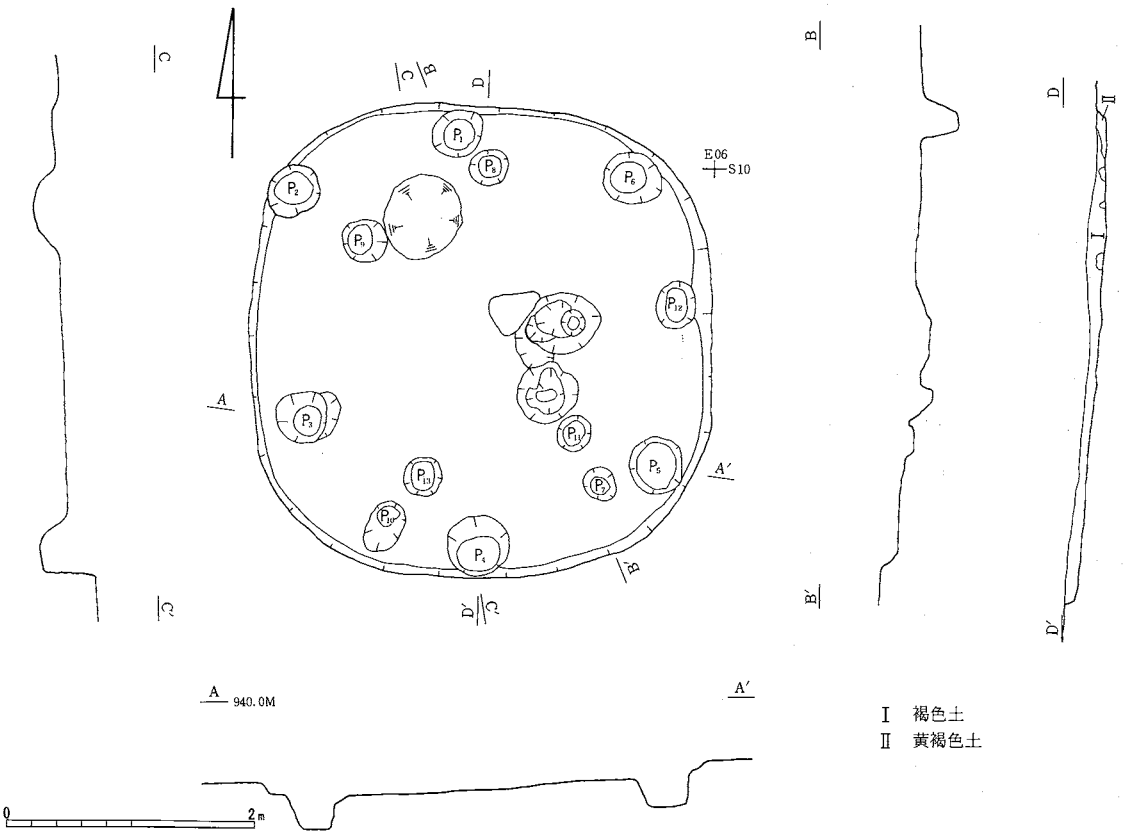


図22　第２号住居址実測図（１：60）

上になってわずかに検出されたのみである。残存状態の良好な東壁側でみると、黒褐色土からローム面に切りこんだ住居址である。南側の埋土の一部は黒色土である。埋土の状態は、断面の観察のための土手を残した位置が東側に寄ってしまったが、第I層黒土、第II層ローム粒混入黒褐色土、第III層ローム粒混入褐色土で、自然埋没の状態を示している。プランは円形で、直径3m90cmほどである。壁の残存状態には差があり北東壁で23cm、北西壁はわずかに1cmである。床面に対してやや傾斜を持っている。柱穴は6本検出され、直径は30cm～50cmと差はあるが、深さは14cm～17cmと差はなく、いずれも浅いものである。柱穴間の間隔はほぼ等しい。炉は、住居址北東側のP_3とP_4の間にある。その構造は、1m×75cmほどの長楕円形の掘り方を掘り、床面のレベルに20cm大の円礫を3個配して炉石としたものと思われる。掘り方内部は深さ25cmほどで、炭粉・焼土混入の黒褐色土がみられた。その他の付属施設は確認されなかった。床はローム面であるがあまり叩いた状態ではなく、やや硬さを感ずる程度である。遺物は土器の小破片が多いが、炉の北東に深鉢（13）がつぶれた状態で出土した。他は第II層、第III層を中心に出土した。平面的には、北西側に多く出土している。土器は第3類と第8類を中心としているが、他に第1類、第2類、第4類の小破片が出土した。構築状態から見て、単一時期の住居と思われ、第3類の時期の年代であろう。

④　**第4号住居址**（図24、図版4）

北寄りの傾斜面となる尾根の一番先端に位置する住居址で、黒褐色土層からローム層に切りこんでいるため検出しにくい状態であった。壁の一部は黒褐色土中に入り、軟弱である。埋土は、炭・焼土混入の黒色土で、炭・焼土の混入がプラン検出の決め手であった。一部ロームブロックを含む埋土はこの層のみで比較的単純な埋まり方を示していた。プランは、約4mの円形で、南北方向がやや狭い。壁は前述したように、黒褐色土中から切りこむため不安定であるが、ほぼ垂直で、壁高は15cm前後である。柱穴は5本検出された。北側に2本、南側に3本で、直径はP_5が40cmの他は34～35cmで、深さは30cm前後である。その他の施設は確認できなかった。床面は、一部硬いところも認められたが概して軟弱であり、木の根による攪乱もみられた。

炉は中央のやや北寄りにある。炉の内部に深鉢（16）の破片と20cm大の平石がみられたが、地床炉である。炉の内部には焼土や炭化物が厚く堆積していた。直径55cm、深さは30cmである。土器は炉の周辺に多く、層位的には第I層の埋土中に多く検出された。比較的各個体ごとまとまった出土状態であった。

出土遺物は各時期にわたるが、いずれも量的には多くない。比較的まとまって出土したのが、第3類と第8類土器である。器形が推定できるのもこれらの類であるが、16は炉の周辺にまとまって出土したもので他の15、17、18は住居址内から出土した。住居址の年代は第3類の時期に求められよう。なお、第9類や第10類など他地域の土器も検出された。

⑤　**第7号住居址**（図25～27、図版5・6）

西側に傾斜する尾根状の部分に位置する。住居址の南北の両側に、第7類土器を主体として持つ9号住と10号住が接近している。本住居址は比較的表土に近い部分から調査され、遺存状態も良好であった。検出面は第II層の赤褐色土で、住居址はこの面から切りこみ、ローム層に達している。埋土は第III層と第IV層であるが、特に第IV層によって住居址の大半は埋められている。第III層はこの上にのった状態である。この埋土のあり方は自然埋没を示すものであろう。第III層と第IV層との関係は、直立したまま出土した20の土器のあり方から推測される。20の底部は第IV層および床面に接しているが、口縁部は第III層に達している。この状態から、後でふれる遺物の出土状態とも関連するが、両層は近い関係にあると思われる。

住居址のプランは同心円状に3つ検出された。一番内側は直径3m50cmほどの円形プランである。次に5cmほどの段差を持って、直径5mほどの円形のプランがある。さらに一番外側に南北6m20cm、東西5m90cmの楕円形のプランがあり、2番目のプランとは約10cm～15cmほどの段差を示している。壁は垂直に

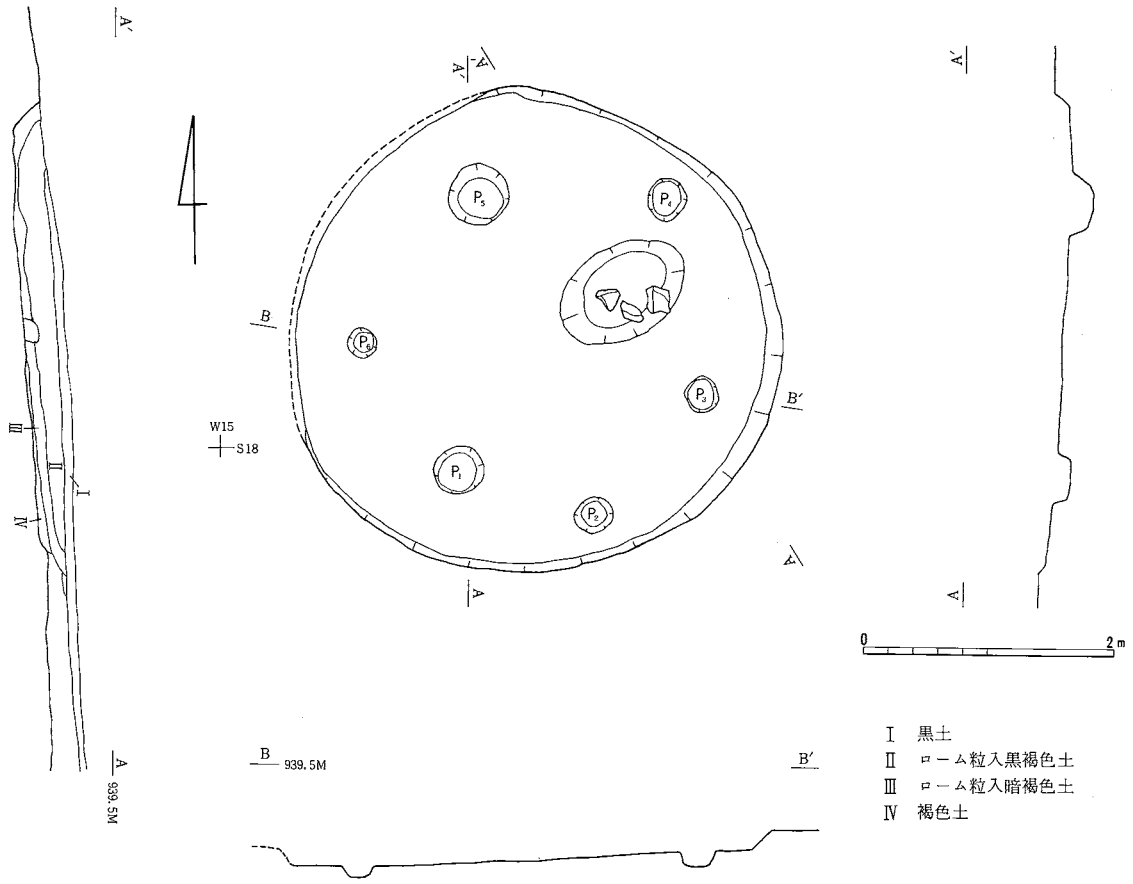


図23　第３号住居址実測図　（１：60）

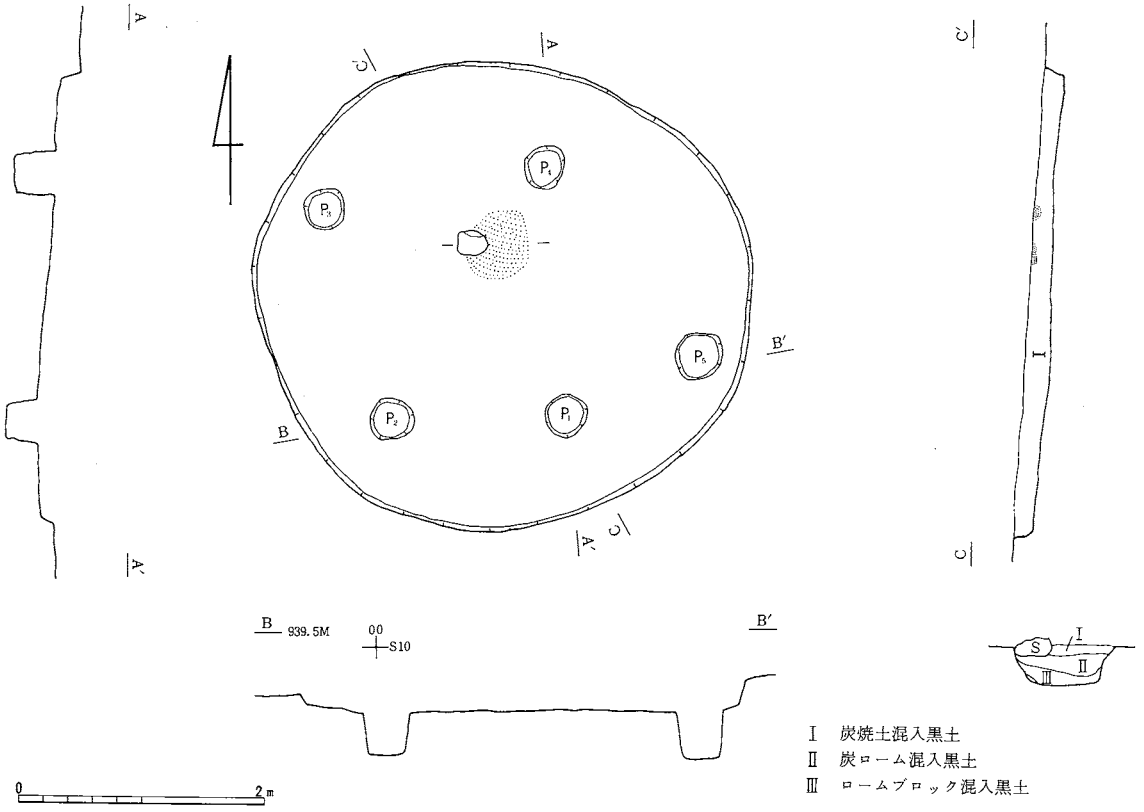


図24　第４号住居址実測図（１：60）

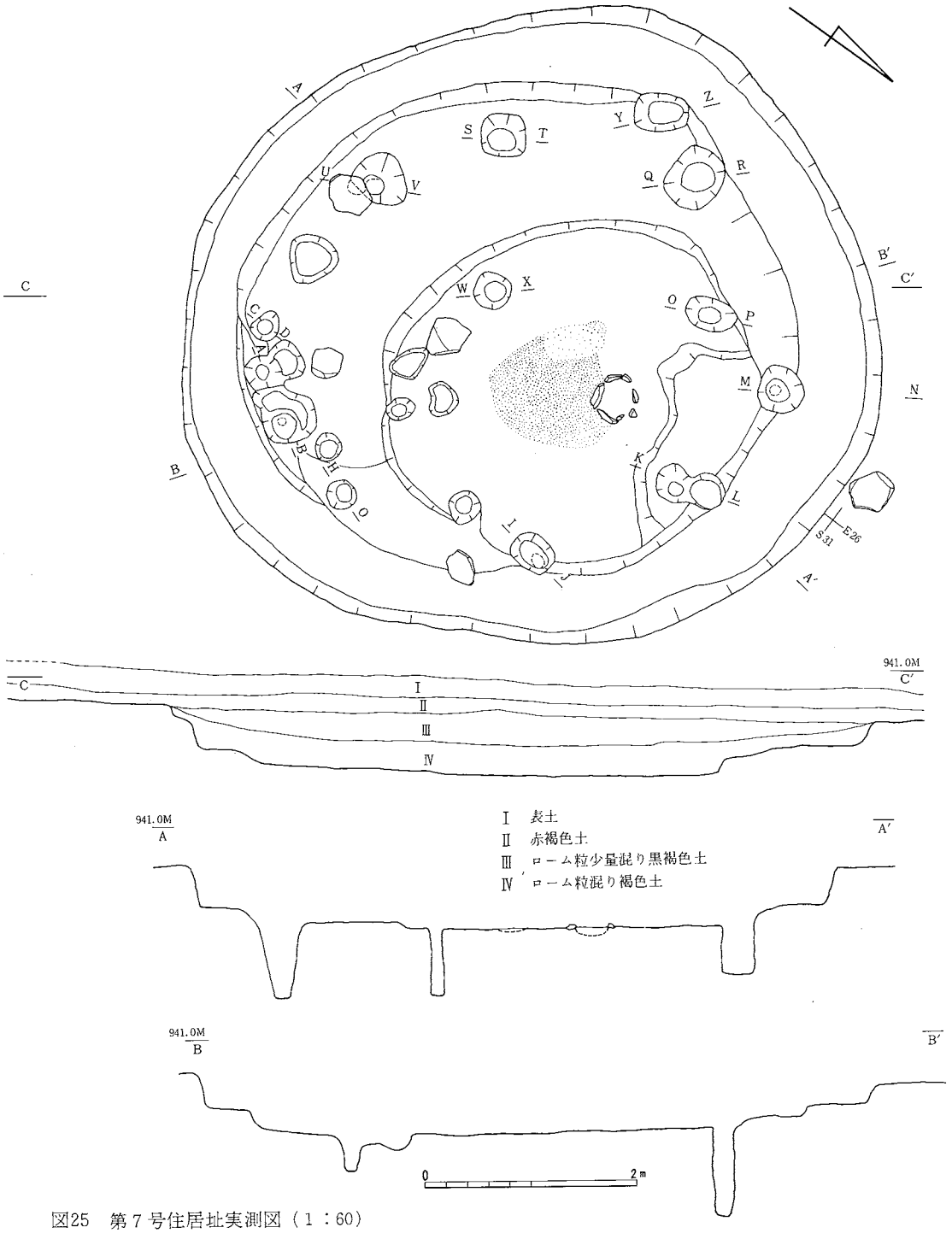


図25　第７号住居址実測図（１：60）

近く、壁高は40cmほどであまり高くない。これらを断面でみると階段状を呈する。一番外側はテラス状となっており、内側に存在する２つの同心円状のプランとは性格が異なるものと思われる。同様な例に諏訪郡富士見町九兵衛尾根第33号住居址がある〔小林公明1975〕。テラス状部分の性格を明らかにする資料は検出されていないが、この部分からは遺物の出土はほとんどなかったことが注意されよう

プランと柱穴との関係は図 27 の通りである。３回の建て替えが行なわれたものと考えられるが、一番新しいプランに伴う柱穴――*a* グループは外側をまわり一部で二重めのプランを切っている。柱痕跡を残した掘り方の大きいもので、A－B、U－V、Y－Z、M－N、I－J、G－H、イ－ロの７本である。次は *a* グループの柱穴よりもやや内側をまわり、柱痕跡はないが掘り方は比較的大きく、埋土の入り方が様々であるもの－b グループ、A－B（Aに近い方）、S－T、Q－R、K－L（Lに近い方）、C－D、E－F

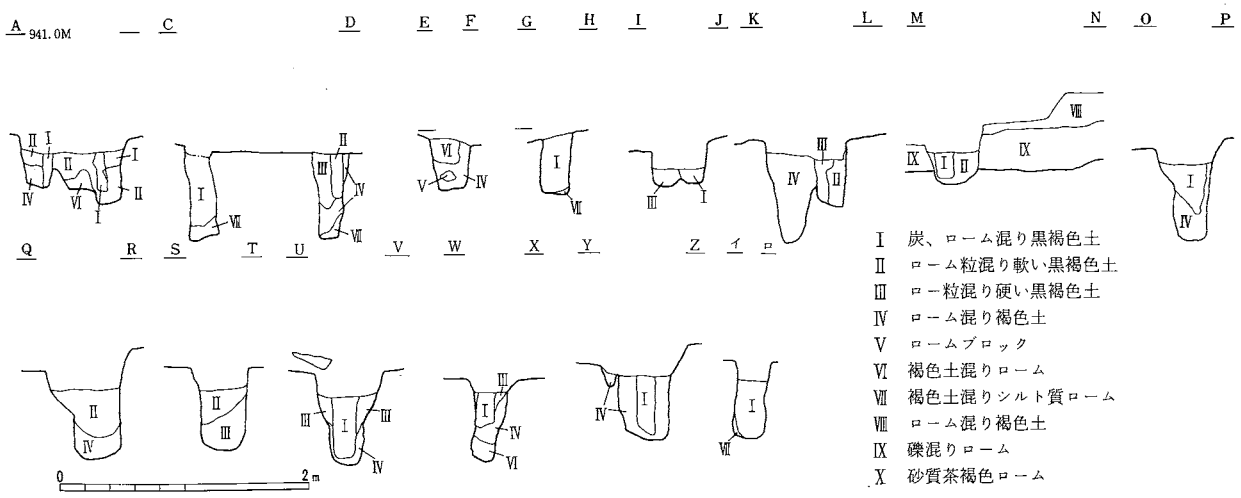


図26　第７号住居址、柱穴断面図（１：60）

の６本。ｃグループは内側のプランをまわるもので、柱穴痕の細いＣ－Ｄ（Ｃに近い方）、Ｗ－Ｘ、Ｏ－Ｐ、Ｋ－Ｌ（Ｋに近い方）の４本である。

次に炉の関係をみると、炉および痕跡（註１）は３ヶ所ある。プランのほぼ中央に、石囲炉、炉の痕跡と思われるピット、さらに炉に切られるようち直径１ｍほどの炭や焼土の混じった褐色土の層があり、この褐色土層→炉の痕跡→石囲炉という順序が考えられる。炉の痕跡は、直径45cmほどの円形ピットで、炉石が抜き取られた跡が明瞭に残っており、その形状から判断すると７枚の板状の石を組み合わせて炉を構成していたものと思われる。またこの周辺は特に焼土の堆積が厚く２～３cmを計る。石囲炉は、直径45cm～50cmの円形で、７枚の板石を掘り方に立てて埋めこむ状態で、炉の深さは25cmである。内部に炭や焼土はみられなかった。前述したような炉の変遷が認められれば、プランと柱穴の組み合わせと合致せるものと考えられる。

遺物の出土状態は、土器20は前述した通りであるが、21は床面直上からⅢ層にかけて分布するものの広がりはせまい。22は20片の細片が接合したもので、床面直上から第Ⅳ層、第Ⅲ層にかけて出土した。23はいわゆるテラス状の部分以外の全域に分布した。その内訳を層位的にみると第Ⅳ層が15片、第Ⅲ層13片、第Ⅱ層２片となっている。26は第Ⅳ層上部から第Ⅲ層にかけてみられ、広がりは住居址中央部にある。25は柱穴Ｔ－Ｏ近くの床面上での出土である。27は住居址中央部に分布し、第Ⅳ層上部から第Ⅲ層にかけて出土した。28は第Ⅲ層と第Ⅱ層の境からの出土であり、29は住居址全体に広がって分布するが、層位的には第Ⅲ層上位に限られる。

第４類に分類される土器は20、22、23、25、第５類は24、第６類は26、第７類は27、28、29、第８類は21である。破片では第９類以外はほとんど出土しているが、特に第７類土器が多い。土器の出土状態と土器の時期区分の組み合わせは複雑な様相を示しており、住居址の改築・拡張・変遷などと関連させ、さらに土器の接合関係・層位などを総合させて考える必要がある。本住居址は、第Ⅳ層でほぼ単純に埋められていること、第４類に区分される土器の大半がこの層を中心としていること、20の土器の出土状態などから第４類土器の時期に自然埋没したものと考えられる。第４類以外の土器は第Ⅳ層上位から主として出土しており、下位にはない。新しい時期の土器は後の流入と考えられる。第７類土器の破片が数多く出土しているが、近接する９号住および10号住が第７類土器の時期であり、これらとの関連と考えたい。

本住居址では３回にわたる住居址の変遷を想定したが、第３類から第４類土器の間の時期で行われたものと思われる。

註１　本住居址では積極的に柱痕跡の確認を行った。結果については本文中に記した通りである。柱痕跡の存在、太さの

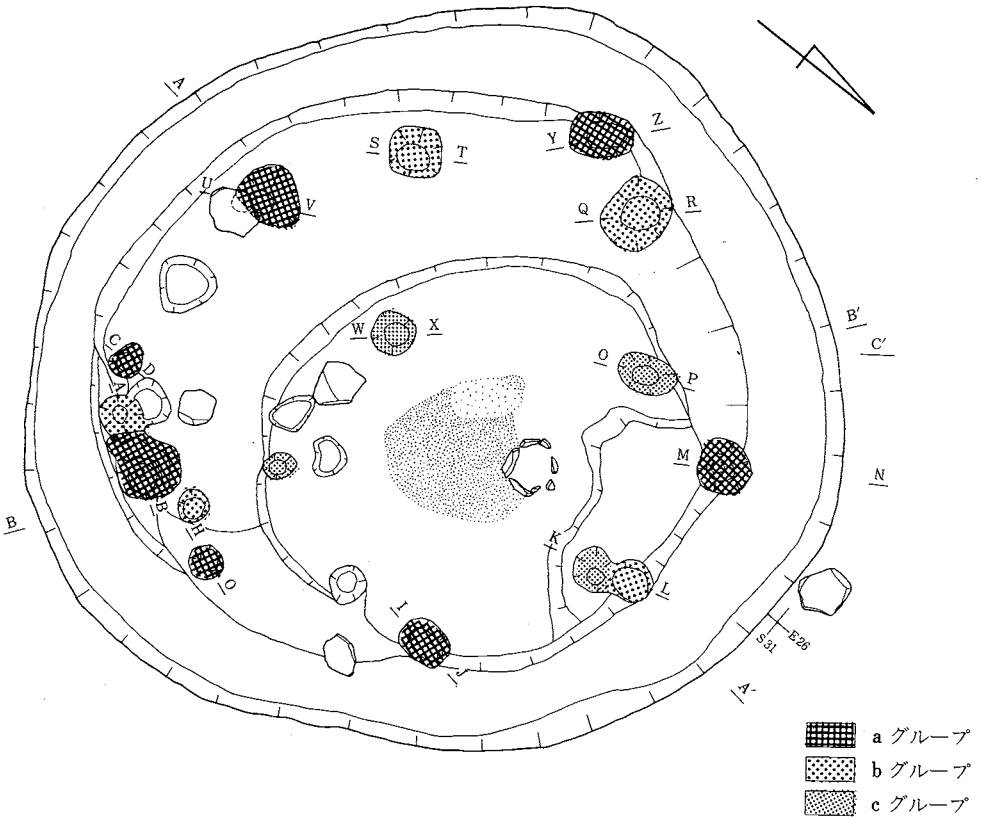


図27　第７号住居址、プランと柱穴との関連図

差異でプランの変遷を確かめることができた。今後類例が増えることにより、住居址の上屋構造の追求の資料となろう。

⑥　**第９号住居址**（図28、図版４）

北東側へのわずかな斜面に立地している住居址で、礫混じりのローム層を掘りこんでいる。一部木の根などによる攪乱のためプランが明確でないところもあるが、ほぼ円形で、直径４ｍ20cm前後である。埋土は壁に近いところが褐色土、他は黒褐色土であるが、区分はあまり明確でない。壁高は最も残存状態の良好な東壁で20cmほどである。柱穴と思われるものは、北東側の壁ぎわのＧ－Ｈのみで後は確認できなかった。Ｇ－Ｈは直径35cm、深さ45cmで、ローム・小礫を混入した褐色土が埋土である。他に小ピットが南側にみられたが、柱穴とするには浅すぎると思われる。炉と柱穴Ｇ－Ｈの間にも直径70cmほどのピットが検出された。埋土は黒色土で、小円礫が３個混入していた。炉は住居址内の北東側に寄っている位置にあり、４枚の板石を組み合わせた石囲炉で、南に開口している。わずかな掘り込みをともなう炉であるが、ほぼ床面上に置かれたものと考えても良い。炉内には10号住同様焼土が認められなかった。床面は、南側から炉の手前あたりにかけては礫混じりのローム、炉から北および西側は暗茶褐色土であるが、あまり硬くない。なお、北西側に１ｍ大の石が壁に接して出土したが、後に入りこんだものと思われる。遺物は炉周辺から多く出土したが、床面上5cmほどのものが多い。実測･写真終了後、床面や柱穴などの確認のために掘り下げてみたが、柱穴の確認はできなかった。

出土した遺物は第７類土器が多く、９号住の時期はこのあたりに求めるのが妥当であろう。他に第２類土器と第10類土器が若干、早期土器片が１点ある。

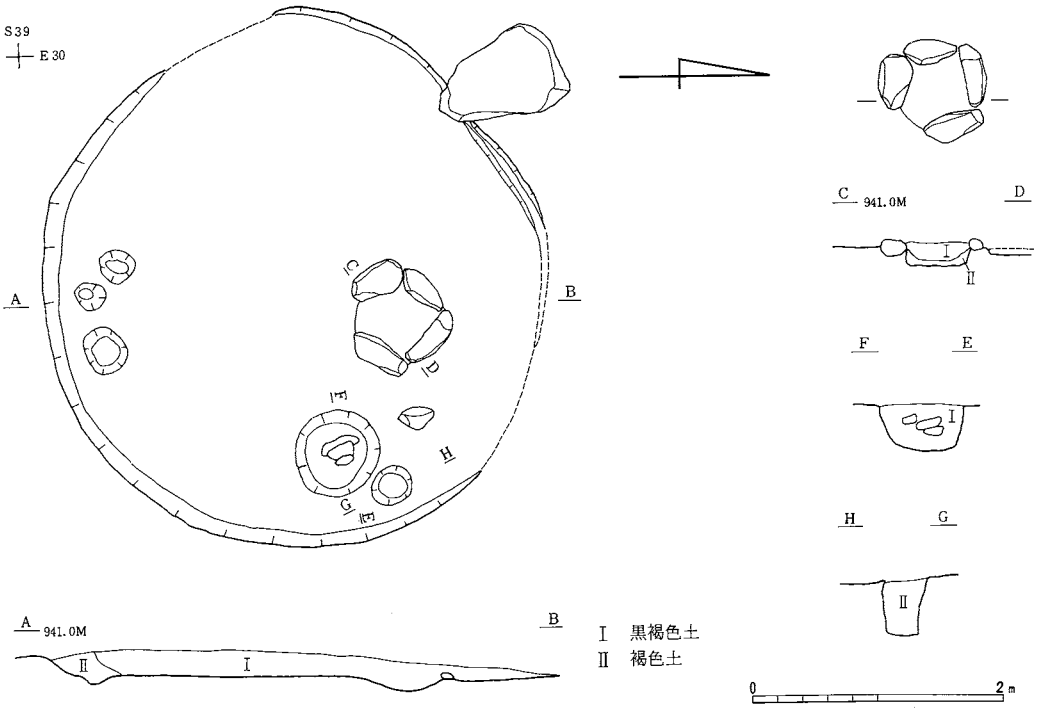


図28　第９号住居址実測図　（１：60）

⑦　**第10号住居址**（図29、図版４）

北東側への傾斜面に築かれた住居址で、掘りこみが浅い。したがって北側のプランは不明である。掘りこみ面は小礫混じりのローム層である。埋土は、壁の近くにローム混じりの黒褐色土がみられる以外は、ほとんどローム粒混じりの黒色土である。住居址の検出状態では、前述したように、北側の壁や床面の一部が不明である。プランはほぼ円形で、直径５ｍ20cmである。西側の一部に張り出し状の方形プランがあるが、床面のレベルとほとんど変わりないところをみると、本住居址に伴うものであろう。壁の状態はほぼ垂直で、遺存の良好な南壁で30cmの高さを計る。周溝は認められなかった。柱穴と思われるものはP_1～P_6である。興味深いのは、これらの柱穴は、P_5が少しはずれるものの、焼土の中央を基点とした半径１ｍ80cmの円周上に等間隔（１ｍ80cm）に並ぶことである。ピットの形態もほぼ同様である。P_5は、炉との関係もあって他の柱穴とややずれるのかも知れない。炉は、板状の平石を６枚すえた長方形の石囲炉で、中央からやや北東より、P_4～P_5の間に位置する。調査時の観察によると、炉の内部には焼けた痕跡は認められなかった。また住居址中央部の床面が焼けていたが、長さ１ｍ20cm、幅50cmの範囲で、深さは３～４cmである。焼土の一部は炉石の下まで続いていたが、炉址としては認めがたい。他に住居址内の施設としてP_7、P_8、P_9のピットがあった。いずれも浅いものである。床面下にＥ－Ｆのピットがあり、この下から小形の無文の深鉢（32）が横転した状態で出土した。埋土はローム粒混じりの黒色土と、その下に、ローム粒混じりの褐色土である。床面は礫混じりロームのためよくない。積極的に本住居址に伴う遺物は少なく、点数的に多い小破片の土器は各時期にまたがるが、炉の形態などから第７類の時期の住居址として良いと思われる。床面下の土器が第６類に属する可能性があることからも妥当であろう。

⑧　**第11号住居址**（図30、図版７）

礫混じりのローム面を掘りこむがあまり深くなく、住居址北東側では黒褐色土中に床面があるため壁の立ちあがりの検出は困難で、一部不明の部分があった。埋土は、第Ⅱ層のローム粒・炭化物混入黒褐色土が大半を占める。プランは楕円形で東西5ｍ10cm、南北4ｍ30cmである。壁は多くの不明確な部分を残して

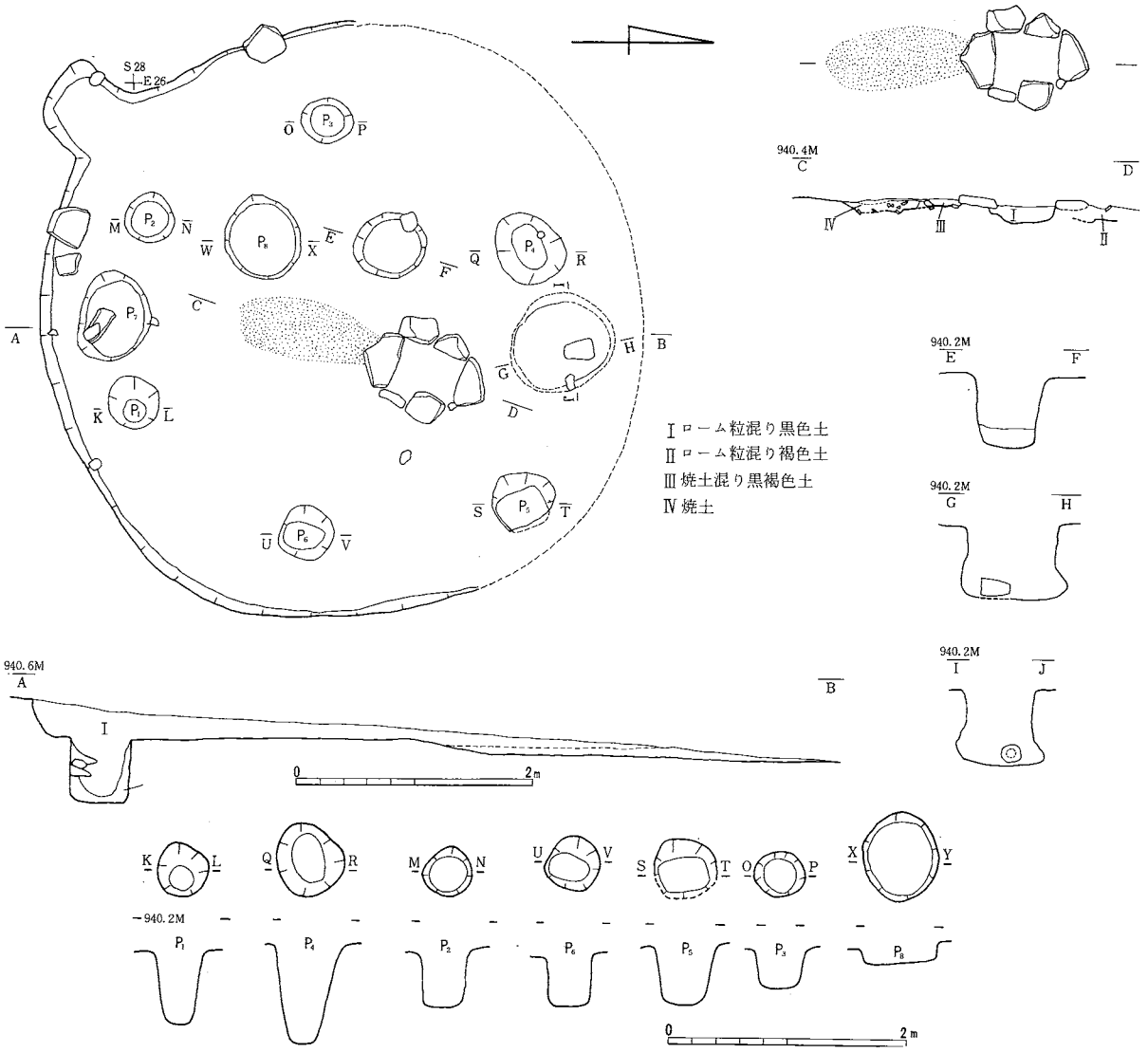


図29　第10号住居址実測図　（1：60）

いるが、最も遺存状態の良好な西側の壁で見ると、床面にほぼ垂直で壁高は約20cmほどであった。住居址全体でピットは7ヶ所検出できた。このうち、柱穴と判断できるものはP_1～P_4までである(図30)。少し詳しくみると、P_1は黒褐色土からローム面まで掘っている。ローム粒混じり黒褐色土の埋土中に、直径12cm～15cmの柱痕跡と思われる黒褐色土が観察された。深さは床面上から40cmほどである。P_2はローム面を掘りこんでいる。埋土は黒褐色土である。ピットの壁沿いに一部ローム混じりの黒褐色土がみられた。断面の観察の結果では、明確な柱痕跡は検出できなかった。P_3はロームを掘り、埋土は黒褐色土である。ピット上部で磨製石斧が2本検出された。柱痕跡は確認されなかった。P_4もロームを掘っている。ピット下部に板石が斜めに入りこみ、この石を境にして上が黒褐色土、下がローム混じりの黒褐色土である。柱根跡は確認できなかった。以上の4本が柱穴と考えられるが、いずれも直径40cm～45cm、深さ40cm～50cmである。P_5はローム層を掘りこんだ浅いもので、ローム混じりの黒褐色土が入る。直径55cm、深さ10cmで台形状の断面を持つ。P_6は袋状のピットである。ピットの内部には、板状の石や円礫などが8個ほど入っていた。埋土は暗褐色土が中心である。ピット上面はロームで貼床されている。P_7は一部に石囲炉がのっていた。従って石囲炉の方がP_7より新しい。袋状ピットの形態を持ち、埋土は黒褐色土で内部には小角礫が入っていた。直径30cm、深さ38cmである。P_1～P_2の間および炉や周辺の床面上には、30cm～40cm大の板石から10cmほどの円礫が散乱していた。

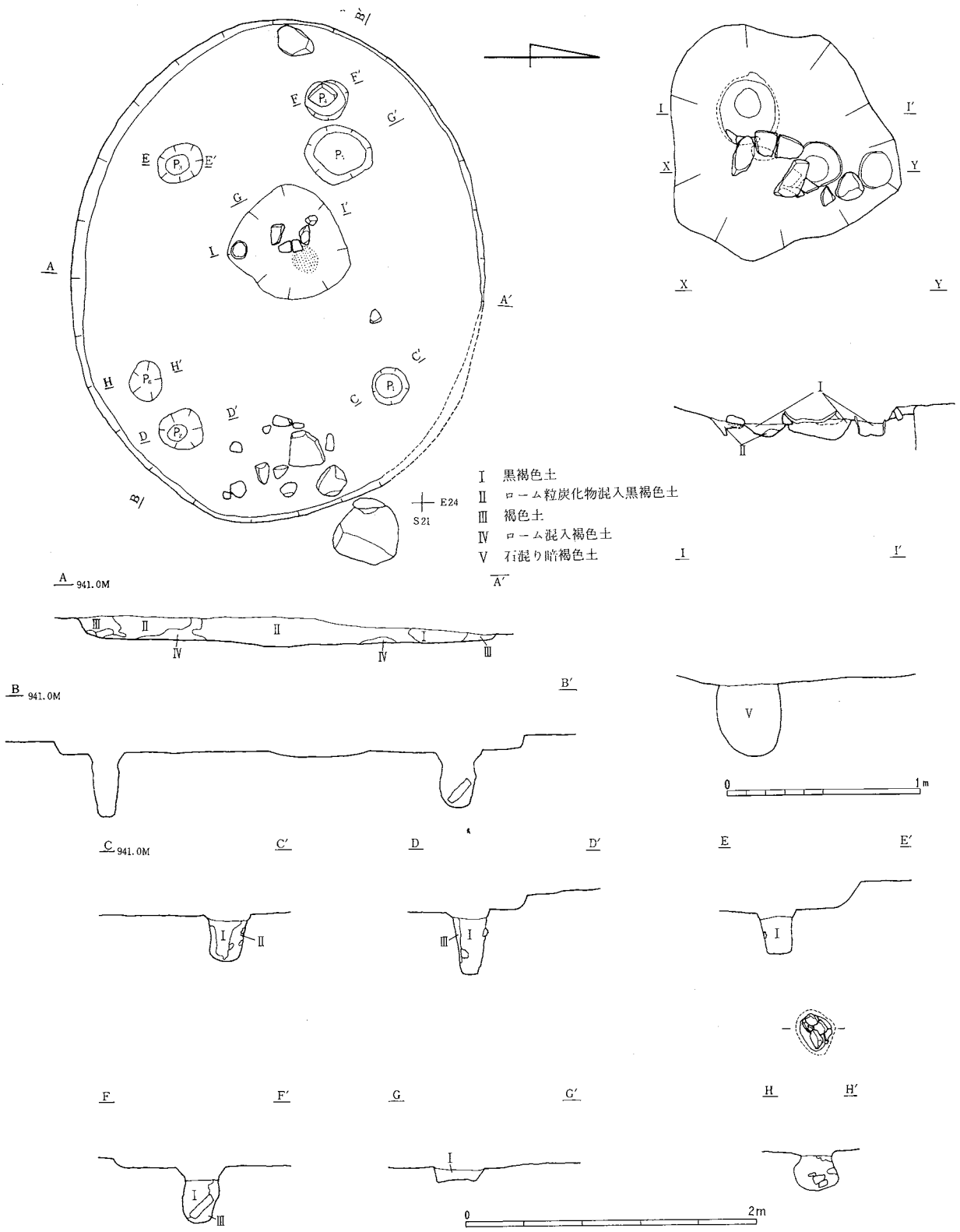


図30　第11号住居址実測図　（1：60）　炉実測図　（1：30）

炉は3基あり、それぞれ形態が異なるが、住居址中央部で接していた。一つは地床炉と考えられ、他の2つの炉の間に焼土が堆積していた。この焼土の下にローム粒混じりの褐色土で埋まる落ちこみがある。二つ目は埋甕炉（34）で、もう一つは石囲炉である。石囲炉は4枚の板石を「コ」の字状に組み合わせたもので、P_7の上に一部がのり、地床炉の一部にものっている。また、これらの炉が集中している住居址中

央部には、1m20cm～30cmほどの摺鉢状のピットが形成されている。このように、切り合い関係や拡張などの痕跡がない住居址に、全く性格の異なる複数の炉が、一部新旧関係を持ちながら形成されるという事実をどう考えるべきであろうか。相互に破壊することなく構築されることは本遺跡の17号住でもみられたところである。

遺物は、住居址中央、炉附近から出土した土器群が中心になる。床面直上の遺物とそれより10cm前後上から検出されたものとに分けられるが、層位的には同じ第II層中で、自然堆積による埋没の状態を示している。

土器には第3類、第4類、第8類、第9類があるが、第4類が主体をなし、埋甕炉（34）とその附近から出土した土器もこれに含まれる。第9類のうち35は第8類と同器形で区画は第5類にも似るなど位置づけはやや不明確である。

なお1点の土製円板が出土した。

⑨　**第16号住居址**（図31、図版7）

調査区の西側中央部、13号住（平安時代後期）に接するように検出された円形の住居址である。礫混じりの褐色土層を掘りこんだものである。埋土は、第I層が黒褐色土、第II層が炭化物・ロームブロック混入茶褐色土、第III層は炭化物・焼土・ローム粒混入褐色土、第IV層は炭化物多量混入褐色土、第V層は炭化物・焼土・ロームブロック混入黄褐色土である。自然埋没の状態を示しているものと思われるが、下部にいくにつれて炭化物が多くなり、床面直上には部材の一部が出土している。プランは、直径約3m20cmほどで、やや楕円形である。壁は垂直で、壁高は検出面から50cm～55cmと深い。柱穴はP_1～P_4の4本で、P_5は補助的なものと思われる。炉は埋甕炉で、住居址のほぼ中央に検出された。遺存状態は良好で、埋甕炉内に炭化物や焼土がみられた他に、その周辺にも焼土が見られた。その他の施設は検出されなかった。床面はロームを用いての貼床で、特に中央部の状態は良好であった。炉周辺、床面直上部に板状の石または角礫が見られた。

遺物は、床面直上のものと第II層・第III層のグループとに分けられるが、土器自体の構成上には変化は見られない。

主体的な土器は第3類土器で、埋甕炉（42）もそれに該当する。埋土の状態から単一の時期であることには問題なく、本住居址の年代は第3類土器に求められよう。

⑩　**第17号住居址**（図32・33、図版8）

調査区の南側に位置する。東側を平安時代後半に位置づけられる15号住に切られている。検出面は礫混じりの褐色土である。現状では楕円形のプランを有するが、住居址南東側にはロームマウンドが形成され、壁・床・柱穴の一部を破壊している。そのため3基の炉と住居址のプランとの関係、柱穴との組み合わせなどの把握はほとんど不可能である。埋土は、ほとんどが黒色土で、壁ぎわにローム粒混入褐色土がみられた。プランは、南北4m50cm、東西4mの楕円形である。壁は、住居址北西部でのみはっきりした状態で検出されたが、他の壁、特に南東壁は不明確な状態であった。壁高は20cmほどで、ほぼ垂直である。北西側の壁ぎわに、拳大の円礫が多数みられた。周溝は西側の半分のみ残存するが、東側はロームマウンドで不明である。ほぼ同じ幅の周溝であるが、深さには差がある。柱穴と思われるピットは18本で、円形に検出された。東側はロームマウンドに切られ、柱穴の底部のみ残存している。深さ形態に多少の差はあるが、埋土はローム粒が混じるEとPを除いて一様に黒色土で、組み合わせの検討材料にはならない。DとKは浅いが他は50cm～60cmの深さを持つ。

炉は3基ありすべて性質が異なるが、同一プラン内に並列している（図33）。最も古い状態を示すのは炉Iの埋甕炉である。内には少量の焼土を混じえた黒色土が入り、炉IIより5cmほど下の位置で炉IIの

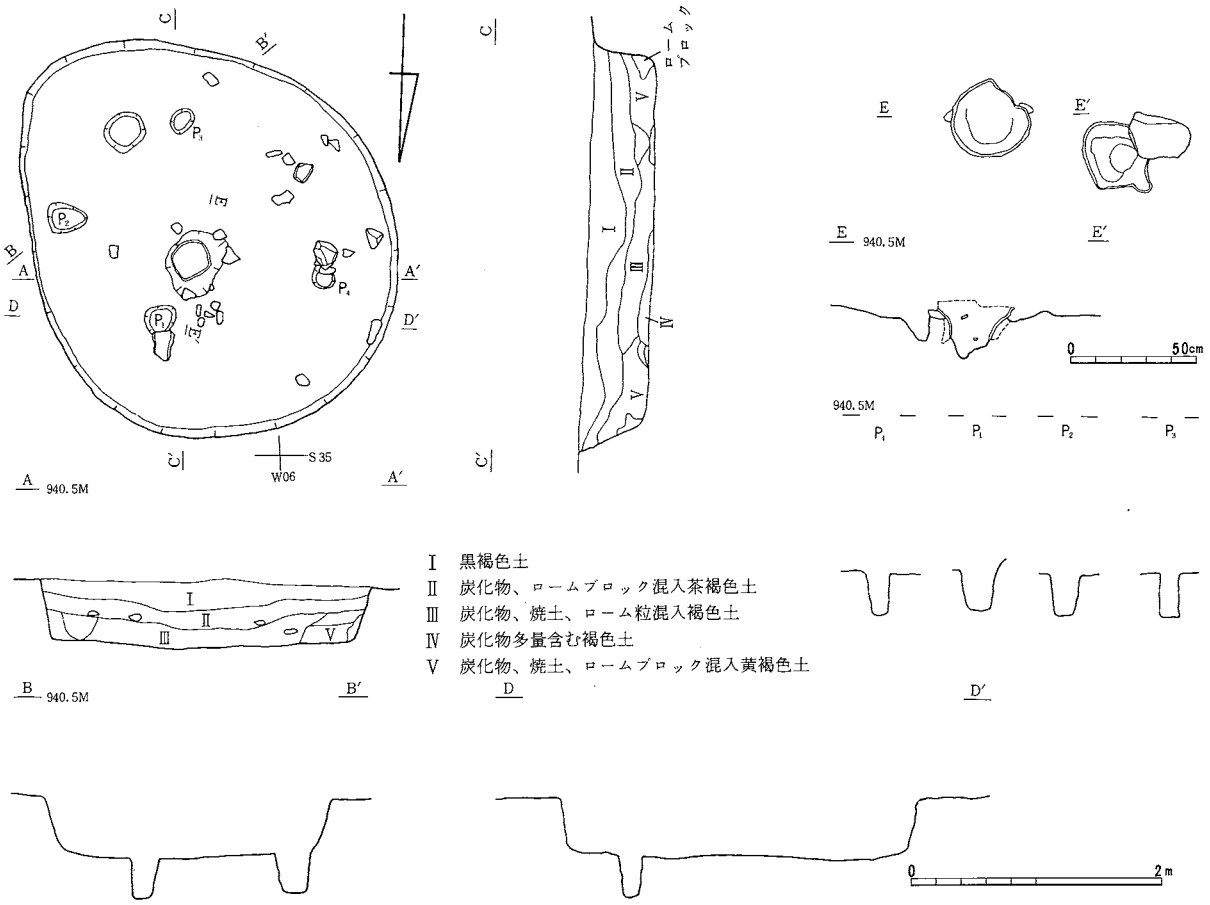


図31　第16号住居址実測図　（１：60）

炉石が埋甕炉の一部にのっている。炉IIは、炉Ｉの北西側にあり、７枚の板状の石を立てて埋めた構造を持つ。石の厚さは５cmほどで、炉の内には炭化物混入黒色土と少量の焼土が入り、３cmほどの球状の焼石も落ちこんでいた。炉IIの炉石と炉IIIの炉石は接近しているが、炉IIIを構築した時点で炉IIの石を動かした形跡は認められなかった。炉IIIは６枚の平板状の石を並べたもので、90cmほどの円形をなしている。炉内に焼土は存在せず、また石も焼けた形跡を示していなかった。以上のように炉Ｉ→炉II→炉IIIという変遷が認められるが、新たに炉を形成する時、旧炉を意識的に避けているものと思われる。発掘時の観察では貼床の確認はできなかった。

遺物の出土状態は、層位的には特に差がない。平面的には、第７類と思われる土器片は周溝の内側にのみ、第４類はロームマウンドを含む楕円形プラン内に、第３類の土器片は炉周辺にそれぞれ分布する傾向がある。出土した土器は、第３類、第４類、第７類を主体としており、炉の変遷と同じ傾向を示している。従って３時期の住居址の複合と考えられる。なお、土製円板が１点出土している。

⑪　**第18号住居址**（図34、図版７）

遺跡の南側で、西側へ傾斜する尾根の肩部に位置するが、東西方向に見られた礫群帯からはややはずれる。礫混じりの褐色土層を掘りこんだ住居址である。住居址南東側は、浅い２基のピットとロームマウンド状の遺構によって切られている。これらのピットは、18号住のほぼ床面で検出された。18号住の埋土は、大半が第Ｉ層のローム粒・炭粒混じりの黒褐色土で、一部壁に接して第III層のローム混じりの褐色土がある。他に、ローム粒が多量に混入した黒褐色土（第II層）が床面に部分的に堆積していた。プランは東側

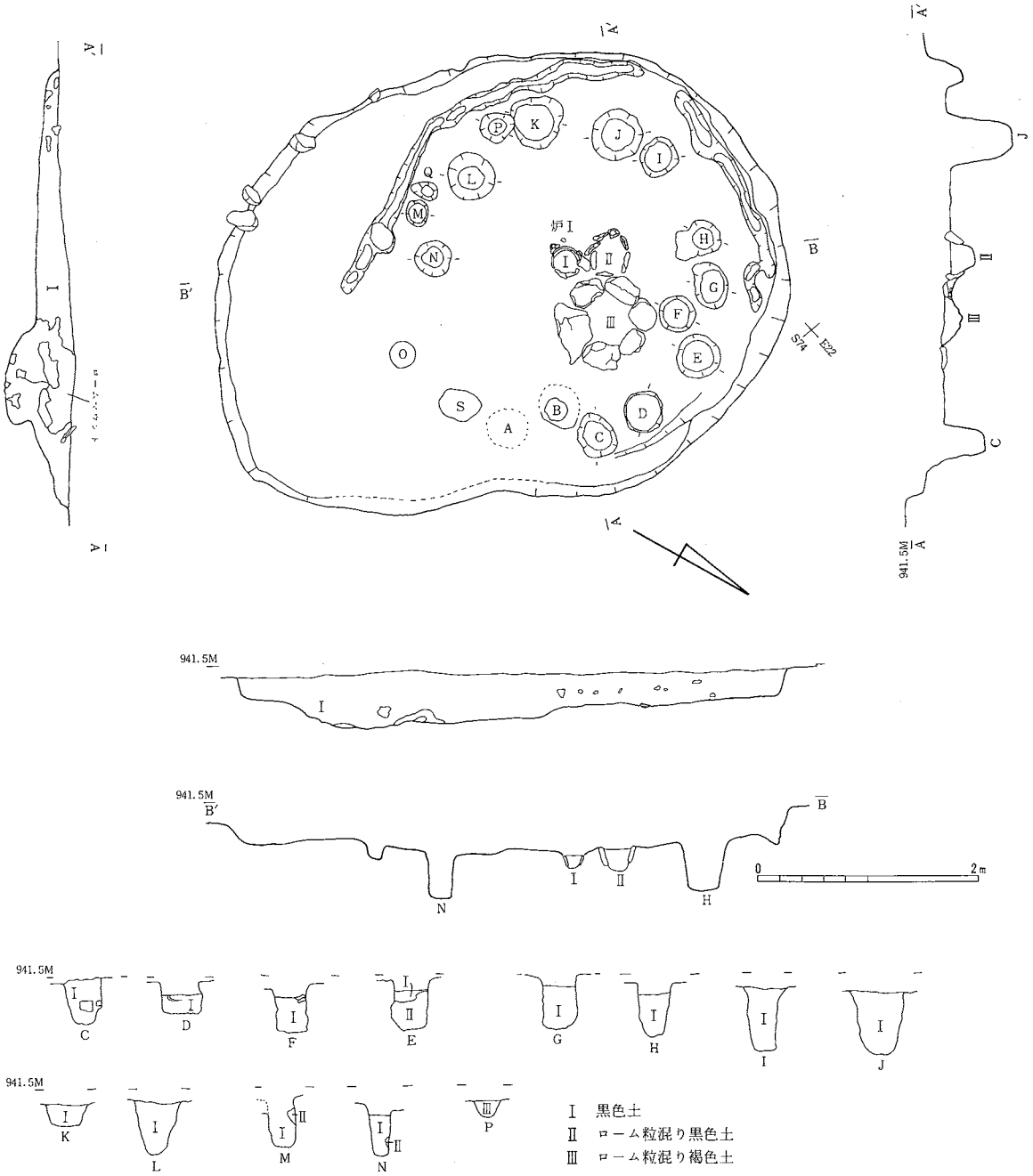


図32　第17号住居址実測図　（1：60）

がやや直線状になる他は、ほぼ円形のプランである。壁高は約20cmであまり高くない。炉をはさんで東西にピットが存在した。西側のピットは、方形状で35cmほどの深さを持ち、部分的に第III層と第IV層がみられた他は、住居址の埋土と同じ第I層であった。内からは本住居址にともなう土器片や石器が出土した。おそらく住居址の埋没とともに埋まったものと思われる。東側のピットは、直径50cmほどあるが、深さは10cmほどで、床面を掘りこんでいた。精査したにもかかわらず、住居址内からは、柱穴の検出ができなかった。 炉は、住居址の中央やや西側に寄って位置し、埋甕炉である。 図34に炉周辺の断面を示したが、焼土の検出はごく一部である。炉の掘り方は径45cmほどで、掘り方の東側へ甕を寄せて構築している。床面は礫混じりのローム面に構築されているが、北側へ緩く傾斜している。

遺物は第I層とその上層に集中しているが、ピット内や埋甕炉内からも出土している。また住居址北側

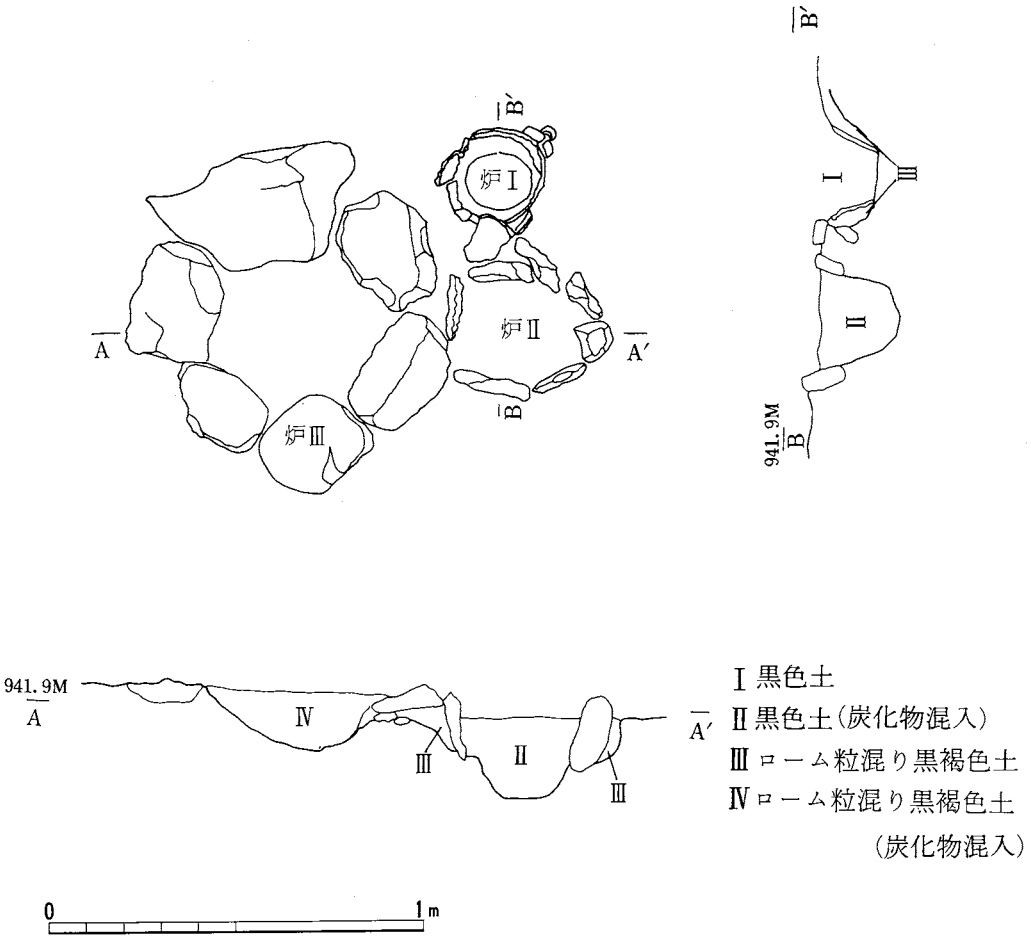


図33　第17号住居址、炉址実測図　（１：30）

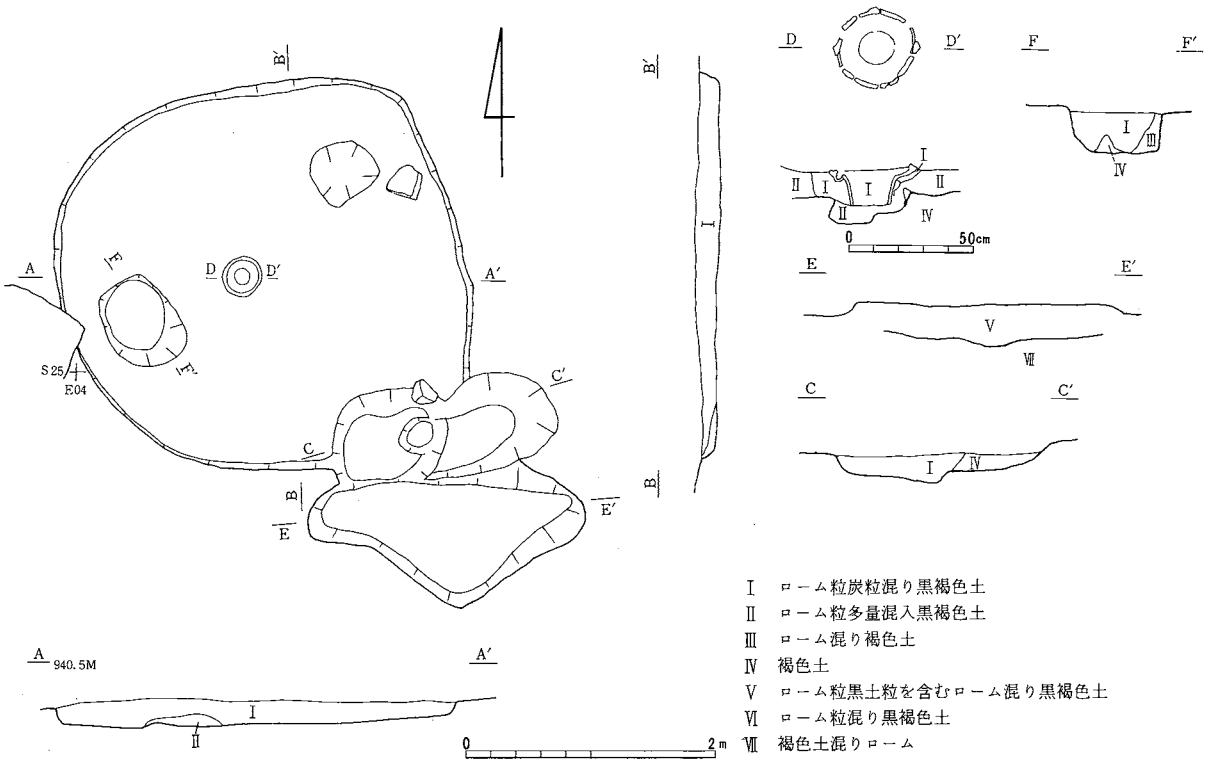


図34　第18号住居址実測図　（１：60）

の2m範囲で、住居址検出面とその上層から土器片・石器・黒曜石片が集中的に出土しているのが注目される。

本住居址に伴う土器には、第1類、第3類、第4類、第9類があるが、量的には少ない。埋甕炉（45）は第4類の土器であり、本住居址の年代は第4類の時期と思われる。他に黒曜石片が集中して出土した点は問題となるところであるが、詳細は石器の項で述べる。

8　土壙

本遺跡から検出された土壙は127基である。出土遺物から縄文時代早期、同中期および平安時代の三時期に大きく分けられるが、その分類は形態、規模、埋土、遺物の出土状況から検討する必要がある。

本遺跡の土壙の大部分は、検出面から65cm～30cmほどの深さで、その中心は30cm前後であり、形態的にも特に変化するものではない。平面プランは円形または楕円形、断面形は方形・台形・半円形が大半を占める。遺物の遺存状態では、完形土器を出土した土壙が４基、半完形土器や土器片を出土したのは縄文時代早期で５基、中期で39基、平安時代の土師器・灰釉陶器を出土した土壙が10基である。遺物が検出された土壙も、完形土器や半完形土器を出土した土壙と土器片が検出された土壙とでは、時期決定や性格を考えるうえで区別して考える必要があると思われる。完形土器の出土状態は図版11・12の通りである。

調査範囲内での分布の状態は図４の通りであるが、背の部分に集中している傾向がうかがえる。本遺跡では土壙の分類の一つとして、土壙内の埋土の層序関係を取り上げた。ほぼ共通する層序を分類すると６つに分かれる。各分類の細分は表３の通りである。

層序の観察の結果、大部分は自然埋没の状態を示している。ほとんどが30cm前後の深さを持つため、人為的な場合との区別は困難である。ただ完形土器または半完形土器が検出された土壙では、土壙床面直上での出土例はなく、いくぶんか浮上しての検出で自然埋没の傾向を示している。二層以上にまたがった場合も上層からの検出例が多い。自然埋没と考えた場合、土層が堆積されていく過程にはおおよその共通性があるものと思われる。本遺跡では大きく次の観点から分類を行った。

Ａ分類 ― 茶褐色土層が主体となるもの。Ａ－１・Ａ－２。

Ｂ分類 ― 黒色土層または黒褐色土層を主体とするもの。Ｂ－１～Ｂ－３。

Ｃ分類 ― 褐色土層を主体とするもの。Ｃ－１・Ｃ－２。

Ｄ分類 ― ローム混入の土層を一括とし、Ｄ－１～Ｄ－６に細分。

Ｅ分類 ― 炭化物が混入されるものを一括した。Ｅ－１～Ｅ－６。

Ｆ分類 ― Ａ～Ｅのような共通する層序を持たないもの。

以上６分類、さらに各分類を25に細分した。各分類間の層序は個々バラバラの状態で総てが共通ではないが、遺物の出土状態と層序との関係を大まかに見ると、Ａ分類とした土壙群は、主として平安時代に形成されたと思われる。これは平安時代の住居址の検出面とも共通する傾向がある。Ｂ分類の層序を示す土壙群はあまり遺物を包含せず、平安時代の土器の包含例はない。Ｃ分類、特にＣ－１も遺物の包含が少ない。Ａ－２とも共通するものが多い。Ｄ分類は量的に多く、遺物の包含もバラエティーに富む。Ｄ－１～Ｄ－４は、本調査区域内の中央に集中する傾向があり、縄文時代中期の各時期の土器を包含している。土壙48は、Ｄ分類の範ちゅうながら、層序が他と異なる。第Ｉ層は黒色土、第II層暗褐色Ｉ、第III層は礫・ローム混入褐色土層であり、礫混入の褐色土層は縄文時代中期の住居址の掘り込み面である。この第III層は他では認められない。

Ｅ分類は炭化物の混入を共通点とした。埋土内に炭が混入すること自体に何らかの原因が考えられるが、分布の面でも、調査区域内南東側に多い。16号住の埋土に炭化物・焼土混入の褐色土層が多く、Ｅ分類の土壙も1.号住北東側に多い。何らかの関連を示すものであろう。

Ｆ分類は各土壙がそれぞれの特色を示している。しかし検出条件が異なるだけで共通する部分も多く、Ｄ分類に近いものであろう。

以上時期区分を総括すると、Ａ、Ｃ分類の大部分は平安時代、Ｄ、Ｅ、Ｆの大半は縄文時代中期に属し、

縄文時代早期と思われる土壙は、層位関係では共通性は少ない。特に土壙48は特異である。

次に土壙の共通点をあげると、完形土器を包含するもの４基、半完形土器を包含するもの６基、土器破片が混入するもの44基である。他に土壙内にピットを持つもの３基、礫が混入するもの12基、板石状のものが混入するもの６基、土壙床面が凸凹するもの３基など土壙の機能面を暗示させるものもある。土壙内の層序とこれらの関係を見ると特に集中する傾向を示していない。たとえば礫が混入されている12基を層序で分類するとＡ－１が２基、Ａ－２が１基、Ｂ－１が１基、Ｂ－３が３基、Ｅ－１が１基、Ｅ－３が１基、Ｆ－３が１基、Ｆ－５が１基というようにバラバラである。他の要素も同様である。深さとの関係も同じ礫混入の土壙で見ると、15cm以下が４基、20cm以下２基、25cm以下３基、30cm以下２基と15cmから30cm以内が11基と多いが、40cm～50cmが２基ある。これは全土壙の傾向から大きくはずれることではない。

土壙については、層序を中心とした区分を行い、主として時期の推定をしたが機能面、住居址との関連、遺跡内での位置についてはふれることはできなかった。例えば縄文時代中期の土壙の形態には、多少の差異はあっても、全体的な傾向としてほとんど変わるところはなかった。このあたりが縄文中期を代表する一つの特色であり、機能が明らかになりつつある縄文時代早期の土壙との差になるかも知れない。

表３　判ノ木西遺跡土擴分類表

分　類	層　　序	土拡ナンバー
Ａ－１	茶褐色土層	34,77,80,83,98,114,119,120,123,126,127,128,129
Ａ－２	黒褐色土層―茶褐色土層	14,15,31,39,97,115,116,34
Ｂ－１	黒褐色土層	16,17,25,43,62,66,86,91,107,198
Ｂ－２	黒色土層―黒褐色土層	2,3,4,7,9,18,19,20,22,36,13
Ｂ－３	黒色土層	5,12,28,40,87
Ｃ－１	黒褐色土層―褐色土層	23,24,26,27,88,89,90,99,102,109,110
Ｃ－２	黒褐色土層―茶褐色土層―褐色土層	101
Ｄ－１	黒褐色土層―茶褐色土層―ローム混入黄褐色土層	56,58,67,68,73,79,96
Ｄ－２	茶褐色土層―ローム混入黄褐色土層	50,54,55,69,71,72,74,75,76,52
Ｄ－３	茶褐色土層―ローム混入茶褐色土層	78,81,82,85,95,117
Ｄ－４	黒褐色土層―茶褐色土層―ローム混入茶褐色土層	38,49,57,94
Ｄ－５	ローム混入黒褐色土層	10,11,93,112,92
Ｄ－６	黒色土層―ローム混入褐色土層	1,8,21,29,33,35,37,41,63
Ｄ	黒色土―暗褐色土―炭・ローム混入褐色土	48
集石炉	炭化物混入黒褐色土―褐色土―炭化物多量に含む黒色土―焼土、炭化材混入黒色土	32
Ｅ－１	炭混入黒褐色土層―炭・ロームブロック混入黒褐色土層	59,65,100,113
Ｅ－２	炭混入茶褐色土層―ローム混入黄褐色土層	51
Ｅ－３	炭混入黒褐色土層―炭混入茶褐色土層	6,42,44,47,105,111,118,121
Ｅ－４	炭混入黒褐色土層―黒褐色土層―ロームブロック混入黒褐色土	84
Ｅ－５	炭混入黒褐色土層―炭混入暗褐色土層―褐色土層	125
Ｅ－６	炭混入黒褐色土層―茶褐色土層	103,106
Ｆ－１	黒褐色土層―茶褐色土層―黄褐色土層	104
Ｆ－２	茶褐色土層―ロームブロック混入茶褐色土層	124
Ｆ－３	ローム混入茶褐色土層―茶褐色土層	122
Ｆ－４	茶褐色土層―黄褐色土層―ロームブロック混入褐色土層	53
Ｆ－５	礫・炭混入茶褐色土層―ローム混入褐色土層	30
Ｆ－６	ロームブロック混入黒褐色土層	60,61,64,70

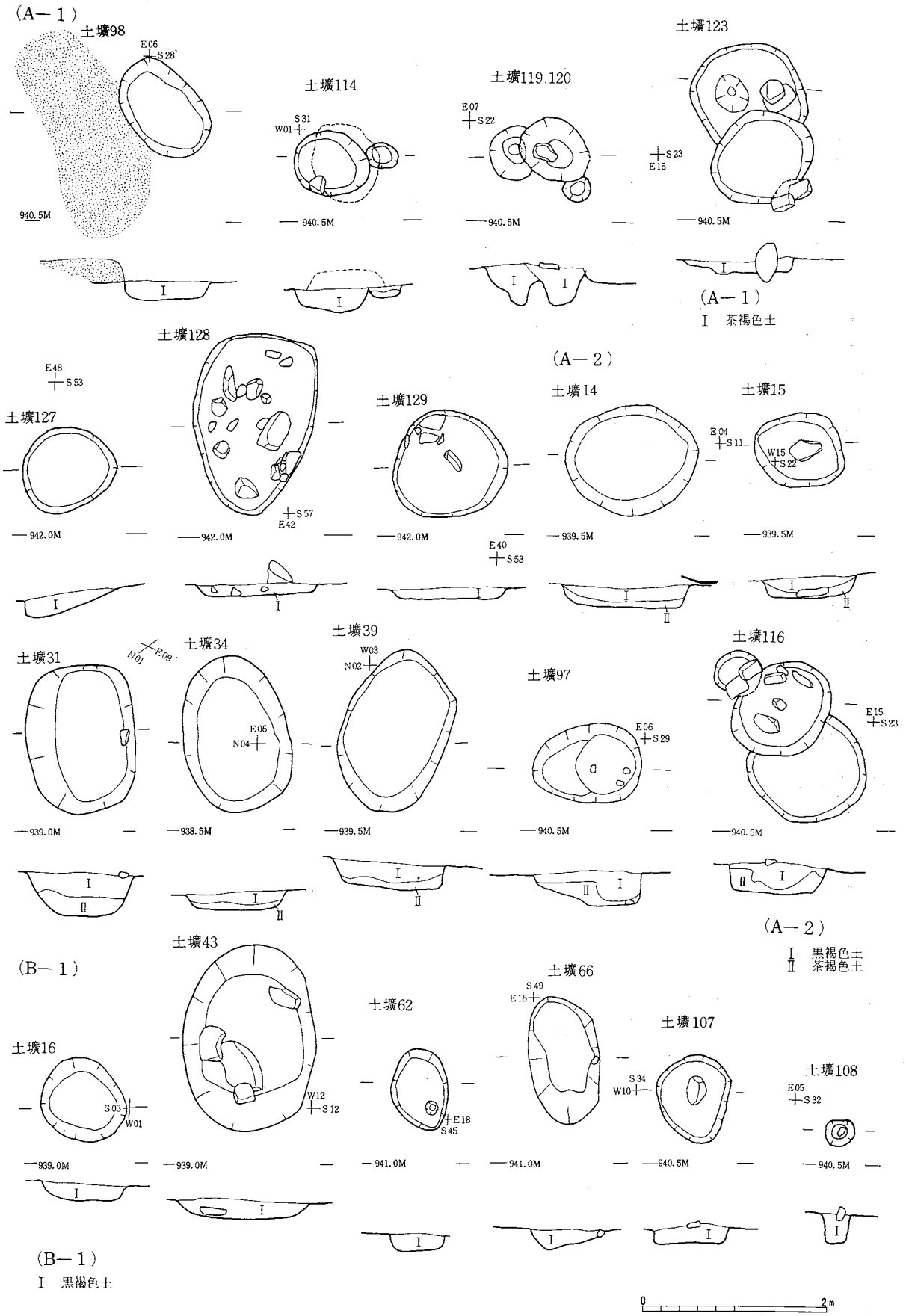


図35　土壙実測図（１）　（１：60）

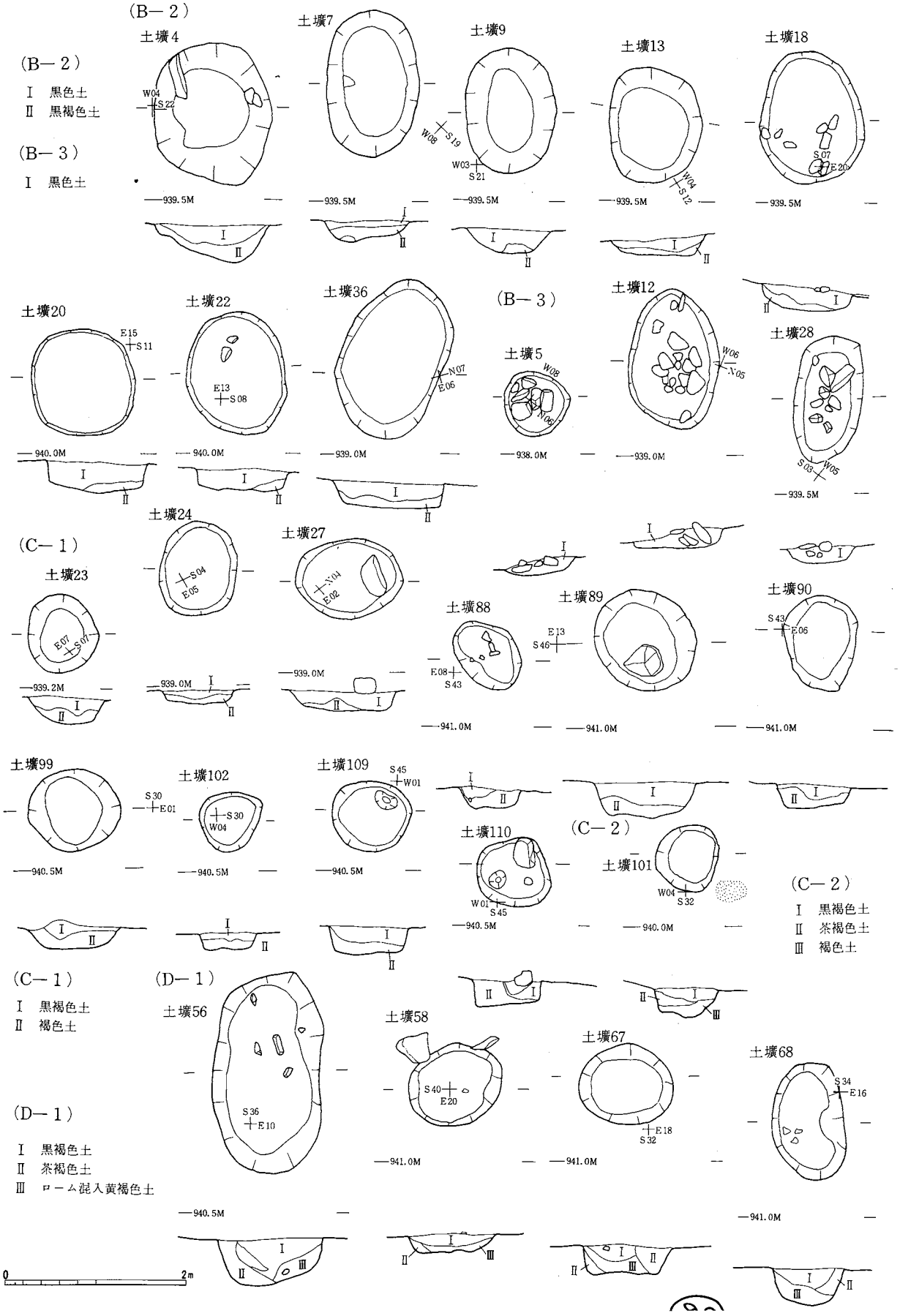


図36　土壙実測図（2）　（1：60）

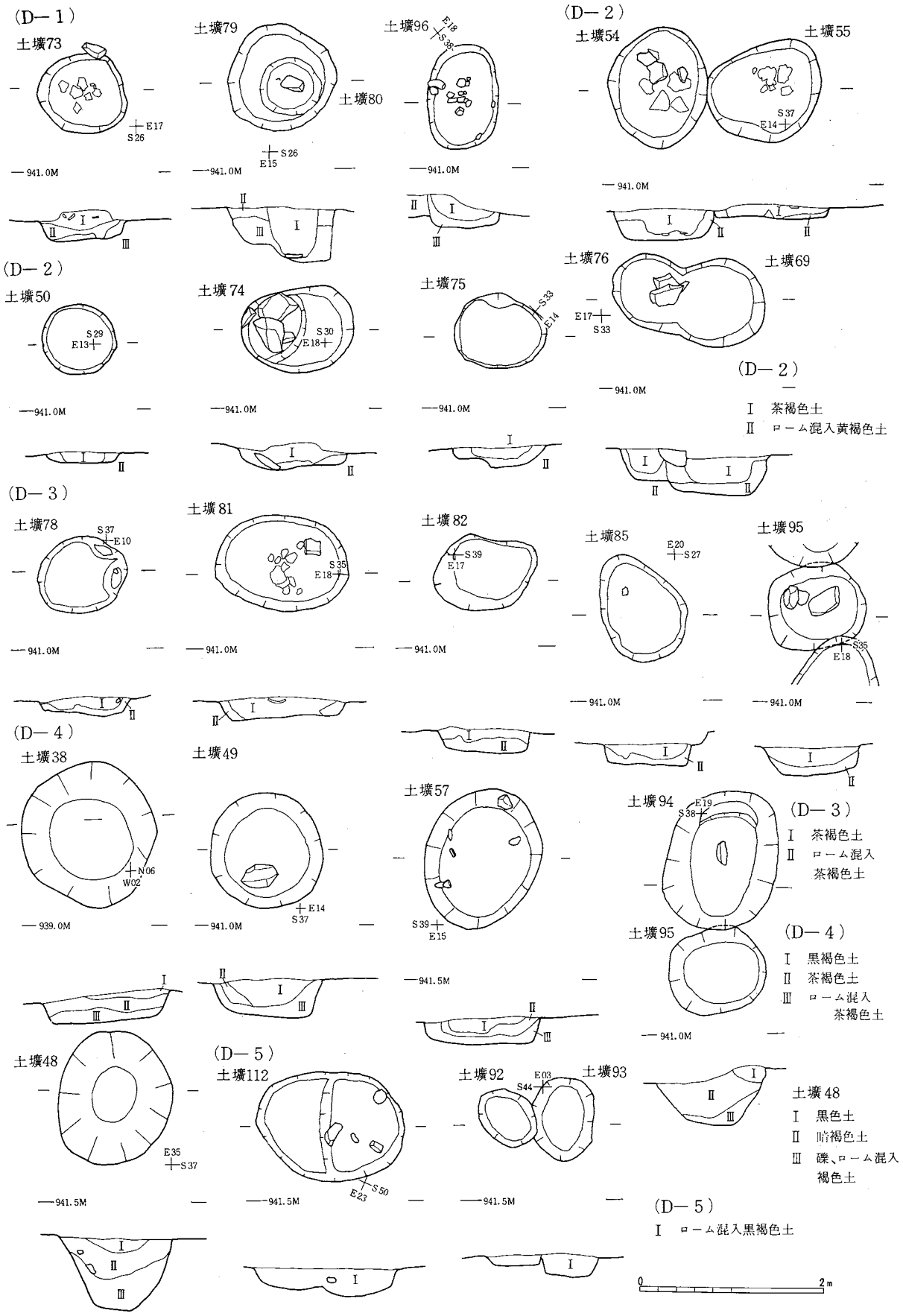


図37　土壙実測図（３）　（１：60）

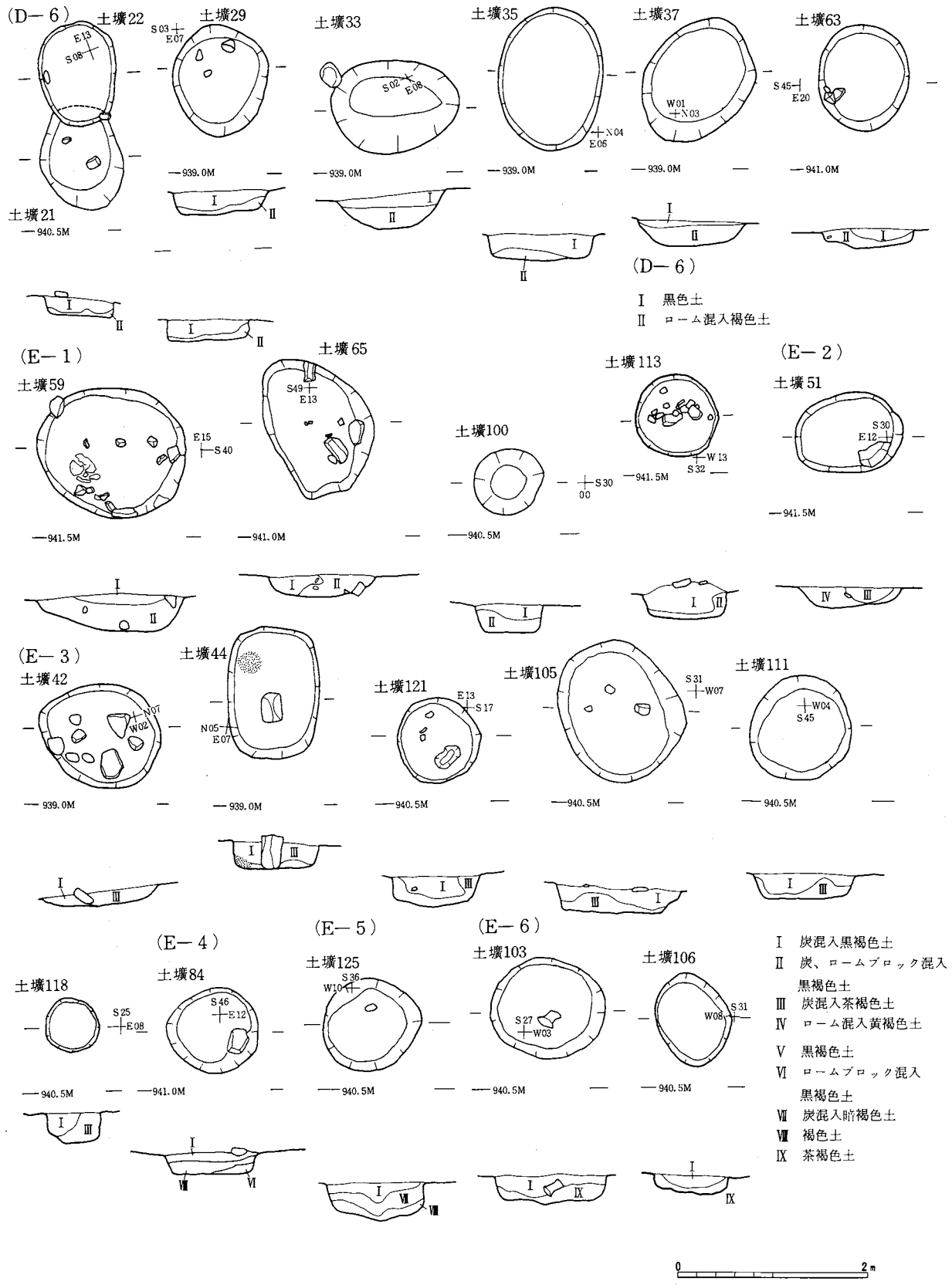


図38　土壙実測図（4）　（1：60）

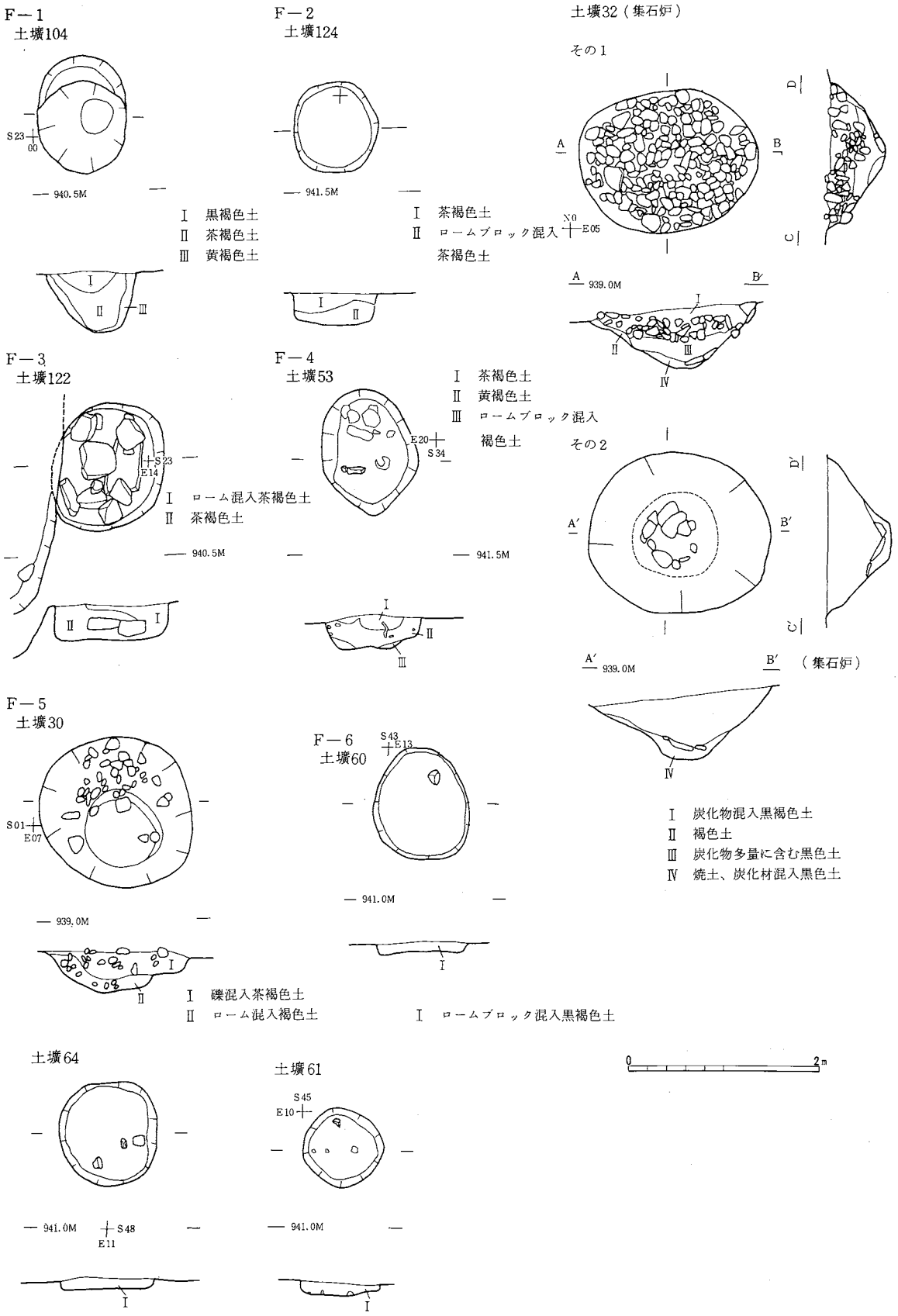


図39　土壙実測図（５）　（１：60）

No.	図	分　類	平面形 (規模)cm	底面形 (規模)cm	断面形 (深さ)cm	埋没、遺物出土状態	出　土　遺　物	備　　考
1		D-6	楕円形 163×220	楕円形 135×95	台　形 45	深鉢土器破片、オII層から出土。	中期1類、4類、早期I器片 打製石斧IIC′1	拓影236～242
2		B-2	円　形 77×78	円　形 62×58	方　形 22	オII層上面から早期土器破片。	早期土器片	
3		B-2	楕円形 125×	楕円形 80×	長方形 23	(半分用地外へかかる) オI層から早期土器片出土	早期土器片2点	拓影104
4	36	B-2	円　形 130×153	円　形 85×85	半円形 40		中期4類 使用痕のある剝片2	拓影273～274
5	〃	B-3	円　形 72×73	円　形 60×62	半円形 17	(暗褐色土層に掘りこむ) 人頭大の自然石6ヶ出土	中期1or2類 使用痕のある剝片1	
6		E-3	楕円形 85×115	楕円形 65×100	長方形 30	(暗褐色土層に掘りこむ)	(土拡中央に40cm大の小ピット)、横刃型石器IIIA1	
7	36	B-2	楕円形 100×160	楕円形 70×120	半円形 23	オ1層に土器片4、黒曜石片1出土。	土器片4、黒曜石片1 中期1類	
8		D-6	楕円形 63×98	楕円形 52×84	半円形 20	オ1層に土器片	中期1or2類	
9	36	B-2	楕円形 98×138	楕円形 50×90	半円形 27	オ1層から中期土器片		
10		D-5	楕円形 80×85	円　形 65×65	長方形 14		中期4類 磨、凹、敲石A2	拓影275
11		D-5	楕円形 75×97	楕円形 58×83	長方形 12		中期1類、4類	
12	36	B-3	楕円形 98×155	楕円形 85×143	半円形 20	(暗褐色土層内に掘りこむ) 土拡中央に自然礫13ヶ出土		
13	〃	B-2	楕円形 100×125	楕円形 80×105	半円形 22	オ2層から早期土器片出土	早期土器片 使用痕のある剝片1	
14	35	A-2	楕円形 120×150	楕円形 108×138	半円形 28	オ1層から自然礫43ヶ出土	土師器片杯 中期	
15	〃	A-2	円　形 93×80	円　形 77×63	長方形 23	土拡中央オ2層に35cm大の板石	中期	
16	〃	B-1	円　形 92×92	円　形 70×65	長方形 21	(暗褐色土中に掘りこむ)	中期2類の土器片1	
17		B-1	楕円形 140×120	楕円形 120×90	半円形 22		使用痕のある剝片1	
18	36	B－2	楕円形 112×144	楕円形 92×30	半円形 23	20～30cm大の自然礫		
19		B－2	円　形 113×115	円　形 105×110	長方形 33		敲石A1 中期3～4類	
20	36	B－2	円　形 107×135	円　形 110×125	長方形 23		横刃型石器 IV C1	
21		D－6	楕円形 78×110	楕円形 65×78	長方形 23	土拡22に切られる	打製石斧IIIA1、同分類外1 平安時代土師器、杯	
22	36	B－2	楕円形 80×108	楕円形 70×110	長方形 16	土拡21を切る	中期8類土器片	拓影268
23	〃	C－1	円　形 78×83	円　形 49×60	方　形 30	オ2層上面から土器片	中期1類	
24	〃	C－1	円　形 86×103	円　形 70×90	半円形 18			
25		B－1	長方形 122×58	長方形 110×48	方　形 21	オ1層から打製石斧 中期土器片	打製石斧、中期土器片	
26		C－1	楕円形 80×124	楕円形 70×113	長方形 23			
27	36	C－1	楕円形 117×90	楕円形 100×78	半円形 22			
28	〃	B－3	楕円形 75×137	楕円形 50×108	半円形 16	10cm大～20cm大の自然礫混	中期1片 磨、凹、敲石A1	
29	38	D－6	円　形 98×118	円　形 83×88	長方形 27		中期1類	
30	39	F－5	円　形 158×158	円　形 80×80	(略)台形 48		磨、凹、敲石A1	

No.	図	分　類	平面形 (規模)cm	底面形 (規模)cm	断面形 (深か)cm	埋没、遺物出土状態	出　土　遺　物	備　　考
31	35	A－2	楕円形 117×160	楕円形 74×142	台　形 45			
32	39	集石炉	楕円形 186×150	円　形 90×110	半円形 50	別　記	横刃型石器 IVB1、IA1、使用痕のある剝片1、磨、凹、敲石A5 磨、凹、敲石C5、磨、凹、敲石A・C4 中期1類	
33	38	D－6	楕円形 130×95	楕円形 95×93	半円形 33			
34	35	A－2	楕円形 118×158	楕円形 90×136	半円形 23		黒曜石片 使用痕のある剝片1	
35	38	D－6	楕円形 108×147	楕円形 102×138	長方形 28			
36	36	B－2	楕円形 175×110	楕円形 150×90	半円形 3 8		磨、凹、敲石A・C1 中期7類、IV群2類	
37	38	D－6	円　形 114×130	円　形 95×100	半円形 27			
38	37	D－4	円　形 143×160	円　形 80×87	長方形 28		凹石、磨、凹、敲石A・C1	
39	35	A－2	楕円形 117×176	楕円形 103×147	長方形 39		中期1or2類、4類6or7類、石鏃2　　少量ずつ	拓影263～265
40		B－3	円　形 86×87	円　形 75×83	半円形 15			
41		D－6	円　形 83×97	円　形 65×63	方　形 40		中期1類	
42	38	E－3	円　形 128×110	円　形 110×95	半円形 13	土拡中に礫混入	使用痕のある剝片1	
43	35	B－1	楕円形 143×200	楕円形 100×135	半円形 23	土拡中に礫混入	縄文早期土器片、石鏃1、横刃型石器IIA1、磨、凹、敲石A2、磨、凹、礫石A・C1	拓影29、67
44	38	E－3	隅丸方形 97×138	隅丸方形 85×123	方　形 30	土拡中央に柱石状のものあり。		
45								欠　番
46								欠　番
47		B－3	楕円形	楕円形	方　形	半分用地外へかかる		
48	37	D	円　形 120×142	円　形 45×60	台　形 78	オ1層、オ2層から縄文早期土器片	縄文早期土器片	図　11
49	〃	D－4	円　形 120×125	円　形 90×96	長方形 40	土拡中央に30cm大の割石	中期7類土器破片3	拓影138
50	〃	D－2	円　形 80×75	円　形 70×66	半円形 12		不定形剝片石器1	
51	38	E－2	楕円形 110×84	楕円形 95×70	半円形 22	オ2層直上から土器片出土	中期1類 磨、凹、敲石A・C1	拓影243～244
52		D－1	円　形 80×90	円　形 70×80	長方形 15	オ1層から土器片出土	中期7類、横刃型石器IIIA1、台石1	拓影269
53		F－4	楕円形 100×130	楕円形 73×107	半円形 34	オ1層、オ2層の間から土器片出土。中央から完形土器伏った状態で出土	中期7類、打製石斧IC′1 中期b類1、半完形1	拓影278～282 図No.－44
54	37	D－2	円　形 105×128	円　形 85×112	長方形 35	オ2層から土器片出土	中期1類多中期7類1片浅鉢1、(半完形)、横刃型石器IA1、ピエス・エスキーユ1、使用痕のある剝片1	拓影245～248、252
55	〃	D－2	円　形 123×107	円　形 105×87	長方形 14	オ1層から土器出土	中期2類、土器完形1、半完形1	拓影250～251 図No.45
56	36	D－1	楕円形 118×226	楕円形 90×185	方　形 50	オ2層から土器片出土	中期1or2類	
57	37	D－4	楕円形 125×144	楕円形 100×118	長方形 28		土器片9、打製石斧IIIC′1 磨、凹、敲石A－C－D1	
58	36	D－1	円　形 100×98	円　形 72×78	長方形 20	土拡中央に半完形土器	中期7類、中期1類	

No.	図	分　類	平面形 (規模)cm	底面形 (規模)cm	断面形 (深さ)cm	埋没、遺物出土状態	出　土　遺　物	備　　考
59	38	E－1	円　形 153×137	円　形 137×110	半円形 40	浅鉢伏った状態で出土	中期	図No.46
60	39	F－6	円　形 98×115	円　形 90×108	長方形 12		縄文中期土器片1	
61	〃	F－6	円　形 85×80	円　形 71×66	長方形 13		中期1or2類1	
62	35	B－1	楕円形 60×88	楕円形 50×75	方　形 20			
63	38	D－6	円　形 92×112	円　形 78×90	長方形 20	オ2層から土器片	中期4類	拓影276
64	39	F－6	円　形 100×108	円　形 85×95	長方形 12	完形土器、半完形土器横転した状態で出土。	中期3類	図No.47
65	38	E－1	楕円形 115×148	楕円形 85×130	半円形 23	オ2層から20cm大の割石、凹石、打製石斧出土。	中期4類、不定形剥片石器1、打製石斧IIB′1、磨、凹、敲石C1、使用痕のある剥片1	
66	35	B－1	楕円形 75×135	楕円形 50×95	L字形		中期	
67		D－1	楕円形 103×85	楕円形 78×58	長方形 30	オ1層から土師器出土	土器出土	
68		D－1	楕円形 80×130	楕円形 55×104	方　形 38	オ3層から土器片出土	横刃型石器IA1 中期10類、土師器杯1片	
69	37	D－2	円　形 93×95	円　形 70×78	長方形 40	オ2層から土器片出土	中期1類、中期2類、土器片8	拓影253～255
70		F－6	円　形 103×90	円　形 90×75	長方形 30		中期3類	
71		D－2	楕円形 125×95	楕円形 118×78	長方形 20	オ2層から半完形土器 床面凸凹	中期7類 中期3～4類？	図No.48
72		D－2	楕円形 125×95	楕円形 108×83	長方形 18		不定形剥片石器1	
73	37	D－1	円　形 94×88	円　形 76×72	長方形 20	オ1層から土器片出土 床面凸凹	打製石斧IIID1、中期4類 使用痕のある剥片1	図No.49
74	〃	D－2	楕円形 120×90	楕円形 100×78	半円形 25	両側に自然石が入りこむ小ピット	中期4類、中期7類 打製石斧IIC′1	拓影277
75	〃	D－2	円　形 100×80	円　形 88×63	長方形 20		石鏃1	
76	〃	D－2	円　形 75×83	円　形 65×65	方　形 33	30cm大の板石3枚土拡69に切られる		
77		A－1	円　形 114×117	円　形 95×103	長方形 20	土拡中央に小ピット	土師器片、灰釉陶器片 石鏃1	
78	37	D－3	円　形 97×80	円　形 65×68	長方形 20			
79	〃	D－1	円　形 118×115	円　形 93×95	長方形 55	土拡80に中央を切られる。	中期7類土器片	
80		A－1	円　形 64×62	円　形 50×50	楕円形 57	土拡79の中央を掘り抜く 磨石底部から出土	磨石1	
81	37	D－3	楕円形 144×105	楕円形 120×87	長方形 23	オ1層中央から完形土器1、破片	中期1類、2類 磨、凹、敲石A・C1	拓影256 図No.50
82	〃	D－3	楕円形 105×80	方　形 83×63	長方形 25		縄文中期土器片4 石鏃1	
83		A－1	方　形 95×80	楕円形 53×45	長方形 25		縄文中期土器片3	
84	38	E－4	円　形 95×90	円　形 75×73	長方形 23		縄文中期土器片1	
85	37	D－2	楕円形 93×117	楕円形 85×107	長方形 32	オ2層上部から縄文中期土器片8出土	中期3・4・7類土器片	
86		B－1	円　形 92×95	円　形 48×50	台　形 47	土拡91を切る	縄文中期土器片3、石匙1	
87		B－3	楕円形 40×63	楕円形 30×50	半円形 20	土拡86を切る		
88		C－1	円　形 70×70	円　形 45×50	方　形 20	オ2層から土器片6出土	中期9？＝9類に似た浅鉢	
89		C－1	円　形 112×110	円　形 78×82	方　形 38	土拡中央に35cm大の板石		

No.	図	分　類	平面形 (規模)cm	底面形 (規模)cm	断面形 (深さ)cm	埋没、遺物出土状態	出　土　遺　物	備　　考
90		C－1	楕円形 78×103	楕円形 60×86	方　形 25		中期１片	
91		B－1	楕円形 70×110	楕円形 50×90	長方形 37	土拡中央に40cmの板石土拡86に切られる		
92	37	B－3	円　形 60×60	円　形 45×43	方　形 12	土拡93を切る	中期土器片	
93	〃	D－5	楕円形 65×90	楕円形 50×70	方　形 25	土拡92に切られる	土器片４、石鏃1	
94	37	D－4	楕円形 120×152	楕円形 68×102	台　形 55	土拡95に切られる		
95	〃	D－3	円　形 103×95	円　形 77×80	方　形 30	中央部に切られ、土拡94を切る。	土器片	
96	〃	D－1	楕円形 78×113	楕円形 72×100	方　形 35	土拡中央部に板石状の石 土器片才３層出土	中期１類	拓影257～258・260
97		A－2	楕円形 90×120			才１層から土器片４、打製石斧１	中期１類	拓影261
98		A－1	楕円形 93×117	楕円形 71×95	半円形 20	床面凸凹、南側に焼土、 土拡98が焼土を切る		
99		C－1	円　形 102×90	円　形 62×74	半円形 28		土師器片４、石鏃1	
100	38	E－1	円　形 70×71	円　形 36×35	方　形 31		横刃型石器ⅡＡ１	
101		C－2	円　形 69×72	隅丸方形 48×58	方　形 32	附近に焼土あり		
102		C－1	円　形 63×67	円　形 50×52	方　形 20		不定形剥片石器１	
103	38	E－6	円　形 120×105	円　形 95×90	長方形 30	才２層上面に完形土器横転の状態で出土	中期２類、破片４	図No.52
104	39	F－1	楕円形 94×123	円　形 40×40	台　形 65		縄文中期土器片４	
105	38	E－3	楕円形 133×148	楕円形 100×128	長方形 25	才２層から土器片17出土	中期４類？８類 横刃型石器ⅡＡ１	
106	〃	E－6	円　形 95×78	円　形 77×70	長方形 18		土器片２ 使用痕のある剥片１	
107		B－1	楕円形 75×95	楕円形 68×85	長方形 21	中央に30cm大の長方形割石	土器片３	
108		B－1	円　形 32×30	円　形 20×20	方　形 32			
109		C－1	円　形 87×80	円　形 75×60	方　形 31			
110		C－1	円　形 80×75	円　形 70×65	方　形 28			
111	38	E－3	円　形 108×105	株 88×87	長方形 27	才２層から土器片	中期4類９類 横刃型石器ⅢＢ１	
112	37	D－5	楕円形 70×160	楕円形 60×140	半円形 30	床面に接して完形土器	中期才９類 使用痕のある剥片２	図No.51
113	38	E－1	円　形 85×87	円　形 77×80	長方形 23	才１層から半完形土器 検出面より上部から切りこんだ土拡	中期１類３類	拓影259、266～267 262
114		A－1	円　形 80×70	円　形 55×53	半円形 25	土拡上面に鉄サイ、鉄粉の集中箇所	土師器細片	
115		A－2	円　形 35×28	円　形 25×20	方　形			
116		A－2	円　形 102×104	円　形 97×99	長方形 34	土拡123を切る 15cm大の長方形の石５	凹石１、土師器片、石鏃1	
117		D－3	楕円形		長方形	12号住に切られる		
118	38	E－3	円　形 57×60	円　形 50×50	台形状 30	人為的なものと思われる	土器細片３	
119		A－1	円　形 60×80		柱穴状	土師器破片 12号住に接する	土師器破片１	
120		A－1	円　形 60×60		柱穴状	土拡119に切られる 12号住に接する	土師器破片４	

No.	図	分　類	平面形 (規模)cm	底面形 (規模)cm	断面形 (深さ)cm	埋没、遺物出土状態	出　土　遺　物	備　　考
121	38	E－3	円　形 90×90	円　形 80×82	方　形 32	床面から土器片	打製石斧ＩＣ′1 磨製石斧１	
122	39	F－3	円　形 130×120	円　形 120×100	方　形 35	12号住に接する、30cm大から40cm大の割石状のもの10個	中期３類、７類少 横刃型石器ⅡＡ１、磨、凹、敲石Ｃ１	拓影270、271 272
123		A－1	円　形 100×125	円　形 90×110	Ⅲ　状 13	土拡116に切られる 20cm大の方形の自然石	土師器片	
124	39	F－1	円　形 90×95	円　形 87×75	方　形 33		中期１or２類土器片	
125	38	E－5	円　形 100×97	円　形 80×77	方　形 40	オ２、オ３層から土器片	中期７類土器片	
126		A－1	円　形 105×80	円　形 85×70	方　形 20			
127		A－1	円　形 100×70	円　形 60×50	片方おちこむ 18			
128		A－1	楕円形 130×200	楕円形 110×90	Ⅲ　状 12	15cm～20cm大の割石15個		
129		A－1	円　形 123×115	円　形 107×107	Ⅲ　状 12	20cm大の長方形の石５個		

第１号住居址

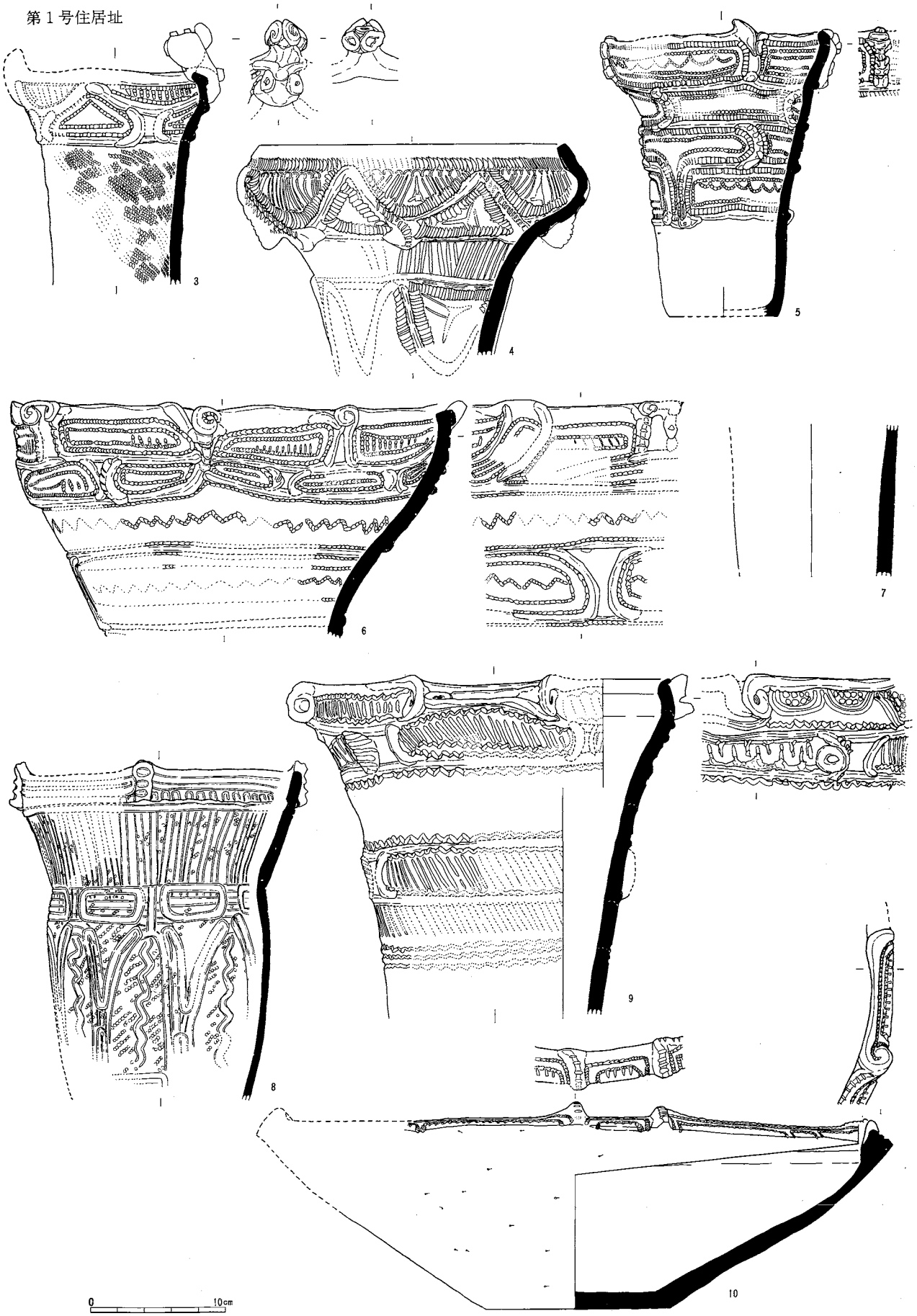


図40　縄文時代中期土器実測図(1)　　第１号住居址出土(1)　１：４

第１号住居址

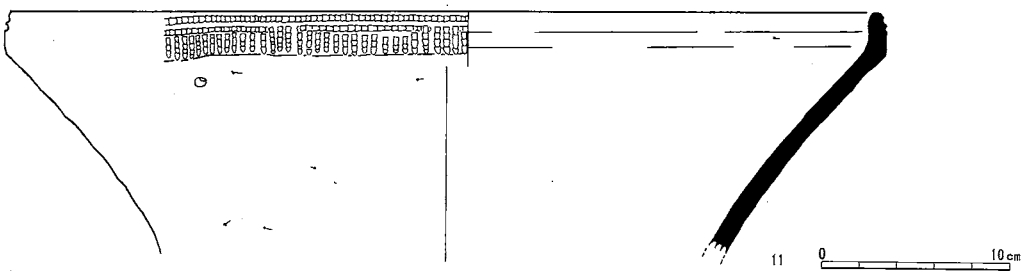
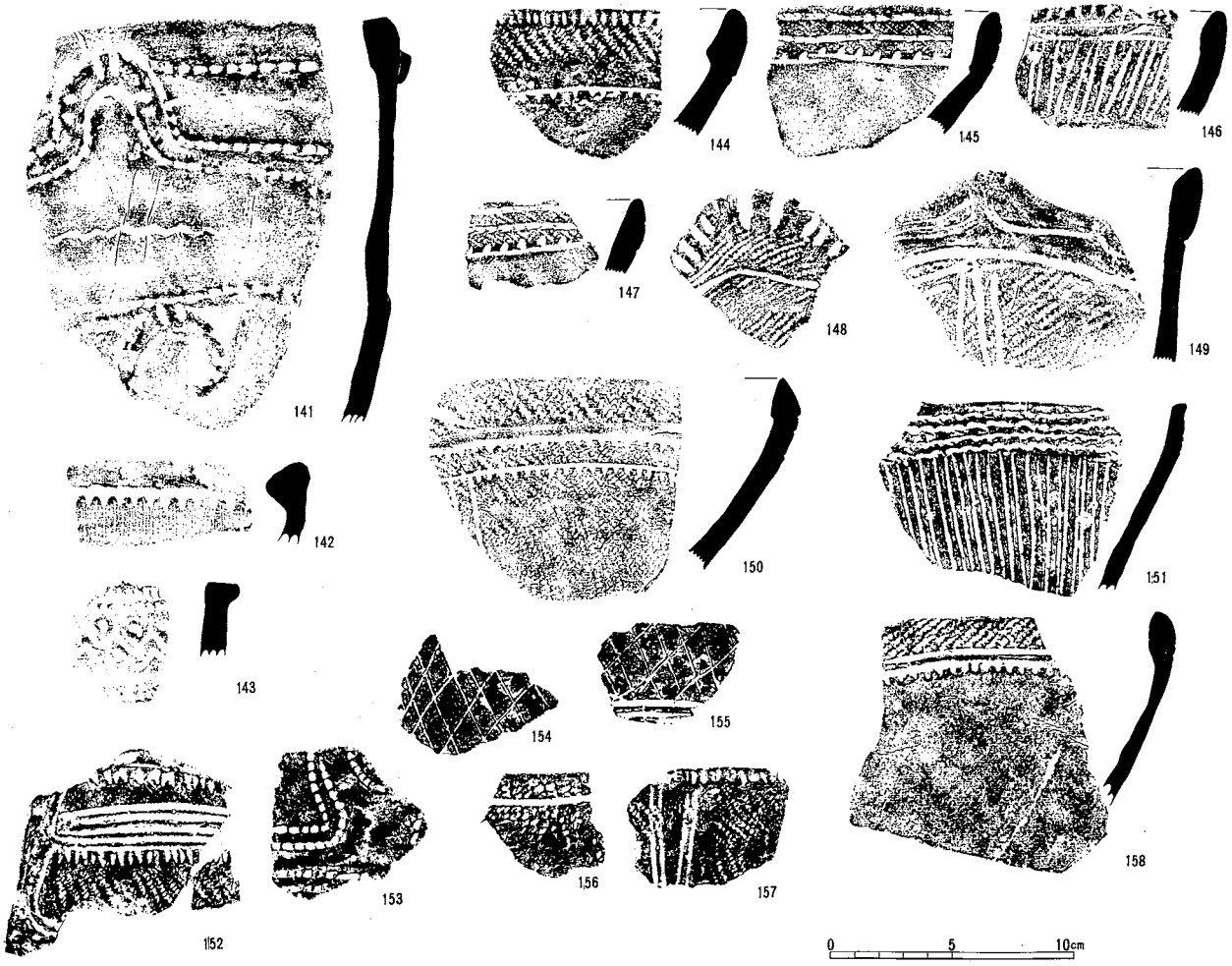


図41　縄文時代中期土器実測図(2)　　第１号住居址出土(2)　１：４

第１～３号住居址



遺構外

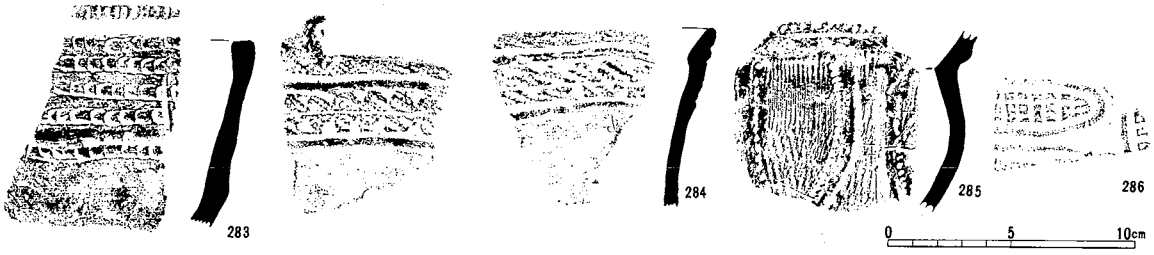


図42　縄文時代中期土器拓影図(1)　　第１～３号住居址・遺構外出土　１：３

141～143―第１号住居址　144～150―第２号住居址　151～158―第３号住居址　283～286遺構外

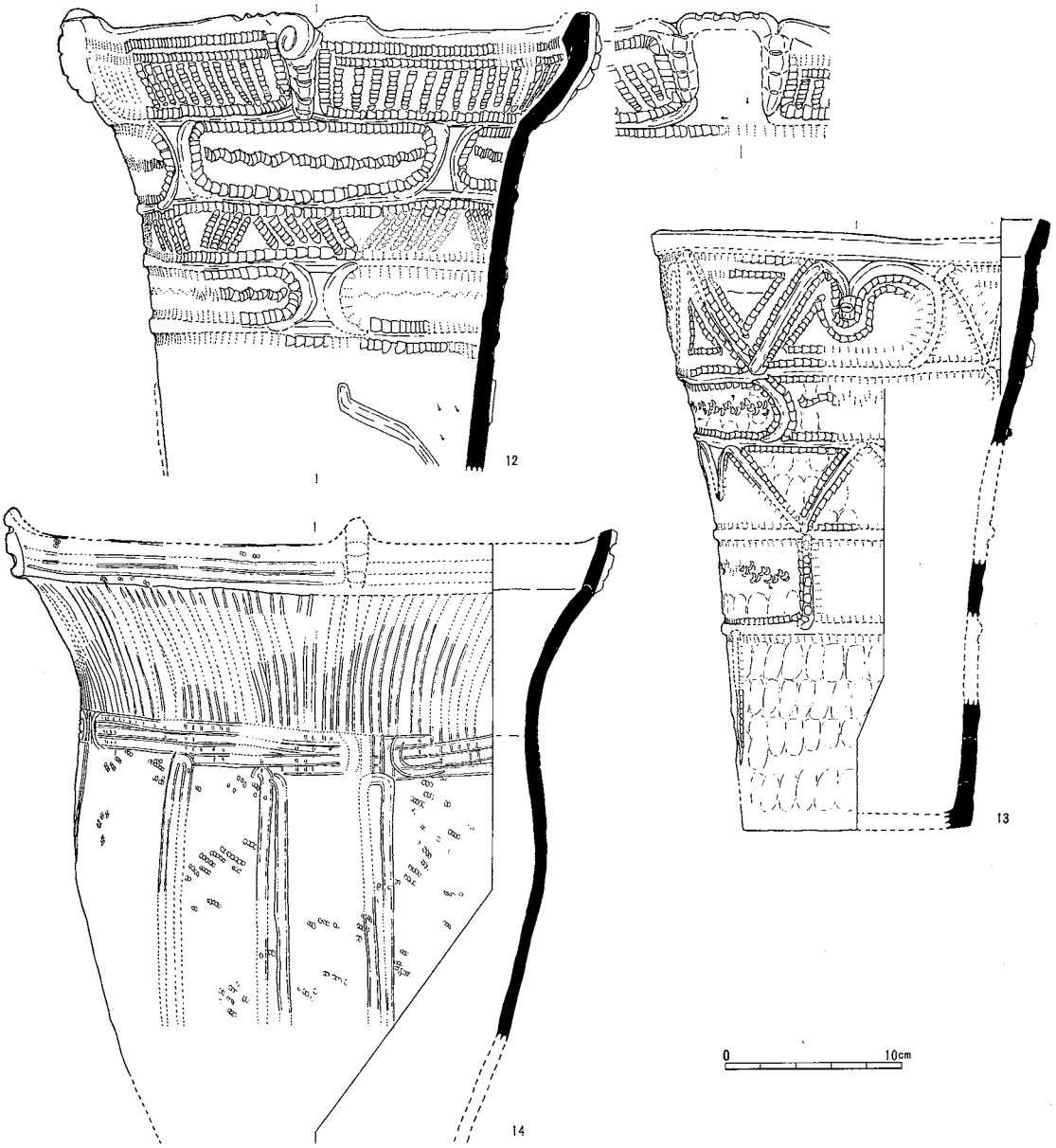


図43　縄文時代中期土器実測図(3)　　第３号住居址出土　１：４

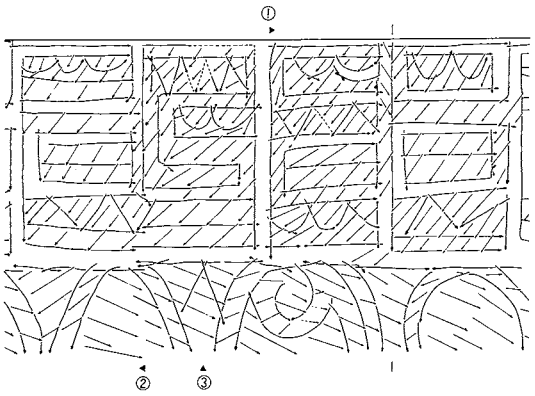


図44　土器No.37の展開模式図

⟷　A 工程の沈線
➡ A・A′工程の結節沈線
⟶　B 工程の沈線
①　A 工程上段の起点と方向
②　A 工程下段の起点と方向
③　A′工程

A工程の順位は、おおむね、大きな４つの区画→区画内の方形区画→斜位・弧状の再区画、であるが、原則に従うとは限らない。結節沈線は、途中で継ぎ足している可能性もある。横位沈線の一部は割り付け線かもしれない。

第４号住居址

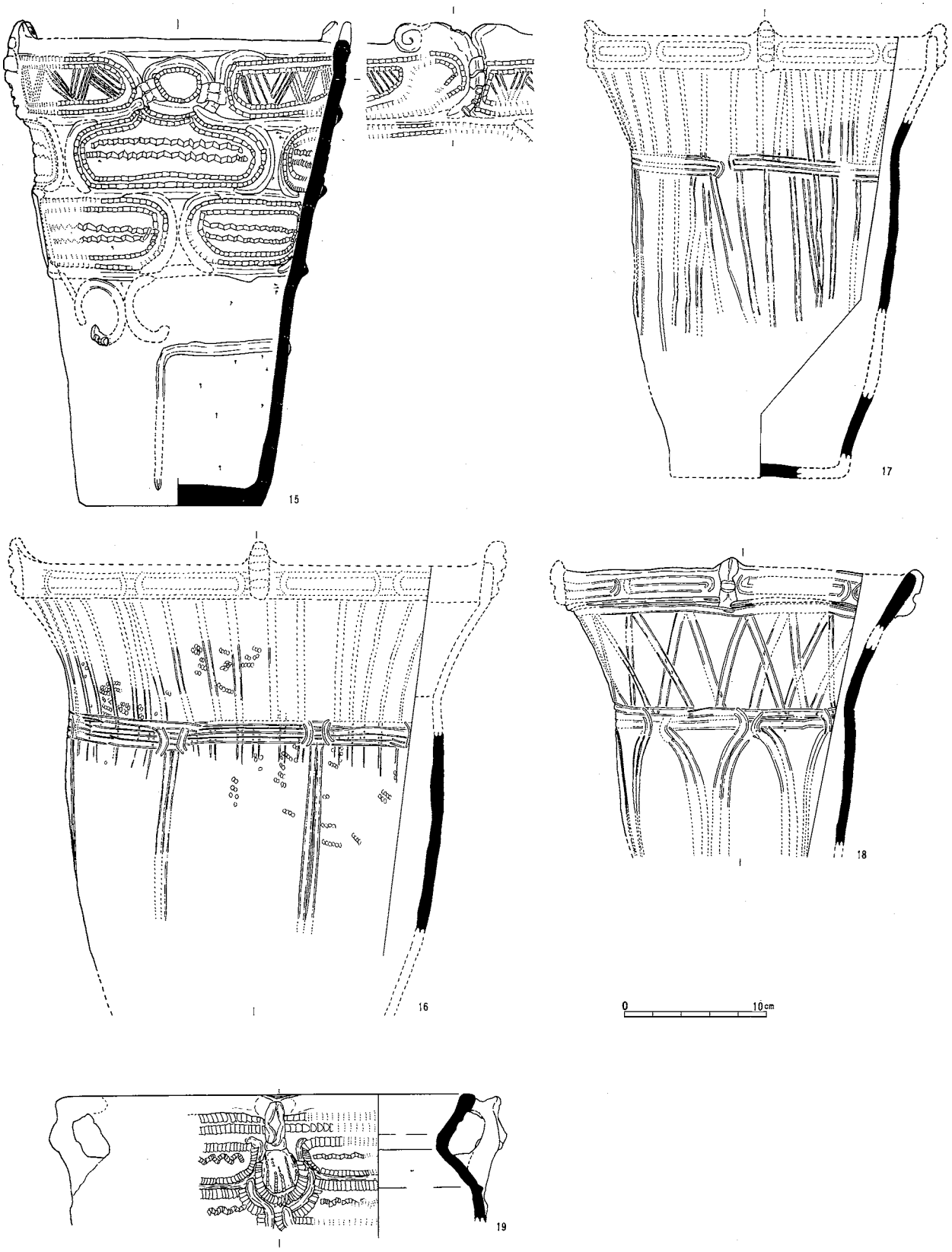


図45　縄文時代中期土器実測図(4)　　第４号住居址出土　１：４

第７号住居址

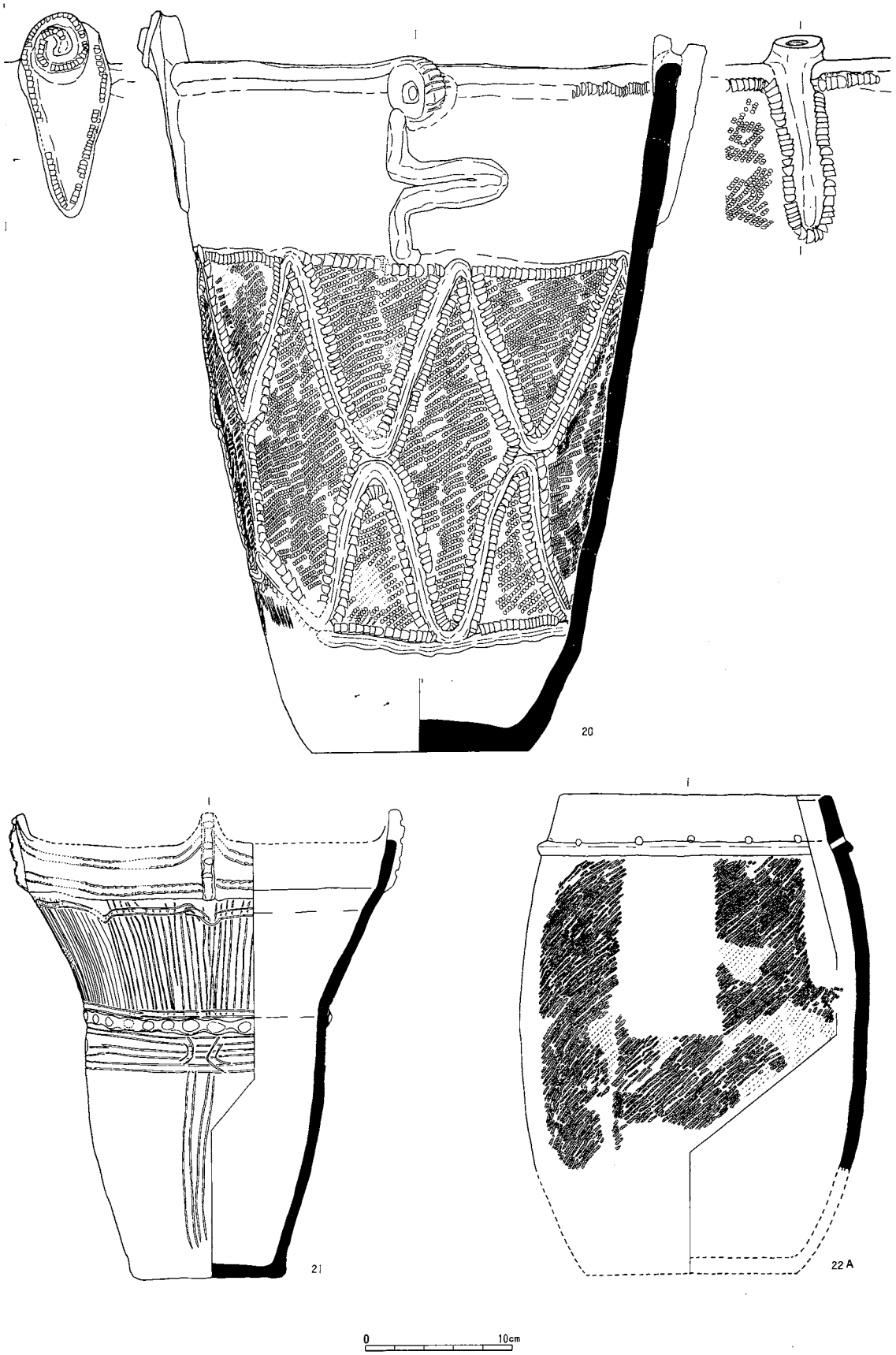


図46　縄文時代中期土器実測図(5)　　第７号住居址出土 (1)　１：４

第７号住居址

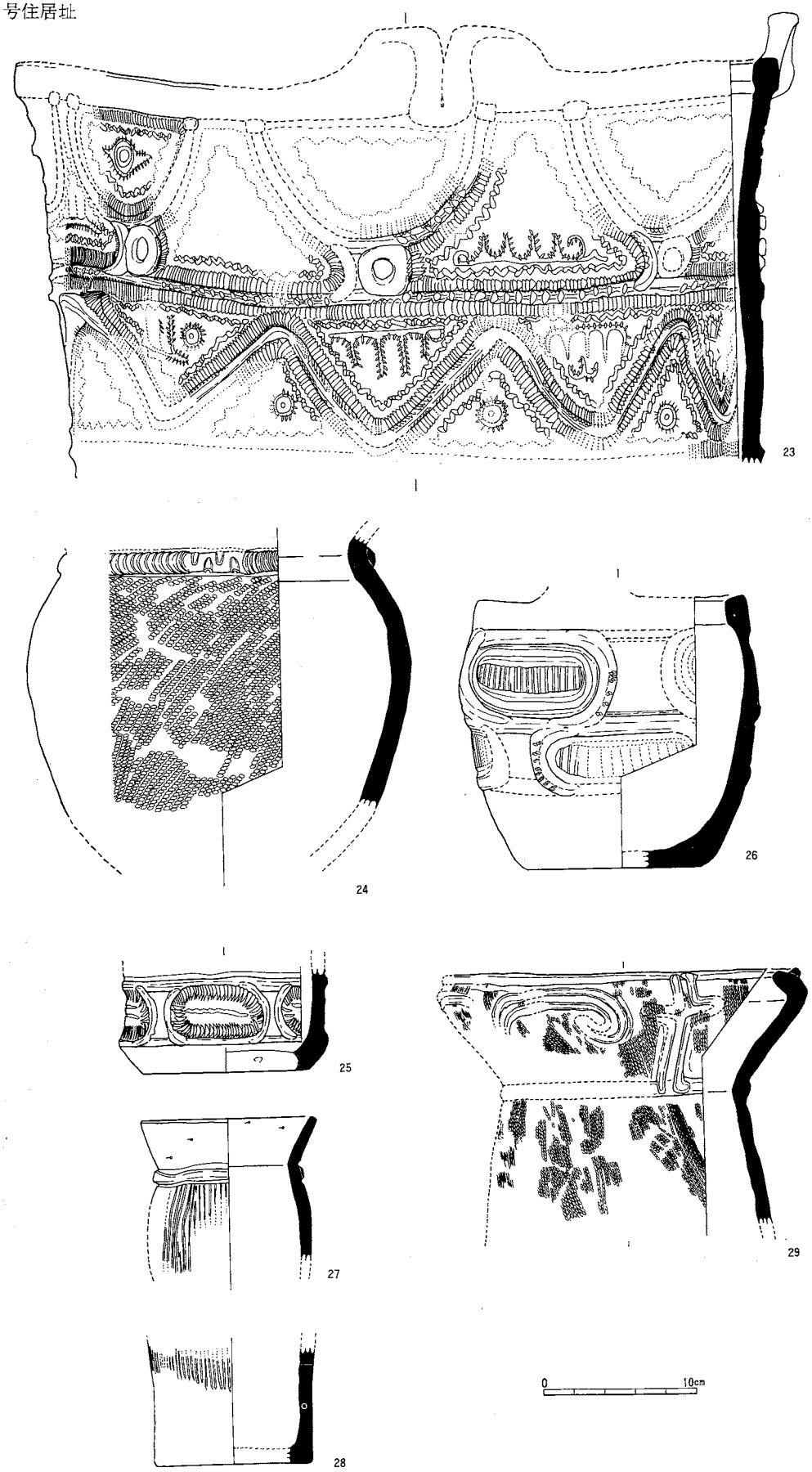


図47　縄文時代中期土器実測図(6)　　第７号住居址出土　(2)　１：４

第７号住居址

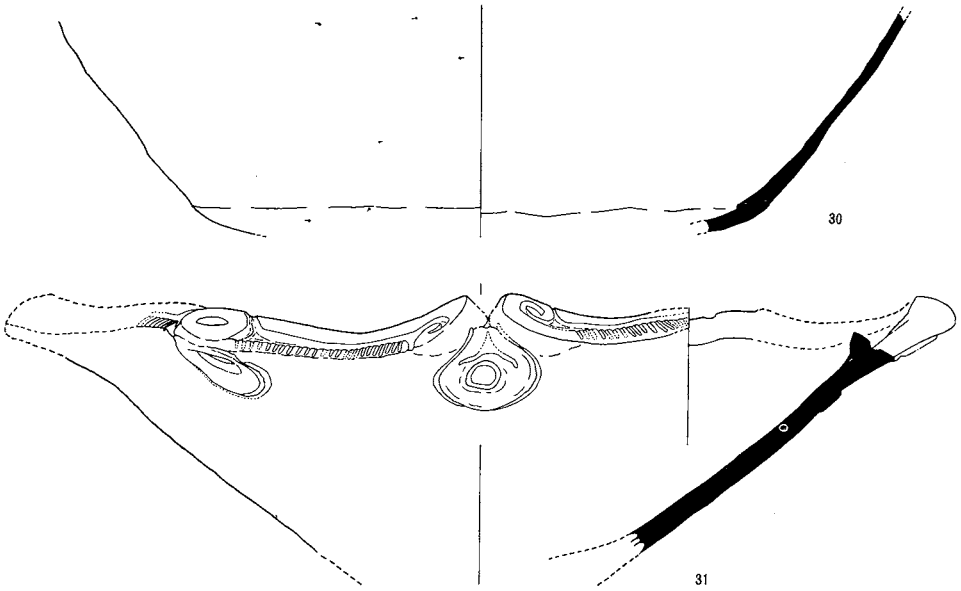


図48　縄文時代中期土器実測図(7)　　第７号住居址出土　(3)　１：４

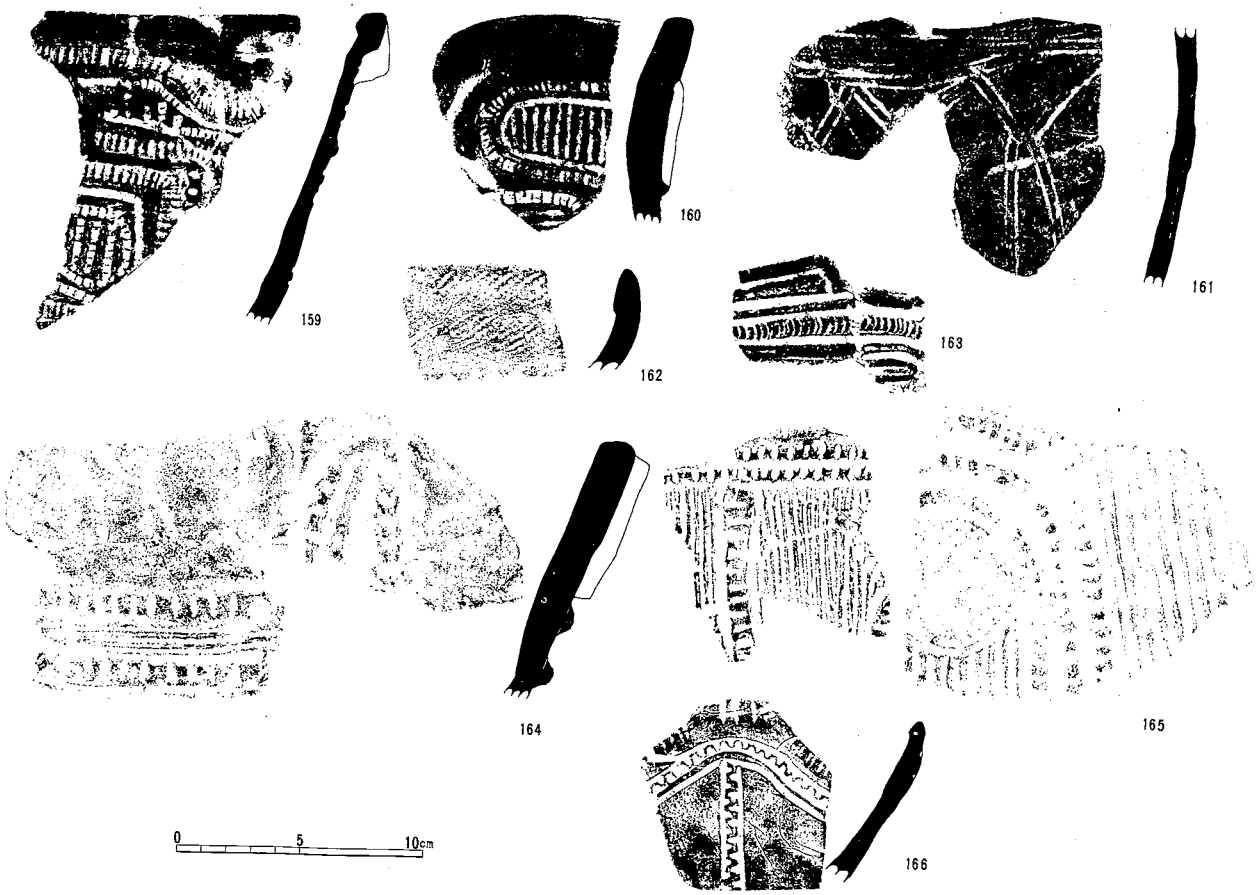


図49　縄文時代中期土器拓影図(2)　　第７号住居址出土　１：３

第７号住居址

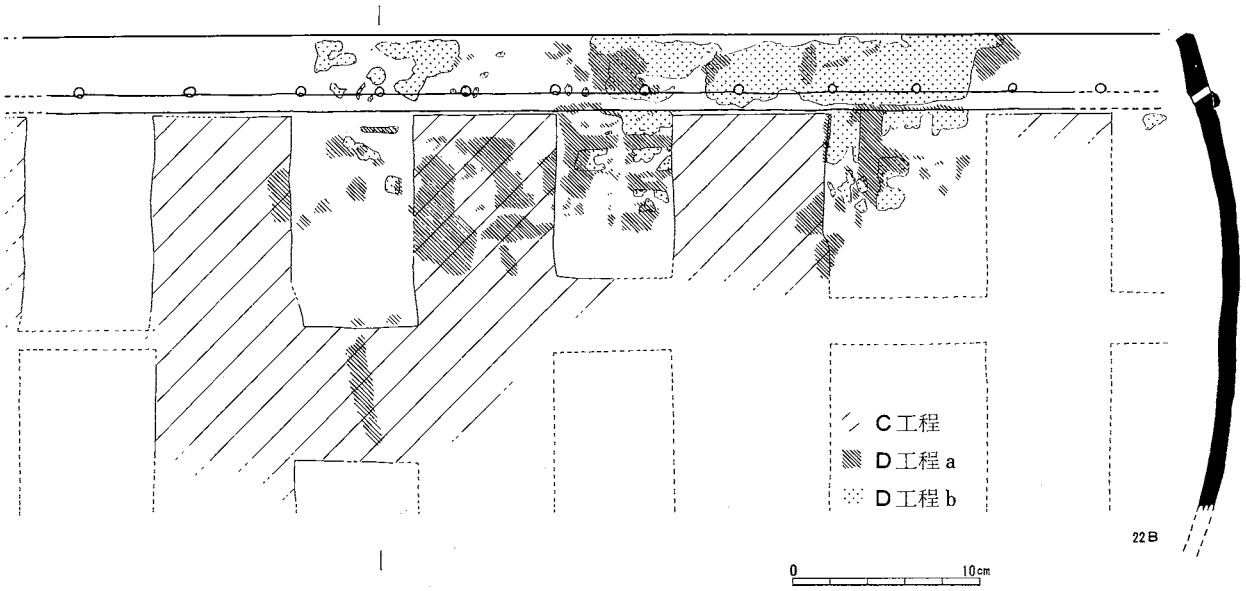


図50　土器No.22の展開模式図　第７号住居址出土　１：４

第９号住居址

第10号住居址

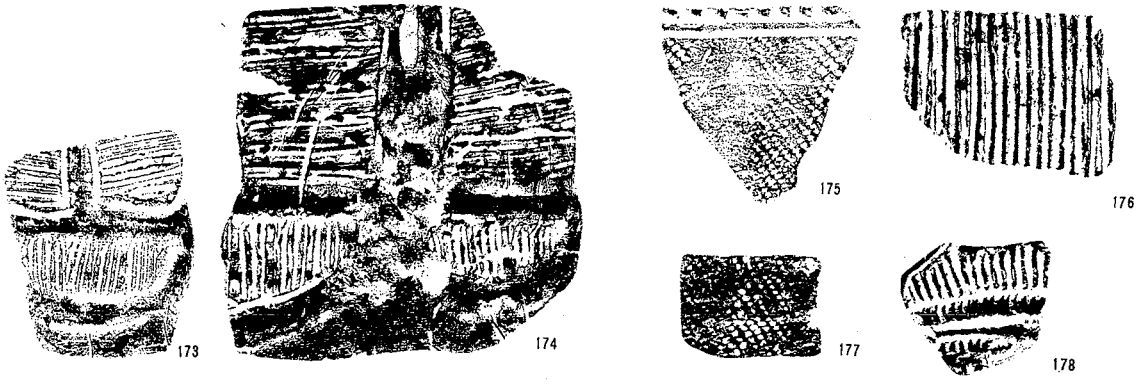


図51　縄文時代中期土器拓影図(3)　第９・10号住居址出土　１：３

第10号住居址　　第11号住居址

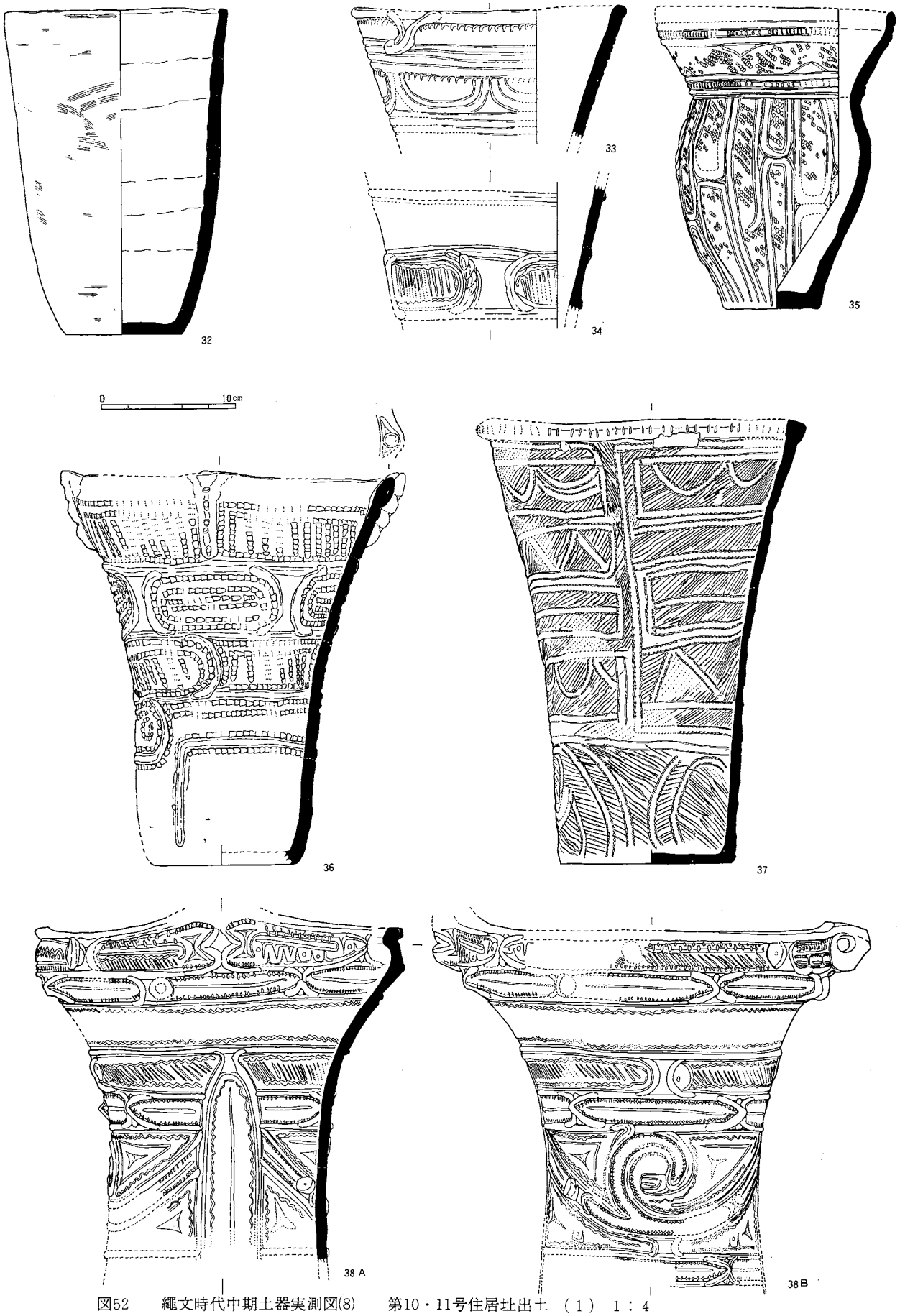


図52　縄文時代中期土器実測図(8)　第10・11号住居址出土（１）１：４

第11号住居址

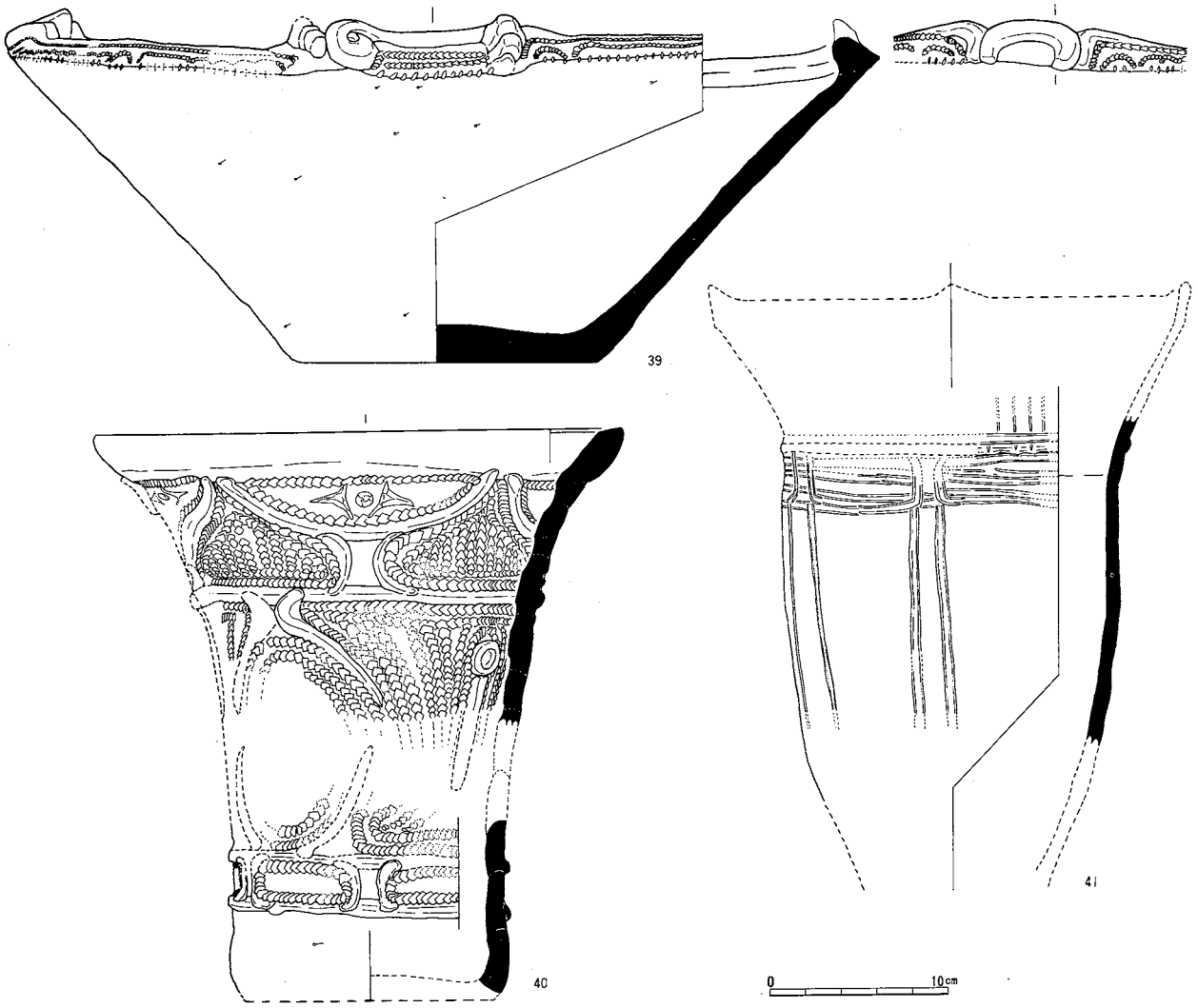


図53　縄文時代中期土器実測図(9)　第11号住居址出土　(2)　1：4

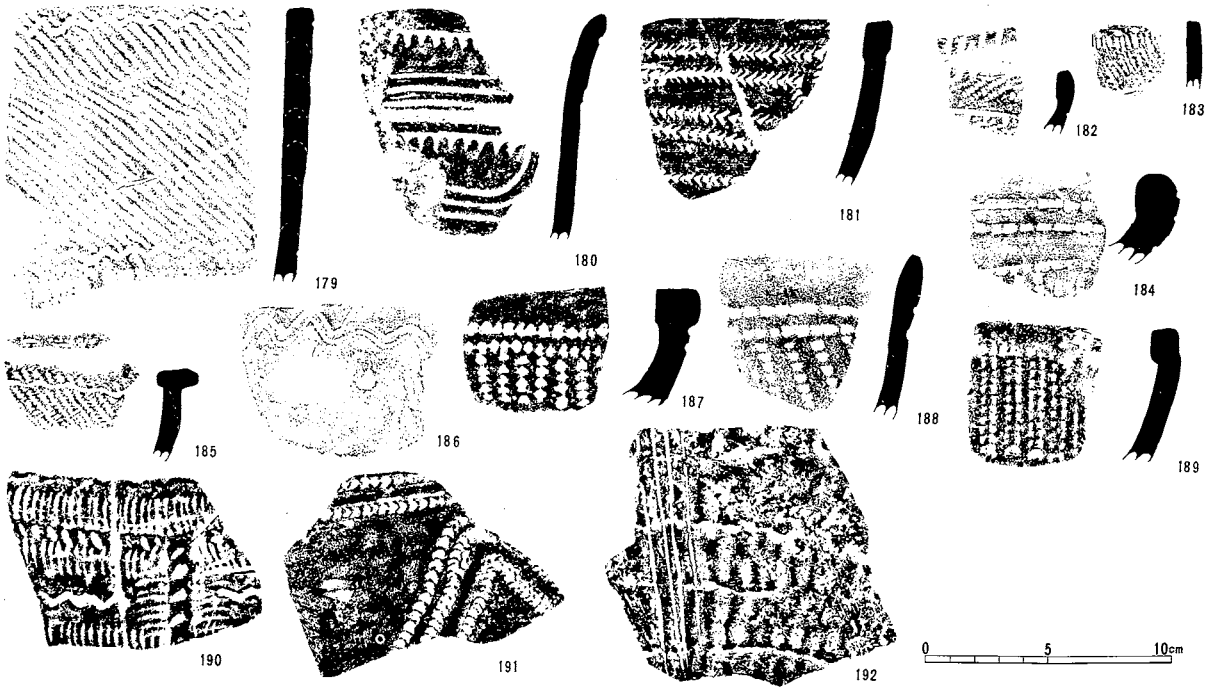


図54　縄文時代中期土器拓影図(4)　第11号住居址出土　1：3

第16～19号住居址

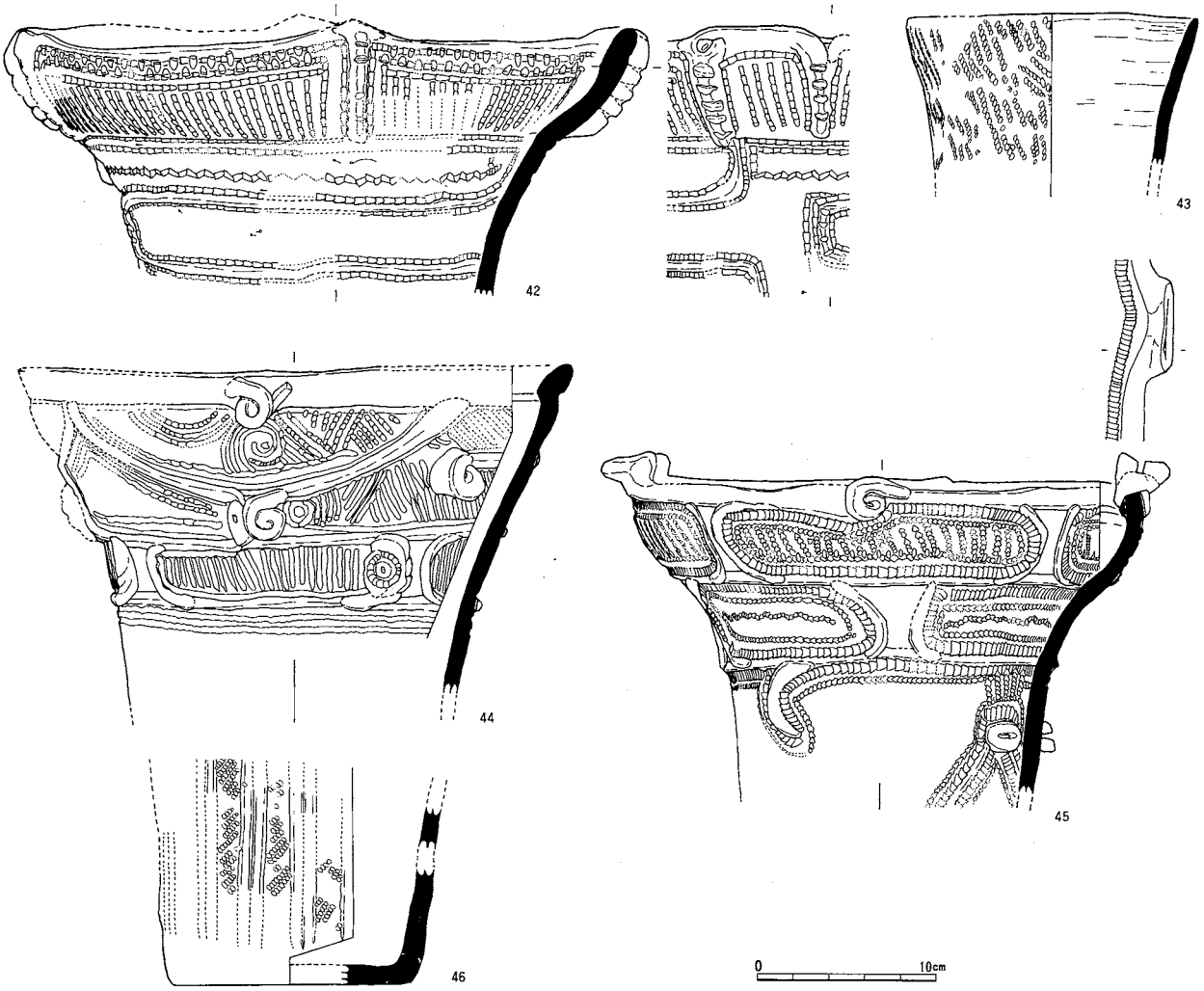


図55　縄文時代中期土器実測図(10)　第16～19号住居址出土　１：４

42・43―第16号住居址　44―第17号住居址　45―第18号住居址　46―第19号住居址

第16号住居址

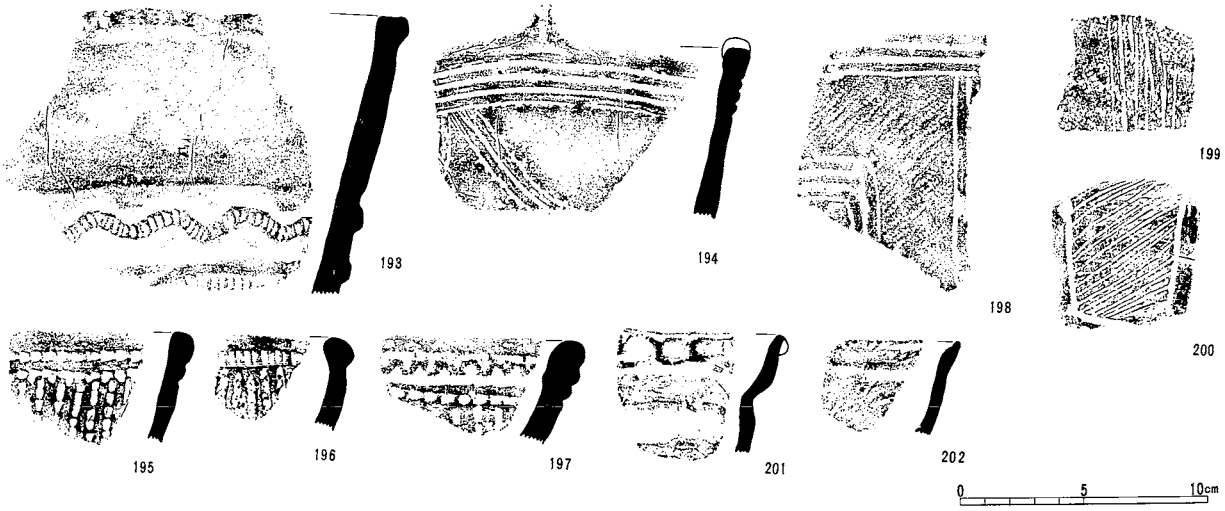
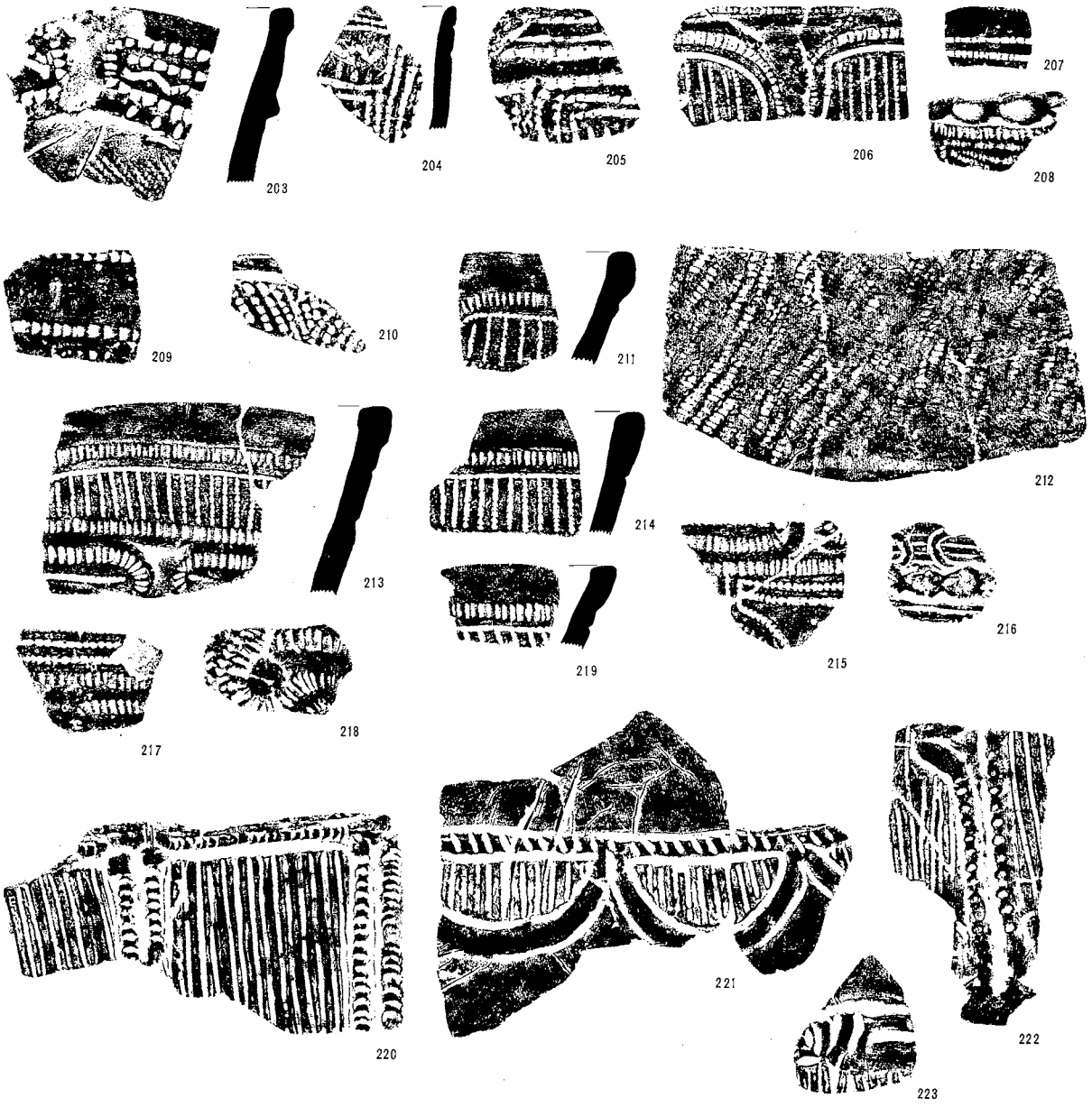
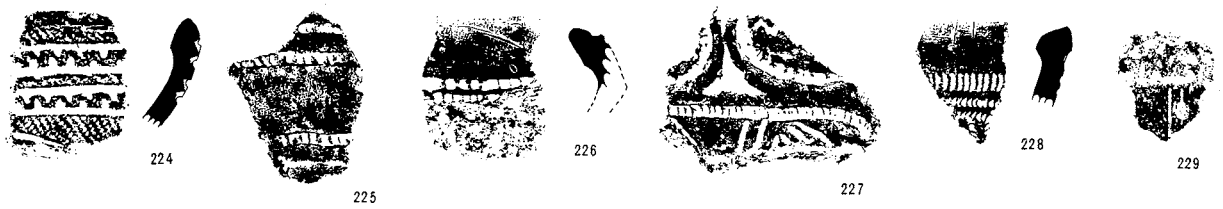


図56　縄文時代中期土器拓影図(5)　第16号住居址出土　１：３

第17号住居址



第18号住居址



第19号住居址

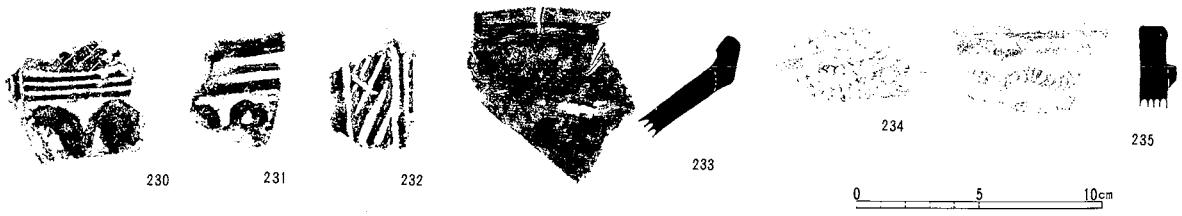


図57　縄文時代中期土器拓影図(6)　第17～19号住居址出土　1：3

土壙

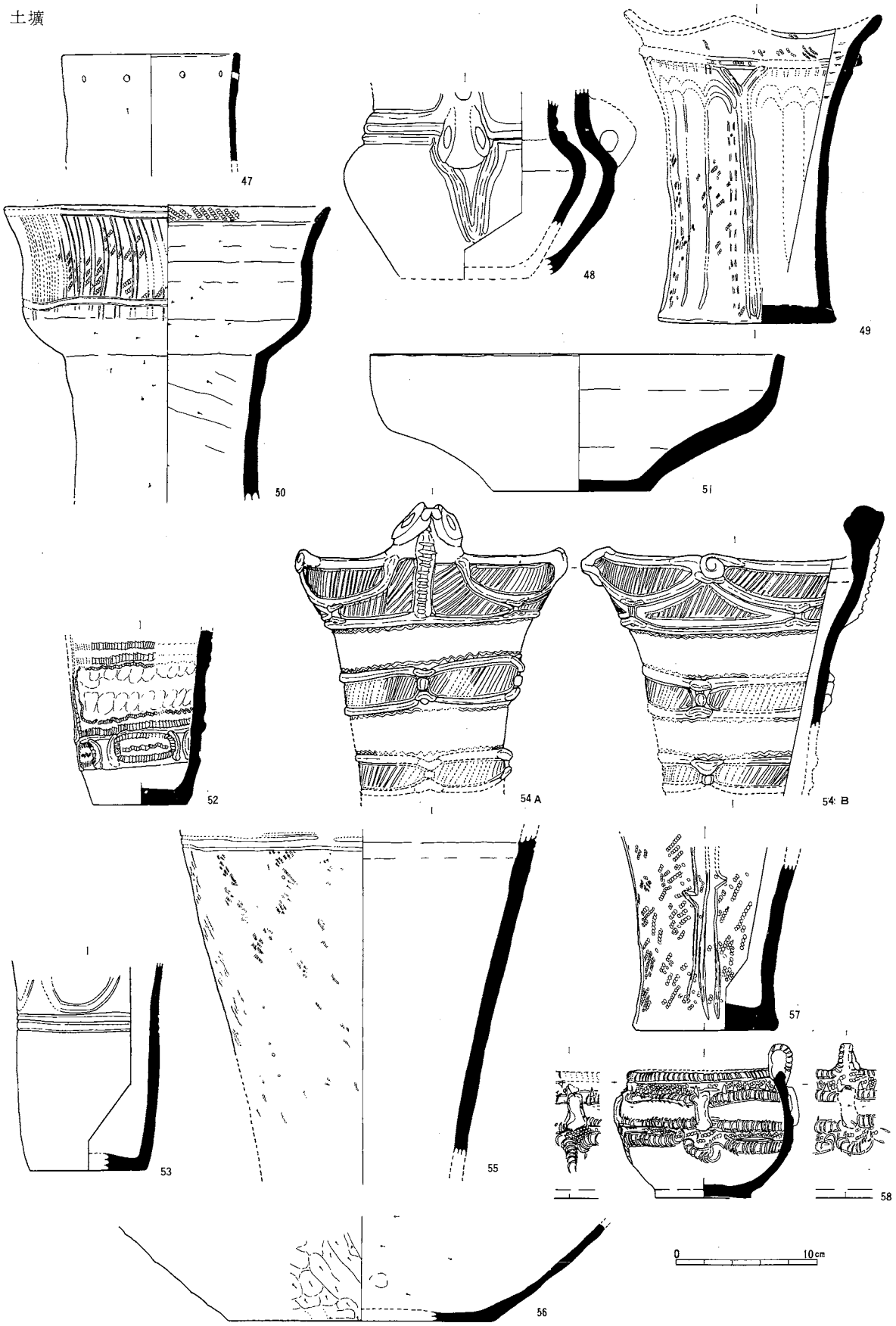


図58　縄文時代中期土器実測図(11)　　土壙出土　１：４

47－土壙23　48－土壙53　49－土壙55　50－土壙58　51－土壙59　52－土壙64　53－土壙71　54－土壙73
55－土壙81　56－土壙88　57－土壙103　58－土壙112

土壙

図59　縄文時代中期土器拓影図(7)　　土壙出土　1：3

遺構外

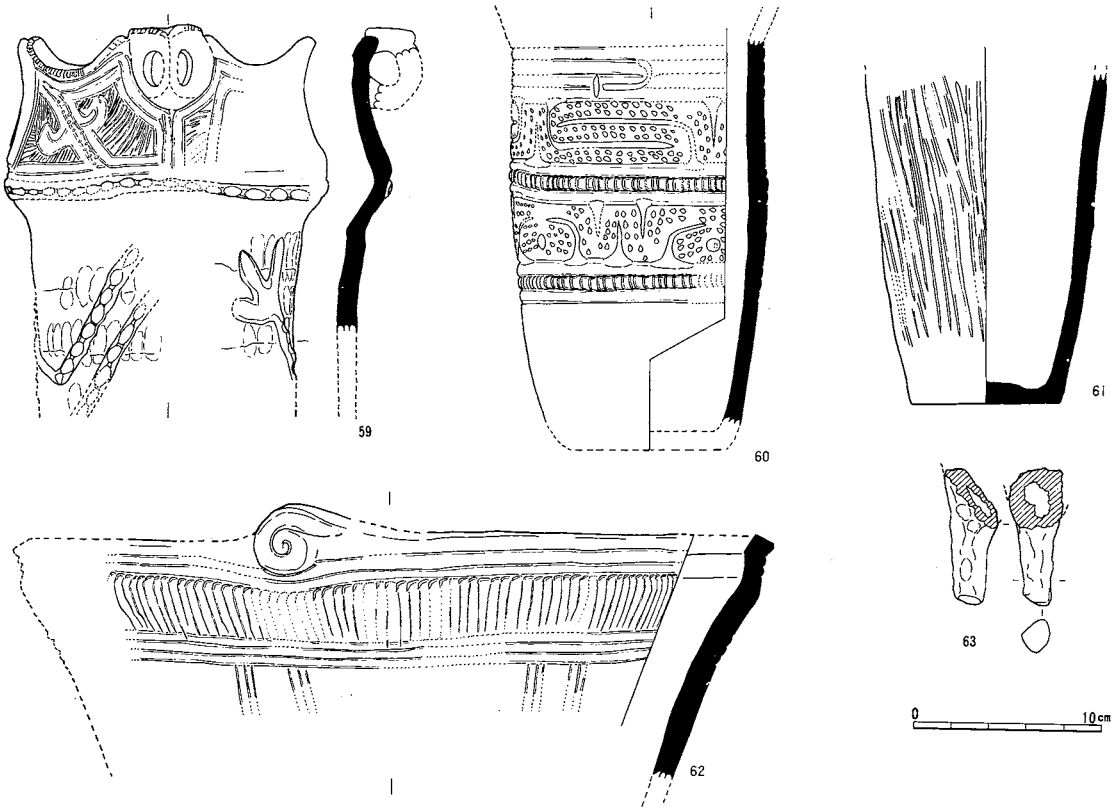


図60　縄文時代中期土器・土製品実測図(12)　　遺構外出土　１：４

9　縄文時代中期の遺物

1）土器

土器の概要は実測図と観察表で表記し、拓本で補足した。観察表中の内容に関する記号や分類については、第II章第1節5及び12で説明する。

観察表の表記方法

器形…器種・器形分類・容積分類を記号で連記した。容)は容積算出値（( )は推定値)、厚)は器厚計測値である。
胎土…外)・内)は外面・内面の色調で、顕著な色調変化は、「上半の色調－下半の色調」の順に記した。混)は混和材の総量の目安と目立つ混和材（( )は少量ながら目立つ混和材）である。
成形…ロ)・底)は口縁部・底部の成形方法や形態で記号で連記した。
整形…外)・内)は外面・内面の整形方法、底)は底部外面／同内面の整形方法で、行なわれる順に→で示した。
文様…文様要素の施文順序を→で示した。中期第3・4類及それと同タイプの土器はA～Dの工程毎にまとめ、A工程は文様帯毎に、B工程は文様の単位（ⓐ～ⓓ）毎にそれぞれ施文順序を示し、中期第8類はA～Eの工程毎に施文順序を示した。順)は工程の順位で、〔 〕内は中期第3・4類B工程の文様の単位の順位である。単)は単位数である。〈ロ〉〈頸〉〈胴〉は口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部文様帯を指す。工具を用いた文様要素は「工具の種類・使用面（幅㎜）手法」の順に連記した。工具のうち円形竹管は工具A、半截竹管は工具B、多截竹管は工具C、内そぎ竹管は工具E、側面加工竹管は工具Fをそれぞれ指す。

中期土器観察表

No.　3　1号住居址　分類　第3類 器形　深鉢C_2IV　容)(1.0ℓ)　厚)8㎜ 胎土　外)橙色　内)褐色　混)多　ABCDE(F) 成形　積上　ロ)c1　底)— 整形　外)オサエa　内)ナデc	文様　A…〈ロ〉把手→横位—周隆帯・下向弧状隆帯→把手加飾・縦位隆帯, B…ⓐは半截竹管背面(3㎜)の結節沈線b，ⓑは円形竹管背面(2㎜)の結節沈線b，ⓒは円形竹管背面(2㎜)の結節沈線b, C…縄文はRL・横位, 順)A→B〔ⓐ→ⓑ・ⓒ，I型〕・C，単)〈ロ〉同—4単位？，把手は2種—対, 備考　炭化物付着
No.　4　1号住居址　分類　第4類 器形　深鉢C_3III　容)(4.0ℓ)　厚)10㎜ 胎土　外)橙色　内)橙色　混)並　CG(H) 成形　積上　ロ)di2　底)— 整形　外)ナデb　内)ナデc 備考	文様　A…〈ロ〉横位—周隆帯→下向弧状隆帯→瘤（又は縦位隆帯）→隆帯上の押圧，〈胴〉横位—周隆帯→波状隆帯, B…$ⓐ_1$は多截竹管背面(10.5㎜)の結節沈線C_2，$ⓐ_2$は工具不明(4㎜)の沈線(f_2)，ⓑは半截竹管腹面(6.5㎜)の刺突(g_2)，$ⓒ_1$は工具不明(2㎜)の沈線(f_2)，$ⓒ_2$は工具不明の陰刻, 順)A→B〔〈ロ〉$ⓐ_1$→ⓑ→$ⓒ_1$→$ⓒ_2$，〈頸〉$ⓒ_1$→$ⓐ_2$，〈胴〉$ⓐ_1$→$ⓒ_2$，II型〕，単)〈ロ〉同—8単位，〈胴〉同—4～5単位？,
No.　5　1号住居址　分類　第4類 器形　深鉢C_1IV　容)4.0ℓ　厚)8㎜ 胎土　外)橙色　内)褐色　混)並　BCDEG 成形　積上　ロ)c1　底)？ 整形　外)オサエ→ナデb　内)ナデc→ミガキc 備考　外)炭化物付着　内)全面炭化物付着	文様　A…〈ロ〉突起→突起を結ぶ横位隆帯(図正面起点、逆時計回転順)・突起加飾，〈頸〉横位—周隆帯→縦位隆帯→隆帯上の押圧，〈胴〉横位—周隆帯→斜位の長い隆帯(図裏面起点、時計回転順）→図正面の横位の一周しない隆帯→縦位の短い隆帯→隆帯上の押圧, B…ⓐは側面加工竹管背面(4㎜)の結節沈線C，ⓑ・ⓒは内そぎ竹管背面(3.5㎜)の結節沈線C, 順)A→B〔ⓐ→ⓑ→ⓒ，ⓐ→ⓒ，I型〕，単)〈ロ〉B工程は2種4単位を3対1に配置，突起は2種交互2対，〈頸〉同—4単位，〈胴〉2種4単位を3対1の割合で配置するのが原則らしいが文様帯が融合し不規則,
No.　6　1号住居址　分類　第4類 器形　深鉢C_2III，　容)(8.0ℓ)　厚)9㎜ 胎土　外)褐色　内)にぶい褐色　混)並　ABCD 成形　積上　ロ)c3　底)— 整形　外)オサエ→ナデb　内)ナデc 備考	文様　A…〈ロ〉図正面の突起・下段の横位—周隆帯（図正面起点、時計回転順）→残りの突起・突起を結ぶ中段の隆帯→縦位隆帯，〈胴〉横位—周隆帯→縦位隆帯, B…ⓐ・$ⓒ_1$は内そぎ竹管(4㎜)の結節沈線b・c，ⓑ・$ⓒ_2$は内そぎ竹管(3㎜)の結節沈線b・c，$ⓒ_3$は内そぎ竹管(2㎜)の結節沈線・沈線, 順)A→B〔〈ロ〉ⓐ→ⓑ→$ⓒ_2$・$ⓒ_3$，〈胴〉ⓐ・$ⓒ_1$，I型〕，単)〈ロ〉同—4単位で単位内を上段は2分・下段は3分，突起は大2種交互2対・小4個，〈胴〉同—2又は4単位,
No.　7　1号住居址　分類　第1・2類 器形　深鉢　容)—　厚)9㎜ 胎土　外)にぶい赤褐色　内)明褐色　混)並　ABCEH	成形　積上　ロ)—　底)— 整形　外)ケズリ→ナデb　内)ナデc 文様　無文 備考
No.　8　1号住居址　分類　第8類 器形　深鉢EIII　容)(4.5ℓ)　厚)6㎜ 胎土　外)褐色　内)にぶい褐色　混)並　BCD(G) 成形　積上　ロ)c0　底)— 整形　外)ナデb　内)ナデb→ミガキc 備考　外・内)タール状炭化物付着	文様　A…〈ロ〉横位—周隆帯→突起→突起上の押圧（半截又は円形竹管背面（5㎜)), B…〈頸・胴〉縄文はRLで縦位, C…刺突（f_2）→深い沈線，C～Eは同一工具・半截竹管腹面(5㎜), D…浅い縦位沈線→浅い横位沈線, E…上段の深い横位沈線→下段の深い斜位沈線→上段の深い短線と弧線・下段の波状垂線と短弧線→下段下部の縦位沈線・下段下部の横位沈線, 順)A→B→C→D→E，単)〈ロ〉同—4単位，〈胴〉同—8単位,
No.　9　1号住居址　分類　第4類 器形　深鉢C_1III　容)(6.5ℓ)　厚)10㎜ 胎土　外)暗赤褐色　内)暗赤褐色　混)並　ABCDEFG 成形　積上　ロ)c2　底)— 整形　外)ナデb　内)ナデb 備考　内)炭化物付着	文様　A…〈ロ〉突起につながる横位隆帯→突起と加飾・横位—周隆帯→縦位隆帯→隆帯上の沈線，〈胴〉横位—周隆帯→縦位隆帯と加飾→隆帯上の沈線, B…ⓐ・$ⓑ_1$は工具不明(4㎜)の結節沈線e，$ⓑ_2$・$ⓒ_1$は工具はⓐと同じ沈線，$ⓒ_2$は尖端な工具の刺突(g_2)・$ⓒ_3$は工具・手法共$ⓑ_2$に同じ→工具不明の陰刻, 順)A→B〔〈ロ〉ⓐ・$ⓒ_1$→$ⓑ_1$，ⓐ→$ⓑ_2$→$ⓒ_2$，ⓐ→$ⓒ_3$，〈胴〉ⓐ，$ⓒ_1$→ⓐ，$ⓒ_1$，II型〕，単)〈ロ〉B工程は3種以上不規則配置4単位，突起は2種交互2対，〈胴〉同—2単位,

No. 10　1号住居址　分類　第４類 器形　浅鉢A_2Ⅰ　容)10.5ℓ　厚)11㎜ 胎土　外)赤褐色　内)明赤褐色　混)多　ＡＢＤ(F)(G) 成形　積上　口)ｄ３　底)？ 整形　外)ケズリ→ナデｂ　内)ナデｃ　底)？／ナデｃ	文様　Ａ…〈ロ〉隆帯→隆帯上・口端の刻目（工具不明（３㎜））， Ｂ…ⓐ・ⓑは内そぎ竹管背面（４㎜）の結節沈線ｂ，ⓒは内そぎ竹管背面（２㎜）の刺突（g_2）， 順）Ａ→Ｂ〔ⓐ・ⓑ→ⓒ，Ⅰ型〕単）同一４単位で単位内を３分割，突起は２種交互２対， 備考
No. 11　1号住居址　分類　第３類 器形　浅鉢A_1Ⅰ　容)（15.0ℓ）　厚)10㎜ 胎土　外)明黄褐色　内)明黄褐色　混)並　ＡＢＣＤＥ(G) 成形　積上　口)Ｃ２　底)－ 整形　外)ケズリ→ナデｂ　内)ナデｃ， 備考　補修孔１ヶ、（内外双方より回転穿孔）	文様　Ｂ…ⓐ・ⓑ・ⓒは円形竹管（３㎜）の結節沈線ｂ， 順）Ｂ〔ⓐ・ⓑ→ⓒ，Ⅰ型〕，単）同一16単位？，
No. 12　3号住居址　分類　第３類 器形　深鉢C_2Ⅲ　容)（7.0ℓ）　厚)９㎜ 胎土　外)暗赤褐色　内)にぶい赤褐色　混)並　ＡＢＣＤ 成形　積上　口)Ｃ３　底)－ 整形　外)ケズリ→オサエ→ナデａ・ｂ　内)ナデｂ 備考	文様　Ａ…〈ロ〉突起→突起を結ぶ横位隆帯→口端の押圧，〈胴〉横位一周隆帯→縦位隆帯・下段の隆帯， Ｂ…ⓐは多截竹管背面（7.5㎜）の結節沈線ｃ，ⓑ・ⓒは半截竹管背面（５㎜）の結節沈線ｃ 順）Ａ→Ｂ〔ⓐ→ⓑ→ⓒ，Ⅰ型〕，単）〈ロ・胴〉同一４単位，突起は２種交互２対，
No. 13　3号住居址　分類　第３類 器形　深鉢C_1Ⅲ　容)5.6ℓ　厚)７㎜ 胎土　外)にぶい褐－にぶい黄橙色　内)にぶい褐－橙色　混)少　Ｄ 成形　積上　口)ｂ２　底)？ 整形　外)ケズリ→オサエ→ナデａ→ミガキｃ　内)ナデａ→ミガキｃ 備考　内)炭化物付着	文様　Ａ…〈ロ〉横位一周隆帯→〔半円状隆帯・短弧状隆帯→斜位隆帯→瘤〕・〔〕の順を繰返し一周（図正面起点、逆時計回転順），〈胴〉横位一周隆帯→斜位・縦位隆帯・下段の縦位隆帯→隆帯上の押圧（工具不明（4.5㎜））， Ｂ…ⓐ・ⓑ・ⓒ共半截竹管背面（4.5㎜）の結節沈線ｃ， 順）Ａ→Ｂ〔ⓐ・ⓑ・ⓒ〕，単）〈ロ・頸〉同一４単位，〈胴〉不明，
No. 14　3号住居址　分類　第８類 器形　深鉢EⅡ　容)（15.0ℓ）　厚)７㎜ 胎土　外)明黄褐色　内)淡黄色　混)並　ＡＢ(F)H 成形　積上　口)ｃ０　底)－ 整形　外)ケズリ→ナデａ　内)ケズリ→ナデａ 備考	*A*…〈ロ〉横位一周隆帯→突起→突起上の押圧（*C*～*E*と同一工具の背面）， *B*…縄文はＲＬで方向不定， *C*…浅い横位沈線→同縦位短線，*C*～*E*は同一工具，半截竹管腹面（７㎜）， *D*…浅めの縦位沈線， *E*…浅い横位沈線（図正面起点、逆時計方向順）→深い縦位短線（中央→両側）→浅い縦位沈線→横位沈線修正， 順）*A*→*B*→*C*→*D*→*E*，単）〈ロ・胴〉同一４単位，
No. 15　4号住居址　分類　第３類 器形　深鉢B_2Ⅲ　容)6.7ℓ　厚)８㎜ 胎土　外)極暗赤褐－橙色　内)赤褐－暗赤褐色　混)並　ＡＢＣＦ(H) 成形　積上　口)ｃ２　底)？ 整形　外)ケズリ→ナデａ　内)ナデｃ　底)ケズリ→ナデ／オサエ→ナデ 備考　内)炭化物付着	文様　Ａ…〈ロ〉突起・円形隆帯→同加飾→突起・円形隆帯を結ぶ横位隆帯→再加飾→押圧（工具はＢⓐと同一か？），〈胴〉横位一周隆帯→縦位隆帯・下段の円形隆帯→加飾→押圧（工具はＢⓐと同一か？）， Ｂ…ⓐ・ⓑは半截竹管背面（3.5㎜）の結節沈線ｂ，$ⓒ_1$は工具不明（２㎜）の結節沈線（逆時計回転順），$ⓒ_2$は半截竹管背面（3.5㎜）の結節沈線ｂ， 順）Ａ→Ｂ〔ⓐ→ⓑ→$ⓒ_1$・$ⓒ_2$，Ⅰ型〕，単）〈ロ〉同一４単位、突起・円形隆帯は交互２対，〈胴〉同一４単位、下段は２種交互２対，
No. 16　4号住居址　分類　第８類 器形　深鉢EⅡ　容)（15.5ℓ）　厚)７㎜ 胎土　外)明褐色　内)明褐色　混)並　ＡＢＦ 成形　積上　口)－　底)－ 整形　外)オサエ→ケズリ→ナデｂ　内)オサエ→ケズリ→ナデｂ 備考	文様　*B*…縄文はＲＬ、横位， *D*…浅い縦位沈線，*D*・*E*は同一工具、半截竹管腹面（4.5㎜）， *E*…浅い横位沈線（中央→両側、図正面左寄りを起点に逆時計回転順）→縦位短線・縦位沈線（右側→左側）， 順）*B*→*D*→*E*，単）〈胴〉同一８単位，
No. 17　4号住居址　分類　第８類 器形　深鉢EⅢ　容)（7.0ℓ）　厚)６㎜ 胎土　外)にぶい黄色　内)にぶい黄色　混)並　ＡＢＥＦ 成形　積上　口)－　底)ａ？ 備考	整形　外)オサエ→ケズリ→ナデｂ　内)オサエ→ケズリ→ナデａ　底)オサエ→ナデ／オサエ→ナデ 文様　*D*…浅い縦位沈線，*D*・*E*は同一工具で半截竹管腹面（４㎜）， *E*…浅い横位沈線→浅い縦位沈線， 順）*D*→*E*，単）〈胴〉同一４単位，
No. 18　4号住居址　分類　第８類 器形　深鉢EⅢ　容)（4.5ℓ）　厚)６㎜ 胎土　外)明黄褐色　内)にぶい黄褐色　混)並　ＡＢＤ(F)H 成形　積上　口)ａ０　底)－ 整形　外)ケズリ→ナデｂ　内)ナデｂ 備考	文様　*A*…〈ロ〉突起→横位一周隆帯→突起上の押圧（*C*～*E*と同一工具の背面？）， *C*…深い横位沈線→深い縦位沈線（逆時計回転順），*C*～*E*は同一工具、半截竹管腹面（6.5㎜）， *D*…浅い縦位沈線（図正面左側を起点に時計回転順）→浅い横位一周沈線， *E*…浅い横位一周沈線→浅い縦（斜）位沈線→縦位短線， 順）*A*→*C*→*D*→*E*，単）〈ロ〉同一４単位，〈胴〉同一８単位，
No. 19　4号住居址　分類　第３類 器形　深鉢D　容)－　厚)８㎜ 胎土　外)にぶい褐色　内)にぶい褐色　混)並　ＣＤＥ 成形　積上　口)ｂ３　底)－ 整形　外)ナデ　内)ケズリ→ナデｂ→ミガキｃ	文様　Ａ…把手→加飾（陰刻を含む）・把手を結ぶ横位隆帯→縦位隆帯， Ｂ…ⓐは多截竹管背面（6.5㎜）の結節沈線ｃ，ⓒは半截竹管背面（４㎜）の結節沈線ｂ 順）Ａ→Ｂ〔ⓐ→ⓒ，Ⅰ型〕，単）不明 備考　外)炭化物付着

No. 20　7号住居址　分類　第4類
器形　深鉢AI　容)30.3ℓ　厚)10㎜
胎土　外)にぶい赤褐－橙色　内)褐色　混)並　CDE(G)
成形　積上　ロ)a 2　底)？
整形　外)(積上痕)→ケズリ→ナデb　内)ナデc　底)ナデb／ナデ
備考　内)下半全面に炭化物多量付着

文様　A…〈ロ〉突起・隆帯→突起上の沈線（工具不明）・結節沈線（工具・手法はBと同一？），〈胴〉波状隆帯上段→波状隆帯下段（図正面左上方を起点に時計回転順）→横位隆帯，
B…ⓐは多截竹管背面（9㎜）の結節沈線c_1，$ⓒ_1$は縄文でRL横位（時計方向），$ⓒ_2$は$ⓒ_1$と同一原体でやや左傾した縦位（逆時計回転順、区画により上→下と下→上とがある），
順)A→B〔〈ロ〉ⓐ・$ⓒ_1$，〈胴〉$ⓒ_2$→ⓐ，II型〕，単)〈ロ〉突起は2種交互2対，〈胴〉同一8単位，

No. 21　7号住居址　分類　第8類
器形　深鉢EIII　容)6.0ℓ　厚)6㎜
胎土　外)にぶい黄褐－明黄褐色　内)褐色　混)並　ABDF
成形　積上　ロ)c 0　底)？
整形　外)オサエ→ケズリ→ナデa→ナデb　内)ナデc　底)ナデb／オサエ→ナデ

文様　*A*…〈ロ〉突起→押圧（*C*～*E*と同一工具の背面），〈胴〉横位一周隆帯→押圧（ユビ？），
C…浅い結節沈線、半截竹管腹面（5.5㎜），*C*～*E*は同一工具，
D…浅い縦位沈線（逆時計回転順）→深い横位沈線（逆時計回転順），
E…浅い横位沈線→深い縦位短線・浅い縦位沈線，
順)*A*→*C*→*D*→*E*，単)〈ロ・胴〉同一4単位，
備考　外)炭化物付着　内)下半全面に炭化物付着

No. 22　7号住居址　分類　第4類
器形　有孔鍔付土器　容)(9.0ℓ)　厚)8㎜
胎土　外)橙色　内)橙色　混)並　CDEG
成形　積上→穿孔・隆帯（鍔）貼付　ロ)a 0　底)－
整形　外)ナデc→(施文→ミガキa)　内)ナデc→ミガキa

文様　A…（鍔貼付）
C…縄文はRL（長さ4～5㎝）・縦位（上→下）で逆時計回転順→ミガキは縦位で区画の上・下端は横位，
D…黒色塗料塗布（a）→赤色塗料塗布（b），
順)(A)→C→D，単)同一5単位（塗料で描かれる文様の単位は不明）

No. 23　7号住居址　分類　第4類
器形　深鉢AI又は鉢　容)20.7ℓ以上　厚)11㎜
胎土　外)橙色　内)明赤褐色　混)並　BE
成形　積上　ロ)a 4　底)－
整形　外)ナデc　内)ナデb
備考

文様　A…〈ロ〉突起・横位一周隆帯・下向弧状隆帯→縦位隆帯・加飾→押圧，〈胴〉横位隆帯→波状隆帯→波頂部加飾，
B…ⓐは側面そぎ竹管背面（11.5㎜）の結節沈線c_2，ⓑは内そぎ竹管背面（3㎜）の結節沈線e，ⓒは工具不明の沈線→陰刻→工具不明の刺突（g_2），
順)A→B〔ⓐ→ⓑ→ⓒ，I型〕，単)〈ロ〉A工程は同一8単位，B工程の種類・配置は不明，〈胴〉A工程は12単位前後で割付ミスあり，B工程は上半4種以上・下半2種以上で配置不明，

No. 24　7号住居址　分類　第5類
器形　深鉢　容)－　厚)12㎜
胎土　外)暗赤褐－赤褐色　内)暗赤褐色　混)多　ABDE(F)
成形　積上　ロ)－　底)－
整形　外)？　内)ユビナデ→ナデb

文様　A…〈胴〉横位一周隆帯→竹管腹面（12㎜）の連続押圧・円形竹管又は丸棒（5㎜）の刺突（f_2），
C…ⓐは工具不明（3㎜）の沈線（f_2），ⓒは縄文でRL・縦位，
順)A→C〔ⓒ→ⓐ，II型〕，単)不明
備考　内)炭化物付着

No. 25　7号住居址　分類　第4類
器形　深鉢　容)－　単)8厚)
胎土　外)橙色　内)橙色　混)並　CDE(G)
成形　積上　ロ)－　底)？
整形　外)ナデb　内)ナデc　底)ケズリ→ナデ／ケズリ→ナデb

文様　A…〈胴〉横位一周隆帯→縦位隆帯，
B…ⓐは多截竹管背面（10㎜）の結節沈線c_2，ⓒは工具不明（3㎜）の波状沈線（f_2），
順)A→B〔ⓐ→ⓒ，I型〕，単)同一5単位，
備考　内)炭化物付着

No. 26　7号住居址　分類　第6類
器形　鉢　容)2.9ℓ　厚)11㎜
胎土　外)赤色　内)にぶい赤褐色　混)並　CE
成形　積上　ロ)a 4　底)？
整形　外)ナデb　内)ナデb　底)ナデb／ナデb

文様　A…〈ロ・胴〉横位一周隆帯→縦位隆帯→縄文（原体不明），
B…ⓐ・ⓑはⓒと同一工具背面？（5㎜）の沈線でミガキも兼ねる，ⓒは半截竹管腹面（5㎜）の沈線（逆時計回転順），
順)A→B〔ⓐ・ⓒ→ⓑ，II型〕，単)〈ロ・胴〉同一4単位，突起1単位，
備考

No. 27　7号住居址　分類　第7類
器形　深鉢IV　容)(0.5ℓ)　厚)7㎜
胎土　外)にぶい赤褐色　内)極暗赤褐色　混)並　CE(G)
成形　積上　ロ)b 0　底)－

整形　外)ケズリ→ナデa・b　内)ナデa
文様　工程は第3・4類に似るが同一かどうか不明，
横位一周隆帯→半截竹管腹面（5.5㎜）の沈線（逆時計回転順）→隆帯裾の沈線（工具不明），単）なし，
備考

No. 28　7号住居址　分類　第7類
器形　深鉢　容)－　厚)9㎜
胎土　外)にぶい赤褐色　内)極暗赤褐色　混)並　ACD(G)
成形　積上　ロ)－　底)c ？

整形　外)ナデb　内)ナデa　底)ナデb／ナデa
文様　工程は不明，
半截竹管腹面（4㎜）の沈線，単）不明，
備考

No. 29　7号住居址　分類　第7類
器形　深鉢III　容)5.0ℓ以上　厚)8㎜
胎土　外)にぶい赤褐色　内)にぶい赤褐色　混)並　ADFH
成形　積上　ロ)d ii 3　底)－
整形　外)ナデb　内)ナデc

文様　工程は第3・4類に似るが同一かどうか不明，
横位一周隆帯→撚糸（Rでわずかに左傾した縦位、軸への巻きつけはR）→諸モチーフの隆帯→隆帯裾の沈線やミガキ（工具不明），単）近似した2単位？，
備考

No. 30　7号住居址　分類　第？類
器形　浅鉢　容)－　厚)7㎜
胎土　外)にぶい橙色　内)にぶい橙色　混)並　AFGH

成形　積上　ロ)－　底)？
整形　外)ケズリ→ナデa→ミガキ　内)ナデ
文様　無文
備考

No. 31　7号住居址　分類　第6類 器形　浅鉢Ⅰ　容)(7.5ℓ)　厚)11㎜ 胎土　外)明黄褐色　内)明黄褐色　混)多　ＡＢＣＤＧ 成形　積上　口)？3　底)－ 整形　外)ナデ　内)ナデｂ	文様　Ａ…突起，〈胴〉隆帯， Ｂ…〈口〉工具不明の横位沈線→工具不明(2.5㎜)の短沈線，ⓐ～ⓒの区分不明，〈胴〉ⓐは沈線， Ｄ…赤色塗料塗布（口端～内面に残り、モチーフの有無不明）， 順)Ａ→Ｂ→Ｄ，単)同一４単位，突起２種交互４対， 備考
No. 32　10号住居址　分類　第6類？ 器形　深鉢Ⅳ　容)2.7ℓ　厚)9㎜ 胎土　外)赤褐－橙色　内)赤褐－暗赤褐色　混)並　ＤＧ 成形　積上　口)ａ0　底)ａ？	整形　外)ナデａ→ミガキｃ　内)（積上痕）→ナデａ→ミガキｃ　底)ミガキｃ／ナデｂ 文様　無文， 備考　外)タール状炭化物付着　内)下半全面に炭化物付着．
No. 33　11号住居址　分類　第10類 器形　深鉢Ⅳ　容)(2.0ℓ)　厚)8㎜ 胎土　外)暗赤褐色　内)暗赤褐色　混)並　ＡＣＤＥ(G) 成形　積上　口)ａ1　底)－ 整形　外)ケズリ→ナデｂ　内)ナデｃ 備考	文様　工程は第３・４類及第８類と異なる， 突起→口端刺突（g_2・逆時計回転順）・突起にかかる横位沈線４条（下→上、時計回転順）→沈線にかかる刺突（g_2・逆時計回転順）→下向き弧状沈線（逆時計回転順）→弧状沈線にかかる横位沈線（上→下、逆時計回転順），工具は全て半截竹管腹面（７㎜）で沈線は深い（いわゆる半隆起線），単）同一８単位で突起の単位は不明，
No. 34　11号住居址　分類　第４類 器形　深鉢　容)－　厚)７㎜ 胎土　外)橙色　内)浅黄橙色　混)並　ＡＦ 成形　積上　口)－　底)－	整形　外)ケズリ→ナデａ→ナデｂ　内)ナデ 文様　Ａ…〈胴〉横位一周隆帯→縦位隆帯， Ｂ…ⓐ・ⓑ・ⓒは工具不明（２㎜）の沈線（f_2） 順)Ａ→Ｂ〔ⓐ・ⓒ→ⓑ，Ⅱ型〕，単)同一４単位， 備考
No. 35　11号住居址　分類　第10類 器形　深鉢Ⅳ　容)2.0ℓ　厚)8㎜ 胎土　外)橙色　内)褐色　混)少　ＣＤ(F)ＧＨ 成形　積上　口)ｃ0　底)ａ 整形　外)ナデｂ　内)ケズリ→ナデｂ　底)ケズリ→ナデ／ナデｂ	文様　工程は第３・４類及第８類と異なる， 縄文（ＲＬ及Ｌで乱雑な横位）→半截竹管腹面（６㎜）の深い沈線（いわゆる半隆起線、横位→縦位→頸部横位の引き直し）→沈線上の連続押圧（工具は沈線と同一）→陰刻→縦位沈線の一部引き直し，　単）ほぼ同一16単位， 備考　内)下半全面に炭化物付着．
No. 36　11号住居址　分類　第３類 器形　深鉢B_2Ⅲ　容)4.4ℓ　厚)8㎜ 胎土　外)暗赤褐－赤橙色　内)にぶい褐色　混)多　ＣＤＥ 成形　積上　口)ａ2　底)？	整形　外)ケズリ→ナデ　内)ナデｃ　底)？／ナデｂ， 文様　Ａ…〈口〉突起・横位一周隆帯→加飾，〈胴〉横位一周隆帯→縦位隆帯， Ｂ…ⓐ・ⓑ・ⓒは半截竹管腹面(4.5㎜)の結節沈線ｃ・c_1， 順)Ａ→Ｂ〔ⓐ→ⓑ→ⓒ，Ⅰ型〕，単)〈口・胴〉同一４単位，胴部下段は同一２単位， 備考　内)下半に炭化物付着・器表剝落
No. 37　11号住居址　分類　第４類 器形　深鉢B_1Ⅲ　容)5.6ℓ　厚)6㎜ 胎土　外)にぶい赤褐－黄橙色　内)橙－黒色　混)少　ＤＥ(F)(G) 成形　積上　口)ａii 3　底)？ 整形　外)オサエａ→ナデｂ　内)ナデｂ→ミガキｃ　底)オサエ→ナデ／オサエ→ナデｂ	文様　Ａ…口端の折返し又は隆帯→半截竹管腹面（７㎜）の短沈線・半截竹管腹面（７㎜）の結節沈線及沈線（順序は図44参照，上段は逆時計回転順，下段は時計回転順）→折返し又は隆帯裾に粘土塊貼付， Ａ'…Ａと同一工具・手法で胴部下段に結節沈線追加， Ｂ…工具不明(0.5㎜)の斜位沈線， 順)Ａ→Ｂ→Ａ'，単)胴部上段は近似４単位、下段は3.5単位， 備考
No. 38　11号住居址　分類　第４類 器形　深鉢C_2Ⅲ　容)(4.5ℓ)　厚)7㎜ 胎土　外)赤褐－橙色　内)赤褐色　混)並　ＡＢＣＤＥ(F) 成形　積上　口)ｃ3　底)－ 整形　外)ナデｂ　内)ナデｃ 備考　内)下半全面に炭化物付着	文様　Ａ…〈口〉Ａ図正面及裏面の突起→同加飾→突起を結ぶ横位隆帯・横位一周隆帯→縦位隆帯の中心部→同加飾，〈胴〉横位一周隆帯（１条のみ）→Ａ図中央の縦位の長い隆帯（器体を２分割）→同隆帯を結ぶ横位隆帯・下向弧状及渦巻状隆帯→縦位隆帯→加飾， Ｂ…〈口縁部上段〉ⓐ・ⓑ・ⓒの区分は不明瞭で文様要素７種を組み合わせる，工具不明（２㎜）の横位沈線・斜位沈線・上向連続短弧・波状結節沈線ｅ，先端三角形工具（２㎜）の刺突（g_2）・同工具をほぼ直角に刺して回転させた刺突，工具不明の陰刻，〈口縁部下段・胴部〉$ⓐ_1$は工具不明（２㎜）の沈線，$ⓐ_2$は$ⓐ_1$の沈線→先端三角形の工具（２㎜）の刺突（g_2），ⓑは工具不明（２㎜）の結節沈線ｅでその内側に同一工具の沈線が加わる場合有り，$ⓒ_1$は工具不明（２㎜）の横位・縦位沈線，$ⓒ_2$は$ⓒ_1$と同一工具の斜位沈線，$ⓒ_3$は工具不明の陰刻， 順)Ａ→Ｂ〔〈口縁部上段〉７種の文様要素から４種のモチーフが成立し不規則に配置される，文様要素は区画により施文部位を変える，文様の単位毎の施文順位は成立せず、文様要素別の施文順位が成立する可能性があるが確認できない，〈口縁部下段～胴部〉$ⓐ_1$・ⓑ，$ⓐ_1$→$ⓒ_2$→ⓑ，$ⓐ_1$・ⓑ・$ⓒ_1$，$ⓐ_1$・ⓑ・$ⓒ_3$，$ⓐ_2$，$ⓐ_2$・$ⓒ_1$，Ⅱ型〕，単)Ａ工程は近似２単位で単位内を２及３分割、胴部の広い文様帯のみ相違，口縁部上段のＢ工程の配置は不規則，
No. 39　11号住居址　分類　第４類 器形　浅鉢A_2Ⅰ　容)12.5ℓ　厚)11㎜ 胎土　外)赤褐色　内)明赤褐色　混)多　ＡＢＤＥＧ 成形　積上　口)ｄ3　底)ｂ or ｃ	整形　外)ケズリ→ナデｂ　内)ナデａ　底)？／ナデｂ 文様　Ａ…〈口〉突起→加飾・口端の押圧， Ｂ〈口〉ⓐは内そぎ竹管背面(4.5㎜)の結節沈線ｃ，ⓒはⓐと同一工具の同一手法→屈曲部の押圧（ⓐと同一工具？）， 順)Ａ→Ｂ〔ⓐ→ⓒ，Ⅰ型〕，単)〈口〉同一４単位，突起は同一４単位， 備考

No. 40　11号住居址　分類　第4類
器形　深鉢B_2III　容)6.3ℓ　厚)10㎜
胎土　外)にぶい赤褐色　内)にぶい赤褐色　混)並　ACDEH
成形　積上　口)b4　底)?
整形　外)ナデa　内)(積上痕)→ナデa
備考
文様　A…〈口〉下向き弧状隆帯・横位一周隆帯→縦位隆帯，〈胴〉横位一周隆帯→上段の弧状及縦位隆帯・下段の縦位隆帯，
B…〈口・胴〉ⓐ・ⓑ・$ⓒ_1$は内そぎ多截竹管背面(7㎜)の結節沈線c_1，$ⓒ_2$は工具不明(2㎜)の結節沈線・沈線→工具不明の陰刻，
順)A→B〔ⓐ→$ⓒ_2$，ⓐ→ⓑ→$ⓒ_1$，ⓐ，I型〕，単)〈口〉同一5単位，〈胴部上段〉2種交互2対の隆帯で4分割，〈胴部下段〉同一4又は5単位，

No. 41　11号住居址　分類　第8類
器形　深鉢EIII　容)(6.5ℓ)　厚)8㎜
胎土　外)明褐色　内)明褐色　混)並　BCEH
成形　積上　口)—　底)—
整形　外)オサエ→ナデa　内)ナデa
備考
文様　*A*…〈胴〉横位一周隆帯
D…工具不明(1㎜)の浅い縦位沈線→半截竹管腹面(5㎜)の浅い横位沈線，横位沈線は*E*と同一工具，
E…浅い横位沈線→浅い縦位短線→浅い縦位沈線，
順)*A*→*D*→*E*，単)同一8単位，

No. 42　16号住居址　分類　第3類
器形　深鉢C_2III　容)(7.5ℓ)　厚)9㎜
胎土　外)橙色　内)橙色　混)多　ABCDE
成形　積上　口)c2　底)—
整形　外)オサエa→ナデa・b　内)ナデb
備考
文様　A…〈口・胴〉突起→隆帯→押圧（工具はB工程と同一？），
B…ⓐ・ⓑ・ⓒは円形竹管(4㎜)の結節沈線b，ⓓはⓐ～ⓒと同一工具の交互刺突（g_2），
順)A→B〔〈口〉ⓐ→ⓒ，ⓐ→ⓑ→ⓒ・ⓓ，〈胴〉ⓐ，ⓐ→ⓒ，I型〕，単)〈口〉同一4単位、突起は2種交互2対，〈胴〉同一2単位

No. 43　16号住居址　分類　第4類？
器形　深鉢B_1IV　容)(1.5ℓ)　厚)6㎜
胎土　外)赤褐色　内)赤褐色　混)並　ACDF(G)H
成形　積上　口)a0　底)—
整形　外)ナデb　内)ケズリ→ナデb
文様　C…縄文はRLでやや左傾した縦位，単)なし，
備考　外)炭化物付着

No. 44　17号住居址　分類　第4類
器形　深鉢B_2III　容)(7.5ℓ)　厚)8㎜
胎土　外)橙—暗褐色　内)橙色　混)並　ACDE(F)(G)(H)
成形　積上　口)b3　底)—
整形　外)ケズリ→ナデb　内)ナデc
備考
文様　A…〈口〉下向き弧状隆帯・横位一周隆帯(→)突起・中間の横位隆帯→縦位隆帯・瘤・加飾〈頸〉横位一周隆帯→縦位隆帯→加飾，
B…$ⓐ_1$・$ⓒ_1$は内そぎ竹管(3㎜)の沈線で$ⓒ_1$は逆時計回転順，$ⓐ_2$・ⓑ・$ⓒ_2$は$ⓐ_1$・$ⓒ_1$と同一工具背面の結節沈線eで$ⓒ_2$は逆時計回転順，
順)A→B〔〈口〉$ⓐ_1$→$ⓒ_2$→ⓑ→$ⓒ_1$，$ⓐ_1$→$ⓒ_1$→$ⓐ_2$，$ⓒ_2$→$ⓐ_2$，ⓐ・ⓑ，〈胴〉$ⓒ_2$→$ⓐ_1$・$ⓐ_2$，II型〕，単)〈口〉A工程は2種交互2対の4単位，B工程は各区画とも相違，〈胴〉同一4単位，

No. 45　18号住居址　分類　第4類
器形　深鉢C_2III　容)(6.0ℓ)　厚)9㎜
胎土　外)赤—暗赤褐色　内)にぶい赤褐色　混)多　ABCDE(F)(G)(H)
成形　積上　口)dii　3　底)—
整形　外)ナデb　内)ナデb
備考
文様　A…突起・横位一周隆帯→縦位隆帯，〈胴〉横位一周隆帯→縦位隆帯・下段の隆帯と瘤，
B…ⓐは多截竹管背面(7.5㎜)の結節沈線c，ⓑ・ⓒは内そぎ竹管背面(4.5㎜)の結節沈線c，ⓓはⓑ・ⓒと同一工具側面使用の刺突（g_2）
順)A→B〔〈口〉ⓐ→ⓑ→ⓒ→ⓓ，〈胴〉ⓐ→ⓑ→ⓒ，ⓐ→ⓑ，I型〕，単)〈口・頸〉同一4単位，〈胴〉2種交互2対4単位，

No. 46　19号住居址　分類　第10類
器形　深鉢　容)—　厚)8㎜
胎土　外)橙色　内)橙色　混)並　CG
成形　積上　口)—　底)?
整形　外)ナデb　内)ナデc　底)オサエ→ナデ／オサエ→ナデ
文様　工程は第3・4類、第8類と異なる，
半截竹管腹面(8㎜)の深い沈線→縄文（RL・縦位），単)同一17単位，
備考

No. 47　土壙23　分類　第4類？
器形　有孔鍔付土器　容)—　厚)4㎜
胎土　外)赤褐色　内)にぶい赤褐色　混)並　ADEF
成形　積上　口)a0　底)—
整形　外)ナデa（タテ）　内)ナデa（ヨコ）→ナデb
文様　無文
備考

No. 48　土壙53　分類　第6類
器形　深鉢　容)—　厚)7㎜
胎土　外)赤色　内)暗赤褐色　混)並　ACDF
成形　積上　口)—　底)?
整形　外)ナデb→ミガキb・ナデa　内)ナデb
文様　A…把手→把手を結ぶ隆帯，
B…ⓐは工具不明(7㎜)の沈線、ミガキを兼ねる，
順)A→B，単)同一2単位で単位内2分，
備考　内)全面炭化物付着

No. 49　土壙55　分類　第2類
器形　深鉢IV　容)1.5ℓ　厚)7㎜
胎土　外)極暗赤褐—橙色　内)赤褐色　混)並　ABD(F)
成形　積上　口)b1　底)a
整形　外)オサエ→ナデb　内)ナデa→ナデc　底)オサエ→ナデa／ナデb
文様　工程は第3・4類に似るが同一ではない，
横位一周隆帯→縦位隆帯→縄文（RL・縦位）→工具不明の浅い沈線（上向き弧状・縦位）→半截竹管腹面(4㎜)の浅い短線，単)同一4単位，
備考

No. 50　土壙58　分類　第1類
器形　深鉢III　容)(4.0ℓ)　厚)9㎜
胎土　外)にぶい褐—橙色　内)にぶい黄橙　混)並　ABDF
成形　積上　口)ai2　底)—
整形　外)ケズリ→ナデ　内)ケズリ→ナデ
文様　工程は第8類に近いが同一ではない，
外〉縄文（RL・横位）→半截竹管腹面(5㎜)の浅い沈線（時計回転順に縦位→横位），内〉縄文（LR・横位），単）不明，
備考

No. 51　土壙59　分類　第？類
器形　浅鉢A_1II　容)3.0ℓ　厚)13㎜
胎土　外)橙色　内)赤褐色　混)並　BCD
成形　積上　口)c0　底)?
整形　外)ケズリ→ナデb　内)ナデc　底)ナデb／ナデ
文様　無文
備考

No. 52　土壙64　分類　第3類 器形　深鉢IV　容)－　厚)7㎜ 胎土　外)橙色　内)黒褐色　混)少　ACD 成形　積上　口)－　底)c？ 整形　外)オサエa・ナデb　内)ナデc　底)オサエ→ナデ／ナデ	文様　A…横位一周隆帯→縦位隆帯， B…ⓐは多截竹管背面(5.5㎜)の結節沈線c，ⓑ・ⓒは円形竹管(2.5㎜)の結節沈線b 順)A→B〔ⓐ→ⓑ，ⓐ→ⓒ，Ⅰ型〕，単)〈胴部上段〉同一2単位，〈胴部下段〉同一5単位， 備考　内)全面炭化物付着
No. 53　土壙71　分類　第7類 器形　深鉢　容)(2.0ℓ)　厚)7㎜ 胎土　外)浅黄橙色　内)暗褐色　混)並　CDEF(G) 成形　積上　口)－　底)？	整形　外)ケズリ→ナデb・ミガキc　内)ナデc　底)ナデb→ミガキ／ナデb 文様　工程は不明， 半截竹管腹面(8㎜)の沈線（上→下），単）胴部は4～6単位， 備考
No. 54　土壙73　分類　第4類 器形　深鉢C_2IV　容)(2.0ℓ)　厚)6㎜ 胎土　外)にぶい赤褐色　内)暗赤褐色　混)並　DE 成形　積上　口)c1　底)－ 整形　外)ナデb　内)ナデc 備考　外)タール状炭化物付着　内)下半に炭化物付着	文様　A…〈口〉A図正面・裏面の突起→同加飾・残りの突起・横位一周隆帯→下向弧状隆帯→A図正面突起より垂下する隆帯・縦位隆帯→同加飾→押圧2種（いずれも工具不明），〈胴〉横位一周隆帯・縦位隆帯の位置を結ぶ横位隆帯→縦位隆帯→同加飾， B…$ⓐ_1$・ⓑ・ⓒは工具不明(2.5㎜)の沈線（ⓒは時計回転順1ヶ所有），$ⓐ_2$は$ⓐ_1$・ⓑ・ⓒと同一工具の結節沈線e（時計回転順）， 順)A→B〔〈口縁部A図正面左の区画～B図下段左端の区画の右半分〉$ⓐ_1$→ⓒ，$ⓐ_1$・ⓑ→ⓒ，〈口縁部の残りと胴部〉ⓒ→$ⓐ_1$・$ⓐ_2$，Ⅱ型〕単)〈口〉同一4単位でA図正面の口縁部のみ1単位を分割，突起は大2種小1種を大小交互に配置，〈胴〉同一4単位，
No. 55　土壙81　分類　第2類 器形　深鉢III　容)(8.0ℓ)　厚)10㎜ 胎土　外)にぶい赤褐色　内)にぶい赤褐色　混)少　ADFG 成形　積上　口)－　底)－	整形　外)ナデb→（施文→ミガキb）　内)ナデb→ミガキc 文様　工程は第3・4類に近いが同一かどうか不明， 縄文（L・縦位）→ミガキ（縦位帯状）→半截竹管腹面(2.5㎜)の沈線，単）不明， 備考　外)タール状炭化物付着
No. 56　土壙88　分類　第9類？ 器形　浅鉢　容)－　厚)6㎜ 胎土　外)暗灰黄色　内)暗灰黄色　混)並　ABD(F)H	成形　積上　口)－　底)？ 整形　外)ケズリ→ミガキ　内)ナデ　底)ケズリ→ナデ／ナデ 文様　無文 備考
No. 57　土壙103　分類　第2類 器形　深鉢　容)－　厚)8㎜ 胎土　外)橙色　内)褐色　混)並　CDH 成形　積上　口)－　底)？	整形　外)？　内)ケズリ→ナデa　底)オサエ→ナデ／オサエ→ナデ 文様　工程は不明 縄文（RL・縦位）→工具不明(2㎜)の沈線，単）同一4単位， 備考　外)炭化物付着　内)下半全面に炭化物付着
No. 58　土壙112　分類　第9類 器形　杯形土器　容)0.6ℓ　厚)5㎜ 胎土　外)灰オリーブ－オリーブ黒色　内)オリーブ黒－浅黄色　混)少　BDF(H) 成形　積上　口)a1　底)a	整形　外)（施文→ミガキc）　内)ナデb・ミガキa　底)オサエ→ナデ／ケズリ→ナデb 文様　工程は第3・4類、第8類と異なる， 横位一周隆帯・突起→小把手→縄文（LR・横位？）→半截竹管腹面(8㎜)の沈線（割付線）→同一工具腹面で隆帯上・口端等に連続押圧→同一工具腹面の沈線による補足→ミガキ・陰刻→黒色塗料塗布，単）近似した4単位，把手は1単位， 備考　外・内)全面タール状炭化物付着
No. 59　土壙　分類　第5・6類 器形　深鉢IV　容)(3.0ℓ)　厚)10㎜ 胎土　外)明黄褐色　内)明黄褐色　混)並　CD(F)G 成形　積上　口)b2　底)－ 整形　外)オサエa→ナデb　内)ナデc→ミガキa	文様　工程は第3・4類を踏襲するが同一ではない， 隆帯・突起（→押圧）→半截竹管腹面(6㎜)の沈線→工具不明の陰刻→工具不明(1㎜)の沈線及刺突・半截竹管(4.5㎜)の軽い刺突（g_1），単)口縁部は2種以上4単位，突起は2種交互2対，胴部は同一2単位， 備考
No. 60　分類　第7類 器形　深鉢IV　容)(2.5ℓ)　厚)9㎜ 胎土　外)橙色　内)褐色　混)並　ABDG(H) 成形　積上　口)b　底)－ 整形　外)ナデb　内)ナデc	文様　工程は第3・4類を踏襲するが同一ではない， 半截竹管腹面(7.5㎜)の横位一周沈線→同沈線上に同一工具腹面の連続押圧→工具不明(3㎜)の縦位沈線→工具不明の三角形陰刻→尖端な工具(3㎜)の刺突(g_2)→工具不明の円形刺突（工具を突き刺して回転させる），単）ほぼ同一4単位， 備考　内)炭化物付着
No. 61　分類　第7類 器形　深鉢　容)－　厚)8㎜ 胎土　外)浅黄橙色　内)暗褐色　混)並　BCE(G) 成形　積上　口)－　底)？	整形　外)（施文→ナデb）　内)ケズリ→ナデa　底)ナデa／オサエ 文様　工程不明， 半截竹管腹面(8.5㎜)の沈線（順序不明），単）なし， 備考　外)タール状炭化物付着　内)炭化物付着
No. 62　分類　第10類 器形　深鉢　容)－　厚)11㎜ 胎土　外)明黄褐色　内)明黄褐色　混)並　ACDE 成形　積上　口)c1　底)？ 整形　外)ナデb　内)ナデc 備考	文様　工程は第3・4類、第8類と異なる， 突起→半截竹管腹面(6㎜)で口縁部最上部の横位一周沈線→同一工具で刺突(g_2)（逆時計回転順）→同一工具で口縁部縦位沈線（逆時計回転順）→同一工具で口縁部最下段横位一周沈線（逆時計回転順）→同一工具で胴部縦位沈線，単）不明，

2）　小形石器（図61～69、76～84、図版35～40）

本遺跡で検出された小形石器、および黒曜石片は2827点である。これらを諏訪市十二ノ后遺跡での分類〔小池1979〕に従い整理検討を行った。整理の基本については、「整理の方法」で前述したが、小形石器を石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、石核状石器（仮称）、その他不定形石器、ピエス・エスキーユ、使用痕のある剥片・石核・原石に分類して観察の状態を概述する。各石器については、十二ノ后遺跡で行った用語に従った部分が多い。

①　石鏃（図 61～65、76、図版 35、36 ）

石鏃の形態分類は図65に示すように、茎・基部・側辺・先端の形態及び長さと幅の指数について行った。また、尖頭部の長さ・最大幅・重さ・厚さを計測した。計測方法は、尖頭部を上に向けて脚部の両端を結ぶ線を水平に置き、その直交する長さを尖頭部の長さ、脚部の両端を結ぶ長さを幅とし、厚さは最大厚を計測した。破損品については残存部を計測して（ ）を付けた。なお、表裏は任意とし、必要に応じて二面を実測した。

破損状態については以下の通りに分類した。

a、尖頭部先端または尖頭部が破損
b、片脚部先端または片脚部が破損
c、両脚部先端または両脚部が破損
d、両脚部と尖頭部が破損
e、尖頭部と片脚部が破損
f、片側辺部が破損
g、基部が破損
h、両側辺部が破損
i、先端と基部が破損
j、側辺部と基部が破損

石鏃は破損品を含め131点出土し、石錐・石匙等の小形石器の総数207点中63％を占め最も多い。またこれは、黒曜石の剥片・石核・原石を含めた総数の4.6％である（図 61）。

図121に石鏃の出土分布を示したが、131点の中で36点が住居址からの出土であり、1号住に9点、7号住に10点の出土をみるが、全体的には住居址内出土は少なく、95点が住居址以外である。この傾向は他の小形石器についても同様である。石材についてみると131点のうち黒曜石製のものが122点、他にチャート製6点、珪質頁岩が1点で圧倒的に黒曜石製が多い。

形態についてみると、有茎のものは1点もなくすべて無茎のタイプである。基部は凹基が大半であるが平基が11点、円基が4点みられる。側辺は外彎するタイプが多く、その中でも最大幅が下端にあるものが最も多く51点、最大幅が下方にあるものは28点である。側辺がまっすぐで三角形を呈するものが23点みられる。先端は鋭いもの、ふつう、鈍いものがそれぞれみられるが、先端が円いタイプや平らなタイプは僅かである。長さと

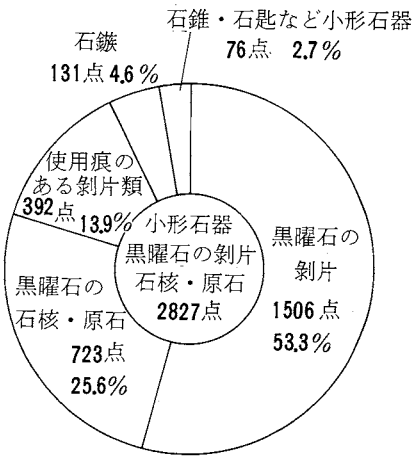


図 61　小形石器、原石、石核等出土数

幅の相関は図62に示した通りで、長さ・幅は最大32㎜×16㎜、最小12㎜×11.5㎜の範囲に幅広く見られる。重さについてはその頻度グラフを図64に示した。最小0.3gから最大5.6gまであるが、0.4gから1.4gの間に集中する。本遺跡は縄文中期を中心に早期から後期までの土器を出土しているが、層位的に遺物をとらえる事が困難であった。４、13、27、37は抉りが深く、押型紋土器に共伴するいわゆる鍬形鏃と思われたが基部の形態が若干異なり、また出土遺構がいずれも縄文中期に属する住居址である点を考えれば必ずしも鍬形鏃とは言えないだろう。本遺跡出土の石鏃は131点と数が多いが、その形態も多彩で、あるタイプが多くみられるような事もない。また出土遺構についてみても１号住（１～９）、７号住（12～20）のように同一遺構内出土でもさまざまなタイプの石鏃がみられる。

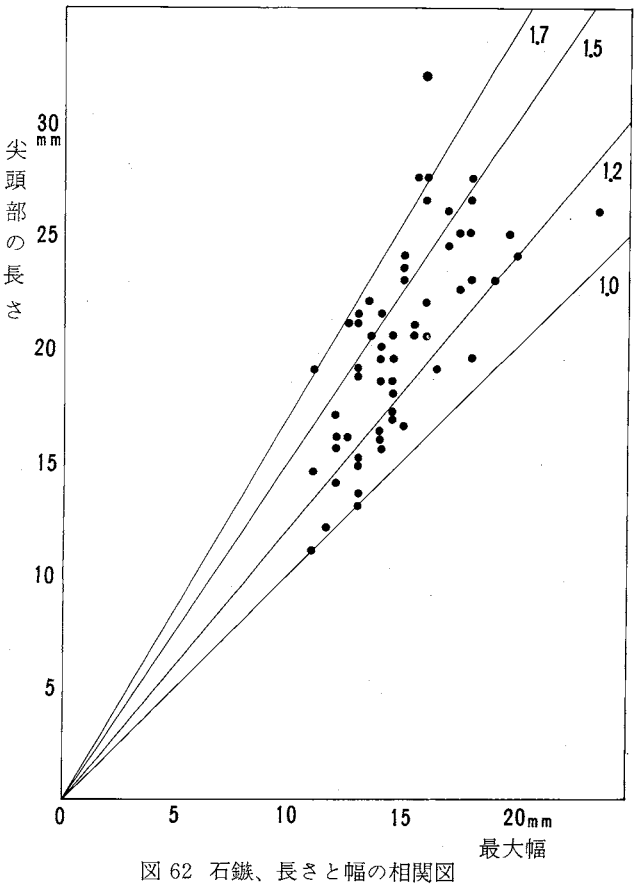


図 62　石鏃、長さと幅の相関図

未調整部があり未製品と思われるものが９点出土している。いずれも黒曜石製の厚身のある剥片を素材とし三角形状であるが、一次剥離面を表裏二面に残している場合が多い（１、42、45）。１は側辺部と抉りの部分に、また45は抉りの部分にそれぞれつぶれ状の剥離痕が観察できる。これは押圧剥離でなく打撃により縁辺を打ち欠き整形を行っているためと思われ、その後全周にわたり押圧剥離による調整剥離がなされたものと考える。

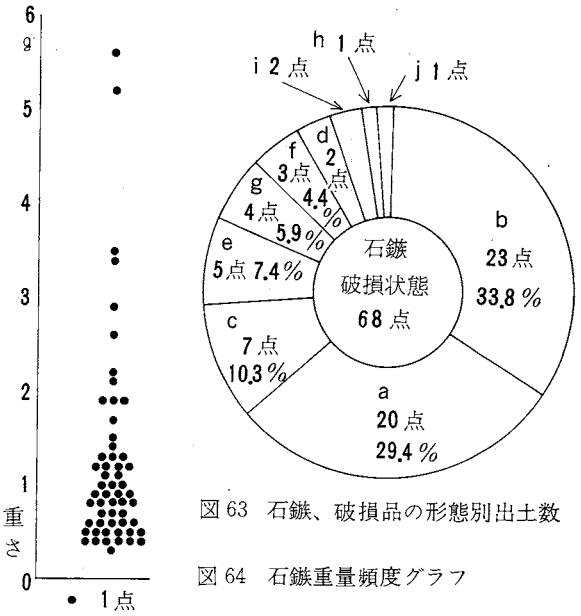


図 63　石鏃、破損品の形態別出土数

図 64　石鏃重量頻度グラフ

131点の石鏃で何らかの破損状態を示しているものは69点（52%）みられる。破損状態の形態別出土数は図63の通りである。bタイプの片脚部先端または片脚部が破損しているものが23点と最も多く破損品の34%、次にaタイプの尖頭部先端、または尖頭部が破損しているものが20点、30%である。両者で破損品の64%を占める。このように石鏃は他の小形石器に比べて出土量が多いと同時に、破損品も多数出土する点が特徴的である。破損品を観察すると、破損した部分を再加工したような例はみられない。尖頭部先端の破損程度ならば再加工の可能性も考えられるが、基部や脚部の破損品の再加工は形状的にも無理があり、それらは廃棄されたものと考える。石鏃の出土量の多さは、この石器の使用頻度が高い事と同時に消耗性の大きい石器である点も示している。

②　石匙　（図 77　図版 37　）

石匙の形態分類は十二ノ后遺跡の例〔小池1979〕に従った。つまみと刃部の関係、つまみ部の形状、刃部の形状について分類し、長さ・幅・厚さ・刃部角・つまみ角・重量を計測し、石材・欠損状況・使用痕

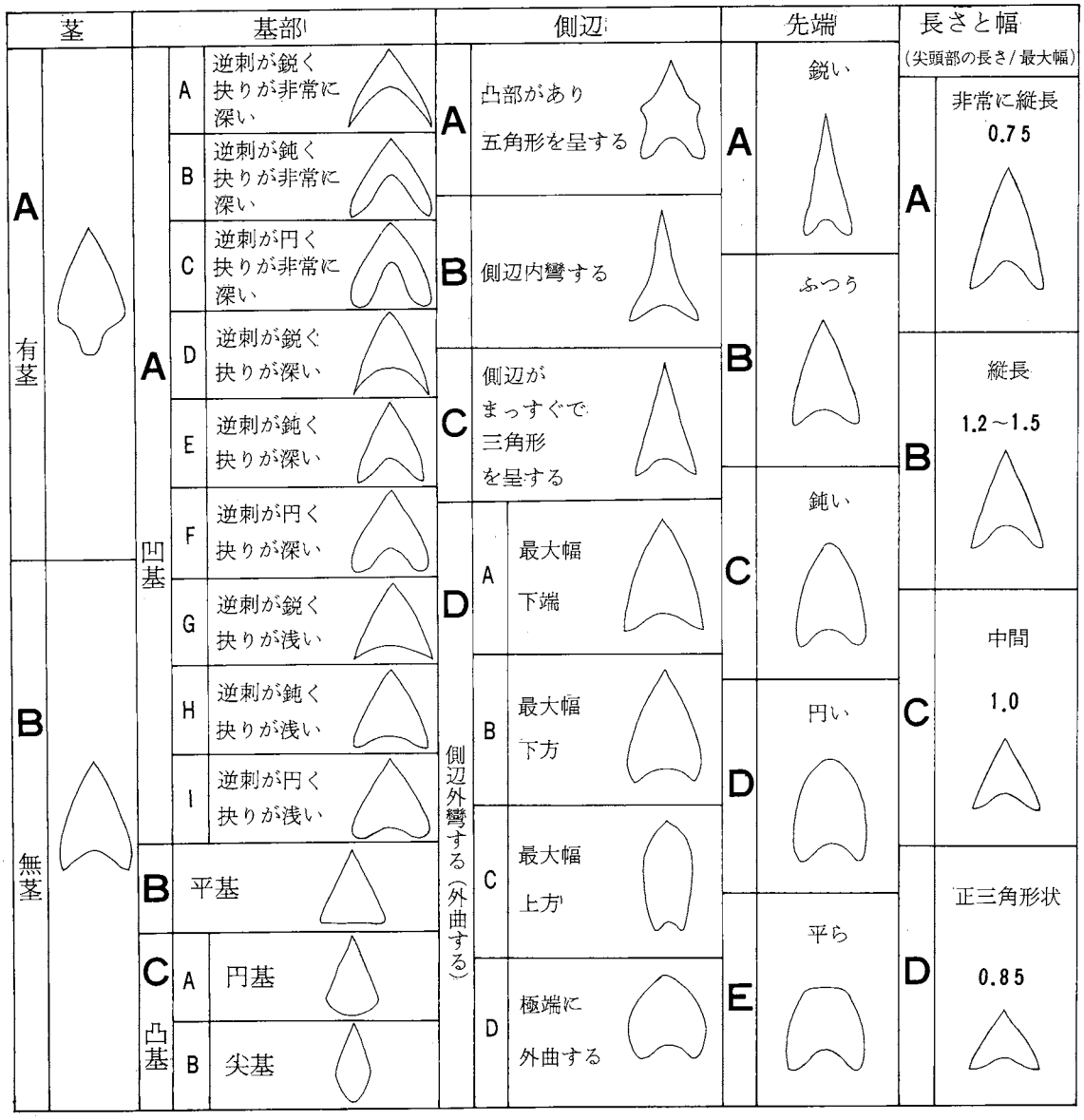


図 65　石鏃の形態分類図

について観察した。石匙が刃部作出の見える面を表に置いて一対の抉入部を結ぶ線を基準線とし、刃部両端と基準線との為す角度がほぼ90度の石匙を縦型、それぞれの線がほぼ平行なものを横型、その中間を斜型とした。つまみ部の形状は、一対の抉入部の長さが1cm以下のものを小さなつまみ、3cm以上のものを大きなつまみ、その中間を中形のつまみとした。刃部の形状については、刃部の縁辺が基準線よりも大きくふくらむものを外彎する刃部、基準線にそってまっすぐなものを直の刃部、基準線に向かって抉れているものを内彎する刃部とした。また長さは基準線と直交する長さを測り、基準線と平行する長さを幅とした。厚さは最大厚を測り、つまみ角は刃部両端を結ぶ線と基準線との為す角度のうち鋭角をとった。

つまみ部と刃部の関係で縦型2点、横型3点、斜型5点がそれぞれ出土している。これらのタイプ別につまみ部の大きさをみると、斜型と縦型はつまみが大きく、横型は小さい傾向を示す。しかし、刃部の形状については、それぞれのタイプ（縦型・横型・斜型）に刃部が外彎するもの、直であるものがみられる。横型に分類した2点（59、60）の刃部は両面剥離により作出されているが、他の石匙はすべて片面の調整剥離で刃部を作出している。本遺跡で出土した石匙を見る限り、つまみ部の形状と石匙自体の大きさにはそれほどの関連性はないように思われる。石材別では、11点のうち黒曜石製のものが2点で残り9点はす

べてチャート製であるが、他の小形石器が黒曜石製が著しく多いのに比べて特徴的である。観察できた使用痕は不定方向の細かな擦痕と刃部の稜線上の刃つぶれ痕である。59にはつまみ部を除く全面に細かな擦痕が認められる。他のチャート製の石匙では、刃部の稜線がわずかに磨耗している例(60)がある。チャート製の石匙に擦痕などの使用痕が観察できないのは材質のせいであると思われ、これらの石器が製作の後、全く使用されなかったとは考えられない。56、62、64の石匙には小さな黒色の付着物が観察できるが、これが何であるか、製作時あるいは使用中に付着したのか不明である。

石匙の定義を〝つまみ〟を持つ石器としたが、これらの石器について、つまみと刃部の関係、つまみ部の形状、刃部の形状についてみると、さまざまなタイプがある。これらの石器の機能が刃部と一対の抉入部により決定され、どのタイプでも刃部と一対の抉入部により同じ機能を果したと考えて良いだろう。しかし、使用方法がそれぞれのタイプにより多少異なるのではないだろうか。この点、着柄の問題も含め、より多くの資料の観察から検討する必要がある。

③　石錐　（図 77 、図版 38、40）

石錐は９点出土している。個々の石錐の長さ・幅・錐部の長さ、錐部の幅を計測し、石材・破損状態・使用痕跡について観察した。計測は、錐部の剥離面がよく観察できる面を表に置き、錐部先端を下に向けて行った。幅は最大値を計測し、破損品については残存部を測り（　）を付けた。

形態別の傾向を出すには資料不足であったが、以下の通り形態分類を行った。全体形については、Ａ：つまみ部を有する、Ｂ：つまみ部がなく棒状の２タイプに、また錐部の形状については、Ａ：錐部の横断面が四角形あるいは菱形のもの、Ｂ：三角形状を呈するものの２つのタイプにそれぞれ分類した。個々の石錐について実体顕微鏡により観察を行い、69を除く黒曜石製の石錐に使用痕跡を認めた。観察できた使用痕跡は以下の４種類である。ａ：錐部先端および稜線に刃こぼれ痕、ｃ：錐部の全体に不定方向の擦痕、ｄ：基部に不定方向の擦痕。

つまみ部の作出方法には、錐部だけを調整剥離する事によって調整剥離を施さない部分がつまみ部となるもの（66、70）と、全周にわたり調整剥離を行いつまみ部を作出している69の２タイプがみられる。なお70は錐部以外は自然面を残している。錐部の形態は前述の通り２つのタイプがみられるが、Ａタイプ6点Ｂタイプが３点みられる。錐部の断面形がＢタイプの石錐はいずれも全体形Ｂタイプの棒状の石錐である。完形品は僅かに３点（65、68、70）で、他の７点は破損品である(附表１)。これらの破損品をみると、錐部先端が破損しているものが多く、４点認められる（66、67、69、71)。

④　スクレイパー　（図 78　、図版 37　）

剥片の一辺あるいは円周部に調整剥離を施して刃部を作出している石器をあてた。スクレイパーは大きく２タイプに分ける事ができる。一つは片面にのみ調整剥離を施して刃部を作出しているものであり、もう一つは両面に調整剥離を行って刃部を作出しているものである。前者は73、76、78、79、80、82、後者は74、75、77、81である。また刃部の縁辺はゆるく外彎するものが多いが、81だけは刃部が直である。ほとんどのスクレイパーは大形の剥片を素材としているが、77のように両面に風化した自然面を持ち一次加工で刃部作出の剥離を行っている例もある。78、82は一見すると大形石鏃のように見えるが、二側辺に片面剥離による刃部が作出され、尖頭部を持たない。80は接合できたスクレイパーの唯一の例であるが、二片の距離差は１ｍほどで破損の後その場で二片とも廃棄されたと考えられる。石材としては、チャート製が最も多く５点、黒曜石・粘板岩製がそれぞれ２点、珪質砂岩が１点ある。観察できた使用痕には77の刃部の片面に刃部の縁辺に対して平行方向の線状痕がある。74、76は刃部の縁辺が磨耗している。77に観察できた使用痕は、金山沢北遺跡（本報告書）の石匙の使用痕と類似している。

⑤　石核状石器（仮称）（図 80　、図版 38　）

これらの石器は、千鹿頭社遺跡において「石核状石器と仮称したものの中には、片面に自然面を残し、片面のみ不特定方向から打ち欠くものと、相対する二方向からの剥離痕を有するものがある」とされたものである〔小林1975〕。本遺跡では後者の相対する二方向からの剥離痕の認められるものについては、ピエス・エスキーユに分類した。石核状石器は8点出土し、いずれも黒曜石製である。長さ・幅が2～3cmほどの三角形状を呈する場合が多く、断面は厚さ5～7㎜で板状になる。また平坦な自然面を残すもの（106、111）や自然面ではないが平坦な剥離面を持つもの（107、109）がある。このように平坦な剥離面や自然面を残し、それに相対する面の縁辺を打ち欠く事により板状の石核を作出するという特徴を持っている。打ち欠かれた縁辺は階段状剥離になる場合が多い。これは刃部作出の調整剥離とも思えない。

これらの石核状石器について、佐藤信之氏は「この資料が石器であるかという問題になるが、一定の規格内に納まり、剥がされた剥片が小さすぎて石器としての使用は困難であり、石核とは考えにくい。しかし明確な刃部を持っておらず、石器としてどのような機能をはたせるかも疑問である」と述べ、これ自体は石器ではなく、何らかの石器の素材作りである可能性を指摘している〔佐藤1980〕。本遺跡においても同様に何らかの石器の製作工程にみられる素材ではないかと考える。したがって石核状石器という名称にも問題があるが便宜上仮称した。今後石器の製作工程の観点からより深い検討をする必要を感ずる。

⑥　ピエス・エスキーユ（図 80　、図版 38　）

37点出土した（112～124）。この概念については、岡村道雄氏に従った〔岡村1976〕。これらの石器は2縁辺に打撃による破砕痕（つぶれ状）や階段状剥離痕を残し、形は小さくほぼ四角形を呈する。断面は三角形あるいは台形をなし、素材として剥片を利用したものと石核を利用したものとがある。計測方法は剥離痕や破砕痕のある縁辺を上下に置き、その縦を長さ、それに直交する長さを幅とした。また厚さは最大厚である。

長方形を呈するものが多く、その長軸方向の両縁辺に破砕痕や階段状剥離を残すが、114のように短軸方向の両縁辺にその痕跡を残すものもある。また113は4つの縁辺にその痕跡を残している。これらの痕跡が製作によるのか、使用によるのか不明であるが、いずれにせよこの両端がワーキングエッヂと言えるだろう。縦断面は凸レンズ状になり横断面は三角形あるいは台形になる場合が多い。また剥片を素材にするものに自然面を残すものが多くみられる（112、113、118、120、121）。

本遺跡は縄文時代早期から後期までの土器片を出土しているが、これらの石器がどの時代に属するのか不明である。

⑦　その他不定形石器　（図 79　、図版 38　）

調整剥離により刃部を持つ不定形な石器を一括してあげた。32点出土した。83は自然面を残す棒状の剥片の一辺に両面剥離を施して刃部を作出している。石錐のような形状を示すが錐部の作出はみられず、尖頭部を持たない。84も石錐のつまみ部のような作出がみられるが欠損しているため石錐かどうか不明である。85～87は全周が両面より剥離され、断面が凸レンズ状を呈し非常に小形である。86は一つの抉入部を持っている。88は剥離による刃部を持たず複数の抉入部が作出されている。この抉入部は石匙のような丁寧な調整ではない。90～92は押圧剥離によって作出された刃部と打ち欠かれた縁辺とを持つ石器である。打ち欠かれた縁辺は、階段状剥離になる90とつぶれ状になる91、92とがある。いずれもピエス・エスキーユに似るが、押圧剥離で作出された刃部を持ち、しかもそこに階段状剥離ないしつぶれが見られないことが相違点である。100～104はほぼ全周に両面から剥離を施して刃部を作出している。

以上のように不定形石器とした中にも、刃部の形態やその作出方法について同じ要素を持つ石器もあり、また相違点を示すものもある。従って不定形石器として一括するのでなく、個々の石器について機能を含

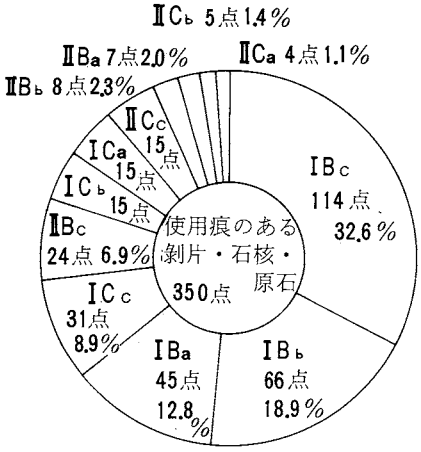


図 66　使用痕のある剥片・石核・原石の形態別出土数

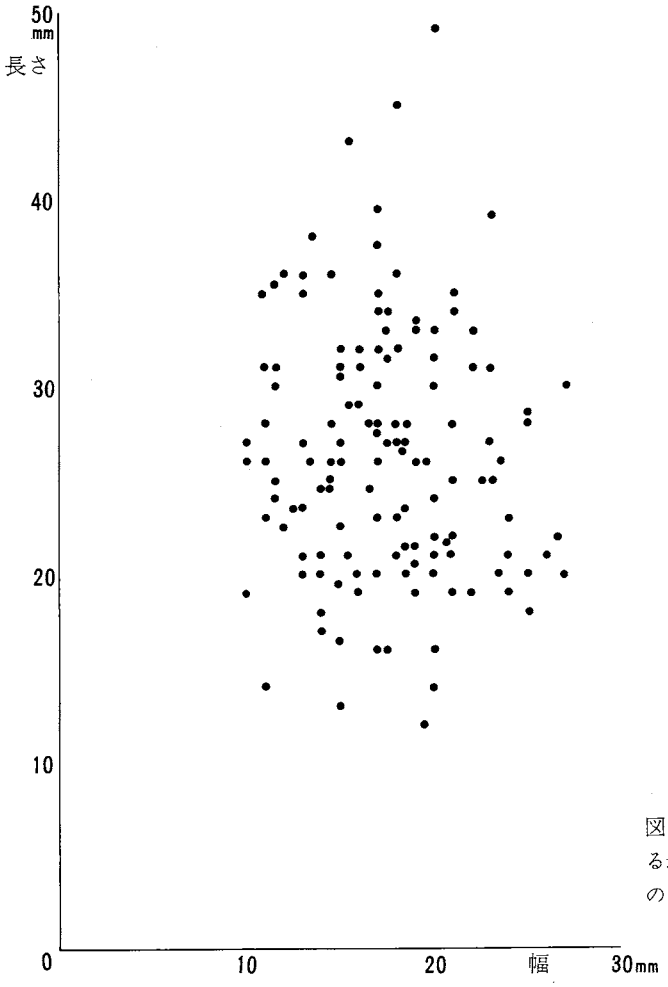


図 67　使用痕のある剥片・石核・原石の長さと幅の相関図

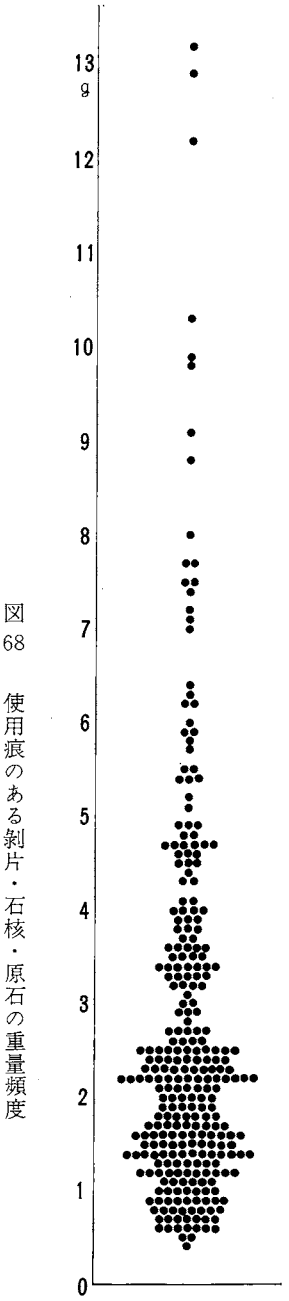


図 68　使用痕のある剥片・石核・原石の重量頻度

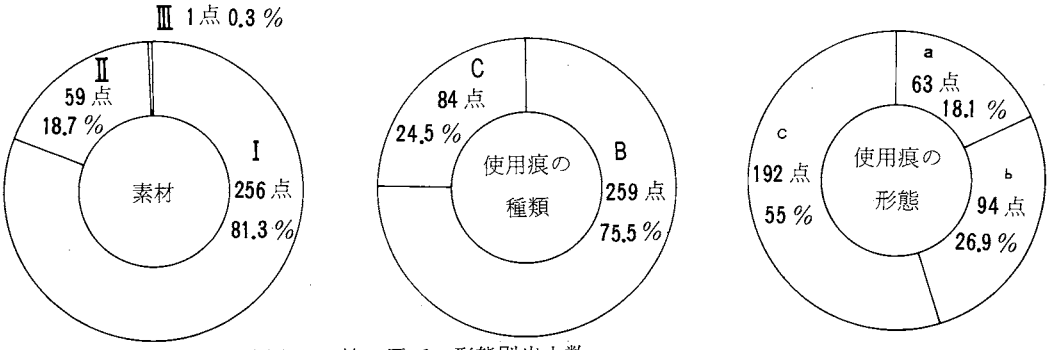


図69　使用痕のある剥片・石核・原石の形態別出土数

めて再検討する必要がある。

⑧　使用痕のある剥片・石核・原石　（図66～69、81～84、図版 39、40 ）

ここで扱うのは黒曜石の剥片・石核・原石に使用痕が観察できる一群の石器である。個々の石器について十二ノ后遺跡の基準に従って形態分類を行い、さらに長さ・幅・厚さ・重量・使用痕部の長さ・使用痕部の縁辺角について計測した。計測方法は原則として使用痕が観察できる縁辺を縦位に置き、縦を長さ、それに直交する横の長さを幅とした。ただし使用痕跡が２縁辺に見られる場合は任意に置いた。断面は使用痕のある部分を図示した。厚さは最大厚を計測した。

使用痕のある剥片・石核・原石（以下使用痕のあるもの）の形態分類は以下の基準による〔小池1979〕。素材の種類により、Ⅰ：剥片、II：石核、III：原石とした。次に使用痕の状態（種類）により、Ｂ：縁辺の片面にのみ観察できるある長さをもつ非連続的な小剥離痕、Ｃ：縁辺の両面に相互に無関係にみられるある長さをもつ非連続的な小剥離痕とし、前者を「刃こぼれ」後者を「刃つぶれ」とした。さらに使用痕部の形態により、ａ：外彎するもの、ｂ：内彎するもの、ｃ：直であるものとした。使用痕が２ヶ所ある場合は、それぞれの使用痕の種類と形態について分類した。

形態別にみた使用痕のあるものの出土量は図66の通りである。総数350点で、ＩＢｃタイプが最も多く114点（32.6%）、次にＩＢｂタイプ66点（18.9%）、ＩＣｃタイプ31点（8.9%）となる。素材別、使用痕の種類別、使用痕部の形態別に数量をみると図69のようになる。剥片を素材にするものが256点（81.3%）、石核を素材とするものが59点（18.7%）で、原石は１点のみである。使用痕の種類についてみるとＢタイプ295点（75.5%）、Ｃタイプ84点（24.5%）となり、Ｂタイプの刃こぼれの使用痕が圧倒的に多い(図69-2)。使用痕部の形態ではａタイプ65点（18.1%）ｂタイプ94点（26.9%）、Ｃタイプ192点(55%）である(図69-3)重量では最小0.3gから最大13gまでみられるが、１gから３gまでに集中する傾向を示す（図68)。これは剥片を素材としたものが全体の80%を占めるためであろう。また素材となった剥片・石核の長さと幅、また使用痕部の縁辺の角度について計測したが、集中する傾向は示さない。(図67)。形態別の出土数の傾向は船霊社遺跡の例〔青沼1980〕とほぼ一致する。

3）　大形石器（図85～93、図版41～48）

打製石斧、磨製石斧、不定形石器、大形石匙、横刃型石器、磨痕・凹み・敲打痕を持つ石、台石、石皿、使用痕ある石を大形石器としたが、小形石器と区別したのは整理の都合という便宜的な理由による所が多い。ただ石材として、小形石器には黒曜石やチャートが主に使用され、大形石器には安山岩・砂岩・粘板岩・緑色片岩などの類が多いということは確かである。また大形石器といっても実際にはかなり小さいものもあるが、前記の器種の中に入るものは器種のまとまりとして一括したためである。

以下、器種毎に観察結果を記す。

①　打製石斧

180点出土した。側縁と刃部の平面形による形態分類を行ったが、『中央道報告－岡谷市その４－昭和52・53年度』の分類基準〔樋口・青沼 1980、p.25〕を基本的に踏襲した。変えた点は３ヶ所である(図70)。第1に、１点の特殊なもの(291）を除いて分銅型（IV）の打製石斧が出土しなかったので、それを省略したこと。第２に、円刃(Ｂ)と斜刃(Ｃ)をそれぞれ刃部の丸みや傾斜具合で、緩いもの（Ｂ、Ｃ）と急なもの（Ｂ′、Ｃ′）の２つに分けたこと。第３に、全体的に細長で尖った刃部を持つもの（Ｄ）を加えたことである。ＢとＢ′類、ＣとＣ′類の相違は、刃部破損による再加工の結果という場合もあろうが、機能差も考えられる。Ｃ′類では、刃部の片方からもう一方に向かって傾斜している一般的な斜刃と、刃部中央が張り出

してV字状になっているものの２種類が見られる。後者をより尖鋭化したものがD類といえる。

この基準によって177点（註1）の打製石斧を分類した（表4）。形態別の個体数をみると、IC′・IIC・IIIB′・IIIC′類が特に多い。側縁形態ではII・III類（短冊型）が多く、I類（撥型）の４倍近くとなる。刃部形態ではC・C′類が多く、破損のため刃部形態不明のものを除けば、斜刃は全体の50％近くを占めていることになる。次いでB′類が多く、B類も含めると円刃は約30％である。D類は少なく、やや特異な形態といえる。

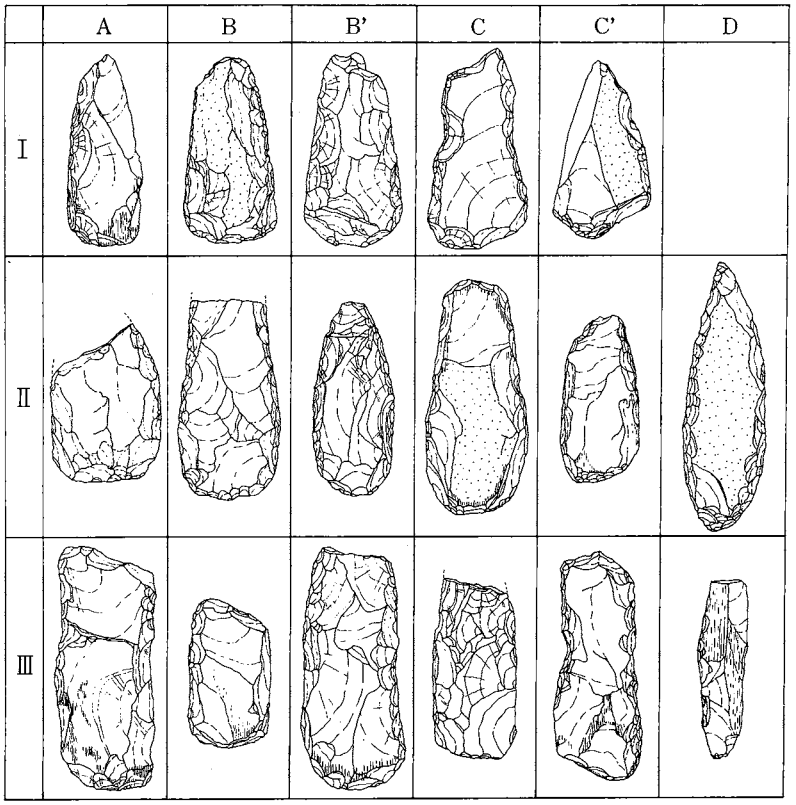


図70　打製石斧形態分類図

	A	B	B′	C	C′	D	不明	計
I	2	4	5	4	11	0	2	28
II	6	5	8	12	6	5	13	55
III	6	5	11	9	11	3	4	49
不明	5	3	2	4	9	0	22	45
計	19	17	26	32	35	8	40	177

表4 打製石斧の形態別個体数（分類外３点）

製作技術面からみると、自然面を残すものと抉りを持つものが多い点を指摘できる。自然面を残すものは、大きく破損したり風化したりして表面の観察が困難なものを除いた107点中、両主面に残すもの５点、片主面にのみ残すもの53点、側面に残すもの５点、残さないもの44点となっている。片主面に自然面を残すものが５割を占めるが、円礫の外面からとれる長楕円形縦長剥片〔小川他1977〕を多く使用した結果であろう。抉りは、側辺部調整の際に偶然にできた場合もあろうが、意図的に製作したことが明らかなものも多い。抉りには、深く抉れるもの（242、252、269、279など）と、広い範囲で緩やかに抉れるもの（240、248、249、258など）とがある（註２）。抉りの位置は側縁中程が多いが、刃部に非常に近い242などは注目される。

使用痕には明瞭な線状痕と磨耗痕とがある。前者は249と281に見られ、いずれも刃部から基部中央にかけて、自然面の上に中軸線と平行な線状痕として残っている。逆の面にはほとんど見られず、図示した線状痕のある面を後主面とした横斧（註３）と判断される。261、262は線状痕としては残っていないが、図示してある刃面の磨耗が反対の面より激しくて広く、刃縁の曲がり具合からしても横斧と判断されよう。その他磨耗痕は多く見られるが、刃面よりも刃縁・側縁に多い。

②　磨製石斧

破片を含めて26点出土した。内訳は、乳棒状石斧が多くを占めて17点、定角式石斧４点、局部（刃部）磨製石斧４点、未製品と思われるもの１点である。乳棒状石斧（293～302）は完形品が全く無く、刃部破損品10点、基部破損品３点、基部の小破片４点となっている。仕上状態では、敲打のままで研磨されないもの５点（293・298）、一部に敲打部分が残るもの２点（294・301）で、あとは研磨仕上である。その研磨もさほど丁寧とはいい難い。基部主面に自然面を残すものも見られる（300など）。また基端につぶれ・磨耗の見られるもの（297・298）や少し破損しているもの（293・295・297・299・300）が多い。定角式石斧（303～305）

はいずれも入念に研磨されている。303は非常に細長いもので、わずかに刃こぼれが見られるだけで、定角式石斧では唯一の完形品である。基端はやや丸みを帯びるが面をなしている。304は扁平・幅広の定角式石斧である。一方の側辺は面をなしておらず、もう片方は面をなしてはいるものの基端と同様に調整はやや粗雑である。刃部は半分程破損しているが片刃である。305は蛤刃型の定角式石斧である。丁寧に製作されたようだが破損がひどい。特に実測図の左図に見られるように、基端から基部中央にかけて大きく抉れている。刃部磨製石斧（307～310）は1点のみ破損している（310）。基端に力が加わり、刃部方向へ薄く剝げたようである。308は基部上方に抉りが見られるものである。柄に装着するためのものであろう。306は磨製石斧の未製品と思われる。基部主面には自然面が多く残るが、部分的に研磨されている。刃部は少し破損しているが、もともときちんと作られた様子はない。また基部には、敲打による径1㎝程の浅い凹みが2個つけられている。他に295にも数個の凹みが見られる。

石斧は使用方法の相違によって縦斧と横斧に分けられる〔佐原1977〕が、使用痕などによってそれがほぼ確定できるものは5点である。302は明確に偏刃（斜刃）をなし、刃部には「後高前低」の線状痕〔セミョーノフ、田中1968、佐原1977〕が見られる。左図の面を左主面とする縦斧である。303も縦斧で図示した面が左主面となろう。これに対して304は右図の面を前主面とする前主面片刃横斧である。刃縁を下から見ると、中央部が後主面側に偏った曲線を描いている。307は図示した面を後主面とする横斧である。刃部の線状痕は後主面側ではかなり長くのびている。刃部の中央部もやや後主面側に寄っている。309は左図の面を後主面とする横斧である。両蛤刃であるが、前主面側がより強いまるみをもっており、前主面片刃的である。使用痕は、後主面側刃部に主軸と平行な線状痕が明瞭に見られるが、前主面側ではあまりはっきりしない。刃縁はほぼ直線をなす。この他にも刃部の残っているものはあるが、使用痕はいずれも不明瞭である。

③　不定形石器

ここでは、加工されていることは明瞭だが、他の器種に入れ難いものを一括した。いずれも緑色火山岩製である。311は扁平で細長い原石の両長辺を敲打したものである。1.6kgとかなり大形で大きな剝離も見られるが、他の痕跡はない。312もやや扁平な棒状の原石の両長辺を敲打したものだが、図下端部にも敲打が及んで鋭くなり、ここを刃部と見ることができる。磨製石斧の未製品であろうか。313は他と形態をかなり異にする。円柱を縦に半割して先を尖らせたような形である。これも側辺部と上面がかなり広く敲打されている。また、片側辺にノッチが形成されている。314は棒状形であるが、大きく曲がっている。この加工も敲打によるがかなり広い範囲に及ぶ。315も敲打痕を持つが、他よりも軽くて少ない。図下端部は大きく剝離されて刃部を形成しているかのようなので、あるいは石斧のように機能したのかもしれない。また図上端部には、後述の「使用痕ある石」で述べるような平坦面が残されている。

④　大形石匙

比較的小形で黒曜石やチャートなどの素材を用いた加工の丁寧な石匙と区別し、主に砂岩系の石材を使用した大形で加工の粗い石匙を一括した。11点ある。横刃型石器と類似するが、つまみ部を持つことがそれとの相違点である。大形石匙もつまみ部と刃部との関係によって、縦型（316、317）、横型（322～324）、斜型（318～321）に3分類できる。斜型がやや多い。刃部は3点（316、319）のみ片面加工である。加工は全体的に粗いが、320や323のように鋭く丁寧に作出されるものもある。

⑤　横刃型石器

329点と大量の出土をみた。刃部と背の平面形によって分類したが、『中央道報告－岡谷その4－昭和52・53年度』の分類基準〔樋口・青沼1980、P.26〕に従った。すなわち刃部は、A－円刃（外湾刃）、B－直刃、C－内湾刃とし、背は、I－直な背、II－外湾する背、III－山形の尖った背、IV－内湾する背である。こ

の分類基準に従って、形態別の個体数を示したものが表5である。IIA、IIIA、IIB類が多いのが目につく。全体的には、外湾または山形の背を持ち、外湾する刃部を持つものが横刃型石器の一般的形態といえようか。逆に、内湾する背や刃部を持つものは希である。

	A	B	C	計
I	26	30	10	66
II	73	50	16	139
III	63	28	14	105
IV	11	5	3	19
計	173	113	43	329

表5 横刃型石器の形態別個体数

横刃型石器も打製石斧と同様、自然面を残すものが多い。風化などで表面の観察が不可能な47点を除く282点中、両面に残るもの2点、片面のみ98点、背または側縁から片面にかけて8点、背または側縁45点、自然面を残さないもの129点となっている。どんな場所にあるにせよ、自然面を残すものは全部で153点（54%）に達するが、中でも片面にのみ残すものが圧倒的で、自然礫の表面からとれた剥片を多く利用しているといえよう。

刃部加工には粗密がみられるが、素材となった剥片がもともと鋭い刃を持っていた場合は、あまり加工せずに使用したのであろう。逆に非常に丁寧なものもあり、中には、刃部に細かいきざみを入れて鋸歯状にした363や401もある。

369は2ヶ所に抉りを持っている。横刃型石器に入れたが、鉈形石器とか石鉈と呼ぶ場合もある〔小林公明1976、武藤・小林他1978、P221〕。鉈と断定してよいかどうかはともかくとして、比較的大形で厚みもあり、硬砂岩製で重量もあるので、敲き切るように使用することは可能である。背と刃部の端に抉りがみられるが、いずれもかなり潰されている。着柄の際の紐かけによるものであろうか。

328と402は磨製というべき横刃型石器である。328は粘板岩製で、全体的に研磨されてはいるが、刃部と背の一部に剥離が目立つ。使用の結果かもしれない。402は緑色片岩製の薄い剥片を研磨したものである。丁寧な研磨とはいえず凹凸が残るが、刃先は比較的入念に作り出されているようである。

⑥　磨痕・凹み・敲打痕を持つ石

磨石・凹石・敲石という名称は広く使用されているが、その区別あるいは使い方がまちまちであることは既に指摘されている〔小林康男1978〕。そのため新しい視点による分類も試みられている〔鈴木次郎他1977、P.213、芹沢・後藤他1979、P.167など〕。本遺跡においては、同一の石に複数の痕跡が残されているものが多いので敢えて特定の名称をつけずに一括して扱い、その中で痕跡による分類を行った（註4）。

表6は総数273点の石に磨痕（A）・凹み（C）・敲打痕（D）がどのくらい残されているかを示したものである。この中で磨痕を持つものは250点（92%）で磨痕のみ持つもの（450～463）だけでも108点と非常に多いが、風化のために研磨痕かどうか判断しかねるものも含めているためであろう。凹みを持つ石は157点、完形品だけでも131点あるが、その半数は2面に凹みを持つもの（491～513）である。次いで1面にのみ持つもの（514～519）が多く、この2つで全体の¾に達する（表7）。形態的には、凹みを持つ面の数によってやや相違が見られる。厚／幅が0.5未満になるのは14点あるが、そのいずれもが2面または1面にのみ凹みを持っている（図71）。すなわち凹みを4面（475～481）あるいは3面（482～490）に持つためには、厚／幅が0.5以上必要、つまり厚さにもある程度広い面が確保されていなければならないのである。その意味において489や490は最低条件のものである。凹みは1面につき1～5個あるいは連続して細長くつけられているが、1面に1個が基本的で最も多い。次いで1面に2個というのも比較的多いが、それ以上のものは非常に少なくなる。敲打痕を持つ石は全部で21点（8%）と少なく、しかも他の痕跡と重複しないものはわずかに2点だけ（466、467）である。こ

痕　跡	個体数	(%)
A	108	(39)
C	21	(8)
D	2	(1)
A＋C	123	(45)
A＋D	6	(2)
A＋C＋D	13	(5)
計	273	(100)

表6 磨痕・凹み・敲打痕を持つ石の痕跡別個体数

凹　み	個体数	(%)
4　面	17	(13)
3　面	17	(13)
2　面	67	(51)
1　面	30	(23)
計	131	(100)

表7 凹みを持つ石の凹面別個体数（欠損品を除く）

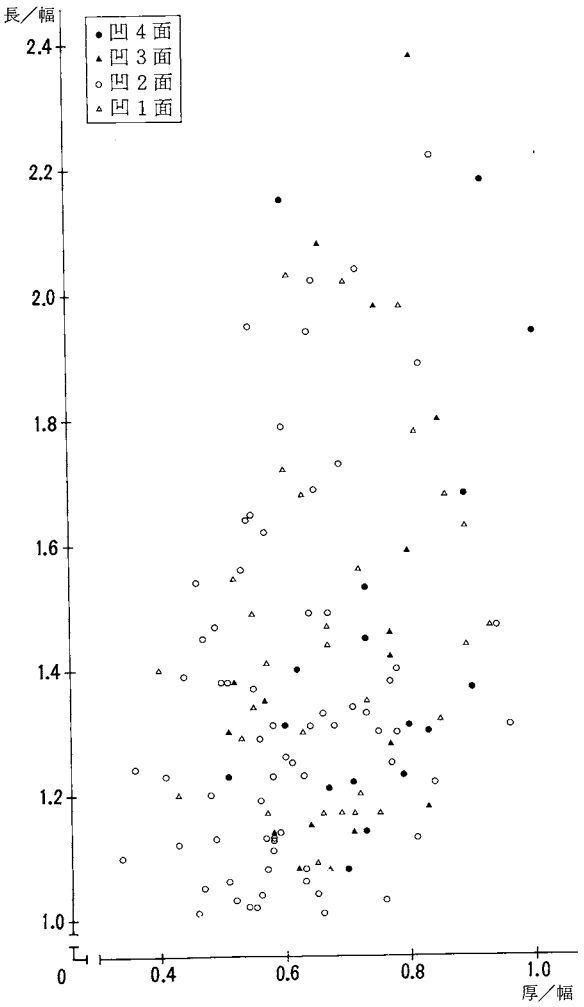


図71　凹みを持つ石の長/幅と厚/幅の相関図

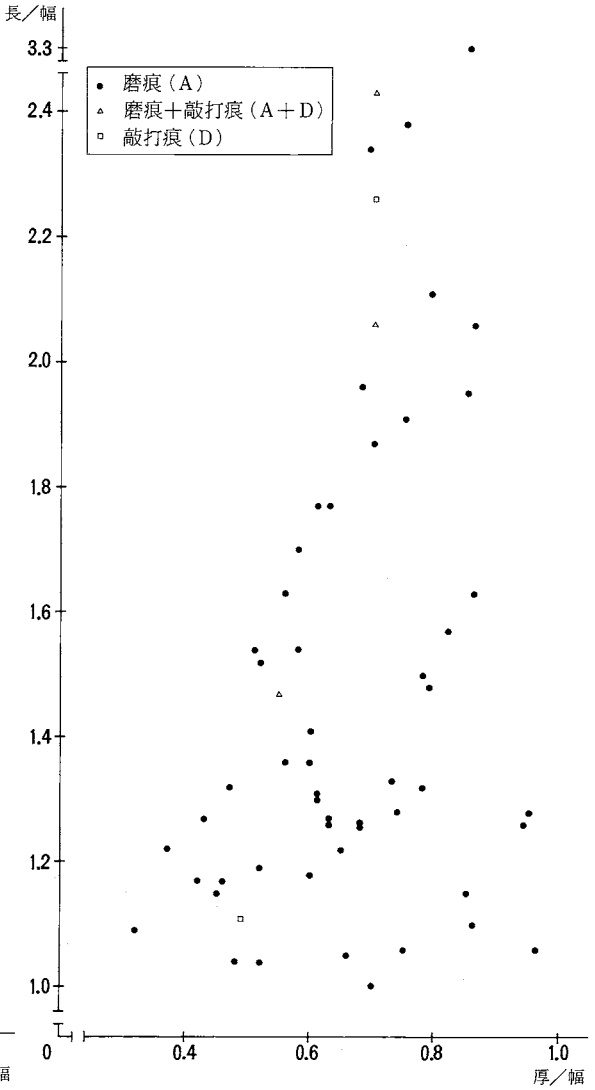


図72　磨痕・敲打痕を持つ石の長/幅と厚/幅の相関図

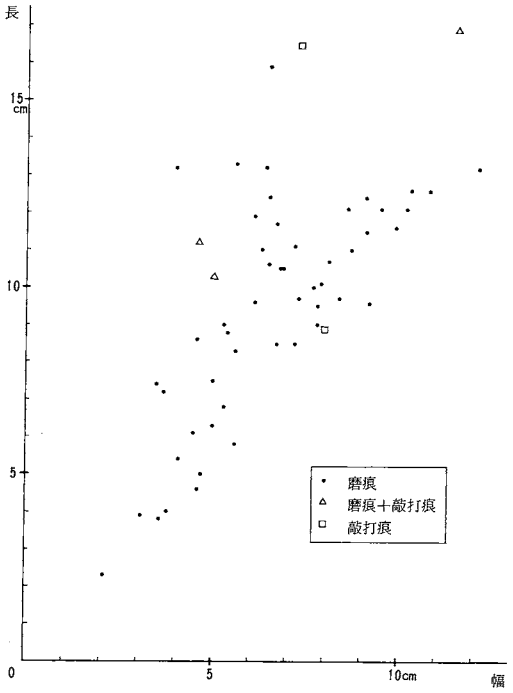


図73　磨痕・敲打痕を持つ石の長さと幅

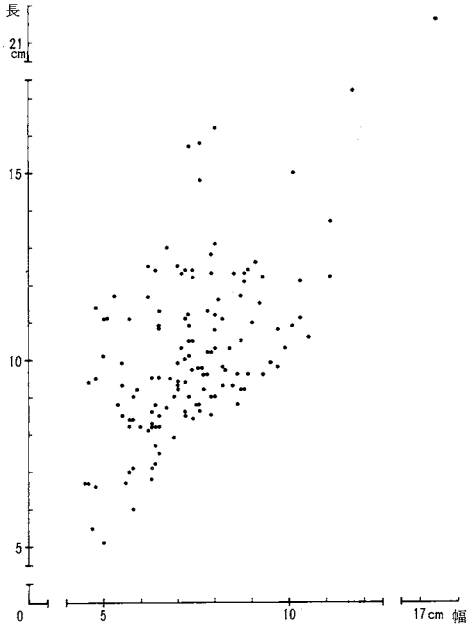


図74　凹みを持つ石の長さと幅

の２点はいずれも石の両端部に敲打痕を持っている。464は素材としては数少ない硬砂岩製で、破損部分は多いが、明瞭な敲打痕と研磨痕を持っている。凹みを持つ石に見られる敲打痕は、ほとんどが端部につけられている。

これらの痕跡を持つ石の形態を比較してみると、磨痕のみ持つ石と凹みを持つ石の分布範囲はよく類似している(図71、図72)。すなわち両者ともに似た形態の石が同じくらいの割合で使用されていたといえよう。また磨痕のみ持つ石では長／幅が1.04～1.54、厚／幅が0.42～0.79に、凹みを持つ石では長／幅が1.01～1.49、厚／幅が0.50～0.84にそれぞれの半数以上が集中することは、長さが幅の1.2倍くらいで厚さが幅の⅔くらいの石が多く使用されたことを示している。その実長を見てみると、図74より図73の方がややばらついて見える。これは凹みを持つ石には長さ・幅ともに5㎝以下のものが無いのに対して磨痕のみ持つ石は6点あることと、後者の方が数量的に少ないので分布が散漫に見えることが原因しているのであろう。しかし実際には両者の分布範囲はよく似ており、凹みを持つ石にあまり小さいものが無いという特徴を除けば、両者は大きさの上からもよく似た石が用いられたといって良いであろう。

⑦　台石

比較的大形の扁平な石で、表面に敲打痕を持つもの７点を台石として一括した。ほとんどが自然石をそのまま利用しているが、470は上下両面とも丁寧に研磨されており、外周部も敲打による成形の後で軽く研磨されている。他の台石も部分的には研磨されているようである。敲打痕は469・471・474を除いて明瞭に残されているが、全体には拡がらずに一部分に集中している。474は18号住出土の大形台石であるが、使用痕は残されていない。

⑧　使用痕ある石

ここで使用痕ある石として取り上げたのは、棒状または扁平な卵形をした砂岩などの小形の石の端部に

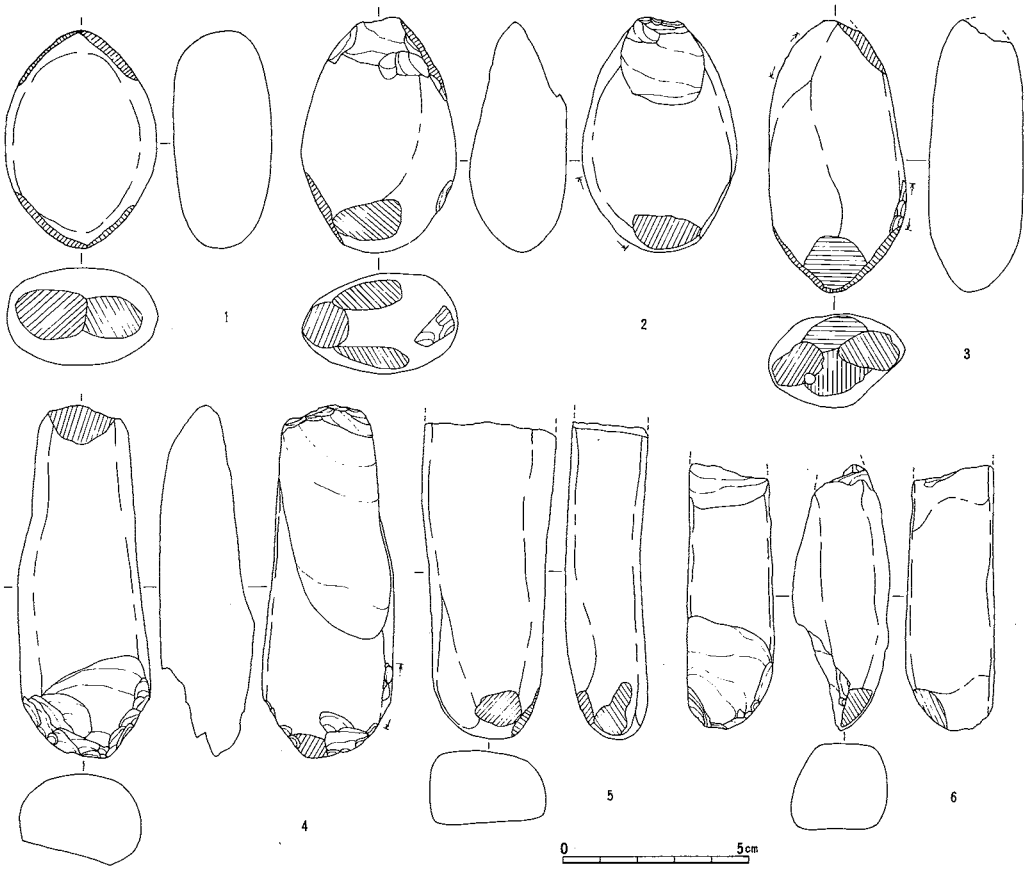


図75　使用痕ある石実測図（１：２）

1つまたは複数の平坦な面を持つ石である。この平坦な面は石の両端に見られるのが普通であるが、決して滑らかな面ではない。従って研磨のみによって形成されたものではなく、むしろ主として軽い敲打によるものらしい。面が石の長軸に対して45度内外の角度を持っていることから、この石を親指・人差指・中指の3本くらいの指でつまみ、ある程度広い面を持ったものに対して斜めに軽く敲打することによって形成されたと考えられる（註5）。それと関連すると思われるがこの面の近くに明瞭な敲打痕を残すものが多い。また端部を破損しているものも多い。

⑨　石皿

6点出土したが図示しなかった2点はそれぞれ耳部の小破片で全体の形状を復原できない。石材は520の花崗岩を除いてすべて輝石安山岩である。520は16号住出土のものだが、石材も含めて他と様相を異にする。⅓程度破損していると思われるが、皿部は浅く、扁平で広い。耳部は無く打ち欠いたような状態のままとなっている。521と523は大形で皿部も比較的深いが、いずれも大きく破損している。522は小形の完形品である。裏面には浅い凹みが見られる。なおこれは、13号住内の石組み特殊遺構の構築石の1つとして検出された。

註1.長さはともかく、幅や重さが群を抜いて大きい3点（290～292）は分類外とした。いずれも500ｇを越える。290は緑色片岩製で短冊型、291は砂岩製で分銅型、292は安山岩製で短冊型と石材・形態ともまちまちである。292は安山岩の大きな剝片に簡単な側辺加工を施しただけのもので、1kgを越える超大形品である。

註2.洩矢遺跡出土の打製石斧にも同様に2種類の抉りが見られる。〔樋口・和田他1980、P.117〕

註3.佐原真氏の用語〔佐原1977〕を使用した。磨製石斧の項も同様である。

註4.本遺跡での分類方法と全く同一の方法で分類された報告〔原田他1980〕に接したが、稿了後であったため充分な検討ができなかった。後日に期したい。

註5.以上、岩崎孝治氏の実験・教示による。なお、この平坦面を「使用痕」として扱ったが、実際に使用痕（作用痕）なのかあるいは製作痕なのか、現在のところ判断はできかねる。

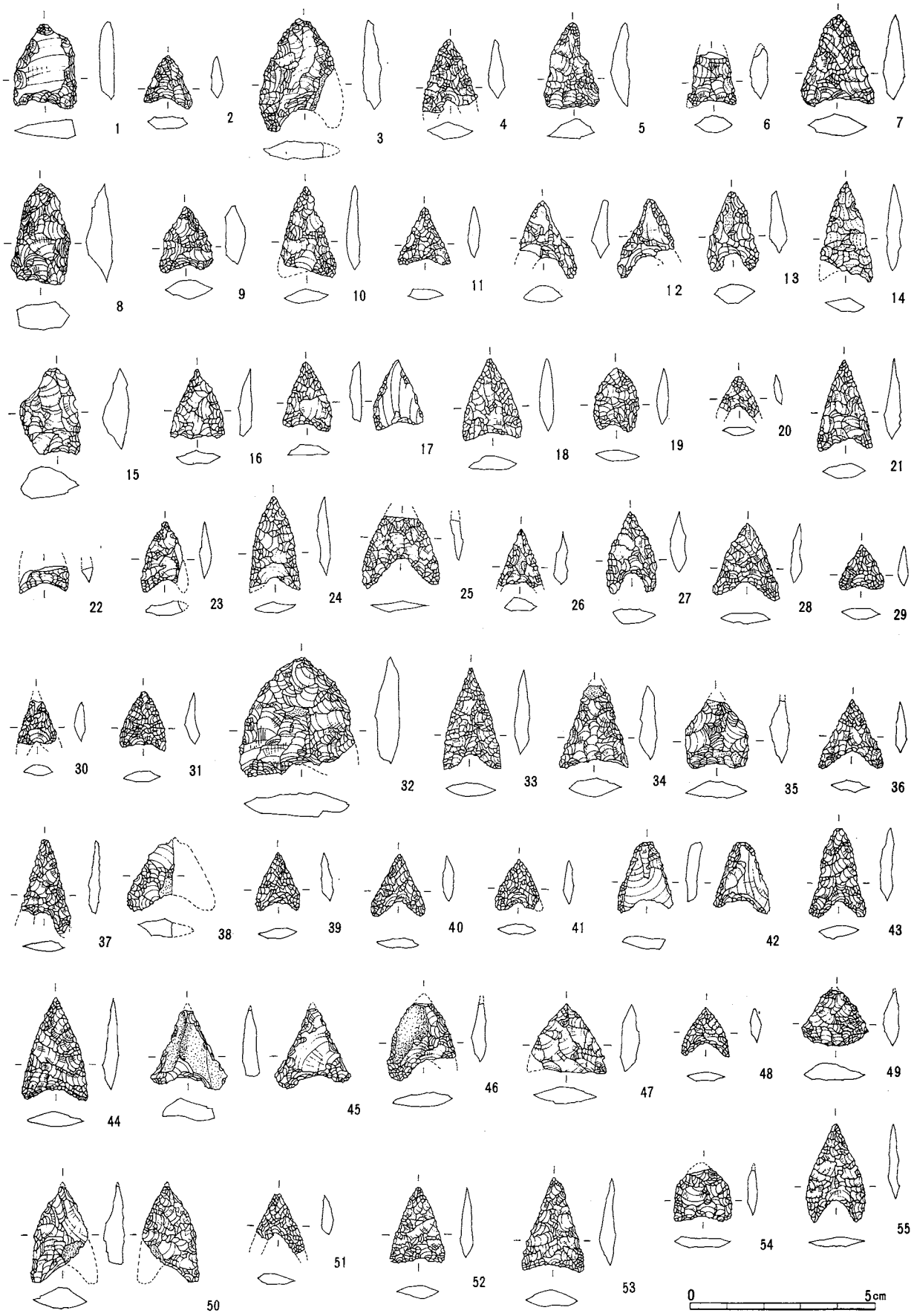


図76　縄文時代小形石器実測図　1　(1：1.5)

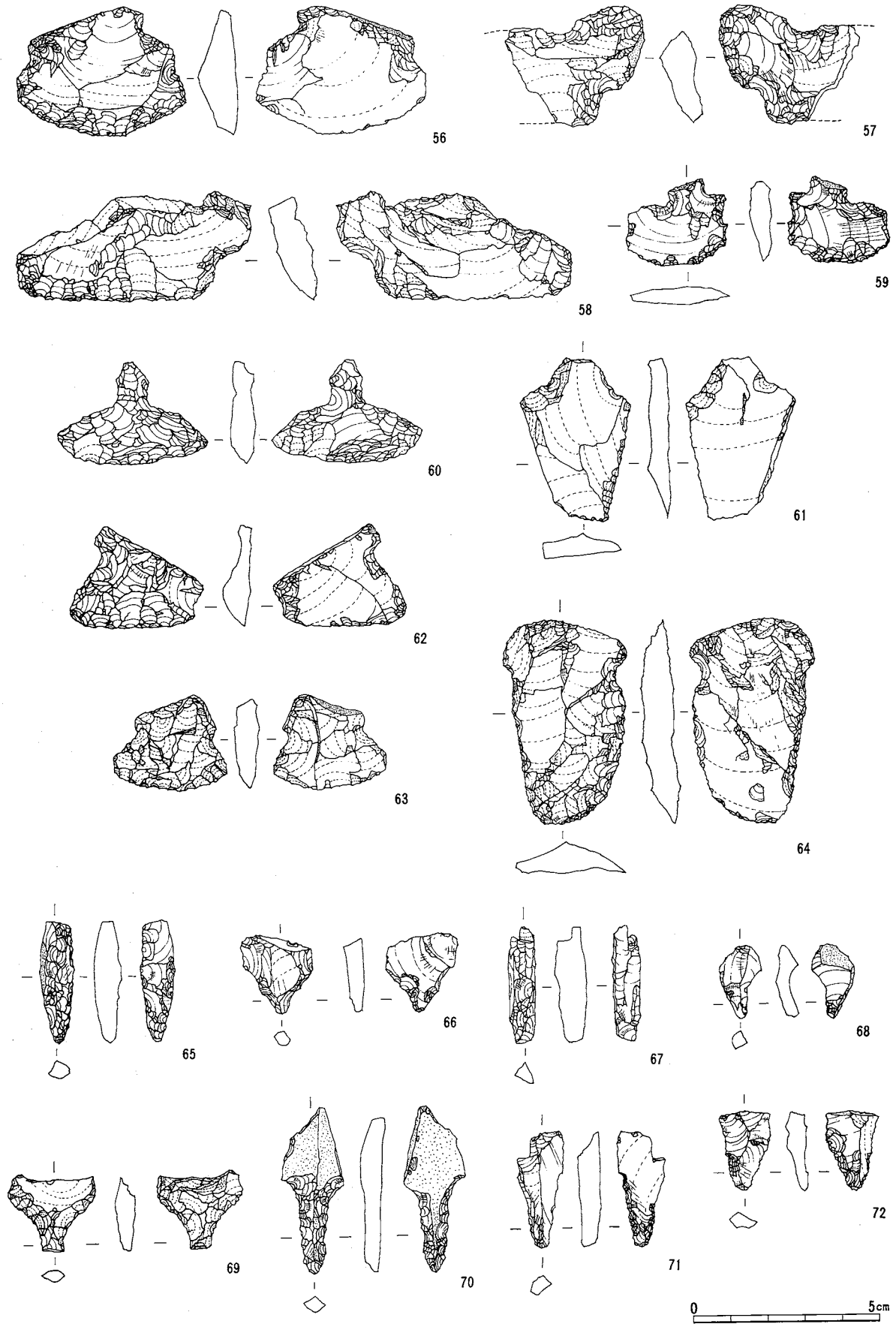


図77　縄文時代小形石器実測図　2　(1：1.5)

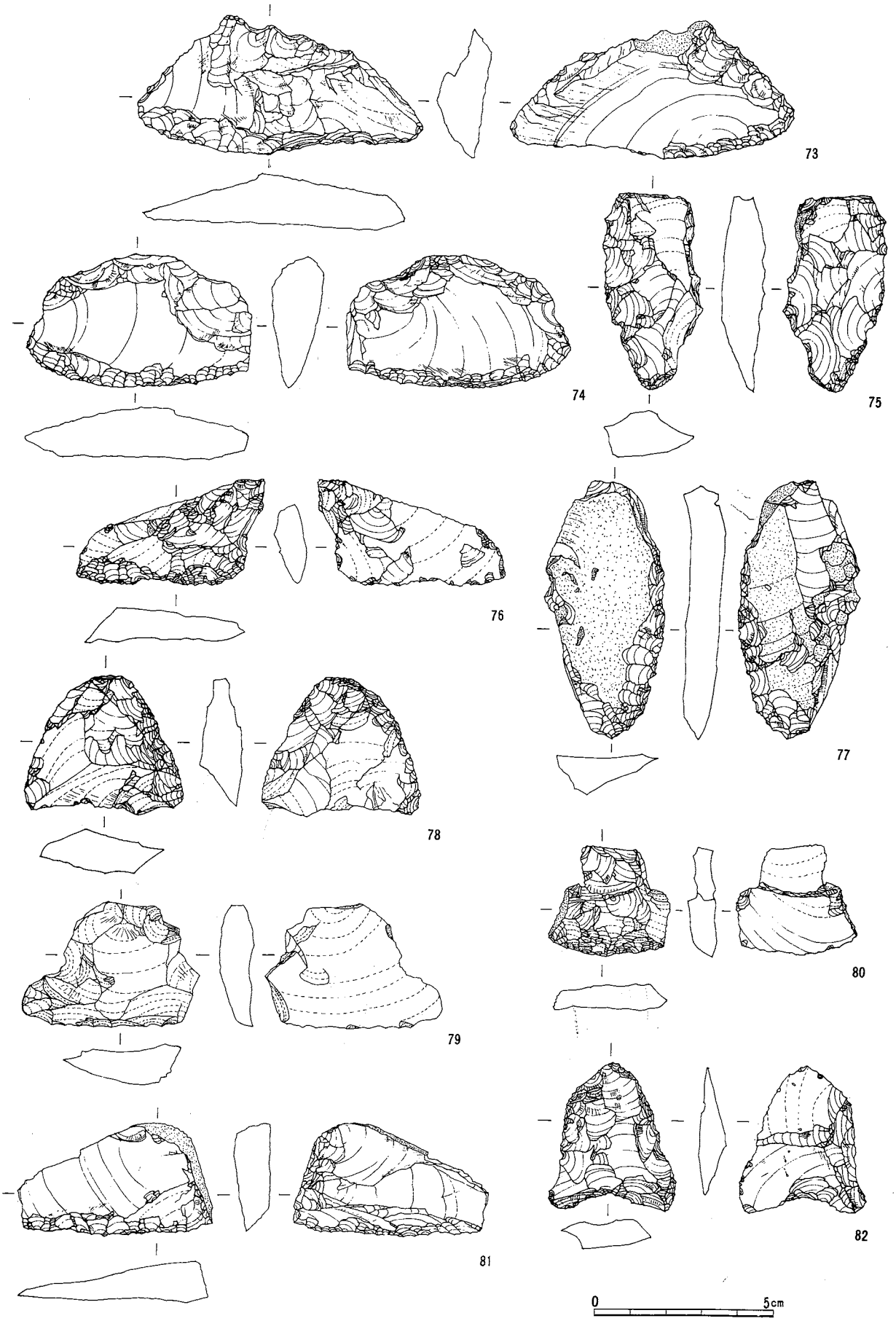


図78　縄文時代小形石器実測図　3　(1：1.5)

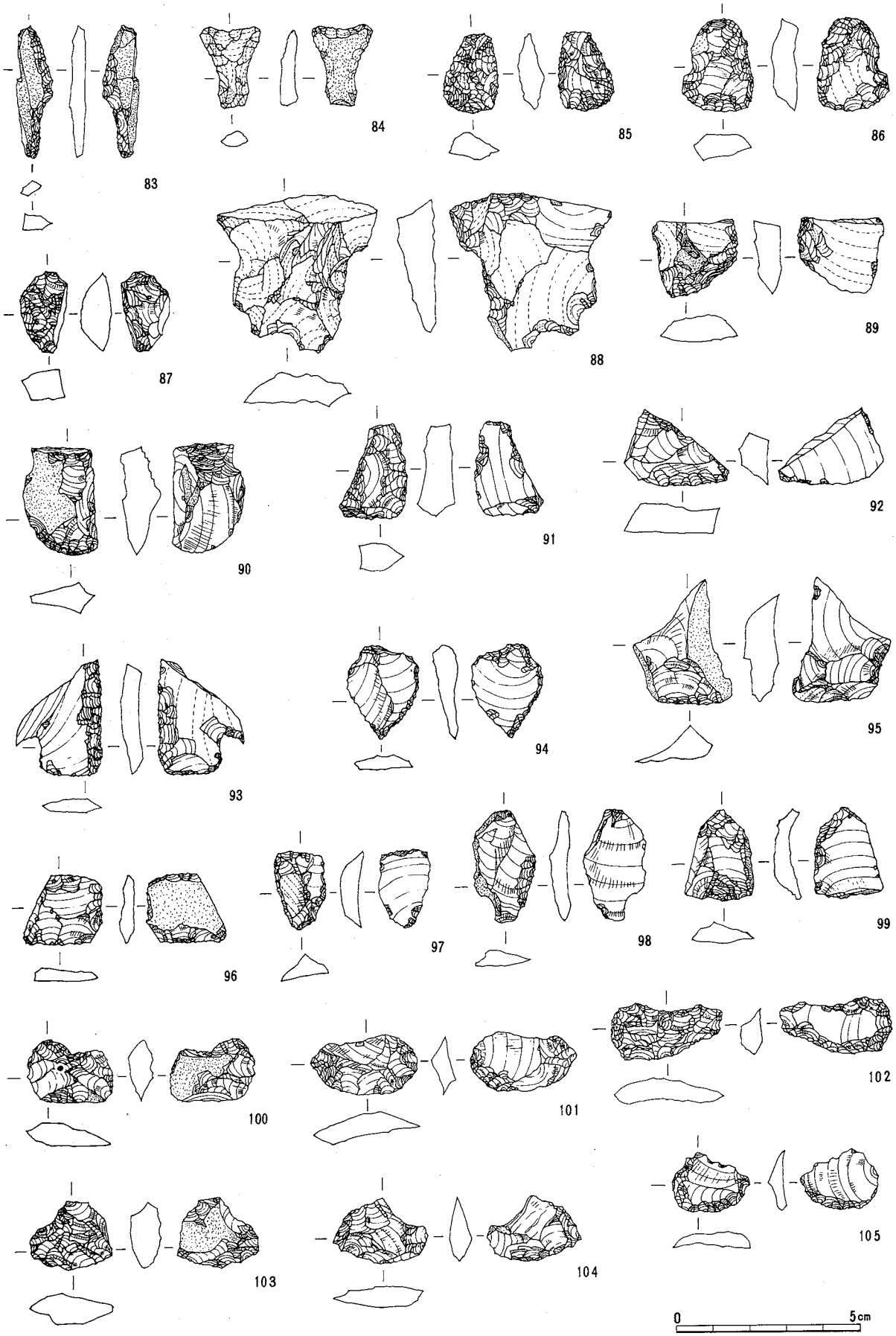


図79　縄文時代小形石器実測図　4　(1：1.5)

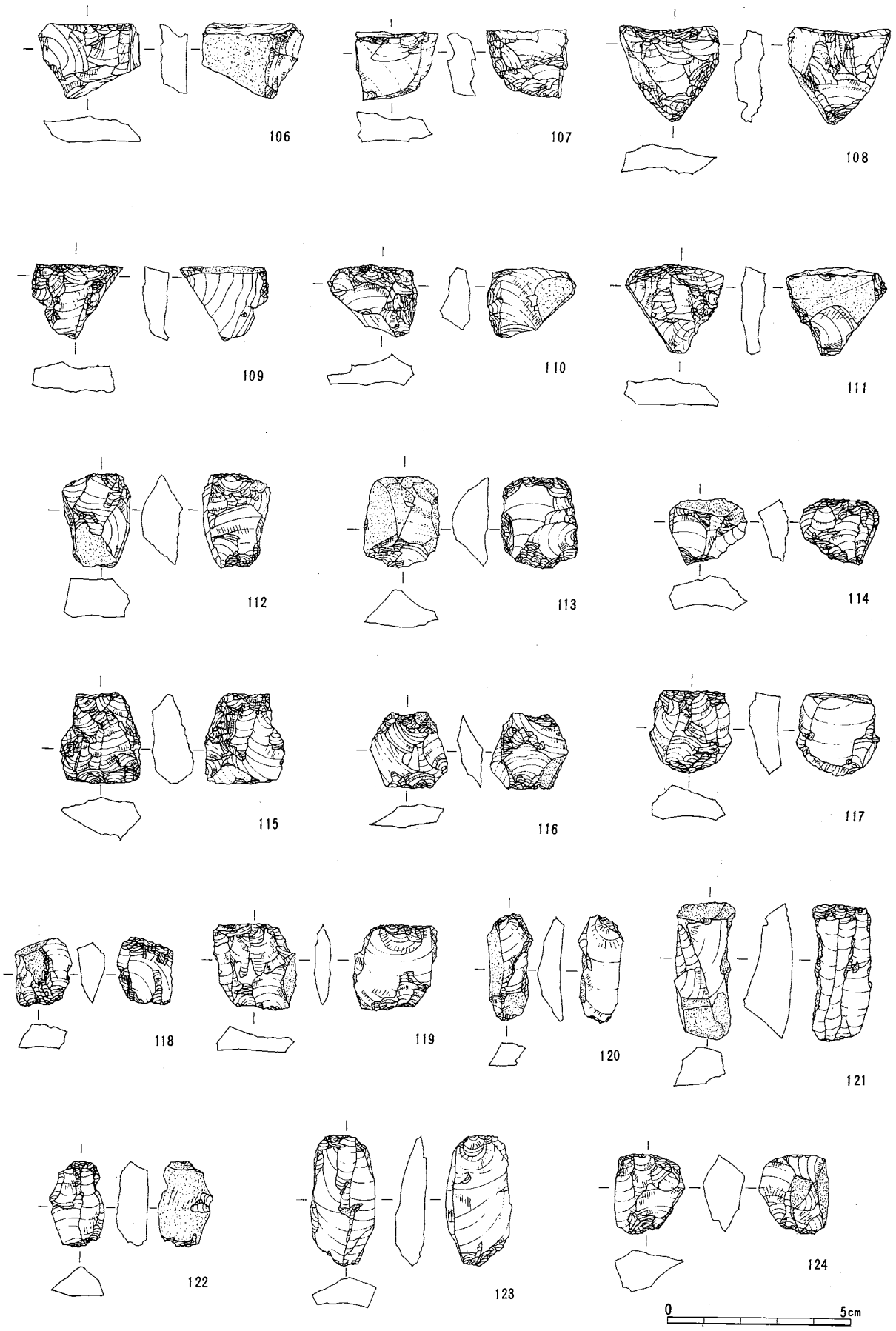


図80　縄文時代小形石器実測図　5　(1：1.5)

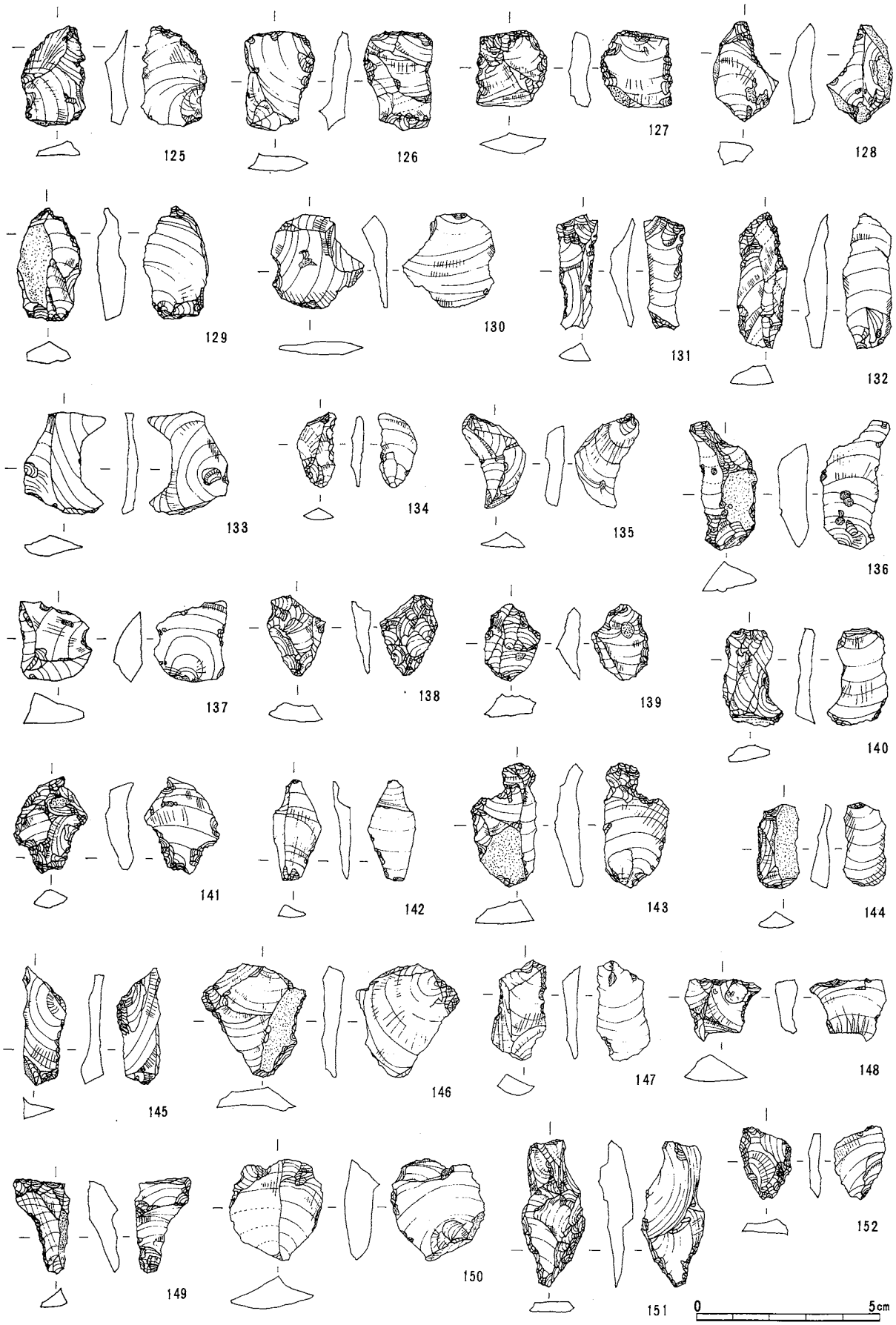


図81　縄文時代小形石器実測図　6　(1：1.5)

図82　縄文時代小形石器実測図　7　(1：1.5)

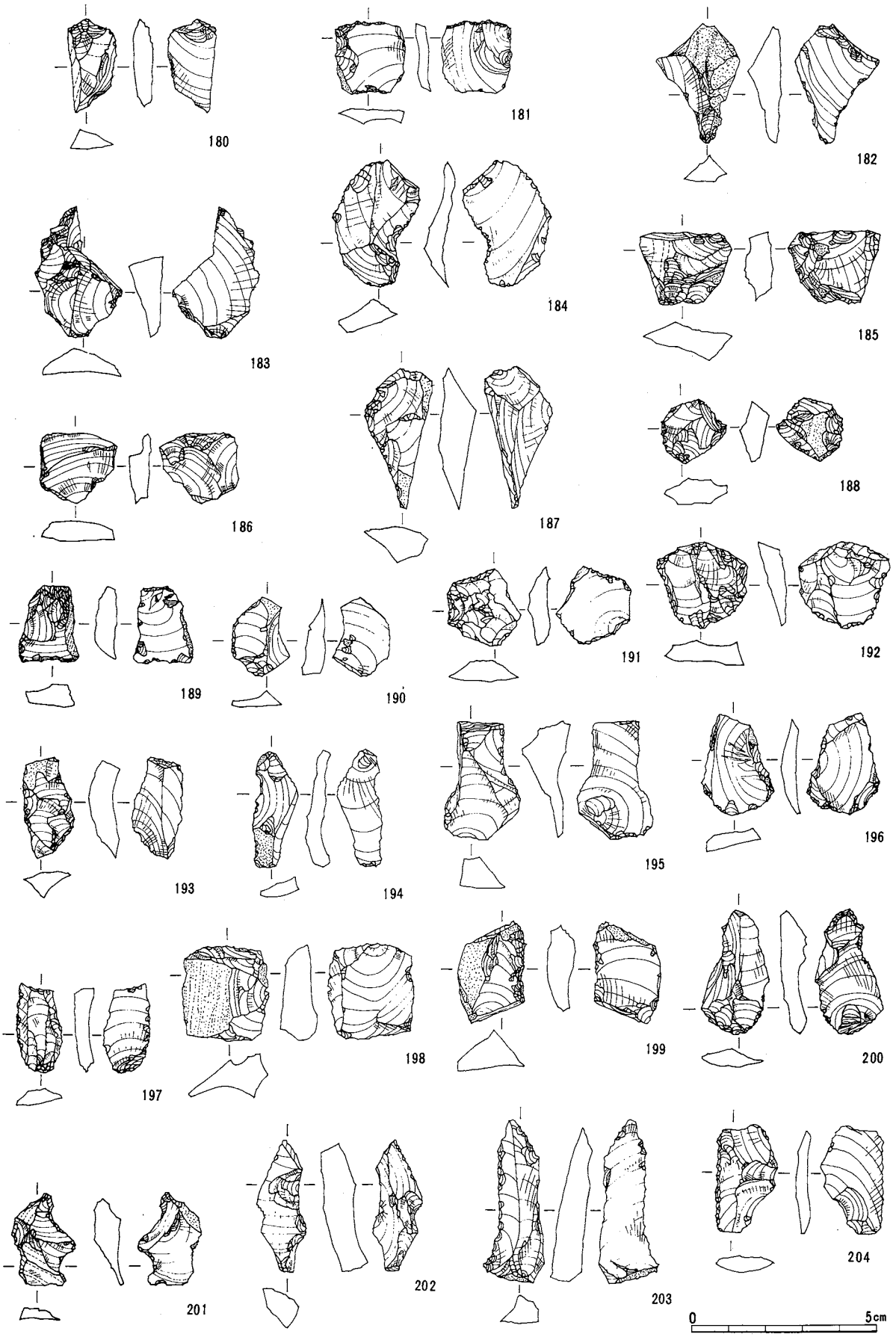


図83　縄文時代小形石器実測図　8　(1：1.5)

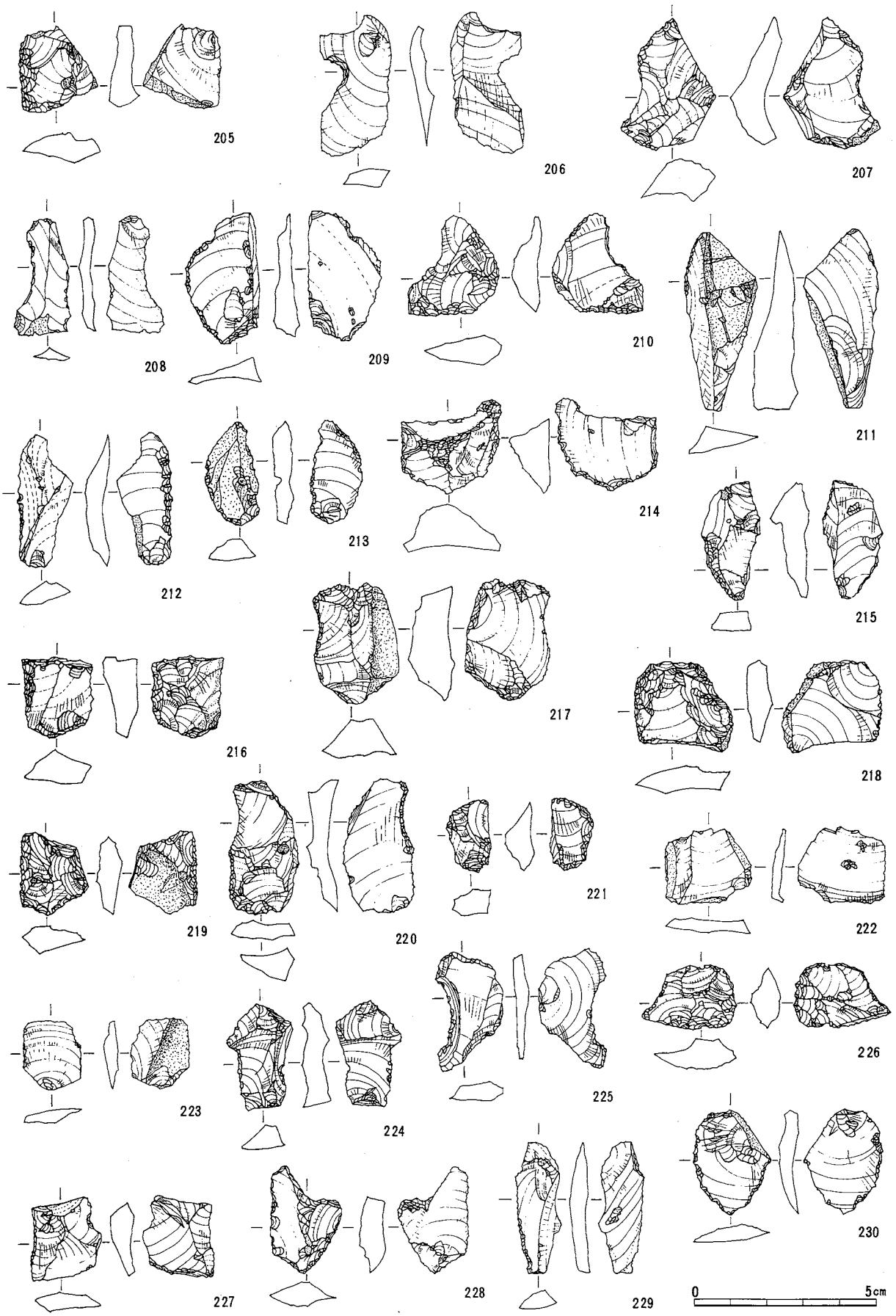


図84　縄文時代小形石器実測図　9　(1：1.5)

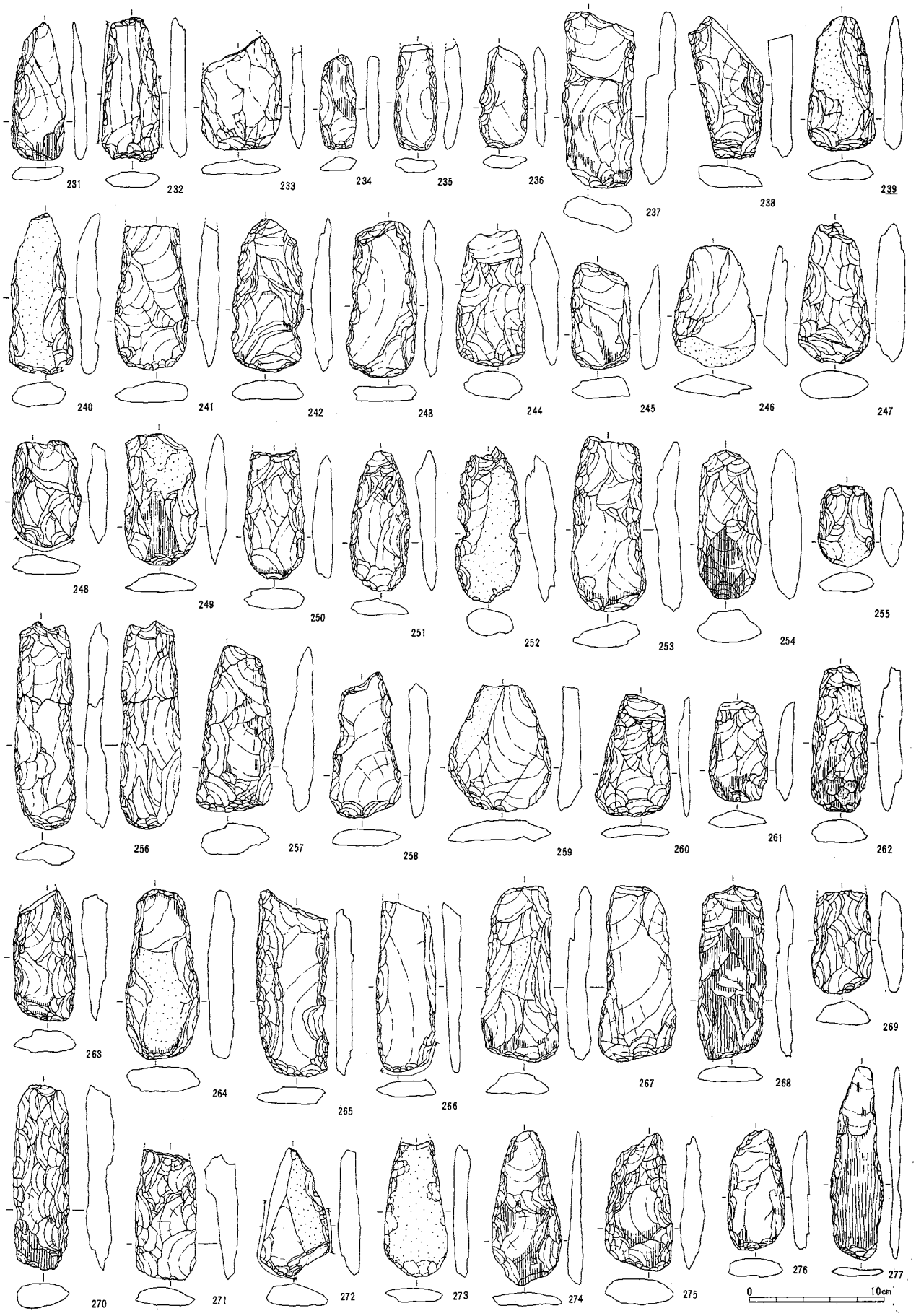


図85　縄文時代大形石器実測図　1　（1：4）

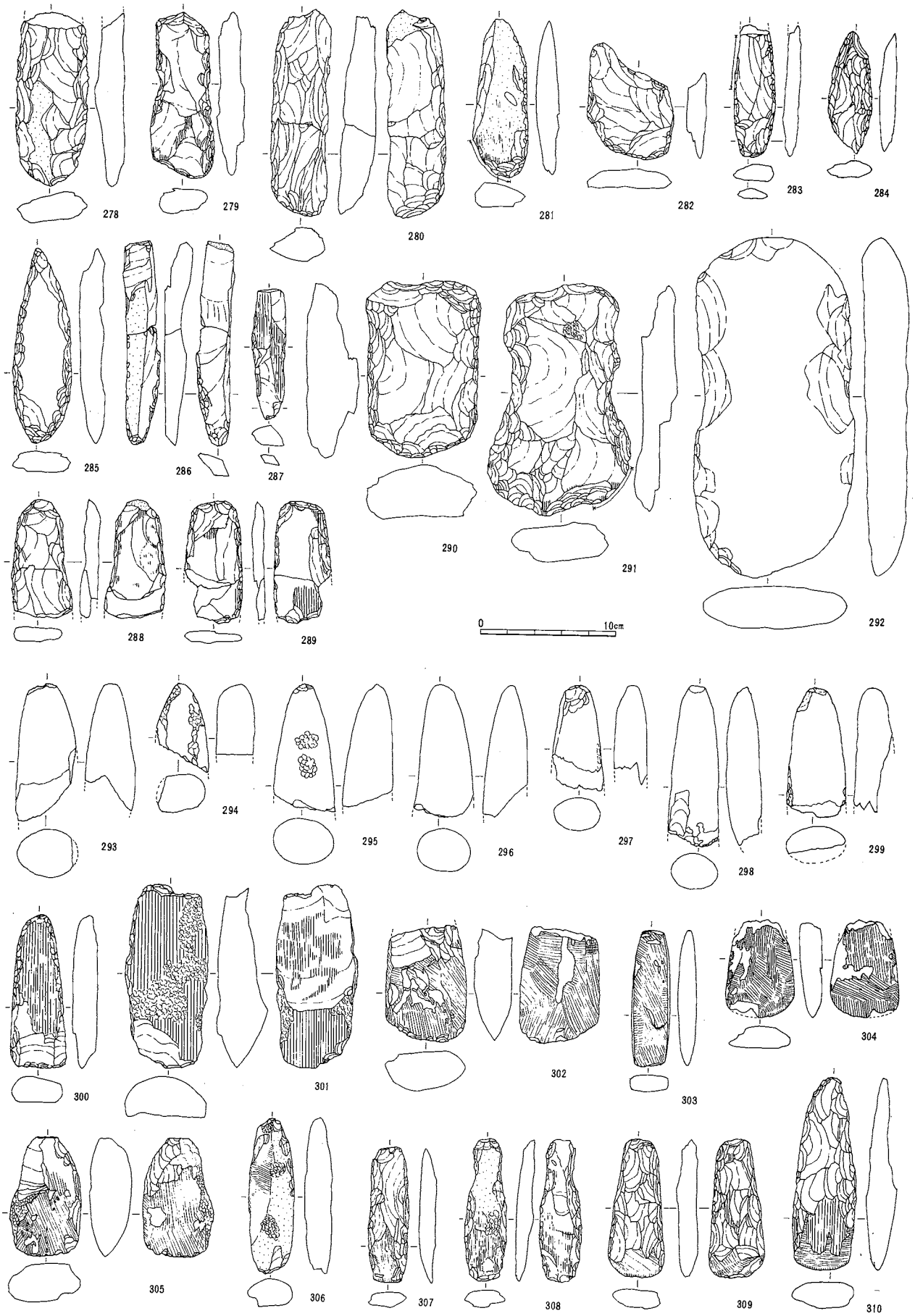


図86　縄文時代大形石器実測図　2　（1：4）

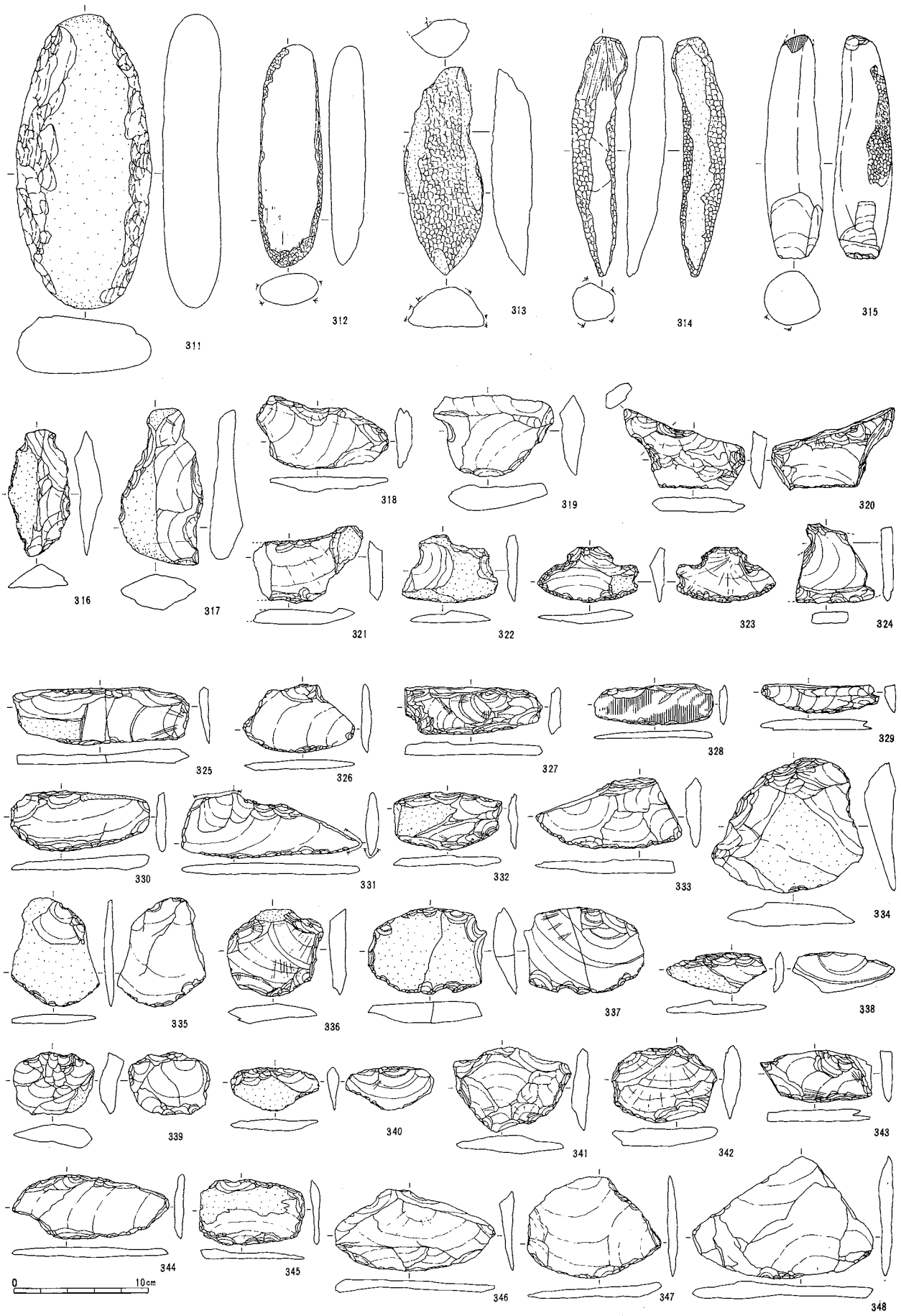


図87　縄文時代大形石器実測図　3　（1：4）

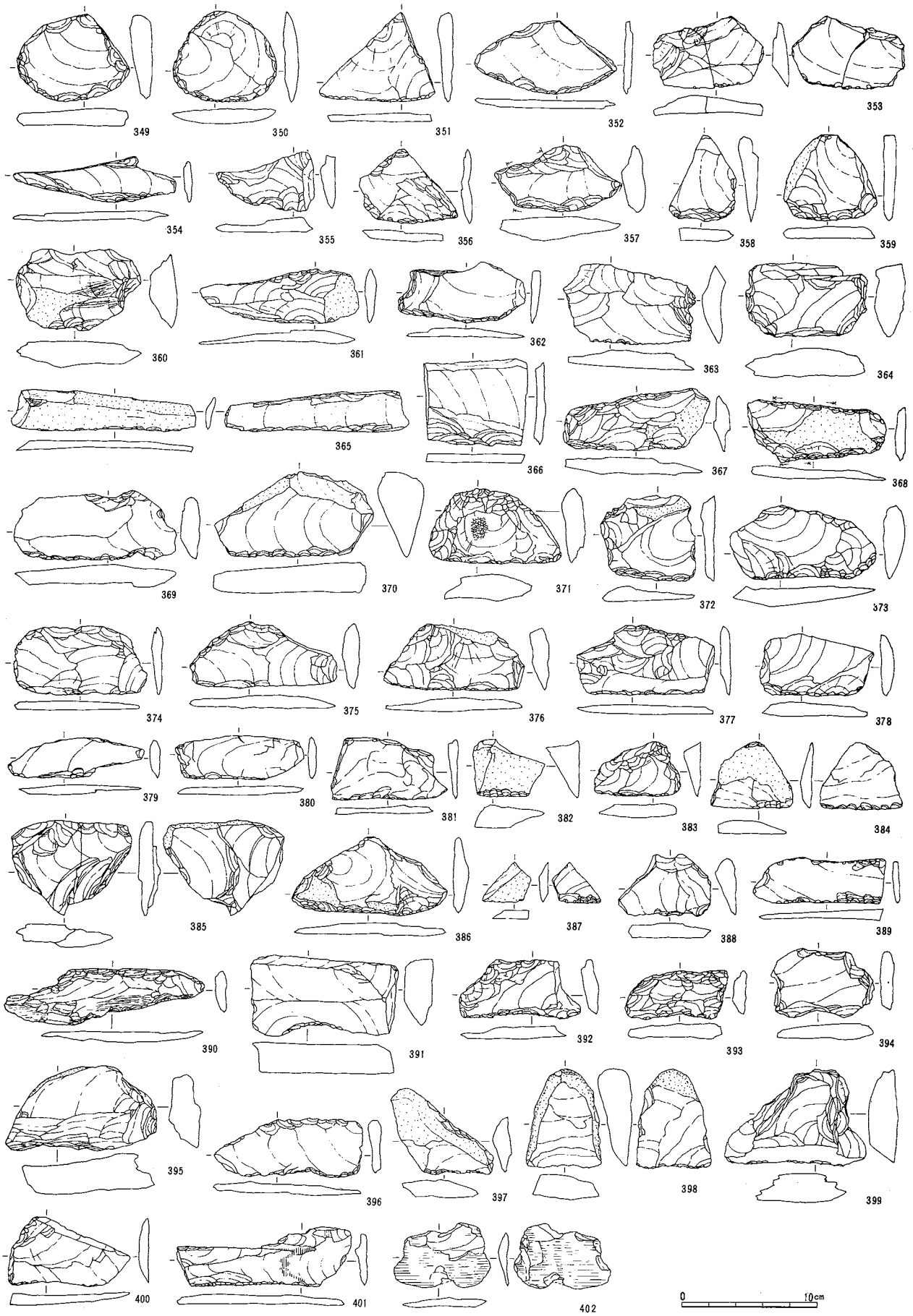


図88　縄文時代大形石器実測図　4　（１：４）

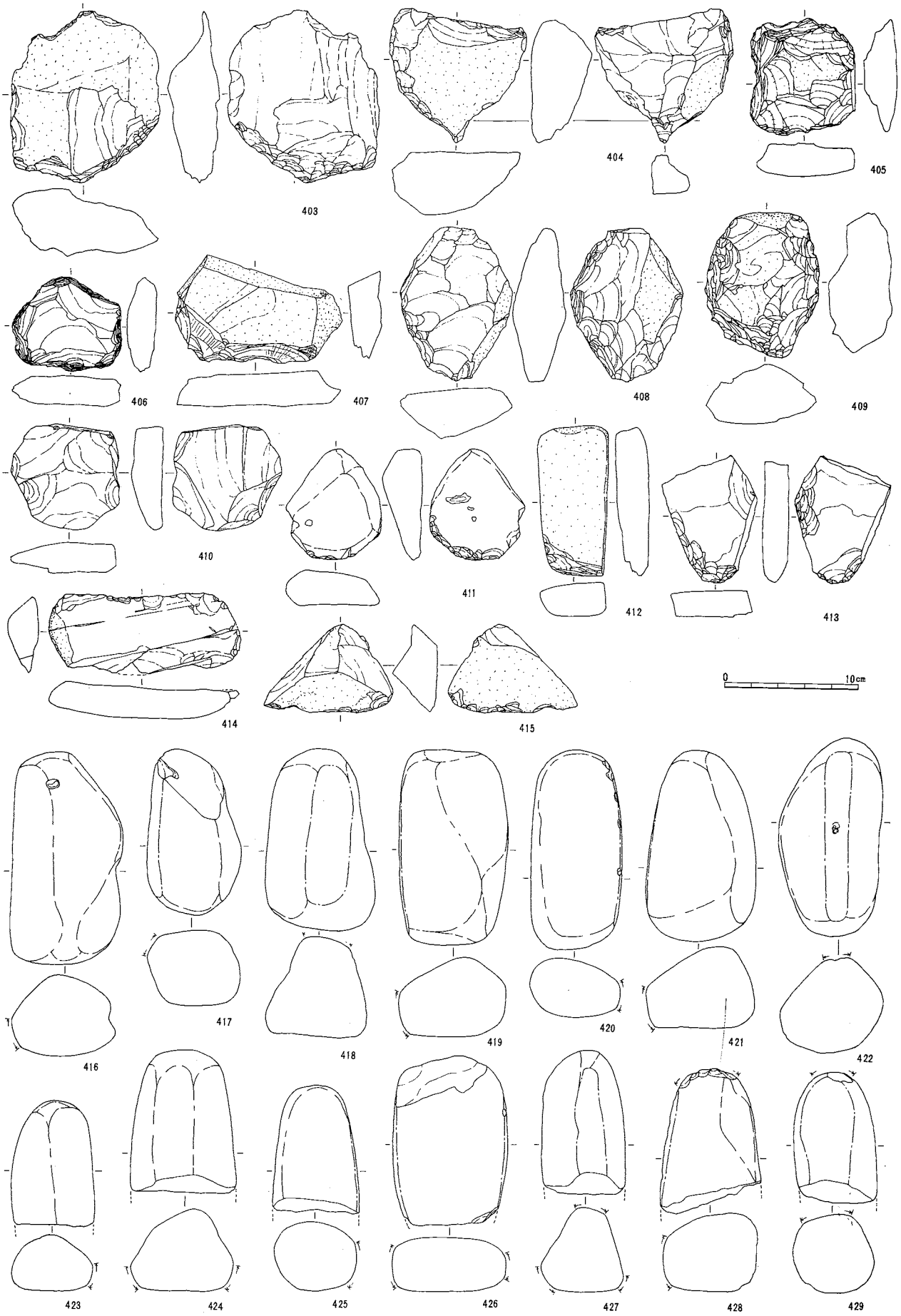


図89　縄文時代大形石器実測図　5　（1：4）

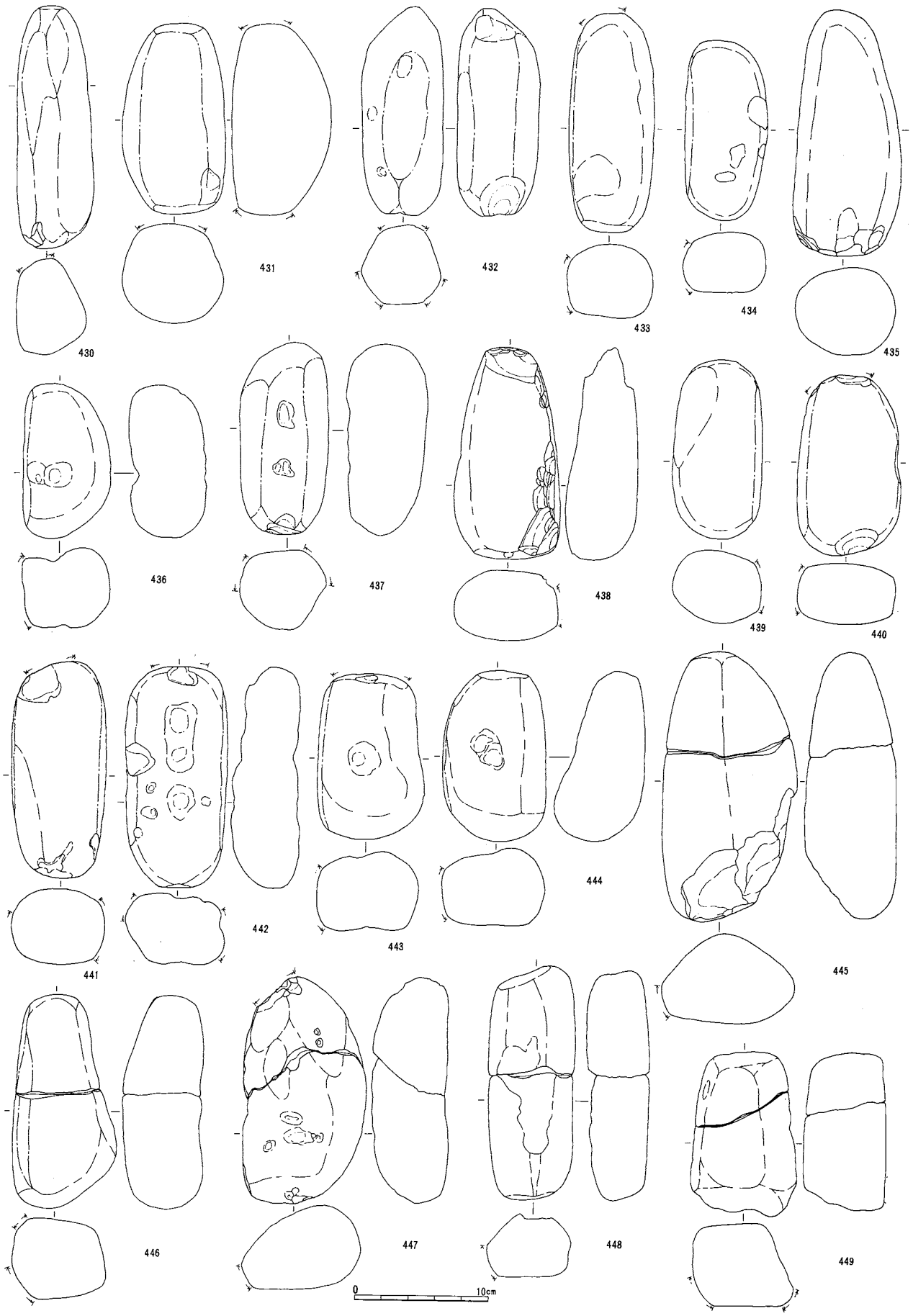


図90　縄文時代大形石器実測図　6　（１：４）

図91　縄文時代大形石器実測図　7　（473、474 1：8　他 1：4）

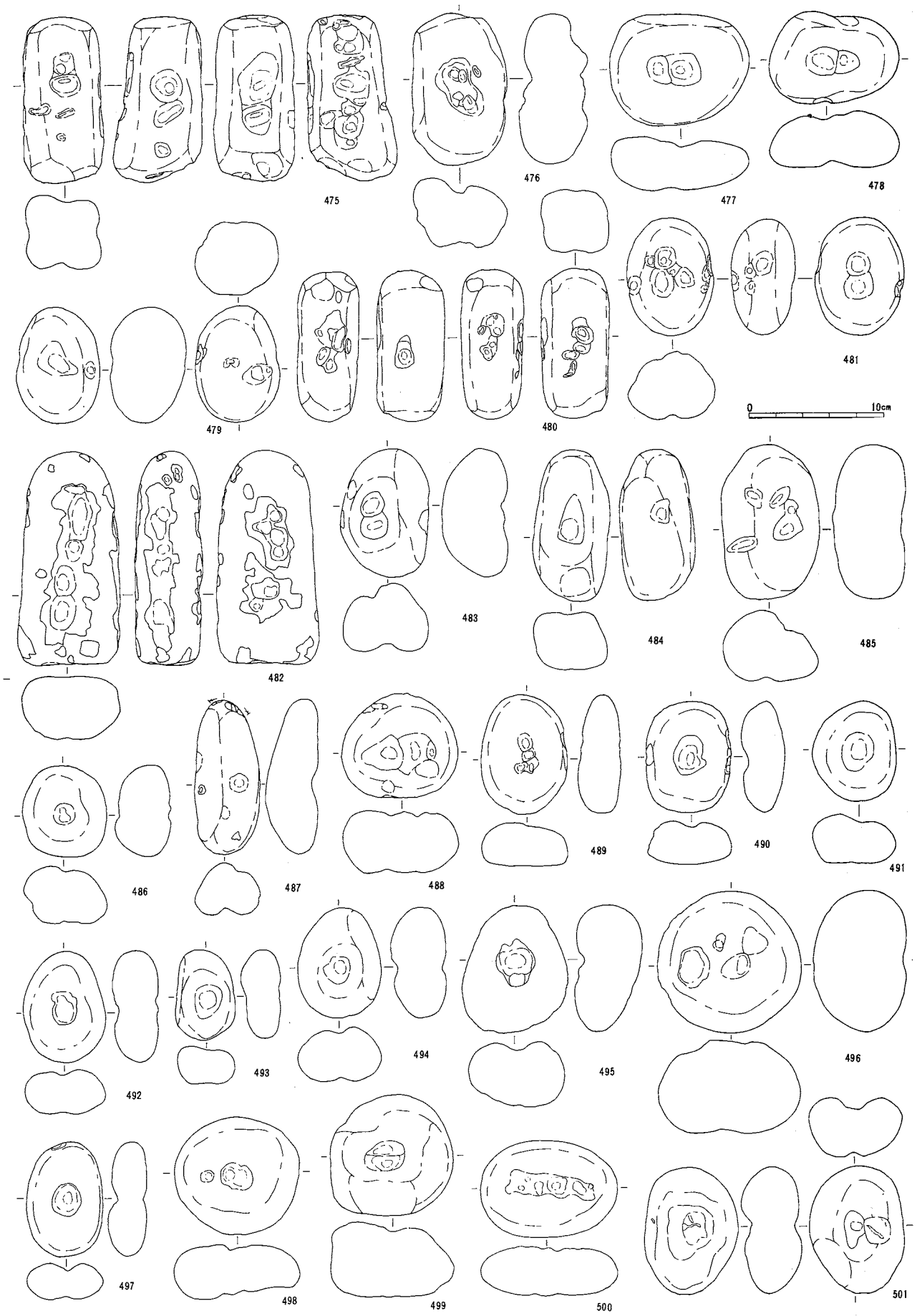


図92　縄文時代大形石器実測図　8　（1：4）

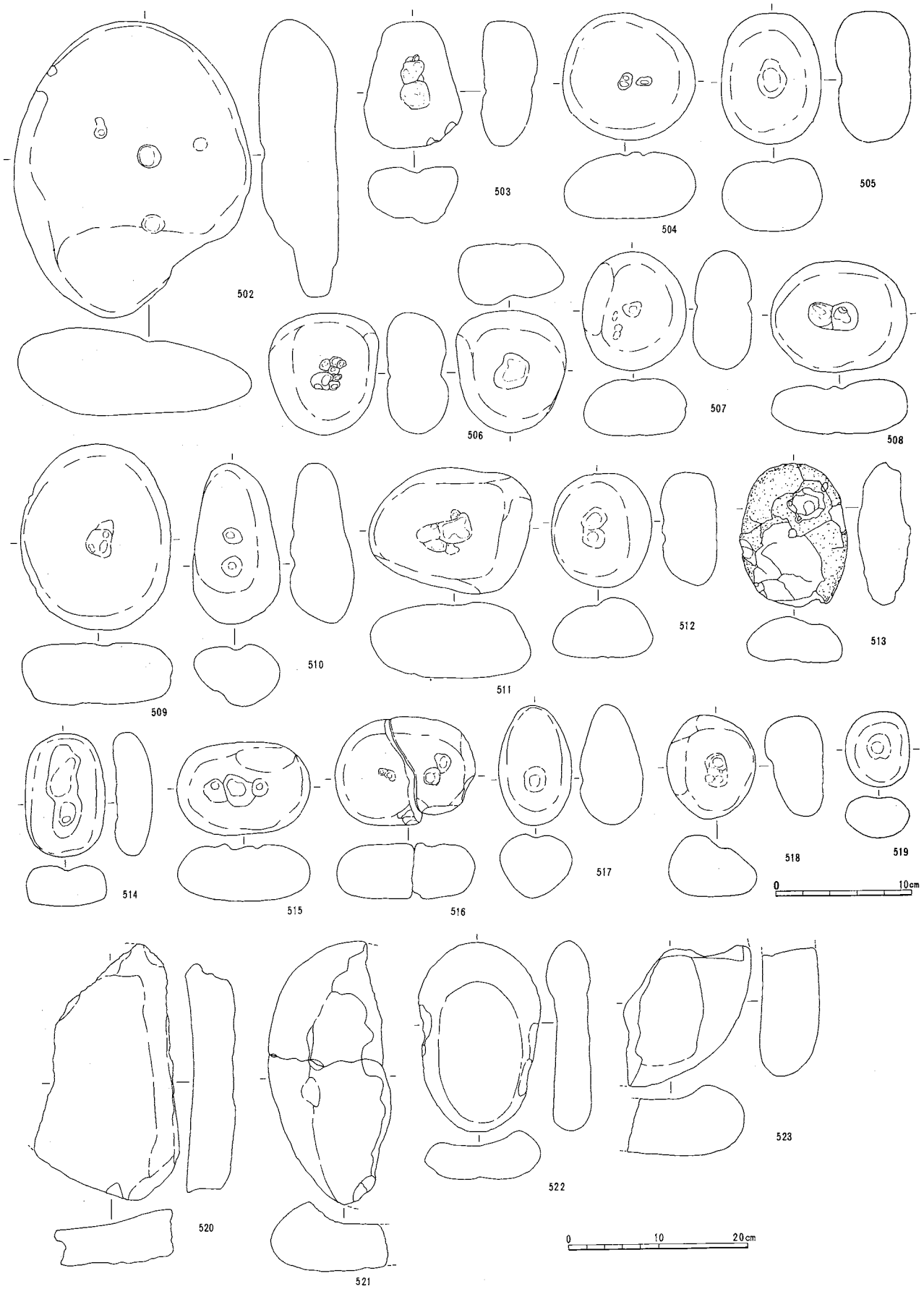


図93　縄文時代大形石器実測図　9　（520～523　1：4　他1：6）

遺構外

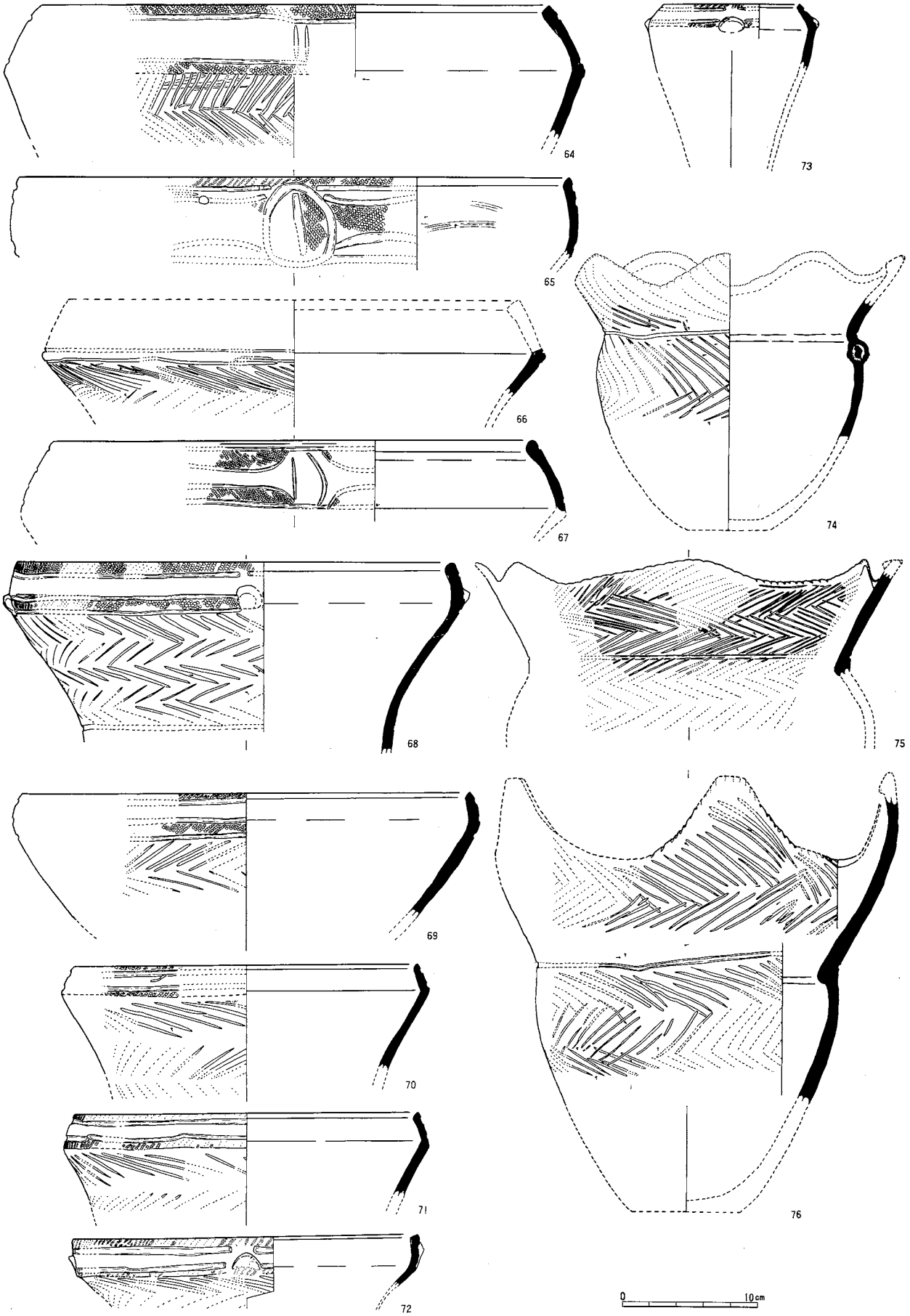


図94　縄文時代後期土器実測図(1)　　遺構外出土　１：４

遺構外

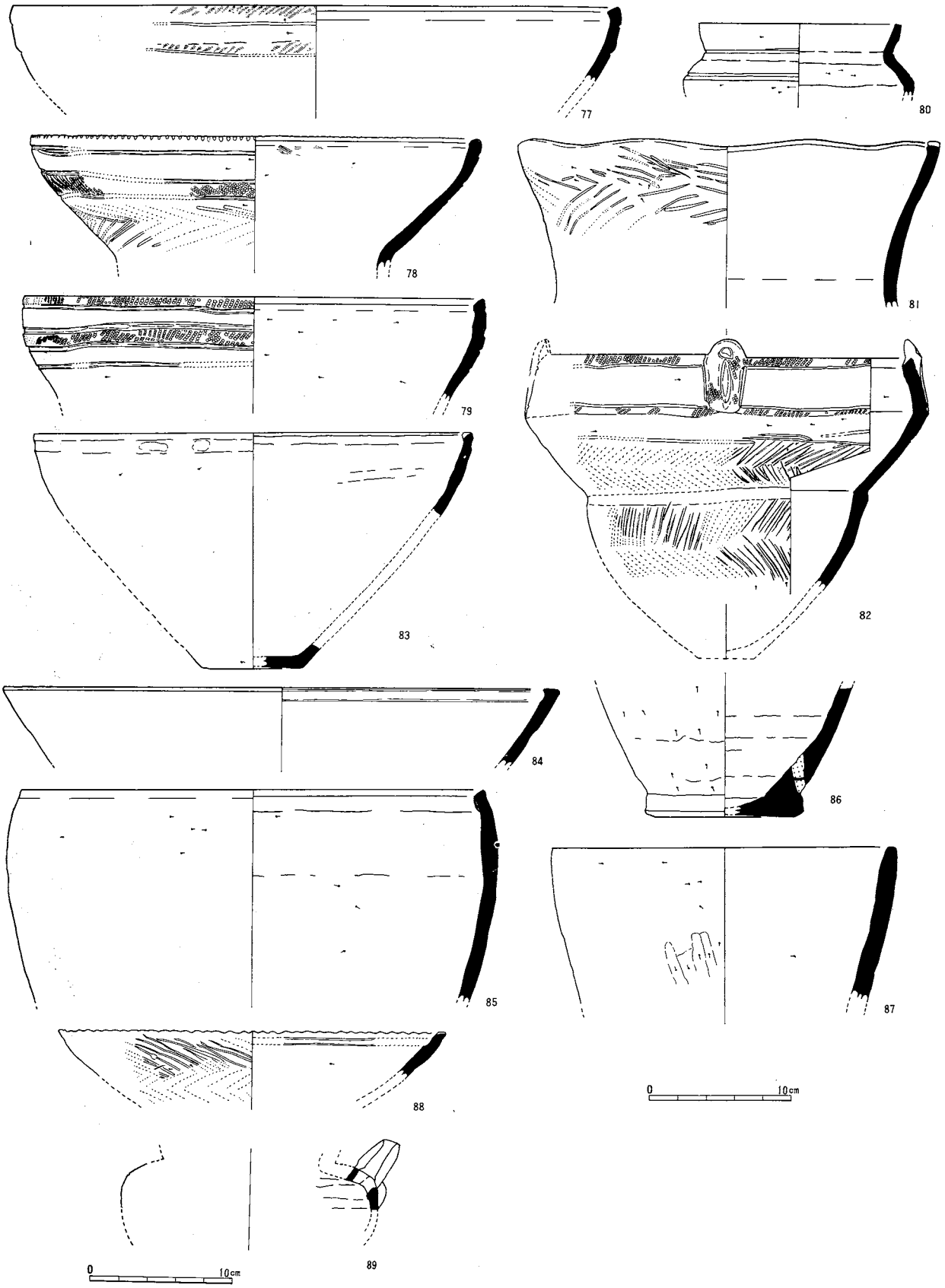


図95　縄文時代後期土器実測図(2)　遺構外出土　1：4

遺構外

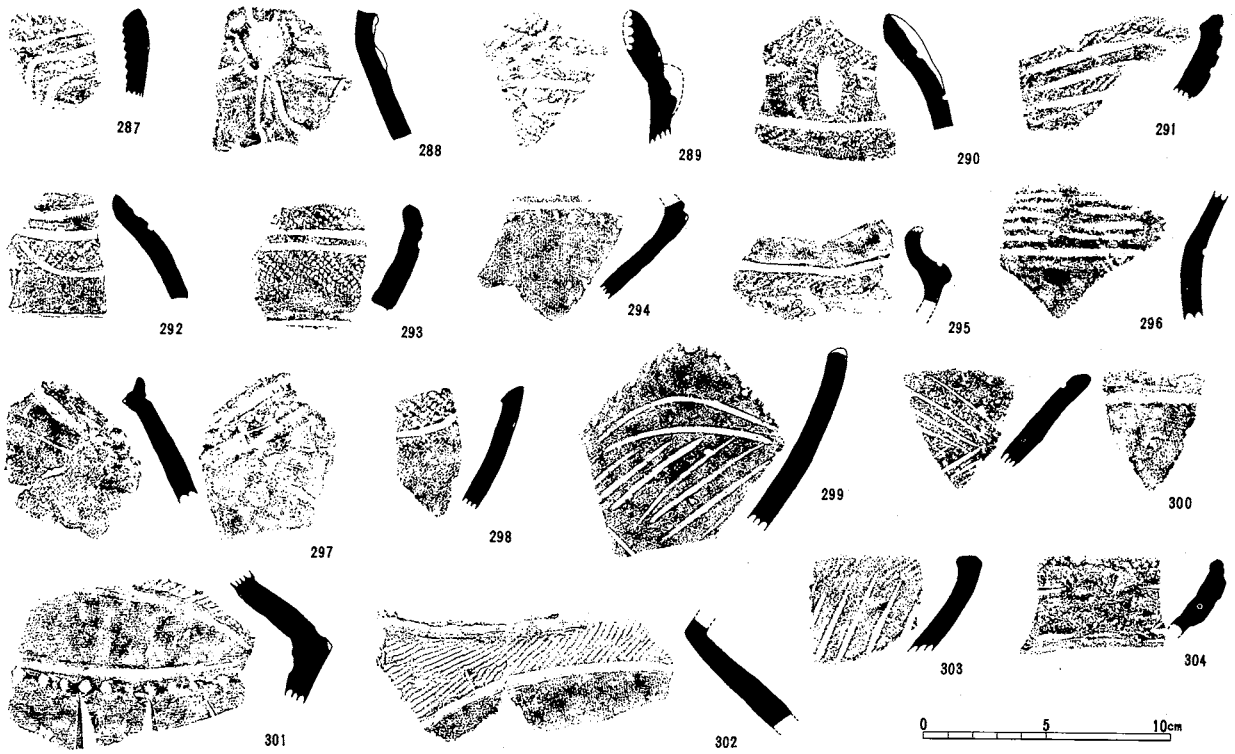


図96　縄文時代後期土器拓影図　　遺構外出土　１：３

10　縄文時代後期の土器

土器の概要は実測図と観察表で表記し、択本で補足した。観察表中の内容に関する記号や分類については、第II章第１節５及び12で説明する。観察表の表記方法は縄文時代中期の土器の観察表と同一である。

後期土器観察表

No.　64　分類　４類A 器形　深鉢B_4　厚）８㎜ 胎土　外）にぶい黄色　内）にぶい黄色　混）並　(F)(G)H 成形　積上　ロ）c_1　底）－ 整形　外）（積上痕）→ナデ→ミガキｂ　内）ナデｃ 備考　外）炭化物付着	文様 〈ロ〉縄文（ＲＬ・横位）→沈線・ミガキ，〈頸〉横位の割付用沈線→羽状沈線上段（逆時計回転順）→羽状沈線下段，（〈ロ〉の縄文→〈頸〉の羽状沈線上段）， No.　67　分類　４類A 器形　深鉢B_4　厚）７㎜ 胎土　外）明黄褐色　内）明黄褐色　混）並　ＧＨ 成形　積上　ロ）id_3　底）－ 整形　外）ミガキａ・ｂ　内）オサエ→ナデ→ミガキａ 備考　外）全面炭化物付着
No.　65　分類　４類A 器形　深鉢B_4　厚）６㎜ 胎土　外）にぶい黄色　内）にぶい黄色　混）並　ＡＤＦ(G)Ｈ　漆黒粘質土塊 成形　積上　ロ）d_2　底）－ 整形　外）ナデｂ　内）ケズリ→ナデｃ→ナデａ→ミガキａ	文様 〈ロ〉縄文（ＬＲ・横位で一部は縦位）→横位沈線→円形・縦位沈線→縄文（Ｌ・横位） 備考　外）炭化物付着 No.　68　分類　４類A 器形　深鉢B_4　厚）6.5㎜ 胎土　外）明黄褐色　内）褐色　混）並　ＢＣＤＧＨ 成形　積上　ロ）d_3　底）－ 整形　外）ナデ→ミガキａ　内）ナデａ・ｃ
No.　66　分類　４類A 器形　深鉢B_4　厚）5.5㎜ 胎土　外）黄橙色　内）黄橙色　混）並　ＢＣＤＧＨ 成形　積上　ロ）－　底）－ 整形　外）ケズリ→ナデ　内）ナデｃ→ミガキａ	文様 〈頸〉横位一周沈線（逆時計回転順）→羽状沈線（上段→下段） 備考　外）炭化物付着 No.　69　分類　４類A 器形　深鉢B_4　厚）７㎜ 胎土　外）明黄褐色　内）明黄褐色　混）並　(F)Ｈ 成形　積上　ロ）oa_2　底）－ 整形　外）ナデ→ミガキ　内）ミガキｂ
	文様 〈ロ〉最上位の横位沈線→上段の縄文（ＲＬ・横位）→下向き弧状沈線・上向き弧状沈線→下段の縄文（ＲＬ・横位）→下位の横位一周沈線，図右側の最上位の横位一周沈線→縦位・横向き弧状沈線→下位の横位一周沈線， 文様 〈ロ〉瘤→横位沈線３条→縄文（ＬＲ・横位）→ミガキ，〈頸〉羽状沈線（上段→下段）→横位一周沈線，単）４単位， 備考　外）炭化物付着 文様 〈ロ〉縄文（ＬＲ・横位）・横位沈線→ミガキ，〈頸〉羽状沈線， 備考

No.　70　分類　4類A
器形　深鉢B_4　厚）8㎜
胎土　外）にぶい橙色　内）にぶい橙色　混）並　CH
成形　積上　ロ）oa_2　底）－
整形　外）ナデ　内）ナデ
文様　〈ロ〉縄文（LR・横位）→横位沈線，〈頸〉羽状沈線，
備考

No.　71　分類　4類A
器形　深鉢B_4　厚）8㎜
胎土　外）明黄褐色　内）明黄褐色　混）並　H
成形　積上　ロ）da_1　底）－
整形　外）ナデ　内）ナデb
文様　〈ロ〉横位沈線→縄文（LR・横位）→ミガキ，〈頸〉羽状沈線，
備考　外）炭化物付着

No.　72　分類　4類A
器形　深鉢B_4　厚）5㎜
胎土　外）明褐色　内）明褐色　混）並　(G)H　漆黒粘質土塊
成形　積上　ロ）oa_1　底）－
整形　外）ナデ　内）ナデa
文様　〈ロ〉瘤→横位沈線→縄文（L・横位）→ミガキ，〈頸〉羽状沈線，
備考　外）全面炭化物付着

No.　73　分類　4類A
器形　深鉢B_4　厚）5㎜
胎土　外）明黄褐色　内）明黄褐色　混）並　AF(G)H
成形　積上　ロ）oa_1　底）－
整形　外）ナデ　内）ナデ→ミガキa
文様　〈ロ〉瘤→横位沈線→縄文（LR・横位），
備考

No.　74　分類　3類A_2
器形　深鉢B_1　厚）7㎜
胎土　外）にぶい褐色　内）にぶい赤褐色　混）並　CD(G)H
成形　積上　ロ）－　底）－
整形　外）ケズリ→ナデ　内）ナデa→ナデb
文様　〈ロ〉羽状沈線・口端押圧，〈胴〉羽状沈線（上段→下段）→横位一周沈線，
備考　外）炭化物付着

No.　75　分類　3類A_2
器形　深鉢B_1　厚）8㎜
胎土　外）橙色　内）橙色　混）並　AFH
成形　積上　ロ）ea_2　底）－
整形　外）ナデ　内）ナデb・a→ミガキa
文様　〈ロ〉口端押圧・羽状沈線（上段→下段）→（横位一周沈線），〈胴〉横位一周沈線→羽状沈線（上段→下段），単）不明，
備考

No.　76　分類　3類A_2
器形　深鉢B_1　容）8.0ℓ　厚）8.5㎜
胎土　外）暗褐一褐色　内）明黄褐色　混）並　ABFH
成形　積上　ロ）ea_2　底）－
整形　外）ケズリ→ナデ・ミガキa　内）ナデb→ミガキa
備考　外）全面炭化物付着　内）胴部下半に炭化物付着
〈ロ〉口端押圧・羽状沈線（上段→下段，各羽状沈線帯は目安となる斜沈線を先に何本か引いている可能性がある），〈胴〉横位一周沈線→羽状沈線（上段→下段，口縁部文様帯と同方法の可能性有），単）5単位，

No.　77　分類　3類C
器形　深鉢　厚）7.5㎜
胎土　外）明黄褐色　内）明黄褐色　混）並　CDGH
成形　積上　ロ）ob_2　底）－
整形　外）ケズリ→ナデ→ミガキa　内）ナデc
文様　〈ロ〉縄文（L・横位）→横位沈線↔ミガキ（沈線とミガキは部分によって順序が違う），
備考

No.　78　分類　3類C
器形　深鉢　厚）7㎜
胎土　外）にぶい黄橙色　内）にぶい黄橙色　混）並　CD(F)H
成形　積上　ロ）ob_2　底）－
整形　外）ナデ　内）ナデc→ナデa
文様　〈ロ〉口端の押圧，横位沈線→縄文（RL・横位）〈頸〉羽状沈線（上段→下段），
備考　外）炭化物付着

No.　79　分類　3類C
器形　深鉢C　厚）6㎜
胎土　外）橙色　内）橙色　混）並　(G)H
成形　積上　ロ）da_2　底）－
整形　外）ケズリ→ナデb→ミガキa　内）ケズリ→ナデ→ミガキa
文様　〈ロ〉横位一周沈線・縄文（LR・横位）→ミガキ，
備考　外）タール状炭化物付着，

No.　80　分類　2類
器形　深鉢A　厚）6㎜
胎土　外）にぶい黄橙色　内）にぶい黄橙色　混）少　D(G)H
成形　積上　ロ）oa_1　底）－
整形　外）ケズリ→ナデ→ミガキa　内）ケズリ→ナデ→ミガキa，
文様　〈頸〉横位沈線，
備考

No.　81　分類　3類A_2
器形　深鉢B_3　厚）8㎜
胎土　外）黄褐色　内）明黄褐色　混）並　AGH
成形　積上　ロ）ob_1　底）－
整形　外）ケズリ→ナデ　内）ナデb
文様　〈ロ〉羽状沈線（上段→下段），
備考　外）炭化物付着

No.　82　分類　3類B
器形　深鉢B_2　容）5.0ℓ　厚）7.5㎜
胎土　外）にぶい黄褐一明黄褐色　内）暗褐色　混）並　CDG(H)
成形　積上　ロ）ca_2　底）－
整形　外）オサエ→ケズリ→ナデb　内）ナデa・c
備考　外）炭化物付着
文様　〈ロ〉突起→突起上の押圧・沈線→縄文（LR・横位）→横位沈線・縦位沈線，〈頸〉横位沈線→羽状沈線（上段→下段）→胴部文様帯との境界にミガキ，〈胴〉羽状沈線（上段→下段）→頸部文様帯との境界にミガキ，単）4単位，

No.　83　分類　5類
器形　深鉢C　厚）6㎜
胎土　外）にぶい黄褐色　内）にぶい黄褐色　混）並ABD(F)H　漆黒粘質土塊
成形　積上　ロ）ob_1　底）－
整形　外）オサエ→ケズリ→ナデa　内）オサエ→ナデa
文様　無文
備考　外）炭化物付着

No.　84　分類　5類
器形　深鉢C？　厚）8㎜
胎土　外）にぶい黄褐色　内）にぶい黄褐色　混）並　CD(G)H
成形　積上　ロ）ob_2　底）－
整形　外）ナデc→ミガキa　内）ナデc→ミガキa
文様　無文
備考　外）炭化物付着　内）全面炭化物付着

No.　85　分類　5類
器形　深鉢D　厚）8㎜
胎土　外）明黄褐色　内）明黄褐色　混）並　ABDEF
成形　積上　ロ）ib_2　底）－
整形　外）ケズリ→ナデb　内）（積上痕）→オサエ→ケズリ→ナデb
文様　無文
備考　内）口縁部炭化物付着

No.　86　分類　5類
器形　深鉢　厚）8㎜
胎土　外）橙色　内）橙色　混）並　ABCDFG
成形　積上　ロ）－　底）－
整形　外）オサエ→ケズリ　内）ナデb　底）網代→ナデ（粗）
文様　無文
備考　内）全面炭化物付着、割れ口に炭化物付着、器表剝落

No.　87　分類　5類
器形　深鉢D　厚）11㎜
胎土　外）橙色　内）橙色　混）並　CDGH
成形　積上　ロ）oa_1　底）－
整形　外）オサエ→ケズリ→ナデ　内）ナデa
文様　無文
備考　外）炭化物付着

No.　88　分類　3類A
器形　浅鉢　厚）6.5㎜
胎土　外）明赤褐色　内）赤褐色　混）並　D(F)(G)(H)
成形　積上　ロ）oa_2　底）－
整形　外）ケズリ→ナデ　内）ナデc
文様　〈ロ〉羽状沈線・内面の沈線・口端の押圧
備考

No.　89　分類　1類
器形　注口土器　厚）5.5㎜
胎土　外）橙色　内）橙色　混）BH
成形　積上　ロ）－　底）－
整形　外）ナデ→ミガキ　内）オサエ→ナデ（積上痕顕著）
文様　横位沈線
備考

11. 平安時代の遺構と遺物

1）　遺構

図97　第12号住居址、部材検出状況　（１：60）

①　第12号住居址（図97～図102、図版13・14）

蟹出沢に近い北斜面に向っての尾根上の端に立地する。褐色土に切りこんだ住居址で、埋土は、第Ｉ層は、黒褐色土で、プランの検出は比較的容易であった。その下に第II層としてロームブロック混入の茶褐色土が続き、床面直上に第III層とした焼土、炭化物、ロームブロック混入の茶褐色土となる。12号住は、焼失した住居址で、炭化した部材が図 97 のように、検出された。部材は、第III層に集中的に出土し、その周辺、上下には多量の焼土、炭化物がみられた。部材の崩落した状態から、上屋構造の復元も可能と思われる。住居址内の諸施設カマド址、小鍛冶址、ピット類は、いずれもこれら部材の下から検出された。プランは方形であるが、東北側隅の小鍛冶址の部分のみ、張り出している。東西側４m80cm、南北側５m10cmである。壁は床面に垂直に近く、東側で30cm、西側で35cm、北側で30cm、南側で35cmである。周溝は確認されなかった。柱穴と思われる30cm大のピットは、６本検出されているが、明確な柱痕跡はない。カマドは東壁にあり石組み粘土製のもので、長軸１m60cm、幅１mである。カマド南側には、直径１m40cm、深さ15cmほどのピットがあり、その中央に「配石遺構」が検出された。ピットの中には焼土粒混入の茶褐色土が入り、「配石遺構」は、ピットの底部 ― ローム面から構築されている。調査後この石組みを取

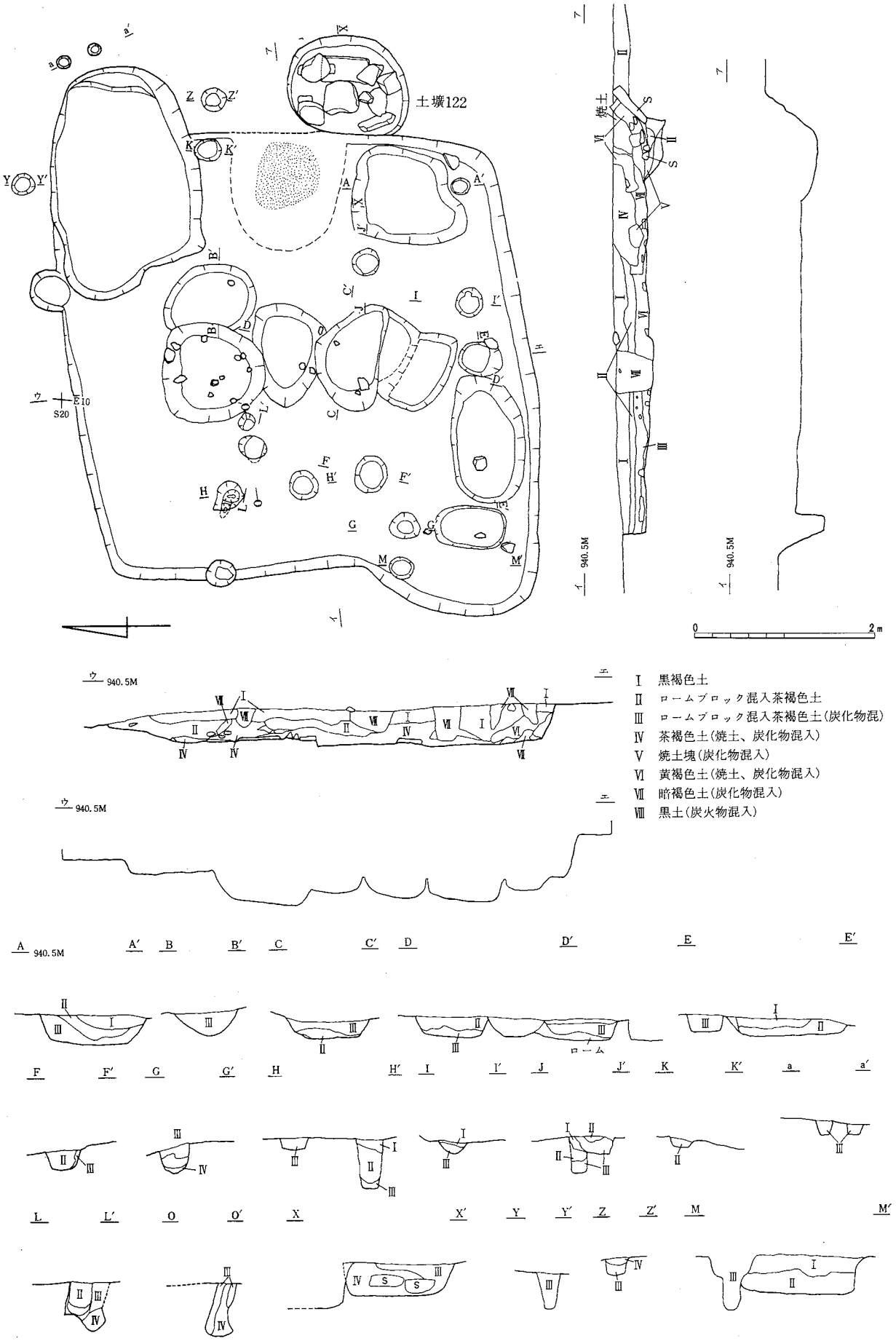


図98　第12号住居址実測図　　(1：60)

りはずしたところ東西１m20cm、東西１m、深さ20cmの略方形の土壙状になった。床面は貼床されているが、あまり良好でない。床面のほとんどをしめるように検出された、いわゆる「床下土壙」内の埋土の状態は、それぞれ異なるところがある。また土壙によって切り合い関係を生じている部分もある。D－D́ラインの土壙では貼床が確認された。部材を取り除いた後、柱穴（図98）と同じ面で確認できた土壙は、E－É である。他は床面より下で検出されたものである。深さは20cm～30cmで、いずれも焼土、炭化物、ローム混じりの茶褐色土を混入している。これらの「床下土壙」と住居址床面の構築との時間差をどう考えるか今後の資料の増加をまちたいが、本住居址で確認した範囲では、この住居址は火災によって１時期に廃絶されたため、当時の床面の状態を残していると思われる。現に、カマド内、小鍛冶址の上面にも部材はのっており、廃絶された時点で「床下土壙」は埋められていたと考えてよい。また、土壙の掘られた時期は、縄文時代の土壙のレベル、層序、平安時代の土壙などと比較しても異なり、住居址の構築後に、何らかの理由で、住居址使用中に掘られたものであろう。

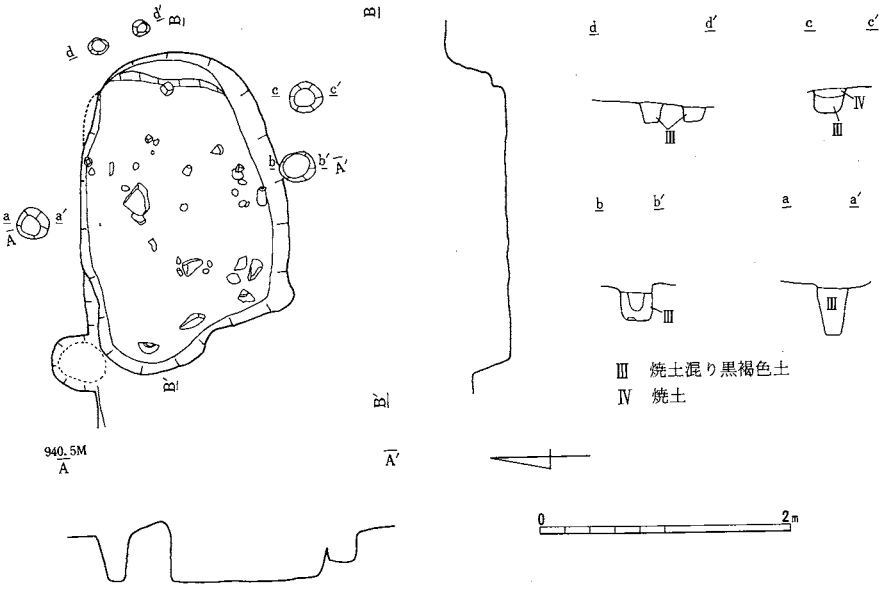


図99　第12号住居址、小鍛冶址実測図　（１：60）

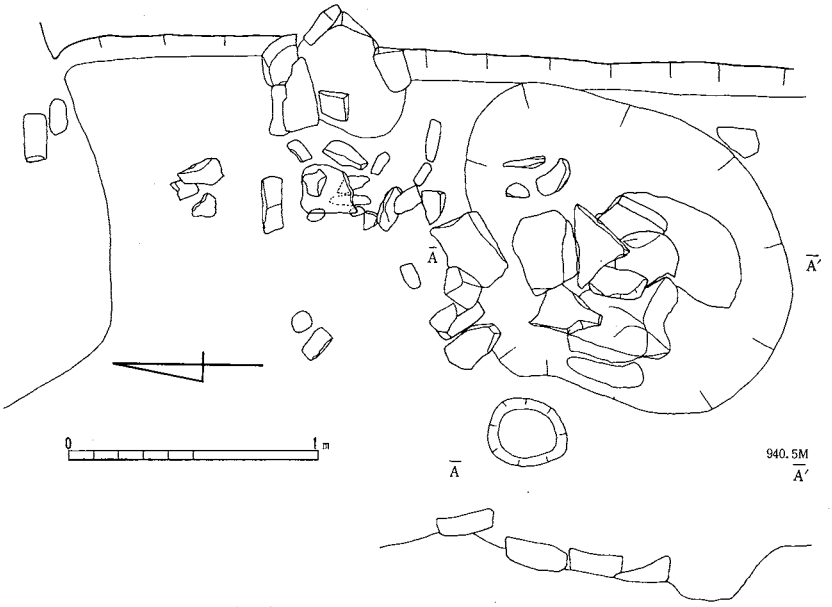


図100　第12号住居址、カマド、配石実測図　（１：30）

小鍛冶址について（図99、図版14）

本住居址北東側の隅、住居址床面より30cmほど低いところに、楕円形のプランを持った小鍛冶址が検出された。プランは、住居址東壁より、外側へ70cm～75cmほど張り出している。住居址構築時から形成されたものと判断できる資料は得られなかったが、北側のラインは住居址のプランに沿っている。検出の状態は、炭化材の取り上げ後に楕円形のプランが確認できた。小鍛冶址内の埋土は、炭化物と焼土、茶褐色土が混入されている。小鍛冶址内で明確な炉の形態を示したものはなかったが、南側中央に直径50cmほどの、円礫、角礫とで円形に配した貼床と思われる施設が遺存していた。遺物は特に焼けている状態は示してい

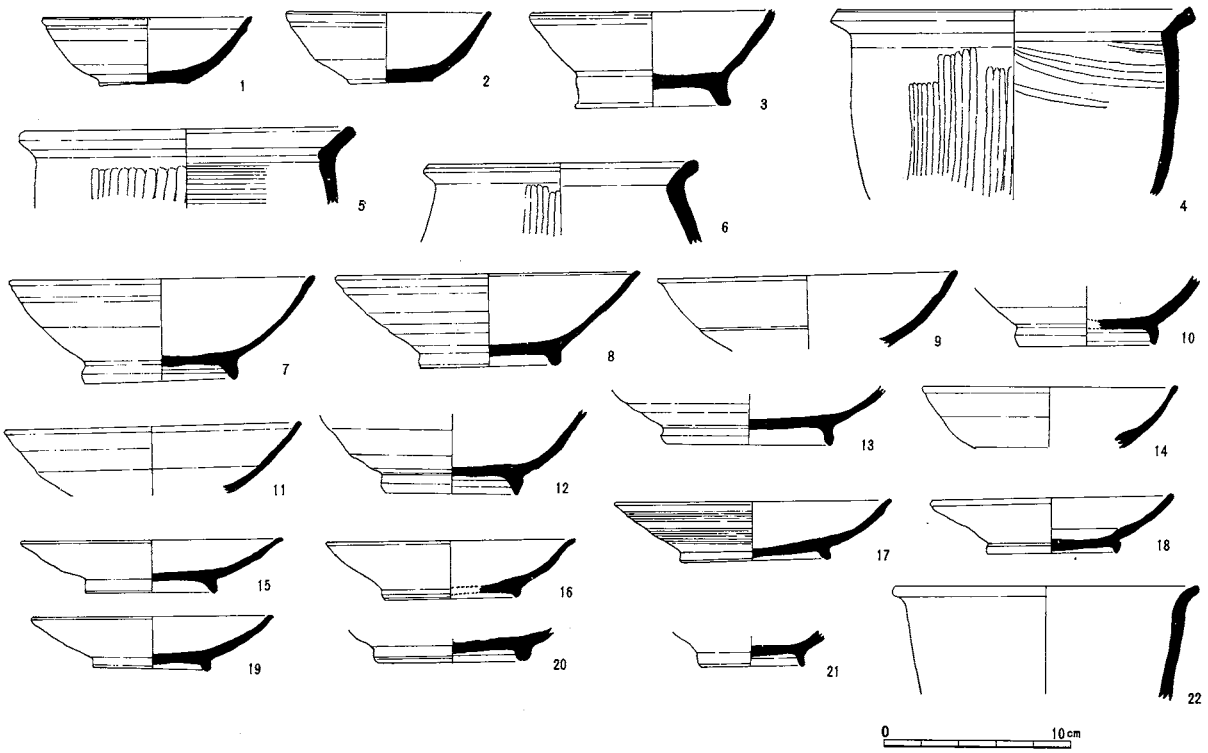


図101　第12号住居址出土平安時代土器実測図　（1：4）

なかったが、未使用のものと、使用され先端部に溶解鉄が付着している羽口が2本（図102）出土した。床面は、住居址と同じ貼床状であったが、貼床と思われる部分の下には、こぶし大の円礫、角礫が敷きつめられていた。東側に張り出した部分に、幅25cmほどの棚状の施設があった。また、小鍛冶址を囲むように、柱穴状の小ピットがあった。4本は住居址外に出ているが、棟を別にするか、他の施設 ― 別に屋根を出すことが行なわれたものと思われる（図 98 ）。

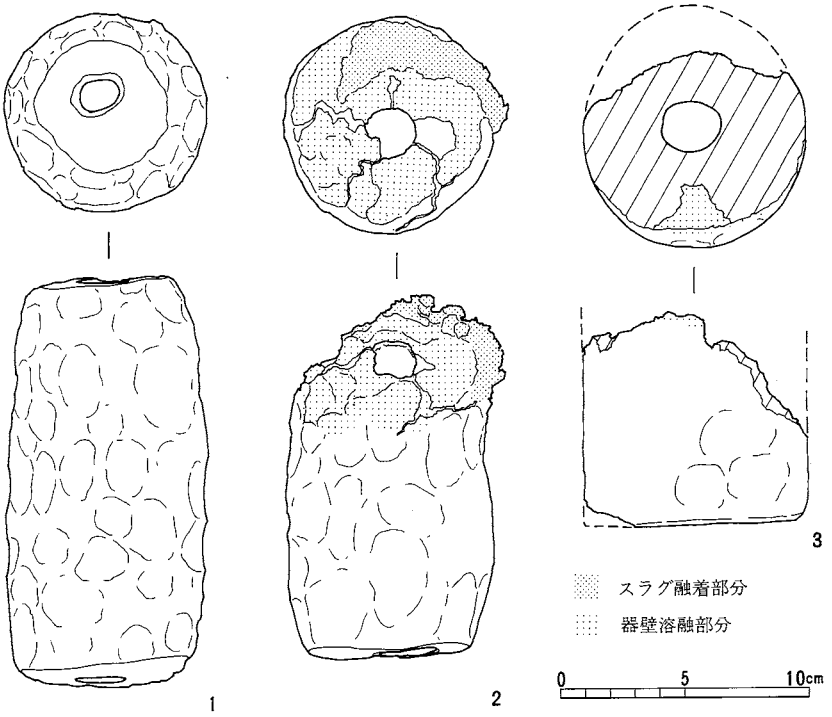


図102　羽口実測図（1・2－12号住、3－竪穴1）（1：3）

出土遺物は、土師器、灰釉陶器で器形の判別できるものが23点、鉄鏃の茎の部分が1点である。他、小鍛冶に関係するものは羽口が2点のみで他の遺物の検出はなかった。土師器は杯DIIIa2③が2、杯BIIが1、小形甕AIが3点、AIIが1点、灰釉陶器は椀AIIが1点、皿AIが5点である。カマド周辺に多い。

※神村透氏は、木曽郡日義村お玉の森遺跡の第13号住居址から、カマド内に羽口の出土を報告されている（神村　1977）。

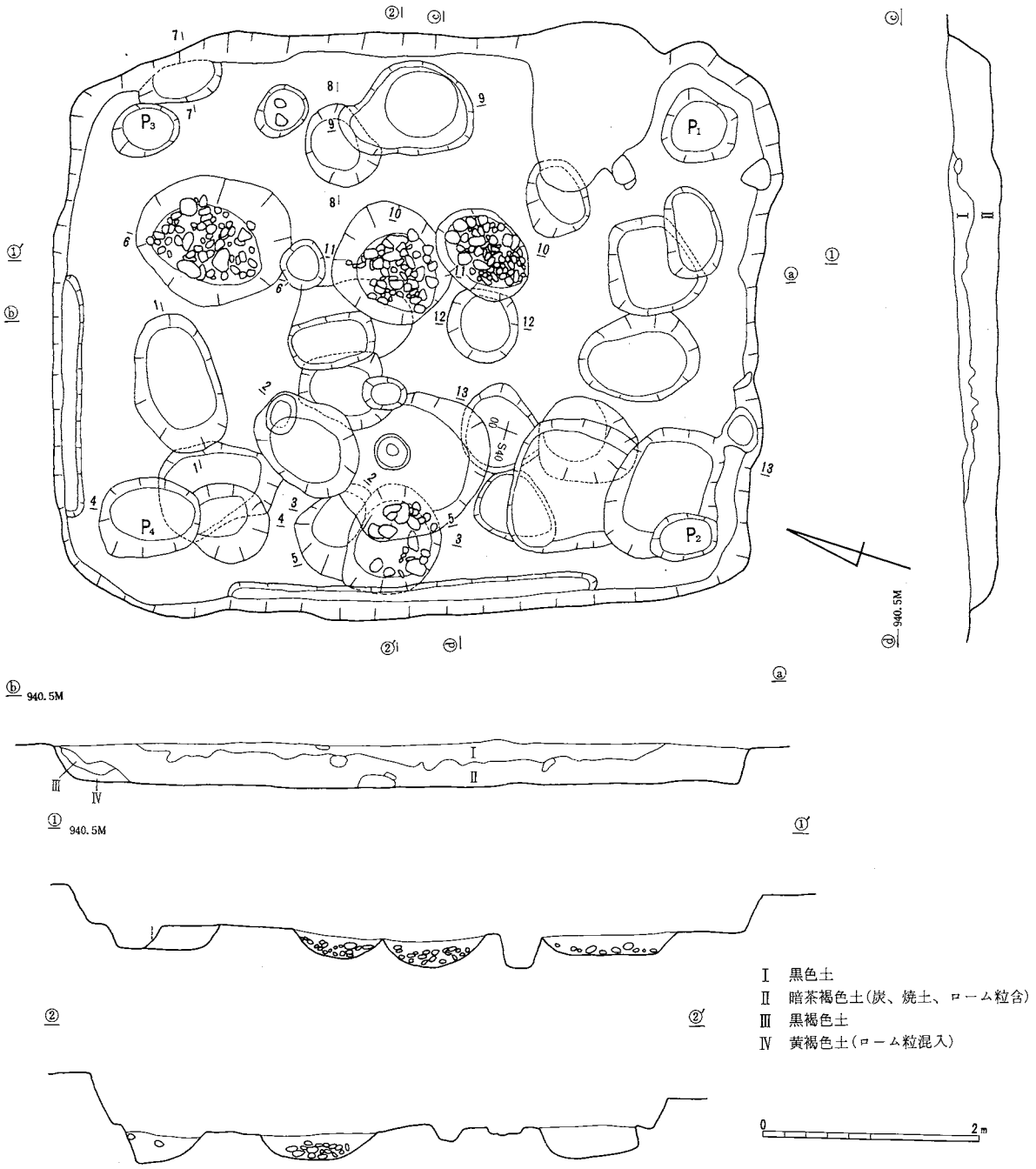


図103　第13号住居址実測図　（１：60）

② **第13号住居址**（図103～109、図版15）

13号住は、本遺跡の内では、大きく、検出の状況から新、旧、拡張された住居址と考えたものである。検出面は、焼土、炭化物の細粒を含む暗褐色土で、遺構外は少量のロームを混えているためやや明るい色調で、早い段階でプランの確認ができた。埋土の状態は、第Ⅰ層は黒色土で、中央部に集中している。第Ⅱ層は焼土、炭、ローム粒混入の黒褐色土で、本址の埋土の大半を占めている。第Ⅲ層の黒褐色土（少量のローム粒、焼土粒混入）、第Ⅳ層のローム細粒混入、礫混りの黄褐色土は、北側のセクションにのみ見られるものである。プランはほぼ隅丸方形で、やや南北方向に長い。東西５ｍ20cm、南北６ｍ30cmである。壁は、やや角度を持っておちるが、壁高は、30cmから40cmである。周溝は西壁と北壁の中央部にのみ存したが、どれも浅いものであった。柱穴は新の段階（新の住居址）で検出されたのは、P_1～P_4までである。

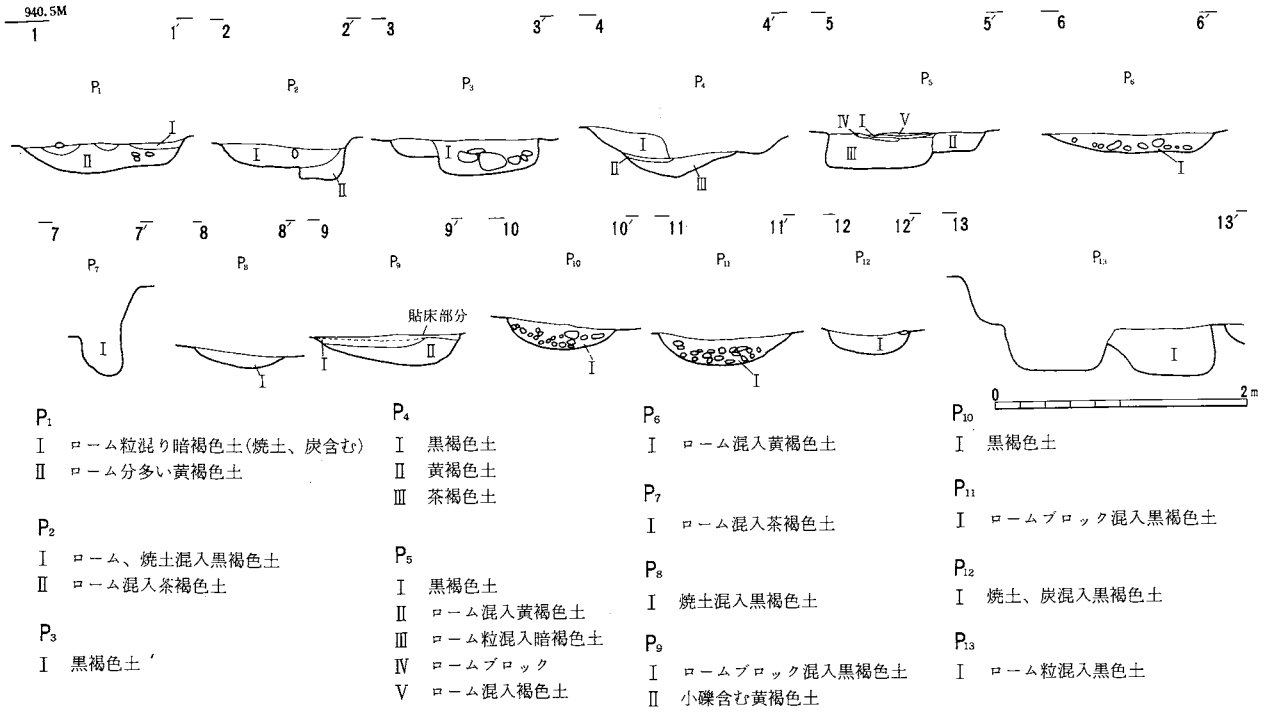


図104　第13号住居址、柱穴および床下土壙実測図　（1：60）

（図109）。他はこの段階までは確認できなかった。補助柱穴または、「床下土壙」と思われるものは、図109黒で、これらも新の段階（新の住居址）で確認された遺構である。その他この段階の施設は、東壁のやや南に寄った地点に、石組み粘土製のカマドがあり、住居址南側中央に、石組みの特殊遺構がある（図106）。これについては後にふれる。

床面の状態は、貼床の確認できる部分と、明確でない部分の差はあるが、ほとんど柱穴の部分以外は貼床されている。本住居址も「床下土壙」の存在がある。「土壙」によって後に貼ったと思われる色調の差、混入された土の差によって最初の段階から認識されたが、大部分は貼床の下から検出されたものである。「土壙」内の埋土の状態は、まちまちであるが、大きく分類すると、礫を含むものと含まないものに分けられ、後者は炭、焼土の混入するものと、ロームの混入するものに細分される。また、貼床しているものと、貼床していないものに分けられるが、層序の関係など相関関係はない。

また、各土壙間は、切り合い関係によって前後関係が把握できるが、新の住居址と、旧の住居址（改築前）とに分けられる（図109）。古いと思われるものに共通しているのは、ローム粒の混入された黒褐色土である。これらの土壙には、土師器片、灰釉陶器片が混入されていた。調査中の観察によれば、埋没の状態は、自然に埋った状態でなく、掘られた後、直ちに埋めもどされた状態であったという。いずれも新らたに貼床されたもので、住居址使用中に掘られ、埋められたものであろう。

石組み状特殊遺構は、住居址中央南側、カマドと縦に並ぶ位置にあり、最大で40cmほどの板石を6枚、合掌状に組みあわせ、円礫または角礫を内側におさえに配したもので、床面を掘りこんでいる部分もある。組み合わせの板石の間には、焼土が混入したローム粒混じりの黒褐色土がみられた。中央部には、2cmほどの厚さで焼土粒の堆積があった。おさえに配した石の中には、石皿も用いられた。他は特に遺物の検出はなかった。

住居址の改築に関しては、次のような点から推定した。プランの形態が北側に向って、やや狭くなること、壁のラインに、やや屈曲点があること。土壙の切り合い関係の中で、最も古いと思われるピットを結ぶと図109のように、4本の柱穴を構成すること。柱穴P_1の地点を中心に、焼土が多量に検出され、以前

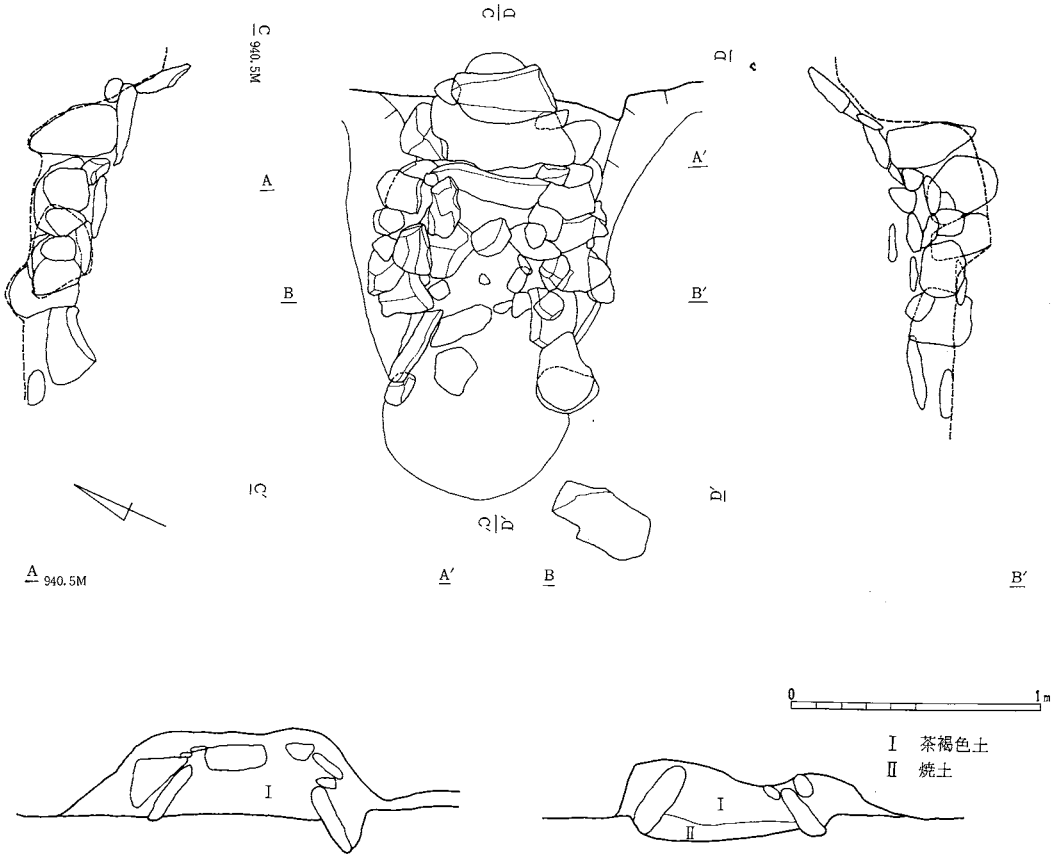


図105　第13号住居址、カマド実測図　（1：30）

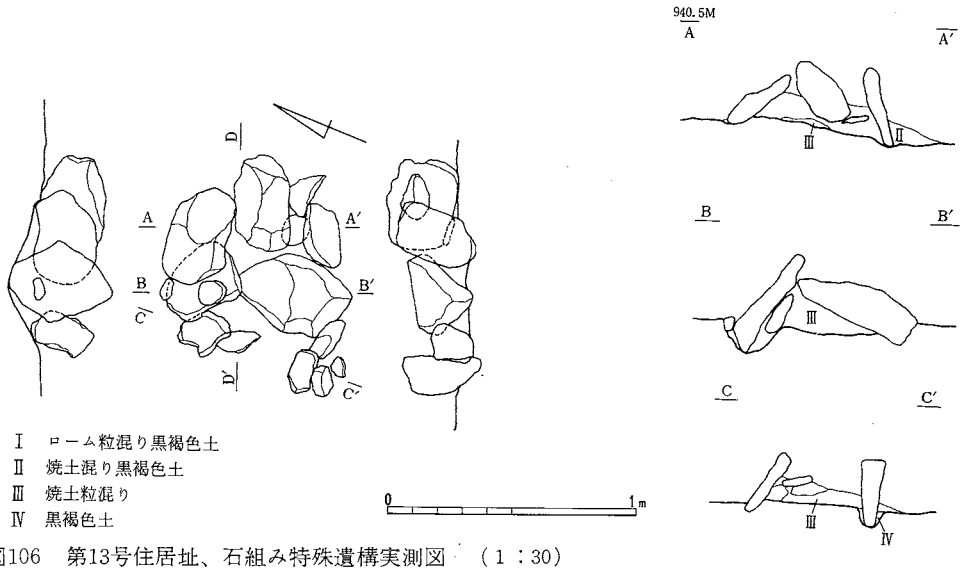


図106　第13号住居址、石組み特殊遺構実測図　（1：30）

にカマドの存在が予想されること。新のカマドの下からP_3－P_3'の土壙が検出されること。住居址の検出中、前述したように、床面（貼床）が検出された段階では、P_1～P_4が確認できたのみで、P_5、P_6は貼床面よりも下から発見された。住居址間の切り合い関係は、発掘時の観察からは確認できず、柱穴P_1～P_2は、新、旧の住居址で2回使用されたと考えられること。遺物の出土状況から見て、新、旧の時間差は認めることはできなかった。以上の諸点から考えて、増改築されたものと考えた。

遺物は、住居址全面から出土しているが、土師器、灰釉陶器は特にカマド周辺 ― 南側コーナーに集中的に分布していた。層位的には、第II層の黒褐色土層中の各コーナーと、中央部に多いが、床面直上から、

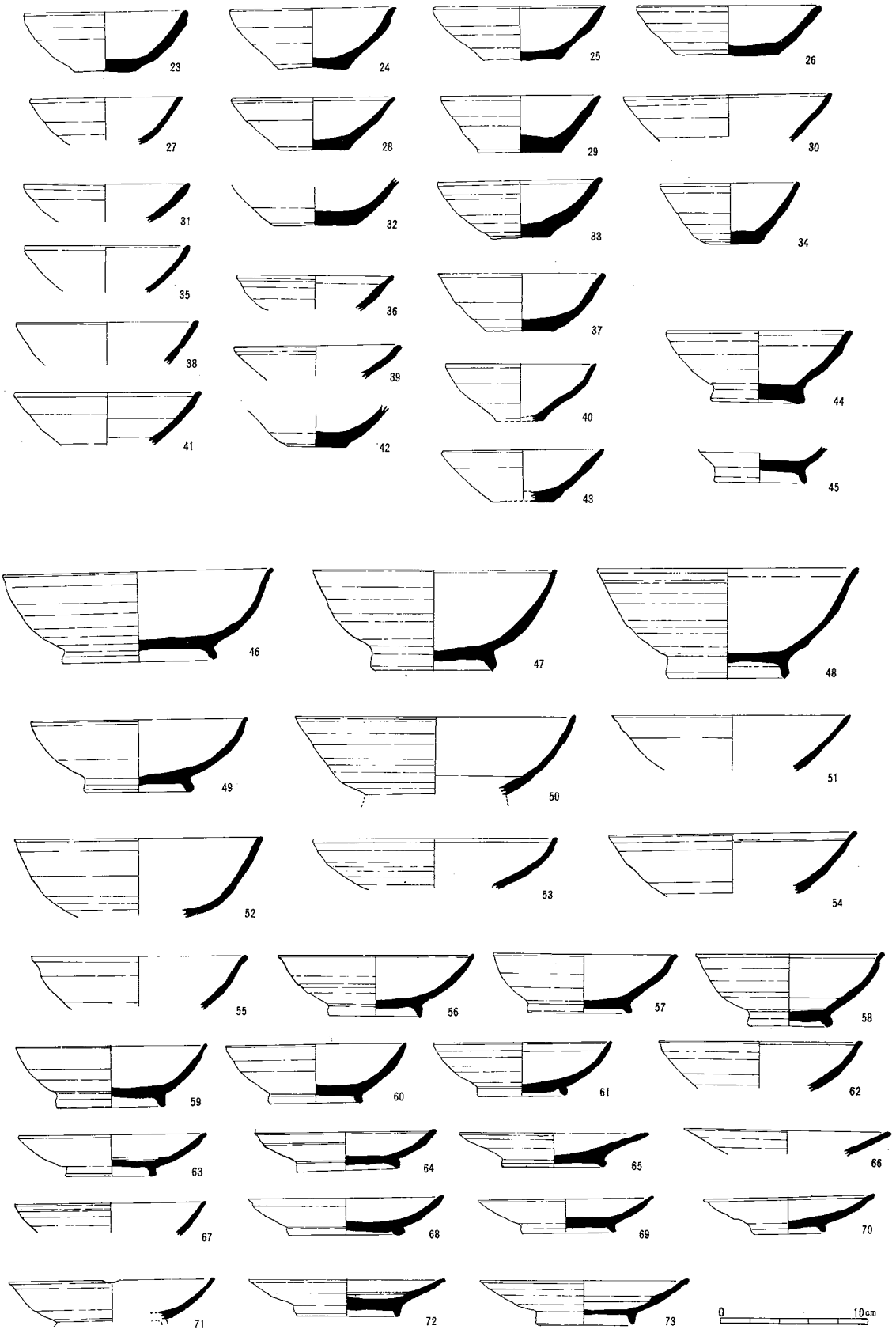
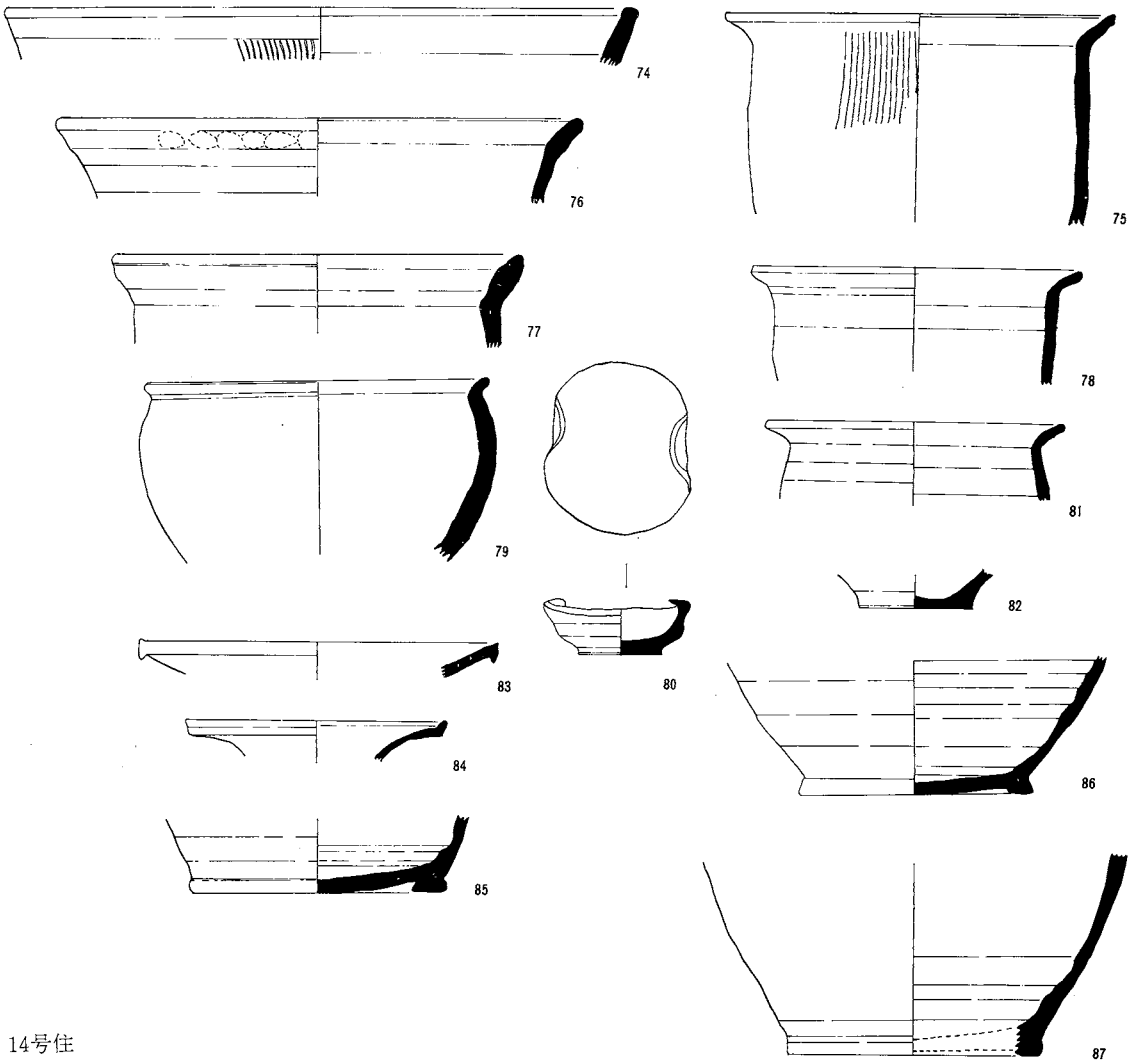


図107　第13号住居址出土　平安時代土器実測図　（1：4）

13号住



14号住

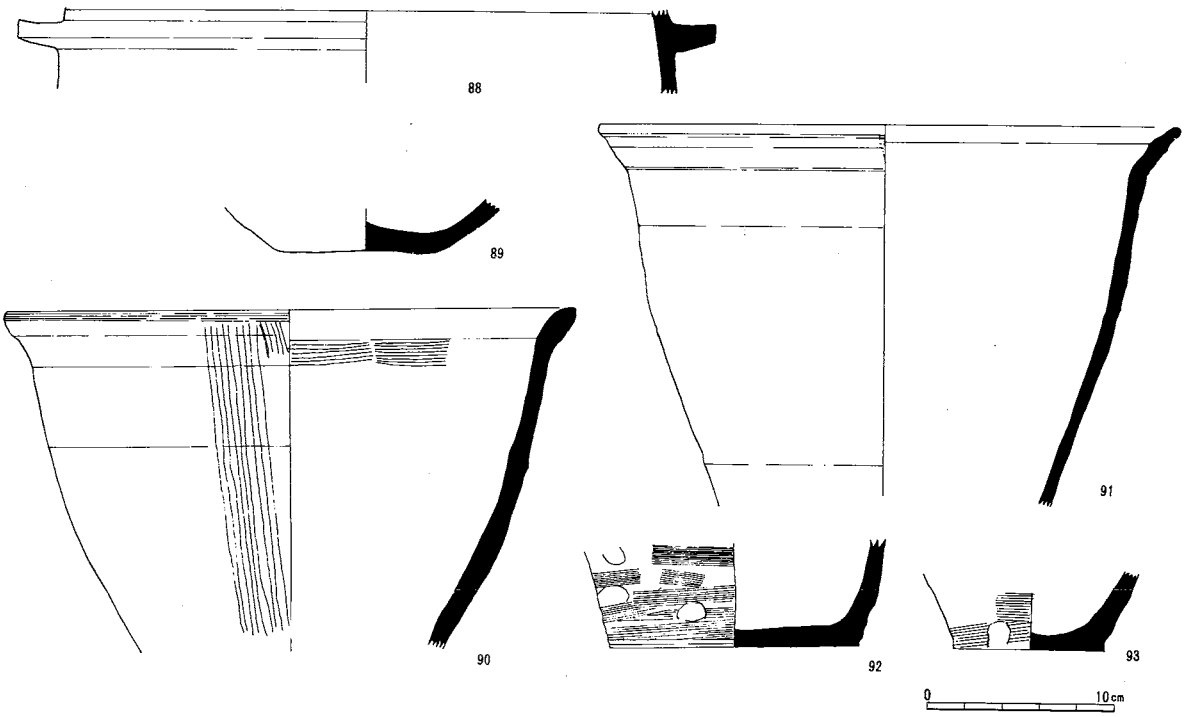


図108　第13号・14号住居址出土平安時代土器実測図　（１：４）

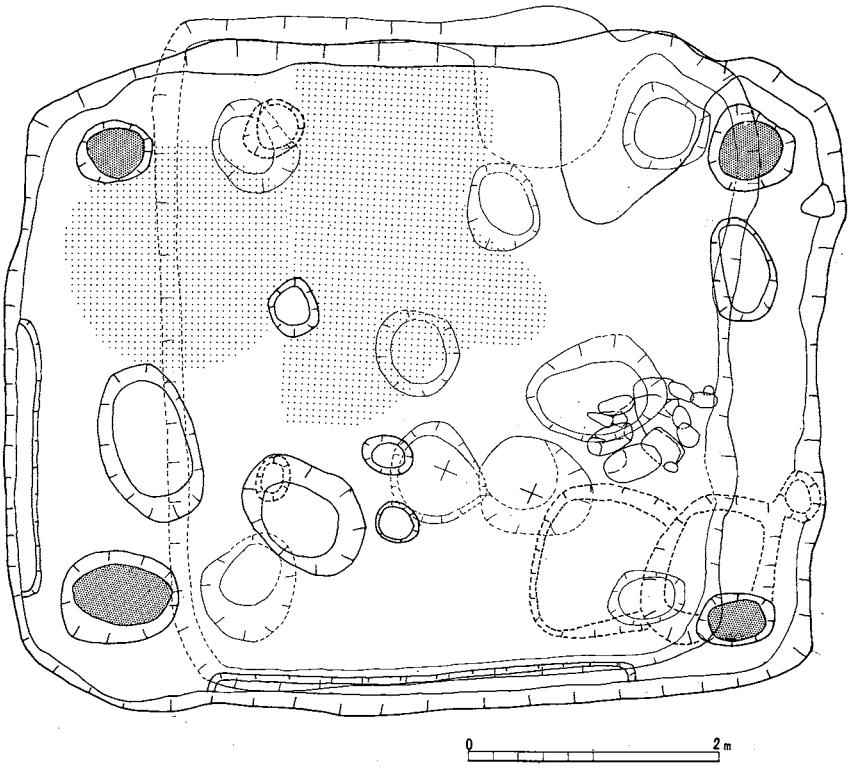


図109　第13号住居址　拡張推定図　（1：60）　青・拡張前

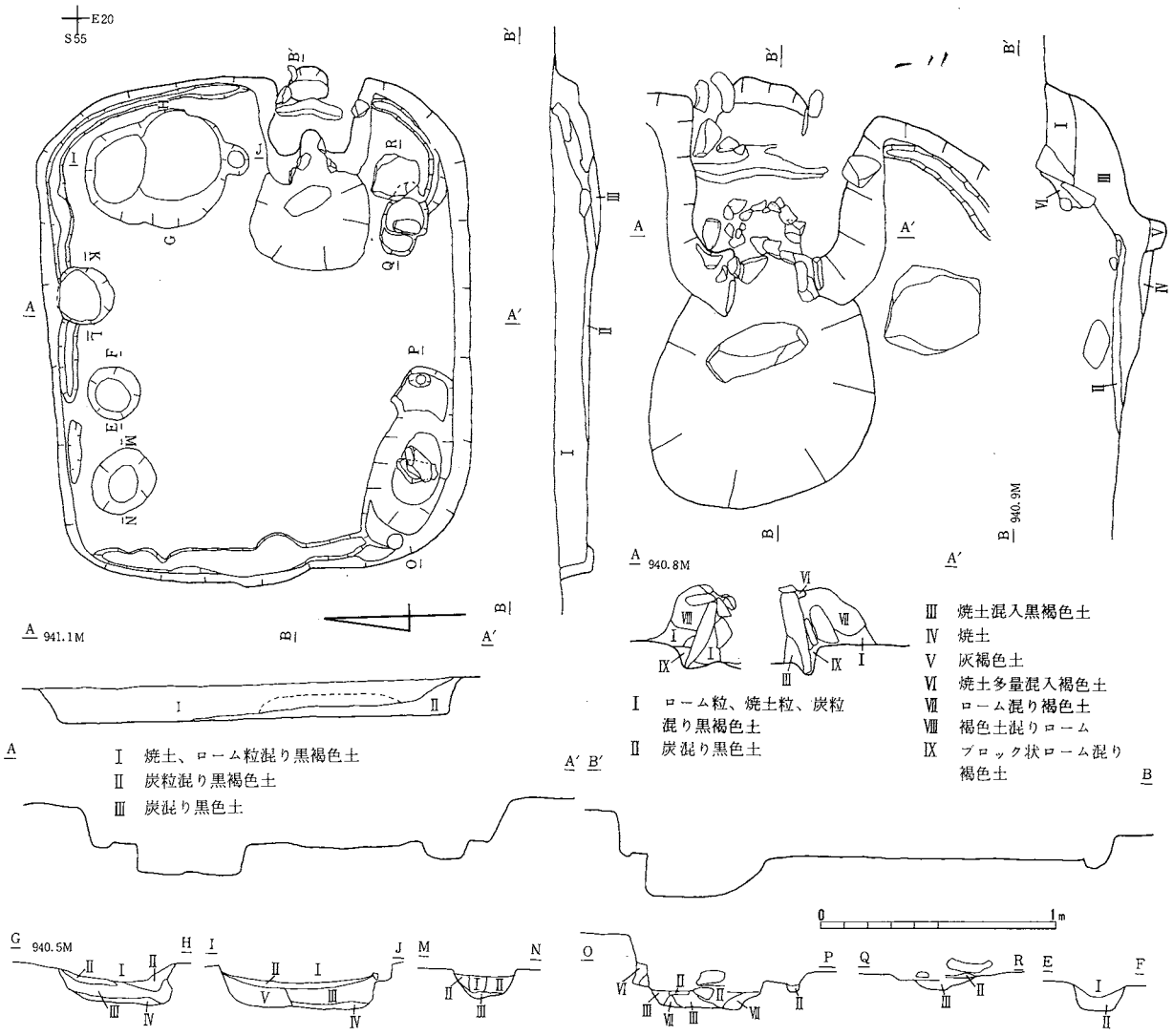
第II層にかけて住居址全面に散在する板石、角礫周辺にも多い傾向はみられる。鉄製品は、他の住居址に比較して量的に多いが、出土地点は、住居址南側の壁に近いところに集中する。いずれも床面よりかなり上の位置から出土している。

遺物は、土師器が総数33点、灰釉陶器は54点、鉄製品は7点である。その内訳は、土師器は、杯BI 3点、杯DIIa2①が1点、杯DIIa2② 8点、杯DII 1点、杯DIIIa2①が4点、杯DIIIa2②が2点、杯DIIIa2③が3点、杯DIIIa25が7点、杯DIIIa 1点、甕C 1点、甕H 1点、耳皿1点である。灰釉陶器は椀AIが14点、椀AIIが19点、皿AI 8点、皿AII 2点、皿Cが4点、皿BIが1点、瓶6点の54点で、土師器との比は、62%で灰釉陶器の占める割合は大きい。

鉄製品は、紡錘車1、刀子3、鉄片2、他に用途不明の鉄製品（No.5）1がある。他に炭化物片、骨片が検出された。

③　**第14号住居址**（図110～113、図版16・17）

遺跡東側の傾斜面から流れ出した礫群帯の中に構築されている。住居址は礫混りの黒褐色土に掘りこまれたものだが、埋土内には礫の混入はなかった。埋土は第I層が、焼土、ローム粒混りの黒褐色土で、埋土の大部分を占める。床面直上に第II層の炭混りの黒褐色土がある。プランの検出は第I層の焼土、ローム粒混りの黒褐色土により明確に分離できた。プランは隅丸方形で、東西4m30cm、南北3m60cmである。壁は、床面に対してほぼ垂直で、西壁で約25cm、他は35cm内外である。周溝は、南側と、北西側のコーナーをのぞき、幅10cm、深さ3cm～5cmほどで検出された。柱穴で、明確な柱痕跡を残しているものは、M—Nのセクションで、他に対応するものをあげると、O—P、Q—R、I—Jがある。断面でも判るように、M—N、E—F以外は、掘方としても大きく、層序の関係も複雑で、単純に柱穴址と断定できない面を残している。カマドは東壁側の中央に、良好な遺存状態を示していた。石組み粘土製で、カマド構造図を作成した（図112）。カマド北側に貯蔵穴と思われる、東西1m、南北1m30cm、深さ30cm内外のピットが検出された。床面は、ローム層の上に、うすく粘土を貼る貼床状で、中央部は比較的良好であったが、壁



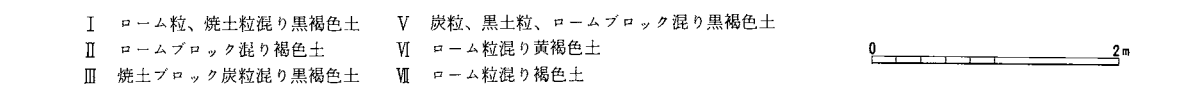


図110　第14号住居址実測図　（１：60）　同カマド（１：30）

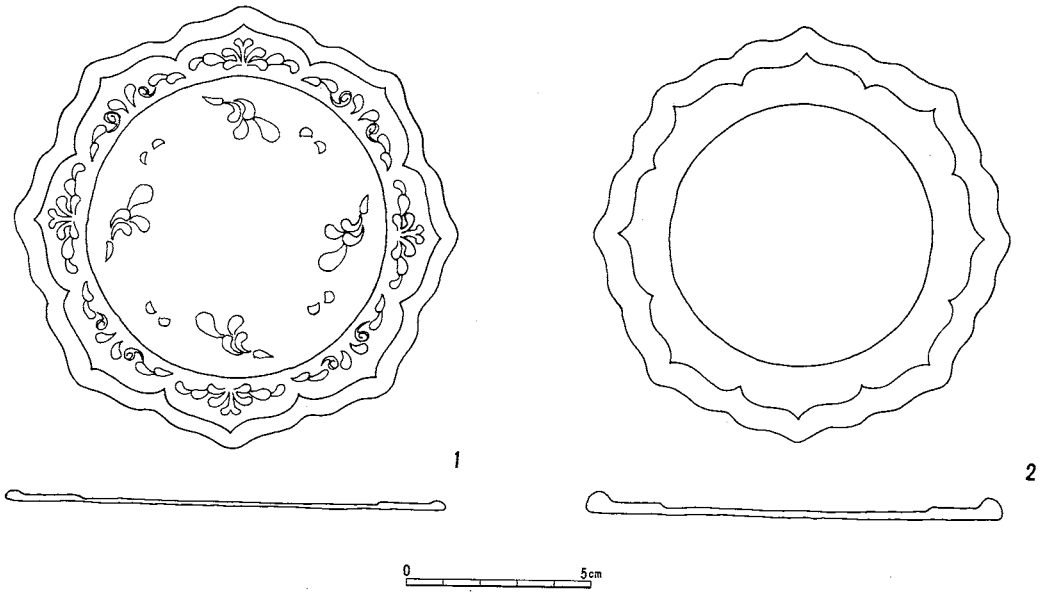
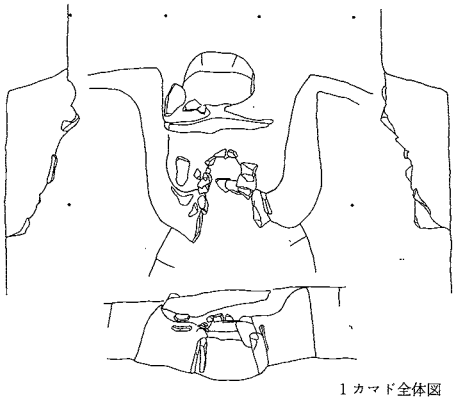
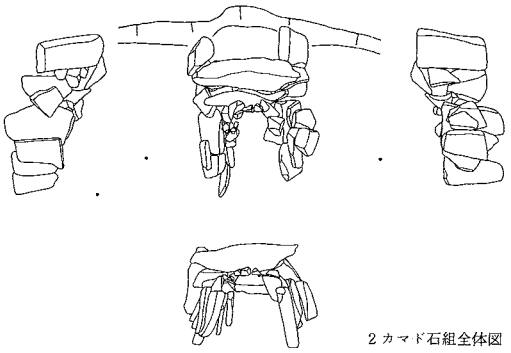


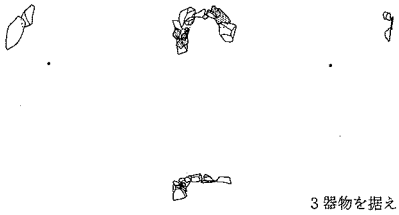
図111　八稜鏡　推定復元図　（１：２）



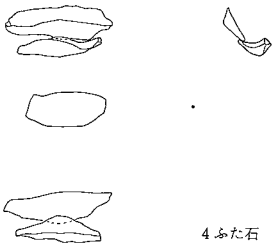
1 カマド全体図



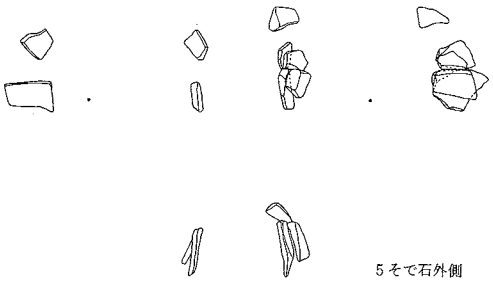
2 カマド石組全体図



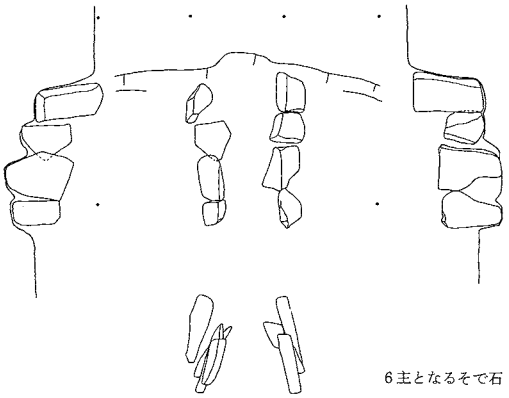
3 器物を据える部分



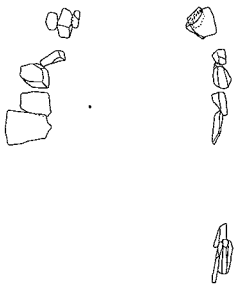
4 ふた石



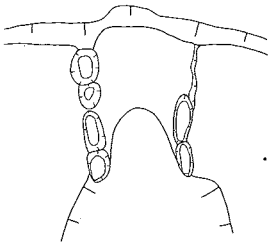
5 そで石外側



6 主となるそで石



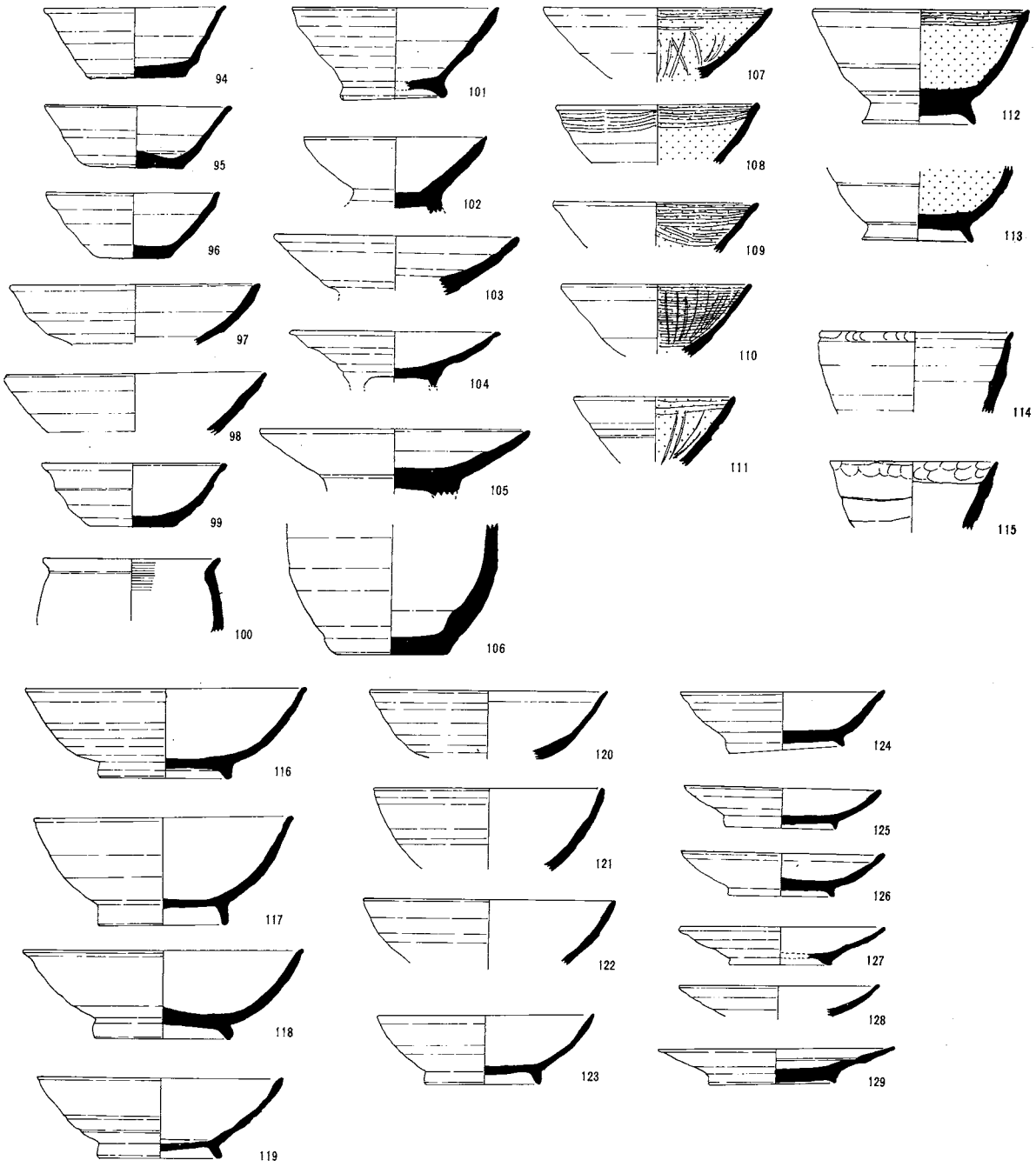
7 そで石内側



8 カマド掘方（カマド下部）

0　1m

14号住



15号住

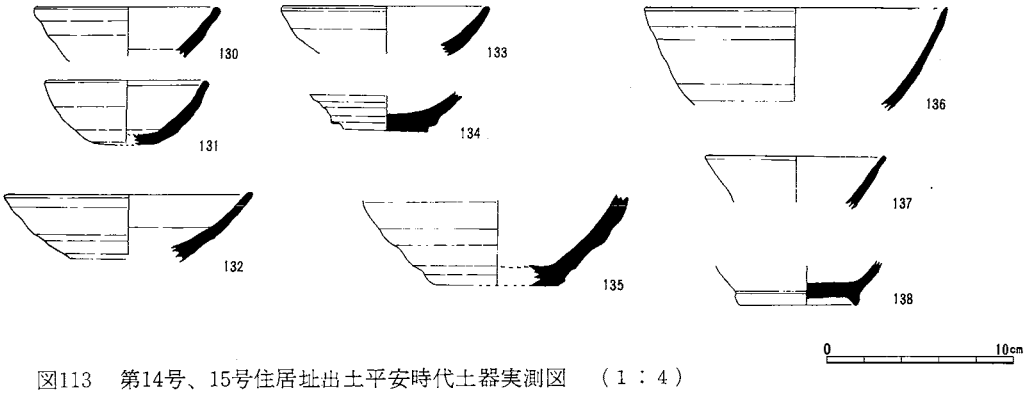


図113　第14号、15号住居址出土平安時代土器実測図　（１：４）

周辺、掘方周辺には見られなかった。遺物の出土状態はカマド北側の貯蔵穴内に多量の土器片の出土があった他、カマド周辺と、南側に多く、上層に位置するものと下層とに分かれる。しかし器種または、時代を違えているものはない。

遺物は、土師器、黒色土器が28点、灰釉陶器16点、八稜鏡２点、鉄製鎌１、鉄鏃1、刀子１の出土があった。土器の細分は、表 8 の通りである。鎌は、基端部に折り返しを持つもので、ほぼ完存している。長さ13.5cm、幅2.8cm、厚さ2.5mmである。

カマドの構造について（図112、図版17）

本遺跡のなかで、12号住、13号住、14号住は共通して石組み粘土製のカマドで、それぞれ遺存状態もよく構築状態も明らかになった(図 112)。予想される構造は、東壁中央に、カマド構築のための掘方を掘り、袖石を組む。次に内側に入る石で袖石をおさえ、蓋石をのせて、器物をのせる台を、石片と土器片で組み合わせて、石組みを粘土で被ったものと思われる。煙道に関しての遺構は検出できなかった。

八稜鏡の出土について（図111、図版51）

２点ともに、文様の原体が復元できないほど遺存状態はよくない。また２次的な焼成を受けたように思われる。約$^{1}/_{8}$の破片を復元したのが図 111 である。１は、推定の直径が11.8cm、２は11.1cmである。

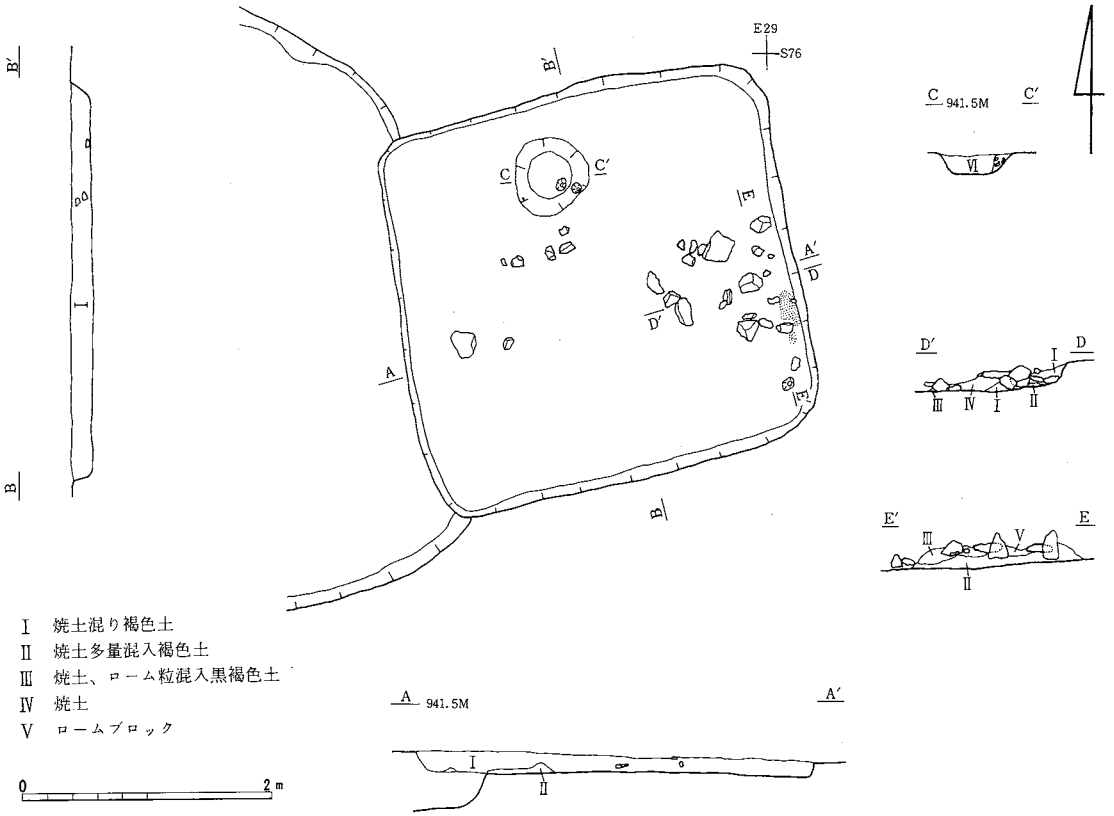


図114　第15号住居址実測図　（１：60）

第15号住居址（図113・114、図版16・51）

調査区内の南側に位置する。15号住の北側を礫群が流れているが、住居址はこの礫群からわずかにはずれている。褐色土内に掘りこまれたもので、埋土は黒色土である。プランはほぼ方形で、南北３m30cm、東西は３m10cmである。プランの北側は明確に確認できたが、西側は17号住との切り合い関係にあり、不明確であった。壁はやや低く、東側で14.5cm、西側で10cmありその状態は床面にほぼ垂直である。柱穴の検出はなく、北側に、直径60cmほどのピットがあった。深さ60cmほどで、小さなロームブロックが混入す

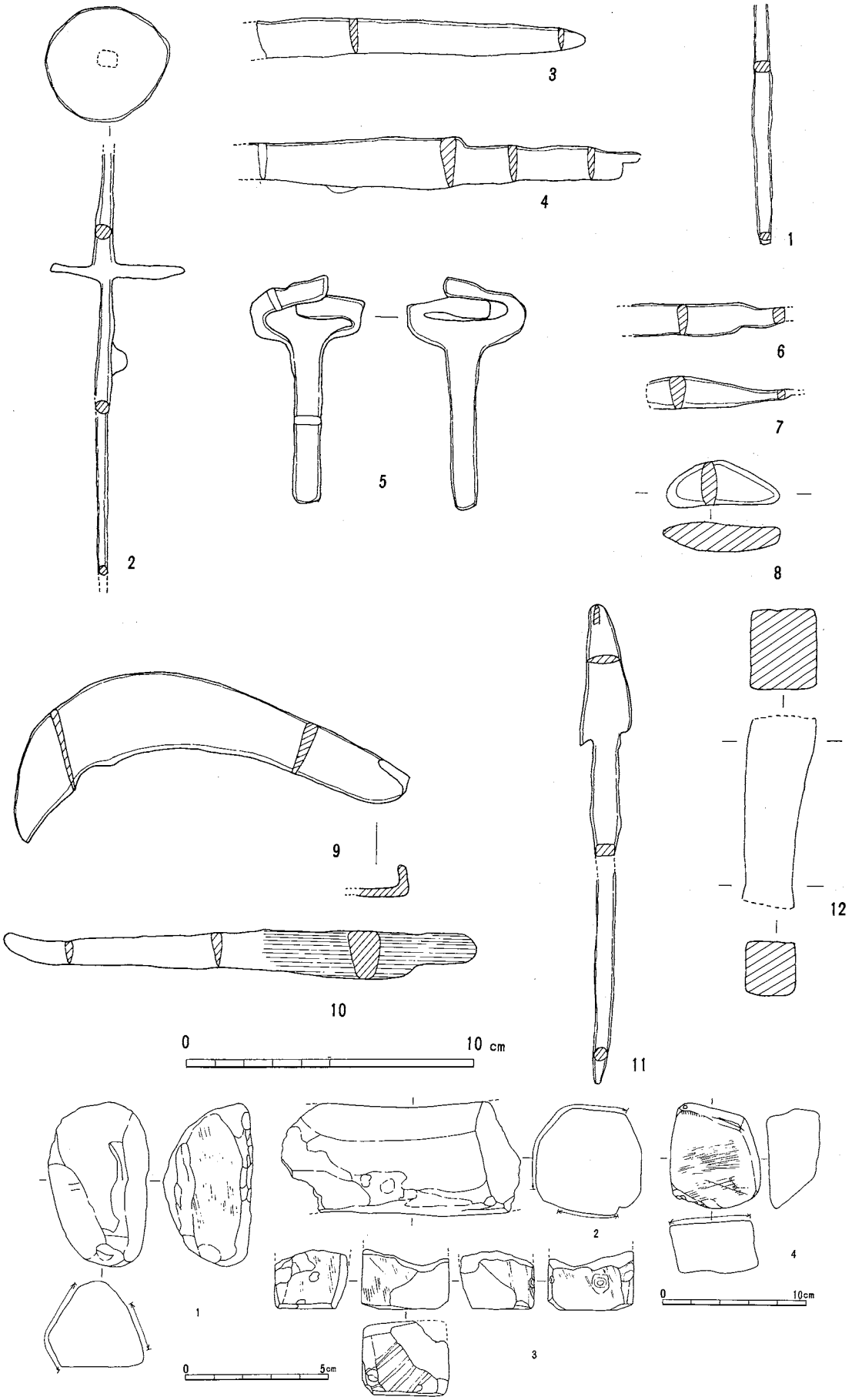


図115　各住居址出土平安時代鉄製品（上）（１：２）　平安時代砥石（下）（１：４、１：８）

るが、黒褐色土を埋土としている。周溝その他の施設はなかった。カマドは、他の住居址と同様、東側壁中央であるが、かなり破壊されて原形は復元されないが、石組み粘土カマドで、石のうちには焼かれたものもあり、焼土も多量に検出された。一つの興味深い事実は、カマドの検出面にも、壁のラインが残り、カマドは壁面の上に構築された可能性がある。通常、平安時代のカマドの構築は、壁の外側へ出るのが多いが、内側への構築を意識した結果と思われる。床面は、中央部分はかなりしまっているが、壁周辺は良好な状態でなかった。本住居址の西側床面より20cm下に、17号住（縄文時代中期）が検出されたが、この時点まで17号住の存在は認められなかった。

遺物はカマド周辺に散在しており、特別な出土状態ではなかった。出土量は、他の住居址に比べると少なく、また小破片であった。形態の判別ができるものは９点ほどで、土師器杯DIIa2が１点、杯DIIIa 2.5が４点、甕１点、の６点、灰釉陶器は4AＩが１点のみ、他、本住居址にのみ検出された緑釉陶器皿破片２がある。各器種の比は、土師器67%、灰釉11%、緑釉陶器３%であった。八ヶ岳西南麓での緑釉陶器の出土は意外に少なく、遺物の出土量の貧弱な本住居址の出土は興味深い事実である。また、鉄製品の出土はなかったが、砥石が出土した。

2）　遺物

①　**平安時代の土器**（図101・107・108・113、図版49～51）

分類の規準については、「４遺構と遺物の概略」の項で述べたとおりである。また本遺跡の平安時代の土器の細分と観察について、各住居址の出土量は表８、平安時代の土器観察表、個々の土器の分類については、表３にある。表８で見るように各住居址間に形態、胎土、底部の調整にいくぶんかの差が見られたこと、器種にも違いがあり、また灰釉陶器の量などにも特色があるなど今後他の遺跡との関係など検討を要する問題は残る。灰釉陶器の年代決定の問題は決定された範囲の調査であるために、時期の限定は困難であるが、14号住出土の八稜鏡の検討などある程度の年代が与えられる可能性もあり得る。この年代の問題は平安時代の集落立地の性格にも関連することで慎重に考えたい。

表８　判ノ木山西遺跡出土平安時代土器住居址別一覧

器種＼住居址	１２住	13住	14住	15住
杯BＩ		3	2	
杯BII	1		3	
杯CIII			1	
杯DIIa2①		1	3	
杯DIIa2②		8		
杯DIIa25				4
杯DII		1		1
杯DIIIa2①		4		
杯DIIIa2②		2		
杯DIIIa2③	2	3		
杯DIIIa25		7		
杯DIIIa		1	2	
黒色土器C			5	
黒色土器B			2	
甕A			2	
甕C		1		
甕G			2	
甕H		1		
甕			1	1
小形甕AＩ①	3			
小形甕AＩ②				
小形甕AII	1			
小形甕AIII			1	
小形甕A	1			
羽釜			2	
耳皿		1		
手ずくねの土器			2	
小　計	8	33	28	6
椀AＩ	9	１４	7	1
沐AII	1	１９	3	
皿AＩ		8	3	
皿AII		2	2	
皿C		4	1	
皿BＩ		1		
瓶		6		
小　計	10	54	16	1
緑釉皿				2
灰釉の比率%	55.5%	62%	36.3%	11% (緑釉22%)

平安時代の土器分類

器種分類	形態	成形	各部の整形・調整の手法			胎土	焼成	色調
			外面調整	内面調整	底部の調整			
杯CⅢ		ロクロ成形	ロクロ痕わずかに残る	ヘラミガキわずかに見える	回転糸切り	細砂粒混入	普通	褐色
杯DⅡa２①	玉縁状の口縁を持ち、口径15cmとやや大きい。器壁は８mmと厚い。	ロクロ成形	ロクロ痕が明瞭に残る		平らな底で、回転糸切り。切り離しのまま。	よく精製された胎土で砂粒の混入なし	普通	赤褐色
杯DⅡa２②	器壁は５mmとうすい。	ロクロ成形	ロクロ痕が明瞭に残る	ロクロ痕がわずかに残る	不明	細部粒混入あまりよくない	悪い	暗褐色
杯D２a２・5	口縁部が12cm前後と大きくなる。器高が低くなり、底部の径も大きくなる。	ロクロ成形	ロクロ痕がめだつ	底部に縦方向のナデ	回転糸切り痕をナデによって消す	細砂粒混入	普通	褐色
杯DⅢa２①	全体的に丸みを持つ器形。口縁部はやや内湾気味、口径は12cm以下が多い。	ロクロ成形	ロクロ痕わずかに残る	ロクロ痕残る	回転糸切りのまま。糸切り痕は細かい、底部は小さな台状になる	細部粒混入	良好	赤褐色
杯DⅢa２②	底部からの立ちあがりで、少しくびれて、外方向に開く器形。	ロクロ成形	ロクロ痕が明瞭に残る	ロクロ痕わずかに残る	荒い回転糸切りのまま	細部粒混入少し荒い	良好硬い	明褐色
杯DⅢa２③	口縁部にロクロ成形時のひき出しと思われる沈線状のものがつく。	ロクロ成形	ロクロ痕が明瞭に残る	ロクロ痕わずかに残る	回転糸切りのまま。糸切り痕は細かい。底部は小さな台状になる	細砂粒混入	普通	黒褐色
杯DⅢa２・5	口縁部の直径が11cm前後で胴部下半でややくびれ、丸味を持ちながら外反する器形。器壁は８mmと厚い。	ロクロ成形	ロクロの痕が目立つ	底部にロクロ痕わずかに残る	回転糸切りをナデによって、消している。切り離し時にできる粘土痕が残る。底部に小さな台状のものが残る	細砂粒の混入が多く荒い	普通	明褐色
杯BⅠ	口径12cm前後で高台部が低い。器形は内湾し立ち上がりが急である。杯部はやや深めである。	ロクロ成形	ロクロ成形痕が目立つ		付高台、回転糸切り痕をナデて消す	細砂粒混入するが良好	良好	赤褐色
杯BⅡ	口径13cm以上。杯は浅く、高台は明確にできるものはない。器壁はやや厚めである。	ロクロ成形	ロクロ成形痕が残るものと残らないものとがある。		付高台、回転糸切り痕をナデて消す	細砂粒混入するが良好	良好	赤褐色
黒色土器C	内面黒色処理された杯形土器を一括した。	ロクロ成形	ロクロ成形痕がわずかに残る	黒色処理の上に細かいヘラミガキ一放射状の暗文		細砂粒混入	普通	褐色
黒色土器B	内面黒色処理された土器で高台のついたもの	ロクロ成形	ロクロ成形痕がわずかに残る。口縁端部にヘラによる沈線がつく	黒色処理の上に口縁部のみ細かいヘラミガキ	回転糸切りのまま、付高台の部分のみナデ	細砂粒混入	普通	褐色
甕C	口縁部は外湾し胴部は直線的に底部に収束する器形口縁部はヨコナデされる。胴部は荒いハケで上から下へナデている。口縁部内面の屈曲部に段がつく	粘土ひも巻き上げ後ヨコナデ	口縁部から胴部にかけてハケを強く施している	ヨコナデ		細砂粒混入	良好	褐色

器種分類	形態	成形	各部の整形・調整の手法			胎土	焼成	色調
			外面調整	内面調整	底部の調整			
甕G	口縁部に最大径をもつがさほど深くはならない。口縁部は、短く外反し屈局部内面に甘い稜がつくもので、外反もあまり鋭くない。口径28cm～30cm前後と、22cmのものとがある。口縁部は端部を折り返している。	粘土ひも巻き上げ	口縁部横方向のハケ、頸部から胴部にかけて上から下へ荒いハケの整形、折り返し部分を指頭でおさえているものもある	口縁部ヨコナデ頸部横方向のハケメやや細かい		細砂粒の混入が多い	普通	暗褐色
甕H	垂直に近い角度で直線的に立ちあがる器形で、口縁部に最大径がくる。「く」の字状に外反し口縁端部は丸くナデで仕上げる	粘土ひも巻き上げ	口縁部ヨコナデ頸部荒いハケのナデ	口縁部ヨコナデ		細粒粒混入	良好	暗褐色
小形甕AI①	口縁部に最大径がくる。「く」の字状に外反する器形である。	粘土ひも巻き上げ	口縁部はヨコナデ、頸部から胴部にかけて横方向のヘラケズリ	口縁部はヨコナデ、頸部から胴部にかけて横方向のヘラケズリ		細粒粒混入	良好	赤褐色
小形甕AI②	同　上	同　上	ヨコナデ	ヨコナデ		細砂粒混入	良好	明褐色
小形甕AII	同　上	同　上	口縁部ヨコナデ頸部から胴部にかけて縦方向のヘラケズリ　の	口縁部から胴部にかけてヨコナデ		細砂粒混入	普通	暗褐色
小形甕A	平底の底部のみである。資料的に少ないのと小破片であるので細分してない。粘土ひも巻き上げの後ロクロ整形されたと思われる。		胴部ヨコナデのもの、一部ヘラケズリしているもの、荒いハケメのものがあり一定しない	観察は器面が荒れていてできない	糸切りのままのもの 糸切りのままのものとヘラケズリされているものがある	細砂粒混入	普通	明褐色
小形甕AIII	口縁部よりも胴部に近いところに最大径がくると思われるが、小破片であるので確定できない	粘土ひも巻き上げ	口縁部ヨコナデ胴部は下から上へのナデ	頸部から胴部にかけて方向不定のナデ		細砂粒混入	普通	明褐色

12　判ノ木山西遺跡の諸問題

1)縄文時代早期土器の問題――特に第３類、第４類土器を中心として

①土器の特色

器形は、波状口縁の深鉢形が４点出土しているが、他に平口縁になる可能性の土器もある。推定される直径は30㎝前後である。突起を持つ土器はないが縦位の貼り付け隆帯を持つ例が少数みられる。口縁部はやや外反する傾向があり、口縁形態はいわゆる丸頭状が多い。底部は尖底状の丸底の形態を示す土器片が出土している。

胎土は繊維、長石、石英、その他鉱物など、いわゆる砂粒の混入が多く、特に、雲母が多く約70％の土器に認められる。

文様は、直線的な沈線文と口縁部への刺突で構成される。モチーフは多様であり、綾杉文、鋸歯文、格子目文、菱形文の他、少数だが曲線文の土器もある。また、口縁端部へのきざみ目や刺突も多く、22片出土し、他に刺突のみの土器もある。施文の範囲は上半部に限られる傾向にある。

条痕、原則として内外面ともに条痕が施されている。貝殻を工具とする条痕でなく、ヘラまたは板状工具と思われる。本土器群は細めの条痕であり、今後この種の工具の検討が必要である。施文方向は外面では横方向が多いが、縦方向、斜方向などもあり一定方向は示していない。口縁部以下では縦方向、斜方向が多い。内面もほぼ同じ傾向である。

第３類土器には、沈線を施すにあたって条痕を擦り消す手法が使われている。この場合、完全に擦消すことなく、地文状に残す場合が多い。内面は横方向の条痕を残すものと、繊維束などの工具により擦痕状になる土器に分かれる。特に口縁部以下胴部は擦痕状になるものが多い。

第４類土器は、内外面ともに条痕を持つ土器が多いが、口縁部外面は、観察された大半に条痕が付けられている。口縁部以下胴部には指頭によるナデ、ヘラ状工具、繊維束による調整がされ、条痕を残している土器と、擦痕状になる土器に分かれるが、後者が多い。内面は、口縁部には横方向が多く胴部以下は擦痕状の土器がほとんどである。

なお、文様と施文工具との関係は充分検討されていないが、個々の破片については「分類と観察」でふれたので省略するが、最も使用されたのはヘラ状工具で、特に先端が２～３に割れた２㎜～４㎜ほどの工具で、棒状工具がこれに続いている。ヘラ状工具は沈線や刺突に、竹管状、茎状のそれは刺突に限られて用いられた。以上、ある一定の型式を構成する土器と思われる。

※　第１類に分類した押型文土器との関係は現在のところ明確にできない。ただ１aに分類したいわゆる相木式については、結節沈線の手法など今後検討される問題を残している。押型文の範ちゅうから離れて考えることが必要かも知れない。今後資料の増加をまって考えたい。

②　編年上での位置

前述してきたような特徴を持つ土器の編年上での位置を求めると、器面調整としての条痕のあり方からすれば、条痕文系土器の範ちゅうであり、器形、口縁部の形態、繊維の混入、文様構成、施文具などから検討すると縄文時代早期後半の時期が考えられよう。また、本土器群中には、絡条体圧痕文、貝殻腹縁文、細隆起線文土器が１片も検出されていないことは、ある一定の時期を示すものであろう。

長野県内での縄文時代早期の編年は、押型文土器を中心として行なわれ、沈線文系、条痕文系土器の位置付けは明確でない。沈線文系、細隆起線文系土器の資料も増加しつつあり、また、絡条体圧痕文土器も単に子母口式としてよりももう少し時間幅を持つものと認識（註１）され、早期後半の編年作業もようやく

研究課題とされる段階にある（註2）。

本土器群の特色をふまえ、あえて類例を求めるといくつかの例があげられた。これらを検討することにより本土器群の編年的位置を考えたい。

ア、茅野市御座岩遺跡〈宮坂英式、1966〉

第1群第5類土器（同報告書17図6、18図1～3）は、横位に貝殻条痕文を施し、太い沈線文で鋸歯文などを描き、口縁端部に点列やさざみ目を入れた土器で、微量の繊維の他、雲母や砂粒が混入している。内面にも点列があり、本土器群とはやや異なる点もあるが、沈線、刺突からなる構成は類似する部分が多い。報告書は茅山式に、最近鵜ヶ島台式の検討を行った関野哲夫氏は野島式の古いところに比定している〈関野 1980〉。

イ、諏訪市明星屋敷遺跡〈中村、1965〉

C類土器が類似すると思われる。器面全体に条痕文が施され、厚手で胎土に石英、雲母などが混入する。菱形のモチーフを構成し、口縁端部に軽く捺した連点文の土器で、報告者の中村氏は茅山式に比定している。

ウ、木曽郡日義村二本木遺跡〈八幡、1972〉

『日本中部山地に於ける縄文早期文化（上）』の第11図版の中に見える棒状工具で施文された格子目状の文様の土器は、本土器群中の図17－31に類似している。八幡一郎氏は「これらの土器の性質は今少し調べてみる必要がある」とされている。

エ、下高井郡木島平村三枚原遺跡〈高橋、広瀬、1977〉

第6群の条痕文系土器で、A種、B種に分類され、「A種は細隆起線あるいは沈線による幾何学的な区画文の内部に、集合沈線や刺突文等を組み合わせることにより装飾的な文様をつくりあげている土器で、装飾的な文様は口縁部乃至は胴上半部に限られており、胴下半には施文されていない」とされ、B種は「条痕文のみが施文されている土器群である。胴部破片が多量であるが、口縁部より条痕文のみが施文されている土器も存在する。条痕の走向、条痕の明瞭なもの、不明瞭なもの、擦痕状のものまでバラエティーである」とする。広瀬昭弘氏は、鵜ヶ島台式に比定されている。

オ、南佐久郡北相木村栃原岩陰遺跡〈小松他 1976〉

本遺跡から、いわゆる相木式土器と呼ばれる深鉢形土器が出土しているが、それに伴って「各種条痕文を主とし、直・曲線による沈線文、刺突文にわずかながら貝殻腹縁文、貝殻条痕文が内在し多くは繊維を含む。これに山型文、穀粒文も共伴する。これらについて下層部分を標式的にみれば田戸下層より上層へ、更に茅山式まで連なる様態が看取される」との記述があり、相木式の写真のみ報告され、他の土器の詳細は不明であるが、本遺跡出土の土器群に近い様相を示していると思われる。

カ、山梨県東山梨郡牧丘町豊原遺跡〈信藤 1977〉

II群土器が類似するであろう。沈線文系と刺突の土器に分けられるが、「沈線の工具、モチーフ、口唇部の刻目、浅い擦痕、繊維、雲母の混入などの特色を持つ」土器で、報告者の信藤祐仁氏は沈線文系土器を田戸下層に比定されている。他に押型文土器が出土している。

キ、静岡県沼津市清水柳遺跡〈笹津、瀬川他 1976〉

第II群土器の内C類、H類、I類に対比資料がある。C類は細い沈線紋を有するもの、細い沈線、浅い沈線が施文され、種々の文様を構成し、口唇に棒、櫛による刺突文ある土器で、H類は貝殻条痕文、I類は擦痕文を有するものである。瀬川裕市郎氏は野島式土器に比定している。（註3）。

ク、八王子市下耕地遺跡〈服部他、1974〉

A類～F類の土器は、野島式に比定される土器で、細隆起線文を伴うが、他の沈線、刺突、条痕のあり

方は類似するところがある。土壙SK07出土の土器に「口唇上に丸い篦による刻み目がある。器外面は、地文の条痕を磨り消した上に、2本を単位とした、篦状工具による、斜め方向への押し引き凹線が格子状に施文されている」例が出土している。沈線のあり方にやや異なる部分があるが類似したものであろう。

ケ、町田市田中谷戸遺跡〈浅川、川崎 1976〉

野島式土器が出土した遺跡で、この内の第6類土器は、沈線文を主体とした土器群であるが、地文に貝殻条痕を有し、ヘラ状工具で口縁部に沿って3本の沈線をめぐらしている例が出土している。

コ、東京都多摩ニュータウンNo.52遺跡〈雪田、1967〉

子母口式、野島式、鵜ヶ島台式に比定される土器群の出土が報告されているが、無文土器と押圧、刺突、条痕の文様を持つ土器から構成され、ヘラ状工具、半截竹管状工具による刺突された土器があり、絡条体圧痕文や、貝殻腹縁文土器が伴出しているが、条痕の施文方向などに本土器群に類似する部分がある。条痕が擦消されているかは不明であるが、安孫子昭二氏の指摘されるように子母口式でも古い段階とすると、この条痕のあり方は注目されよう。

サ、東京都多摩ニュータウンNo.269遺跡〈安孫子、1969〉

子母口式に比定される、条痕文土器、無文土器が多量に検出されているが、これらの器面調整の詳細な検討がされている。「無文土器、条痕文土器の器面調整の他に条痕で仕上げた器面上をわざわざ擦消した土器が2個体4片ある。――中略――この土器の器面内外には貝殻条痕が施され、その後擦消された形跡が認められる。口縁部文様帯は、その擦消された条痕上に篦状工具による波状の沈線が加飾されたものである。従って、この沈線が施されるまでには〔荒仕上げ〕→〔仕上げ〕（貝殻条痕の器面調整）→条痕の擦消という少なくとも三工程の器面調整を経ることになる。このような例は他の無文土器、条痕文土器には存在しない器面調整法である。」とし、そして「野島式の擦消する手法は子母口式土器のこの手法を継承したものと考えられる」と指摘している。本土器群中の第3類土器の手法に共通した部分と思われる。

シ、神奈川県三浦市鵜ヶ島台遺跡〈岡本、1961〉

「野島式土器の表面には、条痕の存在はほとんどめだたない。はじめ器面の整形のために施された条痕は、文様をかくにあたって、多くの場合擦消されたからである。したがって文様のない胴下半には条痕のはっきりのこったものが多い。また裏面には三分の二以上のものに条痕が施されているが、その方向は口縁にたいし、縦、斜あるいはまれに横というあり方をしている。」と報告されている。

ス、千葉県市原市東間部多古墳群〈滝口・米田、1974〉

この古墳群からは、縄文時代早期初頭から後半までの土器が出土しているが、早期後半の土器に、野島式と鵜ヶ島台式土器がある。この内、前者に細隆起線文土器と、沈線文土器とがあり、いずれも内面に条痕文を有している。細隆起線文土器の内面は、横位または斜位の条痕によって埋められている。沈線文土器は、「太い直線的集合的な沈線による文様構成が、その主体的位置を占め、それに加えて竹管による円形押捺文を施したものも多くみられる。又口唇部に連続した太目の規則的な刻目を施したものがある」「これらの口縁は外反し器壁は0.5～1.0㎝程である。裏面には、そのほとんどが横位の条痕文を施すが……斜走する条痕文をもってこれに換えているのもある」。これは沈線のあり方など本土器群に類似する。また両面に条痕文を施した土器片の中に、「表面に地文として右下がりの斜方向の条痕を施し、その上に2㎝程の間隔を持った縦位の細い沈線を描き、更にその沈線上に円形押捺を加えたものである。裏面には方向の不規則な条痕が見られる。」土器が存在している。

セ、静岡県沼津市木戸上遺跡〈愛鷹縄文遺跡研究グループ、1976〉

絡条体圧痕文、隆起線文、細い集合沈線文、太い集合沈線文、刺突文、押し引き文、貝殻文、無文の土器が出土し、野島式に比定されている。この中で細い集合沈線文、太い集合沈線文とした土器のモチーフ

が本土器群と類似している。

以上、本土器群の特色を沈線、刺突、条痕文のあり方、特に擦消しの手法の面から類例を集めてみたが、関東地方の編年でいう子母口式から野島式土器において主として観察される手法であると思われる。

また、前述した本土器群の特色からみると、沈線文系土器として把握される田戸上層式からの様相を示している部分もあるが、内外に条痕文がつけられる特色は後出的であり、本遺跡から南へ800 m離れた頭殿沢遺跡出土の貝殻腹縁文土器を田戸上層式段階と考えると、一段階後出する条痕文系の土器群としての位置を考えたい。また野島式、一部子母口式土器の中に細隆起線文が存在するが、本遺跡の場合は出土しておらず、この事実もある一定の時期を示す根拠であろう。本土器群における無文土器は、他と同様擦痕状であり、土器片数からすると一番多いことはすでにふれたが、観察される限り口縁部より下の胴部破片のみで、口縁部破片は1片も出土していない。田戸上層式以来、子母口式にいたる無文土器の存在とやや異なる様相であり、今後検討される問題である（註4）。口縁端部のきざみ目もこの時期の特色であるが、きざみ目を持たない場合は、ほとんど口縁部に刺突を持つ土器である。このことは、口縁端部へのきざみ目の手法から口縁部への刺突への変化を示すものとも考えられ、この手法の変遷も検討されるべきであろう。

長野県内におけるこの時期の編年の確立は急がれるが、沈線文系土器から、条痕文系土器への変遷はまだ資料不足であり、また関東地方におけるこの時期の編年もまだ問題を残すところであり、本土器群の位置もまだ確定的でなく（註5）、今後の課題としたい。

註1　小県郡和田村男女倉遺跡C地点の土器の分析を行なった笹沢浩氏により茅山下層式に類似すると考えられたが、妥当な見解と思われる〈森嶋、笹沢、1975〉。

註2　関野哲夫氏〈関野 1980〉　谷沢良光氏〈1976、1977〉などで行なわれている。

註3　瀬川裕市郎氏は、「清水柳遺跡の土器と石器」P.70、に「なお本遺跡の野島式土器についてみると、それを南関東地方例などに対比すれば、いわゆる条痕文が未発達な点、その特徴としてあげられるであろう。」と条痕文についてふれている〈瀬川他、1976〉。

註4　川崎義雄氏は、「先型式の子母口式土器の無文土器の系譜から野島式にいたって条痕文土器と無文土器に分割されている」とされている〈浅川、川崎 1976〉。

註5　いわゆる子母口式土器の存在、型式の認識など混乱している。県内では沈線文系土器からの編年、また子母口式を始めとする条痕文系土器の良好な資料は検出されていない。

２）縄文時代中期の土器に関する問題

本遺跡出土の縄文時代中期の土器のうち、主体的である第３類・第４類・第８類を中心に観察し必要に応じて分類した。以下観察表の項目に従って観察結果・分類基準・各類の傾向等を記す。資料は決して豊富ではなく整理も完全とは言えないため本遺跡における当該期の様相を理解するのが精一杯で、位置づけ等の問題には充分触れ得なかった。

①器種

中期の土器には、深鉢、鉢、浅鉢、有孔鍔付土器と小形の杯形の土器がある。第３・４・８類では、鉢と小形の杯形の土器を欠く。(註１)

②器形（図116）

第３・４・８類について器形分類を行った。分類には文様帯を考慮した。深鉢にはＡ～Ｅ・浅鉢にはＡがあり一部は細分される。いずれも平口縁に突起を有するものが大半を占めている。有孔鍔付土器はいわゆる樽型と壺型〔藤森・武藤 1963〕の両者があるが、３点出土したのみのため分類は控えた。

深鉢Ａ:屈曲しない直線的な器形で、底部から丸みを帯びて立ち上がり逆台形に開く形のほか、円筒形を呈するものがあるかも知れない。出土量が少なく詳細は不明である。

深鉢Ｂ:屈曲をもたずに外反する器形である。底部から直立もしくは丸みを帯びて立ち上がり、底部が外に張り出すことはないらしい。文様帯が分けられない深鉢B_1と、口縁部文様帯と胴部文様帯に分けられる深鉢B_2とに細分される。

深鉢Ｃ:胴部は外傾気味で口縁部が屈曲する器形である。底部からの立ち上がり方は深鉢Ｂと同様である。文様帯は口縁部文様帯と頸部及び、胴部文様帯に分けられる。口縁部の屈曲の違いから、小さく内屈し直線的に立ち上がる深鉢C_1、内屈後ゆるく内湾して立ち上がる深鉢C_2、大きく屈曲し強く内湾してキャリパー状を呈する深鉢C_3に細分される。

深鉢Ｄ:胴部が張り出し口縁部は外屈する。胴部下半から底部は不明である。

深鉢Ｅ:胴部は小さく張り上半で外屈して開き口縁部が内屈又は直立する器形である。底部は深鉢Ｂ・Ｃと同様らしい。文様帯は口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部文様帯に分けられる。

浅鉢Ａ:口縁部が屈曲し直立又は内傾する器形で、体部は直線的、外湾気味、内湾気味等多様である。口縁部の屈曲の違いから、直立する浅鉢A_1と強く内傾し肥厚される浅鉢A_2に細分される。このほか全体形は不明ながら浅鉢Ａとは明らかに異なる浅鉢がある。

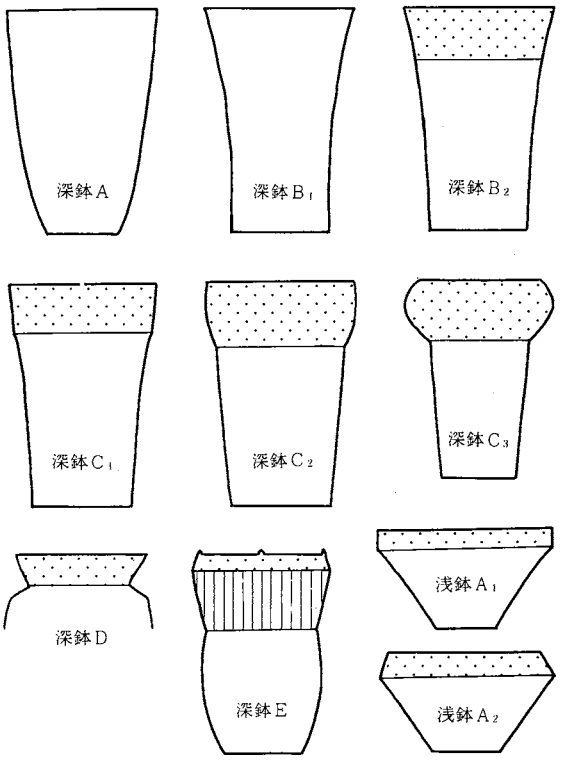


図116　中期第３・４・８類土器器形分類模式図

本遺跡出土土器は当該期の器種・器形としては若干の欠落があるがおおむね一般的傾向に合致したものと言える。(註2)各類毎の器種・器形は次の通りである。第3類には深鉢B～深鉢C_1、浅鉢A_1がある。第4類には深鉢A～深鉢C_2、浅鉢A_2、有孔鍔付土器があるが深鉢B～C_2が主体を占める。第8類は深鉢Dのみから成る。又これらの器形を系統的に整理し、前後の時期と対比すればおおむね整合的であると言えよう。(註3)

③容積（図117）

図化した土器のうち可能な個体については容積を算出し、深鉢・浅鉢についてはその分布に従って分類した。(註4)図117のグラフの分布から、深鉢はⅠ～Ⅳに浅鉢はⅠ～Ⅱに分類できよう。

深鉢Ⅰ：30ℓ前後　　深鉢Ⅱ：15ℓ前後　　深鉢Ⅲ：4ℓ～8ℓ

深鉢Ⅳ：1ℓ～3ℓ　　浅鉢Ⅰ：7.5ℓ以上　　浅鉢Ⅱ：3.0ℓ前後

いずれも統計資料が増加すればより精度の高い分類ができ、細分されることも有り得よう。本遺跡では深鉢Ⅲ・Ⅳと浅鉢Ⅰが主体的である。

④器厚

器厚は胴部中央よりやや下付近の平均的な厚さを計測した。5㎜～13㎜の間に分布するが6～7㎜の薄いものと8～10㎜の厚めのものとに分けられそうである。

⑤胎土

胎土の色調がそのまま材料たる粘土の色調を表すのではないことは言うまでもない。(註5)混入材・焼成・使用・風化作用等諸々の条件により決定づけられるわけだが、粘土を分類する上での一応の目安にはなると思われる。図化した土器総てを対象とし、内・外面とも各個体の代表的色調をもって近似するグループに分類して色調名称〔小山・竹原・1967〕を与えた。各グループは明暗の差を含んでいる。器体の上半と下半で明瞭な色調差がある場合はこれを併記したが、これについては使用痕跡の項で触れることにしたい。外面の色調については6種類に分けられる。黄色味の強いグループから赤味の強いグループへ並べると、a：淡黄色、b：明黄褐色、c：黄橙～褐色、d：橙～赤褐色、e：赤橙～赤褐色、f：暗赤褐色となる。c（黄橙～褐色）とd（橙～赤褐色）が大半を占め中でもdが多い。内面は外面より暗いものが多く、器壁は内・外面のより明るい方と同等又はそれ以上明るく鮮やかであるものが大半である。

混和材と粘土自体に含まれている鉱物等とを弁別する事は困難であり、ここでは一括して混和材とした。肉眼とルーペを用いて混和材の種類と量とを大まかに分類した。混和材の量については器体の単位体積（又は重量）当たりの混和材個体数（又は重量）で比較すべきで、肉眼観察により相対差を把えたのはあくまで目安程度である。混和材の粒子の大きさも精密な計測を要するがここでは触れられなかった。

観察された混和材は岩石・鉱物のみでA～Hの8種類がある。

A：大粒で透明もしくはやや白濁した粒子。石英とみられる。

B：大粒で白色不透明な粒子。長石の類かと思われる。

C：大粒～粗大で明灰色～灰色の粒子。黒色の小さな鉱物粒を含有する粒子が多く、単一鉱物ではない。パミス等を含めた岩石の一種かと思われる。

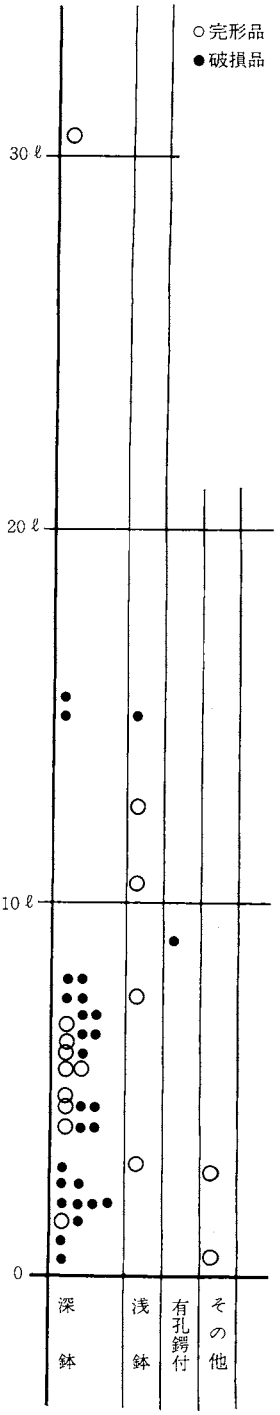


図117
中器土器容積のグラフ

D: A～Cの粒子と思われる白色の鉱物粒子が細かく砕かれたもの。

E: 小粒で黒色半透明な粒子。結晶が確認できるものを含む。輝石・角閃石・黒雲母・黒曜石等が含まれよう。

F: 小粒～大粒で金属光沢を有する不透明な粒子。いわゆる金雲母に類似する。

G: 大粒で風化が進んだ褐色～赤褐色の不透明な粒子。褐鉄鉱又は鉄分を含む粒子であろう。

H: 大粒で明瞭にローリングを受けた粒子。鉱物の種類は不特定である。

これらの混和材のうちA・Fは必ずしも普遍的ではないが、含まれる場合には量が多く目立ちやすい。B～Dは最も普遍的で量も多いが、特にC・Dの目立つ個体が多い。Eは普遍的だが量は少ない。G・Hは普遍的ではなく量も少ない。尚、腐植土等粒子の細かい混和材が混入される可能性がある〔新井 1973〕が、観察では把えられなかった。

粘土の質に応じて混和材の種類・量が加減されたものだろうが、その関係を把えることはできなかった。ただ赤味の強い胎土には混和材が含まれる量が多いようである。

第３類の胎土は、色調はｄが主体で混和材にはばらつきが見られる。第４類の胎土は、色調はｃ～ｅが主体でとりわけｄが中心となる。混和材の量は平均的と言えよう。第８類の胎土は色調は黄色味が強く、混和材は少なめらしい。混和材のうちFが大量に加えられるもの、少量みられるもの、欠如するものの三者があり、Aを含むものと欠くものとがある等、胎土は必ずしも一様ではない。

⑥成形（図118）

図示した土器は全て粘土紐の積み上げによって成形されている。積み方の詳細は不明だが、口縁部・底部の成形と形態について一部観察できた。

口縁部の最後の１段の粘土紐の積み方には４種類ある。

a: 1段めと2段めが同角度。

b: 1段めが2段め以下より外傾する。

c: 1段めが2段め以下より内傾する。

d: 1段めが2段め以下より強く内傾する。

口縁端部の成形には３種類ある。Ⅰ・Ⅱの区分は大半が不明だが、一部外面にⅡが認められた。

O: ナデを加えるのみの素直なもの。

Ⅰ: 折り返すもの。

Ⅱ: 粘土紐を貼付するもの。

Ⅰ・Ⅱの方法により肥厚された口縁部の形態を４種類に分ける。

1: 幅狭く薄く肥厚する。

2: 幅広く薄く肥厚する。

3: 幅広く厚く肥厚する。

4: 幅広く厚く肥厚し口縁端部に広い平坦面をつくる。

以上の要素を組み合わせて表示した。

底部については岡谷市船霊社遺跡での分類〔樋口・島田ほか 1980〕に従ったが、明瞭に把えられるものは少ない。

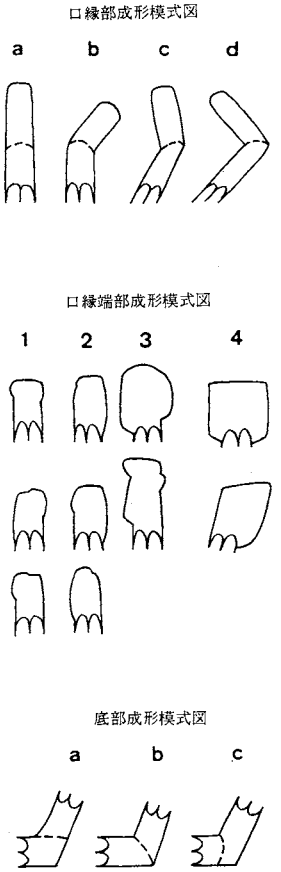


図118　中期土器成形模式図

第３類の口縁部はａ・ｃの方法で粘土紐を積むことが多い。端部は１の方法を主とし２・３の方法も用いて肥厚するが、肥厚されないもの（Oの方法による端部成形）もみられ

る。第4類の口縁部は、粘土紐の積み方は多様で、端部は大半が肥厚されるが特に3・4の方法が目立つ。より装飾的で複雑であると言えよう。第8類の口縁部はほぼc－oの方法によっている。体部の成形は不詳だが指頭によるオサエが顕著に残るものが大半である。

⑦整形

整形技法で観察されたのは、オサエ、ケズリ、ナデ、ミガキでこの順に行なわれたらしいが総ての土器に対して行なわれたかどうかは確認できない。

オサエには粘土紐の接合部分を押圧する成形技法とは別に、器体外面にのみ残されるオサエaがある。オサエaは痕跡は顕著でおおむね水平に併列し、装飾的ですらある。押圧によってできた凹部に混入鉱物粒子の移動痕が残る場合がある。

ケズリはその後の調整で消されて単位は肥えられない。浅鉢と、一部の深鉢の底部付近以外は未発達で、器表の凹凸の調整程度かも知れない。内面はフラットに仕上げられることが多く、凹凸の調整は入念である。

ナデには工具移動痕の残るナデa、残らないナデb、器表に浮出する混入材粒子を完全に器壁に沈めきり半光沢を有するナデcの3者がある。ナデa・ナデbによっても混入材はかなり沈められている。ナデcは原則として内面にみられ、ナデbよりはるかに丁寧でその上にナデaやミガキが加えられることもある。むしろ成形時に行なわれる「つぶし」〔新井1973〕に相当するものと思われる。

ミガキにはヘラ状工具の痕跡が見えるミガキa、工具痕は不明瞭で広い面に加えられるミガキbのほか、幅狭で局部的なミガキcがみられる。ミガキcはナデの後、軽い当りで器内面に縦位に残されることが多い。意図的な手法かどうか不明である。

尚、第8類の整形は特徴的で、成形時のオサエ痕が内外面とも顕著に残るものが大半を占める。これは器壁が薄いため内面の整形にケズリが用いられない事を示すかも知れない。

⑧文様

第3類・第4類・第8類は施文後に再度整形されることが希であり、施文手法からみても工具・手法・方向・順序等が観察しやすい。このような特徴をもつ文様を理解し記述するには、「工程と順位」〔鈴木公雄1969〕という考え方が有効であると思われる。(註6) 第3・4類の文様は同一の工程から成り立つが、第8類の文様は別の工程から成り立つため、両者は別個に把えることにする。

A、第3類・第4類の工程

第3・4類には、器種を問わずA工程～D工程の4種の工程が認められる。まず各工程と細部の観察について説明する。

〈A工程〉

突起・瘤・隆帯を貼付し、その裾をナデつけあるいは故意に浮き上がらせ、粘土塊を貼付したり押圧や縄文を加え加飾して、器体を区画する工程である。口縁部から底部に至る器体全体が横位に区画されつくす個体が多く、区画された部分にはB工程が、(註7) されない部分にはC工程が施される。文様帯・単位・区画が決定され、文様のわく組みがつくられる。区画は完結するのが原則だが例外もある。又少数例だが粘土紐を貼付する替りに半截竹管腹面の連続押圧を用いることがある。隆帯等の重なり方・焼成後の剝落等(図版33)から各々の貼付順序が把えられる。区画の一辺は一本の隆帯・突起から成り、区画は複数の隆帯・突起から成るのが原則である。一辺を成す隆帯が途中で継ぎ足されることは無い。(註8)

〈B工程〉

A工程で成立した区画内に、縄文・沈線・結節沈線・刺突等を施文する工程である。一つの区画内にはたいてい複数の文様要素が施されている。施文に用いる工具は多様であるが、工具の種類・つくり方・使

用面・手法を観察し分類する。

工具としては竹管のほか丸棒やヘラ状工具が予測されるが明瞭な例はほとんど見出せなかった。竹管は割り方と先端の加工方法により6種類に分けられる。(註9)

A:先端が平坦な円形竹管。　B:先端が平坦な半截竹管。

C:先端が平坦な多截竹管。　D:先端を外側から内側に向けてはすにそいだ半截竹管。

E:先端を内側から外側に向けてはすにそいだ半截竹管又は先端を両側からはすにそいだ円形竹管。

F:先端を内側から外側に向けてそぐか側面を加工した多截又は半截竹管。

先端をそぐ場合のそぎ方にも何種類かあるが、器面の痕跡からそぎの角度（工具の主軸とそぎ面との為す角）を推定するのは難しい。(註10)先端が尖っている工具はそぎ角が小さく、丸い工具はそぎ角が大きいかもしれないという程度の推論に留めざるを得ない。半截竹管・多截竹管の場合、背面使用か腹面使用かが容易に把えられる。第3類・第4類では腹面は例外的に用いられるのみである。竹の種類を推測するにはその直径が手がかりになろう。工具の最大幅を計測してみると、3㎜以下の円形又は半截竹管、3～5㎜の半截又は円形竹管、5～7㎜の半截又は多截竹管、7㎜以上の多截又は半截竹管が目立つ。(註11)竹の幹と枝との判別が不可能なため種類を特定できないが、何種類かを用いているものとみられる。

竹管等の工具を用いる手法は何種類かある。沈線・結節沈線・連続押圧・押圧・刺突・陰刻（削り取り）があるが、陰刻については工具を推定するのが困難である。結節沈線・沈線については工具が器面に当たる角度、工具が器面に沈む深さ、結節部分の当たり等からある程度分類することができそうである（図版33)。(註12)

結節沈線a:器面に対して工具の当たる角度が小さく、工具を器面に深く沈める結線沈線で、工具の当たる角度を変えずに沈線を引き小さく押し戻して結節をつけるものとみられ、結節が深くつけられる場合と浅くつけられる場合がある。

結節沈線b:器面に対して工具の当たる角度が大きく、工具を器面に深く沈める結節沈線で、結節のつけ方は手法aと同じである。結節が深くつけられる場合と浅くつけられる場合がある。

結節沈線c:器面に対して工具の当たる角度が大きく、工具を器面に比較的深く沈める結節沈線で、結節は器面に当てた角度のまま工具を引き抜き気味に移動させ、押し戻すか工具の角度を大きくしてつけるのではないかと思われる。この中から結節の間隔があくc_1と極度に狭いc_2をとり出したが、c_2はむしろ爪形文と呼んでも良い。

結節沈線d:工具を器面に浅く沈め結節を軽くつけた結節沈線で、器面に対して工具の当たる角度は小さいことが多い。結節が独立気味になる場合がある。あるいは、器面の乾燥が進んでから施されたのかも知れない。

結節沈線e:結節沈線が崩れ、部分的に結節の残痕の残る沈線で、波状のモチーフに多くみられる。

沈線（f）:器面に対し工具の当たる角度の小さいf_1・大きいf_2がある。

刺突（g）:器面に対し工具が直角に当たるg_1と直角以外の角度で当たるg_2がある。

陰刻（h）:削り取りのほか、工具を器面に刺し回転させて削る方法がある。

〈C工程〉

A工程で成立した区画以外の場所、すなわちA工程が行われない場所に、縄文・ヘラミガキ等を加える工程である。(註13)ヘラミガキは一定のモチーフを形づくるか帯状に加えられている。

〈D工程〉

器体に塗料で彩色する工程だが、塗料によって文様が描かれる可能性があり、塗料は1種類であるとは限らない。(註14)

以上の４つの工程の順位はＡ→Ｂ・Ｃ→Ｄである。Ｂ工程とＣ工程の順位を示す資料はなかった。尚、第３・４類の工程は第５・６類にもほぼ共通するものとみられるので、同一の観察・記述方法をとった。

Ｂ、第3・4類のＡ工程・Ｂ工程の構造

資料の多い深鉢について、第３・４類を特徴づけるＡ工程とＢ工程の構造をみることにする。

Ａ工程の隆帯・突起は模式図（図119）のような重なり方を原則とし、例外はほとんど無い。考えられる順序は何通りかあるが図119のＡ又はＢが最も自然であると思われる。いずれの方法も何種類かの隆帯を組み合わせており、Ａ工程の隆帯・突起は次に示すⓐ～ⓓの４種類の区画作業を果たしているといえる。

作業ⓐ：（単位の決定）口縁部文様帯において、単位数の基準となる突起を貼付する。(註15)

作業ⓑ：（文様帯の決定）横位一周隆帯によって口縁部文様帯・胴部文様帯をつくる。横位一周隆帯は多くの個体で底部近くまで貼付されるため、器体全体が横位に区切られることになる。(註16) 胴部文様帯は幅狭い文様帯と幅狭い文様帯を何帯分かまとめた幅広い文様帯の二種類がつくられる。(註17)

作業ⓒ：（区画の決定）ⓐで決定された単位に従い、ⓑで成立した各文様帯を縦位隆帯・横向弧状隆帯を用いてほぼ均等に区画する。区画は下向き弧状隆帯・波状隆帯等によっても行われる。幅広い文様帯には区画成立後、或は区画自体として「抽象文モチーフ」を含む多様なモチーフがみられるが、単位と文様帯の原則を崩してはいないようである。いったん成立した区画を隆帯以外の文様要素で再分割することはないらしい。

作業ⓓ：（加飾）粘土塊の貼付・押圧・縄文等の装飾を加える。Ｂ工程より後になる例もある。(註18)

Ａ工程の順序が図119Ａの方法だとすれば、「作業ⓐ→総ての作業ⓑ→総ての作業ⓒ→総ての作業ⓓ」の順序であり、作業ⓐ～作業ⓓの各々は連続して行われるひとまとまりの作業であることになる。各々はいわば作業の単位であり工程に準ずる性格を帯びる。又図119Ｂの方法だとすれば、「作業ⓐ→口縁部文様帯の作業ⓑ→同文様帯の作業ⓒ→（同文様帯の作業ⓓ）→胴部文様帯上段の作業ⓑ→……」という順序であり、作業ⓐ～作業ⓓが文様帯毎に反復して繰返されることになる。文様帯が作業の単位となり工程に準ずる性格を帯びる。いずれのあり方なのか決定づける資料はないが、作業ⓐ・ⓑ(註19)は第一次区画文の、作業ⓒ・ⓓは第二次区画文の性格をそれぞれ有しており、前者が後者を規定するという(註20)関係にあることは変わりがない。

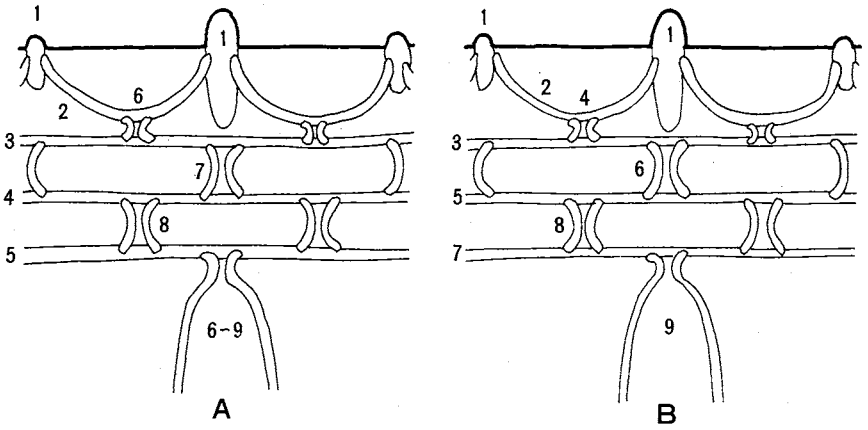


図119　中期第３・４類土器Ａ工程の重複関係と順序の模式図

尚幅広い文様帯における作業ⓒの中に「抽象文」がみられることがあるが、これは単位文〔稲田 1972〕の性格をも含んでいると言えよう。

Ｂ工程が施される空間として、Ａ工程で設定された区画内に特定の場が準備されている。この空間とそこに施文される文様要素を一括して把握し、便宜上、文様の単位（Ｂ工程の文様の単位）と呼ぶ。文様の単位はⓐ～ⓓの４種類がある（図120）。

文様の単位ⓐ：隆帯に沿って、組み合わせて一条とした沈線・結節沈線を一巡させる。

文様の単位ⓑ：文様の単位ⓐの内側に沿って、組み合わせて一条とした沈線・結節沈線を一巡させる。(註21)

文様の単位ⓒ：文様の単位ⓐ・ⓑの内側の空間に諸文様要素を加える。

文様の単位ⓓ：文様の単位ⓐ又はⓑの上下の一辺にかけて連続刺突を加える。

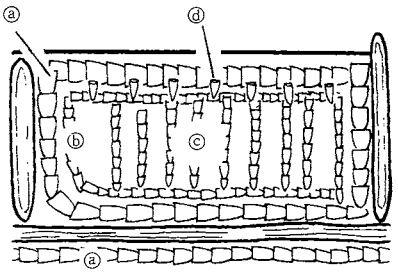


図120　第３・４類B工程の文様の単位模式図

B工程はこの４種の文様の単位の組み合わせから成る。文様の単位ⓐ・ⓑは区画文の性格を有し、文様の単位ⓒ・ⓓは単位文の性格を持ち得る。しかし、文様の単位ⓒにみられる文様要素の多くは、区画のモチーフに従属したモチーフしか持っておらずむしろ区画文の延長にすぎないが、区画を細分するモチーフになることはほとんどないらしい。B工程の文様要素の方向・順序は文様の単位毎にも把えられるが、むしろ重要なのは文様の単位同士の順位であろう。文様の単位間の順位には次の二つの型が認められる。

Ⅰ型：ⓐ→ⓑ→ⓒ→(ⓓ)の順に外側から施文するタイプである。いわば「区画文」→「単位文」の順で、１個体の全部の区画をこの順位で施文する。Ⅰ型には複数の工具が用いられることが多い。

Ⅱ型：ⓒ→ⓐ又はⓒ→ⓑのように順位が全面的又は部分的に逆転するタイプである。いわば「単位文」→「区画文」の順で、１個体の全部又は一部の区画をこの順位で施文する（従ってⅠ型とⅡ型の区画が１個体に共存することもある）。Ⅱ型には１個の工具のみが用いられるケースが大半を占める。

この二者はあくまで区画内の順位の違いを示すのみであるが、B工程全体の施文順序を示す例も少数ながら存在する。(註22)

C、第３・４類の分類

第３類と第４類ではA工程はほぼ一致するものとみられる。しかしB工程は多様な在り方を示しており、B工程で把えた工具・手法・文様の単位と順位・モチーフの配置等から両者を再度見直すことにする。第４類の主要な文様要素は２種類あり、文様の単位との関係も考慮すれば３類型に細分される。

〈第３類〉

文様の単位ⓐには工具Cが若干用いられるほかは工具B（径４～５㎜が多い）にほぼ限られ結節沈線b・cが施される。文様の単位ⓒ・ⓓには工具A（径３㎜以下が多い）と工具B（径４～５㎜が多い）が多用され結節沈線b・cや刺突が施されるが、工具Dもわずかながら使用される。(註23) 文様の単位ⓑの工具・手法は文様の単位ⓐ又はⓒのそれに一致する。又総ての文様の単位に同一工具が用いられる例もある。文様の単位の順位はⅠ型(ⓐ→ⓑ→ⓒ→ⓓ)に限られる。突起を除き同一文様帯に属する区画には同一モチーフが描かれる。

〈第４類ａ〉

結節沈線を主要な文様要素とする。文様の単位ⓐでは大半が工具C（径５㎜以上が大半を占める）、一部に工具B・E・Fを用いた結節沈線cが施される。文様の単位ⓑ～ⓓは工具E（径５㎜以下）にほぼ限定され、結節沈線b・cが施される。文様の単位ⓑの工具・手法は文様の単位ⓒ・ⓓと一致する例が多いのに対し、文様の単位ⓐと文様の単位ⓒ・ⓓに同一工具が用いられる例はわずかである。文様の単位の順位はⅠ型（ⓐ→ⓑ→ⓒ→ⓓ）に限られる。(註24) 突起を除き同一文様帯に属する区画には同一モチーフが描かれる(註25)が、一部に追加又は省略を行う例がある。

〈第４類ｂ〉

沈線及び結節沈線eを主要な要素とする。文様の単位ⓐ～ⓒでは少数例として工具Eが確認されたほか

は工具は不明であるが、工具幅3㎜程度の狭いものが多く、同一工具で施文されているらしい。文様の単位の順位はII型(ⓒ→ⓐ又はⓒ→ⓑ)に限られるらしい。口縁部文様帯には同一文様帯に属する区画であっても異なった手法・モチーフが用いられる例がある。

〈第4類c〉

第4類aと第4類bの中間的様相を示す類である。文様の単位ⓐは工具C（幅10㎜以上が多いらしい）を用い結節沈線c_2が描かれる。文様の単位ⓑ・ⓒは幅3㎜程度の工具による沈線や結節沈線eを主要な文様とする。文様の単位ⓐと文様の単位ⓑ～ⓒに用いられる工具は当然異なる。文様の単位の順位はI型が基本だが、II型がないとは言い切れない。同一文様帯に属する区画にやや異なったモチーフが描かれる例がある。

第3類・第4類のこうした差異性は、他遺跡と比較するまでに至っておらず、系統的な検討も加えられなかった。方法論を含め、今後の課題としたい。(註26)

D、第8類の工程

第8類については既に工程と順位の観点から分析されている〔鵜飼 1977〕が、基本的にこれを踏襲して工程と工程内の単位を把えることにする。(註27)

〈*A*工程〉

粘土紐による突起・隆帯を貼付し器面を区画する工程である。粘土紐の裾はナデられる。ヘラ又は竹管背面の押圧或は指頭かとみられる押圧が付加される。粘土紐の重なり合いから隆帯の施文順位が把えられる。

〈*B*工程〉

器面全体に散漫に縄文を施す。縦位回転の単節縄文が多いらしい。

〈*C*工程〉

口縁部文様帯（第I文様帯）に施文する。

〈*D*工程〉

頸部文様帯（第II$_a$文様帯）に施文する。

〈*E*工程〉

胴部文様帯（第II文様帯）に施文する。

文様の工具・手法については第3類・第4類と同様の観察をした。これらの工程の順位は、*A*工程→*B*工程→*C*工程→*D*工程→*E*工程が原則であると思われる。

⑨使用の痕跡

底から一定の高さで外面全周の色調に変化が見られる土器が14個体ある。これらの土器の内面も外面に対応した色調の変化が見られることがある。器体上半外面が暗色・下半外面が明色で、内面はその逆になるものが4点、同じく内面は変化しないものが6点あるが、これらは二次的焼成の結果であると思われ、煮沸容器として使用された事を示しているものとみられる。このほか色調の変化する4点についても使用の痕跡である可能性がある。

器面に炭化物が付着する土器が24点ある。炭化物にはタール状・粒状の二者がみられる。付着の状態は、内面の一定の高さから上又は下に全周付着する場合、内外面の不定位置に付着する場合があるが、外面の下半にはほとんどみられない。(註28)

胎土の色調変化と炭化物の付着とは必ずしも対応しない。

註1　諏訪郡富士見町新道遺跡第1号住居址出土の「トロフィー形台付土器」に近似するが、台がつけられて

いない〔藤森ほか 1965〕。

註２　当該期の器種・器形のうち、本遺跡で認められない例をいくつかあげておく。胴部が丸く頸部がくびれる深鉢（岡谷市後田原遺跡第Ⅳ群土器、No.６、９〔戸沢ほか 1970〕、諏訪郡富士見町曽利遺跡第 66 号住居址、No.108・109〔武藤ほか 1978〕など）は本遺跡の深鉢Ｄとは器形を異にするかも知れない。円筒形の深鉢（曽利遺跡第 66 号住居址、No.105〔武藤ほか 1978〕など）は本遺跡では不明瞭である。鉢、とりわけ逆台形の鉢（後田原遺跡第Ⅳ群、No.５〔戸沢ほか 1970〕、諏訪市荒神山遺跡第 103 号住居址、図 291-12〔岡田・細川・高桑ほか 1974〕）は本遺跡では確認できていない。

註３　器形分類を整理し、岡谷市船霊社遺跡で行った器形分類と対比すれば表９のようになる。系統的に理解して良いものであろう〔樋口・島田ほか 1980〕。

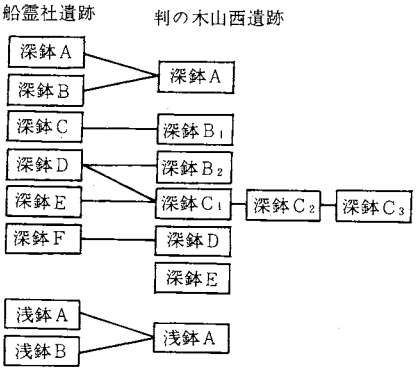


表９　深鉢・浅鉢器形対照表

註４　土器自体に水等を入れて計測する事が望ましいが、水の重量により土器が破損する危険を考慮し、実測図から算出することにする。土器を円筒・円錐台の組み合わせに分解し、各々の立体の体積計算方法を用いた。内径・高さの計測値は５㎜単位で端数は切り捨て、完形品は 0.1 ℓ 単位の算出値を、推定復元品は 0.5 ℓ 単位の推定値を、それぞれ掲載し端数は切り捨てた。よって算出値は実容積を上回ることは無いとみて良い。計測誤差が半径で１㎝あれば容積では 15％程度の誤差が現出する。土器のゆがみ等も考慮すれば一定の誤差を含む数値である事を了承されたい。

註５　「採掘した状態のままの粘土」の意味で用い、胎土は「焼成なった土器の質の意味」に用いる〔佐原 1970〕。

註６　鈴木氏は、文様要素（又はひとまとまりの文様要素）を施す行為そのものを工程とし、その進行順を順位とされている。そして個々の文様要素の切り合いから認識できた順序、例えば二帯の縦位沈線帯のうちの何本かの沈線の切り合いから把えられた順序は、直ちにその沈線帯（すなわち工程）の施文順序（順位）であると理解する。この考え方が正当なのは、氏の扱った安行式土器の工程がモチーフ上も施文作業上も中断されることなく器体を一周して完結しているからで、工程が文様帯そのものでもあるからである。しかるに第３・４類のように区画文を基本とする土器においては、区画内の施文順序が把えられてもそれがただちに土器全体の施文順序を示す証拠にはならない。すなわち文様要素のうちで中断されることのないひと続きの作業で施されていることを証明できるのが横位に器体を一周する隆帯に限られており、それによって成立した文様帯が縦位の隆帯等で分断されて区画（すなわち諸文様要素の施文の場）が用意されるため、諸要素は最初から分断された形しかとれないからである。このような特徴を持った土器を安行式等と対比して理解するには工程という考え方をより明瞭に規定しなくてはなるまい。ここでは、途中中断することの無いひと続きの作業によって行われる文様要素の施文行為を工程と呼びたい。当然ながらこうした把え方では大きなまとまりが把えられるに過ぎないが、工程より低い次元での施文作業のまとまりを把えることにより、その欠を補いたい。

註７　隆帯の貼付を工程とする根拠としては、他の文様要素と異質な施文方法であること、全ての区画において他の文様要素に切られること、他の文様要素のモチーフは隆帯の区画に従属することがあげられ、工程と把えた方が合理的だと思われる。これだけでは証明不十分であるが、作業の連続性を示す資料として東京都昭島市西上遺跡 B_2 地点出土の土器〔和田1975、第53図４〕があげられる。施文途中で焼成されたこの土器では、口縁部文様帯の区画が欠けているが隆帯による区画はほぼ完成したらしく、口縁部文様帯の途中まで区画内の文様要素である結節沈線が加えられている。少数例ながら、Ａ工程の存在を立証する資料である。

註８　横位に器体を一周するモチーフの場合、継ぎ足しのない１本の隆帯をめぐらす方法と、縦位の隆帯や突起を結ぶ何本かの横位隆帯をつなげる方法とがある。後者は少数例だが「継ぎ足し」と言えないことも

ない。

註9　東京都多摩ニュータウンNo.46遺跡で〔F〕とされた多截竹管〔安孫子・可児ほか1969〕は確認できなかった。

註10　そがれた面が平坦になるようなそぎ方ならばそぎ角が小さい程先端は尖るはずである。しかしそがれた面が曲面を呈せばそぎ角の推定は難しい。工具Fのように側辺加工が加えられる可能性も考えれば、そぎ角のみが先端の形態を規定しない。

註11　円形もしくは半截竹管についてはそのまま直径の計測値となる。多截竹管や他の工具についても、工具の原材を推定する手がかりにはなろう。

註12　工具が器面に当たる角度については詳細な観察例がある〔安孫子・可児ほか1969、戸田・篠原1978〕が、角度の計測には困難な点が多い。例えば同一工具・同一手法であっても横位に施文する場合と縦位に施文する場合では角度が異なるし、同じ縦位であっても器面が呈する曲面の度合や位置の相違によっても異なる。単に器面と工具の位置関係のみならず土器と施文者の位置関係によっても角度が決定されるであろう。又、いったん器面につけられた結節が、引き続いてつけられる結節によってゆがめられる例も多い。故に観察としては後退してしまうが、おおむね15～20度を目安として角度が小さいか大きいかに分けるに留めた。工具が器面に沈む深さは、分類が主観的ながら、推定される工具の厚みと同程度のものを深いとしたがあくまでも目安にすぎない。結節部分の当り方も同様である。

註13　B工程・C工程は施文部位を違えており、両者が共存する個体は少ない。両者はそれぞれA工程によって成立した二種の空間（区画内と非区画部分）に施文する工程であるが、同一工程が空間の差によって現れ方を違えているとも言えよう。

註14　塗料の材質について現在分析・鑑定を依頼中である。

註15　突起を有する類は4単位を基本にしており隆帯で単位内を細分することもある。突起のない類では4～5単位がある。

註16　下向き弧状隆帯は作業ⓐと作業ⓒの双方の性格を持つが、その帰属の判断は保留する。

註17　口縁部文様帯を横位に2分する例があるが、作業ⓑと作業ⓒの双方の性格を持つものとみられ、その帰属については保留する。

註18　幅広い区画を縦位に長い隆帯で2分する例があるが、作業ⓒの性格としてはやや異質であり、検討を要する。

註19　区画が隆帯によらない土器はこうした関係を明瞭に示してくれることがある。37もその一つだが、第3・4類に一般的な区画のモチーフをとっておらず参考にならない。より後出の土器型式での分析例もあるが〔今村・岩崎1979〕同様に直接参考にはできなかった。

註20　第一次区画文は「土器の形態に直接制約され」る区画文、第二次区画文は「第一次区画文で分割された土器の器面を再分割」する区画文〔稲田1972〕だとすれば、作業ⓑが前者に、作業ⓒが後者に該当し作業ⓓは区画文自体に該当しないことは言うまでもない。作業ⓐは第二次区画文の性格を持つが、一方口縁部形態に直接制約される側面も有するので第一次区画文に含めて考えることにする。本遺跡出土の第3・4類にあっては第一次区画文と第二次区画文は同一の手法によって施されている。

註21　区画内を一巡する沈線・結節沈線は一気に引かれたものではなく、2～3本に分けることができA工程における区画のつくり方と似た関係にある。特に結節沈線ではその各々の方向や施文順序がわかる。施文順序の規則性は今の所つかめない。

註22　東京都昭島市西上遺跡出土の施文途中で焼成された土器〔和田1975〕では、B工程に相当する文様が口縁部文様帯の途中まで加えられており、文様の単位ⓐに相当する結節沈線と、文様の単位ⓑに相当する結節沈線が、併行して施文されている。この例からは、区画毎に文様を完成させる方法が用いられた事が推測される。II型の一部にみられる区画の途中より文様の単位の順位が変化する54もこの方法を推測させる。この方法だと区画が一つの完結した作業の単位であり、工程に準ずる性格をもつことになる。一方、作業の単位ⓐと作業の単位ⓒの文様要素が異質で順位も全区画II型である20は、全区画の文様の単位ⓒの施文終了後、文様の単位ⓐの施文にかかった可能性も否定できない。この方法だと文様の単位

がひとまとまりの作業の単位でもあり、工程に準ずる性格をもつことになる。

註23　むしろ第1・2類土器に多用される。

註24　唯一の例外として20があげられるが、文様の単位ⓒには一般には希な縄文を用いる等、第4類aからはみ出す要素を持っている。

註25　唯一の例外が5であるが、A工程の区画ミスが根本的な原因となってB工程のモチーフに変化を起させている。

註26　第3類と第2類や阿玉台式との関係、第4類と第5・6類との関係、更に地域性等を理解した上でこうした差異性の本質を把えなくてはならないのだが、担当者の力量不足や時間的限界もあって、本遺跡でのあり方の解説に留まってしまった。

註27　鵜飼氏は*A*工程と*B*工程を合わせて第1工程としている〔鵜飼1977〕。*B*工程が独立しないのならばむしろ*C*工程～*E*工程（鵜飼氏によれば第2～第4工程）の一部として把えるべきものかと思われる。しかし*B*工程は*A*工程に続き、*C*～*E*工程に先行するのが原則である以上、独立した工程として理解した方がより規則的な把え方になるのではなかろうか。

註28　20内面底部近くには大量の炭化物が付着しており（図版6）、現在成分の鑑定を依頼中である。

3）小形石器に関する問題点

①小形石器の出土傾向

小形石器および黒曜石の剥片・石核・原石類の出土分布（図121）から次のことが読みとれよう。第1に石鏃・石匙等の小形定形石器は、全体的にみると住居址内にそれほど集中せず、発掘範囲内から平均して出土していること。第2に、黒曜石の剥片類の出土分布も小形定形石器とほぼ同様の傾向を示すが、18号住とその周辺に集中地点がみられること。第3に、発掘区域外への遺物の分布は、南北方向へはこれ以上広がらないと思われるが、東西方向へは予測されること。第4に、これらの出土分布の傾向は図122に表した石斧等の大形石器類の出土分布の傾向とほぼ一致すること。

器種別の出土数（図61）を見ると、使用痕のある剥片、石核類を除くと、石鏃が131点で他の小形石器に比べて圧倒的に多い事が特徴的である。しかし、黒曜石の剥片・石核・原石類を含めた総数2827点の割合では（図61）石鏃・石匙等の小形定形石器は全体の7.3%たらずで、剥片・石核類に比べると少ない点が注目される。

②使用痕のある剥片類の石器としての性格

これらの剥片・石核類に観察できる刃こぼれ・刃つぶれ状の小剥離痕は、縁辺の刃部作出や縁辺の調整剥離痕ではなく、縁辺が何らかの作用を果たした結果としての使用痕跡であると思われる。使用痕跡からこれらのものの性格（使用方法、機能）を推測するのは困難であるが、計測した属性と使用痕跡の観察から以下のことが指摘できる。第1に観察できる小剥離痕は図示できないほどの小剥離から、せいぜい大きくても2～3㎜ほどであること。第2に剥離痕の範囲は5㎜から40㎜で長さの画一性はみられないこと。第3に素材となる剥片・石核類の形状（長さ・幅・厚さ・重量）についてみても一定の傾向（集中）を示さず不定形であること。第4に使用痕部の3形態について、それぞれの使用痕部の長さや使用痕部の縁辺の角度をみても同様に一定の傾向は見られないこと。以上の観察の結果から、これらのものが石鏃や石錐などのように、用途に応じて定形化された石器とは性格を異にするものと言える。不定形という事は形態に左右されずに機能を果たし、さらに着柄の必要性もないのであり、したがって限定した機能を持った石器ではなく、使用方法についてもかなり柔軟性を持ったものではないだろうか。

③石錐の機能

本遺跡から出土した石錐の使用痕跡から、この石器の機能についてみてみよう。従来から石錐の機能は、

回転の動きをともなう刺突により対象物に穴をあける作用である事が知られている。従って石錐の使用痕跡としては錐部の軸線に対して直角方向の線状痕や磨耗痕、又は錐部稜線に同方向からの刃こぼれ痕などが観察できる。本遺跡出土の石錐も同様の痕跡を残しており（附表1）、同じ機能を果たしたと考えられる。また65と70の錐部稜線に同じ刃こぼれ痕が認められ、全体形がAタイプ・Bタイプともつまみ部の有無に関係なく同じ機能を果たしたと推測できる。稜線の磨耗が左右非対称な例もある（71、72）が、これらは錐軸が対象物に対して直角でなく偏った角度で回転運動が行われた事を示しており、この場合石錐は単に穴をあける機能のほかに穴を拡げる機能も果たしたと考えられる。個々の石錐の使用痕跡の違いや磨耗の程度の差は、穿孔しようとする対象物の種類と使用時間の長さに影響される。68と72は磨耗の程度が著しく、従って硬いものに穿孔した事を示している。全体形がAタイプ・Bタイプとも同じ機能を果たしたと先に述べたが、では石錐のつまみ部の存在は何であるだろうか。回転運動による穿孔には、非連続単方向回転・連続複方向回転・連続単方向回転の3例が知られている。〔S．A．セミョーフ、田中琢1968〕この中でつまみ部を必要とするのは、一ひねりごとに手を離し道具を持ちなおして行う非連続単方向回転と、片手で手を離さないで左右にねじって行なう連続複方向回転が考えられる。いずれもつまみ部は着柄しないで手に直接持って機能を果たす石錐の特徴と言える。つまみ部を有しない棒状の石錐は、着柄する事により機能を果たすと考えれば、それは両手の掌の間にはさんで揉む穿孔ないし舞錐による穿孔が考えられ、いずれも連続複方向回転である。65、67の基部に錐軸と平行方向の擦痕が認められる。この擦痕が着柄による痕跡とも考えられるが資料不足で今後の類例を待って検討したい。

器種＼住居址		1	2	3	4	7	9	10	11	16	17	18
石鏃		9	1		1	10	2	5	4		2	2
石匙		1										
石錐						1			2			1
スクレイパー						1		1		1		
石核状石器												1
ピエスエスキーユ						4			3	2	3	2
その他剥片石器						1		1				
使用痕のある剥片・石核・原石		4	1	3	4	19		2	8	8	9	6
打製石斧	IA									1		
	IIA									1		
	IIIA					1						
	IB									1	1	
	IIB								1			
	IIIB											
	IB′			1								
	IIB′		1			2				1	1	
	IIIB′					1				2		
	IC									2		
	IIC				1	1		2		1		
	IIIC					2				1	1	
	IC′		1			1						1
	IIC′										1	
	IIIC′	1							1			
	ID											
	IID							1	3			
	IIID					1			1			
	I											
	II	2		1		2	1					
	III											
	A	1	1			1						
	B											
	B′											
	C											
	C′	1				1						
	D											
	不明			1	1	3			1			
	外											
横刃型石器	IA	1				2	1	1		2		
	IIA	2	1	2	3	2		1	7	2	2	1
	IIIA	5	1	2	2	3		2	2	1		1
	IVA		1			1			1			
	IB	1				1			4	1	1	1
	IIB	4	1	2		4	2	3	3	1	1	
	IIIB	1		2		2					1	1
	IVB					1						
	IC				1	1			1			1
	IIC	1		1	1	1						
	IIIC	1									1	
	IVC								1			
大形石匙		1	1			1	1	1	1			
磨製石斧		1				2		1	1		2	
不定形石器									3			1
使用痕ある石									1			
磨・凹・敲石	A			1	1	1			2	1		
	C								1			
	A・C	2		6	3	2		3	5	1	2	2
	A・D	1			1		1					
	A・C・D				2				1			
台石									1			1
石皿					1					1		

表10　石器の住居址別出土数

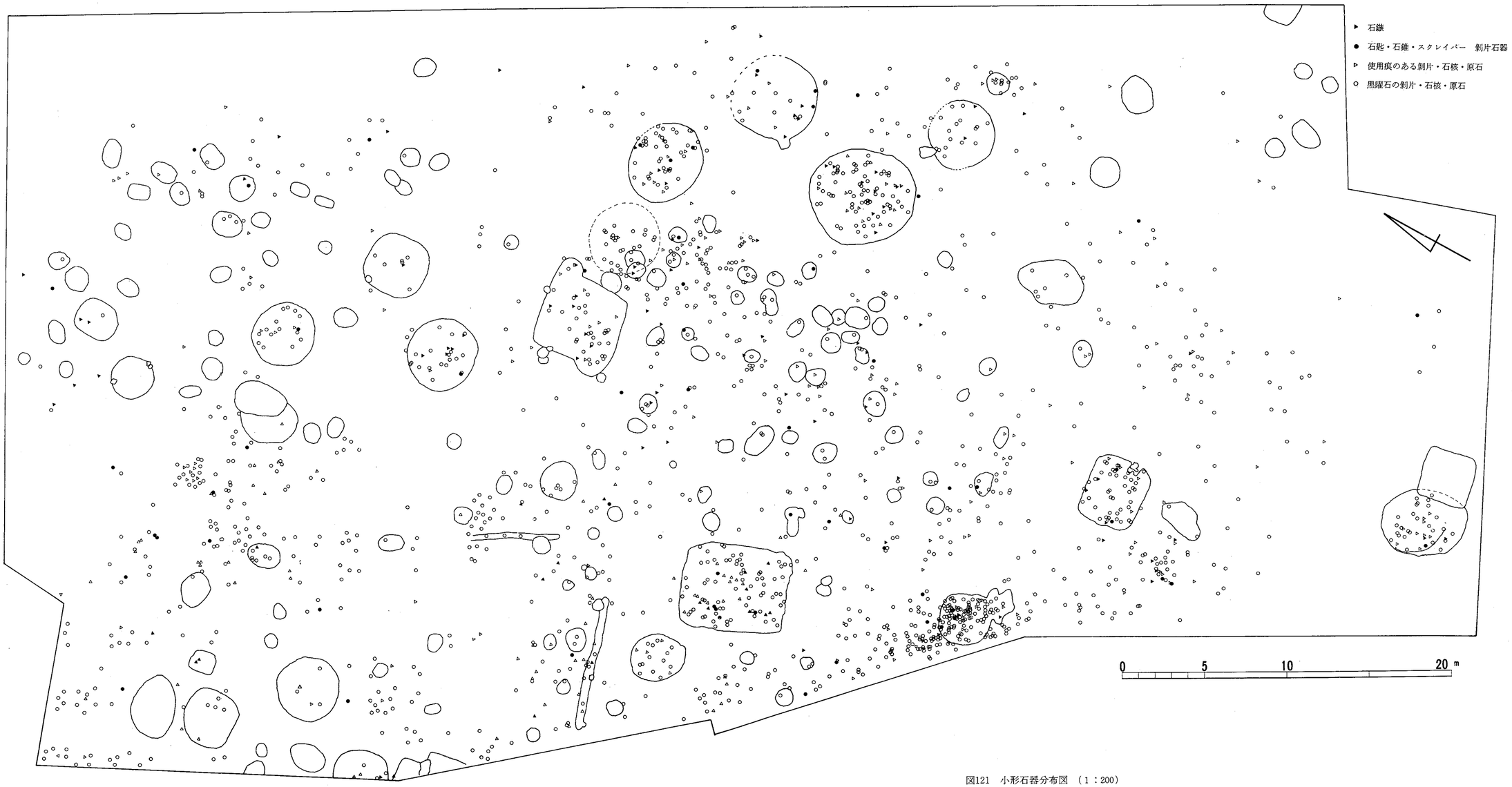


図121　小形石器分布図　（1：200）

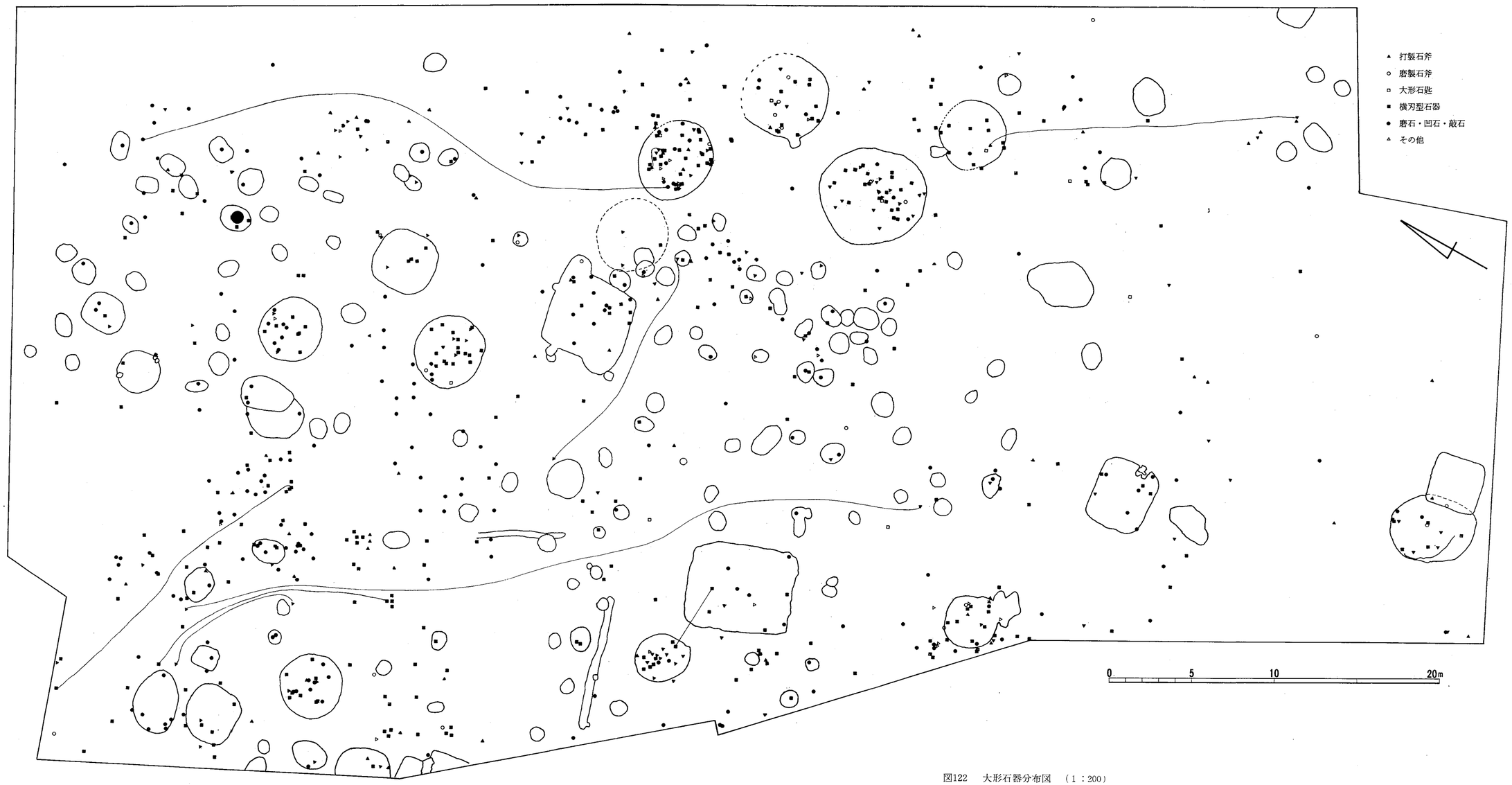


図122　大形石器分布図　（1：200）

4）　大形石器に関する問題

①大形石器の分布（図122）

遺物（石器）の分布は、自然的な移動がないとするならば、製作・保管・使用・廃棄のいずれかの場所を示すものと考えられる。本遺跡（調査地区）は全体的に南東から北西に向かって傾斜する地形で、比高は最大で約４ｍある。従って長期間における若干の自然的な移動は予想されるが、小形石器の分布なども考え合わせると、大幅な移動は考えられない。また多少あったとしても、位置関係はさほど変化してはいないだろう。以上のことを前提として大形石器の分布を見てみる。

縄文時代の住居址からはやはりまとまった石器が出土しているが、それ以外での分布状態においてもある程度の傾向が指摘できる。打製石斧、横刃型石器、磨痕・凹み・敲打痕を持つ石の出土量が圧倒的に多く、大形石器845点中782点－約93％を占めるが、これらは住居址に囲まれた内側の範囲(註１)では比較的少なく、各住居址の周辺から外側にかけて多くが環状に分布する。また横刃型石器は11号住の南西に、磨痕・凹み・敲打痕を持つ石は１号住の南西にもやや集中する部分がある。

②住居址出土の大形石器

縄文時代中期の住居址11軒（19号住を除く）における大形石器の出土数とその割合は、打製石斧総数180点－住居址出土数55点－30.6％、磨製石斧26－７－26.9％、不定形石器５－４－80.0％、大形石匙11－６－54.5％、横刃型石器329－102－31.0％、磨痕・凹み・敲打痕を持つ石273－39－14.3％、台石７－２－28.6％、石皿６－２－33.3％、使用痕ある石８－１－12.5％となっている（表10）。平均すると845－218－25.8％でほぼ1/4が住居址から出土している。そのうち住居址出土の割合の高いものは不定形石器と大形石匙で、打製石斧や横刃型石器もやや多い。逆に磨痕・凹み・敲打痕を持つ石の割合は非常に低い。個々の住居址について、状態の良好であった７号住と11号住とを比較すると、出土した石器の内訳にはかなりの相違がある。７号住では打製石斧と横刃型石器が大部分であるのに対して11号住では打製石斧は少なく、かわりに他器種の石器が器種・数ともに多い。特に不定形石器は５点のうち３点までが11号住に集中しており、特色ある住居址といえよう。

③接合した石器

打製石斧５個体、横刃型石器４個体、磨痕・凹み・敲打痕を持つ石３個体、石皿１個体が接合した。このうち出土地点が明確で離れた場所のものが接合したのは９個体である（表11）。そのほとんどが北西－南東または東－西の方向関係で接合したが、いずれにしても等高線に対して高低の位置関係を示す。従って、傾斜に沿って一方が移動したことも考えられるが、45ｍとか32ｍといった長い距離を持つ石器もあるので、基本的には廃棄時の位置関係を現しているのであろう。ただ本遺跡の場合は、数が少ないこともあるが、そのことが何らかの規則性を示しているとは思えない。むしろ調査地区の北西部に３個体が集中したという事実から、破損によって適宜廃棄されたと考えた方が良いのかもしれない。

器　種	図No.	登録No.	出土方向	距離m	比高m
打製石斧	256	48	南東―北西	45	2
〃	288	66	〃	18.5	1
〃	280	72	東―西	1	0
〃	286	122	〃	14	0.5
〃	289	123	南東―北西	8	1
横刃型石器	325	14	東―西	4	0
〃	337	62	南東―北西	15	1.5
〃	353	109	〃	19	2
凹み等持つ石	516	169 170	南―北	32	2

表11　接合した石器一覧

註１　ただし集落全体を発掘したわけではないので、ここが広場的な場所になるかどうか明確ではない。

5）　縄文時代後期の土器に関する問題

100点余り出土した縄文時代後期の土器について観察したが、大半が小破片からの復元であるため、全体像を把えきってない。観察項目・方法は縄文時代中期の土器のそれに従った。

①器種……深鉢・鉢・浅鉢・注口土器があるが鉢は不確実である。深鉢が大半を占め、浅鉢は2点、注口土器は3点のみである。

②器形（図123）…深鉢のみ分類した。深鉢Aは底部から外反して立ち上がり肩が張って内屈し再度外屈する、いわゆるそろばん玉状の器形である。深鉢Bは底部から内湾して立ち上がり、いったんくびれてから開く器形で、口縁部が内湾気味に立ち上がり大きな波状口縁となるB_1、口縁部が再度内屈するB_2、胴部の屈曲が緩く素直に開くB_3、胴部の屈曲が緩く口縁部が再度内屈するB_4に細分できる。深鉢Cは詳細が不明だが、胴部は緩く外湾し口縁部は内湾して立ち上がるらしい。深鉢Dは胴部が丸く張り口縁部はそのまま内傾する。このほかどの器形にもあてはまりそうにない深鉢の破片がある。

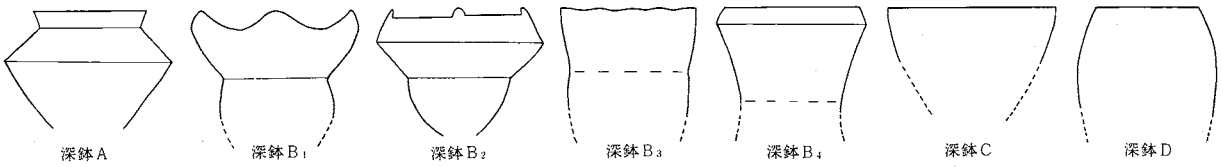


図123　後期土器器形分類模式図

③容積……中期の土器同様に算出したが、算出可能な個体が少なく分類できなかった。

④器厚……中期の土器同様に計測した。5㎜～11㎜の間に分布するが、8㎜以下のものが大半を占める。深鉢Dには厚い個体が多いらしい。

⑤胎土……中期の土器同様に色調と混和材を観察した。色調は黄色系統・橙色系統・赤色系統があり各々明色と暗色とがある。混和材の混入量が少ないものはほとんど無かった。混和材は中期で認められたA～Hの8種類に加え漆黒色粘質土の塊がみられた。この中では混和材H（ローリングを受けた砂粒）が特に目立ちほとんどの個体に大量に混入されている。又混和材G（褐鉄鉱）がやや目立つが、混和材A～C・E・Fは少いようである。尚類型別に特定の傾向を把えることはできなかった。

⑥成形（図124）…総べて粘土紐積上げによる。口縁部について観察・分類した。口縁端部は、単にナデを加えるのみもの(O)、折返るもの(I)、粘土紐を貼付するもの(II)の三種があり、その結果形成される端部の形態には、素直なもの(a)、ナデられてはみ出した粘土が内側へわずかに張り出すもの(b)、内面がいく分か肥厚されるもの(c)、内面がかなり肥厚されるもの(d)、肥厚部分に稜をもつもの(e)の五種がある。又端部上面は、平坦なもの(1)、内側に傾斜し尖るもの(2)、丸いもの(3)の三種がある。これらを組み合わせて表示した。端部の成形方法・形態は類型によって特徴的な場合がある。底部については中期同様に分類した。注口土器の注口部の接合方法がわかる例が1例あった(89)。

⑦整形……整形については中期の土器と同様の観察・分類を行った。特徴的なのは工具の単位がわかるミガキaと施文後のミガキであるが、器体全体の整形を把え得る資料はほとんど無い。

⑧文様……施文の工程・順位という把え方は後期の土器にも有効であると思われるが、器体全体の施文状態が判明しない限りこの方法をとるのは困難である。故に文様帯毎に文様を把えるに留める。文様帯は、深鉢A・B_2・B_4・Cでは口縁部・頸部・胴部の三帯に、深鉢B_1・B_3では口縁部・胴部の二帯に分けられる。(註1)

深鉢Aを除く前者の口縁部文様帯は、波状口縁頂部・突起・瘤又は縦位や円形構図の沈線等で 区画さ

れ、区画内には平行沈線と縄文・ミガキが加えられるが、沈線・縄文・ミガキの順序は、破片の観察からはっきり把えられなかった。前者の頸部・胴部文様帯と後者の口縁部・胴部文様帯は羽状沈線を帯状に配している。この羽状沈線の施文順序には何類型かがあるという〔関・鈴木ほか 1980〕が、本遺跡の貧弱な出土例からははっきりした類型を指摘できなかった。

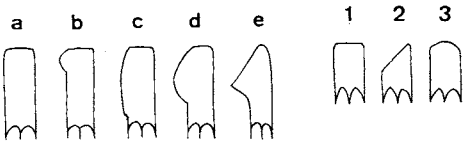


図124　後期土器口縁部成形模式図

⑨使用痕跡……器体の顕著な色調変化と炭化物の付着が認められた。

①～⑨の観察をもとに分類する。

第1類（89）……深鉢片と注口土器1点があるが、詳細は不詳である。

第2類（80）……深鉢Aがある。胎土は赤みが強く長石等の混入が目立つ。頸部文様帯は上向き弧状沈線で区画され、縄文・ミガキが施される。

第3類A₁（図96-297・298）……深鉢B_1がある。口縁部内面はわずかに肥厚される。口縁部文様帯は少なくともその上半が無文となる。

第3類A₂（74～76・81）……深鉢B_1・B_2と浅鉢がある。深鉢B_1の口縁部内面はe3の形態で肥厚され、押圧が加えられる。口縁部・胴部文様帯とも羽状沈線が帯状に配されるが、上段から下段へと単純に行なわれていない模様である。

第3類B（82）……深鉢B_2がある。口縁部文様帯には円形の突起が付されるのを特徴とする。

第3類C（77～79）……深鉢Cがある。口縁部文様帯には削り出し風の縄文帯がみられる。

第4類A（64～73）……深鉢B_4がある。口縁部文様帯が幅狭く瘤が貼付されるA_1と、口縁部文様帯が幅広く瘤に代わって沈線による円形・弧状の構図が描かれるA_2とがある。

第4類B（図96-294）……深鉢又は鉢で深鉢B_4に似たプロポーションをとるらしい。口縁部文様帯下部の屈曲部に押圧が加えられる。

第5類（83～87）……無文土器を一括する。深鉢C・深鉢Dがある。深鉢Cの口縁端部はo b3の形態をとるものが多い。深鉢Dは器壁が厚いものと薄いものがある。深鉢C・Dとは異なる小破片が何種かある模様である。

以上の5類型のうち深鉢についてはある程度系統関係を把えることができそうである（図125）。各類型の位置づけについてみると、第2類は東京都大森貝塚〔E・モース 1879。鈴木正博ほか 1980〕出土品の中に特徴的にみられる加曽利BII式（大森2式）に、第3類A・第3類Bは同じく加曽利BIII式（大森3式）に対比できる。第4類A・Bは埼玉県高井東遺跡〔柳田・吉川・市川ほか 1972、関・鈴木・鈴木・宮内ほか 1980〕出土の曽谷式・安行I式比定土器（高井東式）に酷似するが、中部山地においても主体的な類であるらしい。第5類は加曽利B式～安行式の粗製土器に対応しよう。細分が必要である。

本遺跡出土の後期の土器の様相は、おおむね中部山地地方の様相と合致する。当該地方の土器の変遷を跡づける資料となろう。

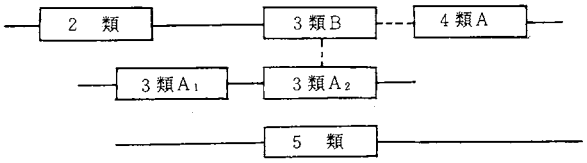


図125　後期土器の系統関係図

註1　文様帯のあり方は器形の屈曲に従属しており、屈曲自体が第1次区画文〔稲田 1972〕の機能を有し、文様の根幹をなすとみられる施文工程の一部を代行している。

6）　平安時代の問題

①　土器の観察から見た住居址間の特色について（表8）

供膳形態 ― 杯の成形技法は各住居址間ではほとんど変化するものではなかったが、底部調整の差、胎土、色調に各住居址間に特色が見られた。各住居址ごとに特色ある土器をとり出してみると、12号住には、杯DIII a2－③と小形甕の存在が目につく。13号住は、本遺跡で出土している土器のほとんどの器種を含んでいるが、杯DII a2－②、杯DIII類 ― 特に杯DIII2a＋5は13号住に見られる特色ある土器で、砂の含有の多いものである。甕H81は、他地域から搬入された土器と思われる。また耳皿80の出土もあった。14号住は、杯B、杯C、黒色土器C、B、甕A、G、羽釜、手づくね土器114、115の出土があった。　本遺跡の内では特色ある土器群である。15号住は遺物の出土量は少ないが、杯DIIa25が出土している。(註1)このように比較してみると各住居址独自の土器を所有している。灰釉陶器については、13号住が量的には圧倒的である。各住居址ごとの灰釉陶器の占める割合は表　8　の通りである。本遺跡でも灰釉陶器の産地の検討を行ってみた。14号住出土の126以外は、東濃系の製品と思われる。126の土器は、胎土、釉の状態から篠岡窯の製品と思われる唯一のものである。これを近接する判ノ木山東遺跡、頭殿沢遺跡の分析と比較してみると、前者は、篠岡窯が18個体中14個を占め、後者は篠岡窯と東濃系の比は7：13であった〔臼田・百瀬1979〕。今後、各遺跡での分析が進むと興味深い事実が判明するものと思われる。本遺跡と対照的なのは判ノ木山東遺跡である。　時期的には、杯Dの段階、灰釉陶器が折戸53号窯期であり、判ノ木山東遺跡、頭殿沢遺跡と同じで(註2)平安時代後半の時期である。各住居址の内に、いわゆる山茶椀と呼ばれる一群が含まれるが、本遺跡の場合折戸53号窯期の内でも新しい段階に入るものと思われる。

②　他の遺構、遺物との関連において

各住居址の概観の項でふれてきたように、各住居址間にも遺構、遺物に特色があげられる。12号住は、住居址内に小鍛冶址と思われる遺構を伴うものである。住居址東北側のコーナーに接して、東側に住居址よりやや円形に張り出した楕円形のプランを持ち、住居址の床面よりも一段と低い位置に小鍛冶址を設けたものと思われる。また火災にあい、焼土の存在、小鍛冶用の炭の存在など区別のできない状態になっている。しかし小鍛冶址の資料として良好な状態を保っていたものと思われる。羽口は、使用されたものと、未使用のもの（図102－2）が検出された。興味深い事例となろう。本住居址より北西側（谷側）に第1号竪穴が存在するが、破砕された羽口片の出土があった。関連ある遺構と思われる。A地区を中心に（本住居址より北東より谷側）に、4kgほどの鉄滓が採集されている。頭殿沢遺跡の8号住内土壙も、本址と同様な遺構と思われる。平安時代後半の集落址においてどのような位置を占めるのか検討すべき問題である。(註3)12号住には他に、カマド南側に、30～40cm大の板石を組み合わせた、「配石遺構」が存在する。カマド址と並ぶ位置にある。この遺構の下には、方形状のピットが検出されている。同様例は岡谷市新井北遺跡、1号、3号、6号住、新井南遺跡13号住にあり、「調理台、物置台」としての性格が与えられている〔山田他、1976〕。　本住居址例は特に性格を示す積極的な資料はないが、小鍛冶址、カマド、配石遺構と並列することを考えると、作業台的な性格が与えられよう。(註4)13号住に関しては、興味深い事例が得られた。一つは、住居址の拡張された可能性を示す資料である。壁面の変化、床面の状況、柱穴の組み合わせなどから結論付けた。同様な状態の観察がなされたのは、阿久遺跡においてである〔笹沢他、1978〕。　今後詳細な発掘調査によって類例の増加が期待される。二つめは、いわゆる「床下土壙」の問題である。同様例は、本遺跡の内でも12号住にあり、やや性格を変えて、14号住、15号住にも検出されている。調査時の観察によると、拡張前の住居址にも、拡張後の住居址にも見られたようである。床下部分を掘って、何らかに使用された後、あまり時間をおくことなく埋めもどされたもので、さらに、この上に貼床されたという

共通点があり、また、土壙内から土師器、灰釉陶器片が出土しているが、これらは、住居址出土土器と変化はない。現在のところ機能を示す資料は得られていない。第三は、住居址内中央やや南側に、新の住居址に伴うものと思われる「石組み特殊遺構」が検出されたことである。(註5) 住居址床面を掘って板石状の石を6枚合掌状に組み合わせ、石組みの下には、2cmほどの厚さに、焼土が存在した。(註6) 石組み内中央のみで大きな広がりはない。この遺構に伴う特別の遺物の検出はなかった。管見にふれた例では、岐阜県中津川市平（南）遺跡に類例がある〔真田他、1970〕。　神坂峠に面した祭祀遺構の性格が与えられている。本住居址例も同様な性格が考えられようが、住居址内の同様例から系統的な検討が必要であろう。(註7)

14号住は、遺構の面では特記するところはないが、非常に整備された住居址である。また残存状態の良好なカマドがあった。この住居址に代表されるカマドは、12号、13号住に共通である。八稜鏡が2面出土したが、いずれも遺存状態は悪く、被災した感を持つ。鏡式の復元は困難である。長野県内では桐原健氏の集成によると、11例あり、本例は12例目となる〔桐原、1968〕。(註8)

他に鉄製鎌、鉄鏃、刀子など鉄製品の出土が豊富であった。また、手ずくね土器が出土した。八稜鏡との関連など考える必要があるかも知れない。

15号住については、他の住居址と比較するとやや異った面が指摘できる。出土遺物の面では、量的には少なく、かつ、ほとんどは器形の推定ができないほどの小破片ではあるが、中に緑釉陶器片が2点出土している。八ヶ岳西南麓では、近接する諏訪郡富士見町手洗沢遺跡にしか検出例がなく、灰釉陶器の量に比べるとあまりに少い。遺構面では、住居址の構築方法にやや異った面がある。この時期では、よく見られる現象であるが、住居址内からは、柱穴と思われるピットの確認はできなかった点である。他の住居址と比較すると遺存状態はあまり良好でなく、規模も小さく、壁高も低い。また、カマドの方向は同一であるが、構造面では差がありそうである。現在、区分できる土師器、灰釉陶器では同一時期の範囲でも、いくぶんか古くなるかも知れない。13号住の拡張前の住居址や、6号住と一つの構成を示すものかも知れない。

以上、各住居址ごとに見てきたように、土器の面、遺構の面などに、各住居址ごとの個有の特色が認められた。この特色は、前代までの集落構成の中では見られなかった現象と思われる。

③　集落立地に関連して

調査の性格上、集落全体におよぶ調査はなされていない。総て推測の域を脱していない。集落構成を考える素材として、近接する遺跡の住居址を地形図におこしてみたのが図 126～130 である。すでに、概要の報告されている諏訪郡原村阿久遺跡〔笹沢1978〕、同居沢尾根遺跡〔今村、山田1979〕、諏訪郡富士見町足場遺跡〔岡田、松永1974〕などほぼ同時期と思われる遺跡を参考にしながら、八ヶ岳西南麓に立地する平安時代後半 ― 折戸53号窯期の集落構成を考えてみたい。

八ヶ岳西南麓の裾野には、その麓から流れ出した小河川によって開析された谷が多数発達している。これに分けられた尾根状の台地の平坦面から傾斜面に集落が立地している。ほとんどの尾根にこの時期の集落の存在が知られる。中央道西宮線に伴う発掘調査によって判明した遺跡は、北から阿久、居沢尾根、オシキ、大石、上の原、判ノ木山西、判ノ木山東、金山沢北、御狩野、頭殿沢、手洗沢、足場というように連続して検出されている。他にこの山麓部には、60ヶ所を越える平安時代後半と思われる遺跡の存在がある〔今村、百瀬、青沼1979〕。　これらの遺跡のほとんどは標高900m～1,000mの間に位置している。これらの遺跡の内で共通して認識されることをあげる。

①時期的には、平安時代後半 ― 折戸53号窯期の灰釉陶器を多量に内在するもので、土師器は杯Dと分類される一群の土器と、甕C、甕Gを中心とする時期である。

②住居址の広がり、分布については、集落全体の調査例はなく推定の域を出ないが、各遺跡の住居址の検出状況から見ると、長尾根状の台地の平坦面から低地への傾斜面に、ほぼ等高線に沿って分布する傾向

がうかがえる〔今村、百瀬1979〕。　住居址の配置については特に一定の規則性は認められないが、帯状に並ぶ可能性はある。判ノ木山東遺跡の取り付け道路分の調査の結果、尾根に入った部分まで住居址の分布を確認することができた。他にも土師器片、灰釉陶器片、焼土など散見しているところを見ると、等高線に沿ってかなりの範囲まで傾斜面上に住居址の分布を推定させるものである(図127)。

③集落の構成については、各住居址間での重複関係は少なく、分布状態もあまり密でない。(註9)　近接する時代で、通常の土器編年上で特に時期の異なる住居址の存在は確認されていない。八ヶ岳西南麓への集落は、限定された時期にのみ行なわれた可能性が考えられる。一時期における集落構成の単位は現在の資料ではつかめないが、意外に多くの住居址の存在が予想される。もちろん遺跡によって多少の差はあるものと思われる。また一定の地域ごとの単位にまとまることも考えられる。細かい土器の分析によって集落間のまとまりも把握できようが、現在の資料の中では、時代的背景が極めてとらえにくい段階である。

④生活の基盤 ― 後背地に関しては、考古学的に実証される資料はない。地形上の面から考えざるを得ないが、各遺跡ともに、後背地に八ヶ岳の裾野から流れ出す小河川によって形成された谷水田が存在するが、このあたりに一つの集落立地の条件がありそうである。

⑤各集落はある一定の期間を持って生活が営なまれたものと思われる。決して季節的な、また「山の民」的な存在でなく、農業基盤を中心にした集団であろう。これは各住居址の遺物の出土状況、鉄製品などの出土品、頭殿沢遺跡、判ノ木山西遺跡に見られた小鍛冶址の存在も証左となろう。

以上のような各遺跡の共通認識にたって、判ノ木山西遺跡の歴史的な性格を考えてまとめとしたい。検出された平安時代の住居址は6軒である。そのうち内容の明らかになったものは4軒（12住～15住）のみである。4軒は遺物の面、カマドの方向などからほぼ同時期の存在が予想され、5号、6号住は、カマドの方向、住居址の配置などからやや異った時期と思われる。これが認められれば平安時代後半のある一定の時期に本遺跡は二時期に渡って集落の構成がなされたものと考えられる。内容の明らかな4軒の住居址で検討する限り、前述してきたように、各灰釉陶器間に特色が認められ、ある程度の自律性がうかがえる。平地に重層的に形成されてきた大規模な遺跡（例えば上伊那郡箕輪町中道遺跡〔伴、他1973〕）などとは、多少の違いを見せている。これは今までの体制が崩壊し、新たな体制への変化を示すものであり、農民層による山間部 ― 高地性の集落への開拓を示すものであろう。班田制の崩壊 ― 名主層による新らたな荘園開発の現象と考えられる。この現象は八ヶ岳山麓のみでなく、北信地方を始めとする県内でも広く認められるところである〔森嶋1978〕。　灰釉陶器の産地を推定した時に、近接する判ノ木山東遺跡との比較の内で、本遺跡の場合は東濃系で、判ノ木山東遺跡では篠岡窯が多いことを前述した。流通問題や、生産地での問題の検討が必要であろうが、遺跡単位 ― 集落単位の差は集落の成立の背景を考える際には、平安時代後半にとっては重要な現象と思われる。

集落立地の面で、等高線上に帯状に並ぶ傾向を指摘(註10)したが、居住区としての位置はあまり良好なところとはいえない。例えば14号住は、角礫の散乱する面へ住居址を構築している。15号住も同様である。他の遺跡でも諏訪郡富士見町手洗沢遺跡1号住例〔細川1974〕も急斜面上という立地であった。このことは、居住地域の限定を意味するものと考えられる。より多くの生産基盤を確保するため、開拓条件の良好な場所は残されたものと思われる。他の遺跡の立地を見ても、数軒以上の住居址の検出されている遺跡と、良好な長尾根状の台地を持ちながら遺構の検出の少ない遺跡との違いは、後背地の小河川の存在にあると思われる。各遺跡間に空間地帯をはさみながら一定の領域を開拓していったものであろう。

平地に重層的に形成された大規模遺跡との比較でこの時期のあり方を見ると、例えば報告された例(註11)には上伊那郡箕輪町中道遺跡例がある。中道第IV期に区分された時期がほぼ比定されようが、中道遺跡ではこの時期とされた住居址は、69軒中5軒である。同遺跡の区分を見ると、第I期は8軒、第II期は25軒、第III

期は27軒であり、第Ⅱ、第Ⅲ期が中心であり、特に第Ⅳになると急激に減少していくようである。対照的な事実は、掘立柱址の存在である。30基ほどの発見であったが、時期的な区分はなされていないが、同報告書に従えば「中道Ⅲ、Ⅳの住居址との併存した可能性が強い」ようであり、同時期の集落間でも集落構成に変化が見えてきたものと思われる。極めて限定された時期の山麓部への進出は、複雑な歴史的背景が想定される。(註12)

註１　(図版53) 手づくね土器は、14号住から２点、遺構外のＦ19から１点、土壙４から１点の計４点の出土があった。甕形土器の器形である。114、115は、製作技法は同一で、１cmほどの粘土紐を巻き上げて、口縁部は折りかえし、特に口縁端部は別の粘土紐を貼り付けている。全体に指頭でおさえた後、内外面ともにハケメによる整形を行なっている。暗褐色で、胎土は細砂粒、金雲母の混入がある。14号住出土である。他にはＦ19の出土で巻き上げ成形後、粘土紐を意図的に貼り付け、その上を指頭によるおさえで仕上げしたままで内面はナデが行なわれている。茶褐色で、胎土は細砂粒が多量に混入され、同じく金雲母の混入がある。土壙４出土で、底部に近い胴部の破片がある。

註２　供膳形態の土器の内でしめる灰釉陶器の割合は、本遺跡の場合56%に達する。遺跡全体で器形が判別できたものは154個で、土師器杯は57個体（37%）、甕15個体（9.7%）、灰釉杯74個体（48%）同じく瓶６個体（３%）他となっている。判ノ木山東遺跡の場合は、98個体中、土師器杯46個体(47%)甕が34個体(35%)

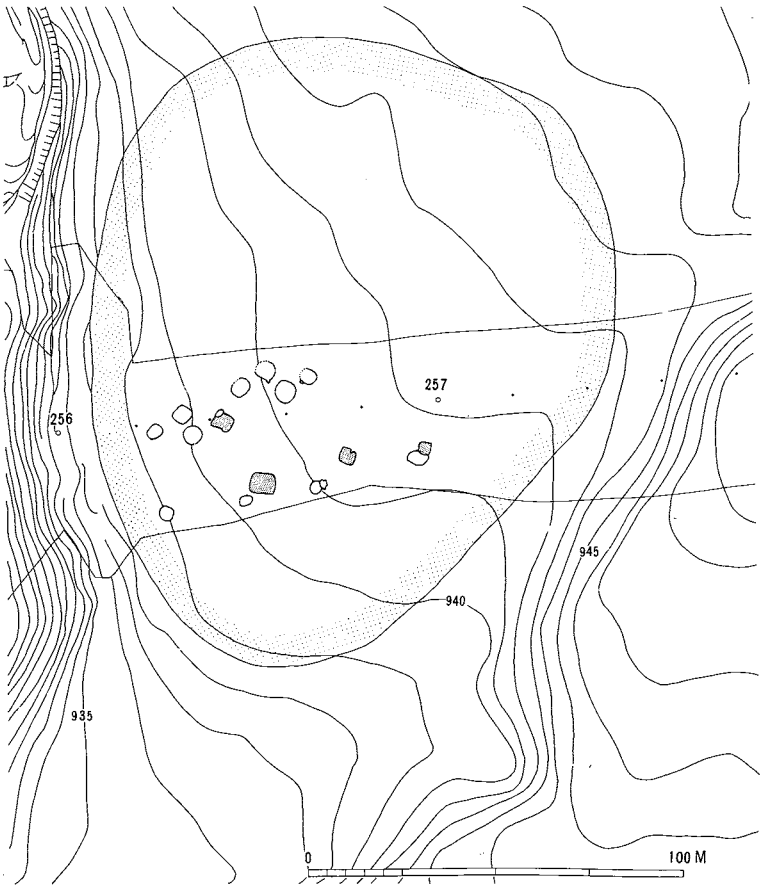


図126　判ノ木山西遺跡の遺構と立地　（１：2000）

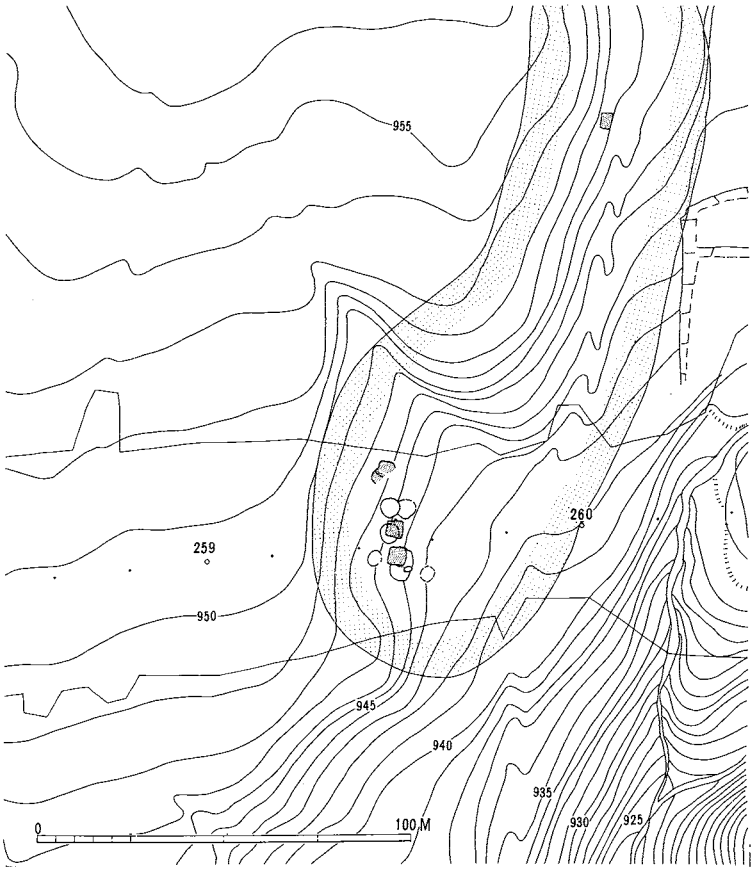


図127　判ノ木山東遺跡の遺構と立地　（１：2000）

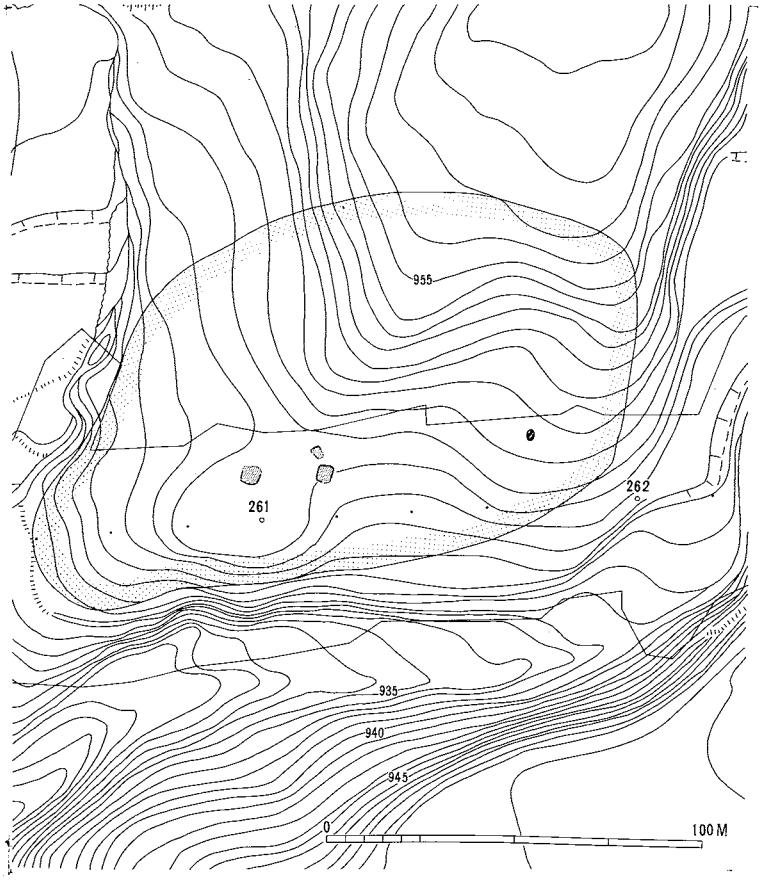


図128　金山沢北遺跡の遺構と立地　（1：2000）

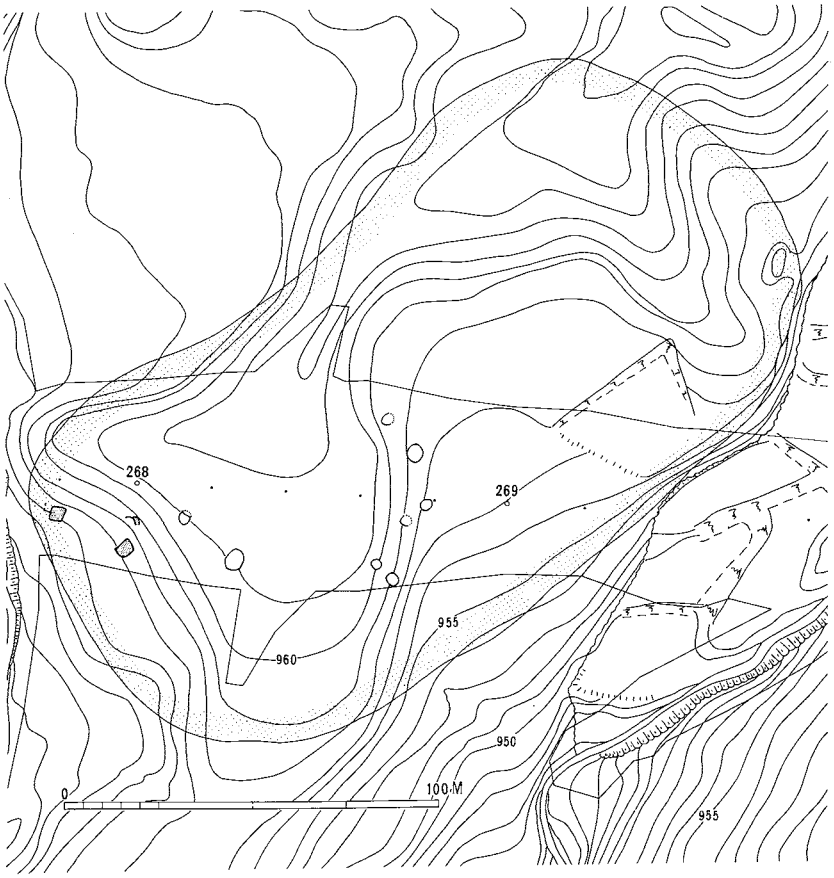


図129　頭殿沢遺跡の遺構と立地　（1：2000）

灰釉陶器18個体（18%）であり、頭殿沢遺跡では、108個体中、土師器杯54個体、（50%）甕10個体（9%）、灰釉杯44個体（40.7%）である。本遺跡での灰釉陶器の占める割合の高いこと、量的な問題は今後検討の必要があろう。なお県内の問題は、神村透氏が論考したことがある〔神村1977〕。

註3　長野県内で平安時代後半の時期における小鍛冶址と思われる遺構は、管見にふれた例は次の通りである。1～5は時期的にやや古いもの、6～8は新しい時期と思われる。前者は、明確な遺構と把握されたものは少なく、後者は、明確な遺構となっていることに注意したい。

1．松本市本郷三才山七本松遺跡〔信濃14－11、東筑摩郡本郷村三才山七本松遺跡調査概報松本県ヶ丘高校風土研究部1962〕

2．更埴市島・道前遺跡第1号住居址〔更埴地方史第二巻、更埴地方史刊行会　森島 稔1978〕

3．更埴市生仁II－12号住居址　〔更埴地方史第二巻、更埴地方史刊行会　森島稔1978〕

4．更埴市池尻遺跡第1号住居址　〔更埴地方史第二巻、信濃19－4　下平秀夫1967〕

5．塩尻市宗賀平出遺跡第38号住居址〔平出遺跡調査会　「平出」　大場磐雄1955〕

6．下水内郡栄村乗落遺跡〔信濃20－4、平安期にみられる山地居住人の遺跡　桐原健1968〕

※小鍛冶址としての記述はないが、報告書から検討すると小鍛冶址と考えられる。

７．長野市松代四ツ屋遺跡小竪穴址１（SK 13）〔四ツ屋遺跡（第１次～第３次）矢口忠良他、長野市の埋蔵文化財第９集 1980〕

８．茅野市金沢頭殿沢遺跡第８号住居址内土壙　〔中央道報告書茅野市原村その２ 伴信夫他 1979〕

９．木曽郡日義村お玉の森遺跡第１号住居址　〔長野県木曽郡お玉の森遺跡 神村透他 日義村の文化財２ 1977〕

註４　当然のことながら鍛冶工人としての動きは制約される。２人以上の作業を考えなくては、不自然になる。資料の増加をまって検討したい。

註５　床下土壙に関しては、最近関東地方を中心として類例の報告が増加している。この問題を集成された、福田敏一氏〔福田、1979〕によると、「本土壙が住居に伴うという点に関して次の３点を確認して、① 住居址構築以前の 重複する他の遺構とは区別される。②本土壙は住居使用中に掘りこまれるのであり、住居址廃絶時には、上面に貼床される。この点において、他の住居付帯遺構と区別される。③重複する後世の遺構とは区別される。」とされたが、本遺跡の平安時代の各住居址から検出されたものは、この範ちゅうに入るものと思われる。また１住居址内での土壙の数にもふれられ、「１基のみ検出されるものから10数基に及ぶものまで一定していない」し、「検出数にはかなりのバラつきがみられる。数が２基以上に及ぶ場合には、互いに重複しあっている例が多い」ことを指摘されたが、本遺跡でも14号住、15号住例は一基のみの検出であり、12号住、13号住例は、10数基におよぶ例である。同一遺跡内でもバラつきがある。長野県内でも同様な例をさがすと、近接する遺跡では、諏訪郡原村阿久遺跡１号住、同富士見町足場遺跡８号住は、一住居址内に多数内在しているものであり、他中央道関係の遺跡の内でも、岡谷市新井南遺跡５号住、上伊那郡箕輪町中道遺跡40号、43号、47号住等、駒ケ根市女体北遺跡１号住、伊那市南丘Ａ遺跡１号、２号住、飯田市六反田遺跡２号住、同小垣外遺跡11号、12号住等、南信地方に類例の検出が多い。特に女体北遺跡例は１住居址内に多数内在する典形的な例である。他に住居址内に１基内在する例は多いものと思われる。類例のみで検討する限り、中道遺跡例に黒笹90号窯期の灰釉陶器を含む例がある他は、ほぼ判ノ木山西遺跡と同期である。しかし中道遺跡には、中道第Ⅳ期に入る住居址には検出されていない。判ノ木山西遺跡でみる限り、１住居址内に多数内在するものと、１基のみの住居址が併存しており、集落間の差とも思えない。多数のものと１基のみのものを、判ノ木山西遺跡のみで比較すると、前者は浅く、土壙内の層序は複雑であり、後者は深く単純である。福田氏の論考以来、関東地方以外の検出例として報告するにとどめるが、住居址内に多数内在する床下土壙に関しては、今後注意深く調査する必要がある。

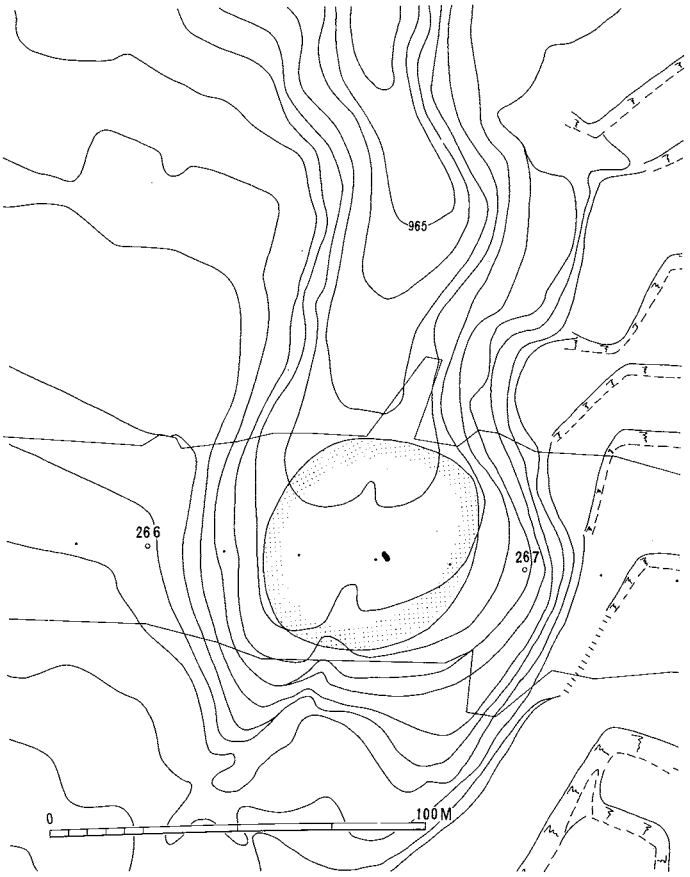


図130　御狩野遺跡の遺構と立地　　（1：2000）

また神奈川県上浜田遺跡〔山本1979〕においても、その性格について考察されているが、類例の増加をまちたい。特に本遺跡での13号住の床下土壙の性格は、今後分析の必要があろう。

註６　　中律川市平南遺跡では、「祭祀遺構」とされている。本例は住居址内の遺構であり、性格が明確にならない現在、この用語はあえてさけたが、同類の遺構であろう。

註７　　住居址内祭祀については、13号住の年代を八世紀後半の時期とした場合、前代にみられる祭祀遺構と同じ意義とは考えられない。

註８　八稜鏡については、桐原氏によると、県内出土の遺跡の性格は「古墳内出土（おそらく後世奉献）２、経塚関係（推定）２、墳墓関係３程度で、南佐久郡の勝見沢、南安雲郡御堂原、西筑摩郡（現木曽郡）の二木本遺跡は、（下水内郡栄村）乗落遺跡と同様山地遺跡である」という。本例も山地遺跡の分類に入るものであろう。鏡式も不明なほどの小破片となった鏡が二面、住居址内から検出された意義は検討の必要があろう。

註９　桐原氏は山地遺跡の特色の一つとして、「山地遺跡においては近接した時期竪穴の重複例が多いという点について、平地にはかようなケースは案外少ない。」とされている。本稿の見解とに大きな差がある。単に糸切り底を持つ土師器、灰釉の存在などを持って同一時期のように比較されるが、歴史的条件、背景の複雑な平安時代にあっては、時期区分を明確にしたうえでの検討が必要と思われる。遺跡規模の大小についても、集落の立地条件の差異が大きな問題であり、生活の基盤は平地の住居址とは基本的に同じであったと思われる。※※森嶋稔氏は、「高地性遺跡は、第５様式期（10世紀後半～12世紀）になると、にわかに登場してきて、とり分け第II、第III期を頂点として、その資料は散見できる。小規模遺跡が多く、おおむね２～３棟の住居に限定されるようなものである。小鍛冶址を伴うものもあり、種々興味ある問題を投げかけている」と指摘されたことがある。〔森嶋稔1978〕

註10　土器の面での細密な区分が必要であり、この窯址の差を持って比較できるほど単純ではないが、遺跡単位 ― 集落ごとの差と考えることもできる。住居址ごとの個別化と同様、遺跡ごとの自律化現象と考え、律令体制時の集落との差異を検討する必要がある。

※農民層の経済的発展ととらえる考え方が多い。〔檜崎1968〕

註11　本遺跡での住居址の検出は、北東側の斜面に限られた。沢に近いという立地条件の問題もあろうが、南側（判ノ木山東遺跡側）には検出されなかった。本調査に先だって、昭和51年度に行った予備調査では、判ノ木山東遺跡から本遺跡までの間、約140ｍをトレンチ調査をしたが、遺構の確認はなかったという〔今村、百瀬、伴、1979〕。住居址の存在がなかったとすれば、居住地域は限定され、重要である。ちなみに本調査では、STA 257からSTA 258＋20までは調査の対象となっていない。

※小鍛冶址の存在によって逆に集落の単位は求められるかも知れない。開拓 ― 農業を基盤とした集落を考えた場合、小鍛冶址の存在は不可欠なものであり、重要な位置を占めるであろう。現在知られているところでは、確実な小鍛冶址の存在は前述のとおり少ない。しかし羽口、鉄滓など出土例は多く、各遺跡単位に存在する可能性も考えられる。八ケ岳西南麓の遺跡にあっても今後の調査によって発見されると思われる。

註12　この間の事情を考える場合、茅野市御狩野遺跡の存在は示唆に富むものである〔松永、1978〕。頭殿沢遺跡に近接する長尾根状台地に立地する遺跡で、鉄鐸を出土した土壙墓として知られる。土壙墓のみの単独出土である。遺構は長径１ｍ90㎝、短径１ｍ10㎝、深さは最大で23㎝で、小判形のプランである。遺物は、灰釉陶器椀１、土師器高台付杯２、杯２、小形甕１、鉄鐸１、舌２の出土があった。時期は灰釉陶器が折戸53号窯期のものから、11世紀代とされている。八ケ岳西南麓に見られる各遺跡と同時代である。集落と墓地との関係、またはこの時代の葬法との関係については考古学的資料は少ない。集落間の構成を考える場合これら土壙墓の存在、性格も重要な視点であろう。桐原氏は、かつて、平安期の土壙墓の性格について論考された時〔桐原　1976〕、重要な指摘を行った。「10世紀後半から11世紀にかかる時期の土壙の特徴は、プランが長方、楕円、円形と多様であること、群集して墓地を形成していることにあり、11世紀後半頃の土壙の特徴としては隅丸方形プランに統一されていく傾向のある点、単独で発見されるケースの増えている点などあげられる。」これはこの時期の集落分布の変化にもあてはまる。

第２節　判ノ木山東遺跡―取り付け道路分　(SHHB)

１．位置

茅野市金沢横道下、５４４４－15、３１４７－１番地の山林中である。詳細な位置については「中央道報告書、茅野・原村―その２―、昭和51年度―」、判の木山東遺跡の項参照。

今回の発堀地点はＳＴＡ２６０＋00から、西へ102°、130ｍ入った茅野市判ノ木から、茅野市青柳へぬける一般道路の斜面にある。

２．調査の経過

道路用地内の調査は、昭和51年度に調査が終了し報告書も刊行されている。今回は中央道によって切断される一般道路の拡幅工事が行なわれ、昭和52年７月に、工事中、道路断面に焼土と土師器片、灰釉陶器片の発見があり、急きょ調査が決ったものである。調査は拡幅工事分のみに限定され、拡幅される断面をカットする方法で行なわれ、第13号住居址と若干の落ち込みの検出があった。

調査は、判ノ木山西遺跡と金山沢北遺跡の調査と平行しながら７月25日から８月24日まで行なった。

３．遺構と遺物

１）　遺構

①　第13号住居址（図131、図版54）

住居址の検出された地点は、段丘状の崖斜面に接しているわずかな平坦地に位置する。黒褐色土内に切りこまれた住居址である。前述した事情でプランの検出は半分にとどまった。床面はローム層に達する直前の茶褐色土、およびローム粒混入の茶褐色土層の上に貼床しているものと観察された。埋土は、炭化物、焼土粒の混入した黒褐色土である。プランは隅丸方形になるものと思われる。壁は垂直に近く立ちあがるが、壁の状態はあまり良好でない。西側壁に石組みのカマドが検出されたが、残存状態はあまり良くなく、その構造は明確でない。カマド周辺、カマド内には、焼土、炭化物が多量に入りこんだ状況であった。カマドは全長１ｍ20cm、最大幅80cmで、半分は住居址内に入って構築されている。柱穴と思われるピットはカマド周辺に２ヶ検出された。直径30cm、深さ30cmほどである。その他の構築、付属施設は検出されなかった。床面はロームを叩き占めた状態であるがあまりかたくない。床面直上には、全面的に焼土と炭化物がみられた。遺物の出土状態は、

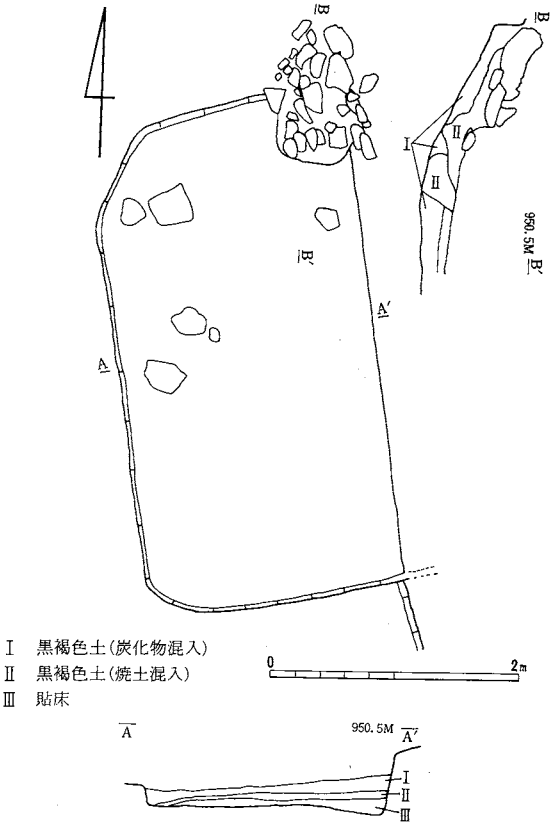


図131　第13号住居址実測図　（１：60）

ほとんどが床面直上と、カマド周辺であった。

検出された遺物は、土師器、黒色土器、灰釉陶器であるが、灰釉陶器は１点で、周辺の遺跡の内では少ない。土師器では、杯DIIが３点、杯CIIIが１点、黒色土器Cが５点、甕C１点、小形甕A３点、小形甕BIが１点、同BIIが１点である。灰釉は皿が１点であった。また遺構外ではあるが、須恵器の甕破片が検出されている（17）。　その他の遺物の検出はなかった。

２）　遺物（図132、図版64）

杯のなかで器形の推定できるものは、糸切り痕が明瞭に残る１点のみである。判ノ木山東遺跡では、杯Aaに分類されたものであるが、（３）は、口縁部には細いヘラミガキがされているのを特色としている。（４）も同様である。（２）は、口縁端部にのみ観察できる。また判ノ木東遺跡で杯Cとしたもの（１）であるが、口縁部にヘラミガキがある。以上４点のみであるが、口縁部のヘラミガキが特色としてあげられる。小形甕Aは底部のみで、外面がハケ調整されている点は、判ノ木山東遺跡の甕Aと同じであるが、内面は（13）でみるように、横方向に器形にそったカキ状のものがある。底部は木葉痕で、円の外側をナデで調整されているのを特色としている。黒色土器C、（８、９）も、底部のみであるが、糸切り痕を、中心部にのみ残し、外周はヘラ削りで調整するもの（８）と、外周をナデで調整するもの（９）とに分かれる。底部の直径が10cmをこえ、鉢の分類に入るとも考えられる。近接する遺跡の内では灰釉陶器の比が小さいことも特色となろう。

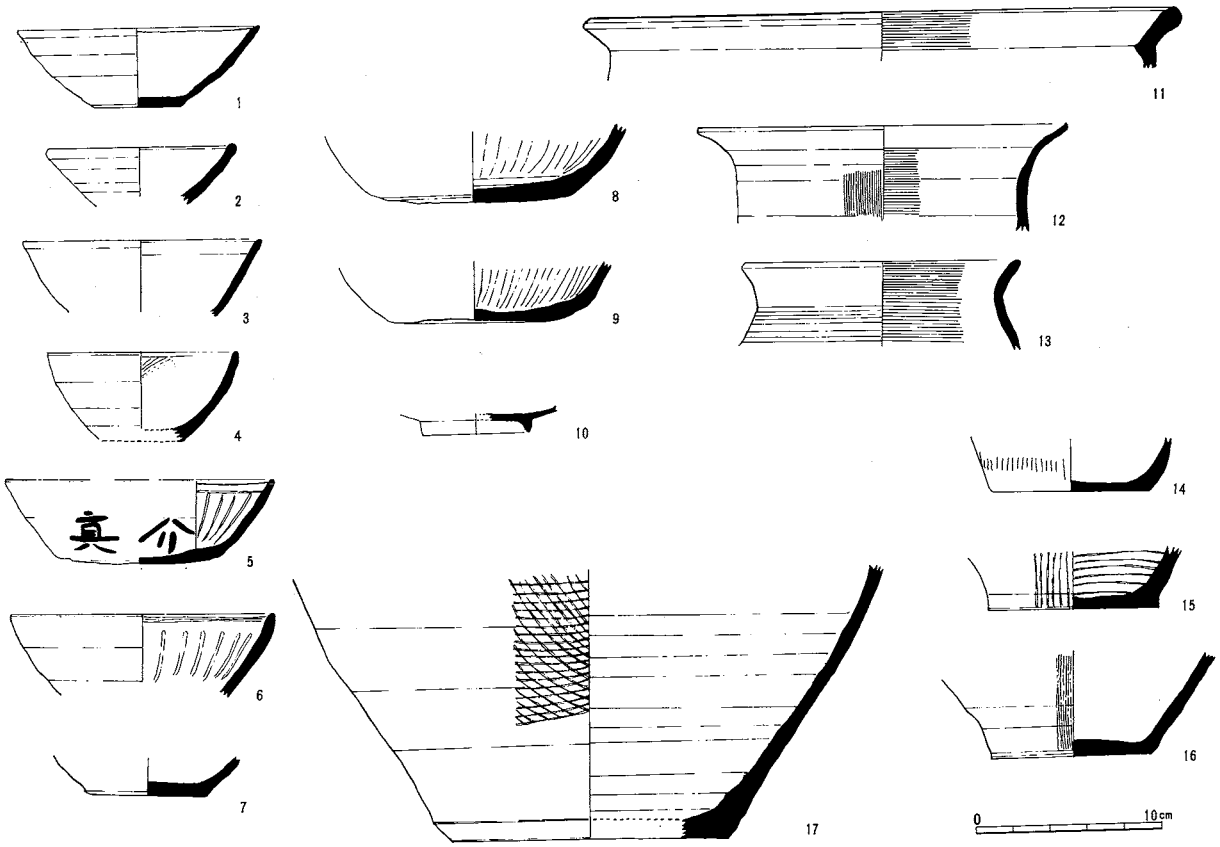


図132　第13号住居址出土平安時代土器実測図　（１：４）

第３節　金山沢北遺跡　（ＳＫＫＣ）

１　位置（図１、２、図版１）

茅野市大字金沢字金山沢3124のイ番地に位置する。

遺跡は、判ノ木沢川と金山沢川との間の舌状台地の先端、緩傾斜地に位置し、中央に凹地があるなど、地形の起伏は大きい。遺跡のすぐ下を金山沢川が蛇行しながら流れ、その水量は豊富である。遺跡中央の部分と、金山沢川との比高は25ｍほどである。第１章、第２節で先述したように、調査に入った時には、工事が進行し、台地先端は削られ、その地形は大きく変化していた。遺構のほとんどは西側の傾斜面にある。

標高は945ｍ～947ｍである。本遺跡と近接する判ノ木山東遺跡は谷をはさんで立地するが、金山沢北遺跡が西側傾斜面であるのに対し、判ノ木山東遺跡は、沢をひとつはさんで反対側の傾斜面に立地する。判ノ木山東遺跡も遺構の検出は西側斜面のみであり、また遺跡南側は金山沢の沢をはさみ、判ノ木川に形成された扇状地を間にして、御狩野遺跡、頭殿沢遺跡と続いていく。御狩野遺跡は、平安時代後半の土壙墓の検出があり、頭殿沢遺跡は平安時代後半の住居址、縄文時代早期、中期の住居址、土壙群の存在が知られている。

２　遺跡の範囲と調査区域

遺跡の範囲は、台地の先端全域と思われるが、縄文時代早期と、平安時代の遺構とでは多少、遺構の立地条件に違いが見られる。縄文時代早期の土器は、舌状台地の先端部に集中している。台地北側傾斜面に遺物の分布はほとんど認められない。平安時代の住居址の広がりは北西の斜面に続くものと思われる。これは今回の判ノ木山東遺跡での第13号住居址の検出でも予想されることである。

調査の範囲は、工事用道路設置のため、舌状台地先端を削平されたために、山側の部分のみ調査地域になった。また北側も同様に削られたため、ＳＴＡ 260＋80からＳＴＡ 261＋80までを調査対象とした。

３　層序

基本的な層序は、Ⅰ黒色土、Ⅱ黒褐色土、Ⅲ茶褐色土、Ⅳローム層である。部分的に、各層位の堆積の状態は異なるが、南北方向、東西方向共に同様である。平安時代の遺構検出面は茶褐色土層を切りこみ、ローム層に達するもので、遺構内はほとんど黒褐色土層、黒色土層が入りこむ。平安時代の土器の大部分は、第Ⅱ層の黒褐色土層から出土している早期の遺構は、ローム層中に切りこんでいるものがほとんどで、埋土は、下層が茶褐色土、上層が黒褐色土の層序を示している。遺跡の西側傾斜面は、特に縄文時代早期の遺物が集中して出土したが、茶褐色土層に集中していた。この包含層の下は、礫混りのロームであった。また表土（黒色土層）と黒褐色土層中には、自然流の流れ出しと思われる帯状の角礫群が見られた。

4　発掘調査の概要

検出された遺構は、縄文時代早期に属すると思われる、集石が3基、土壙10基、溝状遺構2と、縄文時代早期の土器、石器の包含層であった。一方、平安時代後半と思われる竪穴住居址は3基である。このうち、1号住と2号住は、通常に検出される竪穴式の住居址であるが、3号住は異常に小さい。この問題は後にふれるものとする。他に、縄文時代後期の土器片が出土した。

5　縄文時代早期の土器

1）土器の出土状態（図版55）

大きくA地区とB地区に分かれる。この差は土器の分類とも合致する。A地区から検出されたものは、押型文系に属する土器群と、縄文系のもの、層位的には、第III層とした茶褐色土からの出土である。B地区からは、絡条体圧痕文系の土器群と、撚糸文系の土器、繊維を多量に含む土器群などが出土している他に、東海系の土器、条痕文系の土器などで、層位的には、第I層黒色土、第II層黒褐色土からの出土で、押型文系土器群とは区分されるが、絡条体圧痕文系土器（第III群土器）と東海系の土器（第7群土器）等の間は層位関係では区分されなかった。

2）縄文時代早期の土器の分類

本遺跡出土の縄文時代早期の土器は、約246点を分類すると9分類できる。

第1類　樋沢式タイプの押型文系の土器。楕円押型文系の土器が1a、山形押型文系の土器1b、沢式タイプのもの1Cに細分される。

第2類　細久保式タイプの押型文系土器。楕円押型文系の土器2a、山形押型文系の土器2b、楕円文と山形文の組み合わせの土器2Cに細分される。

第3類　絡条体圧痕文系の土器

第4類　繊維を多量に含む竹管状刺突文の土器

第5類　縄文を主体とする土器

第6類　撚糸文を主体とする土器

第7類　東海系の土器

第8類　条痕文系の土器

第9類　無文の土器

これらの土器の一覧は表12の通りである。各分類の特色と観察は次のようにまとまる。第1類の土器は、いわゆる樋沢式の分類に入るものを一括したが、次の第2類との間には、出土地点、層位においても特別の差異は認められなかった。帯状の施文を持つもの、やや薄手の土器で、厚さは4㎜～6㎜のものである。胎土は細砂粒を混入しているが、繊維の混入はない。小量の不透明な白色の石、雲母の混入がある。1Cとした沢式タイプの土器は小破片で3点出土している（図136-15～17）。器形の判別されるのは、図134－1である。1bに分類されるものである。器形はやや外反気味であるが、ほとんど直口するものである。口縁部から胴部にかけて残存するのみで底部はない。直径約15.5㎝、細砂粒、雲母の混入がある。口縁部には小円孔がある。内面は擦痕状である。胎土、焼成ともに良好で　施文は、

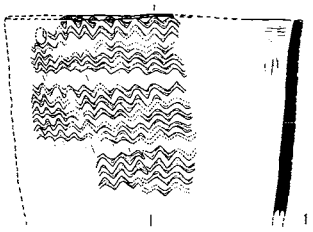


図134 縄文時代早期土器
第1類a（1：4）

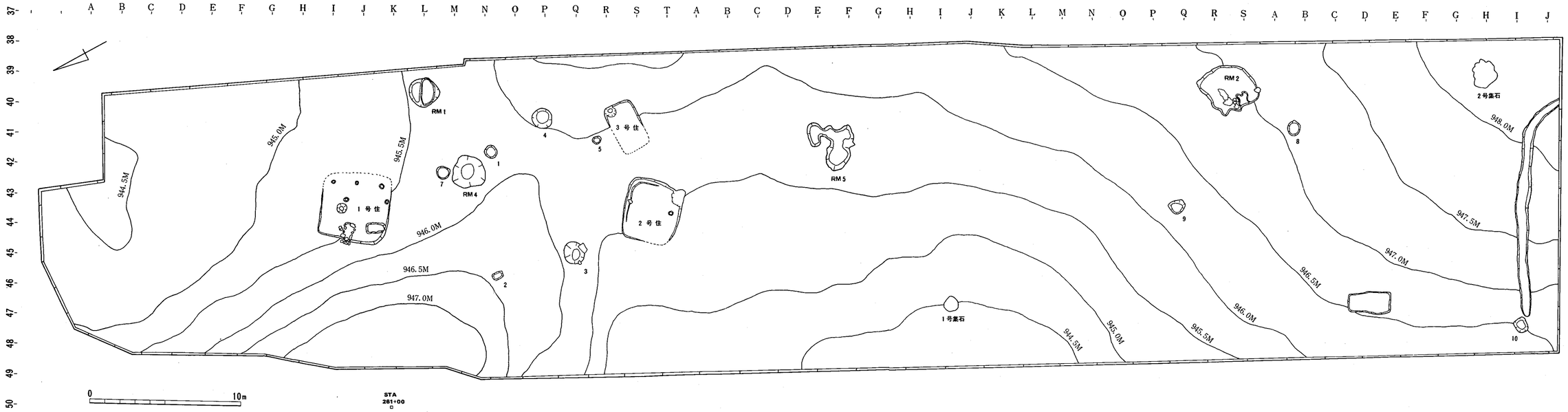


図133　金山沢遺跡遺構全体図　（1：200）

直径6.5㎜～７㎜ほどの軸で、原体の長さは３㎝ほどである。回転方向は左から右と思われる。色調は口縁部は黒褐色、下部にいくに従って茶褐色となる。

第２類は、いわゆる細久保式とされてきたものである。楕円文は粒の大きなもの、横位の施文体を中心に、楕円文と山形文の組み合わせ、山形文も間隔の大きなもの、全体的に厚手のものをこの類に入れた。器形の判別するものは、やや外反気味の傾向を示している。胎土は砂粒の混入が多く、白色不透明の砂粒、または雲母の入っているのもある。器厚は７㎜～９㎜のものである。繊維の混入は、微量に含むものもある。

第３類は、絡条体圧痕文系の土器を一括した。細片を含めると18点ある。出土地点は、第１類、第２類とは異なりＢ地区に限られる。層位的にも第２層を中心としている。全体的には繊維を多量に含むこと、厚手であること、細砂粒、白色不透明の石を多量に含むことなどがあげられる。これらの土器を観察すると、さらに６分類される。

ⓐ　口縁部の器表面に幅２㎝、厚さ３㎜ほどの粘土ひもによる隆帯をつけ、その上に絡条体圧痕文を羽状につけ、裏面は、縦方向の絡条体圧痕文をつけるものである。56、57がこの分類に入る。絡条体の原体は、56はℓで、57はｒである。

ⓑ　器表面、裏面ともに同じ絡条体圧痕文をつけるもので、61、63である。原体はℓである。

ⓒ　器表面には絡条体圧痕文をつけ、裏面はナデと思われるもので、凸凹がめだち、繊維、砂礫等の含有物があらわれているもの、62があたる。原体はℓである。

ⓓ　器表面に横位の絡条体圧痕文と、地文としての絡条体条痕文をつけるもの79である。原体はＲである。

ⓔ　器表面には、横位の絡条体圧痕文と、地文風に絡条体を回転させてつけるもので、60である。原体は、ｒである。

ⓕ　器表面には、絡条体条痕文を地文風につけ、その上に絡条体圧痕文をつけるもの、80があたる。

これらのうち、口縁端部にも絡条体圧痕文をつけるものは、61、66である。裏面に条痕文が観察できるものは、63のみで、他は、繊維痕、砂粒等によって観察を困難にしている。

第４類は、繊維を多量に含んだ特色ある土器で、１個体になる。64、65は接合関係になるもので、器形はやや外反するものである。口縁部には1.2㎝ほどの幅の粘土ひもを貼り付け、口縁端部には絡条体圧痕文をつけている。口縁部から胴部にかけては、竹管状工具による横位の連続した押し引き状の刺突文をつけている。刺突には浅く刺突され、半截竹管状になるものもある。この竹管状の工具の直径は４㎜である。この粘土ひもは、刺突文が付けられた後貼付けられたものと思われる。　65は、口縁部の剝落したと思われる痕跡が残っている。器厚は、粘土ひもの貼り付けられた最高部で1.2㎝、それ以外のところでは９㎜内外である。

第５類は、縄文を主体とする土器である。いずれも薄手である。67は、ＲＬの横、68はＬＲで、第Ⅲ層出土である。　69は第Ⅱ層出土である。　67は、雲母、黒曜石、白色不透明の細粒を含む。口唇部は、粘土を貼り付けた状態である。胎土は、69と同じで、焼成は良好である。器厚は、７㎜である。

第６類は、撚糸文の土器である。全体的にやや厚手で、繊維の混入が多量であるのを特色とする71～73、76と、やや薄手であるもの、74、81に分けられる。前者は第Ⅱ層、第Ⅰ層から出土し、後者は第Ⅲ層からの出土である。71は、器厚が１㎝で、内面は繊維痕が残る。撚糸の回転が縦位、または横方向となるものもある。81は、横位の撚糸文で、原体は不明である。器厚は６㎜である。胎土は雲母、黒曜石、砂粒、少量の繊維を混入している。74も雲母、白色不透明の細礫が混入し、器厚は８㎜である。

第７類は、東海系の土器である。77は粕畑式に、78は上の山式に比定されると思われる。78は、同

表12　金山沢北遺跡出土、縄文時代早期土器一覧表

図版ナンバー	出土地点	層位	位　置	色　調	分類	図版ナンバー	出土地点	層位	位　置	色　調	分類
136 - 1	AA 49	II	口縁部	褐　色	1 a	136 - 42	AE 48	III	胴　部	黒褐色	2 b
〃 - 2	AE 46	III	口縁部	黄褐色	1 a	〃 - 43	AD 47	III	胴　部	黒褐色	2 b
〃 - 3	AD 47	III	口縁部	褐　色	1 a	〃 - 44	AB 47	III	胴　部	褐　色	2 b
〃 - 4	AD 46	III	胴　部	褐　色	1 a	〃 - 45	AC 46	III	胴　部	褐　色	2 b
〃 - 5	AJ 46	III	胴　部	赤褐色	1 a	〃 - 46	AC 45	III	胴　部	褐　色	2 c
〃 - 6	AA 42	III	胴　部	褐　色	1 a	〃 - 47	AE 48	III	胴　部	褐　色	2 c
〃 - 7	AK 42	III	胴　部	褐　色	1 a	〃 - 48	AF 48	III	胴　部	褐　色	2 c
〃 - 8	1号住	II	胴　部	赤褐色	1 a	〃 - 49	AF 41	III	胴　部	褐　色	2 c
〃 - 9	AJ 50	III	胴　部	褐　色	1 a	〃 - 50	AG 47	III	胴　部	褐　色	2 c
〃 - 10	AD 45	III	胴　部	褐　色	1 a	〃 - 51	AA 46	III	胴　部	褐　色	2 c
〃 - 11	AB 48	III	胴　部	褐　色	1 b	〃 - 52	AJ 48	III	胴　部	褐　色	2 c
〃 - 12	AE 45	III	胴　部	褐　色	1 b	〃 - 53	AD 47	III		褐　色	2 c
〃 - 13	AD 45	III	口縁部	白褐色	1 b	〃 - 54	AC 46	III	胴　部	褐　色	2 c
〃 - 14	AD 46	III	胴　部	黒褐色	1 b	〃 - 55	AF 46	III	胴　部	褐　色	2 c
〃 - 15	AE 46	III	胴　部	黄褐色	1 b	137 - 56	BD 45	I	口縁部	褐　色	3
〃 - 16	BA 42	III	口縁部	黒褐色	1 b	〃 - 57	BD 44	I	口縁部	黒褐色	3
〃 - 17	AB 45	II	胴　部	褐　色	1 b	〃 - 58	BD 44	II	胴　部	黒褐色	3
〃 - 18	AJ 49	III	胴　部	黄褐色	1 b	〃 - 59	BH 43	I	口縁部	黒褐色	3
〃 - 19	AH 46	III	胴　部	褐　色	1 b	〃 - 60	AB 47	I	口縁部	黒褐色	3
〃 - 20	AC 47	III	胴　部	褐　色	1 b	〃 - 61	Z	II	口縁部	黒褐色	3
〃 - 21	AC 48	III	胴　部	褐　色	1 b	〃 - 62	BC 43	II	胴　部	黒褐色	3
〃 - 22	AC 45	II	胴　部	褐　色	1 b	〃 - 63	BH 49	II	胴　部	黒褐色	3
〃 - 23	AH 44	III	口縁部	黒褐色	2 a	〃 - 64	BH 47	II	口縁部	黒褐色	4
〃 - 24	AA 46	III	口縁部	褐　色	2 a	〃 - 65	BH 47	II	口縁部	黒褐色	4
〃 - 25	AF 48	III	口縁部	黒褐色	2 a	〃 - 66	BH 45	II	口縁部	黒褐色	3
〃 - 26	AG 47	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 67	AD 46	III	口縁部	黒褐色	5
〃 - 27	AE 47	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 68	BH 48	III	口縁部	黒褐色	5
〃 - 28	AC 45	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 69	AH 45	II	口縁部	黒褐色	5
〃 - 29	AG 47	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 70	cf 41	II	口縁部	褐　色	6
〃 - 30	AH 43	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 71	BJ 47	II	胴　部	褐　色	6
〃 - 31	AD 47	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 72	BD 44	II	胴　部	褐　色	6
〃 - 32	AF 48	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 73	BD 44	I	胴　部	褐　色	6
〃 - 33	Z	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 74	AF 48	III	胴　部	褐　色	6
〃 - 34	AN 47	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 75	AL 45	III	胴　部	褐　色	6
〃 - 35	AC 45	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 76	BB 34	I	胴　部	褐　色	6
〃 - 36	AF 48	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 77	BD 44	I	口縁部	赤褐色	7
〃 - 37	AI 46	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 78	BJ 49	I	口縁部	褐　色	7
〃 - 38	AH 48	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 79	Z		胴　部	黒褐色	3
〃 - 39	AF 45	III	胴　部	褐　色	2 a	〃 - 80	Z		胴　部	明褐色	3
〃 - 40	AH 46	I	胴　部	黒褐色	2 a	〃 - 81	AD -48	III	胴　部	黒褐色	6
〃 - 41	AJ 46	III	胴　部	黒褐色	2 b	〃 - 82	AE -47	III	胴　部	明褐色	5

一個体と思われる胴部の破片が3点ある。いずれも第Ⅰ層の黒色土内の出土である。

第8類は、条痕文系の土器である。多量の繊維を含むもので、裏面にかすかに条痕がみられる。厚手で1cm～1.3cmほどの器厚である。細砂粒を含む。小破片のみで、第Ⅰ層出土である。

第9類は、無文土器の1群である。第8類と同じ色調、胎土で、同一個体の可能性がある。小破片のみである。

3)　金山沢北遺跡出土の縄文時代早期の土器

本遺跡出土の縄文時代早期の土器の、層位的な関係、土器の分類、観察は前述した通りである。第1類、第2類土器に分類した押型文系の土器と、これに伴うと思われる第5類、第6類の一部と、第3類～第9類までの土器群とは、層位的には区分される。しかし第3類の絡条体圧痕文土器、第4類の竹管文による刺突された（押し引き状の）土器と、第7類、第8類の東海系の土器、条痕文系の土器の間では区分されない。

表13　金山沢北遺跡出土縄文式土器の分類

分　類	特　　色	破片数
1-a	樋沢式タイプの楕円押型文	10
1-b	樋沢式タイプの山形押型文	15
2-a	細久保式タイプの楕円押型文	44
2-b	細久保式タイプの楕円、山形文の組み合わせ	4
2-c	細久保式タイプの山形押型文	72
2-d		1
3	絡条体圧痕文系の土器	18
4	竹管状の刺突文（多量の繊維を含む）	3
5	縄　文	8
6	撚糸文	23
7	東海系	2
8	条痕文系	16
9	無　文	23
		計246

いわゆる絡条体圧痕文の土器は、通常、縄文時代早期後半の関東地方の編年でいう子母口式土器の特徴とされてきたが、近年、その編年的位置には多くの問題が提示されているところであり、〈谷沢1976、1977、瀬川1976、鈴木1976、笹沢1975他〉また本遺跡の資料的状況では、編年的位置を述べるにはあまりにも少ない。県内から出土した絡条体圧痕文土器とこれに伴出する土器との関係を見ると、例えば有明山社大門北遺跡〈藤沢、樋口1969〉、男女倉遺跡C地点〈森嶋、笹沢1975〉　御座岩遺跡〈宮坂1966〉棚畑遺跡〈宮坂1970〉など本遺跡例と類似する構成を示している。いずれも縄文時代早期後半から末葉の位置に比定され、樋口昇一、笹沢浩氏によって示された編年的位置はほぼ妥当といえよう。

また比較的編年体系の確立している東海地方の土器、粕畑式、上の山式との層位的関係も、同層位かまたは、下位と考えられるところからも、およその編年的位置が与えられよう。

第4類土器の類例は、県内では管見にはふれなかった。今後資料の増加をまって考えたいが、隆帯の状態、繊維の混入、竹管文の押し引き状の刺突などから第3類と同じ時期と考えられる。今後の検討課題である。

6　石器

1）小形石器（図138、図版62）

金山沢北遺跡で出土した小形石器は、石鏃5点、石錐1点、石匙2点、使用痕のある黒曜石の剥片類21点である。そのほかに黒曜石の剥片67点、同じく石核・残核類39点、黒曜石の原石が2点出土している。石器の形態分類、計測基準は判の木山西遺跡と同様である。石鏃について、1はチャート製で他の4点は黒曜石製である。1、2、3、は抉りが浅く逆しの円いタイプで両面からていねいな調整を施してある。4、5、は抉りの深い押型文土器共伴石器特有のいわゆる鍬形鏃と言えよう。石錐は1点出土した(6)。やや厚めの剥片を素材とし、2つの稜線に荒い調整を施して錐部を作出しているが、つまみ部の調整は余りみられず素材の形状を利用しつまみ部としている。錐部の先端および稜線に磨耗痕が認められる（図版62)。石匙は2点出土した。7、の横型タイプ1点と、8、の斜型タイプ1点である。8には使用痕跡が顕著に観察できた。9にその観察できた使用痕の範囲を図示し、図版62にその拡大写真をのせた。黒曜石

製の石器は使用痕跡が付きやすいが長時間使用するとつや消し状になる。この石匙も同様であるが顕微鏡で観察すると、刃部の縁辺に対して平行方向の線状痕が刃部の両面にみられる。さらに石匙の肩の部分の剥離面には細かな不定方向の線状痕がわずかに認められる。しかし一対の抉入部（つまみ部）と刃部の先端部分には痕跡は何ら認められない。刃部に観察できる線状痕は剥離面の稜の両側にみられる。以上の事からこの石匙は刃部の縁辺方向に反復運動し、鋸びきのような作用により対象物を分割する働きをしたと思われる。このほかに調整や刃こぼれなどの使用痕を残す剥片が21点出土している。13は上下両端に打撃によるつぶれ痕と砕屑が剥落した痕跡があり、ピエス・エスキーユと思われるが両側縁に刃こぼれ痕を残している。このほかの使用痕のある剥片はいずれも縁辺に刃こぼれ痕、あるいは刃つぶれ痕を残すものである。

2）金山沢北遺跡出土の大形石器　（図139、図版63）

打製石斧は2点のみの出土で、25は分銅型で斜刃、26は片主面がそっくり欠落しているため全体の形は不明だが、円刃であろうか。いずれも刃部が少し磨耗している。横刃型石器は7点出土した。27は砂岩の原石に刃部加工しただけのもの、28は背と刃部を調整したものである。29は緑色火山岩の自然礫の一部を剥ぎとっただけのものであるが、刃部は特に縁が研磨されている。30は背つぶしが施され、刃部は片面加工である。32は小形の円礫を半割して刃部加工したものであるが、刃部の大半は破損している。

31は唯一の礫器（礫石器）で、刃部加工のみ見られる。特殊磨石は13点出土し、機能磨面（B）と調整磨面（A）を併せ持つものが11点（33～38）、さらにそこに敲打痕（D）も残るものが1点（50）、機能磨面は無いが全体の形状などから特殊磨石と思われるもの1点（52）がある。52は調整磨面・凹み・敲打痕が残っている。

磨痕・凹み・敲打痕を持つ石は、判の木山西遺跡と同様、一括して痕跡による分類を行った。60点が該当する。磨痕（A）のみが33点（39～42）、凹み（C）のみが4点（43、46）、敲打痕（D）のみが1点、磨痕＋凹みが20点（44、45、47、48）、凹み＋敲打痕が1点（49）、磨痕＋凹み＋敲打痕が1点である。磨痕のみ持つ石や磨痕＋凹みを持つ石が圧倒的に多く、判の木山西遺跡と同傾向である。43は安山岩製の凹みを持つ石であるが、全面に細かい剥離が見られる。敲打調整されたものと思われる。49は緑色火山岩製で両面に浅い凹みを持つが、敲打痕は片側辺に見られる。

51は扁平な石の片面に敲打痕が広がっていたので台石とした。53は石皿で、大きく破損しているようであるが、耳部は作られていないようである。

7　土壙群と集石

1）土壙

10基が検出されたが、特に集中する状態ではない。ほとんどが円形であるが土壙2は方形である。埋土の状態で分類すると、黒褐色土のみの埋土のものAタイプ、比較的浅いものである。Bタイプは、第1層黒褐色土、第II層茶褐色土の比較的大きく深いものに分類される。土壙内からの遺物の検出は、土壙8内の栗状炭化物のみである。Aタイプは平安時代、Bタイプは縄文時代早期と思われる。

集石1は、小礫混りの黒色土を掘り込んで、板石状の角礫と、円礫で構築されたもので、角礫は17個、内礫は36個を数えた。直径90㎝大の土壙を掘り、角礫で円形状に囲み、こぶし大の円礫をその中に組みこんだものである。検出面からみると、縄文時代早期後半と思われる。

集石２は、いわゆる集石炉とよばれるもので、炭粉混りの茶褐色土に掘り込んだものである。構築は、ローム面に直径1.5ｍほど、深さ0.7ｍほどの円形の土壙を掘り、その底面に、５枚の板石状の石で炉を組み、こぶし大の角礫を385個、炭混入の黒土の上にのせたものである。

黒土内は、炭化材、焼土が多量に混入していた。土壙壁面は焼成された痕跡がある。遺物は10点ほどの土器片が集石内から検出されたが細片のみである。

計測	南北(m)	東西(m)	深さ(m)	タイプ
土壙１	0.8	0.8	0.18	A
〃 2	1.1	0.85	0.45	A
〃 3	1.5	1.5	0.75	B
〃 4	1.35	1.40	0.80	B
〃 7	0.85	0.80	0.20	A
〃 8	0.75	0.80	0.30	B
〃 9	0.95	1.1	0.30	B
〃 10	1.05	0.9	9.60	B
集石１	0.85	0.90	0.2	
〃 2	1.5	1.4	9.7	

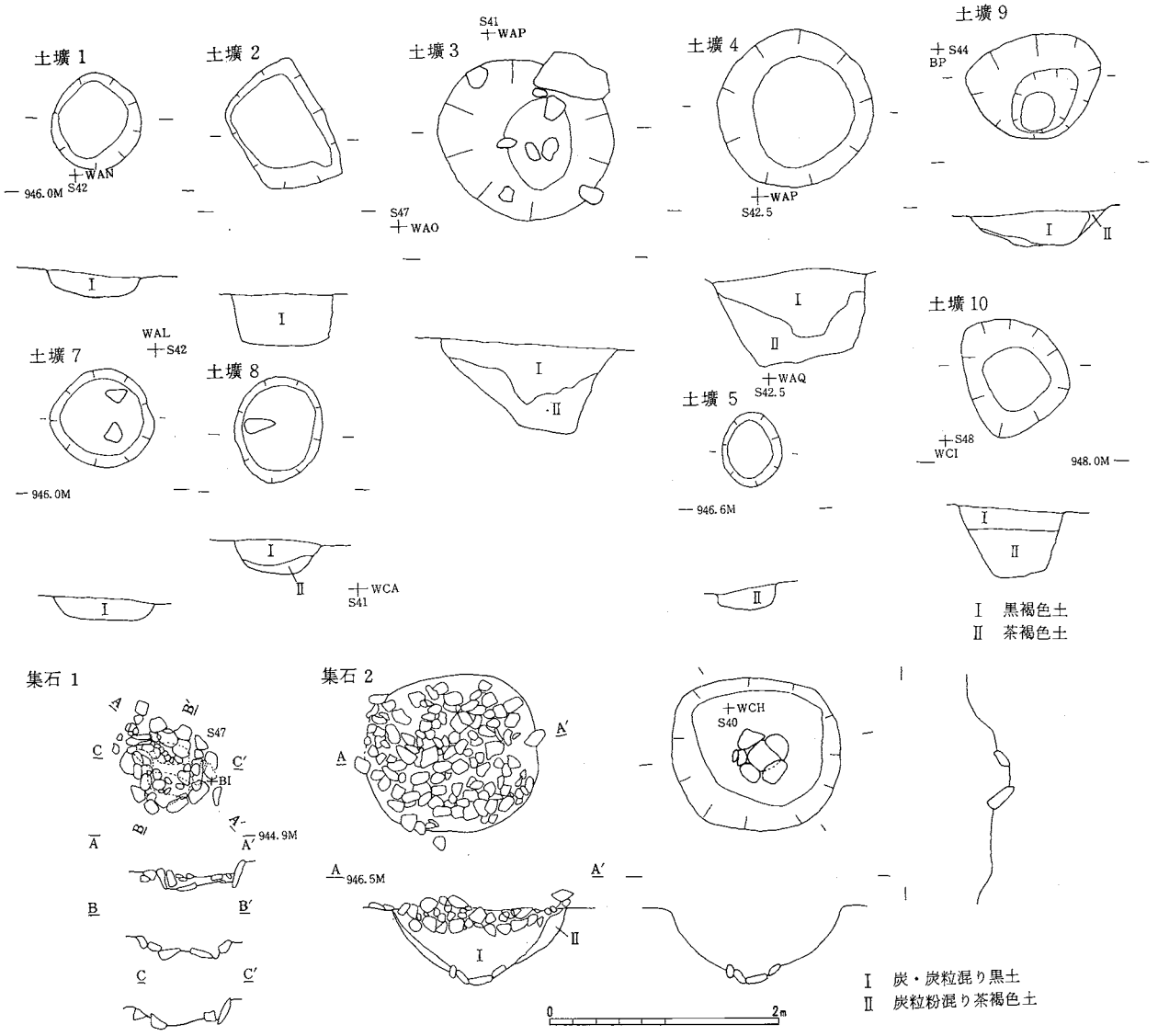


図135　土壙、集石実測図（１：60）

８　縄文時代後期の土器（図140－１・２、図140－83～92）

縄文時代後期の土器は25点程出土したが、すべて遺構外からの出土であるため、一括して扱う。いずれも胎土は黄色っぽい色調で混和材は必ずしも一定でないが、ローリングを受けた砂粒、長石らしい小粒子、

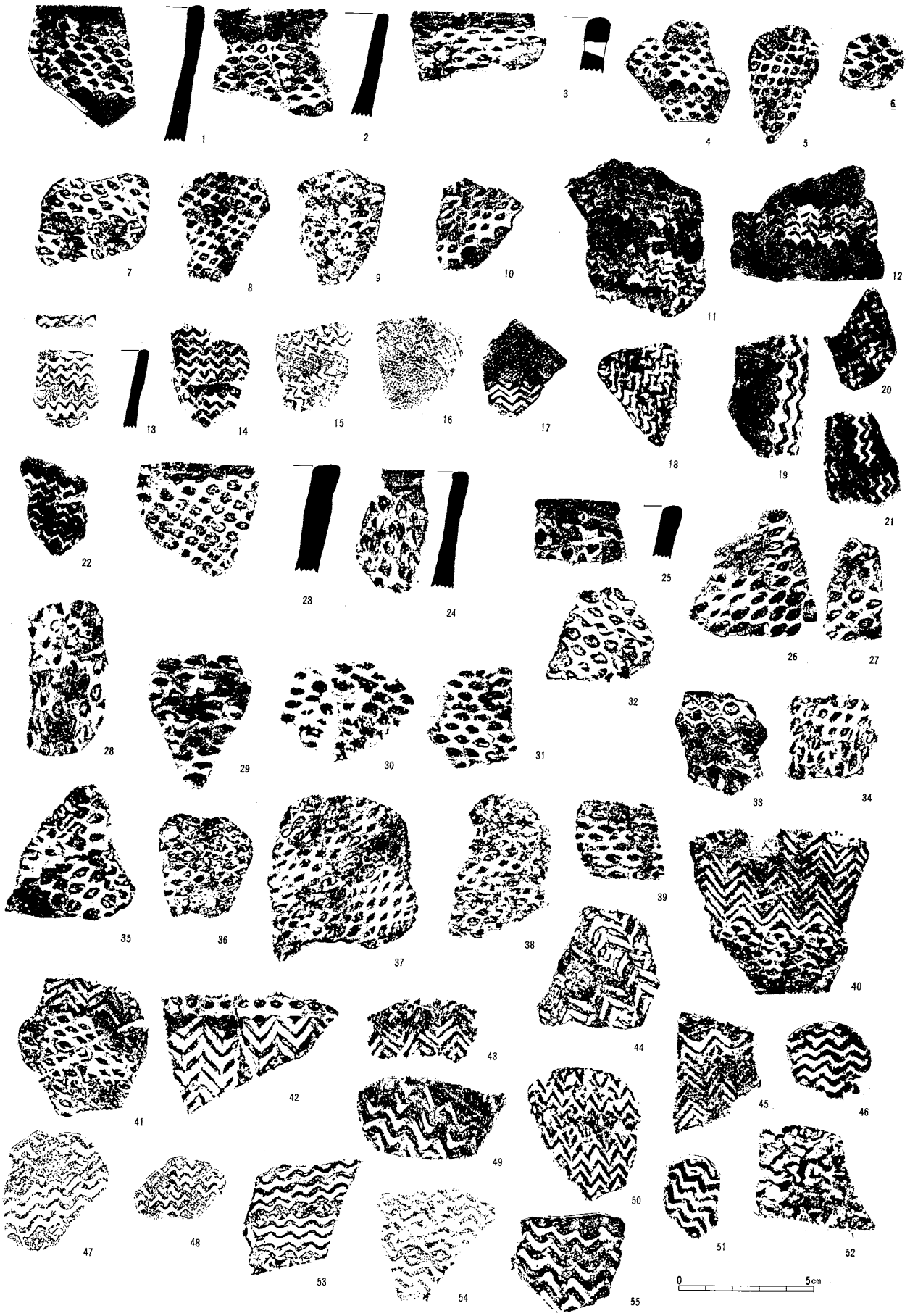


図136　縄文時代早期土器拓影図 (1) 第１類・第２類土器　（１：２）

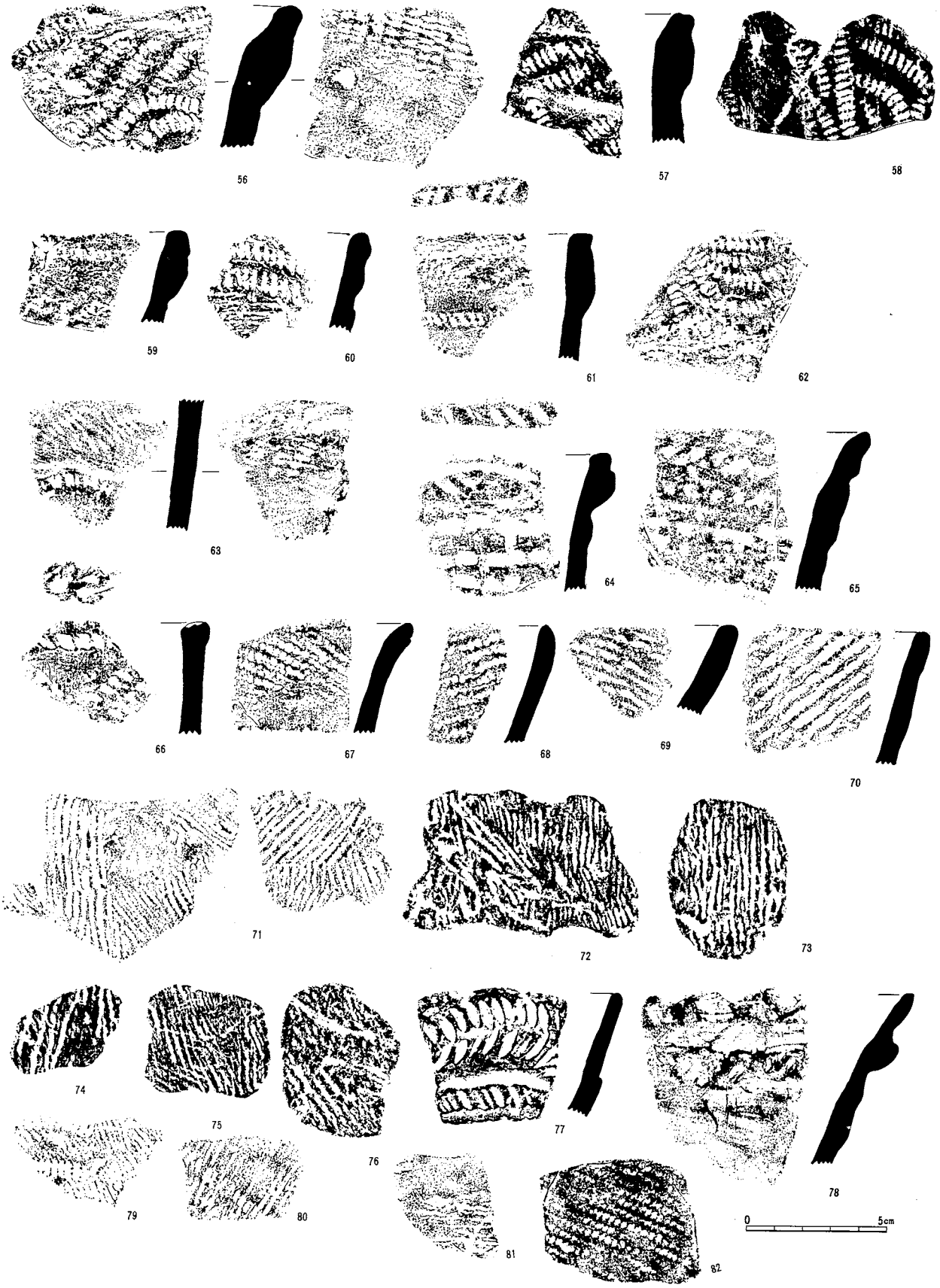


図137　縄文時代早期土器拓影図 (2)　第３．４．５．６．７類土器　（１：２）

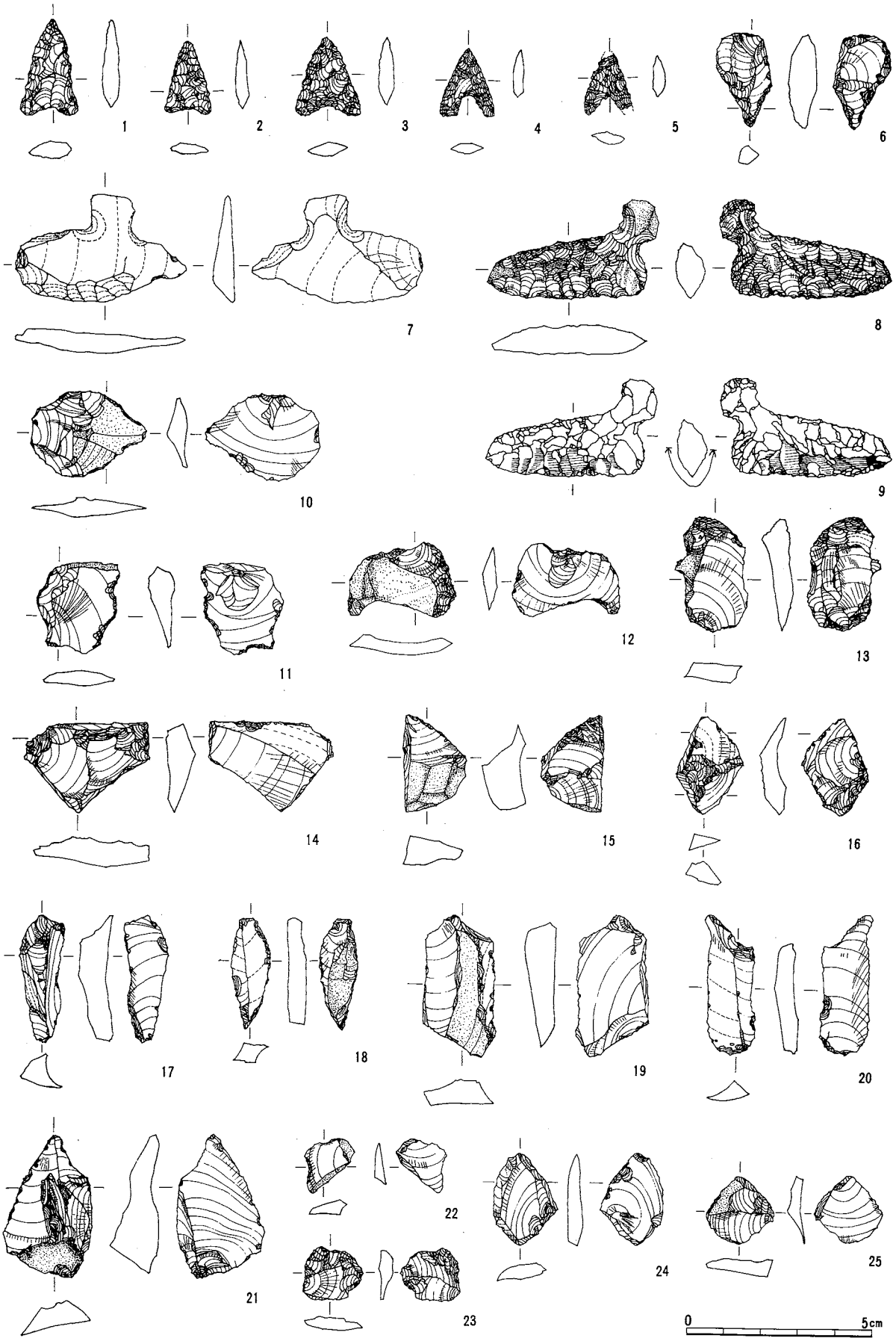


図138　縄文時代小形石器実測図　　（1：1.5）

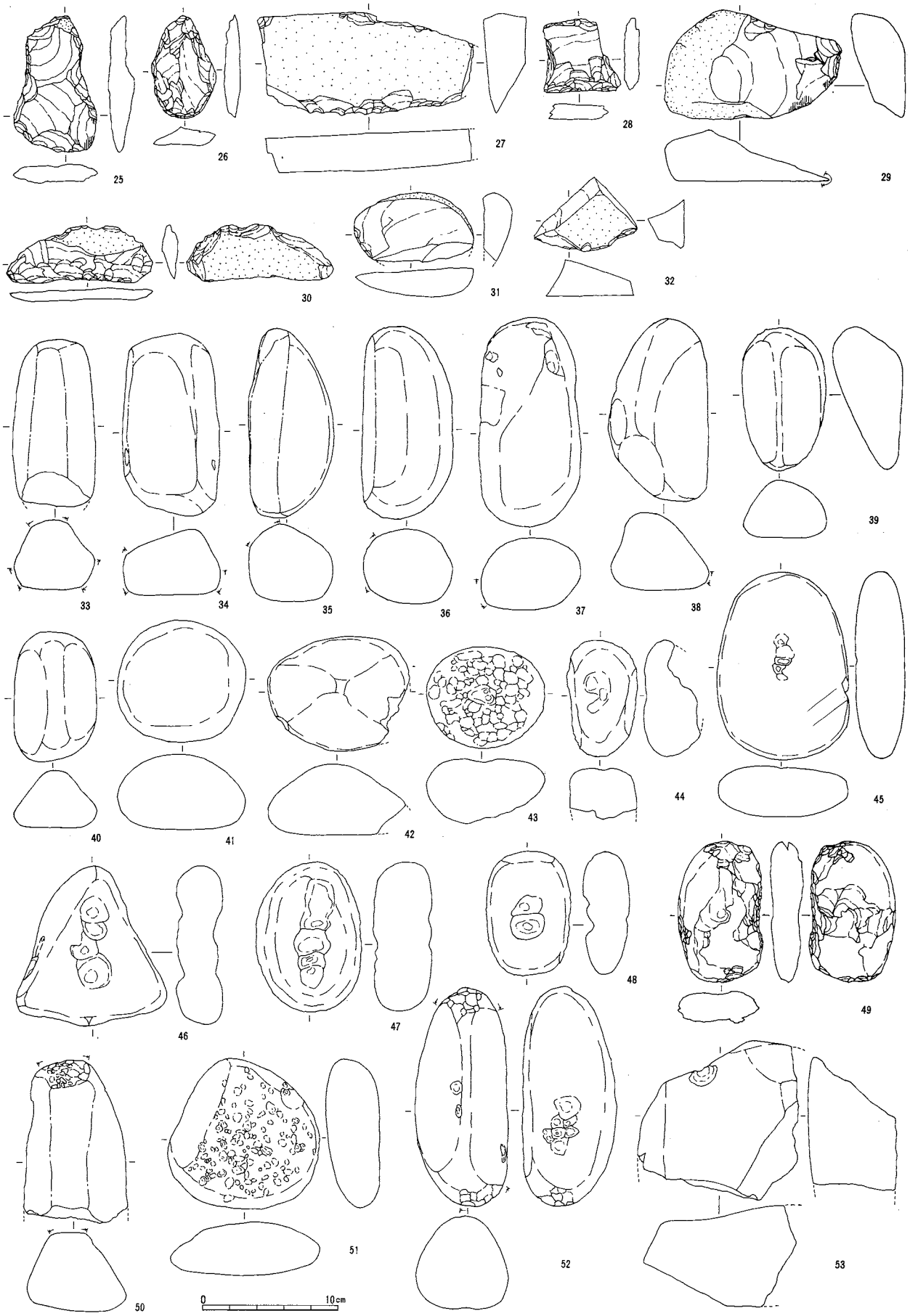


図139　縄文時代大形石器実測図　（１：４）

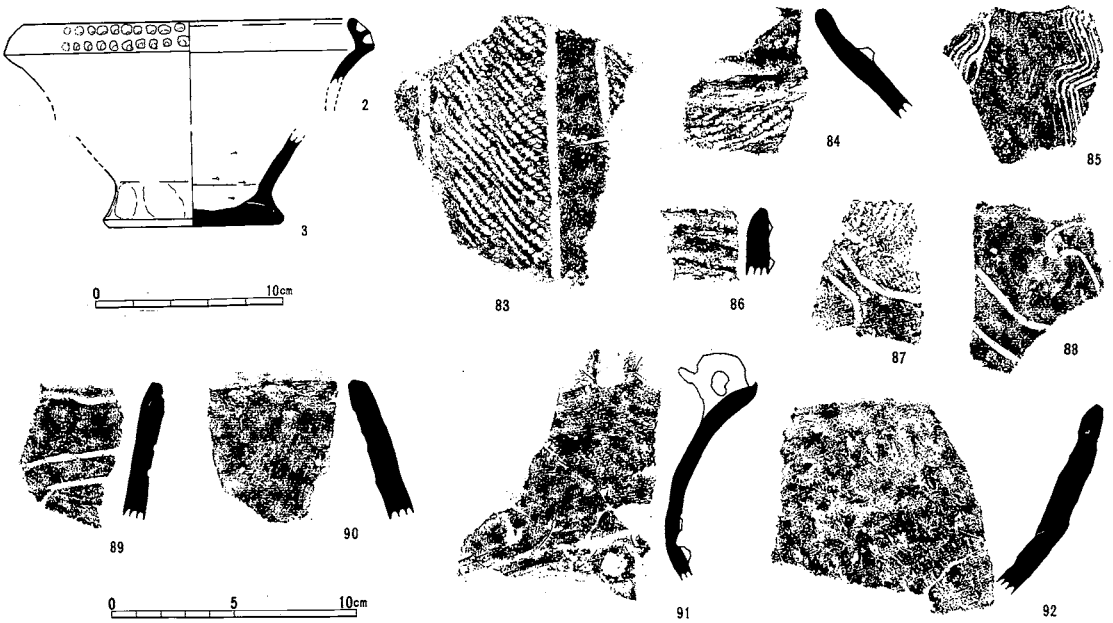


図140　縄文時代後期の土器実測図（1：4）　　図141　縄文時代後期土器拓影図（1：3）

赤色の鮮やかな褐鉄鉱などが目立つ。器表は内外面にケズリ痕を顕著に残す例が目立つが、ナデが丁寧に行なわれるものやミガキが加えられるものもある。おおむね5類に分類される。

第1類（図141—83～85）

後期初頭に位置づけられる類で3点ある。深鉢のみで、器形は胴部が外へ張るものがあるが詳細はわからない。文様から縄文をもつものともたないものに分けられる。前者にはヘラ状工具を用いて「H」状モチーフの沈線を描く例があり、後者には櫛状工具で曲線モチーフを描く例がある。尚、84は器厚が10～12㎜と厚く、裏面は横位にナデられるだけでケズリ痕がみられない。又縄文は沈線の後から施文される。

第2類（図141—87・88）

後期前葉、堀之内I式に対比できる類で3点ある。深鉢のみで器形は不明である。文様は縄文を持つものともたないものとがあり、両者ともヘラ状工具によって近似したモチーフの曲線が描かれる。

第3類（図141—89・91）

後期前葉、堀之内II式に対比できる類で6点ある。深鉢のみで器形は口縁部が外反する例があるほかは不明である。いずれも縄文はもたず、ヘラ状工具によって直線的なモチーフが描かれる。尚注口土器の把手が1点あるが、第2類又は第3類に属するものとみられる。

第4類（図141—90・92）

無文土器を一括するが5点ある。いずれも深鉢で口縁端部は横方向にナデを加えて丸くおさめている。第2類又は3類に共伴する類かと思われる。

第5類（図140—2）

位置づけが不明確な類で図示した1点のみである。黄色味の強い胎土にローリングを受けた砂粒が混入され、器表は内外面ともミガキによって仕上げられている。内湾する口縁部には径6㎜程の棒状工具で刺突が加えられるがこれは逆時計回転順に行なわれたらしい。

9　平安時代の遺構と遺物

①　第１号住居址（図142、図版57）

遺跡西傾斜面の小台地状になった部分を掘りこんでいる。カマドを構築している西側壁は斜面に向っている。カマドの煙道部分は斜面を利用している。　住居址は第Ⅲ層の茶褐色土を掘りこんでいる。住居址の埋土は掘りこみ面よりもやや黒い茶褐色土が第Ⅰ層で、その下はロームを混入した茶褐色土を第Ⅱ層としている。西壁に比べて東壁は検出が困難で推定線である。壁高は西壁で50㎝である。住居址のプランは隅丸方形で、東西４ｍ70㎝、南北４ｍ55㎝である。柱穴は６本確認された。南西側に、１ｍ20㎝×70㎝の長方形土壙が、カマド脇に、直径60㎝のピットが検出された。土壙脇には、焼土炭がみられた。一部に貼床がみられたが全面ではない。カマドは、石組みのもので、長軸、１ｍ70㎝、幅１ｍである。かなりの焼土、灰が混入している。遺物の出土状態は第Ⅱ層が主である。遺物は、土師器、黒色土器、灰釉陶器、刀子片である。土器の細分は、杯ＤⅡが３点、杯ＤⅢa_2が５点、杯ＤⅢ２点、杯Ｂ１点、黒色土器Ｃ１点、灰釉陶器は、椀ＡⅠ２点、椀ＡⅡ４点、皿ＡⅠ２点である。土師器と灰釉陶器の比率は、約53：47である。

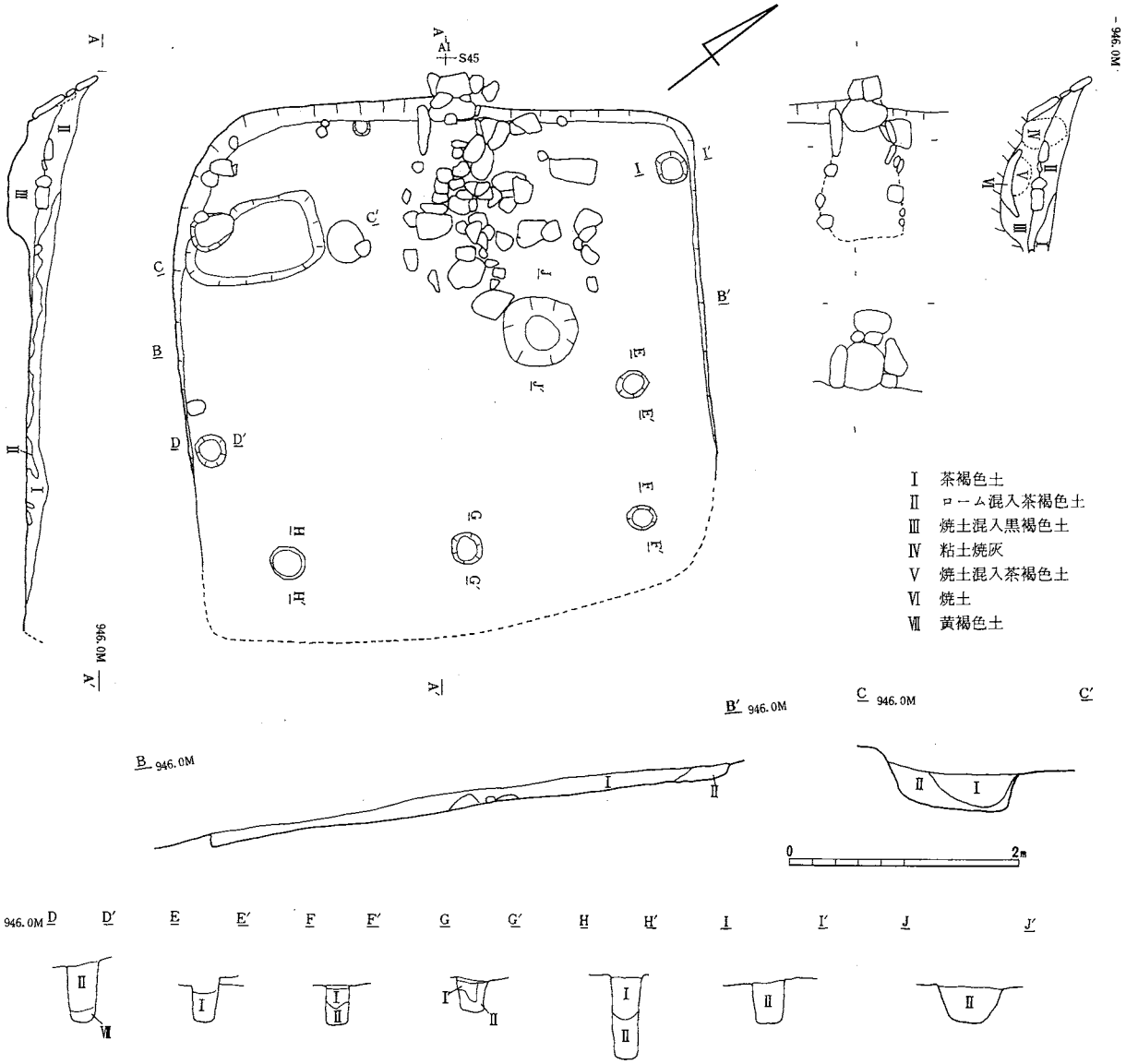


図142　第１号住居址実測図　　（１：60）

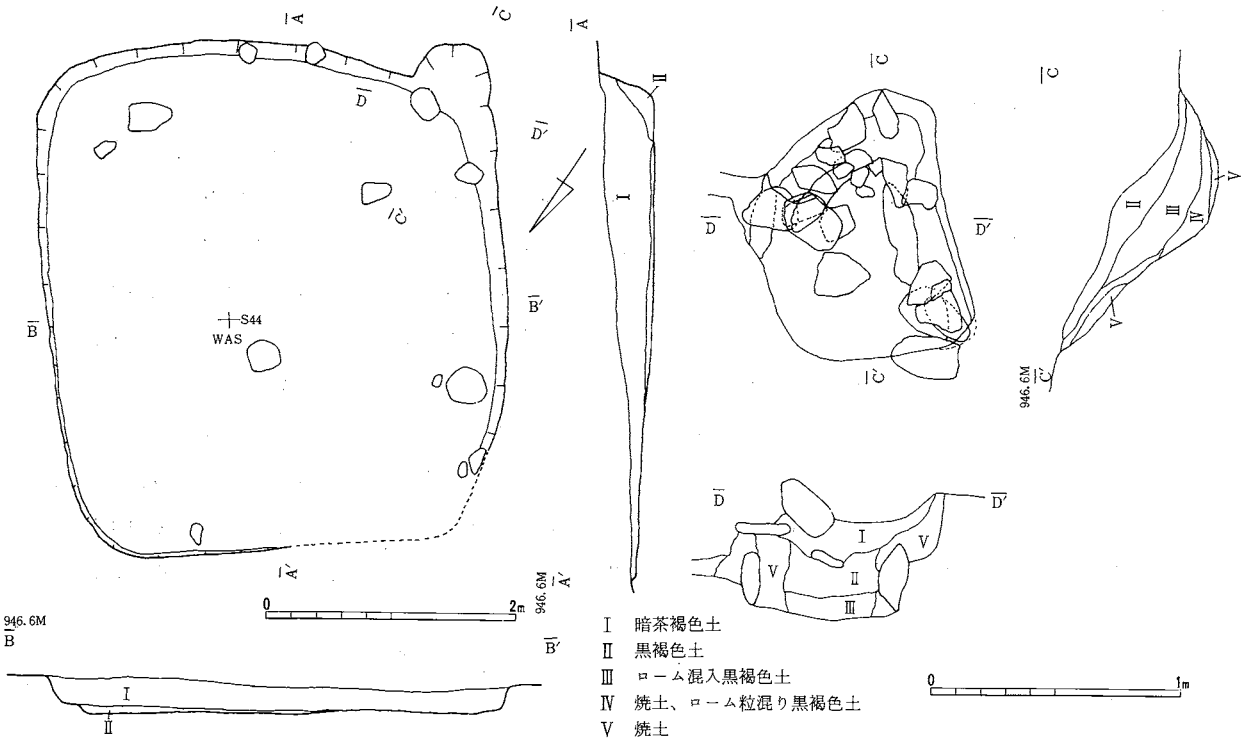


図143　第２号住居址実測図　（１：60）

② **第２号住居址**（図143、図版57）

礫混りの黒色土を掘りこんでいるもので、埋土はローム粒、焼土粒混りの褐色土である。プランは、南西側のコーナーが不明であるが、方形である。南東側の壁で40 cmである。柱穴と思われるもの、その他ピットの類の検出はなかった。カマドは、南側の隅に構築されていたが、石積みで、粘土で被ったもので全長１m、幅0.6 mである。遺存状態は完全ではなかった。カマド前には、カマドより崩れたと思われるロームが乱布していた。床面の状態が注意され、新、旧２面の床面が観察できた。新の床面は、黒色土を硬くしめている。南東側半分には貼床が確認され、この下にもう一面旧床面が確認された。この床面下に旧住居址と思われる壁の立ち上がりらしい部分が検出された。新住居址は、旧住居址からわずか30cmほど西南側へ拡張されたものと考えられる。

遺物の出土は床面直上から出土したものがほとんどである。新、旧の住居址の遺物検出の状態での差は認められなかった。遺物は、10点ほど器形の判別ができたが、土師器は６点、灰釉陶器は４点で、その細分は、杯DⅡ$a_2$１点、小形甕AⅡ２点、甕G３点、灰釉陶器は、椀AⅡ２点、皿AⅡ１点である。土師器と灰釉陶器の比は60：40である。土師器の中では、杯が少なく、特徴的な甕Gが出土している。

③ **第３号住居址**（図版144、図版57）

通常発見されている竪穴住居址とは、規模の面でやや異なる。南北３m、東西１m 90 cmと長方形の小規模な竪穴住居址である。調査時では、土壙、あるいはロームマウンドを予想したこともあったほどである。第３号住居址は、第III層の茶褐色土を掘りこみ、第II層の黒褐色土で埋っている。住居址北東側 ― 斜面下方は、黒褐色土から茶褐色土内に構築され、確認は困難であったが、床面直上には、焼土の散布がありプランの確認はできた。壁は最も良好な状態で検出された東側で30 cmほどである。北東側コーナーに30 cmのピットがある以外は明確な施設はなく、柱穴の検出はなかった。床面は中央部ではかなり良好である。遺構の性格は今後の検討が必要であるが、通常の住居址とは異なるものと思われる。遺物は床面を中心に出土したが、土師器が10点ほどで、杯DⅡ２点、杯BⅠ１点、黒色土器C、甕G各１点に細分される。

善光寺平でのこの時期の住居址は、一辺３mほどの方形のものが通例とされる〔森嶋1978〕が、また住

居址内の柱の消滅とも一致するという。第３号住居址はこれらの住居址よりさらに小規模化している。このような類例は、たとえば、塩崎遺跡群 ― 塩崎小学校地点遺跡 ― での検出例など多くなっている。矢口忠良氏は、このような小規模な住居址の構築を「高床建物址を模した土台的基礎材を有した小屋組を想定している」とされている〔矢口1980〕。金山沢北遺跡第３号住居址は前述したように、かなりはっきりした床面が存在した。しかしカマドの存在はなかった。出土品は、日常の什器のみで、第２号住居址との対照を見せている。

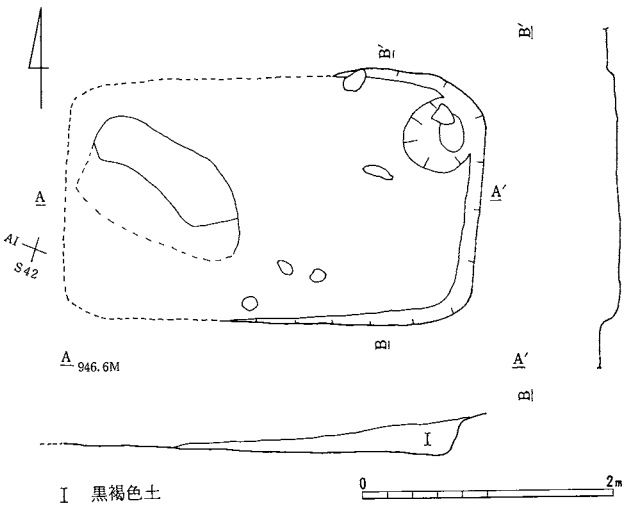


図144　第３号住居址実測図　（１：60）

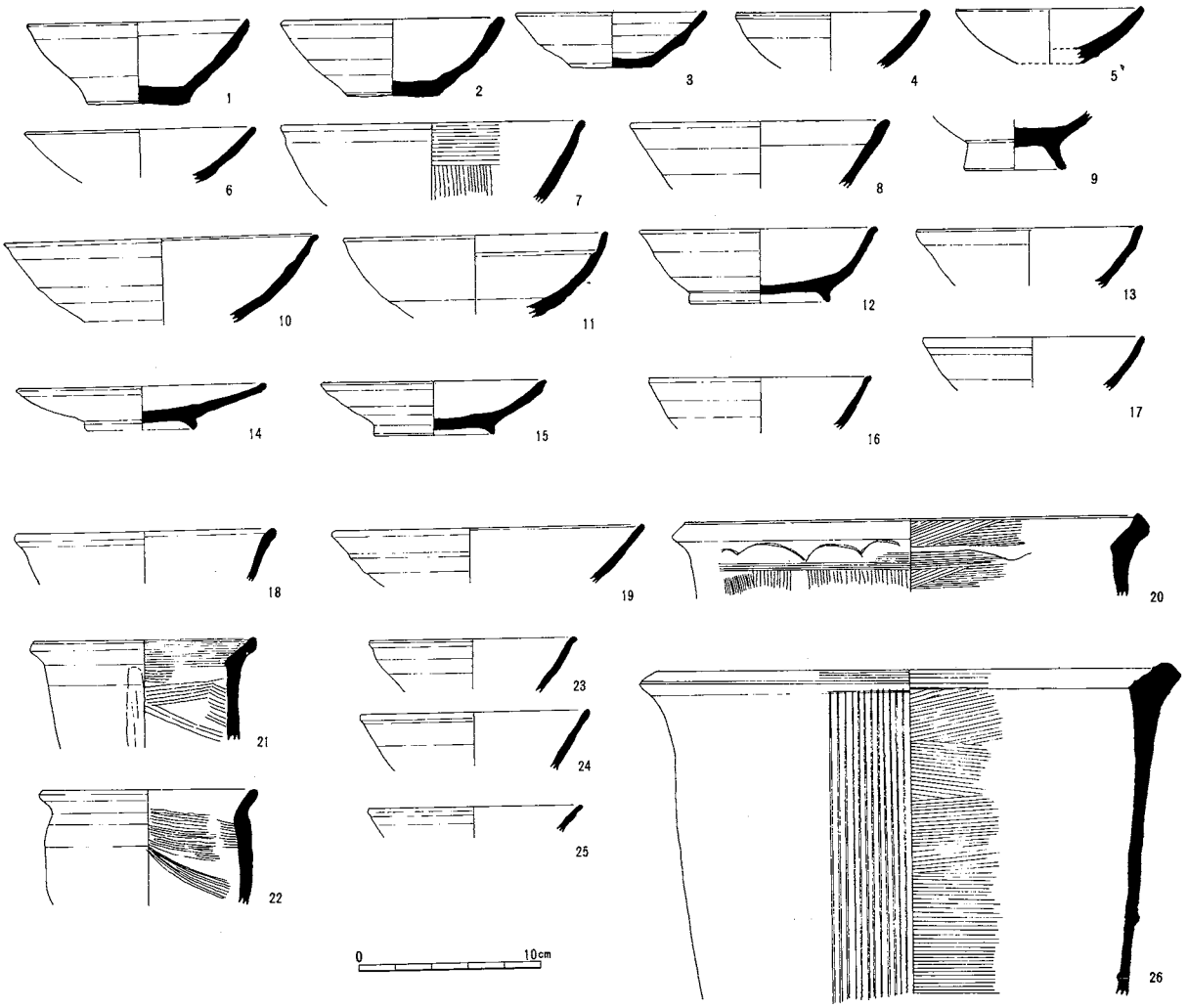


図145　第１号住、第２号住出土平安時代土器実測図　（１：４）

〔引用・参考文献〕

ア　浅川利一、川崎義男　1976　『田中谷戸遺跡』　町田市田中谷戸遺跡調査会

安孫子昭二　1967　「No.269遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅳ』　多摩ニュータウン遺跡調査会

安孫子昭二・可児通宏ほか、1967　「多摩ニュータウンNo.46遺跡の発掘調査」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ』　多摩ニュータウン遺跡調査会

新井司郎　1973　『縄文土器の技術』中央公論美術出版

愛鷹縄文遺跡研究グループ　1976　「沼津市木戸上遺跡の調査」『考古学ジャーナルNo.119』

稲田孝司　1972　「縄文式土器文様発達史・素描（上）」『考古学研究72』　考古学研究会

今村啓爾　1972　『宮原貝塚』武蔵野美術大学考古学研究会

今村善興・山田瑞穂・宮沢恒之・樋口昇一・笹沢浩・村上孝ほか　1979　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（以下中央道報告書と略す）諏訪市その４』　長野県教育委員会

今村善興・山田瑞穂・笹沢浩・青沼博之・伴信夫・百瀬長秀・岩崎孝治ほか　1979　『中央道報告書茅野市・原村その２』　長野県教育委員会

鵜飼幸雄　1977　「平出第Ⅲ類Ａ土器の編年的位置づけとその社会的背景」『信濃29－４』　信濃史学会

大江命・大江上ほか　1973　『北裏遺跡』　可児町北裏遺跡発掘調査団

岡田正彦・細川光貞・高桑俊雄・小林正春ほか　1974*a*　『中央道報告書諏訪市その３』　長野県教育委員会

岡田正彦・細川光貞・松永満夫ほか　1974*b*　『中央道報告書富士見町その１』　長野県教育委員会

岡村道雄　1976　「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編

小川良祐ほか　1977　『埼玉県遺跡発掘調査報告書・第12集　前畠・島之上・出口・芝山』埼玉県教育委員会

岡本勇　1961　「三浦市鵜が島台遺跡」『横須賀市博物館研究報告第５号』　横須賀市博物館

岡田淳子・服部敬史他　1974　「下耕地遺跡の調査」『春日台、下耕地遺跡』　八王子市春日台遺跡調査会

カ　河西清光ほか　1978　『梨久保遺跡』　岡谷市教育委員会

神村透　1977　『長野県木曽郡お玉の森遺跡』　長野県木曽郡日義村教育委員会

川上元　1975　『雁石・藤沢』　長野県小県郡真田町教育委員会

川島雅人・前原豊　1975　「長野県北佐久郡宮平遺跡出土の後期縄文土器」『信濃27－４』　信濃史学会

桐原健　1968　「平安期にみられる山地居住人の遺跡」『信濃20－４』　信濃史学会

桐原健・土屋長久　1971　「元宮神社東遺跡」『中央道報告書　宮田村その１』　長野県教育委員会

桐原健　1976　「信濃における平安期の土壙墓の性格」『信濃28－１』　信濃史学会

気賀沢進・友野良一　1977　『南原』　駒ヶ根市教育委員会

小林公明　1975　「三三号住居址 ― ひとつの解きかた」『山麓考古１』　素人考古学研究会

小林公明　1976　「石器の再発見－２－農具としての打製石器」『山麓考古６』　素人考古学研究会

小林康男　1978　「縄文時代の磨石」『中部高地の考古学』長野県考古学会15周年記念論文集　長野県考古学会

小林康男ほか　1978　『中島遺跡』　塩尻市教育委員会

小山正忠・竹原秀雄　1967　『新版標準土色帖』　日本色研事業ＫＫ

小松虔・西沢寿晃　1976　「栃原岩陰遺跡出土土器１例について」『長野県考古学会誌No.27』　長野県考古学会

サ　笹津海祥・瀬川裕市郎他　1976　「清水柳遺跡の土器と石器」『沼津市歴史民俗資料館紀要１』　沼津市歴史民俗資料館

笹沢浩ほか　1978　『長野県諏訪郡原村阿久遺跡調査概報』　－昭和51、52年度　長野県中央道遺跡調査団

佐藤達夫　1974　「土器型式の実態－五領ヶ台式と勝坂式の間」『日本考古学の現状と課題』　吉川弘文館

佐藤信之　1980　「いわゆる石核状石器について」『しなのろじいNo.100』　千曲川水系古代文化研究所

真田幸成ほか　1970　『平（南）遺跡』　中津川市教育委員会

佐原真　1970　「土器の話（１）」『考古学研究64』　考古学研究会

〃　1977　「石斧論－横斧から縦斧へ」『考古論集－慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集』　同刊行会

鈴木公雄　1969　「安行系粗製土器における文様施文の順位と工程数」『信濃21－４』

鈴木次郎ほか　1977　『神奈川県埋蔵文化財調査報告13　尾崎遺跡』　神奈川県教育委員会
鈴木保彦・山本暉久ほか　1980「シンポジウム縄文時代中期後半の諸問題」『神奈川考古10』神奈川考古同人会
鈴木克彦　1973　「子母口式土器の検討の必要性」『多摩考古13』　多摩考古学研究会
関俊彦・鈴木正博・鈴木加津子・宮内良隆　1980　『太田区史(資料編)考古II』東京都太田区史編さん委員会
関孝一　1965　「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌51-4』　日本考古学会
セミョーノフ・S・A　田中琢訳　1968　「石器の用途と使用痕」『考古学研究56』考古学研究会
芹沢長介・後藤秀一ほか　1979　『聖山』　東北大学文学部考古学研究会
関野哲夫　1980　「鵜ヶ島台土器に関する覚え書」『古代探叢』　滝口宏先生古稀記念考古学論集　同編集委員会　早稲田大学出版部
信藤祐仁　1977　「牧丘町発見の押型文土器(2)」『丘陵　1-3、4合併号』　甲斐丘陵考古学研究会
タ　滝口宏・米田耕之助　1974　『東間部多古墳群』　上総国分寺台遺跡調査報告1　上総国分寺台遺跡調査団
高橋桂・広瀬昭弘　1977　『三枚原遺跡』　下高井郡木島平村教育委員会
高橋桂・広瀬昭弘　1979　『牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書』　上水内郡牟礼村教育委員会
谷沢良光　1976　「東海地方における繊維土器―条痕文系土器の系譜」　『遮光器10号』　みちのく考古学研究会
谷沢良光　1977　「縄文時代早期末葉の遺構と土器編年(1)―東海を中心として―」『史館　第8号』
橘昌信　1970　「押型文土器文化の礫器」『古代文化147』　古代学協会
谷井彪　1977　「勝坂式土器の文様構造について」『埼玉考古16』　埼玉県考古学会
〃　1977　「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察（前)(後)」『信濃29-4・6』　信濃史学会
〃　1979　「縄文土器の単位とその意味　上・下」『古代文化31-2・3』　古代学協会
戸田哲也・篠原正　1978　『新橋遺跡発掘調査報告』　千葉県富里村教育委員会
戸沢充則　1955　「樋沢押型文遺跡」『石器時代2』　石器時代文化研究会
戸沢充則・小野正敏・会田進・長崎元広　1970　『後田原遺跡』　岡谷市文化財調査報告3　岡谷市教育委員会
ナ　中島栄一ほか　1974　『吉野屋遺跡』　新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班調査報告第5冊
永峯光一　1955　『平出』　平出遺跡調査会
楢崎彰一　1968　「瓷器の道(1)」『名古屋大学文学部二十周年記念論文集』　名古屋大学文学部
ハ　林茂樹・気賀沢進　1971　『舟山遺跡緊急発掘調査報告』　駒ヶ根市教育委員会
林茂樹・気賀沢進　1972　『羽場下・舟山』　駒ヶ根市教育委員会
林茂樹　1976　「縄文中期土器「平出三A」の系譜-月見松遺跡と山溝遺跡」『長野県考古学会誌27』　長野県考古学会
原嘉藤・小松虔・樋口昇一ほか　1972　『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会
原田昌幸ほか　1980　『藤の台遺跡III』　藤の台遺跡調査会
伴信夫ほか　1973a　『中央道報告書　箕輪町』　長野県教育委員会
伴信夫・木下平八郎・平出一治ほか　1973b　『中央道報告書　諏訪市その1・その2』　長野県教育委員会
樋口昇一・青沼博之・百瀬長秀・和田博秋・島田哲男ほか　1980　『中央道報告書　岡谷市その4』　長野県教育委員会
平口哲夫・高堀勝喜・小島俊彰　1979　『上山田貝塚』　宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会
福田敏一　1979　「床下土壙に関する覚え書」『小田原考古研究会報第8』　小田原考古学会
藤沢宗平・樋口昇一他1969　『有明山社』　長野県北安曇郡松川村教育委員会
藤沢宗平　1967　「松本市北内田エリ穴第2地点遺跡(1)(2)」『信濃19-9・11』　信濃史学会
藤沢宗平・林茂樹ほか　1968　『月見松遺跡緊急発掘調査報告書』　伊那市教育委員会
藤沢宗平・山田瑞穂ほか　1972　『離山遺跡』　長野県南安曇郡穂高町教育委員会
藤森栄一　1943　「信濃下水内郡桑名川の土器」『人類学雑誌58-3』　日本人類学会
藤森栄一・武藤雄六　1963　「縄文中期土器の貯蔵形態について」『考古学手帖20』
藤森栄一　1965　『井戸尻』　中央公論美術出版

藤森栄一・武藤雄六・戸沢充則ほか　1965　「シンポジウム中期縄文文化の諸問題」『長野県考古学会誌３』　長野県考古学会

マ　間壁忠彦・葭子　1971　『里木貝塚』　倉敷考古館研究集報第７号　倉敷考古館

松沢亜生　1957　「細久保遺跡の押型文土器」『石器時代４』　石器時代文化研究会

松沢亜生　1958　「長野県諏訪郡新道の中期縄文土器」『考古学手帖１』

松永満夫　1978　「鉄鐸を出土した土壙墓」『信濃30-12』　信濃史学会

松村恵司　1974　「縄文時代中期初頭土器研究史」『史館３』　市川ジャーナル社

丸山敏一郎ほか　1972　『中央道報告書　飯島町その３』　長野教育委員会

宮坂英弐　1942　「長野県諏訪郡北山村上ノ段遺跡調査報告」『史前学雑誌14-１』　史前学会

宮坂英弐・宮坂虎次　1966　『蓼科』　尖石考古館研究報告叢書第II冊　尖石考古博物館

宮坂英弐・佐藤攻ほか　1970　『茅野和田』　茅野市教育委員会・長野県企業局

宮坂虎次　1971　『棚畑遺跡』　茅野市営城山住宅団地内埋蔵文化財調査報告書　茅野市教育委員会

宮坂英弐　1972　『阿南町新野遺跡』　長野県下伊那郡阿南町教育委員会

宮沢恒之・遮那藤麻呂・深沢健一・村上孝ほか　1973　『中央道報告書　伊那市内その２』長野県教育委員会

向坂鋼二　1961　「長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾」『第四紀研究２巻１号』　第四紀学会

武藤雄六・小林公明ほか　1978　『曽利』　富士見町教育委員会

モース・E　1879　『大森介墟古物篇』　東京大学

森嶋稔・笹沢浩　1975　「男女倉遺跡C地点」『男女倉』　国道142号新和田トンネル有料道路事業用地内緊急発掘調査報告書　長野県道路公社　和田村教育委員会

森嶋稔・笹沢浩他　1976「長野県更級郡大岡村鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌23、24』長野県考古学会

森嶋稔　1978　『更級埴科地方誌』　第二巻　原始、古代、中世編　更級埴科地方誌刊行会

ヤ　八木光則　1976　「いわゆる「特殊磨石」について-中部地方における縄文早期の石器群研究への問題提起」『信濃28-４』　信濃史学会

柳田敏司・吉川国男・市川修ほか　1975　『高井東遺跡』　埼玉県教育委員会

山口明　1978　「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年」『駿台史学43』　駿台史学会

〃　1980a　「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」『静岡県考古学会シンポジウム４』　静岡県考古学会

〃　1980b　「縄文時代前期末葉鍋屋町系土器群の動態」『長野県考古学会誌39』　長野県考古学会

山田瑞穂・八木充則・小松原義人ほか　1973　『中央道報告書　辰野町その２』長野県教育委員会

山田瑞穂ほか　1976　『中央道報告書　岡谷市その３』　長野県教育委員会

山内清男　1964　「縄文式土器総論」『日本原始美術Ｉ』　講談社

山本寿々雄　1973　『中谷遺跡』　都留市教育委員会

山本暉久　1979　『上浜田』　神奈川県埋蔵文化財調査報告15　神奈川県教育委員会

八幡一郎・関根孝夫　1973　『貝の花貝塚』　松戸市教育委員会

八幡一郎　1972　『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究（上、中)』　慶友社刊

雪田孝他　1967　「No.52遺跡」『多摩ニュータウン遺跡調査報告III』　多摩ニュータウン遺跡調査会

和田哲　1975　『西上遺跡』　昭島市教育委員会

附表1　判ノ木山西遺跡石器一覧

石鏃

図番号	No.	出土地点	遺物No.	茎	基部	側辺	先端	長さ mm	幅 mm	長さ／幅	重さ g	厚さ mm	破損部位	石材	備考
1	1	1住	15	B	Ai	Da	B?	(20.0)	17.5	B	2.30	5.5	a	黒曜石	未調整部あり
2	2	〃	25	〃	〃	C	B	14.5	11.0	〃	0.38	3.0		〃	
3	3	〃	81	〃	Af?	Db	?	(31.0)	(23.0)	B?	(2.64)	5.2	b	〃	
4	4	〃	124	〃	A?	?	B	(20.0)	(15.0)	〃	(0.82)	4.8	c	〃	
5	5	〃	129	〃	B	?	?	23.0	15.0	B	1.27	5.0		〃	
6	6	〃	152	〃	Ai?	C?	?	(14.5)	(13.0)	A?	(0.71)	4.8	e	〃	
7	7	1住東柱穴	——	〃	Ai	Db?	C	25.0	19.5	B	1.89	5.8		〃	
8	8	〃	——	〃	B	Da	B	27.5	16.0	A	2.91	7.0		〃	
9	9	1住	——	〃	Ai	A?	C	18.0	14.5	B	1.06	5.2		〃	
10	10	2住	73	〃	Ah	C	B	25.0	(16.0)	〃	(0.96)	3.5	b	〃	
11	11	4住	99	〃	Ah?	〃	〃	15.5	14.0	C	(0.43)	3.2	c	〃	
18	12	7住	41	〃	Ah	Db	〃	22.0	16.0	B	1.20	4.3		〃	
13	13	〃	90	〃	AfAe	Db	C	21.5	13.0	〃	0.90	5.0		〃	
17	14	〃	121	〃	Ai	Da	B	19.0	13.0	〃	0.76	3.6		珪質頁岩	片面大部分未調整
20	15	〃	〃	〃	A?	C?	C	(11.0)	(11.0)	?	(0.16)	2.5	c	黒曜石	
19	16	〃	125	〃	Ah	Dc	〃	17.0	12.0	B	0.65	3.5		〃	
	17	〃	208	〃	A?	?	?	(11.5)	(10.0)	?	(0.24)	(3.5)	b	〃	
16	18	〃	599	〃	Ah	Da	A	18.5	14.5	B	1.10	4.0		チャート	
15	19	〃	651	〃	〃	B/Da	?	(24.0)	15.5	B	2.69	9.5	a	黒曜石	
14	20	〃	679	〃	Ag	C	B	26.5	(14.0)	A	(1.23)	4.3	b	〃	
12	21	〃	712	〃	Ae	?/B	C	21.0	(15.0)	C	(0.96)	5.5	b	〃	未調整部あり
21	22	9住	1	〃	〃	Db	A	24	15	B	1.00	5.0		〃	
22	23	〃	26	〃	A?	—	—	—	—	—	(0.30)	(3.0)	g	〃	
25	24	10住	9	〃	Ah	Da	—	(19.5)	21.0	—	(1.06)	3.5	a	〃	
23	25	〃	45	〃	Ae	〃	C	19.0	(11.0)	B?	(0.62)	4.0	f	〃	
24	26	〃	53	〃	〃	〃	B	25.0	(13.5)	A	(0.95)	3.0	b	チャート	
26	27	〃	57	〃	A?	C	〃	(16.0)	(11.5)	B	(0.43)	3.7	c	黒曜石	
	28	〃	136	〃	Ah	Da	C	14.0	12.0	B	0.50	4.0		〃	
27	29	11住	46	〃	Ae	Db	B	22.0	13.5	B	0.94	4.3		〃	
28	30	〃	171	〃	〃	Da	〃	(21.0)	(18.0)	B?	(0.78)	3.5		〃	
30	31	〃	249	〃	A?	C	?	(12.0)	(10.5)	?	(0.31)	3.0	d	〃	
29	32	〃	302	〃	Ai	〃	A	12.0	11.5	C	0.34	3.0		〃	
	33	12住	14	〃	〃	Da	C	15.0	13.0	C	0.55	3.0		〃	
	34	〃	32	〃	A?	C?	?	(26.0)	(23.0)	?	(2.36)	5.0		〃	未製品
	35	〃	38	〃	Ah	Da	B	18.5	14.0	B	0.72	4.2		〃	
32	36	〃	168	〃	Ai	〃	C	33.0	(31.5)	C	(6.13)	6.8		〃	
31	37	〃	190	〃	Ag	〃	B	16.0	12.0	B	0.50	3.4		〃	
	38	〃	302	〃	Ai?	〃	A?	13.0	(12.5)	D	(0.35)	3.4	g	〃	
	39	13住	126	〃	Ah	〃	B	20.5	16.0	B	0.70	3.0		〃	
	40	〃	163	〃	Ai	Db	?	22.0	(18.5)	〃	(1.60)	5.0	h	〃	
	41	〃	234	〃	Ah	Da	?	(22.0)	19.0	C	(2.20)	6.0	a	〃	
34	42	〃	245	〃	〃	B	?	(22.5)	(18.0)	B	(1.49)	5.5	a	〃	
	43	〃	296	〃	Ai	Da	A	(19.0)	12.0	〃	(0.71)	4.0	b	〃	
	44	〃	312	〃	Ad	〃	〃	(21.5)	14.0	?	(1.00)	4.0	e	チャート	
35	45	〃	803	〃	Ai	Db	?	(19.0)	17.0	?	(1.55)	5.5	d	黒曜石	
33	46	〃	804	〃	Ae	Da	A	27.5	15.5	A	1.29	4.5		〃	
	47	〃	905	〃	Ah	〃	B	22.5	17.5	B	1.52	5.0		〃	
36	48	17住	165	〃	Ae	C	〃	19.0	16.5	C	0.56	3.5		〃	
37	49	〃	217	〃	A?	C?	C	(25.5)	(13.0)	A	(0.63)	3.0	e	〃	
38	50	18住	54	〃	Ae	Db	A	19.0	(12.0)	D	(0.36)	5.5	f	〃	
	51	〃	131	〃	Ai	〃	?	25.0	17.5	B	(2.31)	9.0	a	〃	両面中央に突起あり非対称
	52	土壙39	28	〃	Ag	Da	B	22.5	(12.0)	A	(0.85)	4.0	b	〃	
40	53	〃	9	〃	Af	C	〃	17.0	14.5	B	0.42	2.8		〃	
39	54	土壙43	21	〃	Ae	Db	〃	15.5	12.0	〃	0.45	3.6		〃	
	55	土壙77	8	〃	〃	〃	〃	16.0	14.0	C	0.40	3.5		〃	
41	56	土壙82	2	〃	Ai	C	A	14.0	(12.0)	〃	(0.38)	2.8	b	〃	
42	57	土壙88	4	〃	Ae	Da	E	20.0	(15.0)	B	1.00	3.8		〃	辺部のみ調整
	58	土壙116	3	〃	Ag	Db	?	(14.0)	13.0	?	(0.55)	3.0	a	〃	
	59	〃	7	〃	Ae	Da	?	(14.5)	(13.0)	?	(0.66)	4.0	e	〃	
	60	竪穴1	50	〃	Ai	C	A	21.0	12.5	A	(0.62)	3.6	b	〃	
	61	〃	16	〃	Ca	Db	C	24.0	20.0	B	3.39	8.0		〃	
	62	〃	97	〃	B	C	B	(20.5)	(17.0)	?	(1.80)	6.5	b	〃	
	63	竪穴2	37	〃	Ah	Db	〃	(23.5)	(15.5)	B	(1.88)	7.0	b	〃	
	64	〃	38	〃	〃	Da	〃	24.5	17.0	〃	1.19	4.0		〃	
	65	竪穴3	29	〃	B	Db	?	23.0	19.0	〃	3.47	8.2		〃	
	66	早集2	10	〃	Ah	C	A	16.5	15.0	C	0.50	3.0		〃	
	67	〃	24	〃	Af	〃	?	(17.5)	21.0	?	(0.73)	2.6	a	〃	

図番号	No.	出土地点	遺物No.	茎	基部	側辺	先端	長さ mm	幅 mm	長さ／幅	重さ g	厚さ mm	破損部位	石材	備　考
43	68	中集1	119	B	Af	B	C	24.0	15.0	B	0.93	3.6		黒曜石	
44	69	後集2	170	〃	Ah	Da	B	27.5	18.0	〃	1.43	4.2		〃	
	70	後集4	80	〃	B	〃	〃	25.0	18.0	〃	1.95	5.5		〃	
	71	R.M.11	3	〃	Ag	〃	A	19.5	14.0	〃	0.85	4.0		〃	
	72	AF-49	—	〃	Ad	Db	?	(17.0)	(14.5)	〃	(0.79)	4.2		チャート	
	73	AH-65	—	〃	Ai	〃	C	26.0	23.5	C	5.23	10.8		〃	
	74	AJ-60	—	〃	Ah	〃	A	16.0	14.0	〃	0.65	4.0	a	黒曜石	
	75	B-17	58	〃	?	C	B	(23.0)	(13.0)	?	(0.95)	5.5	c	〃	
	76	B-21	277	〃	B	Db	?	(19.0)	(21.0)	?	(2.25)	6.5	a	〃	
	77	C-16	9	〃	Ah	Da	C	19.5	14.5	B	0.97	4.8		〃	
	78	C-17	207	〃	Af	Db	?	(14.0)	14.5	?	(0.50)	4.0	a	〃	
	79	C-18	4	〃	Ah	Da	A	16.0	12.5	B	0.4.	3.0		〃	未調整部あり
	80	〃	37	〃	?	Db	C	26.5	18.0	〃	2.65	5.6		〃	〃
47	81	〃	69	〃	B	Da	A	19.0	(20.0)	D	(1.52)	5.0	f	〃	
45	82	〃	75	〃	Ai	B	?	(21.5)	20.0	C	(1.68)	5.0	a	〃	未調整部あり
	83	〃	242	〃	Ah	Da	?	(17.0)	14.0	B	(0.61)	3.4	a	〃	
46	84	〃	247	〃	Af	Db	?	(21.0)	18.5	〃	(1.25)	4.4	a	〃	未調整部あり
48	85	C-19	39	〃	Ad	Da	A	13.0	13.0	C	(0.31)	2.8		〃	
	86	〃	47	〃	Ah	Db	〃	15.0	13.0	〃	0.64	4.2		〃	
	87	〃	67	〃	Ae	Da	〃	(15.0)	(12.0)	〃	(0.40)	3.4	b	〃	
	88	〃	139	〃	Ah	〃	?	(16.0)	14.5	〃	(0.80)	4.0	a	〃	
	89	C-20	6	〃	Ae	Da	B	21.0	15.5	B	1.36	5.8		〃	
49	90	〃	39	〃	Ca	C	?	(15.0)	18.0	D	(1.10)	4.6	a	〃	
	91	〃	50	〃	Ad	Db	C	(19.5)	16.5	B	(0.96)	3.4	a	〃	
	92	D-17	65	〃	Ah	Da	B	20.5	15.5	〃	1.12	4.4		チャート	
	93	D-18	156	〃	Ag	Db	C	20.5	13.5	〃	1.28	6.2		黒曜石	左右非対称未製品？
	94	〃	21.6	〃	?	C	?	(24.5)	(14.0)	A	(0.92)	3.6	i	〃	
	95	〃	245	?	?	?	A	(14.5)	(11.5)	?	(0.48)	3.6	g	〃	
	96	〃	264	B	Ca	Da	?	20.0	14.0	B	(1.32)	5.4	b	〃	
	97	D-19	97	〃	Ag	〃	A	(24.0)	(15.5)	B	(1.02)	4.0	b	〃	
	98	D-20	5	〃	Ae	〃	B	(19.0)	(13.0)	〃	(0.65)	3.4	b	〃	
	99	〃	—	〃	〃	〃	A	13.5	13.0	D	0.38	3.2		〃	
50	100	〃	—	〃	Af	〃	C	25.5	(16.0)	B	(1.58)	5.8	b	〃	未製品？
	101	D-21	53	〃	B	〃	〃	23.5	15.0	〃	2.10	6.0		〃	
	102	E-16	2	〃	〃	B/Db	?	(28.0)	16.0	A	(2.62)	7.8		〃	未製品
51	103	E-17	1	〃	A?	C	C?	(16.5)	(13.0)	?	(0.40)	3.6	c	〃	
	104	E-18	54	〃	Ah	〃	B	(23.0)	(16.0)	B	1.19	4.6	g	〃	
52	105	〃	118	〃	Ai	Da	〃	20.5	14.5	〃	0.82	3.4		〃	
53	106	E-19	143	〃	Ah	C?	〃	26.0	17.0	〃	1.23	4.4		〃	
	107	E-20	140	?	?	C	?	(17.5)	12.0	?	(0.80)	4.0	j	〃	
	108	F-16	—	B	A?	Da	A	14.5	(13.0)	C	0.55	3.6		〃	
54	109	〃	—	〃	Ah	Dd	?	(14.5)	15.5	〃	(0.70)	3.2	a	〃	
	110	F-17	50	〃	Ad	Da	A	19.0	13.0	B	(0.65)	4.0	b	〃	
	111	F-18	15	〃	Ah	〃	〃	18.5	(17.0)	C	(1.36)	7.0		〃	
55	112	〃	34	〃	Ad	Db	B	26.5	16.0	B	0.83	2.8		〃	
	113	〃	297	〃	?	?	A	(23.0)	(11.5)	?	(0.95)	4.8	c	〃	
	114	〃	—	〃	?	C?	?	—	—	?	(0.50)	3.0	e	〃	
	115	F-19	96	〃	Ai	Da	A	17.5	(13.5)	B	(0.76)	4.0	b	〃	
	116	〃	309	〃	B	Dd	D	19.5	18.0	C	1.93	5.2	a	〃	
	117	G-18	47	〃	Ah	Da	A	(17.5)	(14.5)	〃	(0.60)	4.2	b	〃	
	118	〃	116	〃	Ai	Db	C	14.0	(14.0)	〃	(0.62)	4.4	b	〃	
	119	〃	122	〃	?	?	?	(15.0)	(12.0)	A	(0.83)	4.6	i	〃	
	120	C-18	277	〃	Ai	Da	A	17.5	14.5	C	0.65	3.6		〃	
	121	Z	—	〃	Ae	〃	B	21.5	14.0	B	0.79	4.4		〃	
	122	〃	—	〃	Ag	〃	〃	(13.5)	(10.5)	〃	(0.28)	3.0	b	〃	
	123	〃	—	〃	Ag	C	〃	21.0	13.0	〃	0.84	4.0		〃	
	124	〃	—	〃	Ah	Da	〃	32.0	16.0	A	(1.76)	4.8		〃	
	125	〃	—	〃	Ai	Db	C	23.0	18.0	B	2.20	7.8		〃	
	126	? 19	253	〃	B	?	?	(12.5)	(17.0)	?	(0.76)	3.9	a	〃	
	127	Z	—	〃	Ca	?	E	17.0	24.0	?	5.67	8.8	a	〃	
	128	〃	—	〃	Ae	C	B	19.0	11.0	A	(0.45)	3.5	b	〃	
	129	土壙75	2	〃	Ah	C	〃	(15.5)	14.5	C	0.60	4.0	a	〃	
	130	土壙99	4	〃	Ab	Db	〃	35.0	(12.0)	?	(1.0)	4.0	b	〃	
	131	土壙93	2	〃	Ah	〃	?	(10.0)	17.0	?	(0.4)	3.5	g	〃	

石　匙

図番号	出土地点	遺物No.	つまみと刃部の関係	つまみ部の形状	刃部の形状	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	刃部角	つまみ角	破損状態	石材	備考
56	1住	30	斜型	抉りを入れただけの大きなつまみ	外彎する	33	43	11	17.1	70°	15°		チャート	
57	13住	357	斜型	中型のつまみ	?	—	—	(10)	(10.3)	—	—	刃部　欠	〃	
58	E-14	61	斜型	〃	直である	65	33	9	18.4	60°	70°		〃	
	中集-1	83	?	小さなつまみ	外彎する	(21)	25	8	(3.0)	70°	—.	つまみ部　欠	黒曜石	
60	土壙・86	1	横型	〃	〃	27	40	7	5.5	60°	4°		チャート	
61	A-21	17	縦型	抉りの浅いつまみ	直である	43	30	7	8.7	65°	85°		〃	
62	C-19	—	斜型	抉りを入れただけの大きなつまみ	〃	26	33	11.5	8.9	70°	28°		〃	
63	A-20	165	斜型	〃	外彎する	25	30	8	5.6	50°	—		〃	
64	D-20	96	縦型	〃	〃	55	33	9	18.8	45°	63°		〃	
	13住	160	斜型	中型のつまみ	?	27	(32)	8	(4.8)	60°	—	刃部両端　欠	〃	
59	Z	—	横型	小さなつまみ	外彎する	22	28	6	3.0	55°	12°		黒曜石	

石　錐

図番号	出土地点	遺物No.	全体形	錐部の形状	長さ mm	幅 mm	錐部の長さ mm	錐部の幅 mm	重さ g	破損状態	使用痕の状態	石　材
65	7住	598	B	B	32.5	9.0	23.5	7.5	2.0	完　形	a・b	黒曜石
66	11住	286	A	A	20.5	19	(5)	5	2.3	錐　部　欠	a・b	〃
67	〃	397	B	B	(31)	8.5	(12)	7.5	(2.4)	〃	a・b・d	〃
—	14住	14	B	A	(24)	13.5	(22.5)	11	(2.8)	錐部先端・基部欠	d	〃
69	〃	207	A	A	(20)	23.5	(6)	6	(1.9)	錐　部　欠	———	粘板岩
68	18住	100	?	B	20	11.5	8	5	0.8	完　形	a・d	黒曜石
70	後集- 3	13	A	A	45	16.5	22	8	2.8	〃	a・b・c	〃
71	D-17	69	B	B	31	12.5	19	6.5	1.7	錐部先端　欠	a・b・c	〃
72	AL-53	—	B	A	21	14.0	8	9	1.2	基　部　欠	a	〃

スクレイパー

図番号	出土地点	遺物No.	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石材
73	7住	2	37	79	13.5	34.8	粘板岩
74	10住	47	36	61	13.5	32.2	〃
75	Z	——	53.5	26	12	20.2	チャート
76	C-18	126	26.5	46	9	13.1	〃
77	16住	226	71	33	11	26.3	黒曜石
78	AH-62	——	36.5	44	12	18.6	チャート
79	ローム・マウンド2	12	34	46	10	17.9	珪質砂岩
80	A-21	114・147	30	32	7.5	8.9	チャート
81	C-17	89	30	52.5	11	16.3	〃
82	A-21	113	36	35	7.5	13.8	黒曜石

ピエス・エスキーユ

図番号	出土地点	遺物No.	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石材
112	7住	8	25	18	10.5	5.2	黒曜石
113	11住	168	24	20	10	4.7	〃
114	11住	242	18	21	8	3.1	〃
115	16住	——	25	21	10	5.9	〃
116	16住	65	20	20	6	2.7	〃
117	17住	332	22	22	9	4.7	〃
118	18住	64	17.5	15	7	2.0	〃
119	18住	73	23	21	6.5	3.1	〃
120	B-18	7	28.5	12	6	2.2	〃
121	D-16	279	37	15	12.5	8.1	〃
122	D-20	140	23	14	8	2.4	〃
123	E-18	12	35.5	18	7	5.9	〃
124	E-19	146	21	19	10.5	3.9	〃
	7住	2	15	9	6	1.1	〃
	7住	485	15	14	7.5	1.4	〃
	7住	682	20.5	15	16	4.0	〃
	11住	79	37	22	6	4.6	〃
	17住	62	20	15	7	1.6	〃
	17住	153	32	15	8	3.8	〃
	土壙54	10	15.5	14.5	5	1.2	黒曜石
	C-18	142	17	20	7	2.6	〃
	D-18	2	25	24	10	7.2	〃
	D-21	53	18.5	12.5	7	1.4	〃
	F-16	——	19	16.5	7.5	2.2	〃
	F-18	82	26	15	7	2.3	〃
	F-19	30	23	11.5	6.5	1.8	〃
	F-19	317	24	22	12	6.3	〃
	AD-60	——	39	18.5	9	4.6	〃
	Z	——	20.5	11	6	1.6	〃
	〃	——	18	14	7	1.7	〃
	〃	——	20	12	11	2.0	〃
	〃	——	20.5	12.5	8	2.0	〃
	〃	——	20	19.5	8.5	3.6	〃
	〃	——	23.5	22.5	9	4.9	〃
	〃	——	27	24	8.5	5.1	〃
	〃	——	29	19.5	8	5.8	〃
	〃	——	33	20	16	11.0	〃

その他不定形石器

図番号	出土地点	遺物No.	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石材
83	AM-54	——	35	9.5	4	1.3	黒曜石
84	後集・2	96	22	16	4.5	1.3	?
85	土壙・72	3	21	14	7	1.8	黒曜石
86	AP-62	——	25	19	6	4.2	チャート
87	E-16	145	21	13	8	2.2	黒曜石
88	後集-2	168	41	43	10	17.9	チャート
89	D-18	71	20	23	7	3.8	チャート
90	14住	158	29	19	9.5	5.0	黒曜石
91	10住	149	25.5	18	10	4.2	〃
92	E-19	68	19.5	26.5	8	4.1	〃
93	AO-59	——	21	23	4	3.3	チャート
94	13住	231	25.5	19	5.5	2.1	黒曜石
95	D-18	40	34	23	9.5	5.2	〃
96	G-16	11	19	20	4	1.7	〃
97	G-18	63	21.5	13	5	1.6	〃
98	土壙50	2	30	16	4.5	2.4	〃

図番号	出土地点	遺物No.	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石材
99	土壙65	13	24.5	18.5	5.5	2.4	黒曜石
100	7住	355	16	23	6	2.3	〃
101	13住	——	16	29	5.5	2.8	〃
102	19住	82	15	30	5.5	3.0	〃
103	土壙102	1	19	21.5	8	3.0	〃
104	C-17	87	17.5	25	6	2.1	〃
105	Z	53	16	21	4	1.4	〃
	13住	166	25	17.5	8.5	3.7	〃
	19住	81	30	19.5	9	4.4	〃
	AP-61	——	36.5	30.5	9	11.5	チャート
	A-21	141	15	18.5	4.5	1.2	〃
	AP-54	——	30.5	23.5	9.5	5.7	黒曜石
	C-18	106	39	19	8	6.5	〃
	D-16	2	13.5	27	3	1.6	〃
	E-18	37	24	22	7.5	4.9	〃
	11住	322	29	22	7.5	4.4	〃

石核状石器（仮称）

図番号	出土地点	遺物No.	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石材
106	18号住	130	20	27	7	4.6	黒曜石
107	竪穴1	56	18.5	22	8	3.5	〃
	B-21	268	22.5	26	8	4.6	〃
108	C-18	158	26	27	7	5.4	〃

図番号	出土地点	遺物No.	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石材
109	E-19	——	20	24	7	3.5	黒曜石
110	E-20	149	19	24	7.5	3.6	〃
111	Z	——	24	27	7	4.3	〃
	Z	——	24	22	7.5	4.6	〃

使用痕のある剝片・石核・原石

No	図番号	出土地点	遺物No.	型　式	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	使用痕部の長さ mm	使用痕部の角度	石材
1	125	1住ユカ	—	I Ca	26	17	5	2.2	8+25	60	黒曜石
2	126	〃	13	I Cc	27	18.5	7	2.9	11	30	〃
3	127	〃	56	I (Ca+Bc)	20.5	19	5.5	2.2	18+20	30	〃
4	128	〃	—	I Bb	27	17.5	7	2.6	19	50	〃
5	129	2住	90	I Bc	30	17	8	3.2	9	40	〃
6	130	3住ユカ	29	I (Ba+Bb)	25	23	5.5	2.4	9+15	15	〃
7	131	4住	67	I Bc	31	11	5	1.3	25+24	40	〃
8	132	4住ユカ	102	I Bc	36	13	6.5	2.7	5+10+10	40	〃
9	133	4住炉内	116	I Bb	27	15	5	1.7	17	25	〃
10	134	4住	—	I Bc	19	10	3	0.5	13+10	30	〃
11	135	7住	23	I (Bc+Bc)	32	15	8.5	3.4	7+6+8+19	45	〃
12	136	〃	23	I (Ba+Bb)	23.5	13	5	1.6	8+15+6	40	〃
13	137	〃	66	I (Cc+Bb)	21	18	8	3.4	21	40	〃
14	138	〃	152	I Cc	20	16	4	1.4	7	40	〃
15	139	〃	164	I Cc	21	14	6	1.4	12+8+3+4	40	〃
16	140	〃	208	I (Bb+Bb)	25	22.5	4.5	1.6	12+5	30	〃
17	141	〃	368	I (Ba+Cb)	23.5	18.5	6	2.4	25+15	30	〃
18	142	〃	382	I Cc	27	13	4	1.0	14	25	〃
19	143	〃	384	I Bc	33	17.5	6	3.4	15	45	〃
20	144	〃	470	I Bc	23	11	7	1.1	26	45	〃
21	145	〃	485	I Bc	30	11.5	7	1.6	16	30	〃
22	146	〃	587	I Bb	30	27	5	3.9	8+13	35	〃
23	147	〃	635	I Bc	26	14.5	4.5	1.3	10+13	25	〃
24	148	〃	643	I Bb	14	20	7.5	1.6	9	25	〃
25	149	〃	654	I (Bb+Ca)	24.5	14	8.5	1.9	16	35	〃
26	150	〃	672	I Ca	28	25	8	4.7	22+5	30	〃
27	151	〃	—	I Cb	39.5	17	8	4.5	16	30	〃
28	152	10住	16	I Bc	18	14	4	1.0	17+10	45	〃
29	153	〃	61	II (Bc+Bc)	28	11	6.5	1.4	13+13	45	〃
30	154	11住	2	I Bc	32	18	6.5	4.9	15	65	〃
31	158	〃	17	II Bc	27	18	11	4.0	14	45	〃
32	159	〃	40	I Ba	16	17	5	1.2	11	75	〃
33	157	〃	190	I Ca	16.5	15	9.5	2.5	20	60	〃
34	155	〃	215	II Bc	27	23	11	5.5	8+11	60	〃
35	156	〃	282	I Cc	33.5	19	9	3.7	27+14+12	40	〃
36	160	〃	287	I Bb	21	21	4	1.5	11+19	65	〃
37	161	12住	76	I Cc	28	18	5.5	2.1	23	30	〃
38	162	〃	96	I Bc	21	13	4	0.8	15	60	〃
39	163	〃	246	I (Cb+Bb)	35	13	8.5	1.9	28	55	〃
40	164	13住	54	I (Bb+Cc)	26	11	3.5	0.9	18+11	25	〃

No	図番号	出土地点	遺物No.	型　　式	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	使用痕部の長さmm	使用痕部の角度	石材
41	165	13住	56	I (Cb+Ba)	30	20	4.5	2.3	20+ 7 +28	35	黒曜石
42	167	〃	103	I Ba	28	19	8	2.4	17+27	50	〃
43	166	〃	104	I Bc	21	18.5	4	1.4	14	25	〃
44	168	〃	133	I Bb	20	17	5	1.5	13	30	〃
45	169	〃	186	I Bc	35	17	6.5	3.4	34	25	〃
46	170	〃	317	I Cc	29	16	9	3.6	19	70	〃
47	171	〃	358	I Cc	25	11.5	4.5	1.3	18+12	70	〃
48	174	〃	434	I (Cb+Cb)	20	13	3.5	0.6	14+12	35	〃
49	175	〃	448	I Ba	14	11	2.5	0.5	6	20	〃
50	173	〃	454	I (Bb+Bc)	29	15.5	4	1.6	9 +18+12	20	〃
51	172	〃	864	II Cb	38	13.5	7.5	4.5	12	50	〃
52	176	14住	5	I (Ba+Bc)	23	17	9	2.4	18+14	45	〃
53	177	〃	61	I Bc	17	14	2.5	0.7	15	20	〃
54	178	〃	133	I Bc	25	14.5	6	2.2	27	30	〃
55	179	〃	424	I (Ba+Bc)	19.5	15	3.5	0.8	19+16	20	〃
56	180	16住	83	I Bc	23.5	12.5	5.5	1.7	11	45	〃
57	181	〃	101	I Cc	19	19	4	1.5	7+10	45	〃
58	182	〃	160	I Cb	31	22	9	3.6	12	55	〃
59	183	〃	206	I Cb	35	21	9	4.9	7+14	70	〃
60	185	16住P. 1	—	II ?	19	24	7.5	4.0	17	70	〃
61	184	17住	47	I (Bb+Ca)	33	22	6	2.3	20+38	20・50	〃
62	189	〃	65	I Bc	16	20	5.5	2.2	14	75	〃
63	187	〃	256	I Bc	37.5	17	9.5	4.3	25	55	〃
64	188	〃	296	II Bc	16	17.5	7	1.7	8	60	〃
65	186	〃	351	I Bc	19	21	5.5	2.0	10	30	〃
66	190	〃	376	I Ba	21	15.5	5	1.2	10	65	〃
67	191	〃	389	I Bb	20.5	20	6	1.9	11	40	〃
68	192	〃	397	I Cc	23	24	6.5	2.1	15+15	65	〃
69	193	18住	31	I (Bc+Cc)	26	13.5	7	2.2	15+ 8	70	〃
70	194	〃	42	I Bc	31	10.5	4	1.6	25	25	〃
71	195	18住	63	I (Bb+Bb)	31.5	20	12	4.6	28+21+10	25	〃
72	196	〃	67	I Bc	26	19	4	2.2	40+ 7	25	〃
73	197	〃	164	I Cc	22.5	12	5	1.4	18	50	〃
74	198	〃	165	I (Cc+Bb)	26	23.5	11.5	6.3	17	20・50	〃
75	199	19住	37	I Bc	23	18	10	4.7	19	45	〃
76	200	〃	46	I Ca	34	17	7	2.6	14+ 5	35	〃
77	201	〃	62	I Ca	24.5	16.5	7	2.1	12+ 7 + 5	25	〃
78	202	〃	65	II Bc	35.5	11.5	8.5	3.9	14+ 8	65	〃
79	204	土壙 4	—	I Bc	28	17	4.5	1.6	27	60	〃
80	203	土壙 17	—	I Bb	43	15.5	8	5.5	32	60	〃
81	205	土壙 32	23	I Bc	22	21	7.5	3.2	20	45	〃
82	206	土壙 42	—	I Bb	33	19	5	3.2	11	70	〃
83	207	竪穴 1	43	I Bb	34	21	9.5	6.3	15	45	〃
84	208	R.M-2	47	I Bb	31.5	15	3.5	1.3	20	30	〃
85	209	R.M-5	10	I Ba	33	20	7	4.4	16+12	30・60	〃
86	210	R.M-10	3	I Cc	21	26	8	3.8	17	55	〃
87	211	後集 5	11	I Ba	49	20	12	7.5	29	50	〃
88	212	A-21	166	I Cc	36	14.5	5.5	2.3	29	45	〃
89	213	A-21	174	I Ba	28	14.5	6	1.8	22+13+17	45	〃
90	214	B-17	21	I (Bc+Ba)	20	27	11.5	5.4	44	45	〃
91	215	B-21	29	I Ba	32	16	10.5	3.5	15	70	〃
92	216	〃	133	II Bc	22	20	9.5	3.8	14	55	〃
93	217	C-18	89	II Bb	31	23	10	9.1	16	75	〃
94	218	〃	102	I Bc	22	26.5	6.5	5.2	18	45	〃
95	219	〃	142	II Cc	21	19	7	2.7	20	60	〃
96	220	C-19	3	I (Bb+Bc)	36	18	9	4.7	12+17	35・45	〃
97	221	D-16	392	II Ca	12	19.5	7	1.5	14	30	〃
98	222	D-18	43	I Bc	20	23.5	3.5	1.7	15	40	〃
99	223	〃	116	I Bc	19	16	3.5	1.0	12	65	〃
100	224	〃	213	II (Bc+Cc)	28	17	6.5	3.1	13	40	〃
101	225	D-19	19	I Bb	31	15	5.5	1.9	20	35	〃
102	226	D-21	2	II Cb	18	25	8	2.7	14	35	〃
103	227	E-16	134	I (Bc+Bb)	20	18.5	6.5	2.3	14+ 7	60	〃
104	228	〃	140	I Bc	26	19.5	6.5	2.7	21+20	45・40	〃
105	229	E-18	45	I Bc	36	12	8	1.8	27	40	〃
106	230	〃	71	I (Ca+Bc)	28	21	4.5	2.3	19+33	25	〃
107		〃	111	I Bc	32	17	3	1.6	19+12	70	〃
108		E 19	109	I (Ba+Bb)	22.5	15	3	1.0	6+19	40	〃
109		E-20	4	I Cb	39	23	7	4.7	13+30	25	〃
110		〃	153	I Bc	28	17	7	3.3	14+14+12+14	65	〃

No	図番号	出土地点	遺物No.	型　　式	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	使用痕部の長さmm	使用痕部の角度	石材
111		F-16	27	I Bc	45	18	7	4.9	24	50	黒曜石
112		F-17	91	I Ba	24	11.5	5.5	1.3	17+10	40	〃
113		F-18	82	II Ba	26	15	6	2.3	18+ 8	45	〃
114		F-19	122	I Cc	25	14.5	4	1.2	19	45	〃
115		〃	—	I Ba	13	15	4.5	0.7	16	65	〃
116		C-18	95	I Bc	20	14	3	0.7	9.5	20	〃
117		G-18	56	I Cc	27	18	6	2.3	27+10+10	45	〃
118		後集-2	23	I Bc	21	24	4	2.2	14+21+13	35	〃
119		Z	—	I Bc	20	25	4.5	2.2	10+ 4	35	〃
120		〃	—	I Bc	22	21	8	3.6	12+11	45	〃
121		〃	—	I Cb	27	10	6	1.4	21	45	〃
122		〃	—	I Bc	32	17	8	3.6	31	60	〃
123		〃	—	I (Ba+Bb)	34	17	4	2.2	11+22	25	〃
124		中集-1	119	I Bc	31	16	6	2.5	16	35	〃
125		17住	390	II Bc	26	10	6	1.3	18	55	〃
126		土壙5	—	II Cc	16	13	4	0.6	7	30	〃
127		土壙13	—	I Bc	17	22	8	2.5	19+12	50	〃
128		土壙4	7	I Bc	32	17	3	1.6	18+12	30	〃
129		土壙54	13	II Bd	35	21	9	5.1	10	55	〃
130		土壙65	7	I Bb	15	13	3.5	0.7	8	55	〃
131		土壙73	13	II Bc	31	24	8	7.6	25+ 9	25	〃
132		土壙112	3	I Bc	19	18	3.5	0.9	7	20	〃
133		土壙112	1	II Ba	19	16	7	1.6	18	25	〃
134		中集 1	2	II Bc	29	20	9	4.3	7	65	〃
135		〃	79	II Cb	26	19	13	5.4	12	60	〃
136		〃	77	II Ba	23	14	7	2.2	11	60	〃
137		後集 2	23	I Bb	27	14	5	1.9	9	30	〃
138		後集 4	12	II Cb	27	26	20	12.9	16	80	〃
139		〃	12	I Bc	20	14	5	1.6	14	45	〃
140		後集 2	124	I Bb	37	12	7	2.5	17	50	〃
141		土壙 34	2	I Bc	22	13	5	1.4	8	50	〃
142		土壙106	2	I Bc	29	21	6	2.5	7	35	〃
143		竪穴 1	46	I Ba	23	12	8	1.4	15	70	〃
144		〃	97	I Bc	25	13	6	1.4	15	30	〃
145		〃	3	I Cc	18	9	6.5	0.8	16	75	〃
146		R.M.1周辺	30	II Bb	30	16	13	7.1	8	85	〃
147		R.M.10	3	I Bc	24	16	5	1.6	17	70	〃
148		〃	3	I Bc	22	16.5	5.5	1.4	15.5	55	〃
149		3住フ	68	I Cc	36	17	10.5	4.8	24+11+16	70	〃
150		3住ユ	79	I Ba	30	18	10.5	4.6	10+15	35	〃
151		13住	46	I Ca	29	15.5	5.5	2.3	12	60	〃
152		12住	63	II Cc	22	22	8.5	4.1	22+23+26	60	〃
153		〃	42	I Ba	23	14	6.5	1.4	10	20	〃
154		〃	157	I Ba	32	17	7	3.3	21.5	55	〃
155		〃	210	I Ba	18	20	4.5	1.4	13	40	〃
156		〃	26.5	I Ba	18	12	4	0.7	8.5	30	〃
157		〃	288	I Bc	25	18	4	1.5	10+10	30	〃
158		〃	385	I Bc	33	15	4.5	2.0	8	65	〃
159		AG-64コク	—	I Bc	24.5	19	6	2.4	14	30	〃
160		AH-62コク	—	I Bc	19.5	28	5	2.2	11	45	〃
161		AH-64コク	—	I Bc	39	12	6	2.0	6	25	〃
162		AI-60	—	I Cc	19	21.5	6	2.2	11	25	〃
163		AI-65	—	I Ba	26	23	6	3.7	8	35	〃
164		AK-53コク	—	I Bc	15	25	5.5	1.6	10	40	〃
165		AO-55	—	I Ba	24	18	8.5	2.5	5	45	〃
166		AO-62コク	—	I Cc	25	18	10	3.5	14	45	〃
167		AT-60	—	II Cb	29	20	10	5.8	9	60	〃
168		A-20	38	II Bb	26	29	10	5.9	16	70	〃
169		〃	164	I Ca	15	19	4	1.1	16	70	〃
170		A-21	37	I Bc	18	24.5	7	2.5	11	70	〃
171		〃	29	II Bc	24	20	11	4.7	19	45	〃
172		〃	169	I Bc	19	22	5.5	1.8	8+ 7	40	〃
173		〃	228	I Cc	16	13	6	1.2	11	40	〃
174		〃	—	I Bc	21	15	6.5	2.3	13	50	〃
175		B-20	8	II Cc	28	14	11	3.4	12	70	〃
176		〃	80	I Bc	20	24	6	3.2	12+14	35	〃
177		B-20	145	I Bc	30	16	8	2.1	32	60	〃
178		B-21	419	I Bc	16	25.5	6	2.2	12	40	〃
179		C-17	57	I Bc	17	16	5.5	1.2	12	40	〃
180		〃	75	I Ba	21	20	4.5	1.4	8+ 4	35	〃

No	図番号	出土地点	遺物No.	型　式	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	使用痕部の長さmm	使用痕部の角度	石材
181		C-17	209	III Bc	41	31	8	9.9	15	65	黒曜石
182		C-18	61	I Bc	20	15	5	0.9	9	25	〃
183		〃	64	I Bc	31	21.5	9.5	4.6	15	45	〃
184		〃	118	I Ba	14	18	3.5	0.9	23	65	〃
185		〃	123	I Bc	18	18	5	1.5	9+10	70	〃
186		〃	146	I Bb	32	15	6	2.4	8	40	〃
187		〃	211	I Bc	14.5	23	7	1.7	12.5	45	〃
188		〃	235	I Bc	33	10	5.5	1.5	17+12	40	〃
189		〃	245	I Bc	25	15	7	2.1	7	70	〃
190		C-19	37	I Bc	31	13	5.5	2.5	16.5+28	70～75	〃
191		〃	7	I Bc	20	14	7	1.5	6	40	〃
192		D-16	257	I Bc	23.5	15	4	1.1	9	20	〃
193		〃	278	I Bc	24	28	9	4.8	13+12	55	〃
194		〃	403	I Bc	17	16	3	0.6	8	20	〃
195		〃	412	I Bc	34	14	12	3.8	9	75	〃
196		D-17	18	II Bb	25	28	11	0.4	9	65	〃
197		D-18	52	II Cc	35	29	14	15.2	17	55	〃
198		〃	54	I Bc	18	12	3.5	0.6	8	45	〃
199		〃	82	I Bc	17.5	12	3.5	0.6	11	35	〃
200		〃	236	I Bc	18	28	7	3.4	12+10	60	〃
201		D-19	7	I Ba	19.5	22.5	11	3.6	11	75	〃
202		〃	43	I Ba	25	15	7	1.8	21	40	〃
203		〃	55	II Cc	38	23	10	8.0	17+12	45	〃
204		D-20	97	I Bc	25	17	8	4.0	12	45	〃
205		〃	104	II Bc	27	31	13	9.8	8	55	〃
206		〃	145	II Bc	46	16	14	12.2	20	70	〃
207		〃	153	I Ba	13	18	3	0.8	7	30	〃
208		〃	158	I Bc	16	21	3	0.8	7	70	〃
209		〃	182	I Bc	24	13	3	1.2	14	30	チャート
210		〃	206	I Bc	23	18	8	2.1	10	30	黒曜石
211		D-20	—	I Bb	24	16.5	5	1.1	7.5	50	〃
212		D-21	22	I Bb	16.5	16.5	2.5	0.6	11	20	〃
213		〃	43	I Cc	23.5	15	9	2.6	21	70	〃
214		E-16	40	I Bb	14	19	3	0.6	6	25	〃
215		〃	55	I Cc	22	15	7	2.0	9	45	〃
216		F 16 コク	—	I Bb	18	14	7.5	1.8	7+6	40	〃
217		E-18	6	I Bc	16.5	20	2.5	1.1	5	30	〃
218		〃	70	I Bc	22	21	5	2.2	10	80	〃
219		〃	75	I Bc	17	21	3	1.2	18	30	〃
220		〃	97	I Bc	27	28	10	6.5	11.5	75	〃
221		E-19	3	I Bc	21.5	11	8	0.9	5	25	〃
222		〃	13	I Bb	30	17	5	1.8	8.5	25	〃
223		〃	26	I Cb	18.5	22	8	2.8	13	35	〃
224		〃	39	I Ba	29	18	13	4.0	7+8	45・70	〃
225		〃	137	I Bc	25	16	9	3.3	7+11	75	〃
226		E-18	114	II Bc	17	18	6	2.0	7	45	〃
227		E-20	5	I Ba	21	13	3	0.7	8.5	15	〃
228		〃	8	II Bb	40	18	16	7.4	20	60	〃
229		E-18	124	I Bc	30	17	10	2.9	8.5	75	〃
230		F-16	22	I Bc	27	18	5	1.5	4.5	25	〃
231		F-16 コク	—	I Bb	36	11	6	2.1	22	40	〃
232		F-16	16	I Bc	37.5	14	8	3.8	18+25+22	80	〃
233		F-17	14	I Bc	28	12.5	4	1.4	15+6+6	25	〃
234		〃	17	I Bc	12	17	3	0.6	12	35	〃
235		〃	26	I Bb	16	22	9	2.0	5	20	〃
236		〃	50	I Cc	13	22	4.5	1.2	12.5	30	〃
237		〃	59	I Ba	19	14.5	4	1.0	12	30	〃
238		〃	61	II Cc	36	18.5	13	7.6	21	75	〃
239		F-18	13	I Bc	23	20	10	4.6	16+10	50	〃
240		〃	41	II Ca	19	23	5	1.7	12	25	〃
241		〃	47	II Ba	35	21	15	7.5	24	65	〃
242		〃	53	II Bc	20	14	10	3.0	6	80	〃
243		〃	88	II Bc	24	14.5	12	3.0	10	50	〃
244		F-19	43	II Bc	27.5	16	7	2.6	11+8	50	〃
245		〃	82	I Bc	27	11	3	0.7	17.5	30	〃
246		〃	84	II Bc	27	30	9	5.7	13+14.5	45	〃
247		〃	145	II Cc	32.5	21	11	5.4	12	50	〃
248		〃	150	I Bc	22	17	6	1.7	8	40	〃
249		G-16	31	I Bc	13	21.5	7	1.0	10	65	〃
250		G-17	33	II Cb	21	20	7.5	6.4	14	75	〃

No.	図番号	出土地点	遺物No.	型　　式	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	使用痕部の長さmm	使用痕部の角度	石材
251		G-18	57	II Bb	27	19	9	3.5	11	40	黒曜石
252		〃	63	I Bb	13	20	4	0.9	7	40	〃
253		〃	85	I Bb	38	19	9	4.4	18	35	〃
254		7住	—	I Bb	42.5	11	8.5	3.3	13+13	55	〃
255		〃	118	I Bb	24	14	4.5	0.9	18	35	〃
256		A-20	45	I Bb	29	24	12	7.0	16.5	50	〃
257		B-19	32	I Ca	22.5	16	4.5	2.2	18.5	20	〃
258		B-17	23	I Bb	26	19	3.5	1.5	12+4.5	25	〃
259		C-17	—	I Cb	15	20	5	1.2	11	25	〃
260		C-18	271	I Ba	18	15	7	1.2	10	35	〃
261		D-17	108	I Bb	19	16	7	1.8	9	25	〃
262		E-16	102	I Cc	34	16	9.5	3.5	22	30	〃
263		E-20	165	I Ba	25	20	7.5	2.5	11	30	〃
264		〃	152	I Cb	27	15	4	1.4	22+12.5	20	〃
265		E-20	155	I (Bb+Ba)	15	15	5.5	0.8	5	35	〃
266		〃	29	I Bb	15	12	4	0.7	14	25	〃
267		F-17	47	I Ba	14	20	4	0.9	14	25	〃
268		F-19	110	I Ba	21	12	4	0.8	12+ 6	25～35	〃
269		G-18	11	I Bb	13	14	5	0.9	13+ 8	45	〃
270		竪穴1		I (Cb+Ca)	36.5	16	8	2.9	13+21	65	〃
271		中集1	107	I Ba	35	12	8	2.4	14	60	〃
272		AM-49コク		I (Bb+Ba)	35	21	4.5	2.5	7	25	〃
273		AR-59コク		I Ba	25	29	10.5	7.2	10+18	35	〃
274		AQ-62コク		I Bb	31	20	5	3.4	13	40	〃
275		AD-42コク		I Bb	20	25	10	4.5	15+ 7	45	〃
276		AP-59コク		I Bc	37	18	5.5	2.5	30	30	〃
277		AQ-61コク		I (Bb+Ba)	22	13	5	1.2	11+ 8 +17	30	〃
278		AQ-50コク		I Bc	29	13	4	1.7	25	35	〃
279		AG-59コク		I Bb	26	13	4	1.1	14+18	35	〃

打製石斧

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	刃幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破損部	使　用　痕	分類	備　　考
	1	AP57-黒土	8.2	4.8	4.3	1.5	82	緑色片岩	——	a-1.3	IA	
	2											欠番
	3	F19-74	11.4	5.0	4.7	1.6	98	(風　化)	——	——	IIB	
232	4	C18-38	10.7	4.2	4.2	1.3	90	緑色片岩	——	a-2, c-2	IIA	
	5	16住-167	12.8	3.3	2.7	2.3	96	緑色火山岩	——	——	〃	
235	6	D18-29	(7.8)	3.2	2.7	1.2	(52)		基　部	a-3	IIIA	
231	7	16住-62	10.2	3.9	3.6	1.0	59	緑色火山岩	——	a, b, c-3	IA	
234	8	15住-33	7.0	2.7	2.0	1.0	27		——	〃	IIA	
	9											欠番
237	10	F19-39	13.2	5.5	4.7	2.2	224	緑色片岩	——	a, b-3	IIIA	
	11	F19-8	11.5	4.9	3.5	1.9	96		——	〃	IIA	
	12	土壙21-1	12.6	4.5	4.0	1.9	144	緑色片岩	——	a-3	IIIA	
	13	C17-89	(7.7)	3.7	(2.4)	1.0	(45)		基　部	a-1	〃	
	14	2住-10	(6.9)	4.4	3.9	1.6	(66)	緑色片岩	〃	——	A	
238	15	AN59-黒土	(10.7)	4.9	3.0	2.1	(140)	〃	〃	a-1	IIIA	
	16	D16-192	(4.8)	3.0	2.3	1.5	(32)	〃	〃	a-2	A	
	17	7住-658	(6.8)	4.1	3.3	1.0	(40)	緑色火山岩	〃	b-3	〃	
	18	1住-42	(7.3)	5.5	4.3	0.9	(46)	緑色片岩	〃	a-3	〃	
239	19	後集4-120	9.9	4.9	4.9	1.5	92	緑色火山岩	——	a,b,c-3	IB	
	20	後集2-172	9.8	5.0	4.6	2.2	114	硬　砂　岩	——	——	〃	
241	21	土壙39-20	(10.7)	5.5	5.0	1.7	(123)	〃	基　部	——	IIB	
240	22	17住-2	12.0	4.7	4.7	1.8	121	緑色火山岩	——	a-2, a,b-3	IB	
	23	16住-92	12.2	4.3	4.0	1.5	111	(風　化)	——	——	〃	
242	24	Z	10.3	5.2	4.8	2.2	123	緑色片岩	——	a-3	IIB	
	25	AQ63-黒褐土	12.4	4.4	3.4	2.1	160	緑色火山岩	——	a-1	〃	
	26											欠番
283	27	C19-121	(9.7)	3.0	2.7	1.4	(58)	緑色火山岩	基　部	b-3	IID	
243	28	E16-15	11.7	5.2	4.7	1.2	119	緑色片岩	——	〃	IIIB	
244	29	中集1-43	(10.2)	5.0	4.7	2.3	(124)	硬　砂　岩	基　部	〃	〃	
	30	F18-59	10.3	4.5	4.3	1.1	78	緑色片岩	基　端	a,b-3	〃	
245	31	C17-82	7.9	4.5	4.0	1.5	69	〃	——	a-2, c-3	〃	
247	32	3住-9	10.3	5.2	5.2	2.3	163	〃	基　端	a-3	IB′	
	33	後集2-75	(9.3)	4.3	4.3	1.7	(83)	〃	基　部	〃	IIIB′	
246	34	竪穴1-1	9.0	6.1	6.1	1.8	87		——	a-1	IB′	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	刃幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破損部	使　用　痕	分類	備　　考
	35	AP57-黒土	9.6	7.2	7.2	2.5	194	砂　　岩	——	——	〃	風化
	36	G17-2	10.1	5.3	5.3	1.2	81	緑色片岩	——	——	〃	
	37	11住-229	8.5	3.0	2.0	1.2	47	〃	——	a-1	IIB	
	38	BH42-黒土	(7.7)	4.1	3.7	1.4	(54)	〃	基　端	a,b,c-3	IIB′	
	39	AP58-黒土	14.8	5.2	4.5	2.2	163	硬　砂　岩	——	——	〃	
250	40	2住-85	9.6	5.0	4.2	1.6	94	緑色火山岩	——	a,b-3	〃	
	41	Z	10.0	4.5	2.8	2.5	133	〃	——	a-1	IIC	基部に敲打痕
	42	C18-98	9.1	4.4	4.3	0.9	65	緑色片岩	——	a-2	IIIB′	
248	43	17住-97	8.1	5.2	4.3	1.5	89	緑色片岩	——	a-3	IIB′	
255	44	後集2-69	6.0	4.2	4.0	1.7	50	硬　砂　岩	——	〃	IIIB′	
	45	16住-19	10.7	4.7	4.3	1.5	97	粘　板　岩	基　端	〃	〃	
254	46	C18-41	11.3	4.7	4.3	2.4	167	硬　砂　岩	——	〃	〃	
253	47	Z	13.0	5.6	5.3	2.0	179	砂　岩	——	a,b-3	〃	
256	48	B21-375 E18-26	15.4	4.6	3.7	1.7	162	粘　板　岩	——	a-3	〃	接合品
	49	C18-148	(4.1)	4.3	4.0	1.2	(29)	緑色片岩	基　部	a,b-3	B	
	50	R.M.121「周辺	(5.3)	5.0	5.0	1.2	(44)	緑色火山岩	〃	〃	B′	
	51	A20-18	(5.3)	4.7	4.7	0.8	(32)	緑色片岩	〃	〃	〃	
	52	13住-148	(7.9)	4.9	4.6	1.5	(70)	(風　化)	〃	——	IB′	
260	53	C17-25	9.1	5.5	5.5	0.9	61	緑色片岩	——	a.b-3	IC	
258	54	16住-208	10.6	5.3	5.3	1.6	111	砂岩(風化)	——	——	〃	
	55	Z	11.2	5.0	4.8	1.6	88	緑色片岩	——	a-3	IC′	
259	56	A21-125	9.5	7.6	7.6	1.4	154	〃	——	——	IC	
273	57	7住-481	(10.1)	4.8	4.8	1.1	(81)	〃	基　端	a,b-3	IC′	
	58	B17-17	(9.7)	5.6	5.5	1.6	102	砂質粘板岩	基　部	a-1	〃	
	59	土壙53-9	6.1	3.6	3.8	1.1	38	(風　化)	——	〃	〃	
261	60	10住-153	8.9	4.4	3.7	1.3	60	緑色片岩	——	a,b,c-3	IIC	
251	61	7住-353	10.5	4.2	3.8	1.6	87	〃	——	a-3	IIB′	
	62	Z	10.2	4.3	3.9	1.5	86	〃	——	b-3	IIC	
277	63	E20-52	14.3	3.7	3.1	0.8	60	〃	——	b,c-3	IIC′	
	64	土壙1-2	9.8	5.0	4.6	2.3	138	緑色火山岩	——	a-1.3	〃	磨製石斧の転用？
276	65	G16-1	9.2	4.2	4.0	1.4	81	緑色片岩	——	a,b,c-3	〃	
288	66	F15-21 9住-21	(8.8)	4.5	(4.2)	1.3	(65)	緑色火山岩	刃　部	b,c-3	II	接合品
257	67	16住-146	12.3	5.5	5.3	2.4	186	緑色片岩	——	a-2,b,c-3	IC	
264	68	E20-169	12.7	5.4	5.0	1.8	210	〃	——	a-2,b-3	IIC	
	69	17住-378	14.0	5.5	4.7	1.5	156	砂　　岩	——	——	IIC′	風化
262	70	AP58-黒土	10.9	4.2	3.7	1.7	120	緑色片岩	——	a,b,c-3	IIC	
252	71	土壙65-5	11.6	4.8	4.0	2.3	130		刃　部	a-3	IIB′	
280	72	C17-149 C17-159	15.4	4.2	4.2	2.6	237	緑色片岩	基　端	——	IIIC′	接合品
265	73	7住-12	13.9	5.3	4.4	1.5	146	〃	——	b-3	IIC	
267	74	Z	13.2	5.9	5.5	1.9	181	〃	——	a-2, b-3	IIIC	
	75	Z	7.8	3.8	3.3	1.1	51	〃	——	a,b-3	IIIB′	風化
	76	19住-23	11.3	5.8	5.8	1.7	161	硬　砂　岩	——	a-1, b-3	IIIC′	
	77	後集4-130	11.3	5.4	5.4	1.3	116	緑色片岩	——	a-3	〃	
	78	後集4-35	10.1	4.6	5.5	1.5	89	粘　板　岩	——	〃	IIIC	
271	79	7住-165	(9.6)	4.5	4.3	2.7	(133)	緑色片岩	基　部	a-1	〃	
	80	7住-3	(9.6)	5.0	5.0	1.8	(95)	〃	〃	——	IIB′	
266	81	Z	12.6	4.5	4.0	1.4	108	〃	——	a-3	IIIC	
	82	16住-39	13.3	4.6	3.8	1.8	109	〃	——	a,b-2	IIIB′	
	83	A20-118	7.4	4.4	3.8	2.3	80	砂　　岩	——	——	IIC	
	84	7住-425	11.3	3.4	3.3	1.1	46	(風　化)	——	——	IIIC′	
	85	中集1-117	9.3	4.3	4.3	1.1	54	〃	——	——	IIIC	
	86	C17-89	9.1	4.0	3.6	1.7	70	緑色火山岩	——	a-1	IIIA	粗製
236	87	7住-55	7.5	3.5	2.6	1.0	32	緑色片岩	——	a-3	IIIA	
282	88	11住-66	8.5	6.3	6.5	1.4	100	〃	——	a-1	IIIC′	
269	89	D20-135	7.7	4.5	4.0	1.6	75	〃	——	a-2	IIIC	
	90	1住-121	(5.6)	5.4	5.4	1.2	(50)	砂　　岩	基　部	——	C′	風化
	91	H18-17	(7.7)	4.6	5.0	1.4	(65)	緑色火山岩	〃	a,b-3	〃	
	92	B20-121	(5.5)	4.3	3.7	2.2	(68)	〃	〃	〃	C	
	93	Z	(6.9)	5.0	4.7	1.6	(63)		〃	〃	C′	
	94	AT63-耕土	(7.0)	4.5	3.7	1.6	(71)		〃	——	〃	
272	95	土壙121-2	9.6	6.2	6.2	1.8	95	緑色片岩	——	a,b-3	IC′	
275	96	19住-13	10.3	5.1	5.1	1.9	121	〃	——	a-2, a,b-3	〃	
281	97	土壙57-5	17.5	4.1	4.1	1.9	110	緑色火山岩	——	a,b,c-3	IIIC′	
	98	土壙74-2	11.8	4.8	4.6	1.9	123	〃	——	a,b-3	IIC′	
	99	C19-5	13.0	6.3	5.7	1.7	122	砂質粘板岩	——	——	IC′	
263	100	4住-34	9.8	4.6	4.0	1.9	100	緑色片岩	——	a-3	IIC	
	101	C17-158	11.5	4.0	3.7	1.6	86	〃	——	a,c-3	IIIC′	
	102	16住-47	13.1	4.3	3.5	2.0	154	緑色火山岩	——	b-3	IIC	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	刃幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破損部	使用痕	分類	備　考
	103	後集4-10	11.8	3.6	3.4	1.3	83	緑色片岩	——	a-1	IIC	
268	104	16住-7	13.8	4.8	4.0	1.2	119	〃	——	a,b-3	IIIC	横刃型石器？
270	105	17住-328	14.8	4.3	3.5	2.1	164	〃	——	a-3	〃	
279	106	11住-56	12.2	4.8	4.4	2.1	154	〃	——	a,b,c-3	IIIC′	
	107	12住-44	16.4	4.1	3.9	1.9	168	(風　化)	——	——	〃	
	108	AX42-黒土	6.3	5.4	5.2	1.1	53	緑色片岩	——	a-2	〃	
	109	B21-358	(7.1)	5.3	5.2	1.7	(61)	(風　化)	基　部	——	C′	
	110	D17-89	(8.2)	5.9	4.3	2.0	(149)	緑色火山岩	〃	a-2	A	
	111	BH42-黒土	(6.3)	4.6	3.6	1.5	(55)	〃	〃	b-3	C′	
274	112	18住-156	11.3	5.2	4.9	1.1	71	緑色片岩	——	a-3	IC′	
	113	11住-141	8.7	3.0	4.0	1.0	30	緑色火山岩	——	——	IID	風化
	114	11住-254	9.9	3.5	3.3	1.1	56	緑色火山岩	——	a-1	〃	
284	115	10住-67	9.1	3.2	3.0	1.2	41	緑色片岩	——	——	〃	
287	116	11住-93	9.6	2.5	2.0	1.6	46	緑色火山岩	——	——	IIID	
278	117	F17-95	(12.7)	5.5	4.7	2.1	(207)		基　部	a-3	IIC′	
	118	10住-15	12.0	7.2	7.2	1.6	172	硬　砂　岩	——	a-2	IIC	
	119	2住-92	(10.0)	6.0	6.1	1.7	(116)	〃	基　部	——	IC′	
291	120	AQ55-黒土	17.0	10.5	10.4	2.9	535	砂　岩	——	a,b-3	分類外	大形，分銅型
290	121	土壙21-3	13.0	8.5	7.6	3.8	655	緑色片岩	——	a-2	〃	大形
286	122	土壙73-8 C19-110	14.9	2.4	3.1	1.7	93	緑色火山岩	——	〃	IIID	接合品
289	123	B21-211 B21-368	9.0	4.3	(3.1)	0.9	(52)	緑色片岩	基部・刃部の一部	a-2，b-3	II	〃
	124											欠番
	125	7住-238	12.6	2.8	2.5	1.3	50	硬　砂　岩	——	——	IIID	
	126	中集1-96	(5.5)	2.1	2.1	0.8	13	緑色片岩	基　部	——	C′	
	127	C17-124	6.3	4.5	4.5	0.8	36	〃	——	a-3	IC′	
	128											欠番
	129	F15-9	(7.4)	6.2	5.2	1.9	(89)	緑色火山岩	基　部	a-3	B	
233	130	Z	(8.4)	5.8	5.4	1.1	(67)	砂　岩	〃	——	IIA	
	131	7住-513	(6.7)	6.1	5.4	2.0	(94)	砂質粘板岩	基　部	a,b-3	C′	風化
	132	E16-40	(5.7)	5.2	3.8	1.9	81	砂質粘板岩	〃	——	C	
	133	AS61-黒土	(14.6)	4.6	4.4	2.7	(206)	緑色火山岩	刃　部	——	II	
	134	1住-65	(14.2)	5.0	?	2.1	(187)	〃	〃	b-3	II	
	135	竪穴1-35	(10.0)	5.0	?	1.6	(112)	(風　化)	〃	——	〃	
	136	F17-53	(10.3)	4.4	?	2.5	(150)	緑色火山岩	〃	——	〃	
	137	Z	(9.4)	4.5	?	1.7	(110)	〃	〃	——	III	
	138	4住-51	(8.5)	(5.7)	?	1.1	(75)	緑色片岩	〃	——	不能	
	139	F17-61	(12.4)	6.3	?	1.7	(162)	砂　岩	〃	——	I	風化
	140	土壙27東-3	(12.4)	5.7	5.1	2.2	(198)	硬　砂　岩	基部・刃部	a-1	IIC	
	141	B21-409	(7.4)	5.6	?	1.3	(80)	緑色片岩	刃　部	——	II	
	142	F19-59	(7.8)	5.7	?	1.4	(67)		〃	——	不能	
	143	D16-7	(8.0)	4.6	?	2.0	(102)	緑色火山岩	〃	——	II	
	144	中集1-60	(9.3)	4.7	?	1.3	(74)	緑色片岩	〃	b-3	III	
	145	7住-493	(9.1)	3.9	?	1.8	(81)	緑色火山岩	〃	——	II	
	146	D19-13	(9.2)	3.0	?	1.1	(42)		〃	b-3	III	
	147	AH65-黒土	(8.5)	3.8	?	1.0	(38)	砂質粘板岩	〃	〃	II	
	148	C17-173	(9.7)	4.8	?	2.0	(104)	砂　岩	〃	——	不能	
	149	F19-60	(10.3)	4.4	4.3	2.4	(125)	緑色片岩	基　部	a-1	IIIB′	
	150	AM63-黒土	(6.7)	4.5	?	1.2	(51)	硬　砂　岩	刃　部	——	不能	
	151	1住-85	(8.1)	3.4	?	1.0	(38)		〃	——	II	
	152	中集1-27	(7.9)	5.1	?	1.6	(86)	砂　岩	〃	——	不能	
	153											欠番
	154	AI59-黒土	(6.6)	4.8	?	2.4	(98)		刃　部	——	不能	
	155	3住-95	(8.4)	5.2	?	2,3	(105)	輝石安山岩	〃	——	II	
	156	早集1-19	(7.6)	4.1	3.8	2.1	(67)	硬　砂　岩	基　部	——	C	
	157	7住-293	(5.5)	3.9	?	0.9	(30)	緑色片岩	刃　部	——	不能	
	158	後集5-2	8.1	4.3	3.8	2.1	81	砂質粘板岩	——	——	IIIB	風化
	159	F15-8	(6.5)	4.6	?	2.0	(66)	砂　岩	刃　部	——	不能	〃
	160	後集4-104	(6.1)	4.8	?	1.3	(52)		〃	——	不能	
	161	F15-21	(5.9)	4.0	?	0.7	(22)	緑色火山岩	〃	——	I	
	162	7住-469	(9.3)	4.6	?	1.4	(71)	緑色片岩	〃	c-3	II	
	163	F16-黒土	(9.7)	4.6	?	1.3	(66)	砂　岩	基　部	b-3	IIA	
	164											欠番
	165	中集1-37	(6.8)	3.4	?	2.2	(54)	緑色火山岩	刃　部	——	不能	
	166	D18-122	(5.8)	3.4	?	0.9	(23)	〃	〃	——	〃	
	167	AQ59-黒土	(6.8)	4.4	?	1.3	(48)	緑色片岩	〃	——	〃	
	168	H18-7	(6.0)	4.3	?	1.5	(39)	(風　化)	〃	——	〃	
	169	3住-80	(9.3)	3.6	?	1.8	(60)	緑色火山岩	〃	b-3	〃	
	170	7住-617	(4.3)	4.7	?	1.4	(34)		〃	——	〃	
	171	Z	(5.8)	3.3	2.8	1.4	(42)		〃	——	III	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	刃幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破損部	使用痕	分類	備　考
	172	7住-293	(4.8)	2.6	?	0.8	(13)	緑色火山岩	〃	b-3	不能	
	173	F16-15	(4.7)	3.6	?	1.0	(17)	〃	〃	〃	〃	
	174	11住-205	(5.6)	(3.2)	?	(1.0)	(19)	〃	——	——	〃	
	175	R.M.1周辺-36	(4.3)	6.2	?	2.0	(53)	砂　岩	基部・刃部	——	不能	
	176	7住-112	14.9	3.9	3.6	2.2	163	緑色火山岩	——	a-1	IIIB′	未製品？
	177	Z	(6.7)	4.8	4.4	1.0	(46)	〃	基　部	a,b,c-3	不能	
	178	中集1-54	(5.1)	2.3	2.1	1.8	(31)		〃	——	C′	
249	179	16住-179	9.7	5.4	5.0	1.6	119	緑色片岩	——	a,b-3	IIB′	
	180	E16-77	(7.2)	5.5	4.5	2.1	(93)	(風　化)	基　部	——	C	
292	181	Z	25.1	11.7	8.8	3.2	1,150	輝石安山岩	——	——	分類外	大形，風化
	182	R.M.3-1	9.5	4.6	4.4	1.3	77	緑色片岩	——	a-3	IC′	
285	183	11住-206	14.3	4.4	4.0	1.8	154	緑色火山岩	——	a-2	IID	1主面敲打
	184	中集1-127	5.8	4.5	2.7	1.5	44	硬　砂　岩	基　端	——	B	
	185	Z	(7.3)	4.3	3.4	1.3	(50)		基　部	a-3, b-3	IIIC′	
	186	Z	(5.8)	(5.3)	?	1.4	(67)	緑色片岩	基部・刃部	——	不能	
	187										欠番	
	188	C17-117	(8.8)	(3.2)	?	1.8	(61)	緑色片岩	刃　部	——	不能	

使用痕記号　a：刃　部　b：基部側縁　c：基部主面
1：こぼれ　2：つぶれ　3：磨　耗

磨製石斧

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破損部	分　類	備　考
293	1	Z	(10.2)	(4.3)	3.5	(198)		刃　部	乳棒状	研磨なし
294	2	1住-21	(6.3)	(4.0)	2.7	(95)		〃	〃	一部研磨
295	3	AS63-黒褐土	(9.5)	4.5	3.5	(200)		〃	〃	凹み
296	4	17住-8	(9.9)	(4.4)	3.0	(171)		〃	〃	
297	5	17住-43	(7.7)	(3.8)	2.4	(91)		〃	〃	
298	6	C17-44	(11.8)	(3.8)	2.6	(183)		〃	〃	研磨なし
299	7	AQ61-黒土	(9.5)	4.4	(2.6)	(154)		〃	〃	敲打痕
308	8	10住-146	10.6	3.2	1.3	55		——	局部磨製	抉り，刃こぼれ
	9	Z	(7.1)	4.8	(2.3)	(124)		刃　部	乳棒状	研磨なし
300	10	Z	(11.3)	4.1	1.9	(141)		〃	〃	基部主面研磨
310	11	11住-241	14.2	4.6	(2.0)	(167)		基　部	局部磨製	
301	12	F17-70	(13.5)	6.0	(3.6)	(406)		〃	乳棒状	凹み多数，刃こぼれ
306	13	7住-489	11.5	3.3	2.0	121		刃　部	未製品	凹み
	14	C17-23	(10.9)	4.9	3.5	(290)		基　部	乳棒状	刃こぼれ
	15	F19-91	(6.4)	(2.8)	(1.2)	(26)		(破片)	〃	
	16	12住-362	(5.5)	(4.1)	(1.7)	(40)		〃	〃	研磨なし
309	17	Z	10.2	4.0	1.6	95		——	局部磨製	横斧
307	18	C18-85	10.1	3.0	1.3	57		——	〃	〃
303	19	BM41-黒土	10.0	2.8	1.3	66		——	定角式	縦斧
	20	AG63-黒土	(7.4)	(4.7)	1.7	(90)		刃　部	〃	
304	21	F19-111	7.3	5.0	1.6	86		〃	〃	横斧
305	22	G16-36	8.8	5.3	3.0	206		基部？	〃	
302	23	土壙121-5	(8.5)	5.9	2.8	(244)		基　部	乳棒状	縦斧
	24	7住-189	(4.0)	(4.2)	(1.2)	(26)		(破片)	〃	
	25	C17-20	(7.9)	4.6	2.5	(154)		刃　部	〃	研磨なし
	26	AT60	(7.1)	(3.2)	(1.2)	(2.6)		(破片)	乳棒状	

不定形石器

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石　材	備　考
311	1	11住-53	21.9	10.0	4.5	1600	緑色火山岩	側辺部敲打
312	2	11住-402	16.5	4.7	2.7	358	〃	側辺～先端部敲打、つぶれ。磨製石斧未製品？
313	3	11住-403	15.4	5.8	3.0	327	〃	背部・側辺部敲打。抉り
314	4	18住-178	17.8	4.0	2.8	230	〃	側辺部敲打
315	5	D18-193	16.6	4.3	4.9	427	〃	両端破損

大形石匙

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石　材	刃部加工	分　類	備　考
316	1	10住-147	9.3	4.6	1.7	60	硬　砂　岩	片面	縦型	
322	2	1住-1	5.0	7.1	0.9	30	砂質粘板岩	両面	横型	
319	3	F17-64	6.0	8.9	1.8	100	硬　砂　岩	片面	斜型	
324	4	E16-129	5.9	(5.7)	0.8	(35)	砂質粘板岩	両面	横型	両側辺部破損
320	5	9住-20	5.6	9.2	1.4	65	〃	〃	斜型	
318	6	D19-31	5.6	9.8	1.2	57	砂　　岩	〃	〃	
321	7	2住-84	5.6	(8.2)	1.1	(51)	砂質粘板岩	〃	〃	一部破損
317	8	7住-55	11.7	6.3	2.4	155	硬　砂　岩	〃	縦型	
323	9	E19-30	4.1	7.5	1.1	30	粘　板　岩	〃	横型	
	10	11住-155	6.2	10.8	1.1	47		片面	斜型	
	11	Z	(6.7)	(5.2)	1.4	(54)	緑色火山岩	不明	不能	刃部破損

横刃型石器

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅 cm	刃幅cm	厚さcm	重さg	石　材	使用痕	分類	備　考
	1	13住-214	4.2	9.2	7.6	1.5	49	硬　砂　岩	a-1	ⅠA	
	2	E20-93	5.4	8.9	9.1	1.4	74	(風　化)	〃	〃	
330	3	16住-165	4.4	10.3	10.1	0.9	62	緑色片岩	a-3	〃	
	4	D16-69	5.9	7.1	6.4	0.6	32	〃	a-1	〃	
	5	B21-367	2.8	4.7	3.9	0.5	8	〃	——	〃	
	6	土壙68-2	3.0	7.5	4.5	0.9	18	〃	b-3	〃	
	7	9住-31	3.8	13.8	9.5	0.9	51	(風　化)	a-3	〃	
	8	A21-254	4.7	5.0	4.4	1.4	41	硬　砂　岩	——	〃	
	9	AQ63-黒土	5.2	13.4	13.4	1.9	170	緑色片岩	——	〃	
	10	7住-46	3.2	6.5	5.4	0.7	16	〃	a-3	〃	
327	11	B17-25	3.8	10.2	9.1	1.0	56	〃	a-2	〃	
	12	D18-21	3.4	2.8	2.3	0.4	6	〃	——	〃	
329	13	B20-107	2.1	8.7	7.5	0.8	20	〃	a-3	〃	
325	14	16住-94 13住-651	4.3	13.0	7.9	0.9	77	〃	a-1	〃	接合品
380	15	E20-39	3.2	9.4	7.2	0.7	30	〃	a-1,b-3	ⅡB	
	16	Z	5.6	8.4	7.6	1.5	75		——	ⅠA	
326	17	7住-692	5.1	8.2	8.1	0.8	32	(風　化)	——	〃	
	18	土壙54-18	5.4	14.3	8.3	1.7	103	緑色片岩	a-3	〃	
328	19	19住-6	2.9	8.8	8.4	0.5	21	粘　板　岩	a.b.c-3	〃	
	20	土壙32-31	5.7	9.8	9.9	2.4	155	硬　砂　岩	a-3	〃	
	21	R.M.2-12	4.4	5.2	3.3	0.6	12	緑色片岩	a-1	〃	
	22	BA47-黒土	4.0	9.6	4.2	0.8	42	輝石安山岩	——	〃	
	23	AH64-黒土	5.0	7.6	7.1	1.8	115	緑色火山岩	a-3	〃	
	24	1住-105	3.5	9.9	7.1	1.2	45	緑色片岩	a-3,b-2	〃	
	25	A21-117	2.5	6.1	3.0	0.5	10	〃	——	〃	
	26	AP57-黒土	3.0	7.6	4.2	0.9	25	〃	a-1	ⅡA	
333	27	AT57-耕土	5.2	10.9	10.9	1.1	82	〃	a-3	〃	
	28	A20-29	4.4	10.8	4.5	1.8	87	硬　砂　岩	a-1	ⅣA	
	29	早集2-12	5.8	8.9	6.1	1.0	47	緑色片岩	a-1.3	ⅢA	片面研磨
	30	E20-7	3.8	4.4	2.9	0.6	15	〃	——	ⅡA	
	31	AI59-黒土	5.6	6.7	6.3	1.0	38	硬　砂　岩	a-1	〃	
	32	11住-413	3.4	8.3	8.3	0.9	25	緑色片岩	a-1.3	〃	
331	33	C18-207	9.4	11.6	8.4	1.0	131	輝石安山岩	——	〃	風化
	34	17住-182	4.8	13.2	10.4	0.8	66	緑色片岩	a.b-3 側辺-2	ⅡA	
	35	C17-189	4.1	7.9	5.6	1.0	42	〃	——	〃	
361	36	Z	3.9	11.7	7.0	1.0	45	〃	a.b-3	ⅣA	
	37	11住-211	6.3	10.1	6.9	1.6	98	〃	a-3	ⅡA	
	38	11住-373	6.3	11.4	7.2	2.5	147	緑色火山岩	a-1	〃	
	39	4住-61	4.2	7.7	7.5	1.6	51	粘　板　岩	〃	〃	
	40	D17-31	4.5	6.9	4.9	1.4	40	緑色火山岩	——	〃	
	41	17住-67	3.8	6.4	2.8	1.2	28	砂　　岩	a-1	〃	
	42	AR58-黒土	3.7	6.6	6.6	0.4	12	(風化)	〃	〃	
344	43	F18-76	4.8	11.6	7.0	0.7	52	緑色片岩	a-3	〃	
	44	11住-384	4.5	5.2	4.2	0.7	19	(風　化)	a-1	〃	
	45	土壙43-48	7.3	5.8	4.8	1.2	75	珪質頁岩	〃	〃	
	46	7住-28	4.1	4.9	3.0	1.3	26	緑色火山岩	a-1.3	〃	
	47	C17-147	5.0	7.4	5.6	1.4	55	砂　　岩	a-1	〃	
	48	F19-286	3.6	8.0	8.0	0.5	17	緑色片岩	a-1.3	〃	
	49	AT48-黒褐土	4.7	5.3	4.4	1.1	34	粘　板　岩	——	〃	
335	50	1住-113	8.1	6.5	6.5	0.7	45	緑色片岩	a-3	〃	
	51	土壙100-2	3.8	6.7	6.7	0.8	21	〃	a-1	〃	
	52	AQ63-黒土	3.4	4.8	3.9	1.1	20	〃	〃	〃	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅 cm	刃幅cm	厚さcm	重さg	石　材	使用痕	分類	備　考
	53	E20-98	5.1	10.8	8.0	0.8	50	〃	〃	〃	
	54	B20-51	3.6	7.4	7.4	1.9	54	(風　化)	——	〃	
	55	2住-38	3.8	7.1	5.8	0.9	29	緑色片岩	a-1	〃	
	56	C19-108	4.7	3.9	3.7	1.0	21	緑色火山岩	〃	〃	
340	57	C18-162	3.1	6.5	6.2	0.8	16	緑色片岩	a-1.3	〃	
	58	B18-3	3.7	7.0	3.6	0.8	24	〃	a-1	〃	風化
	59	Z	3.1	5.7	4.2	0.9	20	〃	a-3	〃	
	60	AP58-黒土	3.1	5.0	2.6	0.4	8	〃	—	〃	
	61	R.M.10-4	3.4	6.5	6.5	1.1	32	〃	a.b-3	〃	
337	62	AJ61-黒土 AQ59-黒土	6.4	8.9	8.5	1.7	105	砂　岩	b-3	〃	接合品
339	63	後集4-39	4.6	6.0	4.0	1.4	47	〃	——	〃	風化
	64	F16-26	4.1	6.1	5.5	1.0	32	緑色片岩	a-1	〃	
	65	11住-410	3.4	6.6	5.6	0.6	27	〃	a-1.3	〃	
	66	F19-144	2.1	6.2	6.0	0.8	10	砂質粘板岩	a-1	〃	
	67	F19-38	2.7	5.0	4.6	0.7	10	緑色片岩	b-2	〃	
	68	4住-75	2.8	5.8	5.4	0.9	18	〃	b-3	〃	
	69	11住-202	4.5	6.7	6.0	1.0	35	〃	b-2	〃	
332	70	18住-160	4.2	8.0	7.3	0.6	31	〃	a-1.3,b-3	〃	
	71	AK60-黒土	4.1	9.1	8.5	1.4	50	硬砂岩	a-1	II A	
336	72	16住-233	6.4	7.3	3.8	1.4	79	緑色片岩	a-1,b-2	〃	
	73	10住-59	6.6	10.2	7.0	1.7	161	〃	a-3	〃	
341	74	B17-12	6.2	8.7	8.6	1.3	69	砂質粘板岩	——	〃	
	75	AP57-黒土	7.0	10.1	8.0	1.6	127	(風　化)	——	〃	
	76	D20-180	7.2	9.9	6.1	1.1	98	〃	a-1	〃	
	77	D20-41	4.0	7.4	4.8	0.8	22	緑色片岩	b-3	〃	
338	78	13住-125	3.0	7.4	5.2	1.0	19	〃	a-1	〃	
334	79	F18-70	10.0	11.2	11.2	2.1	194	硬砂岩	a-1,b-2	〃	
	80	C16-6	4.3	6.6	5.2	0.7	26	緑色片岩	a-1	〃	
342	81	3住-98	5.7	7.9	6.1	1.2	69	砂質粘板岩	——	〃	
345	82	16住-76	4.8	7.9	5.5	0.8	39	緑色片岩	a-1	〃	
	83	AR61-黒褐土	4.0	7.6	7.2	0.8	30	〃	——	〃	
343	84	4住-3	3.8	8.2	6.6	0.9	42	〃	a-3	〃	
	85	AP58-黒土	5.6	7.7	5.8	1.2	74	〃	a-1,b-2	〃	
	86	C17-160	5.6	10.4	6.5	1.1	76	〃	a.b-3	〃	
	87	F19-193	2.9	8.7	8.5	0.6	25	(風　化)	——	〃	
	88	3住-10	4.2	4.7	3.4	0.6	12	緑色片岩	——	〃	
348	89	11住-244	9.0	13.4	12.5	1.2	143	(風　化)	——	III A	
	90	土壙52-6	3.7	7.0	7.0	0.8	16	〃	a-1	〃	
	91	D16-105	5.5	8.4	8.4	1.2	47	緑色片岩	b-3	〃	
358	92	C17-96	6.3	4.9	4.8	1.3	39	砂質粘板岩	a-1	〃	
	93	D16-176	5.7	4.4	4.4	1.1	22	砂　岩	a-1	〃	風化
	94	土壙6	5.0	7.0	7.0	1.1	42	緑色片岩	a-1.3	〃	
	95	1住その2-125	5.2	8.1	7.4	0.7	33		〃	〃	
	96	D16-224	7.8	8.1	8.1	0.9	66	硬砂岩	——	〃	
	97	AX42-黒土	5.2	5.4	4.5	0.7	22	砂　岩	a-1	〃	
	98	D21-48	5.9	7.3	7.3	1.2	48	(風　化)	a-3	〃	
	99	1住-72	5.8	5.1	5.1	0.6	21	緑色片岩	〃	〃	
359	100	B20-129	6.3	6.7	6.0	0.8	55	〃	〃	〃	
	101	中集1-104	3.3	5.9	5.9	0.9	16	〃	a.b-3	〃	
	102	竪穴3-36	6.4	7.1	7.1	2.1	84		a-1	〃	
	103	11住-237	7.3	8.6	8.2	1.5	88	硬砂岩	〃	〃	
	104	3住-45	3.3	5.3	3.0	0.5	13	緑色片岩	——	〃	
	105	1住炉上-49	3.1	4.0	4.0	0.7	8	(風　化)	——	〃	
	106	AO59-黒土	5.0	5.8	5.8	1.6	34	硬砂岩	a-1	〃	
	107	7住-419	4.6	10.7	9.1	0.7	44	砂　岩	a.b-3	II A	風化
347	108	C17-172	7.5	9.9	8.5	0.9	80	緑色片岩	a-3	III A	
353	109	AG62-黒土 B20-50	5.3	8.3	6.4	1.3	60		a-1	〃	接合品
	110	2住-79	3.1	3.3	2.4	0.6	7	緑色片岩	a-3	〃	
	111	D18-131	3.2	5.0	5.0	0.5	9	〃	——	〃	
	112	B18-4	4.0	3.5	3.5	0.7	12	〃	——	〃	
	113	B20-134	5.3	4.8	2.7	1.5	43		a-1	〃	
357	114	7住-62	4.9	9.3	7.8	1.8	88	緑色片岩	a.b-3	〃	
	115	7住-428	4.3	11.8	11.0	0.7	43	〃	〃	〃	
350	116	3住-53	6.6	7.6	6.7	1.2	70	砂　岩	a-1	〃	
349	117	1住-48	6.8	8.3	8.3	1.6	116	緑色片岩	a-3	〃	
	118	1住その2-156	4.2	8.0	8.0	1.1	31	硬砂岩	a-1	〃	
	119	10住-110	4.1	8.4	8.3	1.4	42	緑色片岩	〃	〃	
346	120	1住東ピット内	6.1	12.0	9.0	1.1	78	〃	〃	〃	
352	121	16住-234	5.5	10.4	10.4	0.6	43	(風　化)	——	〃	
	122	C17-90	2.9	6.8	6.8	0.7	15	砂質粘板岩	——	〃	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅 cm	刃幅cm	厚さcm	重さg	石　材	使用痕	分類	備　考
	123	4住-61	2.8	5.2	4.3	0.9	13	硬　砂　岩	a-1	ⅢA	
	124	Z	3.8	2.9	2.9	0.5	9	緑色片岩	——	〃	
	125	C17-104	6.6	7.1	6.1	1.8	79	砂質粘板岩	a-1	〃	
	126	7住-380	3.9	4.3	4.3	0.5	8	輝石安山岩	——	〃	
355	127	AN49-黒土	4.8	7.3	7.1	1.1	36	緑色片岩	a-3	〃	
356	128	10住-121	5.5	7.6	7.0	0.8	31	(風　化)	——	〃	
	129	19住-85	4.8	3.9	3.1	0.9	18	緑色片岩	a-1	〃	
	130	AK62-黒土	4.6	4.0	3.5	0.9	18	〃	a-3	〃	
	131	18住-97	3.6	5.5	5.2	0.8	15	硬　砂　岩	a-1	〃	
	132	C17-21	6.7	8.8	6.2	1.3	73	砂　　岩	〃	〃	
	133	12住-125	4.3	7.5	6.2	0.8	29	砂質粘板岩	a-3	〃	
	134	B21-18	7.8	9.4	8.7	1.8	139	粘　板　岩	a-1	〃	
	135	AI48-黒褐土	8.0	7.1	5.2	1.5	92	(風　化)	——	〃	
351	136	4住-19	6.5	8.5	8.5	0.9	51	緑色片岩	a-3	〃	
	137	土壙122-40	4.8	5.1	5.1	0.6	19	(風　化)	a-1	ⅡA	
	138	竪穴3-11	6.9	6.7	6.7	1.6	80	〃		ⅢA	
	139	A21-295	5.8	5.8	5.8	0.8	23	緑色片岩	a-1.3	〃	
	140	C19-128	4.2	3.6	3.6	1.0	13	粘　板　岩	a-3	〃	
	141	AT55-黒土	4.6	6.4	4.4	0.9	25	緑色片岩	a-2	〃	
354	142	C17-22	3.3	11.9	8.5	0.7	30	〃	a-3	〃	
	143	11住-255	4.1	8.4	8.1	0.8	31	〃	a-1,b-3	ⅣA	
	144	D18-222	2.5	5.4	5.4	0.6	10	〃	a-3	〃	
	145	F19-22	3.5	9.3	5.9	0.7	25	粘　板　岩	a.b-3	〃	
362	146	2住-29	4.4	9.4	9.4	0.7	35	緑色片岩	a-3	〃	
	147	C19-115	5.6	11.5	11.5	1.5	80	(風　化)	——	〃	
	148	7住-238	4.5	9.5	8.5	1.2	56		——	〃	
	149	A-Z	3.9	8.9	5.8	1.4	39	硬　砂　岩	a-1	〃	
	150	Z	2.3	5.4	5.1	0.3	5	緑色片岩	a-3	ⅡA	
402	151	11住-153	4.8	7.1	7.0	0.6	27	〃	——	ⅣC	磨製
	152	AP59-黒土	4.3	9.2	9.2	1.1	55	〃	a-1,b-3	ⅣA	
	153	1住-97	6.0	11.1	8.5	1.1	67	〃	〃	ⅠB	
368	154	E20-51	4.8	9.9	7.2	0.8	51	〃	a.b-3	〃	
366	155	AS63-黒褐土	6.5	7.7	6.8	0.8	75	〃	a-3,b-1	〃	
	156	7住-55	3.6	9.0	8.1	0.9	34	〃	——	〃	
	157	R.M.1周辺22	3.8	9.4	9.4	1.0	41	砂　　岩	a.b-3	〃	
	158	D16-75	4.7	8.2	7.1	0.8	32	(風　化)	——	〃	
	159	Z	5.4	9.3	7.3	0.9	58	緑色片岩	a-1	〃	
	160	R.M.1周辺44	4.5	7.2	4.2	1.3	49	硬　砂　岩	〃	〃	
365	161	18住-103	3.1	13.6	9.8	0.7	36	緑色片岩	a.b-3	〃	
369	162	D16-393	5.2	11.9	9.4	1.6	115	硬　砂　岩	〃	〃	ノッチ
367	163	11住-248	4.4	10.9	8.2	1.3	71	緑色片岩	〃	〃	
	164	E20-77	3.0	8.9	8.2	0.8	22	〃	a-1	〃	
	165	AR57-黒土	5.4	8.1	8.1	2.1	116	〃	a.b-3	〃	
363	166	D17-62	5.7	9.8	7.3	1.3	92	〃	b-1	〃	鋸歯状刃
	167	16住-113	4.9	5.8	3.5	0.7	32	〃	a.b-3	〃	
	168	10住-31	3.5	8.4	6.3	0.9	26		a-1	ⅠA	
	169	AQ59-黒土	4.7	7.6	7.5	1.2	54		a-3	〃	
382	170	後集2-132	4.3	5.2	3.7	2.3	38		——	ⅢB	
	171	D16-395	3.7	6.4	6.4	0.7	19	砂　　岩	a-3	〃	
	172	13住-595	2.5	4.1	1.8	0.7	9	粘　板　岩	——	ⅠB	
	173	D20-47	3.3	6.5	3.4	1.1	25	緑色片岩	b-3	〃	
	174	C18-148	3.0	4.2	3.5	0.5	8	〃	a-1	〃	
	175	土壙111-8	3.8	3.3	2.3	0.4	7	〃	〃	ⅢB	
	176	AS63-黒褐土	3.0	6.5	4.2	0.5	10	〃	a.b-3	ⅠB	
	177	C18-100	3.6	4.1	3.3	0.7	13	〃	〃	〃	
	178	17住-1	3.1	5.7	3.6	1.3	21	〃	——	〃	
	179	AP57-黒土	2.8	4.8	2.8	0.6	9	〃	a-3	〃	
	180	11住-64	4.5	7.2	4.8	0.9	26	〃	a-1	〃	
	181	R.M.1周辺11	3.9	4.0	3.6	1.2	23	硬　砂　岩	〃	〃	
	182	11住-297	3.1	6.1	4.8	0.5	17	緑色片岩	a-3	〃	
	183	11住-307	3.6	7.0	4.3	1.5	35	〃	a-1.3	〃	
	184	12住-57	2.5	7.0	6.1	0.7	15	〃	a-1	〃	
	185	AN49-黒土	4.1	5.1	4.4	0.9	27	〃	a.b-3	〃	
	186	3住-37	3.4	6.8	5.9	1.0	22	〃	——	ⅡB	
	187	C17-149	3.8	6.8	4.7	1.0	31	砂　　岩	a.b-3	〃	鋸歯状刃
	188	C17-104	3.9	5.3	5.1	1.2	24	〃	a-1,b-3	〃	
	189	AD63-黒土	4.1	5.7	5.3	0.6	15	〃	a-1.3	〃	
372	190	F19-91	6.3	6.2	6.2	1.1	56	緑色片岩	a.b-3	〃	
	191	D19-20	4.6	7.8	5.4	0.6	27	〃	〃	〃	
	192	12住-231	4.9	8.6	7.2	1.1	49	輝石安山岩	a-1	〃	
	193	Z	4.5	7.6	7.0	1.1	53	緑色片岩	a.b-3	〃	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅 cm	刃幅cm	厚さcm	重さg	石　材	使用痕	分類	備　考
374	194	D18-45	5.2	9.7	8.7	0.8	51	砂質粘板岩	a-3	〃	
376	195	16住-189	4.9	10.3	10.0	1.3	78	緑色片岩	〃	〃	
375	196	10住-28	4.9	10.8	10.4	1.0	61	(風　化)	——	〃	
379	197	11住-204	3.0	10.0	9.5	0.8	23	緑色片岩	a-3	〃	
	198	1住その2-119	4.3	7.5	5.9	0.9	39	(風　化)	——	〃	ノッチ
	199	AQ59-黒土	5.5	10.4	8.5	1.2	54	〃	a-1	〃	
	200	17住-140	3.9	10.0	10.0	1.2	45	砂質粘板岩	——	〃	風化
	201	AP61-黒土	2.8	8.0	6.1	0.9	20	緑色片岩	a-1	〃	
	202	土壙73-5	3.7	12.9	10.0	1.3	96	〃	a.b-2.3	〃	
	203	AS63-黒褐土	3.0	8.0	6.3	0.8	22	〃	a-3	〃	
	204	7住-501	4.9	5.6	5.6	0.8	34	粘板岩	b-3	〃	
377	205	7住-113	5.1	10.2	8.3	0.7	53	緑色片岩	——	〃	
	206	3住-61	4.6	10.9	10.9	2.0	101	砂　岩	a-1	〃	風化
	207	1住-70	6.9	7.6	7.0	1.0	60	(風　化)	——	〃	
	208	D16-100	3.4	5.3	4.1	1.4	26	緑色片岩	a-1	〃	
	209	1住その2-131	2.0	5.1	4.6	0.6	6	〃	——	〃	
	210	C17-40	2.5	5.8	4.9	0.7	9	砂　岩	a-1	〃	
	211	7住-693	4.1	7.0	4.5	0.8	24	緑色片岩	a-3	IIB	磨製
381	212	11住-230	4.6	8.6	8.6	0.8	32	(風　化)	——	〃	
	213	C16-104	6.3	10.7	7.0	1.5	106	砂　岩	a.b-3	〃	
	214	D17-76	5.4	8.1	4.5	1.3	56	砂質粘板岩	〃	〃	
	215	7住-43	5.9	9.1	5.8	1.1	71	緑色片岩	〃	〃	
371	216	11住-4	5.5	9.7	9.4	1.8	89	砂質粘板岩	a-1.3,b-3	〃	
	217	中集1-64	4.2	6.4	4.4	1.3	40	〃	a-3	〃	
	218	2住-37	3.5	3.4	2.6	0.5	9	緑色片岩	〃	〃	
	219	9住-41	6.9	7.6	6.5	1.3	86	砂　岩	a-1	〃	風化
378	220	AQ63-黒土	4.5	8.3	6.9	1.0	49	緑色片岩	a-3	〃	
	221	後集5-11	4.8	9.9	8.0	1.1	50	粘板岩	——	〃	風化
373	222	10住-48	5.4	10.7	7.1	1.6	102	硬砂岩	a-1,b-3	〃	
	223	AR60-黒褐土	3.9	10.3	9.4	0.9	49	粘板岩	a.b-3	〃	
	224	3住-78	4.2	10.5	8.3	2.2	95	硬砂岩	a-1	IIIB	
	225	D16-62	3.0	5.5	5.5	0.5	9	(風　化)	——	IIB	
	226	AP57-黒土	3.3	7.9	7.3	1.0	25	〃	a-1	〃	
	227	1住床面	4.3	5.8	3.2	0.9	27	砂質粘板岩	a.b-3	〃	
	228	10住-57	5.0	8.0	6.7	1.8	77	砂　岩	——	〃	
	229	E16-118	3.8	6.4	5.0	1.5	45	緑色火山岩	a-1	〃	
383	230	17住-1	4.0	6.4	6.4	1.0	28	緑色片岩	〃	IIIB	
	231	19住-8	4.9	7.0	5.7	0.7	26	硬砂岩	a-3	〃	
	232	Z	3.4	6.2	5.7	0.6	14	緑色片岩	a.b.c-3	〃	
	233	7住-569	6.1	6.1	5.5	1.7	62	〃	a-3	〃	
384	234	7住-568	4.9	6.0	5.9	1.0	28	硬砂岩	〃	〃	
	235	AQ62-黒土	4.8	11.1	7.7	1.7	89	緑色火山岩	〃	〃	
	236	AS61-黒土	4.3	6.8	6.5	0.8	22	緑色片岩	〃	〃	
385	237	1住その2-135 1住その2-135	7.8	8.1	4.8	1.4	116	〃	a-1.3	〃	接合品
	238	AL64-黒土	5.1	5.5	3.4	1.4	37	粘板岩	a-3	IIIA	
	239	B21-118	5.5	6.8	3.0	1.8	59	(風　化)	a-1	IIIB	
	240	竪穴1-21	5.6	5.0	5.0	1.2	38	緑色片岩	——	〃	
	241	F19-169	6.9	11.0	6.5	2.5	165	硬砂岩	a-1	〃	
	242	竪穴1-67	3.5	4.3	3.5	0.4	8	緑色片岩	——	〃	
387	243	F19-134	3.0	3.6	2.4	0.7	6		a-1	〃	
	244	AP57-黒土	4.6	8.7	7.5	1.5	58	硬砂岩	〃	〃	
386	245	18住-21	5.6	11.4	10.1	1.2	84	緑色片岩	a-1.3,b-3	〃	
	246	G18-34	6.4	8.2	5.5	1.1	62	〃	a-1	〃	
	247	Z	5.7	9.4	6.8	1.5	85	(風　化)	——	〃	
	248	D16-57	5.3	8.4	8.1	0.8	38	緑色片岩	a-1	〃	
	249	C19-65	6.3	7.0	7.0	1.5	53	〃	〃	〃	
	250	A20-123	7.0	8.5	4.8	1.4	99	緑色火山岩	a-1.3	〃	
388	251	C18-58	4.6	6.8	6.1	1.4	42	硬砂岩	a-3,b-2	IVB	
389	252	C17-212	3.4	9.6	9.2	0.8	30	(風　化)	a-3	〃	
401	253	土壙39	4.3	13.0	9.6	0.8	50	緑色片岩	a-2	IVC	鋸歯状刃
	254	7住-706	2.8	7.2	4.3	1.0	20	〃	a-1	IVB	
	255	2住北-102	4.0	10.8	9.9	1.3	74	〃	a.b-3	〃	
	256	C19-81	6.0	6.9	6.5	1.2	57	〃	a-1	IC	
	257	F16-耕土	3.6	8.8	5.7	0.7	30	〃	——	〃	
390	258	18住-134	4.1	14.7	9.9	0.9	53	〃	a-3	〃	
	259	4住-100	3.7	6.3	6.3	0.9	23	〃	a-1	〃	
392	260	7住-21	4.2	8.9	8.8	1.2	53	〃	——	〃	
	261	F19-17	4.5	6.0	5.0	1.0	31	〃	a-1	IIIC	
	262	11住-336	4.2	7.6	5.5	1.1	45	〃	——	IC	
	263	D16-166	3.7	5.9	4.6	0.9	25	硬砂岩	——	〃	
	264	土壙26付近-2	3.5	10.7	3.6	1.4	40		a.b-2	〃	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅 cm	刃幅cm	厚さcm	重さg	石　材	使用痕	分類	備　考
396	265	F19-7	4.3	11.0	9.7	1.0	48	緑色片岩	b-2	IIC	
	266	12住-77	4.3	7.3	5.0	0.8	29	砂　岩	a-1	〃	
	267	14住-367	4.2	8.9	7.7	0.5	27	〃	——	〃	
	268	C17-13	3.5	5.8	5.6	0.9	23	緑色片岩	a-1	〃	
	269	土壙97-1	5.3	9.2	8.2	1.5	72	〃	〃	〃	ノッチ状背つぶし
	270	E18-29	5.4	11.9	11.1	1.2	90	〃	〃	〃	
	271	4住-22	5.0	14.6	14.6	1.0	95	〃	——	〃	
	272	E20-37	5.1	16.1	16.1	1.1	98	〃	a-1	〃	
394	273	F17-30	5.1	7.6	5.0	1.1	60	〃	a.b-3	〃	
393	274	7住-83	3.6	7.6	6.3	1.0	41	〃	a-3	〃	
	275	R.M.1周辺-51	5.0	10.6	9.8	1.2	82	〃	a-1	〃	
	276	3住-53	2.4	8.5	3.1	0.8	16	〃	——	〃	
	277	土壙20-1	5.6	11.1	9.0	1.7	99	〃	a-1	IVC	
397	278	17住-276	6.5	7.5	4.8	1.3	55	(風　化)	〃	IIIC	
	279	F16-6	4.7	6.0	4.8	1.1	31	粘板岩	a-3	〃	
	280	B20-17	5.7	7.5	6.2	2.1	95	硬砂岩	a-1	〃	
	281	D16-60	4.1	6.0	3.8	1.0	20	砂質粘板岩	〃	〃	風化
	282	E16-133	4.7	6.1	5.5	1.2	40	緑色片岩	a-3	〃	〃
	283	D16-97	4.0	5.8	4.5	1.0	28	(風　化)	a-1	〃	
	284	D18-227	6.0	9.8	8.3	1.5	96	〃	——	〃	
400	285	1住-15	5.1	9.0	9.0	0.8	41	緑色片岩	a-1	〃	
	286	B20-150	5.8	5.5	5.1	1.0	38	〃	〃	〃	
	287	後集2-142	4.3	5.4	3.8	1.3	31	砂　岩	——	〃	
	288	後集2-141	5.6	7.4	2.3	1.0	49	緑色片岩	——	IC	
	289	1住床面	3.6	7.5	5.0	0.8	35	〃	b-2	IIA	
	290	Z	6.8	7.5	5.0	2.2	90	砂　岩	a-1.3	IIB	
399	291	B21-378	7.0	10.4	10.4	2.2	146	硬砂岩	a-1	IIIC	残核
	292	A21-72	7.9	11.4	11.4	2.2	194	砂　岩	——	〃	風化
	293	D18-134	6.8	7.5	7.5	2.1	123	粘板岩	——	IIIA	〃
	294	11住-29	7.4	10.2	10.2	2.5	202	砂　岩	——	IIA	
370	295	9住-15	6.3	11.9	8.9	3.3	266	硬砂岩	a-3	IIB	
	296	E16-125	6.8	10.7	6.2	2.5	194	砂　岩	——	IIA	風化
	297	AI53-黒土	7.8	10.4	(4.4)	1.8	176	砂質粘板岩	——	〃	〃
	298	A20-95	6.7	9.5	5.8	2.0	125	硬砂岩	a-3	IIIA	
391	299	AG65-黒土	6.0	10.9	10.0	2.1	218	砂　岩	——	IC	
	300	B17-41	7.9	6.8	——	2.0	112	〃	a-1	IIA	
	301	1住その1-149	6.8	11.2	11.1	2.3	179	緑色片岩	——	IIC	
364	302	B17-33	5.4	8.9	6.2	2.2	148	緑色火山岩	a-3	IB	
	303	Z	5.3	10.3	10.3	2.2	108	砂質粘板岩	〃	IIIA	
	304	B18-1	3.3	(4.4)	(3.0)	0.7	(12)	緑色片岩	——	IIB	
	305	Z	5.6	4.2	4.2	0.6	17	(風　化)	——	IIIA	
	306	AR63-黒褐土	5.3	5.9	5.1	1.5	50	緑色片岩	〃	IIIB	
	307	3住-78	5.8	8.3	8.3	2.1	77	砂　岩		〃	
	308	後集4-22	4.0	7.2	5.2	1.9	45	砂質粘板岩	a-1.3,b-3	〃	
	309	Z	5.6	8.0	8.0	3.0	117	緑色火山岩	a-1	IIIA	
	310	土壙32-20	5.0	7.8	7.7	2.9	122	〃	〃	IVB	
	311	C19-172	3.7	8.4	3.2	2.4	55	砂　岩	〃	IIC	残核
	312	B20-62	5.5	6.6	6.2	2.6	82	(風　化)	〃	IIIA	
	313	C18-266	4.6	8.1	5.5	1.9	81	緑色片岩	a-1.3	IIB	
	314	12住-72	5.8	9.5	5.3	2.3	134	砂　岩	——	IIIB	風化
	315	D16-371	6.7	6.7	4.7	2.2	109	緑色火山岩	a-1.3	〃	〃
	316	Z	6.2	9.7	8.1	1.9	141	〃	——	IIA	
	317	E16-20	4.1	(4.3)	(1.3)	0.9	(20)	砂　岩	——	IIB	
360	318	R.M.2-32	6.1	9.1	6.8	2.0	132	緑色火山岩	a-3	IVA	残核
	319	G18-88	5.2	7.9	7.9	1.4	61	砂　岩	a-1,b-3	IIA	
	320	B20-92	5.6	5.5	5.5	1.4	44	〃	a-1	IIIA	風化
395	321	D16-220	6.3	11.1	6.3	2.9	193	〃	——	IIC	
	322	土壙105-9	7.1	6.3	4.4	1.6	93	緑色片岩	a.b-3	IIA	
	323	B21-12	7.8	6.8	6.7	2.6	151	〃	a-3	〃	
	324	E16-86	5.2	8.3	6.9	2.3	138	緑色火山岩	a.b-3	〃	
	325	12住-78	6.5	8.0	6.7	1.9	140	〃	a-3	IIB	
	326	B21-143	6.9	6.0	4.7	2.1	115	〃	——	〃	
	327	E16-65	6.7	5.3	5.3	1.4	39	硬砂岩	——	IIIA	
	328	A21-94	9.1	6.5	4.5	2.2	133	緑色火山岩	a-1	〃	
398	329	F19-295	7.3	5.6	5.6	2.5	118	〃	〃	IIIC	

使用痕記号　a：刃部　b：背部　c：胴部
1：こぼれ　2：つぶれ　3：磨耗

礫器

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石　材	分類
413	1	Z	9.3	6.8	2.0	206	緑色火山岩	A
411	2	13住-294	8.3	7.1	3.0	203	〃	〃
	3	13住-440	6.7	8.5	2.3	205	〃	〃
412	4	F19-113	11.3	5.3	2.8	294	〃	〃
403	5	H18-9	12.9	11.3	5.0	775		〃
415	6	A21-229	6.7	9.7	3.6	200	緑色火山岩	〃
	7	17住-39	6.6	6.1	1.2	82		〃
	8	C16-24	6.3	(7.1)	(2.8)	(187)		〃
	9	AM63-黒土	7.8	9.0	2.4	186		B
	10	AT63-耕土	8.9	7.4	2.8	203	砂　岩	〃
410	11	D18-228	7.8	8.3	2.3	200		〃
	12	D17-79	6.5	8.4	3.5	197		〃
	13	A21	5.4	7.1	2.4	103		〃
	14	D16-72	10.8	7.8	3.8	294	緑色火山岩	〃
408	15	Z	11.5	8.2	3.7	399		〃
409	16	A21-166	11.0	8.6	4.9	559	緑色火山岩	〃
407	17	B20-87	8.1	12.4	2.8	342	〃	〃
405	18	Z	8.7	7.8	2.5	235	緑色片岩	〃
406	19	A21-62	7.1	8.2	2.3	191		〃
	20	E16-58	7.6	10.3	2.8	283		〃
	21	竪穴3-30	10.9	10.3	4.1	446	緑色火山岩	〃
404	22	C17-133	10.2	10.3	4.9	497	〃	〃
	23	土壙58-16	7.7	10.8	2.6	276	輝石安山岩	A
	24	AQ63-黒土	7.4	(10.7)	4.2	(503)		〃
414	25	Z	14.3	6.0	2.6	256	硬砂岩	〃
	26	土壙43-43	9.3	7.3	3.2	335	緑色火山岩	〃
	27	D19-6	5.9	7.0	1.8	102	〃	〃
	28	B21-319	6.3	6.6	2.6	100	硬砂岩	B
	29	A21-124	4.9	5.8	2.2	75		〃
	30	D19-22	9.6	5.4	3.2	193	緑色火山岩	A
	31	C17-89	(8.5)	5.2	4.1	195	〃	〃
	32	AQ62-黒土	7.5	8.5	2.9	227	砂　岩	〃
	33	14住-120	5.4	9.1	3.0	170	緑色火山岩	〃
	34	B21-71	6.0	8.1	3.1	155	〃	〃
	35	A20-135	5.3	7.7	2.9	122	〃	〃
	36	C17-168	6.5	7.1	2.4	133	砂　岩	〃
	37	B21-370	7.3	10.5	2.8	259	緑色火山岩	〃
	38	A21-162	6.3	7.8	3.0	228		B
	39	C18-180	5.1	9.7	3.1	154	(風　化)	〃
	40	早集1-16	7.8	8.8	3.7	225	緑色火山岩	〃
	41	7住-110	7.5	6.6	3.5	205	〃	A
	42	R.M.1周辺-1	4.9	6.8	2.3	79	砂　岩	〃
	43	R.M.1周辺-24	8.0	6.1	2.5	188	〃	B
	44	AR62-黒土	10.7	6.7	3.0	338	緑色火山岩	A
	45	F19-286	8.6	7.3	3.8	181	〃	B
	46	D17-41	7.5	10.2	3.4	238	砂　岩	〃

分類記号　A：礫石器　B：礫核石器

特殊磨石，磨痕・凹み・敲打痕を持つ石

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	破損度	痕跡	備考
	1	D19-76	(12.0)	8.2	7.6	(1,050)	安山岩	½	A, B	特殊磨石
424	2	4住-110	(10.6)	8.0	6.4	(710)	〃	〃	〃	〃
	3	AQ50-黒土	(7.5)	7.8	4.7	(365)	〃	⅔以上	〃	〃
	4	Z	(6.4)	7.6	6.7	(510)	〃	大半	〃	〃
	5	配石1-13	(7.5)	6.8	7.0	(420)	〃	⅔以上	〃	〃
427	6	土壙39-4	(10.3)	6.7	6.1	(580)	〃	½	〃	〃
423	7	R.M.1周辺-14	(9.3)	6.2	4.4	(370)	〃	½	A, B	〃
	8	E16-63	(12.5)	7.7	5.1	(740)		〃	〃	〃
	9	11住-394	(7.5)	7.9	7.2	(640)	〃	両端多	〃	〃
	10	A20-127	(8.5)	5.3	(4.0)	(200)	〃	大半	〃	〃
	11	G21-198	(13.6)	9.5	7.3	(1,260)	〃	⅓	〃	〃
	12	A21-189	(13.5)	7.5	5.2	(620)	〃	⅓	〃	〃
	13	D18-181	(6.4)	(7.0)	(4.6)	(190)	〃	大半	〃	〃
	14	D20-124	(10.3)	7.2	6.5	(760)	〃	½	A, B, C	〃
	15	Z	(9.0)	6.2	5.0	(320)	〃	½以上	A, B	〃
	16	A21-80	(10.2)	7.9	7.1	(780)	〃	両端多	A, B, C	〃
	17	17住-361	(9.4)	6.3	5.1	(360)	〃	½	A, B	〃
	18	14住-89	(8.9)	6.0	(4.5)	(290)	硬砂岩	大半	〃	〃
	19	C18-126	(6.7)	7.0	6.2	(355)	安山岩	〃	〃	〃
	20	14住-82	(5.3)	(5.2)	(3.9)	(70)	硬砂岩	〃	〃	〃
	21	A20-133	(8.3)	7.1	(4.9)	(480)	安山岩	⅔	〃	〃
	22	A21	(5.8)	(6.2)	(4.2)	(160)	〃	大半	〃	〃
	23	E18-33	(8.2)	7.7	5.9	(550)	〃	⅔	〃	〃
	24	E16-22	(8.8)	7.9	4.5	(450)		〃	〃	〃
417	25	5住-1	(12.2)	6.7	5.8	(690)	硬砂岩	両端多	B	〃
	26	後集4-119	(7.9)	7.5	6.1	(480)	安山岩	⅔	A, B	〃
	27	AD54-黒土	14.1	7.5	6.4	870	〃	——	B, D	〃
	28	D17	(11.8)	8.7	5.4	(800)	〃	½	A, B	〃
456	29	10住-106	12.3	9.4	5.7	850		——	A	〃
428	30	13住-51	(10.8)	7.5	6.1	(560)	安山岩	½以上	A, B, D	〃
	31	D20-120	(5.7)	6.7	5.9	(300)	〃	大半	A, B	〃
	32	AR58-黒土	(7.0)	7.9	6.4	(390)	〃	〃	〃	〃
	33	Z	(9.1)	6.6	5.3	(460)	〃	½以上	〃	〃
	34	Z	(7.1)	5.6	5.7	(340)	〃	⅔	〃	〃
	35	B20-76	(7.4)	(5.2)	(3.1)	(130)	硬砂岩	大半	B	〃
	36	C18-76	(11.7)	8.0	7.7	(1,000)	安山岩	½	A, B	〃
	37	A21-96	(9.4)	7.7	5.9	(510)	〃	½以上	〃	〃
	38	B17-40	(9.3)	7.0	5.8	(610)		½	A, B, C	〃
	39	C19-78	(8.8)	7.0	5.2	(470)	安山岩	½以上	A, B	〃
	40	AN61-黒土	(10.5)	6.9	5.9	(570)	〃	½	〃	〃
	41	土壙18-5	(10.2)	6.8	5.6	(460)	〃	両端½	A	〃
	42	B20-35	(8.5)	(6.6)	(5.8)	(320)	硬砂岩	大半	B	〃
	43	E15-2	(6.1)	6.3	4.4	(230)	安山岩	〃	A, B	〃
	44	Z	13.0	7.0	6.3	860	〃	——	A,B,D	〃
434	45	Z	13.1	6.1	4.5	550	〃	——	A,B	〃
	46	土壙1-7	(9.8)	8.4	5.7	(580)	〃	½	A,B,C	〃
426	47	Z	(12.6)	8.5	4.2	(770)		両端少	A,B	〃
	48	BB41-黒土	(13.1)	9.2	4.9	(1,000)	〃	⅓	〃	〃
	49	土壙57-3	(12.9)	8.3	6.6	(910)	〃	½	〃	〃
	50	C18-117	(5.5)	7.9)	(5.5)	(340)	〃	両端多	〃	〃
425	51	竪穴2	(9.8)	6.5	5.5	(470)	〃	½以上	A,B	〃
	52	E16-90	(9.0)	7.5	6.3	(600)	〃	〃	A	〃
	53	Z	(12.0)	8.1	7.0	(950)	〃	½	A,B	〃
	54	後集4-15	(8.3)	7.4	5.3	(470)	〃	⅔以上	〃	〃
	55	E15-1	(11.5)	8.0	6.4	(790)	〃	½	A,B,D	〃
	56									欠番
	57	AH57-黒土	(12.4)	8.1	7.7	(870)	安山岩	½	A,B	特殊磨石
	58	A21-276	(10.9)	8.7	6.3	(730)	〃	½以上	〃	〃
	59	Z	12.0	7.0	6.0	750	〃	——	〃	〃
	60	Z	(9.0)	8.7	6.8	(480)	〃	⅔以上	〃	〃
	61	7住-417	(7.8)	7.8	5.9	(530)	〃	⅔	〃	〃
429	62	AI64-黒土	(9.6)	6.4	5.8	(430)	〃	½	A,B,D	〃
416	63	AQ61-黒土	15.7	8.2	6.6	1,280	〃	——	B	〃
	64	12住-420	(6.3)	7.9	6.8	(320)	〃	大半	A,B	〃
433	65	AR55-黒土	16.0	6.3	5.9	860	〃	——	A,B,D	〃
421	66	土壙105-13	14.2	8.2	6.1	990	〃	——	A,B	〃
	67	Z	16.9	7.6	6.6	1,260	〃	——	〃	〃
	68	B20-134	(6.5)	(5.0)	(3.9)	(170)	〃	大半	〃	〃
	69	C17-5	(10.5)	(7.3)	4.0	(510)		½	A,B,D	〃
	70	4住-108	16.9	11.5	6.3	1,820	安山岩	——	A,D	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破損度	痕　跡	備　　考
419	71	E20-176	14.5	8.2	6.5	1,160	安　山　岩	——	A,B	特殊磨石
	72	C19-70	12.9	6.4	4.7	440	〃	——	〃	〃
431	73	Z	14.0	7.5	7.3	1,090	〃	——	〃	〃
	74	F16-27	12.8	7.2	5.1	560	〃	——	〃	〃
	75	Z	12.5	8.3	5.2	710	〃	——	A,B,D	〃
	76									欠番
	77	AQ52-黒土	15.9	7.3	5.6	(900)	安　山　岩	一　部	A,B	特殊磨石
	78	E20-75	15.4	10.0	4.7	940	〃	——	A,B,D	〃
432	79	E20-181	15.2	5.9	5.9	(610)	〃	一端少	A,B	〃
	80	AJ48-黒土	16.4	8.5	6.1	1,160	〃	——	〃	〃
	81	Z	15.8	8.2	7.0	1,140	〃	——	A	〃
	82	A21-284	(6.4)	7.0	6.7	(410)	〃	⅔以上	〃	〃
	83	A21-130	(4.8)	7.8	4.7	(270)	〃	両端多	A,B	〃
418	84	E17-25	13.6	8.8	7.8	1,080	〃	——	B	〃
441	85	10住-20	16.0	7.0	5.8	980	〃	両端少	A,B,D	〃
420	86	土壙51-6	14.8	6.9	4.6	700	〃	——	A,B	〃
440	87	Z	13.3	7.6	4.6	730	〃	両端少	A,B,D	〃
	88	D18-28	(13.2)	6.9	7.3	(990)	〃	¼	A,B	〃
449	89	C21-174	12.0	7.9	6.1	960	〃	——	〃	〃，接合品
	90	A20-27								
446	91	C18-237	15.5	7.8	6.0	1,070	〃	——	〃	〃，　〃
	92	Z								
447	93	B21-245	16.7	9.1	6.4	1,490	緑色火山岩	——	A,B,D	〃，　〃
	94	AQ55-黒土								
445	95	D18-172	19.8	10.0	7.2	1,720	安　山　岩	——	A,B	特殊磨石，接合品
	96	中集1-65								
448	97	2住-52	17.4	6.4	5.0	890	〃	——	〃	〃，〃
	98	E19-133								
438	99	土壙55	15.8	7.9	5.3	990	〃	——	A,B,D	特殊磨石
430	100	土壙108-1	17.9	7.3	5.7	1,200		——	A,B	〃
	101	Z	16.9	8.8	6.3	1,300	安　山　岩	——	〃	〃
	102	AM50-黒土	11.8	7.5	6.5	770	〃	——	〃	〃
439	103	12住-81	13.1	6.5	5.7	690	〃	——	A,B,D	〃
422	104	土壙39-6	14.5	7.9	6.5	930	〃	——	A,B	〃
	105									欠番
453	106	13住-309	9.5	7.8	5.1	470	安　山　岩	——	A	
451	107	AG62-黒土	10.0	7.7	4.7	430	〃	——	〃	
	108	C19-20	(7.7)	(8.6)	4.6	(360)	〃	½強	〃	
	109	E19-25	7.2	3.7	2.5	(90)		一端少	〃	
	110	E17-87	(7.8)	9.6	3.2	(330)	安　山　岩	½	〃	
454	111	D19-3	11.6	9.9	4.6	760	〃	——	〃	焼石
	112	A20-11	(6.6)	(8.9)	3.5	(205)	〃	½	〃	
	113									欠番
	114	A21-251	(5.5)	(6.2)	4.3	(175)	安　山　岩	¾外周	A	
	115	11住-375	(8.3)	(6.5)	4.5	(310)	〃	¾	〃	
	116	土壙57-1	(8.1)	(8.7)	4.2	(290)	〃	½	A,C,D	
	117	A20-56	13.2	6.4	5.5	710	〃	——	A	
457	118	C18-190	10.1	7.9	7.5	650	〃	——	〃	
	119	16住-138	(7.1)	(5.9)	4.8	(370)	〃	¾	〃	
	120	R,M,2 周辺-68	(21.1)	(8.1)	(4.5)	(950)	〃	縦½	〃	特殊磨石
	121									欠番
458	122	Z	(10.6)	11.0	5.2	(830)	安　山　岩	⅓	A	台石状
	123	AJ64-黒土	11.9	6.1	5.2	490	〃	——	〃	
	124	後集2-145	12.4	9.1	5.1	820	〃	——	〃	
	125	D16-178	(5.2)	(5.5)	(2.8)	(120)		大　半	〃	
459	126	D18-74	8.5	7.2	4.3	300	安　山　岩	——	〃	
	127	土壙30	11.5	9.1	6.2	830	〃	——	〃	
467	128	12住-242	16.5	7.3	5.1	910	緑色火山岩	——	D	
	129	G16-91	(8.5)	9.1	5.9	(640)	安　山　岩	½以上	A	特殊磨石
	130	1住-22	(5.0)	(7.0)	(6.4)	(240)	〃	大　半	〃	〃
	131	D20-158	(5.3)	(9.3)	(5.0)	(225)	〃	⅔	〃	
464	132	1住その2-150	(4.8)	(7.4)	(1.9)	(100)	硬　砂　岩	大　半	A,D	
435	133	Z	18.1	7.9	6.4	1,180	安　山　岩	——	〃	特殊磨石
	134	後集2-1	11.1	7.2	4.2	430	〃	——	A	
	135									欠番
	136	1住-46	(11.5)	6.7	(6.1)	(500)	安　山　岩	¾	A	特殊磨石
	137						〃			欠番
	138	後集4-116	(5.2)	5.9	(5.6)	(200)	〃	大　半	A	特殊磨石
	139	土壙10	(4.9)	5.5	4.2	(140)	〃	大　半	A	
	140	配石1-36	(6.1)	(4.8)	(4.5)	(200)	〃	——	〃	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破損度	痕　跡	備　　考
	141	AL53-黒土	(11.6)	3.8	2.5	(170)	砂　　岩	一端少	〃	
	142	AH65-黒土	(7.4)	6.5	5.2	(330)	安　山　岩	½以上	〃	特殊磨石
452	143	D17-19	10.6	6.5	5.6	470	〃	——	〃	焼石
	144	14住-338	13.2	12.1	3.9	870	〃	——	〃	
	145	Z	(10.6)	5.0	4.9	(300)		一　部	〃	
	146	B20-104	(5.3)	(6.0)	5.7	(200)	安　山　岩	大　半	〃	
	147	12住-93	9.7	8.4	3.8	410	〃	——	〃	
	148	G18-106	(6.8)	(9.2)	(5.9)	(410)	〃	⅔	〃	
466	149	C18-166	8.9	8.0	3.9	500	〃	——	D	
	150	AG64-黒土	11.7	6.7	4.1	450	〃	——	A	
450	151	後集2-72	11.0	8.7	5.5	700	〃	——	〃	
	152	土壙32	15.9	6.5	4.5	560	〃	——	〃	焼石
	153	〃	16.9	(7.1)	(5.1)	(700)	〃	縦½	〃	
	154	〃	(9.0)	(5.5)	5.9	(460)	〃	¾	〃	
	155	〃	(11.3)	6.9	5.1	(500)	〃	½	〃	
455	156	〃	9.6	6.1	5.0	450	〃	——	〃	
	157	〃	11.3	6.5	5.7	450	〃	——	C	接合品
	158	〃	12.4	8.9	3.9	500	〃	——	〃	焼石
	159	〃	10.5	7.3	6.5	510	〃	——	〃	〃
	160	〃	8.4	5.7	5.3	240	〃	——	A,C	
	161									欠番
	162	土壙32	12.6	9.1	7.4	980	安　山　岩	——	A,C	
	163	〃	10.3	9.9	6.4	790	〃	——	C	
	164	〃	11.0	9.0	6.4	610	〃	——	〃	
	165	〃	15.0	10.1	5.6	(1,400)		一　部	A,C	
501	166	〃	9.3	7.0	4.6	300	安　山　岩	——	C	
	167	〃	12.5	7.5	6.6	720	〃	——	A,B,C	特殊磨石
	168	AR61-黒土	(7.6)	9.8	4.1	(410)	〃	⅓	A,C,D	
516	169 170	11住-43 後集2-31	10.2	7.9	4.2	460	〃	——	〃	接合品
	171	4住-76	(8.0)	10.8	3.8	(350)	〃	½弱	A,C	台石状
	172	Z	11.1	7.2	3.3	370	〃	——	〃	
444	173	AQ62-黒土	12.7	7.6	6.1	770	〃	——	A,B,C	特殊磨石
508	174	3住	9.8	8.2	3.9	360	〃	——	A,C	焼石
442	175	Z	16.1	7.6	5.4	850	〃	——	A,B C,D	特殊磨石
	176	Z	8.6	7.2	4.0	340	〃	——	A,C	
	177	後集4-120	(10.3)	8.3	7.2	(750)	〃	½	A,B,C	特殊磨石
443	178	A-Z	12.2	8.0	6.1	820	〃	——	A,B C,D	〃
	179	土壙54-15	(9.6)	11.8	(5.2)	(540)	〃	½	A,B,C	〃
	180	1住-69	11.3	7.8	5.7	570	〃	——	A,C	
437	181	4住-57	14.1	6.3	5.9	660	〃	——	A,B C,D	特殊磨石
	182	AQ62-黒土	12.5	6.2	4.0	340	〃	——	A,C	
	183	Z	13.4	6.8	4.9	560	〃	——	A,B,C	特殊磨石
436	184	Z	11.5	6.7	6.0	670	〃	——	〃	〃
514	185	G17-28	9.0	5.8	3.0	210	〃	——	A,C	
	186	AR56-黒土	13.3	6.0	5.5	640	〃	——	A,B C,D	特殊磨石
	187	AF36-黒土	(9.2)	7.9	7.2	(660)	〃	½	A,B,C	〃
515	188	10住-94	8.7	6.7	4.2	340	〃	——	A,C	
	189	Z	(16.0)	7.6	7.2	(1,050)	〃	両端少	〃	特殊磨石
509	190	A21-177	13.7	11.1	4.5	900	〃	——	〃	台石状
477	191	D21-49	10.3	8.4	4.3	410	〃	——	A,C,D	
	192	B19-31	11.7	8.7	4.8	620	〃	——	A,C	
	193	3住-70	9.4	4.6	3.3	230	〃	——	〃	
	194	後集4-30	(8.1)	8.1	3.5	(280)	〃	¼	〃	
	195	F16-16	(7.5)	7.2	4.2	(290)	〃	⅓	〃	焼石
	196	B21-418	7.1	5.8	4.9	240	〃	——	〃	
	197	B17-27	6.8	(4.5)	3.1	(110)	〃	½	〃	
	198	AQ62-黒土	(7.6)	(3.9)	3.5	(90)	〃	½	A,C,D	
517	199	A21-285	8.8	5.4	4.8	270	〃	——	A,C	
	200	13住-572	10.5	7.4	5.7	540	〃	——	〃	
483	201	土壙36	9.5	6.5	5.0	370	〃	——	〃	
	202	AP55-黒土	9.4	7.0	5.0	420	〃	——	〃	
481	203	16住-137	8.5	6.5	5.2	300	〃	——	〃	
	204	Z	9.7	7.4	4.7	350	〃	——	〃	
	205	D17-20	7.1	6.3	5.1	240	〃	——	〃	
	206	AO56-黒土	(10.0)	9.1	5.3	(560)	〃	½	〃	
	207	AJ42-黒土	12.4	7.2	4.3	460	〃	——	〃	
	208	B20-83	12.2	7.4	4.1	490	〃	——	A,C,D	焼石
	209	D17-7	9.9	7.0	4.0	350	〃	——	A,C	
	210									欠番

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破損度	痕　跡	備　　考
	211	F19-230	13.1	8.0	4.3	530	安　山　岩	——	A,C	
485	212	11住-383	11.3	7.1	5.7	560	〃	——	〃	
	213	AQ59-黒土	12.5	7.0	4.2	380	〃	——	〃	
	214	AP57-黒土	14.8	7.6	4.2	660	〃	——	〃	
	215	E19-148	10.9	6.5	5.6	400	〃	——	〃	
	216	AP57-黒土	12.3	7.1	4.9	520	〃	——	A,C,D	
519	217	E20-177	5.5	4.7	3.1	90	〃	——	A,C	
490	218	18住-92	8.2	6.3	3.2	180	〃	——	〃	
	219	A21-220	7.9	6.9	4.0	260	〃	——	〃	
	220	土壙51-10	8.8	7.5	5.6	370	〃	——	〃	
	221	土壙32	8.2	6.4	4.9	260	〃	——	〃	
479	222	Z	8.6	6.3	5.7	290	〃	——	〃	
	223	D18-26	10.9	6.5	4.1	370	〃	——	C	
491	224	H16-1	7.2	6.4	3.7	180	〃	——	A,C	
	225	AO59	8.2	6.5	3.9	200	〃	——	〃	
	226	A21-191	7.0	5.7	3.3	140	〃	——	C	
	227	後集4-72	(5.1)	8.3	4.5	(250)	〃	½	A,C	
	228	7住-15	(9.3)	7.9	4.2	(350)	〃	⅓	〃	
	229	Z	9.3	7.0	5.1	330	〃	——	C	
492	230	E16-15	8.2	6.0	3.3	200	〃	——	A,C	
	231	土壙39-14	9.6	8.6	3.7	410	〃	——	〃	
	232	後集2-127	12.3	8.5	4.0	530	〃	——	〃	
518	233	17住-348	7.7	6.4	4.6	260	〃	——	〃	
	234	A20-33	8.5	5.5	(2.5)	(120)	〃	½	C	
	235									欠番
505	236	AI53-黒土	9.5	7.3	5.5	520	安　山　岩	——	A,C,D	焼石
	237									欠番
478	238	B21-175	9.5	6.8	4.2	310	安　山　岩	——	A.C	焼石
	239	土壙38	8.2	5.7	3.8	210	〃	——	〃	
498	240	10住-128	9.2	8.8	4.1	390	〃	——	〃	
494	241	G18-7	8.1	6.2	4.2	220	〃	——	A,C,D	
	242	後集2-161	11.1	5.0	4.2	(270)	〃	一　部	A,C	
	243	土壙27	(14.1)	8.9	5.7	(950)	〃	両　端	〃	
513	244	1住その2-148	(10.4)	7.9	(4.0)	(390)	〃	表面¾剥脱	〃	
487	245	R,M,2-81	11.4	4.8	3.9	220	〃	——	A,C,D	
	246	B21-247	10.3	5.0	3.5	180	〃	——	A,D	
484	247	AH57-黒土	11.1	5.7	4.3	320	〃	——	C	
	248	B17-6	9.3	5.5	3.6	250	〃	——	A,C	
510	249	7住-378	11.7	6.2	5.1	370	〃	——	〃	
480	250	4住-77	11.1	5.1	4.7	370	〃	——	A,C,D	
475	251	4住-32	12.4	6.4	6.4	590	〃	——	〃	
	252	10住-113	(9.0)	7.0	3.9	(320)	〃	½	A,C	
	253	AR61-黒褐土	11.1	10.3	7.2	970	〃	——	〃	
507	254	BO44-黒土	8.6	7.6	4.3	330	〃	——	〃	
	255	D18-250	11.6	8.1	(5.9)	(900)		一平面	A,C,D	
	256	11住-52	15.7	7.3	4.4	650	安　山　岩	——	C	
	257	11住-235	9.8	9.7	4.5	540	〃	——	A,C	
	258	B21-274	12.2	9.3	8.9	1,110	〃	——	〃	
	259	AO59	(7.5)	6.1	5.4	(360)	〃	½以上	〃	
	260	AO54-黒土	9.9	5.5	4.7	310	〃	——	〃	
	261	E20-158	13.0	6.7	4.3	(490)		両端一部	C	
	262	早集2-14	11.2	8.0	3.2	430	安　山　岩	——	A,C	
503	263	3住-72	9.4	7.2	4.2	350	〃	——	〃	
	264	12住-248	10.0	7.2	(4.3)	(370)	〃	⅓	C	
	265	F19-4	(8.7)	9.0	3.9	(250)	〃	⅓強	A,C	
495	266	3住-76	9.6	7.8	4.9	400	〃	——	〃	
	267	Z	17.2	11.7	11.0	2,150	〃	——	C	
	268	Z	12.4	7.4	6.6	740	〃	——	A,C	
	269	Z	9.5	4.8	3.8	220	〃	——	C	
	270	E16-27	9.2	8.7	4.4	430	〃	——	A,C	
	271	土壙122-16	12.1	10.3	7.1	950	〃	——	C	
	272	早集2-18	(7.6)	9.2	5.9	(370)	〃	⅓	〃	
511	273	17住-8	11.5	9.2	5.6	900	〃	——	A,C	
	274	Z	10.3	8.0	4.5	440	〃	——	〃	
	275	後集2-44	9.0	7.9	5.8	390	〃	——	〃	
	276	D17	9.0	6.9	5.4	450	〃	——	〃	
	277	AL53-黒土	9.2	8.7	5.5	520	〃	——	〃	
	278	Z	10.8	9.7	5.5	670	〃	——	〃	
488	279	C17-190	8.5	7.9	4.9	370	〃	——	〃	
	280	AO59	9.9	9.5	5.3	530	〃	——	〃	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破損度	痕　跡	備　　考
	281	AM52	12.3	8.8	6.9	680	〃	——	〃	
	282									欠番
	283	E20-83	(8.5)	7.5	4.2	(310)	安　山　岩	⅓	A,C	
	284	後集4-13	(11.4)	10.4	5.1	(660)	〃	一　部	〃	
482	285	B20-156	15.8	7.6	5.0	690	〃	——	C	
	286									欠番
	287	R,M,6-3	(8.8)	7.4	(3.7)	(190)	安　山　岩	⅔	A,C	
476	288	4住-115	11.2	7.3	5.3	510	〃	——	〃	
	289	4住-107	9.7	8.3	5.9	540	〃	——	〃	
	290	A21-179	(8.9)	(8.0)	(4.6)	(260)	〃	大　半	〃	
	291	12住-254	11.1	8.2	4.7	440	〃	——	〃	
	292	Z	14.2	7.0	5.9	810	〃	——	A,C,D	特殊磨石
	293	土壙116-6	12.8	7.9	4.5	510	〃	——	A,C	
	294	D18-38	12.2	11.1	3.8	720	〃	——	〃	台石状
	295	R,M,2-11	9.6	7.7	5.9	470	〃	——	〃	
	296	B20-162	9.0	7.3	5.8	520	〃	——	〃	
	297	土壙81-2	10.8	8.0	5.8	590	〃	——	〃	
	298	Z	10.9	10.1	5.8	740	〃	——	〃	
	299	3住-94	6.7	4.6	3.1	100	〃	——	〃	
	300	13住-41	10.5	8.7	5.8	610	〃	——	〃	
506	301	AT63-黒褐土	9.0	8.0	4.6	420	〃	——	〃	
	302	AQ63-黒土	9.2	5.9	3.1	190	〃	——	〃	
	303	A-Z	11.7	10.3	7.3	1,010	〃	——	〃	
	304	11住-394	(9.4)	8.3	(5.2)	(460)	〃	½	〃	
	305	AG62-黒土	6.6	4.8	3.7	140	〃	——	〃	
	306	竪穴2-9	6.7	5.6	2.4	90	〃	——	〃	
	307	Z	10.9	7.3	4.7	430	〃	——	〃	
496	308	E16-59	10.6	10.5	6.9	630	〃	——	〃	
497	309	F17-83	8.4	5.7	2.8	140	〃	——	〃	
	310	F19-32	7.5	6.5	4.3	210	〃	——	〃	
	311	B21-422	9.3	8.5	5.5	410	〃	——	〃	
	312	A20-21	8.2	6.3	5.2	300	〃	——	C	
499	313	11住-156	9.6	8.9	5.6	540	〃	——	A,C	
	314	3住-47	6.0	5.8	4.4	190	〃	——	〃	
	315	Z	16.2	8.0	4.9	690	〃	——	A,C	
	316	Z	12.3	7.9	5.7	630	〃	——	〃	
	317									欠番
	318									欠番
493	319	F16-黒土	6.7	4.5	3.0	100	安　山　岩	——	A,C	
	320	土壙65-6	12.1	8.8	4.4	510	〃	——	C	
500	321	18住-79	10.1	7.3	3.7	380	〃	——	A,C	
	322	Z	9.3	8.2	4.0	350	〃	——	〃	
512	323	F18-51	8.4	7.4	4.4	350	〃	——	〃	
	324	H18-7	(8.0)	7.6	5.8	(430)	〃	——	〃	
502	325	B20-131	21.6	17.4	6.2	2,690	〃	——	〃	台石状
486	326	F19-281	6.8	6.3	4.2	220	〃	——	〃	
	327	12住-81	8.8	7.5	4.3	360	〃	——	〃	
489	328	Z	8.8	6.4	3.3	230	〃	——	〃	
	329	Z	10.2	7.8	4.7	480	〃	——	〃	
504	330	11住-162	9.6	9.3	4.8	550	〃	——	〃	
	331	土壙43-6	8.5	7.2	6.0	430	〃	——	〃	焼石
	332	A21-250	8.8	8.6	4.7	400	〃	——	〃	
	333	R,M,1周辺-36	(7.5)	3.6	3.7	(120)		⅔	A	
	334	土壙110-1	12.1	10.2	5.1	730	安　山　岩	——	〃	
	335	C19	(7.0)	(7.0)	3.2	(210)		¾	〃	
	336	C18-174	5.1	5.0	2.7	90	安　山　岩	——	A,C	
	337	B21-403	8.5	6.7	4.2	300	〃	——	A	
	338	4住-51	(9.8)	(4.5)	(3.2)	(180)	〃	——	〃	
	339	AT60	7.3	(5.0)	2.1	(80)	〃	⅓	〃	
	340	R.M.2-25	10.5	6.8	3.5	290	〃	——	〃	
	341	土壙39-7	(13.8)	(6.5)	(2.8)	(300)	〃	½以上	〃	
	342	Z	12.1	9.5	4.1	670	〃	——	〃	
	343	12住-400	12.1	(8.8)	3.2	(370)		½	〃	接合品
	344	18住-191	(6.7)	(7.6)	(3.6)	(240)	安　山　岩	大　半	〃	
	345	Z	12.1	8.6	5.2	640	〃	——	〃	
	346	後集2-65	(4.8)	5.6	2.4	(80)	〃	⅔	〃	
	347	Z	9.0	7.8	6.6	580	〃	——	〃	
	348	土壙43-23	9.6	9.2	4.8	(390)	〃	少	〃	小破片に分解
	349	後集2-191	(6.4)	5.4	2.7	(150)	〃	½	〃	
	350	AI39-黒土	13.3	5.6	4.2	380	〃	——	〃	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破損度	痕　跡	備　　考
	351	D17-5	7.3	6.7	(5.2)	(290)	安　山　岩	½以上	〃	
	352	中集1-10	(8.2)	(9.3)	3.9	(370)	〃	——	〃	
	353	Z	5.1	(7.4)	(5.4)	(210)	〃	½	〃	
	354	AS63-黒褐土	12.6	10.8	4.5	650	〃	——	〃	
	355	R,M,2-84	(6.5)	(7.7)	(4.1)	(250)	〃	大　半	〃	
	356	C17-8	(6.1)	(5.3)	(5.3)	(230)	〃	〃	〃	
	357	AG60-黒土	(5.5)	(4.3)	4.5	(120)	〃	〃	〃	
462	358	竪穴3-24	8.3	5.6	4.4	260	〃	——	〃	
	359	土壙26附近	9.7	7.3	5.3	400	〃	——	A	
	360	E19-88	(8.8)	(6.0)	(3.8)	(170)	〃	大　半	〃	
	361	C20-61	11.2	4.6	3.2	260		——	A,D	
	362	B21	8.6	4.6	3.2	160	安　山　岩	——	A	
460	363	A20-99	10.7	8.1	3.8	400	〃	——	〃	
	364	R,M,11-25	(7.9)	(5.5)	(5.1)	(290)		大　半	〃	
	365	C20-52	(14.6)	(8.1)	(4.5)	(510)	安　山　岩	⅔以上	〃	
	366	AP54-黒土	(4.1)	(5.5)	(4.1)	(90)	〃	大　半	〃	
	367	Z	8.8	5.4	3.0	220	〃	——	〃	
461	368	11住-222	6.8	5.3	3.9	170	〃	——	〃	
	369	R,M,2-90	5.0	4.7	4.4	120	〃	——	〃	
	370	B21	5.8	5.6	2.7	120	〃	——	〃	
	371	B21	(4.7)	4.7	2.8	(80)	〃	——	〃	
	372	F17-27	(5.7)	(5.9)	2.6	(140)	〃	½以上	〃	
	373	D18-165	5.4	4.1	3.2	80		——	〃	
	374	Z	17.2	(8.6)	7.0	(1,760)	安　山　岩	——	〃	
	375	7住-93	6.1	4.5	2.7	120		——	〃	
	376	R,M,2-85	4.0	3.8	2.5	40	安　山　岩	——	〃	
	377	AP57-黒土	(7.5)	(4.5)	4.9	(300)	〃	大　半	〃	
	378	AT66-黒土	(5.0)	3.4	2.3	(60)	〃	½	〃	
	379	C16-22	7.4	3.5	2.7	100	〃	——	〃	
463	380	AP55-黒土	3.8	3.6	2.7	50	〃	——	〃	
	381	3住外-5	4.6	4.6	3.2	80	〃	——	〃	
	382	3住-96	2.3	2.1	1.8	(10)		一　部	〃	
	383	Z	(11.0)	5.5	5.0	(450)		少	〃	
	384	Z	(10.1)	5.0	3.5	230	安　山　岩	——	A,C	
	385									欠番
465	386	9住-18	(7.6)	6.6	2.3	(130)	安　山　岩	⅓	A,D	
	387	12住-370	(6.0)	(6.6)	(3.6)	(200)	〃	大　半	A	
	388	R,M,2-5	13.2	4.0	3.4	290	〃	——	〃	
	389	Z	7.5	5.0	3.9	180	〃	——	〃	
	390	E16-99	(5.6)	(6.0)	(2.2)	(90)	〃	大　半	〃	
	391	土壙19-2	11.0	6.3	4.0	360	〃	——	〃	
	392	12住-353	10.2	8.0	3.3	(230)	〃	——	〃	
	393	C19-105	(10.1)	(9.8)	(5.2)	(520)	〃	½	〃	
	394	R,M,2-28	(6.9)	4.2	3.7	(160)		両　端	A,D	
	395	中集1-89	9.0	5.3	3.1	(210)	安　山　岩	一部剝落	A	
	396	B20-133	(5.8)	5.7	(2.5)	(100)	〃	½以上	〃	
	397	E18-39	10.5	6.9	3.6	320	〃	——	〃	
	398	A20-86	(8.4)	(5.2)	(2.1)	(100)	硬　砂　岩	大　半	〃	
	399	12住-326	12.6	10.3	3.8	610	安　山　岩	——	〃	
	400	12住-364	7.7	(4.4)	(3.2)	(150)	〃	½以上	〃	
	401									欠番
	402	B21	(5.2)	7.3	3.3	(170)	安　山　岩	½以上	A	
	403	土壙31-3	(8.1)	9.7	4.7	(560)	〃	½	A	
	404	土壙43-24	6.3	5.0	3.4	140	〃	——	〃	
	405	AS63-黒褐土	(4.0)	(6.0)	(2.2)	(60)	硬　砂　岩	大　半	〃	
	406	AQ63-黒褐土	(16.0)	(11.7)	8.0	(2,650)	安　山　岩	½以上	A,C	台石状
	407	後集2-21	13.2	(7.4)	5.4	870	〃	一　部	A	
	408	土壙28-8	12.4	6.5	4.9	540	〃	——	〃	
	409	A20-128	(9.5)	5.7	(2.6)	(190)	硬　砂　岩	½以上	〃	
	410	AT64-黒土	(4.3)	(6.8)	3.0	(140)	安　山　岩	½	〃	
	411	竪穴3-7	(8.8)	(5.4)	(3.0)	(150)	硬　砂　岩	½以上	〃	
	412	AG59-黒土	3.9	3.1	2.2	28		——	〃	
	413	Z	3.8	3.5	3.3	48		——	——	全面調整,石弾?

痕跡記号　A：磨　痕　B：機能磨面（特殊磨石）　C：凹み　D：敲打痕

台　石

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さkg	石　材	備　考
468	1	C18-208	12.8	(11.8)	4.2	(0.9)	輝石安山岩	⅓破損
472	2	11住-240	11.5	9.1	4.6	0.7	〃	
469	3	土壙52-1	(11.4)	11.7	3.5	(0.8)	〃	一部破損
470	4	Z	11.8	(6.2)	3.4	(0.3)		½破損
471	5	D18-251	12.7	9.0	3.8	0.7		
473	6	土壙116-5	22.6	11.7	8.9	4.0		
474	7	18住-166	33.7	27.0	11.0	12.9		

砥　石

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石　材	破　損
115-2	1	14住-381	(16.5)	8.0	7.5	1,380		両　端
-4	2	B18-4	7.2	6.2	3.7	298		——
-3	3	Z	(2.1)	(3.0)	(2.5)	(20)		大　半
-1	4	13住-414	5.7	3.5	3.1	88		——

石　皿

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さkg	石　材	破　損	備　考
520	1	16住-243	(28.3)	(16.0)	(6.2)	(3.3)	花　崗　岩	一部除き全　周	裏面未調整
521	2	B-Z	(29.0)	(13.4)	8.1	(2.8)	輝石安山岩	½	接合品
522	3	13住-894	21.0	13.5	5.2	1.5	〃	——	裏面に浅い凹み
523	4	4住-78	(14.9)	(14.7)	8.2	(2.0)	〃	¾	
	5	Z	(10.0)	(7.8)	5.8	(0.5)	〃	大部分	
	6	中集1-99	(11.4)	(6.2)	4.5	(0.3)	〃	〃	

使用痕ある石

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石　材	先端の面数	敲　打　痕	破損部
75-1	1	D16-184	5.9	4.1	2.6	85		2/2	側辺部	——
-2	2	F19-140	6.3	4.2	2.7	85	砂　岩	3/(1)	側辺部先端，胴部	1　端
-3	3	E19-25	7.3	3.7	2.5	90	〃	(1)/4	側辺部	〃
-6	4	AQ63-黒土	(7.2)	2.6	2.3	(65)	緑色火山岩	(1)/?	先端部	両　端
-4	5	C17-12	9.5	3.6	2.5	112	砂　岩	(1)/(1)	両　端	両端・胴部
	6	F19-184	8.8	3.1	2.4	99	〃	1/?	——	1　端
-5	7	A21-10	(8.5)	3.6	2.2	(113)		2/?	——	〃
	8	11住-107	(3.8)	(3.5)	2.0	(31)	輝石安山岩	2/?	——	1端～胴部

附表2　金山沢北遺跡石器一覧

石鏃

図番号	No.	出土地点	遺物No.	茎	基部	先端	長さ mm	幅 mm	長さ/幅	重さ g	厚さ mm	破損部位	備考
1	1	AT-49	——	B	Ai	C	25	15.5	B	1.3	4		チャート
2	2	BI-47	——	B	Ai	C	19	13	B	0.6	3		黒曜石
3	3	Z	——	B	Ai	C	20.5	18	C	0.9	4		〃
4	4	Z	——	B	Af	C	18	14	B	0.4	3		〃
5	5	1住	222	B	Af	C	(16)	(13)	B	(0.4)	3	片脚先端	〃

石錐

図番号	出土地点	全体形	二次加工	長さ mm	幅 mm	錐部の長さ mm	錐部の幅 mm	重さ g	破損状態	使用痕の状態	石材
6	AI-45	つまみ部を有する	両面加工	26	14	8	5.5	2.4	完形	錐部の稜線および先端に磨耗痕	黒曜石

石匙

図番号	出土地点	つまみと刃部の関係	つまみ部の形状	長さ mm	幅 mm	刃部角	つまみ角	重さ g	厚さ mm	破損状態	石材	備考
7	BF-48	横型	小さなつまみ	29	46	40～55	—	6.5	6.5	完形	頁岩	
8,9	BE-48	斜型	小さなつまみ	27	46	60	40	6.7	9.0	完形	黒曜石	刃部の両面に横方向の線状痕が認められる

使用痕のある剝片・石核・原石

図番号	出土地点	型式	長さmm	幅 mm	厚さmm	重さg	使用痕部の長さmm	使用痕部の角度	石材	備考
10	BI-46	I (Bc+Ba)	22.5	30	6	2.8	17+45	25～30	黒曜石	
11	AT-46	I (Bb+Cb)	25	21.5	7	3.0	11+18	25～45	〃	
12	AQ-47	I Ba	19.5	29	3	2.0	21	45	〃	
13	AR-43	I (Bc+Bc)	30	18.5	8	3.8	9+9	70～85	〃	ピエス・エスキーユ?
14	AE-44	I Bc	24	33	8	5.1	12	90	〃	
15	BR-48	I (Cc+Bc)	26	17	10	4.0	12+7	55・90	〃	
16	Ak-41	I (Bc+Cc)	26	17	5	2.3	9+11	55	〃	
17	AB-42	I (Bc+Ba)	34.5	11	8.5	2.5	19+11	40・70	〃	
18	AS-43	II Ba	30.5	10	5	1.5	29	45～90	〃	
19	BP-40	I Bc	34	19	8	5.9	22	60	〃	
20	AO-44	I Bc	35	13	5	1.9	9	60	〃	
21	AP-44	I (Bc+Bb)	37.5	23	13	7.8	30+13	40・60	〃	
22	AB-49	I Bb	13	13	4	0.5	8.5	25	〃	
23	AS-43	I Ca	14.5	16	4	0.8	13	30	〃	
24	AN-43	I Bc	25	17	4	1.7	13.5	75	〃	
25	Z	I Ba	18	18.5	4	0.8	12.5	30	〃	
	AA-50	I Bb	14.5	15	3	0.6	7	20	〃	
	AC-44	I (Bc+Bc)	17.5	13	4	0.9	15+10	30～35	〃	
	AP-45	I Bb	21	11	6	1.4	4	30	〃	
	Z	I (Bc+Bc)	25	17	7.5	2.7	17+13	45・70	〃	
	BP-41	I Ba	21	16.5	6.5	2.2	13	55	〃	

大形石器

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石材	破損	痕跡	器種
25	1	集石土壙2-9	10.0	6.0	1.7	90	硬砂岩	——	——	打製石斧
28	2	AG47-黒褐土	5.5	5.7	1.3	58	緑色片岩	刃一背	——	横刃型石器
30	3	AN40-褐土	4.2	10.7	1.1	59		——	——	〃
	4	AP40-黒土	6.3	12.5	1.6	149	緑色片岩	——	——	〃
27	5	BC39-1	7.7	15.7	3.1	533	砂岩	——	——	〃
	6	AQ47-褐土	9.4	6.4	5.8	199		——	——	〃
31	7	AE46-茶褐土	(5.1)	8.7	2.2	(126)	砂岩	刃部大半	——	〃
26	8	AQ44-〃	7.6	4.6	1.2	53	緑色片岩	——	——	打製石斧
32	9	AL41-〃	5.3	7.6	2.7	83	砂岩	——	——	礫器
29	10	BA45-〃	8.1	13.1	4.0	440	緑色火山岩	——	——	刃部磨製横刃型石器
49	11	AC51-褐色土	6.2	10.4	2.3	243	〃	——	C.D	
	12	AF47-〃	(7.3)	(7.5)	(5.1)	(300)	安山岩	2/3	A	
34	13	AM40-〃	13.4	7.2	5.1	790	〃	——	A.B	特殊磨石
	14	AA46-〃	16.4	7.2	6.2	940	〃	——	A	
	15	AF46-黒褐土	9.0	6.5	4.5	310	〃	——	A.C	

図No.	登録No.	出土地点	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石　材	破　損	痕　跡	器　種
39	16	AB46-〃	10.3	6.0	5.1	320	安　山　岩	——	A	
	17	AF48-181褐色土	9.2	7.8	4.6	360	〃	——	A.C	
	18	AS48-黒褐土	9.6	6.5	4.2	340	〃	——	C	
	19	AG42-〃	11.1	7.8	3.7	400	〃	——	A.C	
	20	AH45-褐土	10.2	5.8	(4.5)	(340)	〃	一部	〃	
	21	Z	9.4	8.4	4.0	350	〃	——	〃	
	22	BD43	11.2	9.2	4.5	600	〃	——	〃	
46	23	AH47-黒土	11.7	11.1	3.6	450	〃	——	C	
	24	AC47-褐土	(11.1)	6.4	5.1	(600)	〃	両端一部	A.B	特殊磨石
	25	AE48-215褐土	8.4	6.6	3.9	280	〃	——	C	
52	26	AF45-黒褐土	15.8	7.0	7.0	760	〃	——	A.C.D	特殊磨石
	27	AH46-褐土	15.0	6.1	6.7	760	〃	——	A.B	〃
	28	AH41-黒褐土	6.5	7.3	5.6	350	〃	2/3以上	〃	〃
45	29	CC42	13.6	9.6	3.7	760	砂　　岩	——	A.C	
37	30	AQ41-黒土	15.4	7.5	5.4	830	安　山　岩	——	A.B	特殊磨石
	31	AD48-219褐土	(7.5)	6.6	5.1	310	〃	1/2以上	〃	〃
	32	Z	12.4	6.2	4.4	540	〃	——	A	
	33	AT49-黒褐土	(8.9)	7.1	4.8	(390)	〃	1/2以上	A.C	
	34	AF48-197褐土	(8.9)	7.5	6.3	(470)	〃	、2/3	A	
	35	AE48-201黒土	16.4	6.7	6.0	930	〃	——	A.B	特殊磨石
33	36	BF42-黒土	(12.2)	6.1	5.2	(590)	〃	一部	〃	〃
44	37	1住-269	8.5	5.2	(4.3)	(200)	〃	1/2	A.C	
48	38	Z	9.0	6.1	3.3	250	〃	——	〃	
	39	AC47-褐土	8.8	7.9	4.1	370	〃	——	〃	
	40	Z	10.3	7.9	4.8	510	〃	——	〃	
	41	CB49	9.5	8.7	4.3	460	〃	——	〃	
40	42	AC48-221褐土	9.5	6.1	4.1	370	〃	——	A	
	43	BF46	(9.4)	(4.3)	(4.3)	(180)	〃	大半	〃	
47	44	AE43	10.9	7.7	4.5	480	〃	——	A.C	
36	45	AF48-182褐土	14.1	6.7	5.7	700	〃	——	A.B	特殊磨石
35	46	AF46-褐土	13.8	6.2	5.9	770	〃	——	〃	〃
50	47	BC43	(11.7)	7.5	(6.3)	(750)	〃	1/2	A.B.D	〃
	48	AG48-褐土	(7.7)	8.2	(6.0)	(360)	〃	1/2以上	A.C	
	49	Z	(7.1)	(7.1)	(3.5)	(190)	砂　　岩	大半	A	
	50	AJ46-黒土	(9.1)	7.2	(5.1)	(580)	安　山　岩	1/2以上	A.C	
	51	BB45	11.9	7.0	6.0	610	〃	——	A	
	52	AS47-褐土	10.0	7.1	4.5	450	〃	——	A.C	
43	53	AT50-黒褐土	8.6	7.5	4.8	350	〃	——	C	
	54	AT50-〃	10.7	7.9	5.0	480	〃	——	A	
	55	AG45-褐土	9.8	9.3	4.3	480	〃	一部	〃	
	56	AA48-242黒褐土	9.8	(6.1)	4.3	(340)	〃	1/2	〃	
51	57	AG48-褐土	10.7	10.7	4.0	550	〃	——	——	台石
	58	AH46-黒土	(10.2)	(7.2)	(3.3)	(210)	〃	大半	A.C	
	59	AJ48-褐土	7.8	6.1	4.6	300	〃	——	〃	
	60	AS44-黒土	11.8	6.6	5.7	590	〃	——	A	
	61	AB48-231褐土	(7.5)	7.3	(4.0)	(240)	〃	1/4	〃	
	62	AK47	9.8	8.5	4.3	540	〃	——	〃	
	63	AA45-黒褐土	8.4	5.5	(4.4)	(220)	〃	1/2	A.C	
	64	AJ48-褐土	(5.3)	(4.9)	4.7	(230)	〃	大半	A	
	65	AG41-黒褐土	(9.9)	(7.9)	(7.4)	(540)	砂　　岩	1/2以上	D	
	66	AJ46-褐土	11.3	7.5	5.9	540	安　山　岩	——	A	
	67	1住J柱穴内	(5.4)	(3.3)	2.5	(60)		1/2以上	〃	
	68	AL51-褐土	6.8	6.1	5.4	200	（風　化）	——	〃	
	69	集石土壙2(炉)	11.9	9.2	5.5	630	安　山　岩	——	〃	
38	70	〃	13.4	7.5	6.1	640	〃	——	A.B	特殊磨石
	71	集石土壙2(炉)	11.9	7.9	6.6	880	安　山　岩	——	A	
	72	〃	12.9	8.0	5.2	750	〃	——	〃	
42	73	1住-181	(10.4)	8.4	5.1	(500)	〃	一部	〃	
	74	AE48-210褐土	10.4	6.5	5.8	480	〃	——	〃	
	75	1住カマド袖石横	7.5	7.1	6.8	440	〃	——	A.C.D	
	76	AS50-褐土	9.2	6.9	3.7	380	〃	——	A	
	77	AJ40-黒土	10.5	7.0	5.0	(290)	〃	一部	〃	
	78	AC46-褐土	(8.5)	(12.6)	5.1	(660)	〃	1/2	〃	
	79	〃	11.4	7.3	5.8	530	〃	——	〃	
	80	AJ46-褐土	9.5	7.0	4.8	480	〃	——	〃	
41	81	AH46-褐土	9.2	7.9	5.4	620	〃	——	〃	
	82	AJ45-〃	12.9	8.9	6.2	900	〃	——	〃	
	83	AI46-〃	(5.0)	(7.6)	(5.3)	(220)	〃	1/2以上	〃	
	84	AH48-褐土	7.8	6.4	3.8	200	〃	——	〃	
53	85	1住北壁寄り	(12.5)	(11.6)	7.1	(1180)	〃	1/2以上	——	石皿

（痕跡記号は判の木山西遺跡に同じ）

附表 3 茅野市判ノ木山西遺跡平安時代土器一覧表

出土地点	図番号	種別	器　種	口径	器高	底径	指数	残存	出土地点	図番号	種別	器　種	口径	器高	底径	指数	残存
12号住居址	- 1	H	杯DIIIa2③	11	3.5	4.9		1/3	13号住居址	-61	Ka	椀AII	12.2	3.6	6.0		1/4
〃	- 2	H	〃	10.7	3.7	4.4		1/3	〃	-62	Ka	〃	13.8				1/8
〃	- 3	H	杯BII	12.9	5.0	8.1		1/4	〃	-63	Ka	皿AI	12.7	2.8	6.2		1/6
〃	- 4	H	小形甕AI	18.8				1/4	〃	-64	Ka	〃	12.3	2.6	7.0		1/3
〃	- 5	H	〃	17.5				1/4	〃	-65	Ka	〃	12.9	2.3	7.1		1/3
〃	- 6	H	〃　A			7.8		1/5	〃	-66	Ka	〃	14.1				1/8
〃	- 7	Ka	椀AI	16.1	5.0	7.5		1/3	〃	-67	Ka	〃	13.1				1/8
〃	- 8	Ka	〃	16.2	5.5	8.1		1/3	〃	-68	Ka	〃	13.2	2.5	8.0		1/8
〃	- 9	Ka	〃	16.0				1/4	〃	-69	Ka	皿AII	11.9	2.3	6.3		完存
〃	-10	Ka	〃			7.3		1/5	〃	-70	Ka	〃	11.5	2.5	5.0		1/3
〃	-11	Ka	〃	15.7				1/5	〃	-71	Ka	皿BI	13.8				1/4
〃	-12	Ka	〃			7.0			〃	-72	Ka	皿C	14.1	3.0	6.6		
〃	-13	Ka	〃			8.8		1/10	〃	-73	Ka	〃	13.4	2.5	7.0		1/8
〃	-14	Ka	椀AII	13.6				1/5	〃		Ka	椀AII	13.8				1/8
〃	-15	Ka	皿AI	13.1	2.6	7.0		1/5	〃		Ka	〃	12.0				1/8
〃	-16	Ka	〃	13.4	3.1	7.0		1/8	〃		Ka	椀AI	14.4				1/8
〃	-17	Ka	〃	14.8	3.2	8.0		1/4	〃		Ka	〃	14.2				1/8
〃	-18	Ka	〃	12.9	3.0	7.0		1/5	〃		Ka	〃	14.6				1/8
〃	-19	Ka	〃	12.0	2.8	6.3		1/3	〃		Ka	〃	15.6				1/8
〃	-20	Ka	椀AI			8.0		1/8	〃		Ka	椀AII	12.4				1/8
〃	-21	Ka	〃			5.6		1/8	〃		Ka	〃	14.0				1/8
〃	-22	H	小形甕AI	16.4				1/5	〃		Ka	〃	13.0				1/8
〃	—	H	小形甕AII	14.5				1/8	〃		Ka	〃	10.0				1/8
13号住居址	-23	H	杯DIIIa2①	11.0	3.9	3.8		1/3	〃		Ka	〃	11.6				1/8
〃	-24	H	杯DIIIa2②	11.0	3.5	4.6		1/3	〃		Ka	〃	14.0				1/8
〃	-25	H	杯DIIIa2･5	10.7	3.5	5.3		1/3	〃		Ka	〃	13.6				1/8
〃	-26	H	杯DIIa2･5	12.4	3.3	6.6		1/3	〃		Ka	〃	12.4				1/8
〃	-27	H	杯DIIIa2①	10.2				1/5	〃		Ka	〃	11.0				1/8
〃	-28	H	杯DIIIa2②	11.2	4.0	4.9		1/4	〃		Ka	〃	13.2				1/8
〃	-29	H	杯DIIIa2･5	11.0	3.4	5.6		1/3	〃		Ka	皿AI	15.0				1/8
〃	-30	H	杯DII					/	〃		Ka	皿AI	14.8				1/6
〃	-31	H	杯DIIIa2①	11.0				1/6	〃		Ka	皿AIII	12.6				1/8
〃	-32	H	杯DIIIa2②			5.3		1/6	〃		Ka	皿C	11.4				1/8
〃	-33	H	杯DIIIa2･5	11.2	3.8	4.0		1/4	〃		Ka	〃	12				1/8
〃	-34	H	杯DIIIa2					1/8	〃	-83	Ka	瓶	19.2				1/10
〃	-35	H	杯DIIIa2①	11.2				1/6	〃	-84	Ka	〃	19.2				1/10
〃	-36	H	杯DIIIa2③	10.6				1/6	〃	-85	Ka	〃			13.5		1/8
〃	-37	H	杯DIIIa2･5	11.3	3.8	4.5		1/4	〃	-86	Ka	〃			12.6		1/8
〃	-38	H	杯DIIIa2①	12.3				1/6	〃	-87	Ka	〃			13.8		1/8
〃	-39	H	杯DIIIa2③	11.2				1/6			Ka	〃			10.5		1/8
〃	-40	H	杯DIIIa2･5	10.3	3.8	3.4		1/3	〃	80	H	耳皿	7.8	3.0	4.5		完存
〃	-41	H	杯DIIIa2①	12.3				1/6	14号住居址	-88	H	羽釜					
〃	-42	H	杯DIIIa2③			4.0		1/5	〃	-89	H	〃			19.1		
〃	-43	H	杯DIIIa2･5					1/10	〃	90	H	甕G	30.3				1/4
〃	-44	H	杯BI					1/10	〃	91	H	〃	30.6				1/4
〃	-45	H	杯BI					1/10	〃	92	H	甕			13.3		1/8
〃		H	杯BI					1/10	〃	93	H	甕A					1/8
〃		H	杯DIIa2②					1/10	〃	94	H	杯DIIIa2	11.2	4.3	5.9		1/3
〃		H	杯DIIa2②					1/10	〃	95	H	〃	11.5	4.8	5.8		1/3
13号住居址		H	杯DIIa2②	11.2				1/6	〃	96	H	杯C	10.6	4.0	4.4		1/4
〃		H	〃	11.0				1/6	〃	97	H	杯DIIa2	15.1				1/5
〃		H	〃	11.2				1/6	〃	98	H	〃	15.8				1/5
〃		H	〃	11.2				1/6	〃	99	H	杯DIIa2	11.5	3.8	5.0		1/4
〃	-46	Ka	椀AI	18.1	6.1	10.4		1/3	〃	100	H	甕AIII	11.0				1/5
〃	-47	Ka	〃	16.6	6.8	8.1		3/4	〃	101	H	杯BI	12.6				1/4
〃	-48	Ka	〃	17.6	7.4	8.0		1/4	〃	102	H	〃	11.2				2/3
〃	-49	Ka	〃	14.6	4.9	7.3		1/3	〃	103	H	杯BII	15.2				1/3
〃	-50	Ka	〃	19.1				1/3	〃	104	H	〃	12.8				1/3
〃	-51	Ka	〃	16.1				1/8	〃	105	H	〃	16.6				1/2
〃	-52	Ka	〃	16.8				1/6	〃	106	H	甕A			7.0		1/6
〃	-53	Ka	〃	16.5				1/8	〃	107	H	黒色C	13.9				1/6
〃	-54	Ka	〃	16.8				1/6	〃	108	H	〃	12.4				1/5
〃	-55	Ka	〃	14.4				1/6	〃	109	H	〃	12.5				1/6
〃	-56	Ka	椀AII	13.2	4.2	6.2		2/3	〃	110	H	〃	11.6				1/6
〃	-57	Ka	〃	12.5	4.0	7.0		1/4	〃	111	H	〃	10.0				1/8
〃	-58	Ka	〃	12.5	4.9	5.9		1/5	〃	112	H	黒色B	13.2	7.0	6.8		1/3
〃	-59	Ka	〃	12.9	4.2	7.3		1/4	〃	113	H	〃			6.7		1/5
〃	-60	Ka	〃	12.2	4.0	6.3		1/3	〃	114	H	手ずくね	11.8				1/5

判ノ木山遺跡平安時代土器一覧表

出土地点	図番号	種別	器　種	口径	器高	底径	指数	残存
14号住居址	115	H	手ずくね	10.3				1/5
〃	116	Ka	椀AⅠ	17.3	5.5	8.0		1/3
〃	117	〃	〃	16.0	6.6	8.0		2/3
〃	118	〃	〃	17.4	5.4	8.5		2/3
〃	119	〃	〃	15.2	5.0	7.7		1/3
〃	120	〃	〃	14.6				1/6
〃	121	〃	〃	13.9				1/8
〃	122	〃	〃	15.6				1/8
〃	123	〃	椀AⅡ	13.3	4.2	7.2		1/3
〃	124	〃	皿AⅠ	12.6	3.6	7.1		1/3
〃	125	〃	〃	12.2	2.5	6.7		完存
〃	126	Ka	皿AⅠ	12.5	2.7	6.6		1/2
〃	127	〃	皿AⅡ	12.6	2.3	6.3		1/10
〃	128	〃	〃	12.2				1/10
〃	129	〃	皿C	14.5	2.2	7.9		3/4
〃		〃	椀AⅡ	12.8				1/8
〃		〃	〃	12.9				1/8
15号住居址	130	H	杯DⅡa2	10.0				1/6
〃	131	H	杯DⅢa2･5	8.8	3.4	3.5		1/5
〃	132	H	〃	13.2				1/5
〃	133	H	〃	11.0				1/5
〃	134	H	〃			4.8		1/6
〃	135	H	甕			6.8		1/6
〃	136	Ka	椀AⅠ	16.0				1/8
〃	137	R	皿	10				1/10
〃	138	R	皿					1/10

茅野市金山沢北遺跡平安時代土器一覧表

出土地点	図番号	種別	器　種	口径	器高	底径	指数	残存
ｻ1号住居址	- 1	H	杯DⅡa2	12.1	4.4	5.6		1/3
〃	- 2	H	〃	12.2	4.2	5.0		1/3
〃	- 3	H	杯DⅢa2･5	11.2	3.0	4.4		1/3
〃	- 4	H	杯DⅢ	10.8				1/6
〃	- 5	H	〃	10.2				1/6
〃	- 6	H	杯DⅡ	12.6				1/6
〃	- 7	H	黒色土器C	16.4				1/6
〃	- 8	H	杯DⅡ	14.2				1/6
〃	- 9	H	杯B			5.6		1/6
〃	-10	Ka	椀AⅠ	17.2				1/6
〃	-11	Ka	〃	14.4				1/6
〃	-12	Ka	椀AⅡ	13.0	3.1	7.6		1/3
〃	-13	Ka	〃	12.3				1/5
〃	-14	Ka	皿AⅠ	13.8	2.4	6.0		1/3
〃	-15	Ka	〃	12.2	2.9	6.5		1/3
〃	-16	Ka	椀AⅡ	12.2				1/6
〃	-17	Ka	〃	12.0				1〃6
ｻ2号住居址	-18	H	杯DⅡa2	14.2				1/6
〃	-19	Ka	椀AⅠ	17.1				1/6
〃	-20	H	甕G	24.8				1/5
〃	-21	H	小形甕AⅡ	10.2				1/5
〃	-22	H	〃	10.0				1/5
〃	-23	Ka	椀AⅡ	11.4				1/5
〃	-24	Ka	〃	12.4				1/5
〃	-25	Ka	皿AⅡ	11.8				1/5
〃	-26	H	甕G	27.6				1/6
〃	-27	H	〃					1/6
ｻ3号住居址		H	杯DⅡ					1/10
〃		H	〃					1/10
〃		H	杯BⅠ					1/10
〃		H	黒色土器C					1/10
〃		H	甕G					1/10
遺　構　外	-28	H	杯DⅡ	12.2				1/6
〃	-29	Ka	椀AⅠ	15.9				1/4
〃	-30	H	杯D			6.8		1/4
〃	-31	Ka	椀AⅡ	12.3				1/4
〃	-32	H	黒色B	13.1				1/4
〃	-33	Ka	〃	12.3				1/5
〃	-34	Ka	〃	13.1				1/5
〃	-35	Ka	皿Ⅰ	12.4	2.3	5.6		1/3
〃	-36	Ka	椀AⅡ	13.4				1/5
〃	-37	H	杯B			3.7		1/6
〃	-38	H	〃		3.7		1/6	
〃	-39	H	〃			3.3		1/6
〃	-40	H	甕G	26.0				1/5

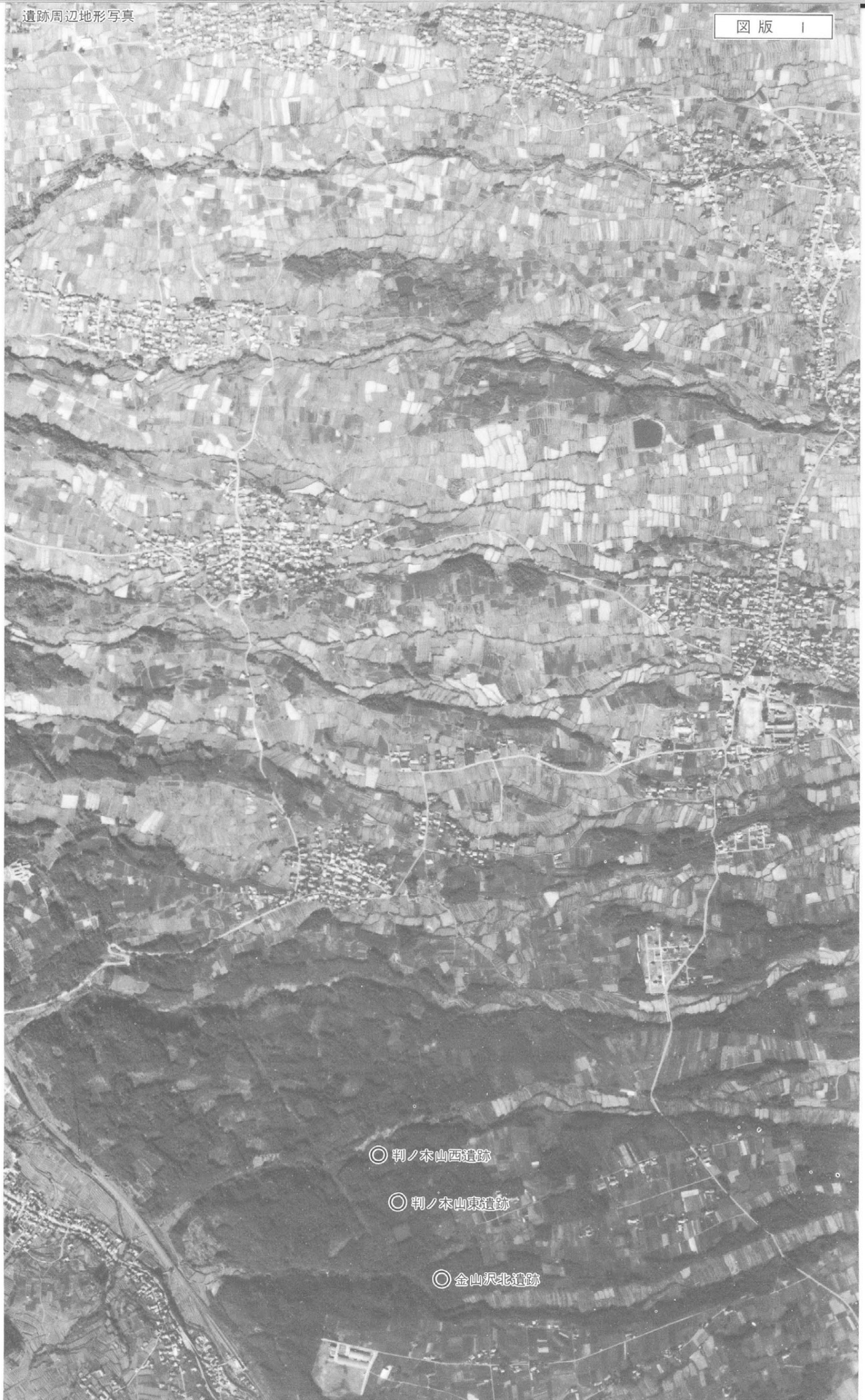
茅野市判ノ木山東遺跡（取付道路分）

出土地点	図番号	種別	器　種	口径	器高	底径	指数	残存
ｻ13号住居址	- 1	H	杯DⅡa2-②	13.2	4.2	4.6		1/3
〃	- 2	H	杯DⅡa2①	10.4				1/5
〃	- 3	H	杯DⅡa2②	12.6				1/5
〃	- 4	H	杯CⅢ	10.5				1/6
〃	- 5	H	黒色土器C	14.5	4.4	7.8		1/2
〃	- 6	H	〃	14.4				1/3
〃	- 7	H	〃			6.1		1/6
〃	- 8	H	〃			10.4		1/3
〃	- 9	H	〃			11.2		1/3
〃	-10	Ka	皿			5.6		1/6
〃	-11	H	甕C	31.6				1/10
〃	-12	H	小形甕BⅠ	20.2				1/5
〃	-13	H	小形甕BⅡ	15.1				1/5
〃	-14	H	小形甕A			8.8		1/6
〃	-15	H	〃			9.0		1/6
〃	-16	H	〃			8.8		1/6
遺　構　外	-17	S	甕			4.8		1/5

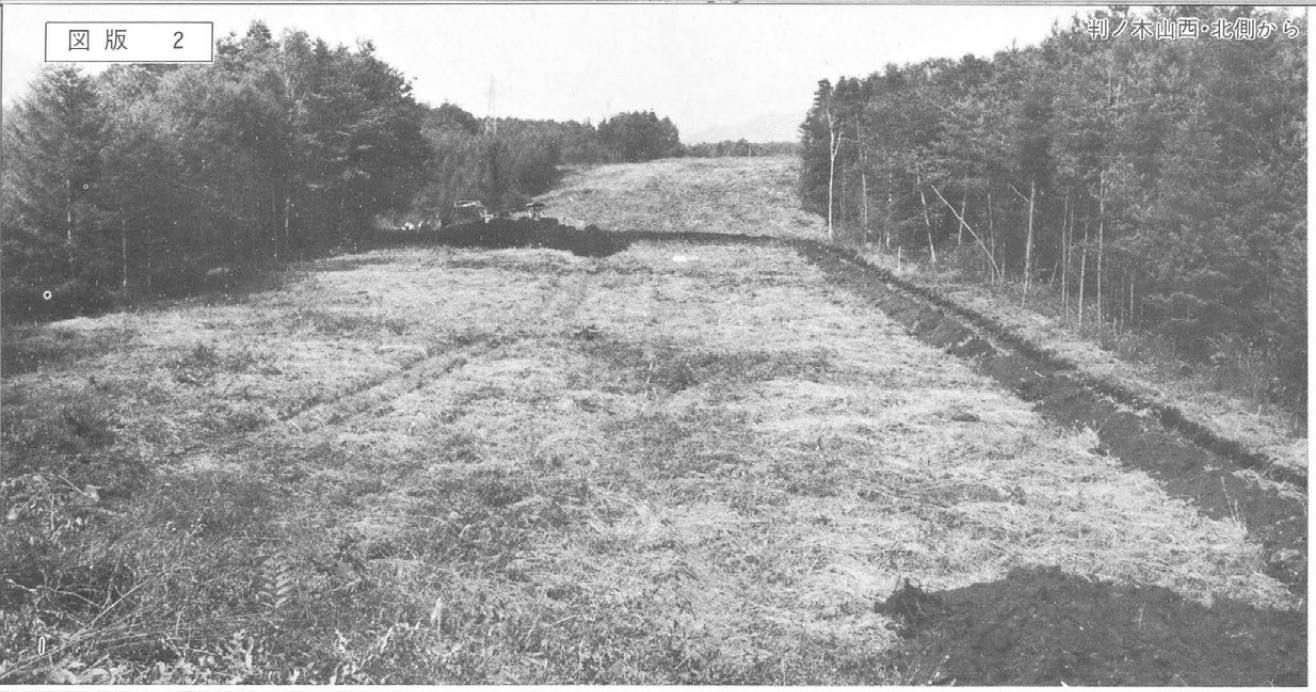
図　　版

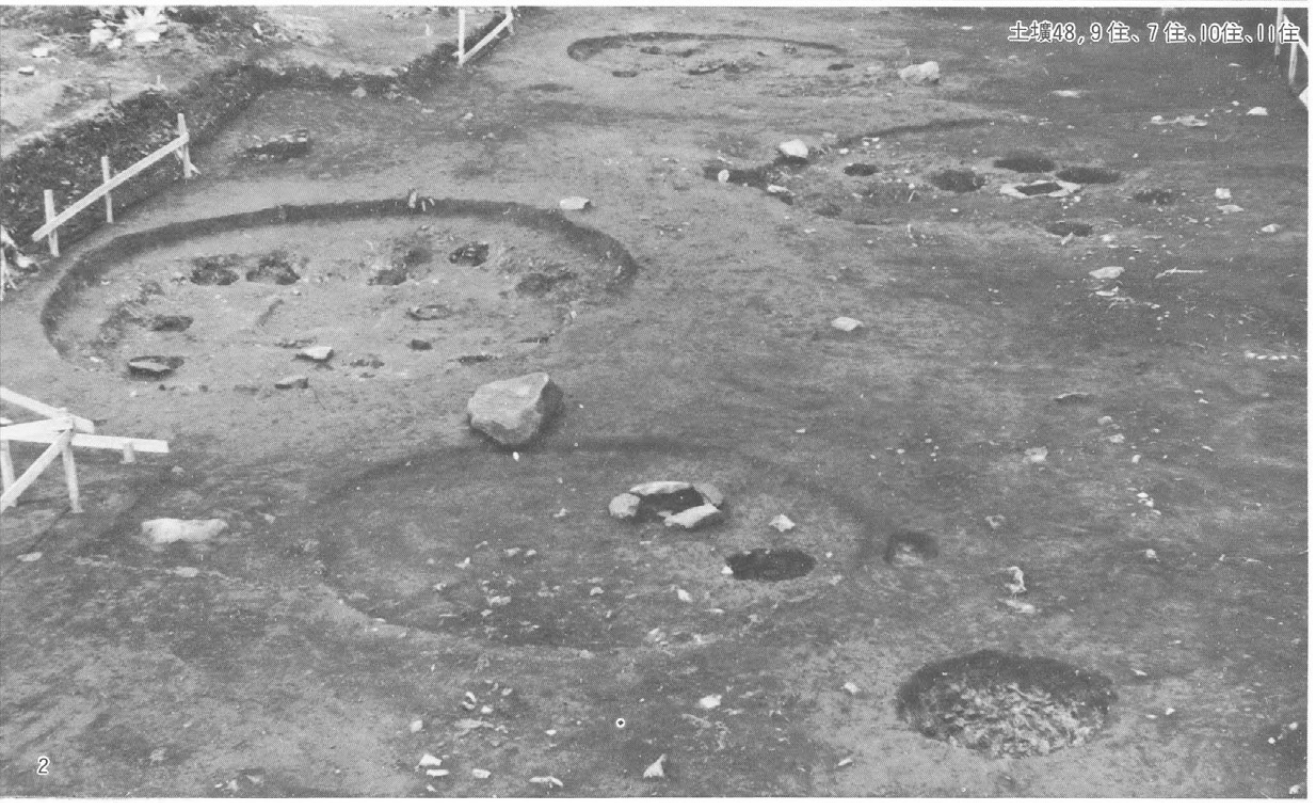
遺跡周辺地形写真

図版 1

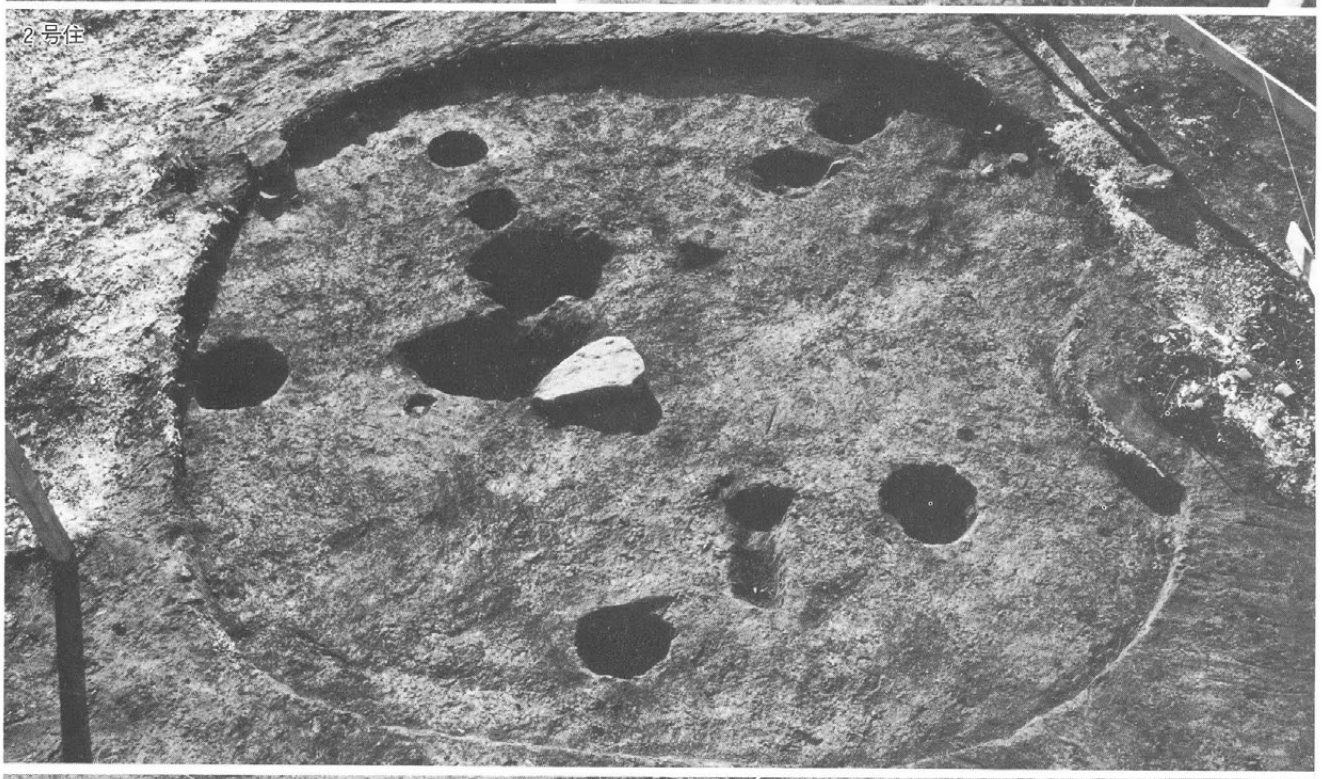


図版 2



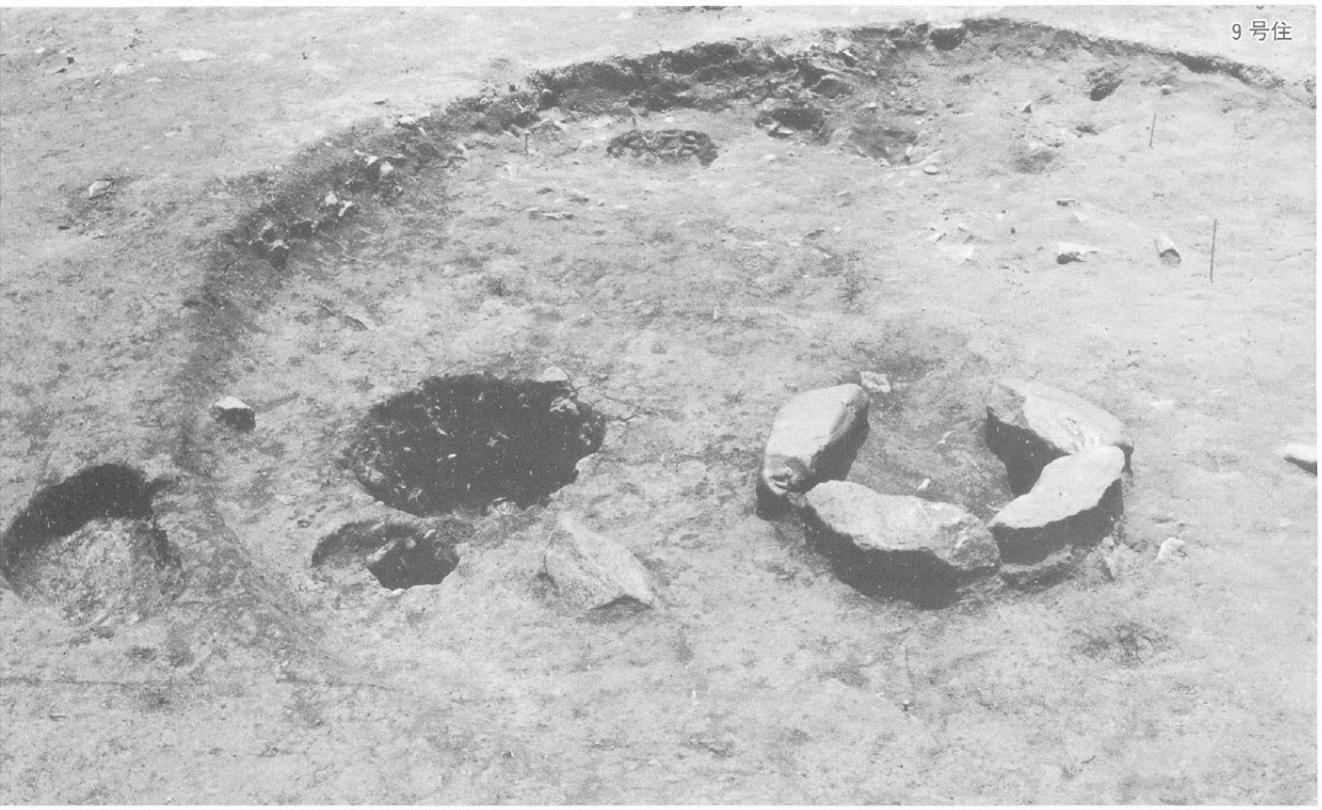


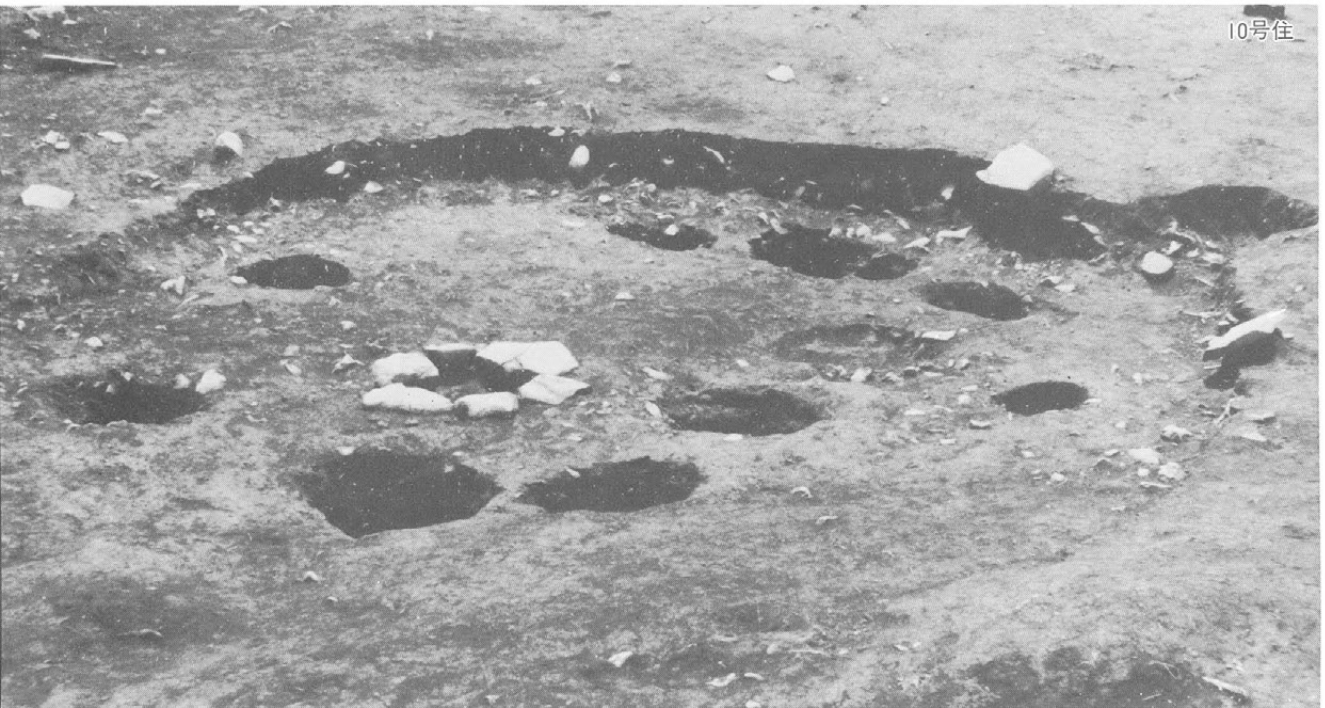
1号住

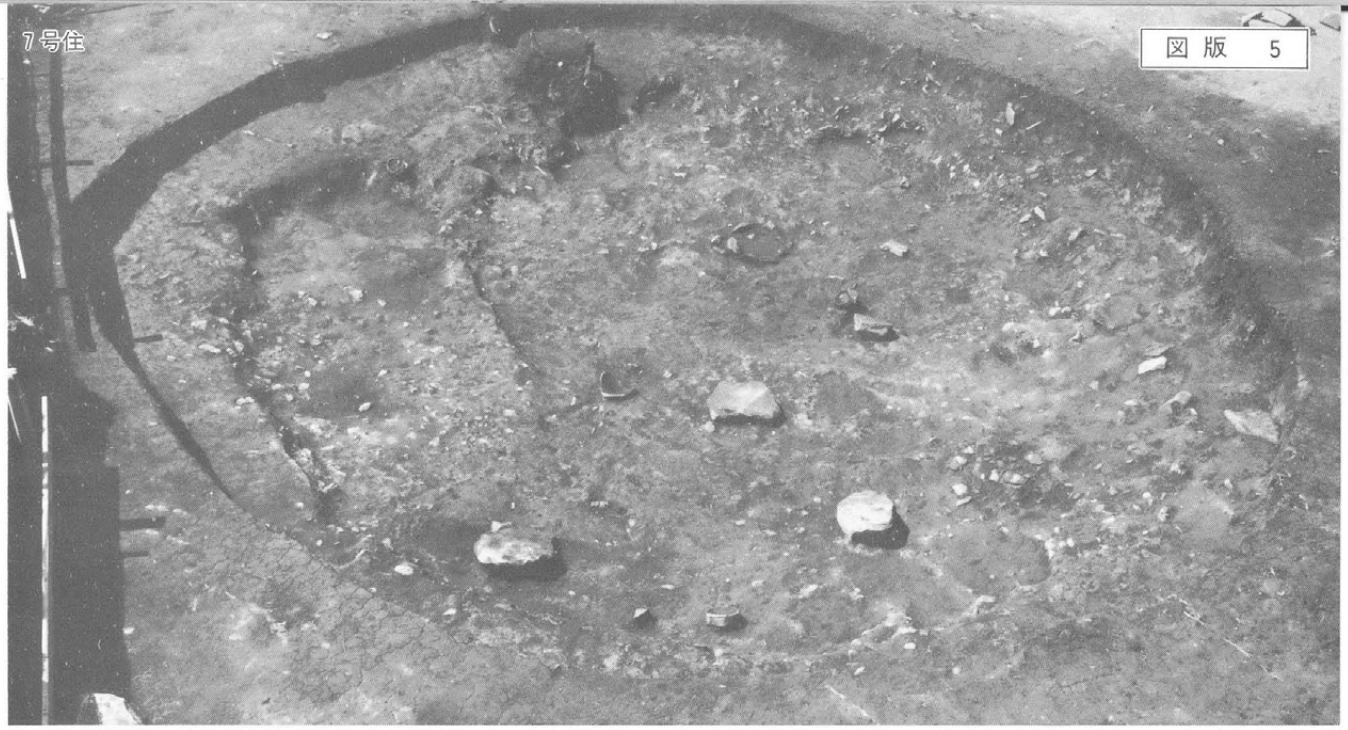

2号住

3号住

図版 4





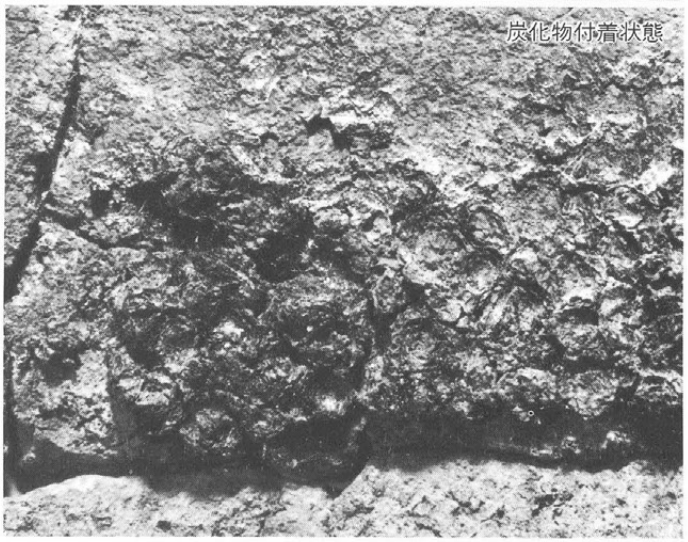

7号住

7号住

7住層序断面

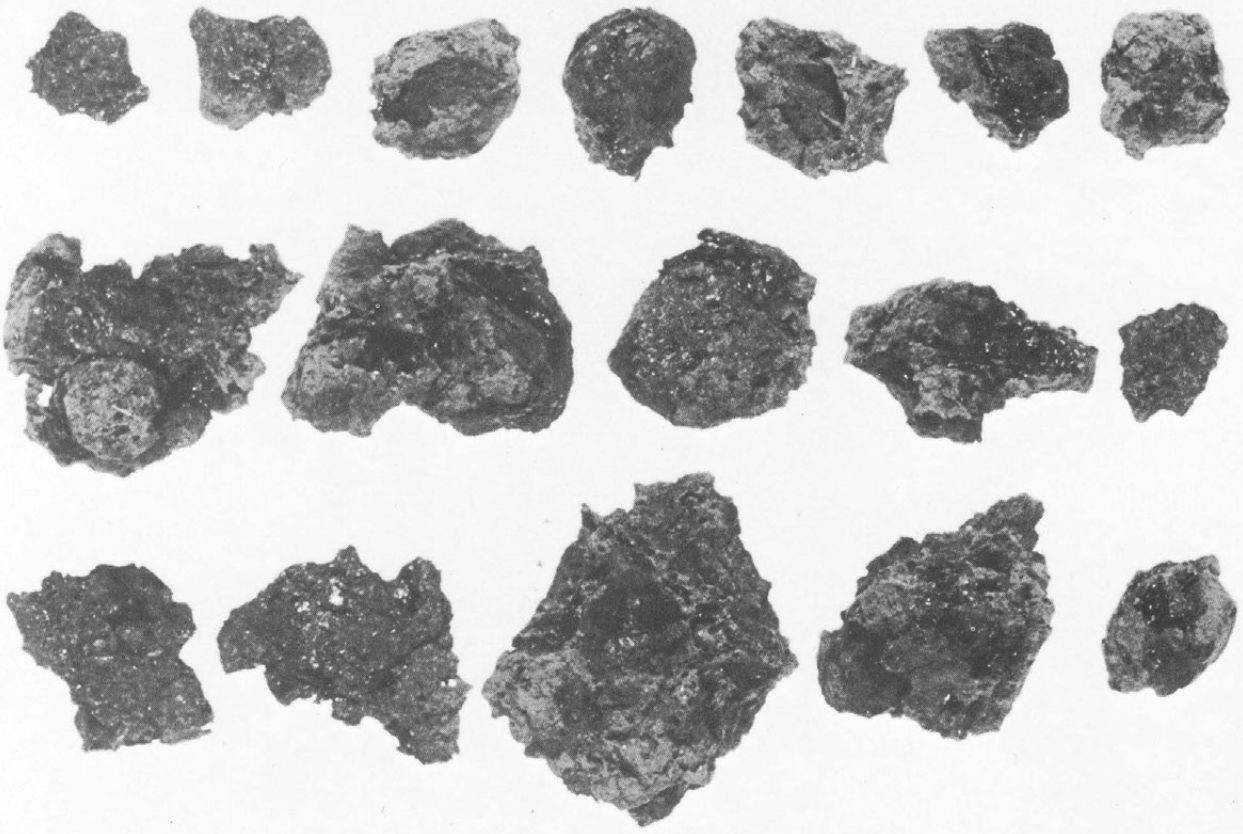
7住(No.20)出土状態

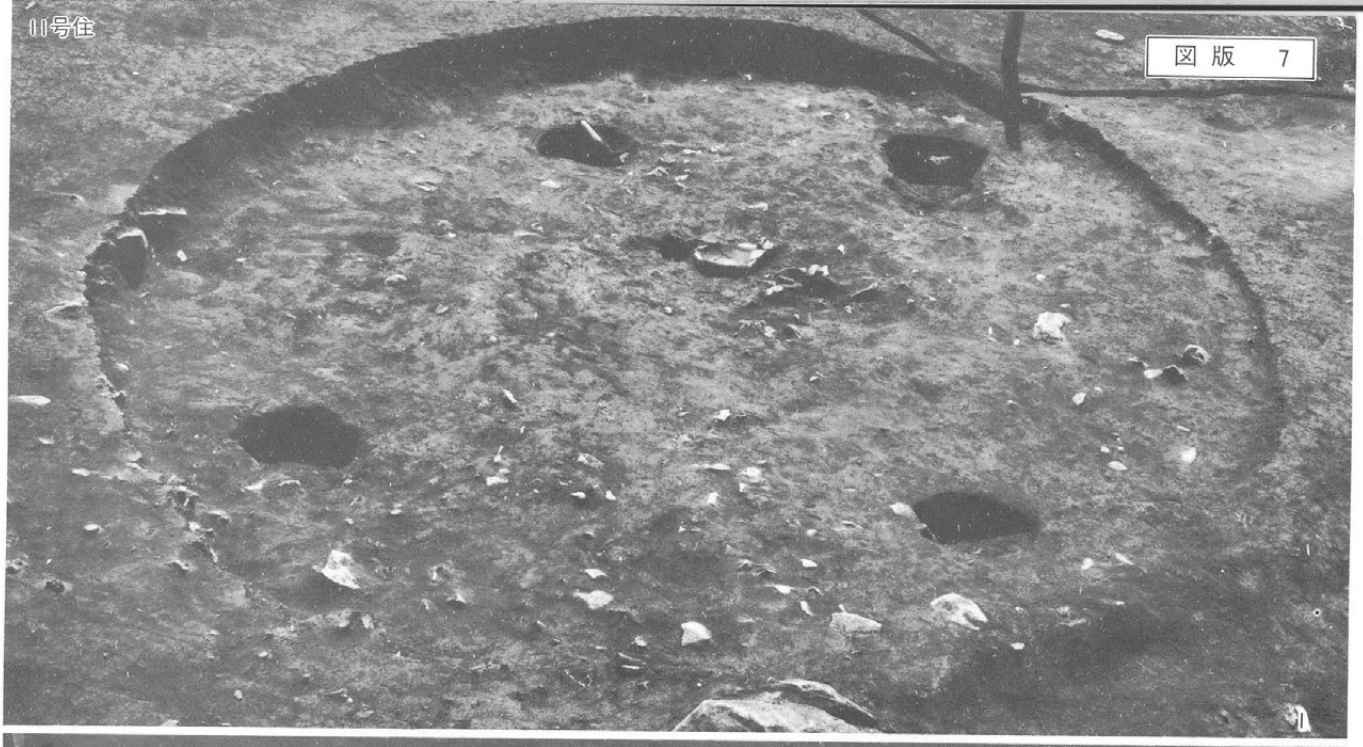
炭化物付着状態



炭化物付着状態

No.20土器内炭化物

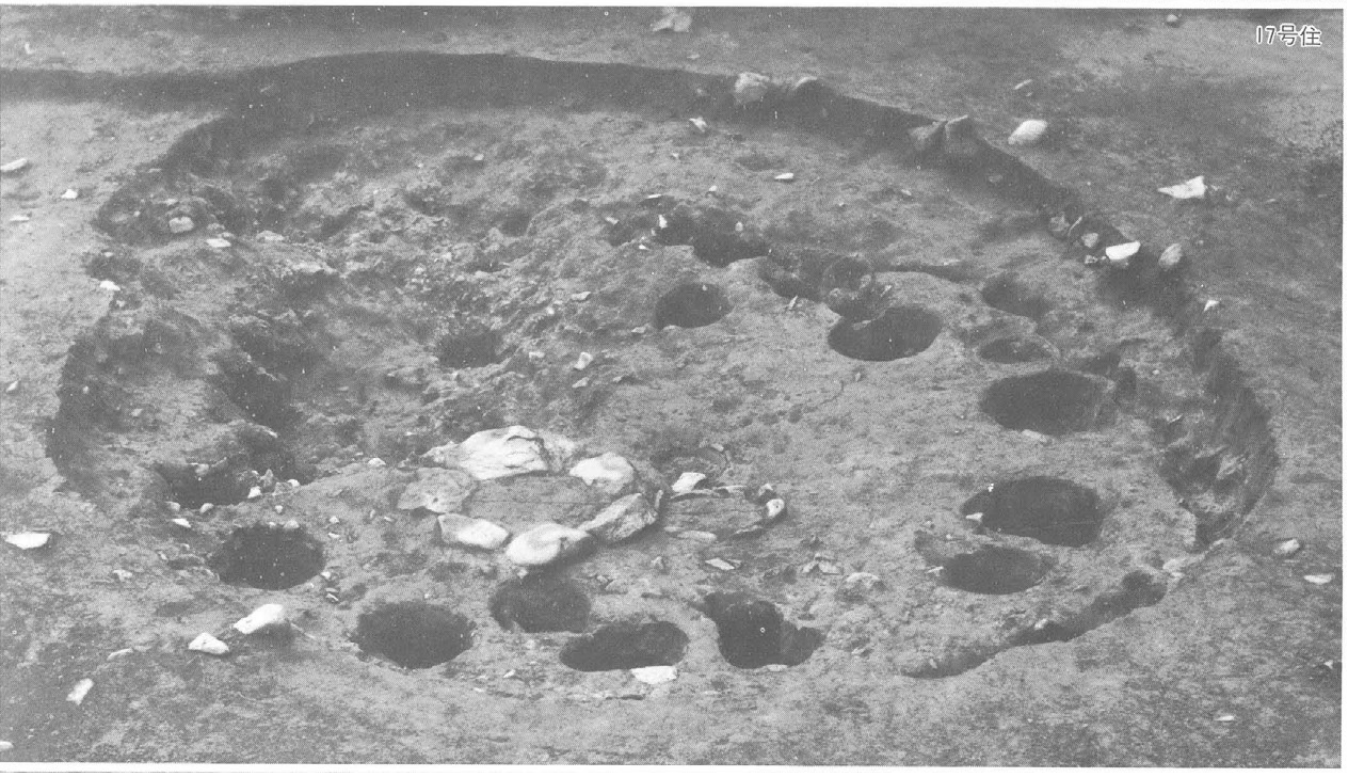


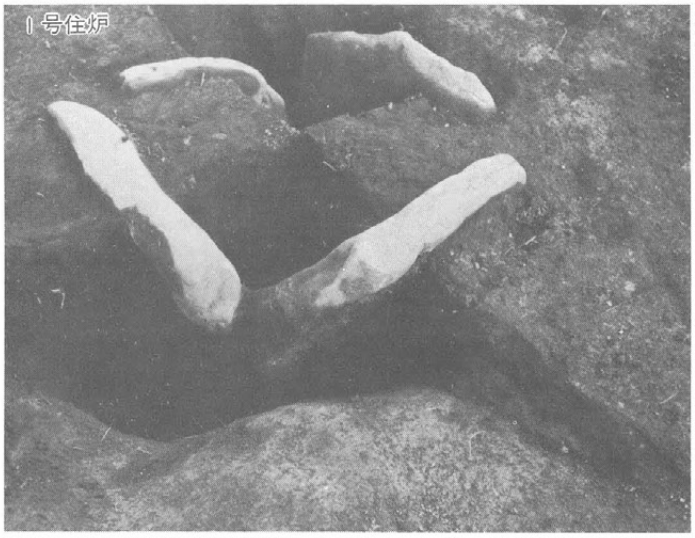

11号住
1

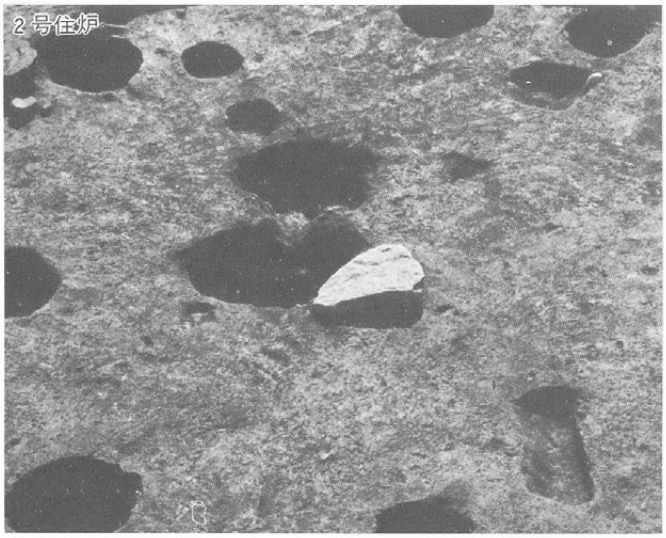
16号住
2

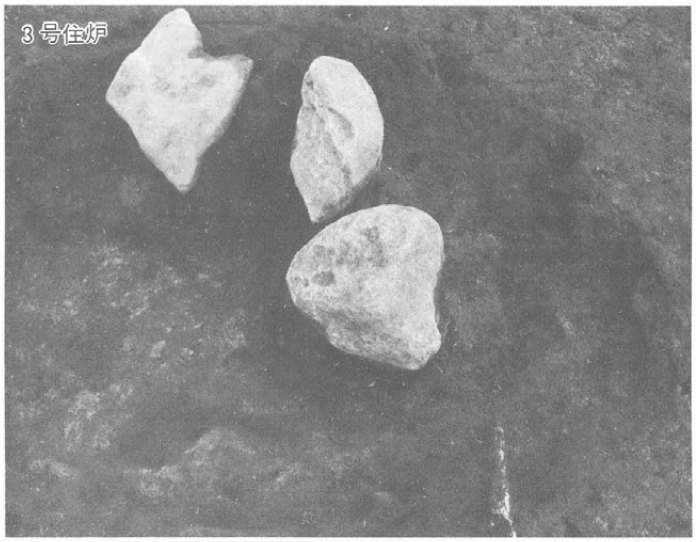
18号住
3

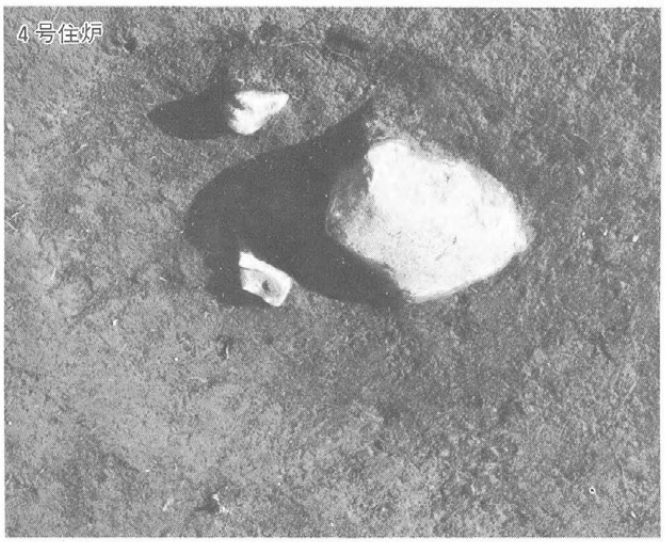
図版 8

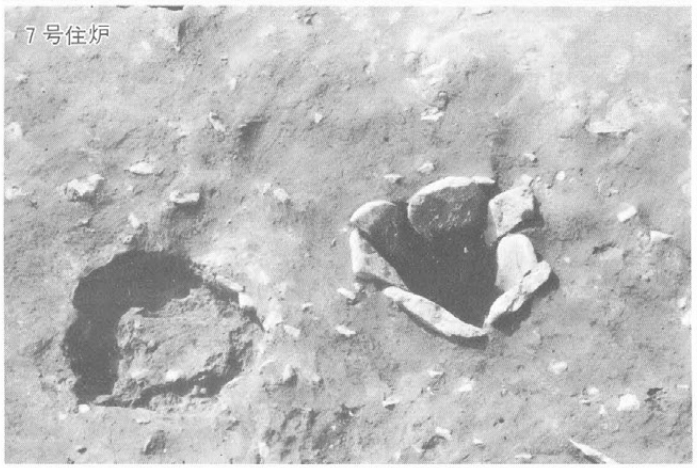


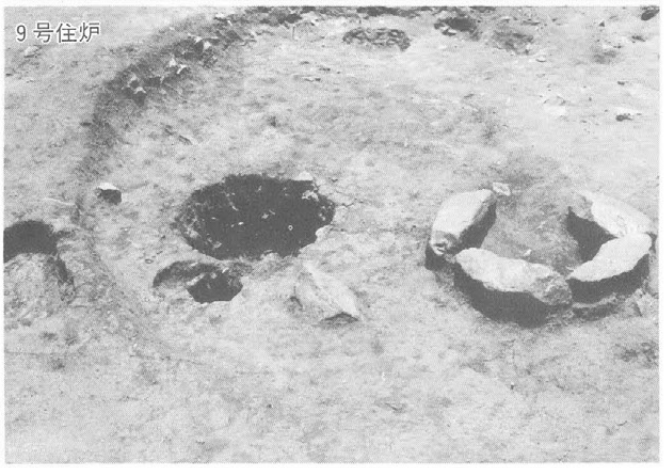

1号住炉


2号住炉

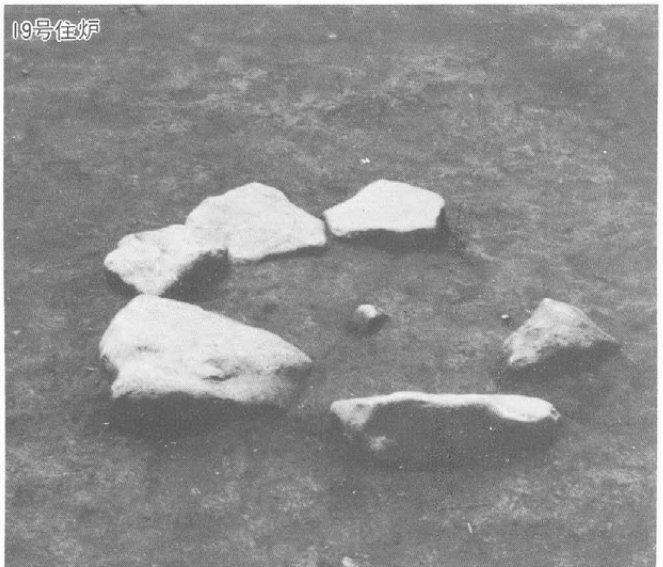

3号住炉


4号住炉


7号住炉

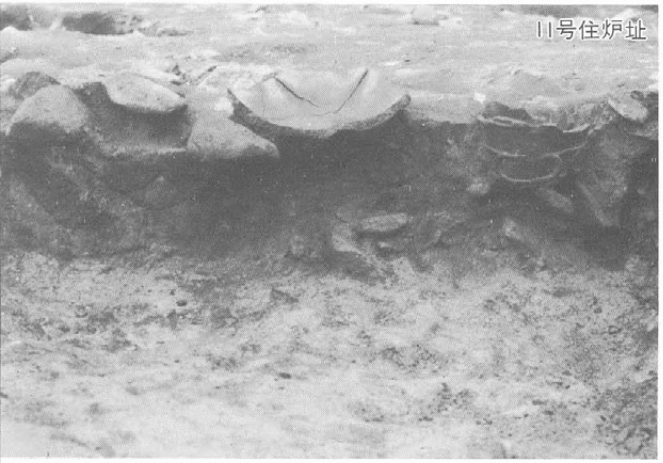

9号住炉

10号住炉


19号住炉

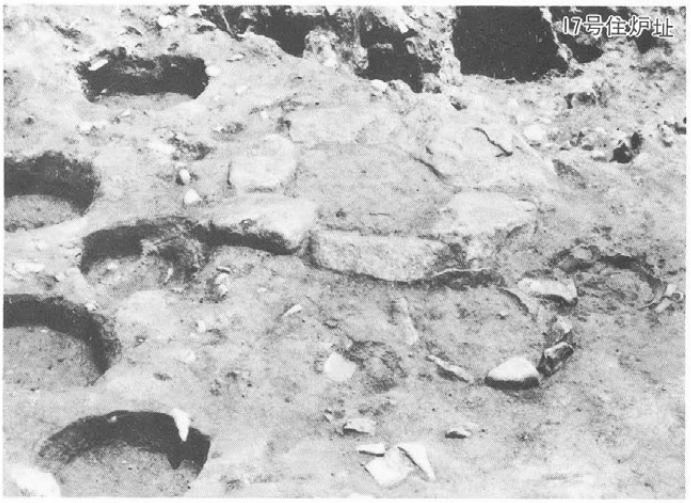
16号住炉址

16号住炉址


11号住炉址

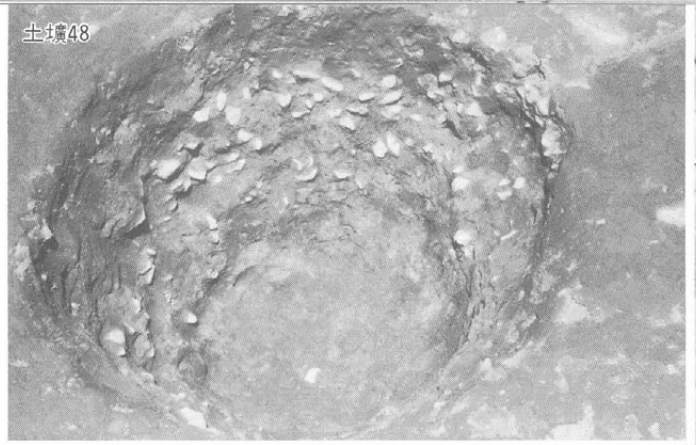
18号住炉址

17号住炉址


17号住炉址

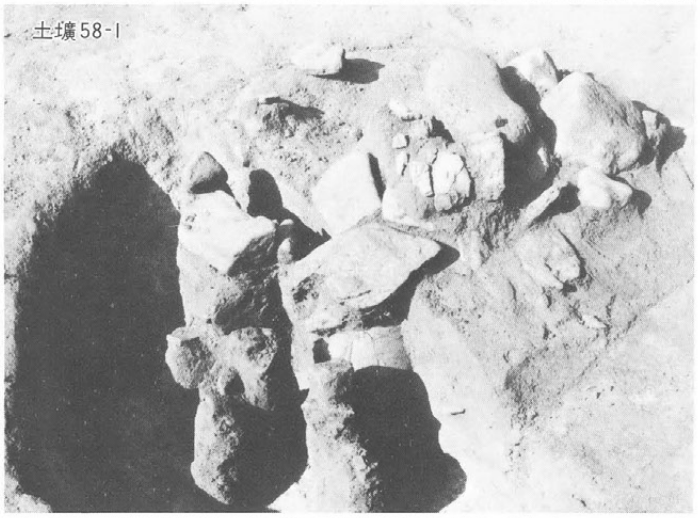
17号住炉址

17号住炉址


土壙48

土壙73

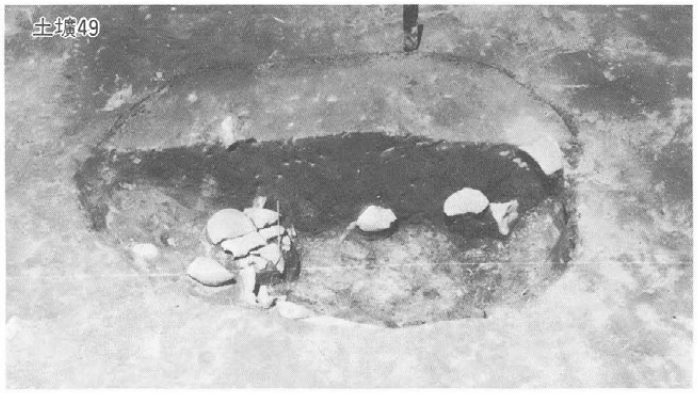
土壙32-1


土壙58-1

2

土壙58-2

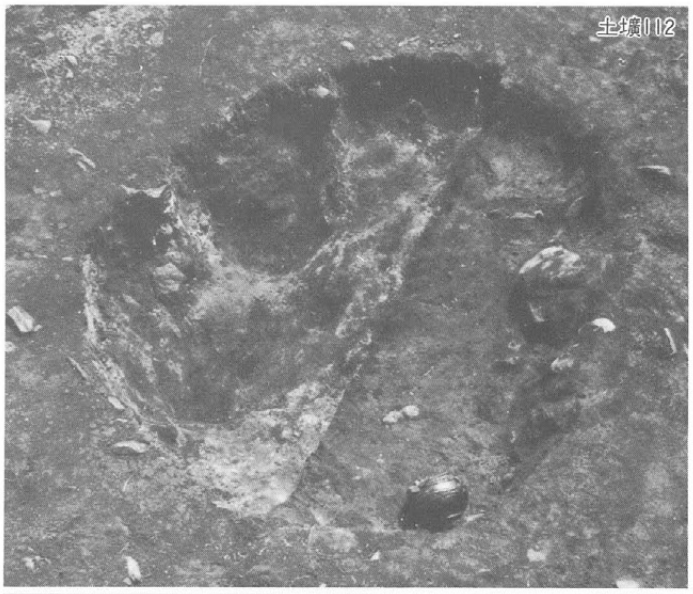
3


土壙49

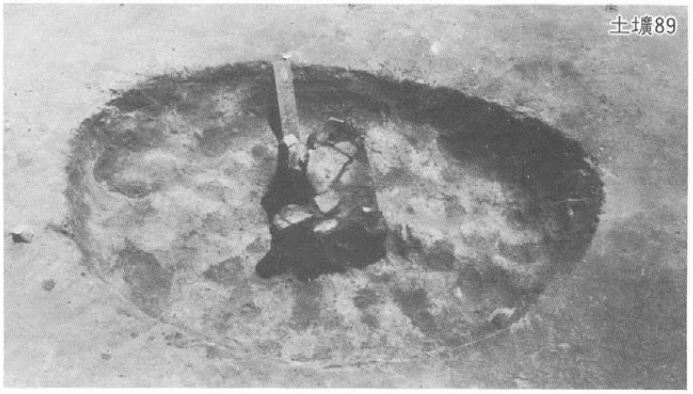
土壙112

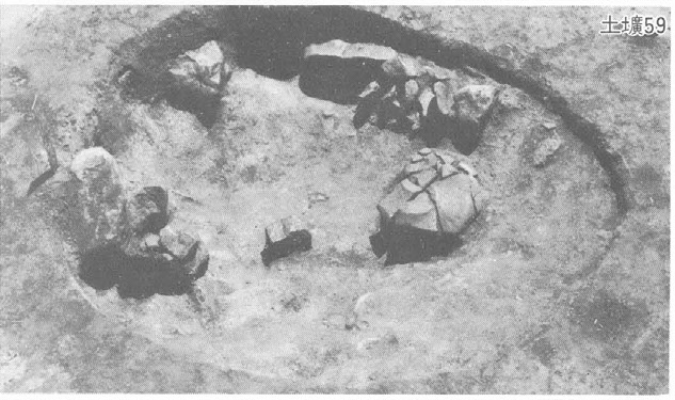
土壙54.55

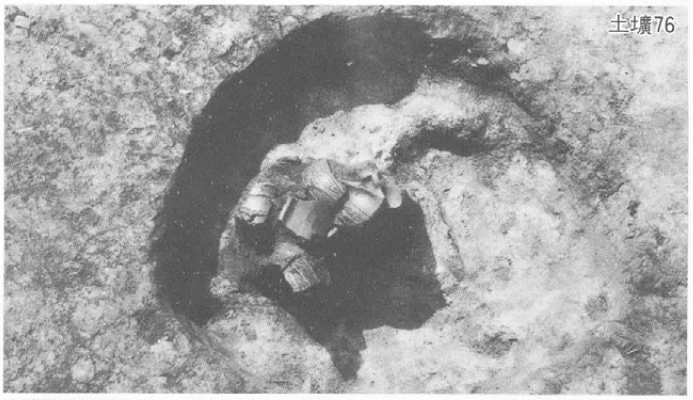
10号住内土壙

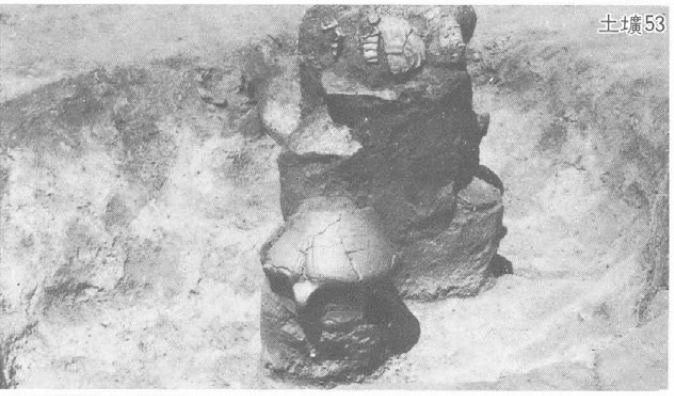

土壙112

土壙103


土壙89


土壙59


土壙76

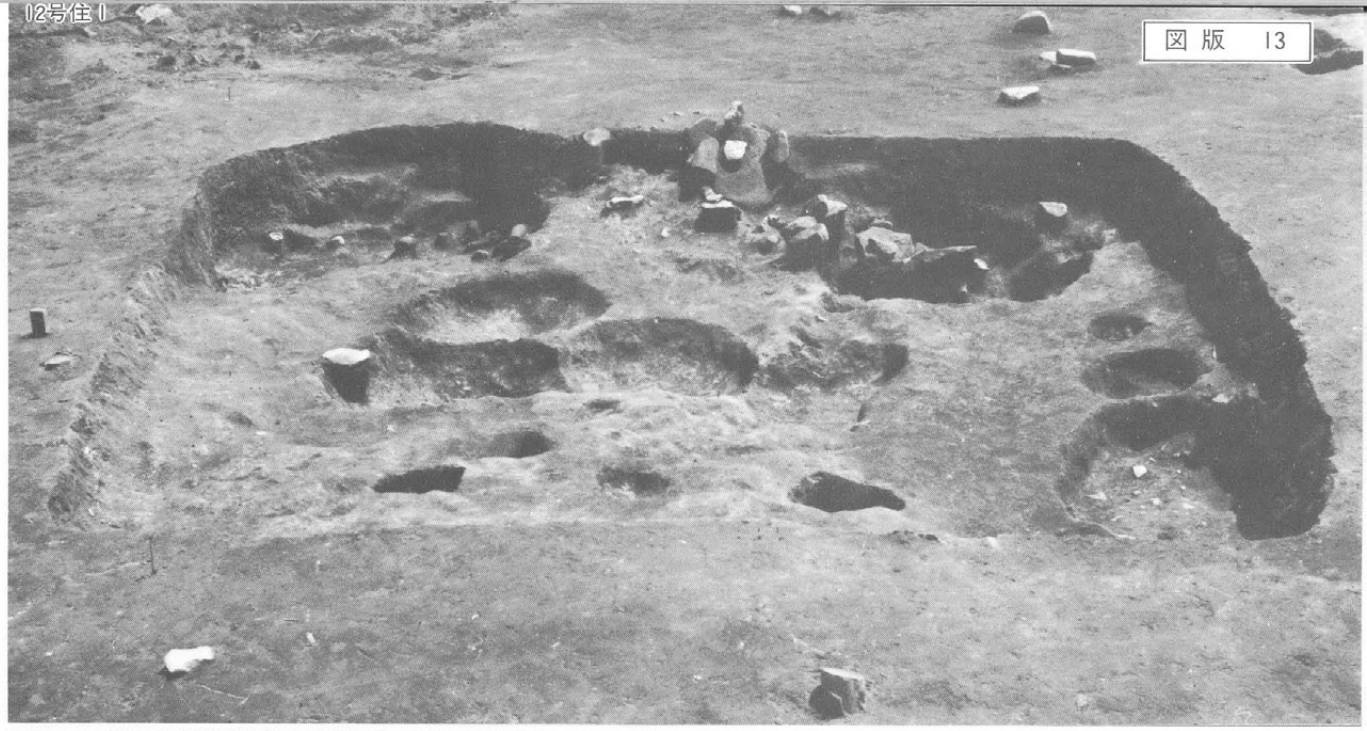

土壙53

土壙55

土壙63

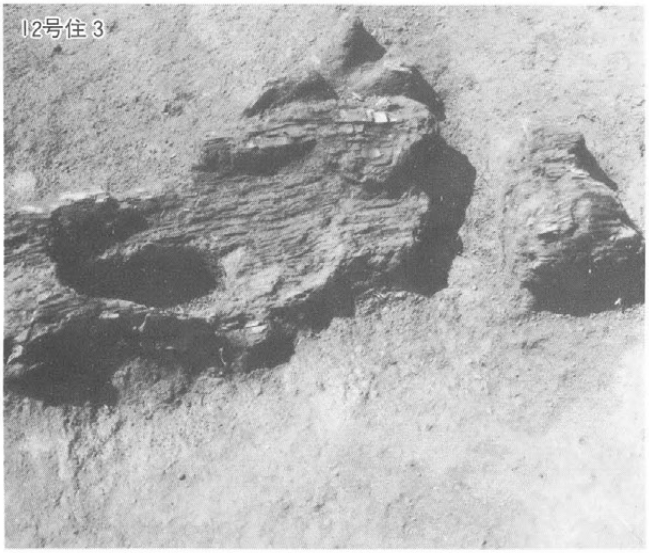
土壙63

12号住1

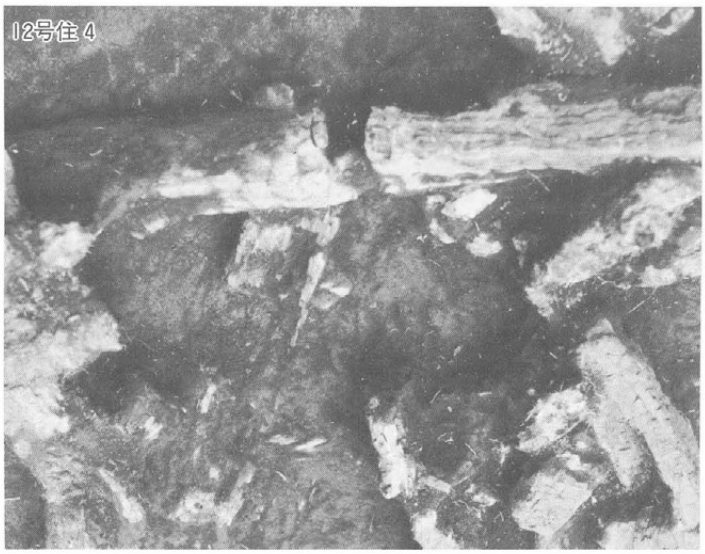


12号住2

12号住3



12号住4



12号住・小鍛冶址

1

2

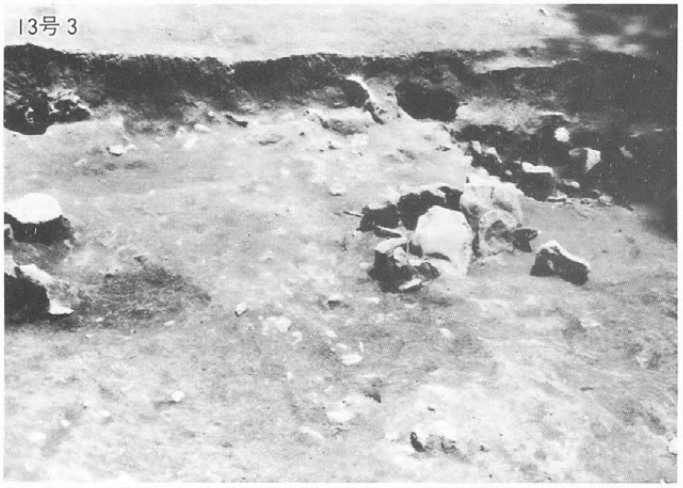
3

4

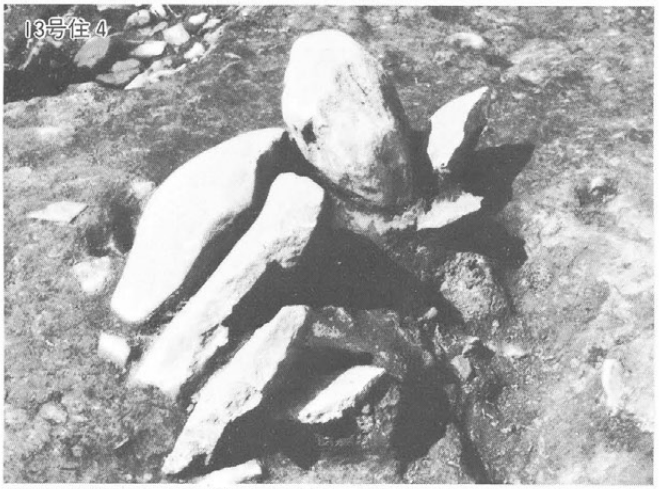
13号住 1

13号住 2

13号 3



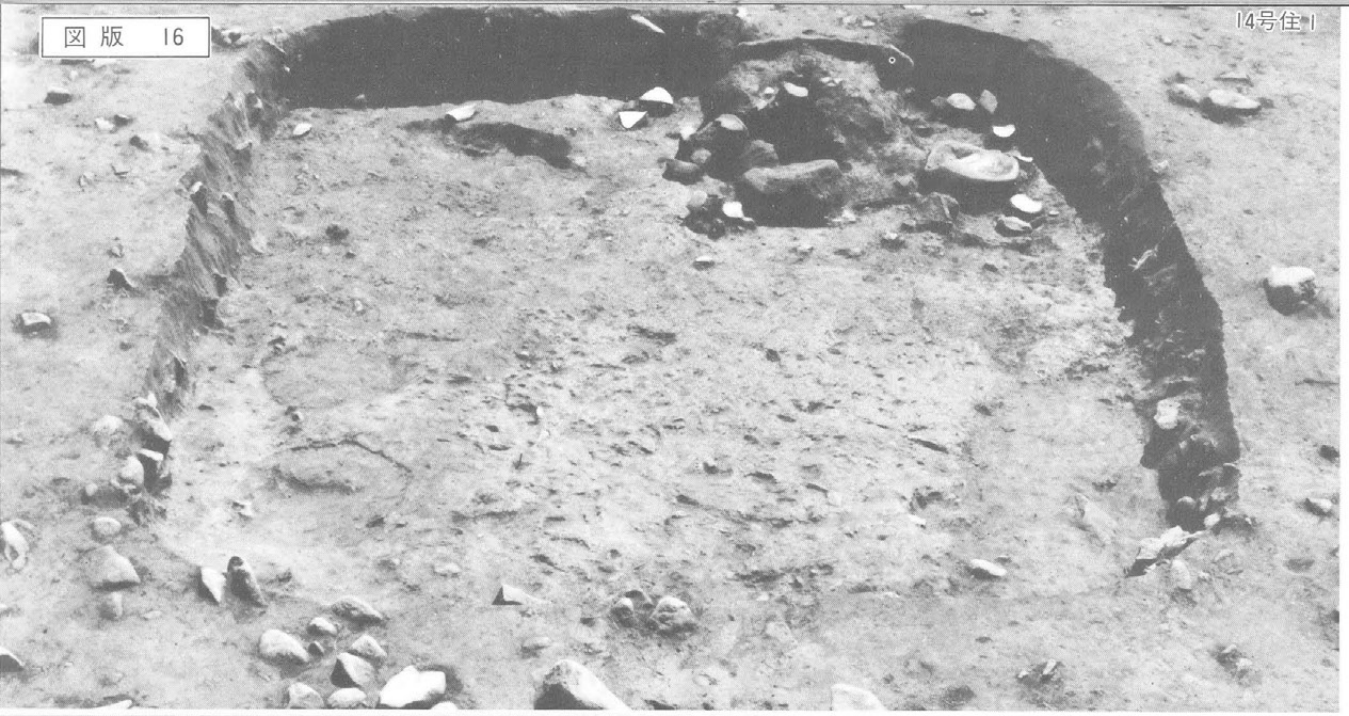
13号住 4

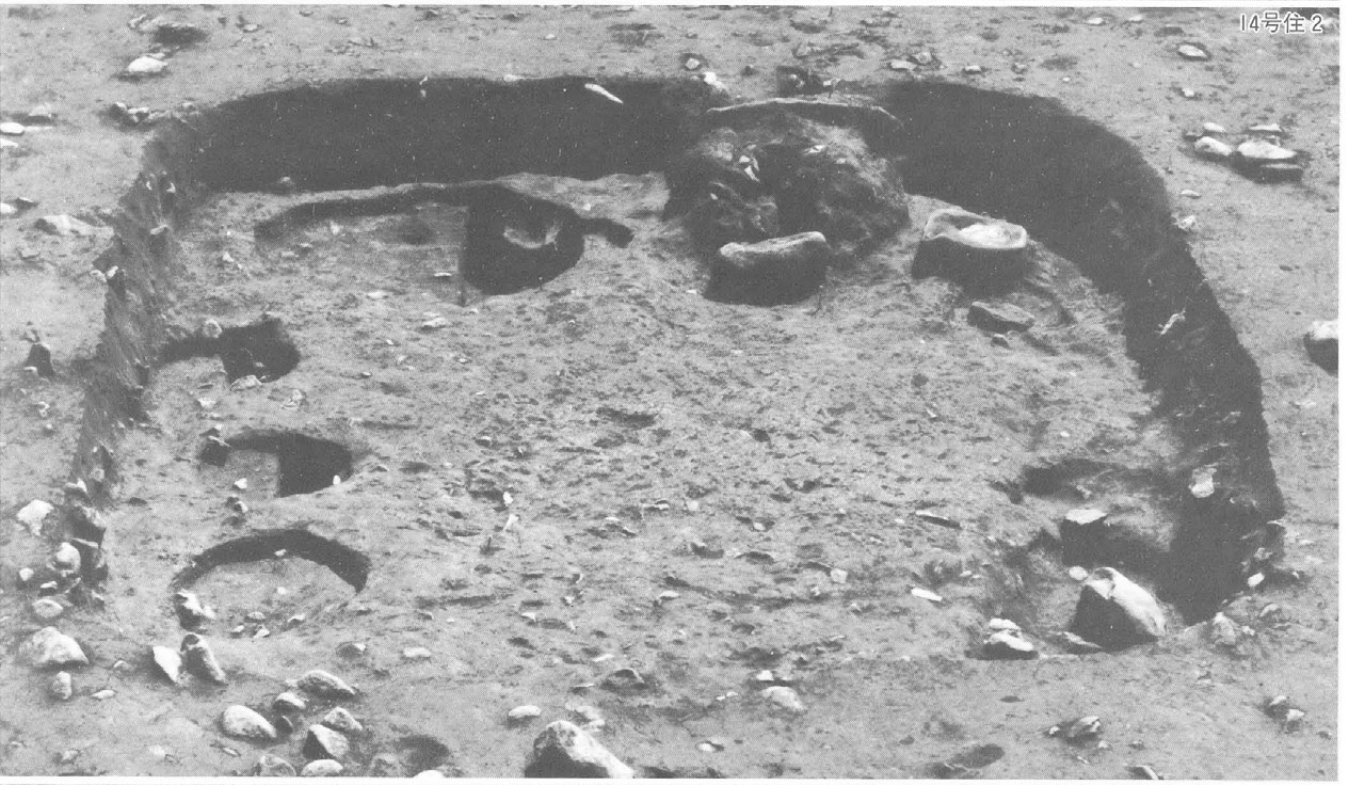


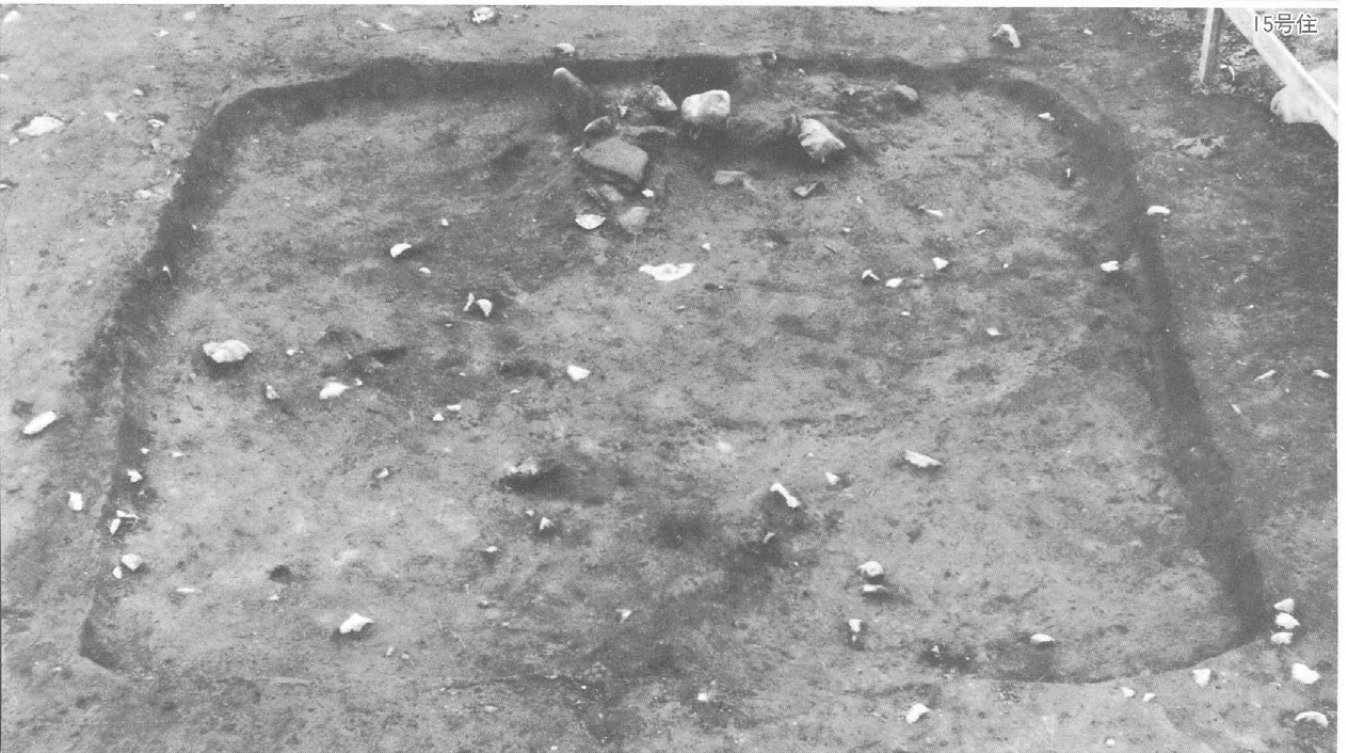
13号住4.5

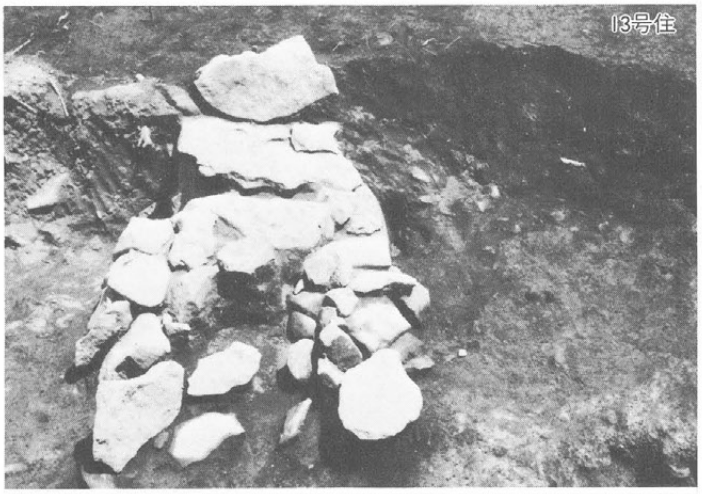
13号住 6

図版 16


14号住1

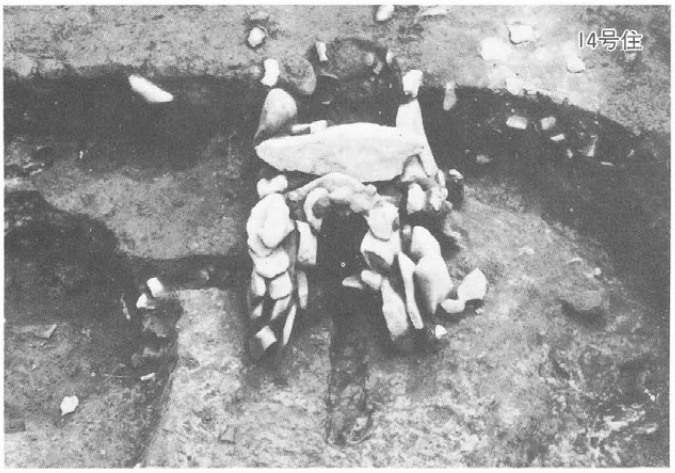

14号住2

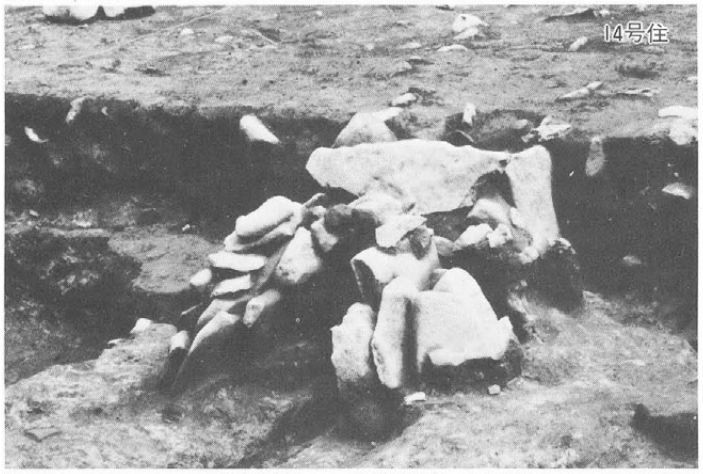

15号住


13号住

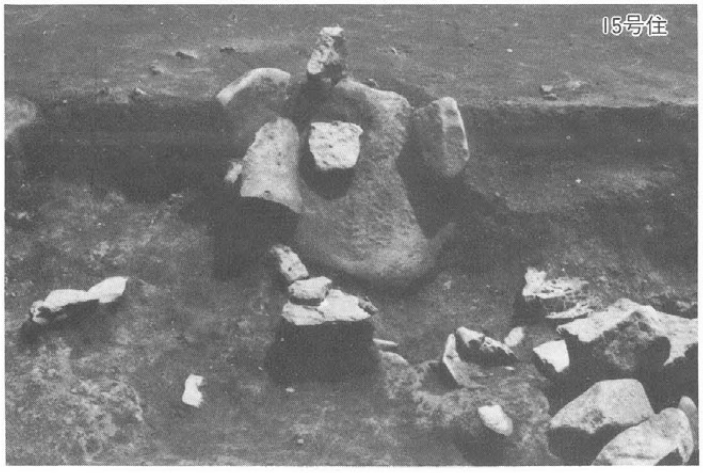
13号住

14号住


14号住


14号住

14号住


15号住

17号住